THE CENTRAL REVIEW

中央公論

八月號

第三十八年　第九號　第四百二十五號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

GIFT OF Sidney M. Ehrman

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



今や社會はあらゆる方面に
健腦の人を要求す
故にあらゆる腦神經病者は

腦病
良藥
健腦丸
を要求す

島村博士證明
腦病
良藥
健腦丸
KENNOGWAN

主効
腦充血　神經痛　頭痛　眩暈
腦膜炎　腦貧血　耳鳴　健忘
逆上症　卒中　中風　便秘

特長
逆上を引下げ、便通をよくし怖るべき中風卒中を未發に防ぎ腦充血を快治じ記憶力を増進す。

改正價藥
五回分　參拾錢
四日分　六拾錢
一週分　壹圓
二週分　壹圓九十錢
三週分　貳圓六十錢
五週分　四圓
十週分　七圓

全國各藥店に取次す

本舖　大阪市順慶町　東京市箔屋町　丹平商會藥房

卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

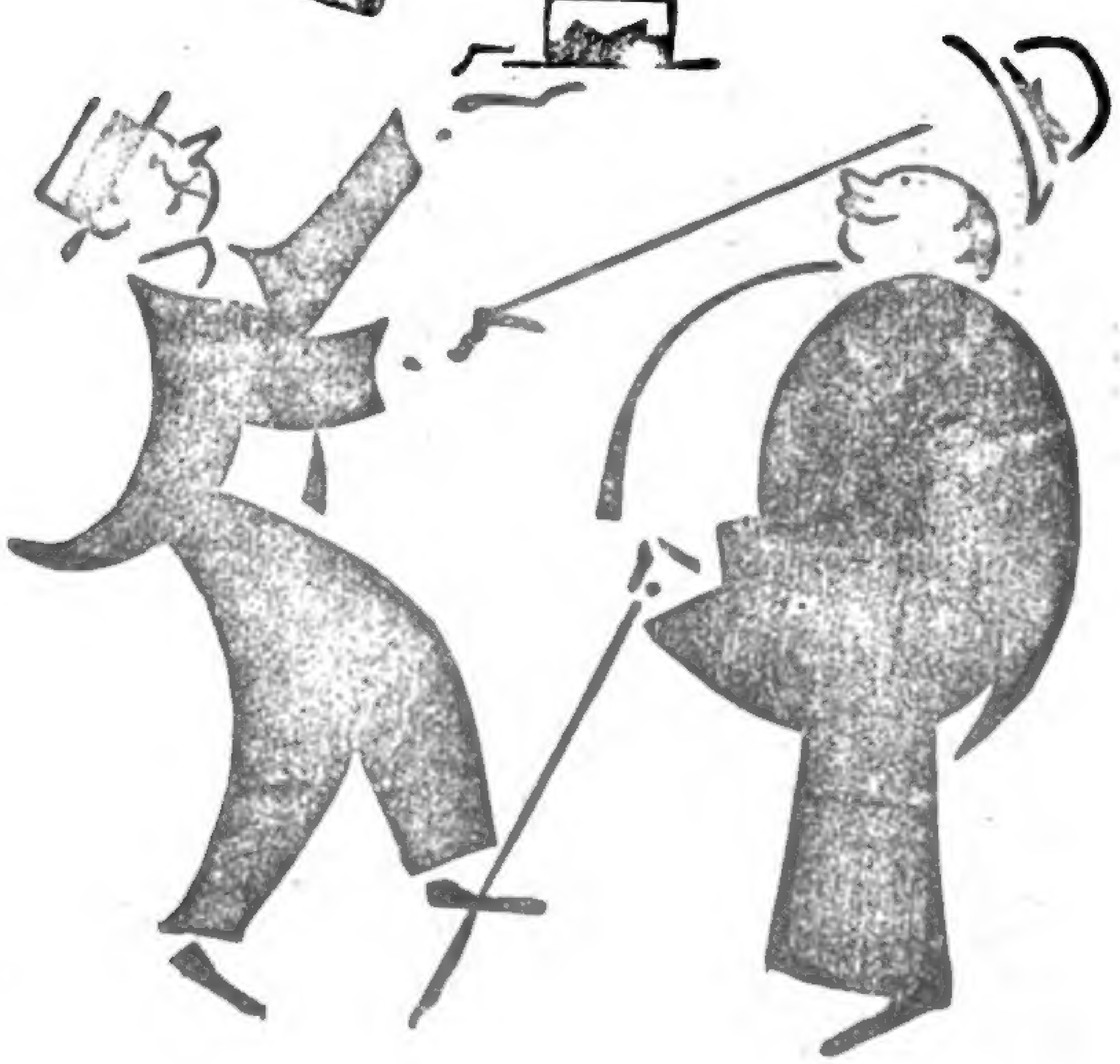
時代と時季

現代に處する新人生活者の營まざる可からざる流行道は時代と時季に適はしい御召物を用ゆる一事にあります。

純品質主義

鷹印麥稈帽子

貴下の趣味御性格の伴侶として之を御推薦いたします……



東京 大阪

株式會社 高橋製帽所

▼說苑

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

プラトン

シャープ鉛筆



歐米の
製品よりも
更に一歩進んだ
理想的のペンシル！

鉛心の繰出しのみならず……
繰入れまでが自働的に行く專賣特許品

一番書きよい

プラトン
萬年筆

日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



山旅　　森田恒友筆

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大正十二年

中央公論

八月一日發行

八月號

第卅八年第九號

第四百二十五號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

死んでゆく有島さんへ

今月は破格の新例として一讀者の投書を以て卷頭言に代へる。投書とは云ふものゝ、本文は「死んでゆく有島さん」へ宛てたものだ。筆者は有島氏の自殺と聞き昻奮の餘り直に活きてる人へ出す樣な考で一氣呵成に之を書いたものであらうが、やがて冷靜に復へり、有島氏によりて得ざりし解決を他に求め得んとして之を本社に寄せたものらしい。本社は適當な解決を示し得ざるを遺憾とするが、兎に角筆者のこの一篇は或る意味に於て這個社會的大事件の一面の觀察とも見られ得ると思ふので、特に筆者の了解を得て玆に掲げることにした。僭越ではあるが多少文句を改訂した所もある。猶またこの筆者の煩悶に對して訓うる所あらんとするの士に對しては、本誌は喜んで紙面を割愛するであらう。……記者

「有島さん。私は貴君をうらむ。あの時の御厚意にめんじて暫く我儘を云はして下さい。私に約束を果さずして獨りで死んでゆく貴君を私は心から恨みます。

「私が貴君を訪ねて私の惱みを訴へたのは、今から思へば、貴君の自殺を遂げられた日の十日ばかり前の事です。その時貴君は私の訴ふる所を逐一聞かれて異常の昻奮を示されました。が、神ならぬ身の私は、貴君にも私と全然同樣の惱みがその時既に貴君の胸中に醞釀して居やうとは夢にも想ひませんでした。永い交際でもないから、心の秘密を打ち明けられぬのに不滿はありません。貴君に取つて殆んど路傍の人にひとしい私の訴へに、あれ程まで眞劍な感激と同情とを示して下さつたことを唯々感謝するのみです。そして私は、貴君が實に私と全然同じ樣な惱みを有つて居られた事を今更知つて、何とも言ひ樣のない感に打たれます。貴君はあの時私の問題を私一人の問題としてゞなく大きな社會的の問題として考へて見やうと云はれました。今となつて私は貴君に限りなき同情を表します。けれどもナゼ貴君は私に與へた暗示の結末を十二分に見せないで獨りで死んで行かれたのでせう。貴君こそは私にいゝ解決の途を教へて吳れるだらうと惜しくもない命ををめ〳〵活き延びてゐる私は、どうしても貴君を恨まずには居れません。

「私が貴君を御訪ねする前幾度死を決したか知れません。弱いのか強いのか、私達は貴君の遺書に書かれてある樣に死なねばならぬ外界の壓迫を感ずるまでの羽目には到つてなかつたに拘らず、幾度も死んで永遠の安住を見やうと冀つたのですが、幾分生に未練を殘した所もあつたでせうか、貴君に依て最も滿足な解決を求めんとしたのでした。その時貴君は確に死を永遠の安住だと申されました。が同時にまた、あなたの樣な氣分の人には活きて滿足を見出すべき境地もあるだらうと暗に私達の輕擧を誡められたではありませんか。今にして思へば、自

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

分は疾くに死と覺悟をきめて居りながら私達に同じ途を急がせまいと用意せられた貴君の思ひやりを淋み〳〵有り難く思ひます。けれども一面に於て私は貴君に裏切られた感がないでもありません。

「貴君は女と私との戀愛關係の惱みを聽き、よく私の眞實を理解して下さいました。之に對する道德習慣の壓迫の無意義なることをも訓へて下さいました。併し同時に道德と習慣との桎梏を打ち破る所にのみ戀愛のけ高さはあるのではないと貴君は訓へて下すつたではありませんか。古い道德習慣を公然破る權利ある者は同時に新しい道德習慣を作る義務があると云ふ樣な事を仰ッしやつたと記憶します。死も一つの解決だが、活きて新しい關係をどう開拓して行くかを考ふるはもつと意義ある事だと說き示されたではありませんか。

「私は十日の後に自分と同じ惱み（と云つては濟まぬかも知れませんが）に依つて死を決せられた貴君が、私に向つて活きて新しき途を拓けと敎へられたその綽々たる餘裕に驚嘆します。私も貴君の敎訓に依つて不思議に自己を反省する樣にされました。一旦死を決した私が、活きて相當の苦みを受けやう、貴君の仰ッしやる樣にどうすることも出來ない運命に抱かれつゝも、猶ほ二人の愛を現世に育くんで往かうと決心するに至つたのも皆貴方の御蔭です。死の途はたやすいのかどうか私には分りませんが、貴方にはもつと違つた解決の仕方がありさうなものと期待した私に取つて、貴君の自殺は到底自己滿足に急いだ行動としか思はれません。

「尤も貴君には貴君獨自の立場はありませう。貴君の經歷なり思想なりに就ても恥しいが私は餘り深く知りませんでした。唯貴君の作物を通して觀た貴君のこまやかな同情に縋らうといふのが、私の貴君を訪ねた動機でした。貴君を能く識らぬ私は、貴君獨自の問題として貴君の自殺を彼れ此れ論ずるの資格はありません。唯同じ惱みを有つて居る私の問題として、殊に貴君に訴へ、解決を求めた私の問題として、又貴君に依て何等かの光明に接し得べく期待せしめられた私の問題として、貴君の自殺は全然無意義だと思ふのです。貴君が活きて呉れさへすれば……貴君がどんな生活をされやうと……貴君を信ずる私達に取つては、單にそれ丈けで、一大光明であつたのです。ナゼ貴君は死なずに私達の先頭を照らして下さらなかつたのでせう。同じ惱みに苦んで居る者は外にも少らずあらうと思ひます、舊式の考へ方で一概に之を惡いと云つて了へば死はまた唯一の解決ともいへませうが、既に古い秩序に反旗を飜した新時代の革命兒には死は寧ろ卑怯とさへ感ぜられるではありますまいか。

「私は貴君に殘されて無限の淋しみを感じます　死を決するに至つた貴君の態度にも無限の感激を受けます。唯世間の期待と私への約束とを反古にして、獨りで勝手な途に走られたことを私は返す〴〵も恨めしく思ひます。跡に殘つた私共は一體どんな途を取つたらいゝのでせうか。貴君は貴君一人の問題を解決したでせうが、私達の問題は卑怯にも其の解決を避けられました。私は貴君の眞摯を疑ひません。私の先達としての貴君に唯々貴君の最後を恨むのみです。（七月十日夜）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論



第卅九年第九號
八月號
第四百二十五號

人間の本能と社會改造の基調

林　癸未夫

一

『フワウスト』の天上の序曲の中で、メフイストフエレスは次のような言葉を以て、フワウストの面目を道破してゐる。

天の最も美しい星を取らうとしてゐるかと思へば、
地の最も深い樂しみを極めようともしてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そして遠い望みも近い望みも、

彼の湧き返つてゐる胸に滿足を與へない。

惟ふに、これはゲーテによつて描き出された紙上のフワウストに對してよりも、寧ろその偉大なる作者自身に――あらゆる人間の本能的欲望の、最も多量な持主であつたと想像せらるゝゲーテ自身に對する、一層適切な批評であると私は思ふ。そして同時に、それは、ゲーテにくらべては量に於て遥に小さいにせよ、質に於ては同一の本能を持つところの、彼の小破片とも見るべき億兆の人間に對しても、亦一樣にあてはめることのできる批評ではあるまいか。そして更に又それは、吾等の如き、より良き生活、より良き社會への翹望と模索とに餘念のない者に對して、一つの意味深い暗示を與へるものではあるまいか。

私は疑ふ。絶對的な精神上の安易と感覺上の飽滿との中に、吾等は果して眞の歡喜を見出すことができるであらうか。吾等は天上の星と地上の花とを併せ有たなければ到底滿足することのできない動物ではあるまいか、否寧ろ、吾等が天上の樂園に憧憬するのは、只吾等が地上の苦界に在る間だけに過ぎないのではあるまいか。菊池寛が小說「極樂」の主題にしてゐるやうに、若し吾等が淨土に久遠の安息を求め得たならば、吾等は單調と倦怠から免れるためには、地獄の苛責さへも敢て辭すまいとするやうな氣分に誘惑されることはないであらうか。吾等の眞の滿足は恒久の不滿足の中に在り、吾等の眞の平和は不斷の鬪爭の中に在り、吾等の眞の生命は永遠に死の恐怖の中に在るのではあるまいか。

吾等人類の歷史は洵に「イントーレランス」の連續であつた。吾等は掠奪から、戰爭から、疫病から、飢饉から、狂信から、暴君から、搾取者から、數ふべからざる慘苦、汚濁を與へられて來た。從つて吾等が是等の一切の堪ふべから

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ざるものから完全に脱却した安全な一世界の發見を渇望して息まなかつたことは當然であつた。吾等は曾てそれを宗教に求めた、併しながら歴史と科學とに目ざめた近代人は、漸くそれが徒勞であることに氣づいた。茲に於て吾等は神によつて、造られた樂園を「發見」しやうとした努力を、人間自らによつて樂園を「建設」しやうとする努力に轉向した。吾等は自ら地上に建設しやうとする樂園の縮圖を思ふさまに設計することのできる喜びを先づ感じた。プラトーンは『共和國』によつて、モーアは『ユートピヤ』によつて、カンパネルラは『日の都』によつて、カベーは『イカリヤ』によつて、各々その理想とする樂園の見本圖を描き出して吾等に示してくれた。是等の見本圖の中には、吾等が過去に有つた「イントーレランス」の最も大きなものが存在の餘地を奪はれてしまつてゐたことは言ふまでもなかつた。暴君や搾取者の存在しない國、人皆が己が主人たることのできる國、總ての者が働いて、總ての者が富める國、概括すれば、平和と豐饒との支配する國。これが吾等の過去の實生活の最も嫌惡すべき部分を一變し、最も愛好すべき狀態に革められた新社會設計の骨子であつた。所謂科學的社會主義と雖もかくの如き設計が、人類の將來の棲家として不適當であるとして居るのではない。唯彼等の特質は此の如き設計を科學的な正確さを以て描き改め、併せて之を單なる設計として樂むことなしに、進んで之を建設すべき實際手段の調達に向つて、組織的な努力を開始したことにあるのである。社會上の平和と、經濟上の豐饒との二つを措いては、現代の社會改造運動の求めるものは何もない筈である。階級國家の廢止といひ、資本主義の絕滅といひ、世界的平和の樹立といひ、社會的正義の確保といひ、生產者の支配といひ、生存權の承認といひ、婦人の解放といふも、畢竟社會的平和と經濟的豐饒との觀念のコロラリースにほかならぬものである。あらゆる社會改造の諸主義は、どれもが皆其焦點を此處に置いてゐることに、些の疑ひもないのである。

好し、是等の理想がまさしく地上に實現されたと想像せよ、社會上の平和と、經濟上の豐饒と、並に其當然の伴侶た

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る享樂機會の均等と肉體上の安易とが十分に確保された生活が吾等の間に展開されたと想像せよ。それで吾等は、吾等の子孫は、子孫のその又子孫は、永遠にかゝる生活の平和と安易との間に、何不足なき滿悅を感ずることができるであらうか。薔の華片一つ散る程の變化もない極樂の中に、暴風雨の來襲を希望するやうな心持ちに惱まされることはないであらうか。一票の選擧權を爭ふがために、一時間の餘閑を求めんがために、渾身の努力を惜しまなかつた祖先の、その燃ゆるやうな向上心と、勇猛不退轉の鬪爭力とに、讃歎羨望の情懷へ難いものはないであらうか。如何なる政治的及經濟的環境の變化によつても陶冶することのできない人間固有の本能が、平和と豐饒との「壓制」に叛逆して、自ら平和を破り、安易を却けることによつてのみ、「眞の生活」に生きる道を發見しやうとして、苦み、惱み、もがき、爭はうと欲することはないであらうか。幼兒が辛うじて出來上つた積木の塔を忽ち自ら倒して、最初から再び塔を築上げやうとする其創造力の發現を、無心に喜ぶのと全く同じ本能が、普く將來の人類をも支配して、平和と豐饒の塔を自ら押倒さうとする時期は來ないであらうか。私は實にそれを疑ふ。

二

あらゆる社會改造運動者に取つて、平和と豐饒との叫びは限りない美しい響を以て響く。吾等が靜に自己を支配しつゝある眞の力――「本能」と名けらるゝ眞の力の、屢々美しい、併しながら。より屢々醜い姿から己が眼を蔽うて、金剛不壞の美に輝く理想の光を望むときには、吾等は醜い、併しながら過去、現在の生きた人間が何うすることもできなかつた、己が心の、己が肉體の、己が性の實體に對する深い反省を斷ち切ることを快しとする。さういふものを、まさ〳〵と想ひ起させるやうな吾等の歴史を、吾等の知識を、記憶を、瞬時も早く棄て去つて、自らを潔くすることによつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、當來の理想社會の一員たるべき資格を十分に準備することが吾等の切なる願望となる。奴隷の膏血を搾つたり、異宗教徒を虐殺したり、土民農奴を誅求したり、勞働の果實を略奪したり、婦人を壓迫したり、邪淫を縱にしたり、其他奢侈、賣淫、泥醉、詐欺、偸盗、鬪爭、殺傷、あらゆる祖先の罪惡は、全く人類の社會に跡を絶つて、それは唯土居に棲むてふ動物の仲間にのみ見出される現象として考へることを欲するの情に堪えない。

併しそれは許されるだらうか。吾等人類の持つ本能が、果してそれを可能ならしめるであらうか。

アリストートルの言葉にいふ。「人の精神は、生きる力の中によりも、行ふ力の中に宿る。」現代の心理學者は漸く此一句の教へる眞の意氣を悟り初めたものゝ如くに思はれる。彼等の研究の中心題目は、最早快苦や、感覺や、想念ではなくして、寧ろ本能や、衝動や、慾望である。爲さんとする意志、得んとする慾望、鬪はんとする本能、それ等が人間心理に關する檢討の興味の中心となりつゝある。何となればそこに、唯そこに人間の眞の生活を支配するところの力が發現するからである。

慾望から鬪爭へ、鬪爭から向上へ。これが人間性の奪ふべからざる自然の表現ではあるまいか。人間の生活の、人間の社會の、根柢を爲し、基調を爲すものは、生きんとする意志、勝たんとする意志ではあるまいか。如何にしても人間は鬪爭的動物である。彼は常に何物のためにか鬪爭しなければ息まない。此故に眞に人間を理解するがためには、鬪爭の對象物に對する檢討を、鬪爭其ものに對する檢討よりも、より重要視することの誤りであることを、先づ吾等は氣づかなければならぬのである。

幸福は吾等の慾望の充足の中には見出されないで、之を充足するに足るべき力の獲得と、其力の發現の中にのみ見出されるのではあるまいか。若しさうだとすれば、吾等の理想とすべき社會秩序は、人間の嗜好を最も善く飽滿させる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ことのできる状態ではなくして、寧ろ人間の活動力を最も善く保障することのできる状態でなくてはならない筈である。

近世文化の急速なる進展は、人間の活動力に對する過去の拘束を撤廢したことによつて、成し遂げられたと見ても決して謬つてはゐないのである。近代文化の黎明期に當つて、先づ人間本來の本能を呼び覺ますべき曉鐘を撞くものは、ペトラルカ及ボカツシオ等の所謂人道主義（ヒューマニズム）の運動であつた。基督教文書の外に、權威ある人間記錄（ヒューマン・ドキユーメント）の存在することを全く知らなかつた暗黒時代の人間は、初めてプラトーンやアリストートルや、其他の希臘哲學者の發見によつて、驚異と歡喜の叫びを擧げざるを得なかつたのである。イスラエルの豫言者や、歴代の聖僧たちの與へた厳しい教理の桎梏から脱れて、新しい異教文明に觸れた當時の若い知識階級の人々は、彼等が、彼等の本能が、長い間、無意識に求めて息まなかつたところの、新しい美を、愛を、想ひを抱擁し得ることの自由によつて、いかばかり恍惚の感を深くしたことであらう。ワルター・ペーターが『文藝復興（ルネッサンス）』の中に述べてゐるピコ・デルラ・ミランドラの物語は、よくそれを吾等に明示してゐるのである。

私は曾てゴシツク建築の眞髓を説いて、生産者の民主々義的精神が、藝術的に表現されたものに外ならぬとした。（本誌本年一月號所載拙稿『生存慾と行爲慾と所有慾との飽和を理想として』第三節）謂ふところの民主主義的精神とは奴隷勞働から解放された自由勞働者としてのギルド工匠等によつて體驗されたところのそれであつた。生存慾にのみ束縛されてゐた人間が、初めて行爲慾を充足することの自由を與へられたことによつて擧げられた歡喜の象徴が、キヨルンやミランの大伽藍の形に於て、長へに人間本能の戰勝記念碑（ヂーケスデンクマール）として立つてゐるのである。

本能の欲求に復歸しやうとする人間の努力が最高潮に達したる過去の事實として、吾等は文藝復興を擧げ、宗教改革

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を擧げ、佛蘭西革命を擧げることができる。それ等は皆、私が茲に改めて說明することが全く無用であるほどに、偉大なる人間の事業であつた。

併しながら吾等現代に生息する者――文藝復興を行つた祖先の、宗教改革を行つた祖先の、佛蘭西革命を行つた祖先の、まさしく子孫に相違ないところの吾等の曾祖父や祖父や父は、果して如何なる精神と形態とに於て、尊むべき祖先の事業を承け繼いで今日に至らしめたであらうか。吾等は果して現代に於て、再び社會改造といふ目前の大事業に熱中し、焦慮しなければならぬ筈であつたであらうか。吾等はそれがために、人間と人間と相憎み、相罵り、相鬪爭し、相殺傷することを繰返さなければならぬ筈であつたであらうか。もつと早く人類は平和を得べき筈ではなかつたか、もつと早く社會は幸福であるべき筈ではなかつたか。然り確に「筈」であつた。併し、それは唯人間の皮相な理智の判斷したる「筈」であつた。人間の本能は、未だそれを「筈」であつたとは承認してゐなかつたのである。

三

資本主義は呪詛すべきである。併しながら資本主義は、暴君によつて吾等に强ゐられた一つの制度ではない。中世需要生産時代の出現以來、殊に産業革命以來に於ける幾千萬人かの努力によつて、自然に築き上げられた根柢深き經濟生活の一つの形態である、又ブルジョア階級は憎惡すべきである。併しながらブルジョア階級は、ミネルヴの甲冑のやうに生れながらにして現在の特權を身に附けて來たのではない。一世紀間に亘る反抗と鬪爭との結果として、漸く彼等の贏ち得たところのものである。資本主義を打破するは可い。ブルジョアを驅逐するは可い。併しながら資本主義やブルジョア階級を建設した者は疑ひもなく吾等の祖先である。彼等と吾等との間にどんな差別があるといふのか。今日資本

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

主義やブルジョア階級を崩壞せんとしつゝある吾等の本能と、昨日資本主義やブルジョア階級を建設したる父祖の本能との間に、どんな相違があるといふのか。結局それは同じものではなかつたか。同じ本能が、唯變つた方面に作用しつゝあるに過ぎないのではなかつたか。何うしても本能の命令以外に出ることのできない人間の、同じ一つの蠢きではなかつたか。

バートランド・ラッセルは『何故に人々は戰ふか』と題する小冊子の中でかう書いてゐる。「凡そ剛健なる人は、自己が其能力を發揮しつゝあるといふことを感じたいがために、何等かの鬪爭を必要とし、何等かの反抗に打克たんことを欲する。經濟學者の研究によつて、人間の慾望するものは富である、といふ一つの理論が構成された。此理論はそれ自らを確證することができた。何となれば人の活動は、彼自らが眞に慾望して居るものによつてよりも、寧ろ却て、自ら慾望して居ると想像して居るものによつて、より屢々左右されるものだからである。一つの社會で、活動力の乏しい人々は屢々富を慾望する。富は受動的な享樂に對する嗜好を充し、努力なしに尊敬を維持させてくれるからである。併しながら大なる幸運を開拓するような活氣ある人々は滅多に實際の金錢を慾望しない。彼等の慾望するものは、鬪爭を通じての力の感覺であり、成功したる活動の喜びである。」

寔に重商主義に初つた富の哲學は、重農學派から個人主義經濟學者及社會主義經濟學者に亘つて次第に發展され充實されて行つて、其結果は經濟の上に作用する人間の本能に就ての痛切な自覺を吾等に與へてくれたのであつた。ひとり自覺を與へてくれたばかりでなく、又その本能を正認してくれたのであつた。經濟學の出現以前に在つては、吾等の本能は、まさしく經濟の上に重大な作用をなしつゝあつたにも拘らず、吾等はこれをあからさまに認識することを避けてゐたのであつた。信仰、忠誠、友愛、慈悲といふやうな道徳を以て、經濟觀念を制壓しつゝあると考へることによつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、一種の自己欺瞞に陷つてゐたのであつた。然るにトーマス・マンや、クエネーや、アダム・スミスは此壓迫を取除いてくれた。併しまだ彼等は、從前とは逆に、經濟を以て、宗教や道義を制壓すべきものであるとまでは推論しなかつたのである。ところが最後に、カール・マルクスは經濟を至高の帝位に擁立することを敢てした。彼によつて一切の人事は、宗教も、道德も、法律も、經濟を離れては存在し得ないものとされた。歴史は人間の經濟的本能の表現以外の何物でもないことになつた。過去の歴史が既にさうであつたとするならば、現在に於ても亦さうであり、未來に於ても亦さうでなくてはならない。茲に於てか經濟問題は、一つの問題であつて又總ての問題となつた。此一問題を解決することは、總ての問題を解決することを意味するやうになつた。マルクス及彼の追隨者に於て確にさうであつた。所謂科學的社會主義に胚胎する現代の社會改造運動は、悉く此觀念を基調とするやうになつた。

併しながら、彼等の教へるやうに、眞に經濟が吾等に取つての總てゞあらうか。經濟問題の失はれた世界に於て、吾等の本能は安らかな飽滿を樂しむことができるであらうか。具體的に言へば、資本主義が全廢されたならば、勞働の義務が共通になつたならば、生活資料が平等に分配されたならば、婦人の經濟的獨立と政治的解放が行はれたならば、それで人間の永く理想とした新社會が完成されるのであらうか。眞の文化が建設され、眞の歴史の第一頁が開かれるであらうか。それで果して吾等の本能は滿足するであらうか。若しさうだと信じてゐる人があるならば、それは餘りにナイーヴな小供らしい信念ではあるまいか。丁度それはチルチルとミチルが探し求めた「青い鳥」のやうに、捕へると直ぐに死んでしまふやうなものではないであらうか。

四

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

吾等は先づ第一にあらゆる社會改造運動に最も重要な綱領とされてゐる資本主義の廢止に就て考へて見よう。成程、資本主義が現代社會上の一大弊害を醸成し來つたには相違ないであらう。併しながらかくまでに資本主義の社會惡を増長せしめた最大の原動力は機械でもなく、工場制度でもなくして、實に人間の獲得（アクヰジション）の本能、所有の本能、蒐集の本能、蓄積の本能に在つたことを私は信ずるのである。オクスフオード大學のマクドーガル教授は、其著『社會心理學概論』の中でかう言つてゐる。「獲得の本能の重要なことは、それが文明の進歩に必要であつた財貨の蓄積に、缺ぐべからざる要素ではなかつたにしても、非常に與つて力があつたには違ひないといふ事實に據るものである。」ゾムバルトも亦その『資本主義眞髓』の冒頭に、資本主義的思想の起源を黄金獲得慾に求めてゐる。資本主義が獲得慾を造つたのではなくて、獲得慾が資本主義といふ形態に於て發露したのである。吾等は多數決の投票によつて、一朝に資本主義を廢絶することはできるかも知れない。或は暴力的獨裁主義によつて、あらゆる私有財産の沒收を行ふこともできるかも知れない。併しそれによつて、人間に固有の獲得慾、所有慾が根絶されると考へたなら、これくらゐ大きな誤算はないのである。何となれば私が曾て述べたやうに、人間の所有慾は、他人が自分より多く有つといふ事實からのみ發動するものではなくして、總ての人が何物をも有たないといふ事實からも發動するものであるからである。（前掲拙論參照）若し吾等の獲得慾が單に衣食住の如き直接の生活資料に限られるものであるならば、吾等の其本能は、十分に成功した集産主義や共産主義の世界では、殆ど何等の衝動をも受けずに濟むかも知れない。併し吾等が衣食住の充足だけで決して滿足するものでないことは分りきつたことである。吾等は美しい異性を求め、優れたる藝術を求め、自己の體質や趣味に適合した慰安娯樂の手段を求める。殊に人間はカルチュアの進むにつれて、當然美意識の發達を來すものであるから、吾等が自己の生活條件を、自己の美意識を標準として、できるだけそれだけ多く調整しやうとする内心の要求は、物質的生活資料

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の豐饒になり行くに伴れて、ます〳〵緊切なものとなつて來るに相違ないのである。其場合に、吾等の欲する其條件が滿足されないときには、恰かも物質的生活資料の窮乏に悩まされた過去に感じたと同じやうな不平不滿が吾等を捕へるに相違ないのである。しかも、考へなければならぬことは、吾等の美意識によつて選擇される生活條件は、物質的生活資料の選擇よりも遙に個人的であるといふことである。卑近な例を取つて言へば、吾等が空腹を感じて居る時には先づパンを要求する。其場合には吾等は唯それがパンであることによつて一様に滿足することができるのである。併しながら若し吾等がパンを以て空腹を滿した後に、更に菓子を要求し得るとするならば、吾等は最早一様に、それが單に菓子と名けらるるものであることによつては滿足することはできないであらう。必ずや或者は羊かんを求め、或者はシュークリームを求め、或者はカステラを求めるに違ひない。朝鮮人が白衣を着てゐるのは彼等の美意識が極度に低級だからである。若し彼等の美意識が多少でも進んだならば、必ず張三は青服を求め、李四は黄服を選ぶに違ひないのである。

さう考へると、當來社會に於て、物質的生活資料の豐饒が約束される以上、それに伴うて各自の美的生活に對する慾望が增長し、しかもそれが甚しく個人的な特異性を帶びて來るであらうことは、ほぼ確實に豫想されることである。而して又その必然の結果として、美的生活資料に對する需要の甚だ雜多にして、それに適合する供給の極めて乏しい狀態を現出するであらうことも、豫想せずにはゐられないのである。そして若し實際さういふ狀態が現出したならば、總べての人が自己の需要する資料を、できるだけ長く專有して、之を享樂したいといふ慾望——獲得の本能、所有の本能——を抑制することが頗る困難に感ぜられるやうになるに相違ないのである。吾等が此本能を失ふことができたならば幸福であるかも知れない。併し私の信ずるところでは、それは決して失はれない。既に失はれないとすれば、その本能の不滿足によつて吾等が感じなければならぬところの苦痛は、堪へ難い精神上の一缺陷となるべきものである。パンに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

飢うる者に取つては、パンを得ることが慾望の全部であるかの如くに意識され易い。併し彼がパンを得てしまふと同時に、次の慾望が同じ壓力を以て彼に迫り來ることを彼は識るのである。

資本主義を葬らなければならぬといふならば、それを葬るは可い。しかし過去に於て資本主義を造り上げた吾等の本能と、丁度同じ本能が、資本主義のない社會に於ても、新たなる何物をか求めて息まないであらうといふことを、吾等は豫想して置かなければならぬのである。

五

本能の偉大なる讃美者ニイチエは眞人の求むるものは危險と遊戯だと言つた。謂ふところの危險とは征服慾の對象を意味するのである。人間は常に何物にか打克たんことを欲する。支配慾、權勢慾、優勝慾、皆同じ本能の發作と見られるのである。

人間が富を欲し、慰安を欲し、奢侈を欲することは事實である。又時としては平和を求め、靜謐を求め、規律を求めることも事實である。併しながら人間が無爲にして、或は最少限度の勞作によつて、常に是等の欲求を充すことを希ふものであると斷ずるのは早計である。吾等は確に最も良く生活することのできる社會を欲求する。併し、最も良く生活するといふことは、決して最も安易に生活することを意味するのではない。最も多く吾等の本能を滿足せしめることを意味するのである。從つてそれは、吾等が、できるだけ無爲にして平和と無爲とを領有し得るやうな狀態ではなくして、最良いと信ずるものに向つて、追究し、精進し、向上することのできる狀態なのである。アダム・スミスは『富國論』の第一編第八章の中でかう言つてゐる。「勞働階級即ち社會の大衆の狀態が、最も幸福に、最も愉快に見えるの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、其社會が既に充分なる富に飽滿して居る時よりも、寧ろ其社會が、富の獲得に向つて前進しつゝある間の進步的狀態に於て之を覺め得ることは注目に値する」と。實際吾等の幸福は常に滿腹を感じてゐることよりも、日々に新に美味を以て空腹を充し得ることに在るのである。若し一年を通じて櫻花が爛漫としてゐたならば誰か其美を稱へるものがあらうか。得難いものを得ようとする努力と希望の中にこそ、吾等の眞の生活が在り得るのである。

あらゆる社會改造思想は、吾等に豫約するに、當來社會に於ける平和と豐饒とを以てする。鬪爭と窮乏に惱まされつゝある現在の無產階級に取つて、それは極樂の世界と感ぜられるであらう。併し現在の無爲有產の階級が、如何にそのアンニュイに惱まされる結果として、所謂閑居不善に陷りつゝあるかを知る者は、人間の本能が眞に要求するもの丶平和と豐饒にあらずして、冒險と奪取とにあることを悟るに遲ひないのである。

過去一切の歷史が階級鬪爭であつたといふマルクスの敎へは尊重すべきである。人間が本能として行爲慾を有することは疑ひないけれども、それは必ずしも人間が勞働のために勞働を要求するといふことを意味するのではない。勞働は生產のための體動である。此故に、若し吾等が行爲慾を充す方便として、勞働と遊戲との何れかを選ぶことの權利を與へられたとするならば、吾等は必ず遊戲を選ぶに相違ないのである。それは遊戲――庭球、ゴルフ、遊獵、散步の如き――の方が、生產のためにする體動よりは、より多く吾等の行爲慾に適合するからである。從つて體動が生產に關する限りに於ては、吾等に自然に、勞働者たるよりも、搾取者たることを欲する者であることを否むわけには行かないのである。吾等は勞働によつて生活資料を獲得するよりも、寧ろ掠奪によつてそれを獲得するを好むのである。これはやはり人間の本能の命ずるところなのである。かくの如くにして、人間の歷史は、――必ずしもその全部とは私は信じないが――マルクスがいみじくも指摘したやうに、搾取者と被搾取者との鬪爭の連續であつたことは爭はれない事實と考

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

へられるのである。

歴史は鬪爭であつた。併しそれは人間が鬪爭のために鬪爭するを好むがゆゑではない。戰時に際しては人は心から平和を要望する。戰爭も平和も要するに手段である。人間の眞に要望するものは、支配であり、權勢であり、優勝であり、奪取である。大衆の指導者であらうとする慾望、社會生活の樞軸たる地位に在らうとする慾望、知識又は道德に於て拔群であらうとする慾望、名聲又は實力に於て競爭者を凌駕しやうとする慾望。凡そかくの如き、大衆の共同生活に於て、いかにしても個々人の本能から棄て去ることのできない慾望は、經濟的の搾取階級と被搾取階級との對立が全く撤廢された後の世界に於ても、依然として人對人の鬪爭の原因を爲すであらうことは、私に取つて、寸毫も疑ひのないところである。丁度同じ主義綱領の下に結合されてゐる勞働組合や政黨の中でも、常に醜い權勢爭ひが行はれ、時としてはそれが相仇敵視する二つの團體に分裂することとすらあるのと同じやうに、經濟的に平等なる社會に於ても、人間が征服の本能を保持する限り、永久に鬪爭の絕ゆる理由があらうとは考へられぬのである。

吾等の本能が要求するものは、平和と豐饒だけでは決して滿されない。吾等は更に征服を欲し、支配を欲するものである以上は、此本能を無視して建設された新社會は、結局人類に新に新桎梏をあてがふものでなくて何であらう。吾等は常に成長し、發展し、向上せんことを欲する。それが眞の「生活」である。生活のないところには、氣の拔けた無意義な「生存」があるばかりである。「生存」に甘じないで「生活」しやうとする者には、鬪爭が、獲得が、支配が、征服が許されなければならぬ。吾等が過去に欲したものは富そのものではなくして、隣人よりも「多い」富であつた。若し隣人と吾等の富が平均するならば、富に對する吾等の興味は直に失せ去るであらう。此意味に於てジョン・ラスキンが「營利的經濟學から言へば、自ら富を致すの術は、同時に且必然的に、隣人を貧からしめる術である」と言つてゐるのは、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事實には違つてゐても、心理的には正しい見方である。唯彼は、その故に營利的經濟を不道德であると結論するのであるけれども、實はそれが、道德を超越してゐる人間の本能なのである。本能なるがゆえに何事をも寛恕せよといふのではないが、本能を奪ひ去ることは、畢竟人間を、より以上かより以下かの、他の動物に變造することである、それをするには御伽噺の中の魔法使を今の世に復活でもさせれば格別、到底科學の力には及ばぬことである。

六

過去の歴史が相剋、憎惡、鬪爭の歴史であつたと言へるやうに、又それが忠誠、献身、犠牲の歴史であつたとも言へるのである。人間は、神にか、君主にか、國家にか、主義にか、信仰にか、肉親にか、戀人にか、其奉仕する對象は異るにせよ、確に忠誠、献身、犠牲を、これがために惜しまないところの本能を有つものであることは疑ひを容れないのである。すべての社會主義者は宗教を呪詛し、忠君愛國を蔑視して、奴隷道德鼓吹の具であるとする。成程、あらゆる解放運動が舊秩序と舊道德とに對する反抗に初まるものである以上は、忠誠、献身、犠牲の本能が、舊秩序と舊道德との擁護を目的として行はれる間は、それは解放運動の敵であるに相違ない。が併し、宗教は今日最早、多數人に犠牲を求め得る力を失つてしまつたと見て可い。それを失はしめたものは、社會主義者の理論ではなくして、寧ろ自然科學者と歴史家の力である。國家は、併し、尚強い犠牲要求の潜勢力を吾等の上に有することが、今次の大戰によつて證明された。個人主義的な、主我的な、又多少の程度に於て頽廢的な近代人が、斯くまでに強烈な愛國的犠牲の精神を發揮したといふことは、恐らく總ての社會心理學者の意外としたところであつたに相違ない。此事實に當面して、エムバラスメントを感ぜざるを得なかつた非國家主義者等は、それが階級國家の擁護者たる各國の政治家や御用學者たちの、欺瞞的宣傳

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の結果であつたことを強調して、自ら慰めやうと試みる。私は之に對しては、或は然り、或は否と答へやう。が、それはいづれであるにせよ、國家の有する使命は最早完成の絶頂を越えて、徐々に其任務と權威とを、他の形態に於ける社會生活團體に讓渡さなければならぬであらうことが豫想される。若し近き將來に於てさうなるとすれば、宗教が既に犧牲道徳の對象としてその權威を失つたと同じやうに、××も亦將來それを失ふべき時期の來ることは疑はれない。併しそれによつて人間の固有の、犧牲本能が失はれると斷ずべき理由はなく、又宗教や××に代るべき或者が、人間に犧牲を要求する新たなる權威を以て、出現しないとも限らないことは勿論である。否、はや既に、眼前の社會改造の諸運動は、過去に於て、宗教や國家が要求したと同じやうな忠誠、獻身、犧牲を、無産階級に強要しつゝあるのではないか。

現代の社會改造運動は、それが破壞を志してゐる過去の傳統が根深かければ根深いほど、又その傳統を擁護しつゝある勢力が強靱であればあるほど、改造運動者の犧牲的精神は一層深刻に鼓吹され、又彼等が實際拂はなければならない犧牲の分量も増大されるのである。併し彼等によつて拂はれた犧牲の分量の増大は、必ずしも後の成功の分量の増大によつて償還されるとは限られてゐない。犧牲はかくの如き打算を超越して行はれるものである。犧牲を甘受し得る人間の精神の中には、常に一種の神秘的な誘因がある。それは狂信（フワナチシズム）と名けらるべきものである。狂信は推理の結論としては來ない。過去のあらゆる革命は、總べて此種の狂信者の事業であつたと言つて可い。近くは愛蘭土獨立運動の如きも確に狂信者の成功であつた。從つて社會改造思想の宣傳の目的は、徹底したる理論家よりも、寧ろ狂信者の多數を造り出して、彼等に犧牲的精神を鼓吹するに在ると考へるのが當つてゐるのである。學者の群では實行はできない。實行を志す者は「民衆の中へ行く」ことが肝要である。何となれば學者よりは常に無識な民衆は、否寧ろ無識な民衆だけが、狂信者たり得べき素質を有つてゐるからである。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

犧牲それ自身は如何なる場合にも悲劇である。此悲劇に堪へ得る現代の英雄兒は「勞働者」である。科學的社會主義を奉ずると自信してゐる幾多の空想的社會主義者の概念の中に在る「勞働者」は、逞しい筋骨と、不撓の闘爭的氣魄と、燃ゆるやうな新社會の理想を其屬性(アットリビュート)としてゐる。併し彼は、鐵鎚を棄てゝペンを握り、所謂プロレタリヤ小説家となるやうな者であつてはならない。又彼は、勞働組合から俸給を得つゝ、演壇に雄辯を振つたり、機關雜誌に論文を書いたりする者であつてはならない。何となれば、若し彼がかくの如き者である時には、彼の狂信者たり得べき素質は減耗せられ、犧牲的精神は傷けられる虞があるからである。寔にかくの如き理想の「勞働者」は、社會改造戰の第一線に、肉彈として飛ぶべき好個の兵卒であるに相違ない。併し、吾等の知らなければならぬことは、かくの如き「勞働者」は曾て「羅馬人」の名によつてカムパニヤの野に屍を曝し、或は「殉教者」の名によつてコロシアムの庭を碧血で染めた多數の人々と、全く同一の本能によつて支配されてゐるものであるといふ一事である。往昔宗教に殉じ、愛國に死んだ人間の本能も、將來社會改造事業の犧牲たらんとする人間の本能も、唯その發現の對象に相違があるに過ぎないのである。

七

私は更に、社會改造運動の重要なる一題目とされてゐる婦人解放問題に就ても、少しく考へて見やう。

何れの國でも婦人解放の最初の手段は之を參政權の獲得に求められる。吾等の有つ正義の觀念は、婦人に選擧權を拒むべき理由のないことを吾等に教へる。併しそれは婦人問題のほんの端緒に過ぎない。兩性間の關係並に社會に於ける婦人の地位は、人生に於ける最も深刻なる問題の一つである。それは社會生活の根柢に横る問題である。同時にそれは

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人間の本能中の最も強きものを適當に處理しやうとする問題である。道徳と經濟とに相闘し、心理と生理とに相通ずる問題である。個人の、家族の、民族の幸福と存續とに係る問題である。

かくの如き重大なる問題が解決するがためには、吾等はあらゆる種類の科學、殊に心理學及生理學の援けに依らなければならない。併しながら當面の社會改造運動に於て、如何なる手段が試みられつゝあるか。參政權を男女平等にすることは既に幾多の國に於て實行されてゐることであり、未だ實行されてゐない國に於ても、主義としては既に是認されてゐるところである。同一作業に對する同一賃金の要求が貫徹されることも餘り難事だとは思はれない。是等の政治上及産業上の不正義を救濟することは、恐らく婦人問題中の最も簡易なる方面に過ぎないであらう。何となればそれは、女性が當然男性と同一であるべき點に於て同一であらうとするところの要求だからである。『人形の家』のノラは「何よりも先づ人間でありたい」と言つた。誰か能く彼女に人間たることを拒み得る者があらうぞ。併し、彼女が人間たり得たことによつて、未だ婦人問題が解決されはしないのである。彼女は人間である上に女でなくてはならない。彼女が人間以下の女としての待遇に堪えないで、先づ人間でありたいと要求したのは正しい。併し、人間なるがゆゑに女たることを拒まうとするならば、それは誤つてゐる。婦人解放運動は、女が男と同一の者にならうとする努力であつてはならない。未完全な女が、完全な女にならうとする努力でなくてはならないのである。

『社會主義の下に於ける婦人』の著者アウグスト・ベベルはから言つてゐる。「未來の婦人は社會的にも經濟的にも獨立する。婦人は最早所有や搾取の痕跡さへも止めぬものとなるであらう。婦人の教育は、性の差別と、性的任務の必要とを除いては、男子と同樣であらう。」最も大膽に婦人の性的解放を唱道した此著者ですらも、やはり「性の差別」を確認せざるを得なかつたのである。女性の本能は到底男性のそれと同一であり得ないことを認識する以上は、女性の男性

化は、究極婦人自らの苦痛であり、男子の困惑であり、全體としての社會生活の破綻でなくて何であらう。

ホヰツトマンの詩にいふ。

Sex contains all, bodies, souls,……

Without shame the man I like knows and avows the deliciousness of his sex,

Without shame the woman I like knows and avows hers.

男も女も、おのが性の甘味を自覺し、それを表現するに何の恥があらう。性の久遠の誇は、寧ろ唯そこにのみ在るのではないか。

八

惟ふに現今、日に熾烈ならんとする社會改造の諸運動は、其改造の對象とされてゐる現在の社會惡の根源を、個人の心理的及生理的の缺陷に求めないで、主としてそれを社會の政治的及經濟的組織の不條理に見出してゐるのである。從つて彼等は營利經濟的生産や、富の不平等な分配や、教育を受くる機會の偏頗や、婦人の參政權の無視や、國際間の戰爭等を以て、現在社會惡の最大なるものとし、是等の諸制度に變革を加へさへすれば、（もつと單純な頭腦の持主は、是等の諸制度を變革すべき法律を制定さへすれば）それで萬事が解決して、すぐさま理想の社會が實現するものゝやうに考へてゐる。談何ぞ容易なる、とは蓋し此事である。早かれ晩かれ吾等は現在の社會改造運動の諸綱領を實行することができるであらう。併しながらその場合に、それが吾等の理想したる社會と甚だ懸け離れたものであらうことは、私に取つては、殆ど疑ひのないことである。丁度それは佛蘭西革命の標語であつた自由と平等とが、人類に平和と安寧と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を齎すことに全然失敗したのと同じやうに、再び失敗に了りはせぬであらうかを私は虞れるのである。何となれば現在の社會改造運動は、餘りに制度や現象を過重視して、人間の本能に對する精到な心理學的考察を缺いでゐるからである。如何なる新制度も新組織も、それを支持する社會の構成分子たる個々人の内心の欲求に適合するものでなければ、所詮永續の見込がないばかりでなく、却つて社會の名に於て、個々人に堪ふべからざる桎梏をあてはめることになるのである。總べての大建築が其材料の特質に應じて、特殊の形態を有たなければならぬと同じやうに、社會建築の唯一材料たる人間性の特質を無視しては、如何なる社會改造も成功する理由がないのである。人間の本能を基礎としない社會組織は、悉く砂上の樓閣である。

これは洵に睹易きの理である。しかるに何故にこの睹易きの理が、やゝもすれば觀過されつゝあるかといふに、それの理由は蓋し簡單である，吾等が政治及經濟上の現象によつて最も強い刺激を受くる時代に生れたがゆゑに、吾等の思想が唯その現象にのみ捕捉され、集中されてゐるからである。そして吾等は其現象の核心に潜むところの心理的動因の重要性に心づかないからである。資本主義は現象である。其動因は人間の獲得慾である。然らば人間を獲得慾を有するがまゝに放任しつゝ、資本主義を根絶しやうとすることは、肉體を生かさんがために精神を殺さうとするやうなものではあるまいか。私が曾て說いたやうに、ロバート・オーウエンの建設した共産村の失敗も、制度の壓迫に對する人間性の叛逆であつた。（本誌昨年九月號所載『社會改革者としてのロバート・オーウエン』）十九世紀の中葉以來、幾度か歐洲諸國に試みられた工業勞働者の生産組合が、殆ど全部失敗に終つたのも、人間の本能が其理想の規律に服從することを敢てしなかつたからである。社會惡を退治するは人間善の力に俟たなければならぬが、人間惡を退治するに社會善の力を以てすることができるか何うかは、私に取つては大なる疑問である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

或は言ふであらう。居は氣を移し、養は體を移す。人間の本能と雖も豈陶冶し得ない理由があらうかと。成程一切のものは變化する。人間の本能だけが變化しないといふ根據は見出せない。併し少くも人間の本能の變化は、極めて遲緩であることだけは確實である。殊にそれを人間の環境卽ち社會生活の樣式の變化に比較するならば、殆ど認め難い程に遲緩な進行しかなし得ないものである。古代と中世と現代との間に、人間の本能、感情に果して幾何の相違が認め得るであらうか。トールシュタイン・ヴェブレンは『勞働の本能』の中でかう言つてゐる。「カルチュアの變化に依る生活の秩序の推移に應じて、制度は絕えず變化して行く。併し人間の本能は常に同一である。………文化生活に適合しない人間固有の特性が、カルチュアの發達に及ぼした障礙は、種々なる方面に於て又總べての非野蠻國民間に於て、明白に觀取することができる。」過去一世紀間並に將來の一世紀間は、吾等の社會生活の樣式に、未曾有なる急激の變化を經驗しつゝある時代である。若しも人間の本能にして、此變化に適順することができなかつたならば、吾等は其不調和によつて、現在に於てさうであるやうに、將來に於ても亦、甚しい不安と焦燥とに惱まされなければならない。從つて社會改造の眞の目的は、單に生產財の公有や、消費財の平分や、形式上の自由平等や、敎育の機會均等などに在るのではなくして、人間の本能に適合したる新社會秩序を建設することに在るのである。言ひかへれば、人間が眞の生活を營み得べき方式を發見することに在るのである。

人間の眞の生活は、その本能の自由なる發現の中に在る。しかも制度は一朝にして覆滅することができるが、人間の本能は數千年を經るも尙其變化を期待することはできない。從て此本能を鐵鎖に繫ぐことを必要とするやうな社會制度は必ず本能の叛逆によつて破壞されるに違ひない。吾等は歷史に於て、本能に與へられた桎梏の如何に人間の精神及肉體を萎縮せしむることの甚しかつたかを屢々敎へられた。現代の社會改造の使徒は、心して其愚を繰返すことを避けな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けなければならない。併しながら私は憂ふ。人間をして最小限度に働かしめて、最大限度に食はしむることの可能なる、平和と豐饒との世界を目標としてのみ畫策されつゝある新社會の構成が、果して前に擧げたやうな種々なる人間の本能に、大なる萎縮を感ぜしむることなしに實現され得るであらうか。政治上の自由平等思想は、百年前の社會を改造すると同時に、其後の社會を束縛する鐵鎖となつた。今や現代は經濟上の共產均分思想によつて、社會の改造を試みつゝある。知らず、それは、新社會を束縛すべき新たなる鐵鎖となるべき可能性を有たぬであらうか。此疑問に正當に答へて、吾等の往くべき途を誤まらしめないがためには、人間の本能に對する精到なる省察と知識との上に社會改造の基調を定めることが何よりも肝要とせられるのである。

日露豫備交渉の批判

法學博士 米田實

一

後藤新平子の約四ヶ月に亘る努力と斡旋の結果、漸く六月二十八日より東京に於て、我政府と勞農露西亞政府との、豫備交渉は開始せられたのである。二ケ年前の大連會議が、關係者の捉はれたる思想と無能力から、遺憾なく失敗に終り、昨年秋の長春會議亦死中活を求むる儘の雄腕もなく、唯形式論に拘泥し、枝葉問題の論爭に因れ、遂に再び失敗の轍を重ぬるに至つた實情に照らして、今次の日露會議に於ては、多少日露關係發展の曙光を見るに至らんことは、恐らく我國民多數の希望して居る所であらうと思ふ。蓋し今日世界の狀勢を通觀するに、現在露西亞に於ける政治組織に對し、同情を有すると有せざるとに拘らず、或は衷心之を欲せず、場合によつては、其自滅せんことをさへ翹望するものであつても、苟も國境相接する所謂接壤地帶の諸國に於ては、我日本を除いて他は殆ど露西亞を承認し、既に充分なる外交關係通商關係を開き、相互の親善を促進しつゝありと觀ても、差支なき有様では無い乎。

全歐羅巴に就て觀るに先づ露西亞と境を接して居る芬蘭國及び、波蘭國は露西亞政府を承認して居る、其等は必ずしも露西亞政府現在の政治組織に、贊成を表して居るといふ譯ではない、波蘭の如き實は反露熱旺盛なるにも拘らず、仍且露西亞を承認し而して通商關係が開いて居るのである。又た同じく隣國たるエストニア、ラトヴイア、リトアニアの諸國も既に露西亞を承認して居る、國境は少し離れては居るが獨逸國も亦た勞農露國を承認して居る。唯今日承認を肯じないのは羅馬尼國位のものである、羅馬尼は露西亞と國境相接壤して居ながら、未だ承認を與ふるに至らない所以は、人口二百萬を有するベッサラビヤを露西亞より勝手に掠取して、尚問題の解決を見ず、其儘懸案となつてゐる爲めに、已むを得ず國交の恢復が出來ないのであるが、更に東すれば土耳其、波斯、阿富汗斯坦等皆一樣に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

露西亞を承認して居る。此外には未だ正式承認こそ爲さゞれ、通商條約を締結して居る國の中には、英伊兩國の如き大國がある。チエツクスロヴアキア等も承認こそ保留して居るが、通商條約は拔早調印されて居る、最近に於ては本年四月丁抹は露西亞と通商關係條約を調印した。露西亞と接壤地帶ではないが洪牙利も亦、今や露西亞との間に通商條約を協議中である。斯の如き形勢の進展裡に於て獨り我日本のみは、接壤國たるにも係らず承認も與へて居なければ通商條約を作つても居ない、即ち日露國交關係の何物をも有しないといふ奇現象を呈して居る。兎に角地理的關係に鑑みても、今回の機會に於て何等か相互間に接近の途を作られんことは、恐らく我人共に希望しなければならぬ所であらうと思ふ。

二

然らば則ち六月二十八日より東京に開會せられた、日露豫備交渉の成行如何、是れは未だ交渉進行中に屬し、此際結論を下すまでには至らないが、目下判明せる程度のものに就て、少しく批評を試むるのも强ち興味なきことではあるまい。此度の日露豫備交渉の序幕は如何にして開かれたか、茲に其經過を顧るのは寧ろ自然であらうと考へる。先づ六月二十八日午後三時より五時に亘り、日本政府の代表に任ぜられた霞ケ關の織ツ子、川上俊彦公使は宮川翻譯官を隨へ、一方勞農全權ヨツフエ氏は秘書レーヴイン氏を從へ、茲に兩國代表者相會見し交渉の日程場所等に就き協議した、之が第一日の會議であつた、其際二十九日より日曜以外毎日午後一時より三時まで、東京築地精養軒ホテルに於て協議を進むることに定めたのであつた。而して二十九日より三十日即ち第二日及び第三日に於ては北部樺太問題の全般に亘つて、意見を交換されたものらしく、先づ樺太を日本に賣却するの案が議せられ、更に其價格問題に對して多少面倒なる交渉が行はれた。日本側にては一億五千萬圓乃至二億圓を以て買收せんと欲し、露西亞側は十億圓内外を以て其價格とするの態度を執つたものゝ如くである、從つて相互間に價格の懸隔甚しく、買收問題は遂に決定を見るに至らず、一轉して樺太租借問題を議し、再轉して樺太合併問題即ち日露協同經營の下に、事業を遂行するなどゝいふ案も議せられたと信ぜられる、併し是等は何れも纏まるまでには至らずして、七月よりニコライエフスク問題及び、日本軍樺太撤退問題などが議せらるゝことになつた、尤も七月二日即ち第四日目の會議に於て露國政府側の提議に基き、爾後隔日に三時間宛交渉會議することに變更された。而してニコライエフスク問題は七月二日及び四日

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

即ち第四日目及第五日目にかけて交渉が行はれ、露西亞側はニコライエウスク事件に對する、損害賠償の責任を認むるに躊躇しないが、然も同時に日本軍の西伯利出兵によつて被りたる、露西亞人民の損害を主張し、双方相俟つて責任を相殺すべきものであるといふ態度を執つたもの丶如くであつた。併し日本側にてはニコライエウスク事件の主張を堅く支持すると共に、日本軍の手によつて被つたといふ露西亞人の損害は、大體に於て之を認めざるの態度を執り、事容易に決する所とならず、談判は頗る困難の境地に陷つたのである。斯くて七月六日即ち第六回の會議當日に於て露西亞側は休會を申出で、問題は茲に一時蹉跌を見んとして、九日再會、ヨツフェ氏のニコライエウスク事件責任承認となり、形勢緩和した、然かも此尼港賠償問題は他の問題と聯關して、依然協議の難關を形成して居ることを疑はれ無い。

三

今右の經過の中に於て現はれた政策及び關係國の態度に就て批評を加へて見る。大體に於て北樺太の處分として、買收するの案を立てたことに就ては、吾々は無論之に同意するに吝かならざるものである。世上の論者或は北樺太の買收を以て帝國主義なりといひ、或は北樺太の買收は日本に對抗する北米合衆國をして、北方勘察加方面に對する買收の端を開くであらうなど丶議論し、之を難ずるものもある、併しながら今回の北樺太買收問題に就ては過去に於ける日本との深き歴史的關係に鑑みても、亦地理的事情に鑑みても、決して日本の膨脹政策なりといふ非難を受くる理由を有しない。蓋し樺太は五百年前即ち露西亞人の足跡未だ印せざるの時に於て、日本人の渡來を見たることもあり、明治八年千島と樺太と交換せるが如きも、要するに日本の弱小に乘じて、行はれたものに過ぎない、開拓次官黒田清隆の淺慮なる樺太放棄論も禍を成したには違ひ無いが、少くとも其當時まで日本の勢力が同島に存在せることは云ふまでもない所である。然るに今や日露戰爭の結果、南樺太は日本の領土に歸したのみならず、現在北樺太には露西亞の人口一千に達せざるに反し、日本人の入來者却つて多きを占むるの現狀である。斯の如き總面積五千方哩に足らざる小島を兩分し、之を二國に於て占領するが如きは、理論上から云つても變態にして實際的に見ると双方のため決して便利なる事實とは云へないのである。武力による不法獲得と云ふならば兎も角、苟も相互の合意によつて買收する以上、其間何等の不可あるべき筈がない。彼の盛に他國の侵略主義を説き、帝國主義を攻撃する北米合衆國

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なども、之に對しては一點非難を加ふる餘地がない筈である。即ち北米合衆國は現に一八〇三年に於ては三千萬圓を投じて、面積八十二萬方哩を有するルイジャナを買收し、一八一九年には一千萬圓を投じて五萬八千方哩のフロリダを買收した。更に一八六七年には千四百四十萬圓を投じて、面積五十九萬方哩の大地域に亘り今や多量の金産額を有するアラスカを露西亞より買收した例があるのみならず、今より六年前即ち一九一七年には五千萬圓を投じて丁抹より、面積百四十二方哩の舊丁抹領西印度諸島を買收したのである。斯の如き例に見ても、米國が日本の北樺太買收を非難し得る理由があらうとは思はれない。又日本の北樺太買收に對して、米國は勘察加買收の端を開くであらうと說くものもあるが、此勘察加と米國とは樺太に於ける日露關係の如き事情を有しないのみならず、本來亞米利加洲を以て本場とし、根據地とせる米國が、故らに何等の新事情の發展を見るべきものなき露西亞大陸、就中西伯利に自國の立脚地を作るべく、其領土を獲得するが如きことがあり得やうとは思はぬ、萬一斯る企圖があるとしても恐らく露西亞は之に同意を與へなからうし、米國上院又斯の如き條約に同意しやうとは思はれぬのである。それのみならず此北樺太買收案は今や問題の中心となつて居るニコライエッスク事件の保障占領たる日本軍の、北樺太駐屯問題其他の難問題をも容易に自然消滅せしむるといふ利益もある、又將來北樺太に於て日本人が各種の事業を經營する、例へば石油石炭の採掘事業を經營する上に於て、兎もすれば兩國間に將來醸成され易き紛議の機會を、自然一掃するの便宜がある、是等の點よりするも、北樺太買收は最上の策と見るの外はない。

四

然るに現在の談判の經過に徵するに、所謂買收價格問題に就ての懸隔より相互の意見一致し難く、遂に第二策として合併問題が議せられた形勢が覘へる、此點に就て予の所見を淡泊に開陳するならば、今日單にあれだけの協議にて、買收問題が行詰れるものとは必ずしも云はれない。今後更らに之を再議し得る機會あることを疑は無い。併し又た第二策として合併問題を研究省察することも、強ち無用なりとは斷言するものではないのである。即ち最初買收價格に就て双方の意見の間に、約七億圓の相違のあることは、此買收問題を拋棄せしむる一の原因となるかの如く思はれるが、過去に於ける各國間の買取協議其他の實例に照らして、最初は是位ゐの遲延があり、その後善く纏つて居るのであるから、之も輕々に斷念すべきものでもない。北樺

太買收問題は一方が買はんとし、他方が賣らぬと言ふ爭ひの問題にあらずして、既に唯だ價格の點に就ての爭ひとなつて居る。而して露西亞全權が斯の如き價格を主張するには、何等か相當の理由があるに相違ない。其理由は何であるか、卽ち第一に一八六七年アラスカを僅々一千四百四十萬圓を以て米國に賣却した所、其後同地からは金が夥しく産出されて居るので、露西亞人のアラスカ買却に對する非難の聲囂々たるものがあつたといふことも、今次露西亞全權が高價賣却を固執する一の理由である。第二には今日過激派政府は、一億三千萬の人口を有する露西亞國の政權を掌握はして居るもの丶、眞の過激派と見るべきものは六十萬人しか存在して居ない、爲めに其政府は國内の各種分子の輿論に鑑み、或程度に於て之を尊重するにあらざれば、政治は容易に遂行し得難いのである。一方露西亞には舊帝制時代よりの國權論者が多く、是等國權論者は餘程の有利なる事情あるにあらざれば、領土の減少を欲しないのである。是等の點に鑑みてヨツフエ氏が强硬論を唱へて居るのも敢て不思議とするに足らない。然り不思議とするには足らないが、然も露西亞が日本に求むる所は、承認問題を始めとし其他日本との親近によつて、又は日本の同情によつて多大の利益を得べき種々なる問題が横つて居る關係上、買收問題に就ても假令最初は强硬論を唱へたればとて、他の條件に於ける交渉に關聯して、殊に日露が親善關係を結び、相互的援助が實現さる丶といふが如き形勢ともならば、玆に買收問題に對する先方の讓歩も可能となり、延て日本に取りても樺太獲得の途が開かる丶に至るであらう。

さりながら此日露豫備交渉に於て、買收以外に合併問題を議したことが、何も當を得ないといふ譯ではない、蓋し買收問題の成否が未だ逆睹し難き狀態にあれば、研究的に合併に對する協議を爲すのも一方法であらう。予一己の意見を以てすれば、買收によつて將來永遠に各種の問題を決定し、紛議の機會を一掃して置く方が得策とは思ふが、要するに日本の希望する所は、經濟的發展に外ならぬのであるから、如何なる基礎に於て合併が出來るか、日露合併會社の組織、利權特許並に米國シンクレア會社の、石油利權取消問題等を、研究して見ることも强ち無用の業ではない。併し玆に遺憾に思ふのは日露交渉の內容全部が、悉く判明して居ないことである、從つて結論は下し難いが、彼の買收問題の協議の如き今少しく突込んで、徹底的に交渉を進むる方が得策ではないかと思ふ。然るに事實は進む所まで進まず、研究する所まで研究を遂げずして、中途に挫折し合併案に向つて焦つたといふやうな、物足りなさがありはしま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いか、又霞ヶ關との關係があまりピッたり結合されて居ない、川上公使の立場からの影響があつたではなからうか、何れにしても多少遺憾に感ぜざるを得ない次第である。

五

北樺太買收問題及合併案に續いて、一轉交渉を進められたのは、尼港問題と北樺太日本軍撤退問題であつた、此交渉に就ての予の感想を述べて見るならば、露國全權ヨツフエ氏が日本軍の撤退を要求することは、露國として寧ろ當然であると思はれる、同時に日本としては最初ニコライエウスク事件發生に對し、之が保證占領として軍隊を駐屯せしめたのであるから、其行懸りに關聯して尼港事件の解決を求むるのも無理ではない、無論尼港事件の處分に駐兵が必要だと言ふ譯では無く、憲政會などに於ても、尼港問題と北樺太占領を引離すの議論もあるが、陸軍當局などの立場に對して多く考慮を拂へる我政府としては、先づ尼港問題を交渉し、露西亞側の撤兵主張に對しては、尼港問題に於ける我日本の立場を承認せしめ、以て賠償の約束を得んと主張したのも亦自然でないとは云はれぬ。聞く所によれば日本側にては、尼港事件に對する露西亞の賠償に最も重きを置き、其要求としては彼是れ總額一億二千萬圓を計上して居るものの如きである、其中には殉難者慰藉費として一人十萬圓宛約七千二百萬圓を計上し、更に陸軍々人三百三十人に對する三百三十萬圓、海軍々人四十名に對する四十萬圓、石田領事以下居留民三百五十名に對する三百五十萬圓を要求し、並に尼港事件に伴ふ日本軍の薩哈嗹保障占領費一億三千六百六十四萬圓を計上し、更に居留日本人の家屋漁業等に對する損害賠償、其他海軍費一千二百萬圓を計上して居るらしく傳へらるゝのである。尚尼港事件に就ては無論論議の餘地は十分あるが、日本は先づ露西亞の賠償を主張すると同時に、露西亞側が主張して居る西伯利派遣日本軍の手により適當の軍事行動以外として見らるべき措置によつて露西亞人民が被つた損害要求なるものを排斥し、且ヨツフエ氏が主張して居る相互要求の相殺を斥け、尼港問題の解決即ち賠償義務の承認を露西亞側に於て行ふにあらざれば、一切の日露交渉を拋棄するも、敢て差支ないと云ふに近い態度を示したものゝ如くである。無論是等に就ては日本政府に於ても川上代表に於ても、斯の如しと發表した譯ではなく、露西亞側に於ても亦未だ斯の如き狀態なりと發表せる譯でもない、從つて會議そのものは公開外交といふものにはなつて居ない、唯發表さるゝものは片言隻語であつて、樺太問題を協議せりとか、尼港問題を協議せりといふこと位に止まり、如

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何に協議し如何に決定したかは判らないのである、故に此場合最後の斷定は下し難いが、併し大體に於て今述べたると同樣の經過らしく見える。即ち日本側は餘りに尼港問題を振廻はし過ぎたのではあるまいかと觀らるゝ節がある、無論或程度に於ては露西亞側でも、一昨年四五月の交にゼノアに於て行はれたやうに、時々恫喝的政策を執ることがあるから、之に對抗して他の目的を達するの一時的政策としてならば、多少の非難の程度を緩和することが出來るけれども、此豫備交渉に於ける尼港問題に對する日本の態度が、今後も、その強硬さを繼續し、ヨッフェ氏が日本渡來後、「日本に於ける所謂尼港事件宣傳」の程度に驚き、理論的に露國としての責任を承認せんとして居るのに乘じ、之に過酷で偏務的な物質的賠償の義務を負はしめんと企てん乎、予は玆に一大禍機が生るゝことを思はねばならない。勿論尼港事件は我同胞七百名が、慘憺たる運命に陷つた事件であつた以上、之を全然輕視し無視すべきものであるとは云はない、併しながら今日露兩國が眞に相提携し握手して以て經濟的接近のためにも、東亞の平和策樹立の爲めにも、大に其力を致さんとするの機會に於て、尼港事件を適度以上に高調し、單に露國の責任承認に滿足せず、之に不公平な、非常に高い物質的賠償を求めんとするは、折角新發生の好機運を阻害するが如きことになりはせぬかと思ふ。是れ予の憂ひざらんと欲して得ざる所以である。

六

惟ふに尼港事件賠償は一要件とは云へ、之を以て日露交渉の根本を左右する大問題とし、之が處理如何によつて、日露親善關係の成否如何に係る運命を決せんとするには、餘りに輕い事件ではなからうか、何故かと云へば第一に尼港事件なるものは、西伯利に派遣せられたる我日本軍の警備區域以内に於て起つた事件であることを忘れてはならぬ、即ちニコライエウスクは露領には相違ないが、我日本は大正七年以來軍隊を西伯利に派遣して居つたのであつて、其結果としてニコライエウスクを含む一帶の地域には、露西亞側中央政治機關の支配力はなかつたといふ姿であつた、這は少くとも公平に觀て考慮の中に入れなければならぬ事件である。次には敢て米國其他外國人の議論を其儘に採用し贊成する譯ではないが、彼の華盛頓會議當時、米國々務卿ヒユース氏が極東委員會の席上に於て述べたるが如く、彼のニコライエウスク事件は西伯利出兵に關聯したる、一の偶發事件であるといふことも無碍には承認し得られない、換言すれば大なる西伯利出兵てふ事實に關聯せる、極めて、小な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る一個發生事件に過ぎないことも疑ひなき所であり、是亦考慮の中に入れねばならぬ點である。

のみならず、公平に見ると、日本軍隊側にも色々な非行が起つたことを忘れてはならない、蓋し西伯利出兵中我國の訓令は殆ど支離滅裂にして、嚴正中立の命令を發するかと思へば、白軍を援助せよと云ひ、過激派軍を絶滅せしめよといひ、中立かと思へば干渉せよといふ、斯の如く不統一にして支離滅裂なる命令のために、彼の地に出兵せる日本軍隊の行動に、節度を失へるもの多きのみならず、命令の前後矛盾せる結果、露西亞人は豫想し得無い事件に苦しまねばならなかつた、又た斯る亂脈の裡に於て日本軍が適當なる軍事的行動の範圍を脱して、ブラゴエシチエンスク其他にて多少不當なる行動があつた、例へば民家を燒き人を殺傷するなど、適度以外に亘りて行動せることも疑ひなき事實であつて、一々舉示するの煩に堪へないが、是等の點に於ては露西亞側としても、又、多少日本に對し要求を有し得る立場に在るのである。然らば公平なる見地から此問題に對し、双方より調査委員を設け、正當なる調査を爲すべしといふ露西亞側の主張も、一概には排斥する能はざる理由がある。又後藤子爵などが私案として述べて居る相殺論も、目下に於ける協同調査の實行が困難なるを考ふる時は、茲に一理由を生じて來ないこともないのである、之を要するに大體の經緯に鑑みて、少くとも尼港事件は露西亞として相當に責任を負ふべき事件なりとしても、又たヨッフエ全權も日本國内の事情に鑑み、その責任てふ一點だけを無條件に承認することとなつたとしても之が賠償の一點になると大に情狀を酌量し、輕く見せしめなければならない事情が數多あることをも忘れてはならぬ。從つて斯る事情にある尼港事件を以て、日露間交渉の暗礁としなければならぬ程のものとは考へられない、既に今日までの豫備交渉に於て、尼港事件の偏務的過重賠償を以て交渉の暗礁とするが如き態度に出でんとすることは、如何しても國家の對策上から、或は其他の見地から觀ても遺憾ながら賛成を表し難い次第である。

七

予を以て日しむれば寧ろ我國の對露外交として、今日執らなければならぬのは舊式外交の所謂小競合を抛擲することではあるまいか、彼の國家の大なる利益と大なる政策を離れて、枝葉末節の問題に拘泥し、小事の爭ひに終始して、其目を突發するが如きは誠に大局を誤るものにして、吾人の敢て取らざる所である。此意味に於て我國民が回顧しなければならぬのは、彼の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

獨逸の對露政策であらうと思ふ。即ち獨逸は一昨年五月露西亞と第一に通商條約を結び、爾來種々なる接近策を講ずることを怠らなかつた、斯くて昨年四月十六日彼のゼノア會議の最中、ゼノアより程遠からぬラパロに於て、獨逸外務卿ラテナウと露國外務卿チチエリンとの間に條約を作り、茲に獨逸は露西亞を承認せるのみならず、充分なる通商關係を確立したのであつた、其時の條約を見ると獨逸は明かに大局に眼を注ぎ、永遠の利益に考へ目前の小損失を顧なかつたのである。右の條約により先づ獨逸は露西亞と共に、戰爭に關聯する各種の損害要償の權を拋棄した、獨り戰爭に關聯せる問題のみならず、其以外に於ても獨逸は更に同條約第二條にて、勞農露國政府が獨逸人民並に其人民の私的權利に對して加へた損害、即ち勞農政府が制定した法律並に其他の手段によつて生じた各種の獨逸人の損害に對する要求一切を拋棄することをも認めたのであつた、這は獨逸に取つても決して損害でなかつたとは云はれない、何となれば戰爭前露西亞人が獨逸に投資した例は殆ど聞かないのに反して、露西亞の事業即ち電氣鐵道諸鑛山農園其他各種の事業に對して、獨逸人が投資せるもの甚だ多く、爲めに戰前から裏面に於て露西亞の産業を支配するものは獨逸人なりなどといふ非難の聲さへ喧しかつたのである、それだけに露國に於ける獨逸人の資本、財産、物質的權利は大なるものがあつたと云ひ得る。然るに過激派政府樹立されて以來、内外人を問はず一時共産主義に基き財産沒收を實行したので、單に露西亞人が損害を被れるのみならず、獨逸人の受けた損害も莫大であつた、勞農政府の財産沒收は獨逸人に取りては、非常なる打撃であつたに相違ない、それにも拘らず獨逸は遂に大に主張すべき權利を放棄した、何が故であるか、勿論獨逸の被つた損害は尠少ではないが、然も將來獨逸の國家的大策として、露西亞に發展することの尚一層重大なるを考察したからである。蓋し露西亞が既に共産制度を採用したる以上、獨逸を初め其他の私有財産制度の國家が、その沒收財産を要求通りの形式を以て恢復し賠償せしむることは困難である、若しも飽くまで之を主張せんと欲せば、獨露の接近、少くとも獨逸が露西亞に發展するの機會は遲延する、他國に率先して勢力を扶殖することは甚だ困難であると看取したのであつた。而して獨逸は條約上に於て、一應自國人民の權利を拋棄せしめたけれども、然も同時に露西亞側をして、例へば財産所有權ではないが、使用權其他の形式を以て漸次是等獨逸人の或者には、從來の財産に對する支配權を得せしめたり、然らざるものは其間の事情を考慮して獨逸國民に新しき利權を得せしむるなど、事實上に於て自國人民の損害を少く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

するの將來の可能性を考へたのであつた。要するに理窟の上の爭ひを止め、互に好感を生じたる機會に於て、相手國の體面上あまり困難とせさる形式に於て、實利を收むるの策に出でたのであつた。

八

獨逸が露西亞に對して斯の如き政策を執るに至れる所以のものは、一に獨逸が今次の世界大戰の結果、年額二千百萬噸の鐵を産出するアルサス・ローレンを佛蘭西に奪はれ、年額一千三百萬噸餘の石炭を出すザール炭田地帶に引離され、又年額三千萬噸以上の石炭を産する上シレシア地帶は、大部分波蘭に獲得された、其他廣く原料供給地たる約百萬方哩の植民地を失つた結果、茲に獨逸は此喪失を補塡するの新政策を考へ、之を東方に求むることとなつた。即ち東の方露西亞を觀ると、面 は戰前の八百四十一萬方哩に比して約三十萬方哩を減じ、八百十六萬哩となり、人口は亦戰前の一億八千萬人に比して約五千萬を減じ、一億三千萬人となつたけれども、尙大體に於て地球の陸地の七分の一を占めて居る、其富源は殆ど無盡 にして、然も今日開發せられて居ないものである。即ち獨逸は露西亞方面に於て大發展を試み、之によつて原料を得、戰爭の敗北の爲めに失へるものを露西亞に於て補充するの策を執り、以て獨逸將來の發展を對露政策によつて期するの策を立てたのである、さればこそ獨逸は決して輕からざる在露一國民の、條約上に於ける權利を放棄し、其他各種の點に於て露獨兩國間に、從來の行懸上紛議を生じ得べき一切の問題を抛擲し一掃するの條約を結び、各自相殺に相殺を以てし、新たに將來の發展策を講ずることに政策を改變したのであつた、其結果は將に効を奏し、今や獨逸は着々として露西亞に發展の地歩を堅めつゝある。而して現在如何なる狀勢の下に發展しつゝあるかを、就中其將來の見込を說くのは事枝葉に亘る虞があるから差控ゆるとしても、戰後より最近にかけ獨逸は露西亞の鑛山石油事業などに於て、大なるコンセッションを得、亦交通事業に於ても幾多の利權を得た。例の有名なるクルップ會社を始めとし、南露其他に於ては農業方面にも發展しかけて居るのである、商業方面にては今日露西亞からは盛に獨逸へ鐵を輸入し、同時に獨逸よりは金製品機械類などを送り、既に露西亞に於ける是等貨物輸入の六割七分は、獨逸に占領せらるゝに至つたのである、其他の點に於ても獨逸は着々大なる成功を收めて居ることを忘れてはならない。

顧みて日本の狀態は如何、我國は獨逸の如く戰爭によつて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

原料供給地其他を失へるにあらざるも、國境狹くして然も貧弱なる國内には十分の鐵を有せず豐富なる石油も有たない、各種の原料品に乏しく總て他よりの供給に仰がねばならぬ、然らば其原料品は何れに求むるか、何と云つても支那と共に西伯利でなくてはならぬ、此意味に於て樺太問題などは石油石炭等に關聯して、重大なること勿論であるが、大體に於て富源無盡藏なる西伯利大陸に活動することは、日本の國内工業發達並に經濟的發展のためにも極めて必要で、其關係は恰も露西亞に於ける獨逸の地位と同樣の狀態にある。從つて今日日本の執るべき策としては、眼前の小問題に捉はれず、大局に着眼して双方の提携を策し、日本の國策上から觀て目下日露間の親交關係に障害となるが如き問題は、獨逸流に成るべく之を輕視し、以て之が解決を容易ならしめ、換言すれば兩國關係の阻害となるものを一掃し日露關係の新紀元を作り、大に將來活躍の端を啓くことであらうと思ふ。然るに最近の交涉狀態を見るに、一として國家の大なる利益に副へる政策、並に態度に出でたものが認められないのは甚だ遺憾である、依然として舊式外交官の型を脱せず、古き形式に捉はれ枝葉末節に拘泥して恥ぢざるが如きは、所謂木を數えて林を見ざるの狀にありと批評されても致方があるまい。

九

以上の批評は無論目下該交涉の最中に於て爲せる意見であるから、今後會議の進展によつては所論自から異らざるを保し難いが、唯冀ふ所は今日我當局が從來の手段方法を變改することである。假令多少の論爭を爲したりとするも、未だ日露交涉關係が行詰れるものとは斷ぜられない以上、茲に一切の問題を綜合し、其間に妥協案を作成するのが良策であると信ずる。例へば樺太問題尼港問題などと、一々分轄協議せる時分には、枝葉の問題に亘りて細々しき爭論の機會を生じたるも、一度一切の問題を總括し協議を進むることゝせば、露西亞側にて先づ樺太問題を讓れば、日本側亦尼港事件に就て多少の讓步を爲し、斯くして兩國互讓の精神の下に、實行に適し得べきものにして、兩國の利益となるべき解決案を作成することが、當面の急務であると思ふ。

予は此切なる希望を述べて今後の交涉に對して見やう、同時に此際特に請はんと欲する所は、我上下國民が齊しく政府當局を監視し、日露交涉に於ける良好なる形勢の善化促進に向つて應援努力せんことである。蓋し今該交涉に關する周圍の空氣を見るに、面白からざる暗雲の低迷せるものあるは疑ひなき事實

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

である、我が加藤首相は案外大局に着眼し、日露協定の必要なる所以を能く了解して居るけれども、內務系司法系に於ては、閣僚單に過激派及過激主義に對する恐怖の念に捉はれ、他方に於ては現內閣を維持するに熱心なるの餘、若し日露協定の如き問題が成功し、後藤新平子をして名を成さしむることにでもならば、却つて後藤內閣出現の機會を促進せしめはせぬかと憂慮するなど、諸多の方面より該交渉の邪魔物となりつゝあるとは、掩ふべからざる顯著すべき事實である。外務省に於ても長春以來の經驗により、ヨツフエ氏個人を嫌惡せる傾きもあり、又ヨツフエ氏が曾て六年前伯林駐剳の勞農政府大使として飛躍せる辣腕、及び今より三年前露西亞波蘭協約、殊に露西亞リトアニア國間協約を調印せる辣腕振などに觀て、何となく毛嫌して居る傾きがある。斯る空氣の漂へることは、抑も日露交渉の經過に面白からざる陰影を投ずるものでなくて何であらう。一方露西亞全權ヨツフエ氏も病床の人にして、神經興奮の極往々莫迦々々しいことに論爭を試むる場合も少なくない、之も亦會議の進展上に面白からざる影響を與ふる一現象ではあるが、ヨツフエ氏の事は別としても、我政府部內に於ける過激主義反對の立場から、延て今後交渉の缺裂を見るが如きことあらば甚だ遺憾である。

英國は大體露西亞とは地域を接壤せず、唯印度方面に於てのみ多少地域を接して居るに過ぎず、英本國若くは英帝國としては其露西亞に對する關係は、我日露の關係ほど重大密接の立場には居ない、其英國でさへも、今日露西亞の承認こそせざれ、一九二一年三月に於て既に英露通商條約を結んで居る。其結果として英露の貿易は着々進展し、一九二一年度には貿易額僅かに六千八十五萬圓に過ぎなかつたものが、翌一九二二年度には一躍倍加して一億二千八百九十三萬圓に激增したのである。世間では露西亞の經濟組織未だ充分ならず、假令通商條約を締結するとも通商發展は多く望むこと至難なりなどゝ論ずるものあるにも拘らず、又未だ承認も與へず單に通商協定を爲せるに過ぎない英國の貿易が、條約締結の結果一躍して斯の如き數字上の相違を呈するに至つたことは、此間の消息を如實に語つて居るものではなからうか。而して此大勢こそ伊太利が、一昨年調印せる伊露通商協定に滿足せずして、昨年更に一層徹底的なる新通商協定を作つた所以ではないか（尤も此通商協定は承認條項を缺いたといふので露西亞議會で承認さるゝに至らなかつたが）兎に角も露西亞と歐羅巴諸國との現狀に鑑み、東亞の接壤國としての我日本は、此際眼を大局に注ぎ、十分寬大なる精神を以て現在の日露問題を解決すべきであらう、而して人或は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

對露債權問題、舊條約問題などを說くものあれど、斯の如き問題に對しては列國協同の問題として、將來に保留するの途もあり、尼港問題若くは舊條約問題などを以て、日露交渉を蹉跌せしむるには敢て當らないと思ふ。是れ現在に於ける予の所感であるが、交渉進行中に於ける批評としては、是れ以上語るを許さないのである。

地租委讓幷に日貨排斥問題

法學博士　堀江歸一

一、地租委讓問題

地租委讓の目的如何

地租委讓と云ふことは、始め原内閣の下に經濟財政調査會とか稱する機關の組織された際、其委員に列した三四の輩が稅制整理の參考案として、此事を工風した一事に端を發する。而して政友會が地租委讓を以つて、地方民の歡心を繫ぐ好個の武器であるとして、其實行を主張し出してから、世間の問題に上るように爲つた次第であるが、一個の稅制問題として、之を考へた場合に、私は何としても眞面目に之を取扱うを得ない。外國の稅制を翻譯して、之を我國に直輸入することを好む三四の輩と黨勢擴張を事とするの外に何ものの存するを知らない政黨者流とが殊更に斯る問題を擔ぎ出して、世間を騷がすものであつて、何等の價値を認めるに苦む。稅制の整理は願はしき所である。複雜なる稅法を整理して、之を簡單にすることも、負擔の苛重なるものを輕減することも、共に整理の業として、重要であるは論を俟たないが、同時に租稅の負擔が國民全體に對して、公平を得ることは、最も必要なる個條であつて、此一事が閑却されたならば、如何なる整理も遂に其効果を全うするを得ない。昔から租稅に關する爭議は租稅の負擔の苛重であり、又負擔の不公平であり、而して苛重不公平であることが國民に依つて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

感得された場合に、必ず惹起されることゝ爲つて居る。而して負擔の苛重であり、不公平であることは、正確に人々に依つて、判斷されない。殊に不公平と云ふことは比較の問題である爲めに、其判斷は甚だ困難であつて、或る程度の不公平は自ら人々の忍ぶ所と爲るかも知れないが、國家が或る系統に屬する租稅だけ廢止して、之と對立する系統の租稅には何等の處置に出でないと云ふようなことがあつたならば、國家自ら求めて國民に向つて、負擔の不公正を告知すると異ならない。斯る愚なる事は如何なる場合に於ても、國家として爲す可き所ではない。

租稅負擔の公平と云ふことを念頭に置く場合には、吾人は勢租稅制度の體系に就て、考へる所なければならぬ。租稅制度の體系は固より人工的のものであつて、立法者の意思に依つて如何ようにも之を組織するに苦まさるやに思はれるが、是れは一國に全然一の制度として見る可きものゝ存しなかつた時代の事であつて、其ものゝ善惡良否は姑く措き、兎に角一の制度があり、而して或る年處を經過して、今日に至つた來歷を有するが如き場合には、重大なる理由の存しない限り、濫に制度の根柢に斧鉞を加へると云ふことは、何等の利益を生ぜずして、却つて弊害を招く所以たらさるを得ない。私は我國の地租委讓問題に對して、斯る考へ懷くものである。

我國稅制の體系

我國今日の租稅制度は如何なる體系の下に、組織されて居るかと云へば、直接稅と間接稅と相對立し、而して直接稅に於ては、所得稅が國民の全體に國稅の負擔を普及するの趣意を以つて、中堅たる地位を占める一方に、地租は農業者に對する收益稅として、營業稅は商工業者に對する收益稅として、其れ〴〵所得稅の左右兩翼と爲り、以つて直接稅制度を構成して居るのである。即ち所得稅は所得が國民生活の最小限度と認められた標準點以下に居る一部の國民を除いた以外の總ての國民に賦課される故を以つて、租稅の負擔を普及せしめるの用を爲す一方に、地租と營業稅と相並んで、農商工業を始め一切の營利的職業に從事する者の收益に負擔を加へ、以つて租稅負擔の普及を期するを得るものであるとすれば、我國の租稅制度に於ては、地租と營業稅とは互に相關聯するものであつて、其一と他の一とを分離することは、租稅制度の系統から云つて、何としても許す可からざる所と爲るのである。或は一個の稅として、地租なり、營業稅なりを見たならば、幾多の缺點の存することは、爭ふ可からざる事實に屬する。地租に就て之を云へば、課稅標

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

準たる地價と實際の地價との間に於ける間隔が甚だしく、其甚だしいだけ、負擔の公平を失することの如き、米作の豐凶若しくは米價の騰落に依つて、納稅者に對する負擔に公正を缺くが如き、又營業稅に就て之を云へば、課稅目標と實際の營業收益とが一致を缺く爲めに、租稅の負擔の不公平であるが如き、稅務官吏の査定頗る不確實であり、彼等の手心に依つて、負擔の輕重を生ずるが如き、何れも缺點の重大なるものとしなければならない。然しながら斯る缺點あるの故を以つて、直に兩稅を廢止せよとか、地方に委讓せよとか云ふのは、餘りに單調の議論ではないか。兩稅を廢止するには、之に代る可き確乎たる財源があり、若しも此財源を租稅に依つて、徵收する場合には、其新に賦課される租稅は廢止される兩稅に比較して租稅として勝れるものであることが證明されなければならず、委讓の場合に於ては、中央財政の下に於て地租並に營業稅の賦課され、徵收された場合に生じた弊害が地方財政の下に於て、全然發生するに至らないと云ふことが證明されなければならない。然も私の見る所を以つてすれば、如何に委讓論者が說明を盡した所で、斯る證明の世人をして首肯せしめるものを得ることは、不可能であると認められる。

地租と營業稅との關係

昨今我國に於ては地租委讓と云ふことばかりが世間の議論に上り、營業稅は當業者の間なり、又は近頃運動を試みつゝある商工黨とか稱する團體なりに於て、廢止を聲明しつゝあるのみであつて、委讓の目的物として地租と營業稅との緣は打ち切られたように見へるが、本來營業稅の廢止運動の如き、地租の委讓計畫に刺戟されて、起つた事であつて地租の委讓される場合に、獨り營業稅が國稅として中央財政に取殘される道理はない。我國近年の社會狀態又は政治社會に於て、最も著しき對抗を示するものは、商工業者と農業者との利害關係であつて、事毎に相爭はんとして已まない。既成政黨が農業者の利益を偏重すると云ふことを一の理由として、近頃商工黨を組織しようとして、熱心に運動するものがあれば、一方に既成政黨中、此種の運動を喜ばない傾きのあるが如き、明に政治上に於て農業者と商工業者との相反撥するに至れることを語る資料とするに足るであらう。斯る場合に農業者の利害を代表する政黨を背景として、地租委讓の計畫が實行されたとして、實際に如何なる感觸を世間殊に商工業者に及ぼすであらうか。元來地租の委讓なるものが眞實農業者の爲めに謀つて、有利なる結果を齎すに

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

至るかどうかは、一個の疑問に屬する所であるが、表面は有利であるが如くに見へるし、政友會の如きは、必ず黨略上其有利であることを殊更に聲明するであらう。然らば全國の商工業者は必ず農業家に對抗する一種の競爭心から、營業税の地方委讓に全力を傾注す可きであつて、此點に於て彼等が必死の運動をすることは、今日に於て之を想像するに難しとしない。斯くて地租と營業税との二者を中央財政の税目として失つた我國の歳計は如何なる狀態と爲るであらうか。私は直に左の數點に考へを向けざるを得ない

第一、我國の租税制度は左なきだに消費税に偏倚し、中等以下の社會に對して、比較的重き負擔を加へるの弊を免かれない、其際に地租營業税の地方委讓に依つて、一億二千三百萬圓の收入を失ふことは、益々在來の弊害を加重するの譏を免かれない。

第二、然らば地租並に營業税に代つて、新に直接税を賦課する方針が講ぜられたならば、問題は一變するが、此種の直接税は如何なる邊に之を求めるを得るであらうか。所得税を中心として、直接税制度を立てると云ふことも、或は一般所得税法の外に、特別所得税法を制定することも、共に一の計畫たるを失はないかも知れないが、現在我國に於て所得税の徴收が甚だしく圓滑を缺き、官民互に相爭ひ、相欺かざれば、之を爲すを得ざる場合に、右の如き計畫を爲すことは、到底不可能であると解される。

第三、茲に於てか財産税法創設と云ふことが主張されるであらう。然しながら財産なるものは納税力の表示として、決して正しきに適したりとするを得ない。財産の種類に依り、運用の結果に依り、更に運用される技倆の巧拙に依つて、同一金額の財産に對する租税の負擔に不公正を生ずることは免かれ難き所に屬する。國運の危殆に瀕した際とか、他に財政の窮乏に當る手段の求められない時とか云ふような場合には、斯る不公平を忍んで、尚ほ財産税に依頼するの事情を生ずるかも知れないが、然らざる限り、斯る租税を以つて、地租營業税に勝るものとするを得ない。合衆國の財産税法は不動産と動産との間に、負擔の不公平なる點に於て、脱税横行し、爲めに國民の惡德を盛ならしめる點に於て、非難の大なるものであるが、尚ほ聯邦州一個の租税である故を以つて、國民の堪へる所と爲つて居るのである。獨逸の財産税法にも亦多くの非難がある。唯其國民の大なる反感を惹起すに至らないのは、一に國民に非常時の財政に處する公共的精神の存するものあるが故である。斯る特殊の事情の下に、其不完全であることを認めながら、實行されて居る税

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

法を特に斯る事情の存しない我國に誘導し來らんとする者あるに至つては、其如何なる存意に出るのであるや、私は之を知るに苦まざるを得ない。財産税の如き、之を必要とする時代ありとすれば、其時は國步甚だしき困難に陷り、他に適當なる課税の目的物見出されず、殆ど國民總動員の決心を以つて、國家のの爲めに供與に當る可き際であつて、斯る時期の到來するまで、財産税は之を保留することを必要とする。

第四、財産税の外に、兩税に代る可き財源として、世人に依つて擧げられるものは、郵便電信料金の引上げとか、行政整理に依る經費の減縮とか云ふことであるが、前者は下層社會に對して、交通の便を塞ぐの嫌がある、現に今日の料金制度に於ても、國家が斯業を通じて、得る利益の大なる以上は、寧ろ料金を低廉にするなり、從業者の雇傭條件を改善するなりすることを以つて、急務とする。地租營業税の地方移讓に對する善後策として、却つて官業益金の增收を求めようとするが如き、時代錯誤であり、冠履顚倒であるとしなければならぬ。而して行政整理に至つては兩税の委讓如何に拘はらず、如何なる場合に於ても、之を敢行して、財政の緊縮に資す可きであり、又實際問題として、一億二千三百萬圓の財源が行政整理に依つて、捻出されるが如き絕對に不可能事であるとせられるのである。現に加藤内閣の如き先頃本内閣書記官長とか、法制局長官とか、其他是等に類する局僚輩を集めて行政整理の調査に當らしめて居るようであるが、如何なる事功が擧げられるであらうか。行政整理の要目は一方に費用を節約して、他の一方に事務の敏活を期することであつて、是等の二目的を併せ達するには一個の經綸を基礎として、立案しなければならない。些々たる局僚輩をして此事に當らしめるが如き、難きを求めるものであつて、彼等の爲す所が法規の末節に於ける改正、事務の枝葉に於ける易還に止まるが如き、敢て異とするに足らない。

財政の將來に及ぼす弊

斯の如く考へたならば、私は地租並に營業税の地方委讓後に於ける我國の租税制度は今日以上に不良のものと爲り、不堅實のものと爲ることを想像せざるを得ないのであつて、其結果は恰も不熟練なる醫師の施術投藥が却つて患者に災を及ぼし、自然の抵抗力に依つて、疾病から恢復することを妨げるのと異ならない。如何にも地租や、營業税は其國庫に對する收入の金額から云へば、第三位以下に列する租税であるが、其國民に及ぼす負擔の關係から云へば、決して輕々に看過するを得ない。試に大正十年の統計に徵すると、地租納税者は一千五十四萬千三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

百八人であり、營業税の納税者は何人に於て六十八萬七千八百九十六人、法人に於て二萬六千四百二十九人の多きに及んで居る。私は必ずしも獨逸一部の財政學者の如く、國民に納税の義務を課することに依つて、彼等の愛國心を旺盛ならしめる效果ありとまでは極論しないが、斯の如く國民の多數に直接税を賦課し、彼等をして國費の分擔に與らしめるのは自ら政治に對する彼等の興味を刺戟し、彼等をして國政に對する監督の念を大ならしめるに與つて、力あることを信ぜざるを得ない。斯る租税を地方に委讓し、是等に代つて成否の疑はしき、創始の時代に於て必ず非難の簇生す可き財産税を以つてするのは、求めて財政の基礎を薄弱ならしめる所以であり、又斯る租税を地方に委讓したことの代りに、教育費の國庫負擔額を減縮するが如きは、財政の集中的傾向を打破するものと云はざるを得ない。明治二十九年日清戰後の經營に處する爲めに、政府は財政上に種々の施設を講じた其一端として、營業税を中央に統一し、地方財政の爲めに、國家營業税に對する附加税と國家營業税法の定めた課税標準以下の目的物に對する課税とを許す道を開き、爾後營業税法の全國を通じて、統一されたことに依つて、商工業の經營を安易ならしめるを得たことの大なるを得たのは、論を俟たさる所である。即ち從來府縣の間を通じて、營業税の税額に輕重の差の存した爲めに、一の地方から、他の地方に向つて、事業の移動が強要されると云ふような事態を惹起したのであつた。今、地租と營業税とを地方に委讓した曉に、斯る弊害の生ずることの絶無であるとは、何人も之を豫想するを得ないであらうし、更に往年と今日とを比較して、吾人が著しき相違を以つて認めるのは地方行政に黨爭の弊の加はつた一事である。即ち何れの地方團體にせよ、地方議會にせよ、政黨の色彩を帶びて居ることの著しきは、何人も認める所であつて、中央に於ける政權の爭奪と相俟つて、地方に於ても、次第に其酷烈を加へようとする。斯る際に地租並に營業税が地方に委讓され、地方團體に於て、其運用を掌つたとしたならば、必ず政黨政派の爭が介入して、税法其ものゝ混亂を來すことは、之を想像するに難しとしないのである。殊に私は明治二十九年營業税法が國税として制定され、次いで實際に施行された當時の事情を回想して、此税の廢止されることを遺憾とする。當時營業税の施行されるや、納税者の間に大なる反對運動が起り、而して其運動たる、單に今日の如く負擔の免除を求めるものでなく、收税官吏の税法を運用する方法の缺陷に根據を置いたのであつて、爾來幾年の間、官吏と納税者との鬪爭は殆ど其跡を絶たなかつた。今日に於ても尚ほ兩者の衝突は起るであらう。然も其れが他の直接

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

税に比較して、左程までに異ならざるものと爲つたのは、一に年處を經た結果であつて、カナールの云つた「古き税は善き税である」ことの格言にも多少の眞理の包含されることを信ぜざるを得ない。即ち既往二十七年間の歴史は始め缺點多く、運用の瑕疵少なからざりし營業税法を盛立てゝ、以つて今日に至らしめ、將來商工業の發達するに随つて、收入に增加の望みあらしめるに至つたとすれば、一朝之を廢止して、得失の明ならざる租税を代らしめる、又は財政上の或る計畫を達成する方便たらしめるに至つては、遂に事の可なるを見るを得ないのである。

加藤内閣の優柔

租税制度は一國歳計の基礎として、財政の信用の依つて繋がる所である。其根柢を改廢し、變更するが如き、充分の理據あつて、始めて行はる可きものである。偶々總選擧を目前に控へ、地方民の歡心を收めたければならぬと云ふような政黨氣質を以つて、之を動かしたならば國家財政の信用は忽にして地に委せざるを得ないであらう。斯る輕率なる態度は私の斷じて排斥する所である。

地租委讓に關する建議案は前期の衆議院に提出せられ、爾來政友會は委讓を實現せしめんとして、熱心であるやうに見受けられる。衆議院に於て加藤總理大臣は主義として、地租委讓に贊成であると云ふことを言明した。然らば其贊成である主義を實行する意思を持つて居るか、主義として贊成であるが、當面の問題として、解決する必要を認めないのであるか、今日に至るまで毫も之を知るを得ない。而して大藏大臣浜口氏は此程委讓の頗る實行困難であることを言明したが、其困難と云ふのは、或る力を以つてして、排除し得られるものであるかどうかに就ては、何事をも云はない。兎に角地方委讓の實現如何は、我國將來の税制に重大なる關係を持つ問題であり、而して其れが今日の如く世論の焦點と爲り來つた曉には、政府としては、之に對する方針を宣明し、中外の疑惑を解く責任を荷うのである。然るに政府の爲す所を見れば、今更の如く屬僚を集めて、調査に從はしめる以外に、何事をも爲さなければ、何等の意見をも示さない、國民をして五里霧中に彷徨せしめることの依然たる有樣である。政治上の責任の等閑に付せられるや、亦甚だしとす可きである。

二、支那の日貨排斥

對支外交の强硬

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

昨今我國民の間に大なる注意を惹起しつゝある對外經濟的事件は實に支那の日貨排斥問題である。之に對する責任ある政府當局者の意見は之を聞くを得ないが、民間の議論は著しく對外硬の風を帶び來り、支那に對して軍事行動に出でよと云ふ說すら行はれる。而して斯る說が平和の下に、國際通商の發達を企つることを急とす可き商業會議所等に依つて、主張されて居るのは、私の一奇とする所である。私は平生考へる、日本人を排斥する合衆國と日本物貨を排斥する支那と其日本に向つて爲す所業の不都合なる點に於て、幾何の相違があるであらうか。其國際間の信義に反し、條約の精神に違う點から云へば、兩者の間に毫も徑庭あるを見ないし、物よりも、人に大なる價値を置く以上は、日本人を排斥する合衆國こそ、物を排斥する支那よりも重き罪を日本に償うものとしなければならぬ。然るに日本の實業家などの內で、合衆國を懲せとか、對米戰爭を開けとか云ふ議論をする者の殆ど無きに反し、支那に對しては、途方もない强硬論の行はれるのを見る。對手の强弱に依つて、我國の國論の急變することも、亦甚だしいではないか。是れでは日本の武力的行動は正義の觀念に立脚するものでなく、利益の打算に基くものであると云はれても、辯解の辭ある可からざる道理である。斯の如きは我國民に弱い者苛めと云ふ一種の性癖の存することを暴露するものであつて、斯る性癖あればこそ、支那に於て時々排日貨と云ふが如き不祥事件に苦しめられるのであると考へられる。

支那が今日貿易を營み、通商を行うに當つて、其對手とする國は敢て少なしとしない。英米佛伊の諸大國は勿論、爾餘の小國盡く支那と通商上の關係を開き、支那に商品の販路を擴張するに努力して已まないのである。而して支那と是等諸國との間に於ける貿易上の關係は概して圓滑であつて、排貨事件の如きは殆ど之を耳にしない、時に或る地方に起つたとしても、日ならずして、消滅するに至ることを常とするのに、獨り日貨排斥に限つて、頻繁に、又組織的に行はれ、爲めに日本の對支輸出貿易に打擊を及ぼすことゝ爲るのは、何故であるか。或る人は之を以つて我國對支外交の方針宜しきを得ず、殊に華盛頓會議以來支那に向つて退讓を事とした爲めに、自ら支那人の輕蔑を買ひ、又彼等をして隴を得て、蜀を望むの感を懷かしめるに至つた結果であると解する。日本が支那に對して態度を公正にし、支那を國際政治又は國際經濟に於ける一員として、正當なる地步に立たしめる必要を感じ、斯る地位に支那を誘導すると云ふ見地の下に、道理ある讓步を爲し、以つて支那の利權を増進する計に出るならば、可なりとするを得るかも知れないが、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我國が支那に對して、幾多の讓步を爲すや、斯る支那の爲めにする高尙なる動機に基くのではなく、寧ろ歐米諸國の方針に追隨し、不本意ながら之を爲すのであるから、幾ら讓步をした所で、支那人をして日本の誠意を認めしめることも出來なければ、又日本を德とする念を懷かしめることも出來ない。而して斯る讓步的外交の行はれる以前に、日本の對支政策を律して居つたものは何であつたかと云へば、極端なる侵略主義であり、武斷政治であり、大隈內閣當時の二十一個條の要求と云ひ、寺內內閣當時の借款政策と云ひ、盡く其片鱗を示すものに外ならなかつた。對支借款の如き、固より支那自身の好んで之を請うたものには相違ないが、斯くて收められた金額が多く北方軍閥の權勢を增進する用に供されたり、此借款に對して提供された擔保物は或は將來日本の權勢を支那に擴張する礎石と爲つたりするような狀態であつては、支那人中斯る借款を喜ばなかつたものゝあつたのも、敢て怪むに足らない。斯る政策の後を承けて、起つたものは原內閣以來の無爲政策であり、讓步方針であるとすれば、支那人が日本に何等の信賴を寄せない、日本を以つて與し易き國とする感を持つのは當然であつて、斯る念があればこそ、今回支那の各地方に起つた排日貨運動が單純なる物資の排斥だけに止まらず、通商條約の精神を破棄するが如き極端なる程度に及ぶのである。卽ち今日は支那人間を通じて、政治的に日本を輕んずる氣風の生じ來つたのは、爭う可からざる事實であつて、斯る輕侮を支那人に買うに至つた所以は我國對支政策の不定に存するものとしなければならない。

日貨排斥の經濟的原因

然しながら之を經濟上の方面から觀察して、我國の物資に對して、特に支那に排貨の運動の起つたことに就ては、種々の動かす可からざる原因がある。第一に我國から支那に向つて供給する物資は一概に之を云へば粗製濫造品である。粗製なるが故に生產費が低廉である、而して低廉なる生產費の下に濫造された物資を盛に支那に輸出し、其間に暴利を占めることが、從來對支貿易の要訣と爲つて居つた。斯る方針も貿易を未開の對手國に擴張する一時の手段としては可なりとするを得るかも知れないが、決して永久に其基礎を確實ならしめる道ではない。我國が一個の工業國として立つ以上は、假令ひ支那市場に於て、英米兩國を正面の競爭國とする困難はあるとしても、尙ほ輸出品の品質を改善し、優秀なる物資を供給しなければならない道理であるのに、我國製造業者の爲す所は常に之に反して居つた。殊に歐洲戰時我國の經濟社會に起つた成金風は當業者の間

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に投機熱を煽らしめ、一攫千金の目的を達する手段として、粗製濫造を事とせしめた一方に、我國近年の財政經濟政策には大なる誤りがあつて、其爲めに當業者をして益々粗製濫造の已むを得ざるに至らしめた。如何なる誤りがあつたかと云へば、我國に於ては原内閣から高橋内閣に至る數年間に亘つて、政府の爲した所は悉く物價を騰貴させ、生産費を加重せしめる施設のみであつた。生産費が加重すれば、製造品の外國に對する輸出の困難と爲るのは勿論であつて、之に當る爲めに、當業者は粗製品を濫造するに至るのである。故に我國の對支輸出品が斯る粗製品であるとすれば、第一近年支那内地に興起しつゝある新興工業の生産品に依つて、其地位を奪はれるのは、自然の勢であるし、第二に斯る粗製品であればこそ、支那人は之を排斥して、他の優良品を買入れることに就て、何等の苦痛を覺へない道理である。我國が粗製品を濫造して、對支貿易上の基礎を薄弱なる地位に置いたことは、排貨運動に乘ず可き機會を與へたものと認めなければならない。

日支共存の實なし

従來我國の資本家は支那に資本を放下し、又事業を經營し、相當に共歩を進め來つたようであるが、私を以つて見るに、其間に一の大なる間違の存することを否定するを得ない。其れは我國資本家の間に存する利益獨占主義とも稱す可きものであつて、對支企業なり對支放資なりから生ずる總ての利益を我國民だけの獨占に歸せしめようとする一事である。英國の如き、隨分久しき以前から、支那に事業を計畫し、合衆國亦近年に至つて、他國に劣らざる熱心を以つて、對支企業に力を致して居るが、兩國の事業經營に就て、私の常に感服する所は事業經營の大綱に對しては、英國なり、合衆國なり、投資國の代表者が之を掌握して居ることは勿論であるが、事の細目に至つては、或る程度まで之を支那人に托する、資本の如きも支那人の間に投資の希望者があれば、之を容れて、合辦事業とすることを辭さない。斯くて英米諸國の事業には多くの程度まで、支那人の利害關係が投資の點に於て、將た又勤勞雇傭の點に於て、介在し來つて、双方密接なる關係を持つことゝ爲るのである。斯る事情があるとすれば、支那人が一時の感情に依つて、英米兩國の物資に對して、排貨の所業に出でた場合に、如何なる結果を生ずるであらうか。排貨に依つて、英米の資本家や、事業家は相當の苦痛を感ずるに違ないが、支那人も亦斯業に於ける資本家として、事務員として、之に劣らざる損失を蒙る。即ち結果に於て、天に唾すると異ならざる次第であつて、斯る排貨は決

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して行はれざるのみならず、假に行はれたとした所で、忽にして支那人間に内輪破れを見るに至るを以つて、必然の勢とするのである。

之に反して日本の事業家は利益獨占主義であつて、成る可く日本人單獨の資本を以つて、事に當らうとする、日本人の事業には成る可く日本人を事務員として雇傭する、下級の事務員に支那人を使役しても、容易に昇進の道を與へない方針が行はれる、斯くて日本人の對支事業は相當に發達したとした所で、日本人の集團が何時までも孤立し、支那人に對して、利害の點に於て隔絶せる趣きを免がれない。私の如きは餘程以前から、日本の工藝品で、支那に於て需要されるもの、製造は之を支那内地に移植し、支那人の低廉なる勞働力を利用して、生産費を節約する一方に支那人に對する事業經營上の關係を密接ならしめるの必要を述べて居る。斯る政策が行はれたならば、是れ亦日本の物資の支那に供給されることに就て、深く支那人の利害關係を關與せしめるに至る道理であるのに、此事も共行はれること、頗る遲々たるの趣きを免かれない。隨つて支那人が如何に日本の物資に對する排斥を行つたと云つても、其れは日本人の損失には爲るが、少しも支那人自ら苦痛を蒙る所以とは爲らない。斯くて一旦端を發した支那の排日貨運動なるものに對して、支那人側から、之を中絶せしめようとする機運の開れず、何時までも其永引くに至ることを以つて、已むを得ざる所とするのである。

排貨問題の善後策

日本には排貨事件の對手國が支那と云ふ弱國である爲めか、頻に強硬論が唱へられ、或は軍艦を簡派せよとか、或は領土を占領せよとか云ふ聲を耳にする。強を挫き、弱を助けるのは、昔の江戸ッ子氣風であつて、大正の日本人には通用しなく爲つたものであるか、現に合衆國の排日人策に對しては、言論態度共に不徹底である日本人の輿論が支那に對して、頗る強烈であるのは、私の奇怪に感ずる所である。而して退いて考ふるに排日貨問題の善後策として、斯る外交上の強硬論に如何の價値があるであらうか。支那人の爲す所、常軌を逸し、排貨に託し、日本人の生命財産を危うし、又營業の自由を拘束したとすれば、條約違反の事件であつて、條約の保障を求め、損害賠償を要求す可きであり、又排日貨運動の裏面に官憲の指命が加はつて居る證跡の確實なるものがあれば、政府に向つて、斯る事の再演されない保障を求めるとが必要となる。然し是等の事たる、排貨事件に對する當面の善後策であつて、永遠に處する道

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ではない。支那人をして眞實我國の物資に親しみ、如何なる事があつても、排貨と云ふが如き間違を再びせしめないに就ては、我國民自ら顧みて、對支經濟政策の根柢を一新しなければならず、更に根本的に云へば、强大國として弱小國に臨む國民的態度に溫和宏量の風を保たしめなければならない。是等の點を等閑に付して、獨り對支外交に强硬方針の行はれることを望む世務に迂なるの甚だしきものである。妄に對外硬論を上下した所で、永く粗惡なる物資に對する他國民の需要を喚起し得る力のないことは、私の再言するまでもない事である。

昨今我國に於ては對外硬論の一ツとして、支那が排日貨を行ふ以上は、日本は支那に對して、例へば關稅權の伸張を認め、輸入稅の引上を許すとか、治外法權の撤去に贊成するか、對支文化事業を實施するとか云ふような一切の恩惠好意を棄て、支那をして思ひ知らしめよと云ふ說もある。是れは支那が政府の力を以つて、排日貨を行つた場合に行はれるかも知れないが、支那人自ら經濟上の意思を以つて、排日貨を行ひつゝあるに當つて、日本が嚢に彼我政府の間に約定した所に背くと云ふのは、如何なるものであらうか。殊に對支文化事業の如き、人道的見地に於て行はる可きものであつて、日本としては之に對して、何等直接の報酬を求めるものでもなければ、求め可きものでもない、然るに支那人の擧動の意に適せない故を以つて、直に人道的計畫を二三にする、果して是れが我國の平生世界に宣明しつゝある博愛義勇の精神に合致したものと稱されるを得るであらうか。我が國民の三思を求める次第である。

英國に於ける言論の自由と陪審制度

穗積重威

此小文を冷灰江木衷先生に捧ぐ。先生は我國に於ける陪審制度の先覺にして、陪審制度は實に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

先生努力の記念碑なり。

一

社會の發達と謂ふことを哲學的に考察すれば各人の人格の充實發展に外ならない。

而して各人が人格を充實發展せしめるに最も必要なる條件は即ち思想の交換であつて、思想を交換する爲には言論（以下言論の自由と謂ふのは發言著作等思想發表の自由を指す）が自由でなくてはならぬ。

之を逆に觀て言論の自由は其社會の發達の程度を示す文化計と謂へよう。

故に各國は競ふて憲法典に言論自由の保障を揭げてゐる（帝國憲法第二十九條）が、更に一歩深く考へると憲法に保障が有れば即ち、實際に言論の自由が在るとは謂へないのである。一例として佛國の如き「自由」の爲には大革命の血を流し、有名なる「人權宣言」の第十一條には「思想交換の自由は最も貴重なる人權の一なり」と宣言し、又一七九一年の憲法には「言論の自由を天賦の權利並に法定の權利として保障す」と規定してゐるにも拘らず實際に於ては歷代の官憲は嚴重なる干渉政策を採てゐる。

然らば如何にすれば靜的なる憲法の規定を動的と爲し眞に言論の自由を實現し得るかと謂へば、基礎としては國民教育を普向上せしめ、制度としては陪審制度を確立することが最も根本的である。

第四十六回帝國議會を通過して來る大正十七年以後に實施せらるることになつた我國の陪審法に關しては、當時議會に於て大體三種の反對論が在たが其中最も喧しかつたのは我國に陪審制度を設けることは憲法に違反すると謂ふ論であつた。即ち陪審員の爲す事實の認定は裁判の一部である、然るに陪審員は裁判官ではないから憲法第二十四條及び第五十七條に違反すると謂ふ規定解釋論と、帝國憲法は制定の當時陪審制を全然豫想してをらなかつたかと謂ふ立法精神論とである。

此反對論は形式論としては相當の理由がある。然し乍ら問題を實質的に觀るとき、即ち立憲政治の根本精神を考ふるときは、陪審制度は憲法と共に必要であつて無用論こそ立憲違反論と謂はねばならない。

之を言論の自由と謂ふ一方面に就て觀るも、既に帝國憲法が第二十九條に言論著作等の自由を保障してゐる以上は陪審に依る裁判を認めなくては龍を畫いて睛を點ぜざるに等しい。

英國が一方に於て近世陪審制の母國（英國の起訴陪審制はサ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

クソン時代の百人組制度に起源し、公判陪審制は大陸に於けるノルマン人の慣習がウイリヤム一世の英國征服と共に輸入せられたものである）と謂はれ、他方に於ては所謂「新聞紙の自由」(liberty of the Press) の誕生地と稱せられる二つの事實は言論の眞の自由は陪審制度より生ることの活きた證據である。

英國の陪審制共ものに關しては他日別に述べることとして茲には如何に言論の自由が尊重せられてゐるかを記して以て他山の石としたいと思ふのは、私は英人の誇る所謂"fair play"即ち政治を始め社會各般の活動が他國に比べて最も公明正大に行はれてゐることは主として言論の自由の賜と考へるからである。

以下に先づ同國に於ける印刷出版の自由の沿革を記し、續いて言論の自由と陪審制度との關係を述べ、終りに現在如何なる程度の言論の自由が認められてゐるかを示さうと思ふ。

二

言論壓迫は古代國家の特徴の一であつて、ギリシヤ時代にソクラテスが豆を用ひて官吏を選擧する制度の愚を論じて國法侮辱罪に問はれ、ローマ時代にコルダヌがブルータスとカシアスを賞して「最後のローマ人」と云た爲に叛逆罪に擬せられた等は今に傳る著しき例である。

自由の國イギリスも第十七世紀末迄は印刷出版に對して頗る壓制を加へてゐた。

第十五世紀頃に行はれた言論壓迫の方法は次の三種であつた。

(一)出版業者の數の制限
(二)出版前の檢閲
(三)輸入外國書の檢閲

第十五世紀半頃にヘンリー六世が出版業を營むには國王の特許を要すと定めたのは即ち出版業者の數を制限する目的である。

當時の壓迫が如何に甚しかつたかを物語る面白い判決例がクロンウエルに弑せられたチヤールス一世の治世にある。一六二九年にチエムバースと呼ぶ一商人が商品の不法沒收を憤て訴訟を起した際に、公判廷に於て英國程商人の壓迫せられてゐる國はない、彼のトルコに於てすら商業は遙に厚く保護せられてゐると謂ふ意味を述べた爲に二千磅——今日の二萬圓位當時では餘程の大金であつたろう——の罰金に處せられた。裁判長以下陪席の判事貴族等二十四人が合議の末下した判決理由を見ると、國王の政府を彼の野蠻國たるトルコに比較して論じ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たのは國王と臣民とを疎隔して國家の安寧を亂さんと謀たものであると謂てゐるがこれではイギリスの方が遙に野蠻國である。

當時スターチニムバーと稱する特別裁判所があつて同裁判所が一六三七年に發した命令（decree）は嚴しく印刷出版を取締てゐるが、此裁判所は專ら國王や政府の壓制の道具と成つたので人民の反對烈しく間もなく廢止せられた。然るに其後長期議會は（Long Parliament）前記の命令と內容の似た苛法を一六四三年及び翌年に制定したので、「失樂園」を以て有名なミルトンは一六四四年に AREOPAGITICA と題する書を著して大に此法律の不當を鳴らした。

クロンウエルの革命の後即位したチャールス二世の治世一六六二年に發布された免許法（Licensing Act）は、此時代の言論取締法の最も代表的のものである故左に其大要を掲げれば

（一）印刷並に印刷物輸入を爲す者は國王の特許を受くることを要す。
（二）出版には豫め檢閱を受けて免許を得ることを要す。
（三）法律書は大審院長又は控訴院長より免許を受く可し。
（四）歷史書は內務大臣より免許を受く可し。
（五）神學、哲學及び自然科學書はカンタベリー大僧正又はロンドン僧正より免許を受く可し。
（六）著者の匿名を禁ず。
（七）豫め印刷組合に通告せずして印刷機械を所持するを得ず。
（八）印刷物の輸入には特許を要す。

當時の爲政者は「書籍の印刷は城廓を築いたり烽火を舉げたりするのと同樣の性質の行爲であつて書籍は烽火の如く煙塵と驚愕とを惹き起す恐れある（a book might rouse as great a dust and alarm as a beacon）が故に築城や烽火を舉げるに許可を要すると同じく印刷にも豫め許可を要するのが當然である」と考へた。

かゝる思想に基いて同じくチャールス二世の時に十二名の判事が、新聞紙の發行は夫自身に（per se）違法行爲であるが國王の特許を得た場合には例外として特許が其違法性を沮却すると謂ふ決議をしてゐる。

チャールス二世及び次のジエームス二世の時代には一週二回發行の『ロンドン、ガゼット』が英國に於て政治記事の掲載を許された唯一の新聞紙であつた。

尚當時は新聞紙の用紙の大きさ迄も議會法に依て制限されてゐたもので後にジヨージ四世の一八二六年に至て始めて用紙の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大きさを自由にする法律が發布せられたが、而も尚新聞紙は收入印紙添附の紙に印刷することを要し、之が廢止せられたのは更に後のヴイクトリア女皇治世の一八五四年法に依てである。

初めに述べた印刷制限の方は其後實際上は殆ど撤廢せられたけれども出版前の檢閲の方はジェームス二世の次のヴイリヤム三世の時迄行はれ次のマリー二世の一六九五年に至て廢止せられて茲に始めて『新聞紙の自由』が確立したのである。

一六九五年の議會が前記の免許法の繼續を否決したので出版前の檢閲が無くなつたことは實に自由の鐘の第一聲であつて文化史上に新紀元を劃し今日の英國の隆盛の素因であるが、之に付ては議會政治を研究する者にとつて面白い話がある。

此の如きエポックメーキングな立法（消極的立法）を爲した議會は甚だ進歩した思想を有してゐた樣に思はれるが實は當時の議員達の頭には思想の自由とか社會の文化とか謂ふ考は毛頭無かつた。議會は自己の行動が將來の國運に如何なる影響を及すかなどと謂ふことは全く自覺せずに、目前の極めて卑近な商賣上の利害から檢閲制度を廢したのである。

マコウレーが「英國史」に誌せる所に依ると免許法否決の理由として論ぜられた弊害は、

（一）印刷組合は其獨占的地位を利用して出版業者から金を貪る。

（二）檢閲の名の下に官憲が家宅搜索をする。

（三）檢閲あるが爲に外國書籍の輸入を困難ならしめロンドン港の貿易不振を來す。

（四）輸入書籍は檢閲を待つ間稅關倉庫に山積せられ甚しく汚損する。

（五）檢閲料金が不定である。

（六）稅關吏が檢閲官の面前以外で輸入書籍箱を開くときは刑事責任を負ふのは不當である。箱を開いて始めて內容が書籍なることを發見する場合が多い。

等であつて "on the great question of principle, on the question whether the liberty of unlicensed printing be, on the whole, a blessing or a curse to society, not a word is said" (Macauley).

かくして英國に於ける思想の自由の戰の先陣は一六九五年の議會が怪我の功名を成したのである。

爾來今日迄檢閲制度が復活した事は一度も無く（佛國などでは屢廢止せられたり復活したりした）、其後一七九九年法一八一九年法一八七〇年法等の諸法律に依て主として手續法規の方面に於ける從前の自由制限が撤廢せられて、現在に於ては

(一)出版物には印刷人の氏名住所を記載す可き事。
(二)印刷人は印刷依頼人又は雇主の氏名住所を記入した印刷物一部を出版後六ヶ月間保存す可き事。

等の取締規則が有るのみである。

前述の印刷業を獨占したギルドも勿論無くなつた。

三

英國では印刷が自由となり出版前の檢閲が無くなれば直に思想の自由有りと謂ひ得る。然るに同じく印刷も自由であり、出版に檢閲も要せず、言論著作の自由は憲法に明章ある我國には英國程の自由が無いのは何故であるか。

言論の實質的自由は陪審制度存して始めて在るが故である。

六百年の昔ウイリヤム征服王が建國と共に移し植へた陪審裁判の制は既に蓊然たる大木に成てゐた。故に印刷さへ自由になれば宜い。檢閲さへ無くなれば宜い。壓迫の嵐は此大木の蔭に避けることが出來る。不當に自由が侵かされた場合には法廷で爭ふ。此時に問題の言論著作の內容が果して社會の安寧幸福に害ありや否やを決定する者は官吏ではない。己れと同じ布衣の民たる―從て多くの場合に己れと同じ樣な感情を持つ―十二人の陪審員である。

勿論陪審員に依る裁判なら無罪が多いと謂ふ譯ではない。英國の司法統計を見ても有罪決定の方が何百倍も多いが有罪となつた場合でも官權が壓迫したと謂ふ感じは少しも無い。政府から謂ても此點が極めて大切である。

さて然らば陪審制度が有れば夫で言論の自由が完全に得られるかと謂ふに實は未だ必ずしもそうではないのである。

英國陪審制の歷史を觀ると第十八世紀の末頃は、言論自由に關する問題が刑事々件となつた場合に陪審員は單に演說或は出版した事實の有無を判決し、其內容が違法なりや否やは裁判官が決定した、故に未だ完全な自由の保障ありとは謂へなかつた。

此故に一七九二年(ジョージ三世)に有名なるフォックス法(Mr Fox's Act)に依て、刑事々件に於ても民事々件と同樣に陪審員が違法性の有無迄判決し裁判官は違法と決した場合に之適用する法規を判決することと定められ(之は古法の復活に過ぎない)、茲に始めて最大の自由が獲られるに至たのである。

「新聞紙の自由」の誕生地と稱せられる英國のこと故定めて模範的な「新聞紙法」が有らうと思へば、意外にも「新聞紙の自由」の範圍を規定した特別法は一つも無い。一八八一年の「新聞紙

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の名譽毀損罪及び登記に關する法律』の如き單行法が有るけれども佛國の「新聞紙の自由に關する法律」(Loi sur la liberté de la Presse) 等に相當する法律は無いのである。

特別法を有たぬ所ではなく立憲國の模範と謂はるる其憲法にすら言論著作の自由を保障する規定は無い。英國憲法が不文憲法なるが故に明文の法條が無いと謂ふに非ずして原則が認められておらないのである。

英法に於ては『新聞紙の自由』を始め一般の言論の自由に關する法規は刑法の中の

內亂煽動罪 (Sedition)
名譽毀損罪 (Libel)
風俗壞亂罪 (Obscene publications or Immoral libel)
神聖冒瀆罪 (Blasphemy)

等の部分に含まれてゐるに過ぎない。故に『新聞紙の自由』の問題は刑法書の Libel (文書圖畫に依り人の名譽信用を毀損する罪) の所に論じてあるのが常である。

然し乍ら問題の起た時に違法なりや否やを判決する者が陪審員であれば、其處に制度として自由の精神が在り又實際にも廣い自由を享有することが出來る。夫丈では飾物に過ぎない新聞紙法や憲法の條文は餘り欲しがらない。此間の消息は、ダイシー教授が名著『英國憲法論』の中で自由權を論ずるに當り、彼の自由の紀念碑とも稱す可き佛國革命の際の「人權宣言」を冷笑して、人權を『宣言』するはことはいと易い。紙と筆さへあれば出來る。然し人權を『實現』することは頗る難しい。我國は人身保護令狀 (Writ of Habeas Corpus. 後に法律と成る) に依て佛國の宣言を英國に實現したと誇てゐるのと趣を同じくし、實際に有効な手段を先に採用して法文や理論の方は缺けた儘にして置く英國法制の特色を物語てゐる。

四

實際に如何なる程度の自由が言論に認められてゐるかに就ては、此種の訴訟を裁判した際に裁判官自身が述べた言を藉りて示さうと思ふ。之こそ最後の断定であり、且最も實際に役に立つ標準――殊に英國の如き判例法國に於ては――であるから。

名判官と稱せられたアースキン卿はペイン事件に當て曰く、

『或は國政に關し、或は地方行政に就て、各人は自己の理性と良心とに基いて眞理と信じたる事柄――假令客觀的には誤謬にせよ――を公衆に向て開陳するの權利有り。

憲法憲政を批判して其缺點を指摘し、腐敗を暴露し、以て公衆に警告し、或は又、制度が濫用に依り其本來の目的を失へる

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ことを摘發し、以て其改革を唱ふるは、各人の自由に爲し得る所ならざる可からず。

之を論ずる者に於て自己の理性と良心とに背くことなく、社會に有益なる可きを確信して輿論を動かさんと期するものなる限りは、英國臣民は何人も前記の權利を享有す。然れ共 Sedition（内亂煽動罪――此譯語は余り適當ではないが、此犯罪の定義は英法中の難問の一でキャムデン卿は『不能』なりとさへ謂たが、極く約めて謂へば「現行法に違反する手段に依る政治上又は法律上の變革を鼓吹する言論或は行動」を指し言論の場合を Seditious libel と謂ふ）を犯さざらんと欲する者は、國民が政治の規矩として承認せる法律に違反することを煽動し、或は、財産の保障を侵害する論、又は、國民生活に法律を無用となす論を唱ふ可からず。』

ケニヨン卿もリードウス事件中に曰く、

『言論の自由は此國に於ける各人の權利なり。我國の如き自由國に於ては政治研究者の著作は最も寛大に取扱はれざる可からず。』

リットルデール判事はコーリンス事件に就て曰く、

『國民は若し不平あらば之を論議する權利あり』

ケニヨン卿は又カットヘル事件に際して曰く、

『自由とは十二人の同胞が正當と認むるものは何事をも公表し得可く、不當と認めたる場合には處罰せられることに外ならず』

又特に「新聞紙の自由」に關しては、英法中興の祖なるマンスフヰールド卿はセントアサフ事件の時に曰く、

『新聞紙の自由は出版に豫め許可を要せざることに存す。』

カベット事件に當りエレンボロウ卿曰く、

『英法は自由の法なり。自由なるが爲には所謂 Imprimatur（檢閲官）は存す可からず。今日に於ては出版に豫め許可を得る必要なし。

然れども違法なる新聞紙を發行せば、他の場合に於ける違法行爲と同じく事後に刑法の制裁を受く可し。』

フイッチエラルド判事もサリウアン事件に際して曰く、

『新聞記者は政府の行爲を檢察し政策を指導する權利を存す。否之實に彼等の義務なり。』

ローソン事件にカアラン判事は述べて曰く、

『新聞紙の自由は "Sacred Palladium"（昔トロイを守護したパラス神の木像で之をギリシヤ軍に奪はれた爲にトロイは滅亡したと傳へられるゝなり）大臣の權勢も之を侵す可からず、之を破壞するものは獨り陪審員の腐敗と無智あるのみ』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

實に英國の新聞紙は『社會の安寧を保つ最大の機關（キャムデン卿）』であつて『近世政治組織の進歩は新聞紙に負ふ所最も大（フォックス大判事）』である。

五

いろ／＼と述べた來たが全篇の眼目は唯言論の自由が國運發展の重大條件にして之を實現する手段は陪審制度なりと謂ふ一點に在る。

而て茲に最も肝要なる問題が殘てゐる。

陪審員に依る裁判の制度は言論の自由を實現するに最も適してはゐるが、實現せられたる『自由』が果して社會の發達に有益なりや又は却て有害なりやは制度の知る所ではない。

正義を愛し常識に富んだ人を得る事が實に一切の大前提である。

陪審員の評決には其個人の智識と社會の時代思想とが現れる。又裁判官の判決にも其個人の智識と社會の時代思想とそして現行法規の良否とが現れる。

かくて窮極の大問題は國民教育の振興である。凡そ自由は夫自身が理想ではない。世人は屢此簡單なことを思ひ誤る。自由夫自身は善でもなく惡でもなく美でもなく醜でもない。自由を叫び自由を尊ぶのは夫が或る目的理想を遂ずる爲に多くの場合に於て最上の手段であるからである。目的たる人格の充實即ち社會の發展の爲に有益なる言論が無ければ自由を叫ぶ必要も無い。カントの說を引く迄も無く自由とは同時に制限を伴ふ觀念である。

世人が自由の眞義を思ひ誤らば陪審制度は國を危くするであらう。

國民教育の振興は實に一切の大結論である。東洋の英國と稱せられる我が日本に五年の後に誕生せんとする陪審制度が英國に優る發育を遂げて、後世のトックウィルをして次の名句中の『英國』を『日本』と書き換へしめんことを祈る。

『かくして英國に於ける諸々の自由を實際に救ひたる者は佈衣の陪審員なり。――"C'est donc le jury civil qui relle-ment sauvé les libertes de l'Angleterre" De Tocqueville」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

神社と宗教と教育

――神社調査會の新設に際し神社問題に對する當局者の不徹底を指摘す――

ドクトル・オヴ・フィロソフィー
立教大學教授　小島茂雄

一

去る七月二日勅令を以て神社調査會官制が公布せられ、即日施行せらるゝことになり、會長として内務大臣水野錬太郎氏が擧げられ、委員及び幹事として内務大藏文部宮内各次官神社局長地方局長掌典次長等又各々數名の官司帝國大學教授貴衆兩院議員等が數へらるゝこととなつた。而して神社調査會の目的或は職能とするところは、その官制の示す通りに、「内務大臣の監督に屬し其の諮問に應じ神社に關する重要なる事項を調査審議す」ることゝ、「神社に關する重要なる事項に付關係各大臣に建議することを得」ることゝにある。

私はこの神社調査會新設の中に嘗て神社局長であつたことのある水野内相の神社問題に對する興味の復活を明かに發見するものゝ一人である。現内相が大正七年の頃始めて内務大臣に就任した時、内務省主催の官國幣社宮司談合會に唯一の諮問事項として「兒童の敬神思想涵養に就き小學教育に對する希望」なるものを提出し、偶ま時を同じうして開會中の警察部長會議に檢事總長をして「神社は我國體と離る可からざる關係あり昔より祭を爲し教を立つる必ず神祇を崇敬するより始む蓋し民心の歸向を一にし萬世無窮の皇國を扶翼すの所以のもの此より要且切なるものなければなり凡そ神威を瀆し或は信仰を害する虞あるが如きは之を豫防し得るものに在つては周密に規畫して力めて之を防止せんことを期す可く其既に發したるものに在りては嚴重に之を檢察糾彈し一毫も假借することある可からざるなり

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本官の特に此趣旨を開論して各位の考慮を促すは時勢の變遷に鑒みて注意を新たにする要ありと信ずるを以てなり」と訓示せしめ、相呼應して如何に當局者が神社問題に關して常に細心の注意を拂ひつゝあつたかを立證した。吾が國が世界空前の時局に處し、外來の危險思想も隨分無批判的に宣傳せらるゝ時に當て、當局者が意をこゝに用ふるは決して無用のことでもなく又徒爾のことでもない。然しながら、惜しいことには、彼等が神社問題に對する態度と考察とに充分に徹底してゐないために、未だにこの問題の解決を見ることが出來ず、國民の多數が諸說紛々たる中に疑惑の途を彷徨してゐる間に、今日謀らずも神社調査會が水野内相のお手盛りで出現することになつたのであるこの際神社問題に對する當局者の不徹底を指摘することは吾等評論を以て任ずるものゝ尊い職分であると謂はねばならぬ。

二

吾が國全國に亘つて存在する十四萬餘の神社をば當局者は如何に見てゐるかといふに、彼等はこれを公共造營物と見做してゐる。則ち、神社は英語のインスティテューション、獨逸語のアンスタルトで、學校圖書館等の如く一私人の占有すべきものでなく、水野内相が嘗て（大正五年の頃）日本學會の講演に於て神社制度を說明してゐる中で言つた如く「國民の崇拜する所の施設であるといふ意味に於て公共の造營物」である。それで官幣社は宮内省より、國幣社は國家より費用を支出し、府縣鄉村社は原則よりすれば府縣郡村が費用を辨ずべきものとなつてゐる。それから神官は國家の官吏として俸給を受け、その官等は他の官吏のそれの如く親任勅任奏任判任等となつてゐる。

神社制度に關する如上の解釋から見て、當局者が神社と宗教とを判然區別してゐることが解かる。明治維新以後になつて、神祇官が廢止せられて教部省が神社宗教のことを司りその後内務省の社寺局となつたが、神社と宗教とを同一に視ることの是非の論が追々盛んになつて、議會にも度々建議のあつた結果、終ひに明治三十二年に社寺局を廢して神社局及び宗教局といふ二局が置かれ、軈て大正二年の六月内務省は神社局を自分の方に保留して宗教局を文部省に移管した。これで見ても如何に當局が、少くとも制度の上で、神社と宗教とを別種のものと視て、神官僧侶の取扱方からしても費用支辨の方法からしても二者を區別してゐることが明瞭である。

當局者が神社と宗教とをかくの如く區別することに就いては、隨分内外に是非の論があるけれども、私としては、或は當局者の敎へる理由とは異つた理由によるかも知れないが、彼等

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の主張するこの區別をば單に行政上よりのみならず風教上より見るも極めて適當なるものと思考するのである。

由來、神社崇敬は吾が國體に淵源し、個別的の家族は皇宗を中心として國家てふ綜合的家族を成すものだといふ國民的自覺の上に築かれた國家の祖先及び功勞者に對する崇敬であるべきもので、この意味からすれば、何何なる宗教を信ずるものでも日本國民として神社崇敬に關して何等の異議を挾む理由がないのである。勿論、佛教或は基督教の如き外來の宗教にも夫々一定の形式によつて祖先を祭祀することが行はれ、又その行はるゝことが單に妨げないといふばかりではなく吾が國體からいつて極めて望ましいことであるが、これをたゞ一片の信仰問題よりすれば之等の宗教の信者に祖先崇拜を强制することは出來ないことになる。さりとて祖先の祭祀を彼等の爲すがまゝに任ずれば、或は之等の宗教が吾が國獨特の國體の中に生成したものでないがため、或は未だ完全に日本の環境に順應してゐないがため、或は布教者（特に宣教師）等が吾が國に於ける祖先崇拜の問題の世界無比な特質を辨へないがため、總て地に墮して了ひはせぬかと心配せらるゝのである。然らば日本の國土に生成せる神道を奬勵してこれを吾が國の國教とし、神社崇敬をば單なる崇敬に止まらずして佛教の寺院や基督教の會堂に於ける禮拜儀式と同列同種のものとして了はむとすれば、一方外交上にも多少の支障を生ずることにもなり、他方神道の歸依者以外の人々に神社崇敬を强ゆるは吾が國憲法第二十八條に保證せられてゐる信教の自由を無視することにもなる。而して神道そのものをば宗教として檢察する時に、成程日本に生成したゞけあつて日本の祖先崇拜の觀念とは如何にも親密なる關係こそあれ、その他の寧ろ一層根本的の宗教問題に對しては佛教と基督教とに比して之等よりも優つた理合と解決とを現代の日本人に提供してゐない。私は外人宣教師等の持つて來た所謂宗教學といつたやうなものを難有がつて、神道は宗教として一段下等なものだなどとは決して言はないつもりであるが、神道が現今の日本に於いて宗教としての權威を殆んど全く失墜してゐることの極めて具體的な事實を認めざるを得ないのである。そこで當局者は祖先崇拜の保存を神道の信仰行爲としての神社祭祀に待つことも出來なかつた。これは當局者にとつては、確かに一つの苦しいディレンマであつたに相違ない。更に當時に於ける四圍の事情を察するに、祖先崇拜には寧ろ便宜であつた封建制度は既に明治盛代の立憲君主制によつてとつて代られてゐたし、個性尊重の思想は時に祖先崇拜の必須條件たる家族制度の基礎を搖がさうとする氣勢を示してゐたし、又漸く勃興して來た産業の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

發展が多年農業に従事して祖先繼承の郷土に定著してゐた人々をして轉々移動して已まない都會生活に走らしめてゐたし、凡ゆる點より觀て祖先崇拜をば在來の古い形式で存續することは至難であつた。この時に當つて當局者が神社と宗教即ち神道とを區別して、その上で神社崇拜の形式の下に祖先崇拜の持續を謀つたことは、而してこれをば日本國民の宗教より自由な道徳的訓練として永くに存立し得るやうにしたことは、確かに、一大卓見である。

問題は果して當局者がこの卓見に徹底してゐるや否やにある。

三

當局者が如上の卓見に出でて、神社と宗教とを區別した時に、兩面より手酷い批難を受けた。則ち、一面には大學教授の面々及び神道の教職等を敵として廻し、他の一面には佛教徒殊に基督教徒を引受けなければならないことになつた。

大學教授等は主として學究の上から、神道教職等は主として實際の上から當局者の見解に反對した。筧克彦博士の如きは神社崇敬は皇國の國教で、吾が國に於ては絕對的存立を保つべきものであつて、憲法第二十八條は吾が國教の寬容性を示すに過ぎざるものなる故に、佛教や基督教は勿論のこと神道の十三派すら神社崇敬を妨げぬ範圍内に於いてのみ共存對立し得る自由が許されてゐるのだといつたやうな却つて顚倒的な論を吐かれたことがあるやうに記憶してゐる。井上哲次郎博士は神社崇敬に祈禱供物その他宗教的意味を豐かに有つてゐる儀式の伴ふことを指摘して、學問上から確實に宗教の要素を具備してゐるといふことゝ、更に神社崇敬が佛教や基督教の如く世界的人類的の宗教ではなけれども民族的宗教であつて、大和民族の形體的存亡は兎に角として少くとも精神的存亡は一にこの神社崇敬てふ神道の存亡に懸つてゐるといふことゝから、神社崇敬を神道と區別する當局者を不合理だと言つてゐる。又東京帝大に宗教學講座を擔任してゐる加藤玄智博士の所見に徴するに、彼も亦神社崇敬はアリアン人種の宗教の如く神人同型教で立派に宗教をなしてゐると視て、若し日本人の神は人間であるが故に神社崇敬は宗教でないといふならば、見性成佛の禪も即身成佛の眞言も人が本位であるから宗教でないといふことになると言つてゐる。そして或る基督教の雜誌記者が嘗て彼に向つて「政教の紛爭を避けて國家の治平を重んずる政策としてみれば、政府が神社崇敬を宗教の範圍外に置くは頗る賢くして且安全たる方法であるかも知れぬけれども、神社崇敬といふことが、よし

宗教としては幼稚なるにもせよ、不充分なるにもせよ、既に宗教なる資質を有してゐるものを、只行政上の取扱の都合で、それを宗教でないと見做すといふ如き極めて不合理にして極めて不徹底なることが、果して今後の人心を滿足せしむるに足るでありませうか、私には如何にも覺束なく思はれます」と問うたる時に、彼は「それが政治家の一般普通のやう方であるやうです」と簡單に答へてゐる。加藤博士のこの言葉の中には正面から當局者の態度を批難してゐるところは少しも見えないけれども、如何にも政治家といふものが學者の證言を無視して手前勝手なことをするものだといつたやうな一種冷笑の意味が含まれてゐるやうに思はれる。

大學教授等の私の所謂「當局者の一大卓見」に對する批難と冷笑とは先づかくの如きものであるが、彼等が在來の神社崇敬を目して宗教だとするところに私は勿論異議がない。然しながら若し彼等がこれを以て當局者の唱道する神社崇敬に反對せむとするならば、彼等が餘りに學究に沒頭して經世家の眞意を察し得ない愚を指摘せざるを得ないのである。當局者の慮るところは、私が本論の前項に於て說明した通りに、吾が國體に密接の關係ある祖先崇拜をば既に封建制度なく、過去の宗教の權威なく、自尊主義の跳梁のために家族制度の基礎將さに動搖せむとし、産業の發達が農村の荒廢を來さむとする新日本の新環境の中に存續せしめむとするに當つて、その當然取らなければならぬ神社崇敬である。則ち、在來の(宗教的)神社崇拜を道德的に醇化したもの、即ち、將來の(道德的)神社崇敬である。而して今はその過渡時代である。されば在來のものを以て將來のものを律せむとする人々は、餘りに時代の變遷に盲目にして、經世家の抱負に同情を缺けるものと謂はなければならぬ。

他方、佛教徒及び基督教徒の當局者に反對するところを見るに、彼等も亦右に例證した大學教授等と同じ誤謬に陷つてゐる。明治四十四年九月内務省は府縣知事郡市長を經て全國小學校に對し、自今小學兒童をして氏神祭禮の時には必ず神社に參拜せしむべき趣意を訓示したのであるが、當局者の教育上奬勵する神社崇敬は在來のものではなくて、將來のものである。然るに佛教徒及び基督教徒が恰も當局者が信教自由の保證を無視して小學兒童に神道宗教の信仰を强制するかの如くに憤るは聊か彼等の利己主義的なることゝ經世家に對する同情を缺けることゝを裏切るものではなからうか。

然らば當局者には何等の缺點なきかといふに、決してさうではない。彼等には、彼等が神社崇敬と宗教とを明かに區別したる卓見をば教育上現實に徹底せしむることの出來なかつたところに、大なる失錯と大なる遺憾とがある。

四

文部内務の當局者が神社問題に關して實に經世家として天地に恥ぢざる卓見を有ちながら、併もこれを實現することの出來ないのは、第一に、彼等が未だ神社そのものに關する研究に於

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て徹底してゐないためである。茲に私は水野内相が神社を公共營造物と見做してゐることを指摘して置いたが、勿論その通りである。けれども吾人は神社といふ神社には所謂神體なるものが奉安せられてあることを忘れてはならぬ。然るに當局者はこの大切な神體の研究を怠つて、神社には單に吾が國古來の帝王及び國家に對する勳功者の靈が奉祀せられてゐるに過ぎない位な極めて無批判的な解釋を下してゐる。

　神社の神體に關しては、松本文三郎博士が彼の編著を傾けてこれを六種類に分つてゐる。第一種は皇祖天照大神を奉ずる伊勢神宮や神武天皇を祀る橿原神宮を始め其他の天皇の靈を奉祀する神社、及び臣下にしても國家に對して功勞ある偉人を祭る神社を含めて、何れも皆事實の如何は姑く措き理論上からいへば吾が國民はその姓氏と信仰との差異に拘らず均しく報恩反始の念を以て崇敬すべきものである。第二種は忌部氏の天太玉命神社に於ける、又物部氏の物部神社に於けるが如く、民族の祖先を祀つたもので、吾が國神社の中で最も數の多いものである。これも事實の如何は姑らく措き理論上からいへば吾人が報恩反始の念を以て崇敬出來るものであるが、たゞこの場合には奉祀せられてゐるものと崇敬者との間に多少たりとも血族關係がなければならぬのである。第三種は凡て蕃神を祀つた神社を含めて主として他國よりの移住者がその故國に於て拜み來つた神を自分達と共に新移住地に持つて來たもので、彼等の故國に於ける起原はいざ知らず吾が國に於ては全然宗教的のものである。第四種は人間に災害を齎らす惡鬼怨靈を畏れるものである。これは俗間には極めて普通に行はるゝ鬼神崇拜で、その數も可なりに多く、宗教的色彩の極めて濃厚なものである。第五種は神物の崇拜で、これも例へば鏡劍等の如きものに神妙不可思議な威力を認めてこれを神と崇むるものであるから、明かに宗教的である。第六種は森羅萬象に不可思議な偉力を認めて、これを神として拜むもので、宗教的信念の顯現たることに秋毫の疑を挾むことを許さぬものである。

　所謂八百萬の神々は右に擧げた種類の何れかに屬するものであるが、之等の中から當局者が新日本の國民に道德的訓練として要求し得る祖先崇拜の對象となり得るものは、松本博士の指摘してゐるやうに、「第一第二の神體に就いてのみであつて、第三種以下のものにあつては化身や本地垂跡抔の說を以てしなければ、其適用は甚だ困難であらう。而して斯の如き說を以てすれば、假令ひ其形は人間的であつても、矢張其本質の宗教的のものたるに於ては何等異なる所はない」のである。

　然るに當局者は神社と宗教とを區別するに當つて神社の奉祀する神體に關する批判の不徹底のために、折角の經世的卓見を持しながら、一方大學教授等からは事實を僞り且又國民の從來の感情を無視するものと叱られ、他方佛教徒及び基督教徒殊に外國宣教師等からは密かに儼然たる國教を樹立せしむるのみならずこれを小學兒童に強ゆるからには帝國憲法によつて立派に保證せられたる信教の自由を無視するものとして憤られるので

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある。

五

次に當局者は單に思案の上に於て徹底するのみならず、この徹底を實行の上に持ち來さねばならぬ。硝子瓶に急に熱湯を注げば破れる例もあるからして、私は敢て革命的にとはいはぬが、當局者が實行に徹底する第一歩として、微温的にでもよいから、先づ着々と神社の宮司と神道の教職とを別々の人を以て區別して貰ひたいのである。この區別がないために、隨分到る處に異様な現象が出て來て、當局者の卓見が民間に徹底するのを妨げてゐる。例へば、曾て柳田國男氏が「神道私見」と題する丁酉倫理會の講演で、「或神社の神官が最も强い敬神の念を懷いて、其結果神の威光を增し廣く氏子以外にも參詣を勸め得たと致します、其場合には彼等の平凡以上の行動だけは理論上文部大臣が所管しなければならぬことになります。而も是は決して空な想像ではないので、出雲大社にお出でになると分りますが、此神社を挾んで千家北島の兩男爵家が、一方は大社教會一方は出雲教會と云ふ名前で、あの狹い杵築の地に神道の二派を立てゝ居りまして、一方の千家氏は兼て宮司を勤めて居られる。即ち宮司の身分を以て一の神道教會の頭をして居られるのであります。併し學問のある人ならば、其區別を了解しませうが、日々參拜する地方人は、午前十一時までが神社の崇拜、十一時以後は神道の宗教行爲に入ると云ふやうに、果して、辨別してゐることが出來ませうか」と指摘したやうに、こんなことは日本全國隨所に目撃せらるゝことである。

而してこれあるがために、當局者が神社と神道とを區別して、吾が國體と國民生活とに密接の關係ある祖先崇拜をば信仰の異同を問はず凡ての日本國民に神社崇敬てふ道德的訓練の下に存續せしめむとする卓見が一般に具體的に知れ亘らないのである。故に、私は當局者がこの際第一種と二種との神社をば第三種以下のものと判然區別し、その無格社以上の一切の神社に神道の教師とは別人なる宮司を任命して、教育上小學兒童に報恩反始の道德思想を涵養する意味の神社崇敬を之等の神社に限らしむることを焦眉の急務とせらるるやう冀望して已まぬものである。然るに當局者が神社局を內務省に保留して宗教局を文部省に移管したることをもつて、恰も神社問題を解決したかの如く心得てゐらるゝは餘りに呑氣といへば呑氣な沙汰ではないか。

私はこの他に猶當局者が神社崇敬の儀典、最高學府に古典に關する講座設置問題、神社合併に伴ふ問題等の實際問題にも彼等の卓見を徹底してほしいのであるが、これは何れ筆を改め論じて彼等の反省を促す機會を捉へ得るであらう。今はたゞ水野內相が新たに神社調査會を組織してその會長に就任したのを好機とし彼が吾が國行政上及び風教上極めて重要なるこの神社問題に對して、百尺竿頭更に一歩を進めて大いに徹底せられむことを冀望して筆を擱くことにする。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

暴行・脅迫・強請等に對する當局の取締の緩怠を難ず

公營的強制の責任の反省と充實

杉森孝次郎

國家は、すくなくともその國民との關係に於いては、理性的意思の存在及び發動以下のものであつてはならん。國民に對して、國家よりも公正たるものがあるならば、それは、その國家のただちに進取すべき自身の理想形、當然態でなくてはならん。國家は、それが道德的存在權を有する限り、完全に社會化されたる制度であることを本質的必要事とする。社會的國家が、國家の唯一の是認せらるべき存在可能だ。

現存の國家は、それの外的關係に於いては民族的利己主義だ。及び富强民族、富强國民の專制だ。民族自決主義、國民主義、帝國主義は、かくしてみな多少不公正だ。かれらは、いづれもそれの外的關係に於いて十分に社會化されてゐない。

現存の國家は、しかしながら、それの內的關係に於いても、なほ頗る不完全に社會化されてゐる。いはゆる特權階級、またいはば富强階級の國內に於ける專制がそれの一證據だ。國內的にも、國際的にも、すなはち、內的にも、外的にも、國家の動機、意思、目的は、純乎として純に公であり、正であり、いひかへるならば社會善的であるべきだから、現存の國家の民族的及び階級的利己主義は、眞の國家理想に於けるそれだけの不純素だ

現存の國家を、それの外的關係に於いて十分に公化し、社會化する努力は、單なる約束としてすらも未實現だ。現存の國家にむかつて、それの外的關係に於いて、十分に公的であり、社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

會的であることを期待し、希望しうる前に、現代人としては現存の國家の原則を、それの外的關係の部分について、先づ相當に立法的に改造する必要がある。

けれども、現存の國家も、それの内的關係に於いては、それの外的關係に於けるに比しては、公的、社會的立ち場を自認し且つ標榜してゐる。現存の國家にむかつて、飽くまで國民の全體の眞の幸福と利益を目的とする公正意思を純粹にし、完全にすべきことを要求する條件は、現代人によつてすでに比較的に所有されてゐる。それゆゑに國家の立法及び行政が、いくらかたりとも階級的、私黨的、個人的であるならば、國家の神聖は、それだけ侵犯されたことになる。

國家が國家としての信用と威嚴を保つことは、國家が國家としての職責を果たしつつある内實の現象として等閑に附すべからざる事柄だ。國家は、國民の眞實の意思を委託されて、それを代表して、立法し、行政するものにほかならざるべきがゆゑに、そして、司法や警察も、固とよりその範圍内に屬するがゆゑに、國民と、それの保護制度としての國家とを、司法や警察の當局者は、科學者が對象を科學者としての良心にもとづいて純客觀的に、超私已的に扱ふが如くに、國家吏員としての良心にもとづいて、純公至正に扱ふ意思を常に反省して健全に保持すべきだ。

國内に私刑の現實及び餘地が多少たりとも存在するならば、國家の見地からは、それは國家の不行屆を意味する。もしも國家が、國内の私刑的行動に對して、國法が示す純理性に終始せず、多少の階級的、黨派的、私已的動機をまじへて或ひは問不問をわかち、或ひは問内に於ける寛嚴を異にする現實及び可能を有するならば、それは國家意思の十分に正しからず、强からざることを意味する。國家を呪咀し、有害視するすべての場合は、それが國内の現象である限り、不合理的意思以外のなにものでもあるべきでない。國内に於ける合理的意思が、その國家を呪咀せざるをえざる場合があるとするならば、反省、改過の責任は國家の方にある。

國法も、官吏も、前者も人爲であるといふだけの單純なる理由によつてさへも、また後者も人であるといふだけの同じく單純なる理由によつてさへも、常に多少不完全であり、常に多少過誤と謬錯を犯す可能あるをまぬかれない。國法を立つる當局者も、國法を行ふ當局者も、それゆゑに、國法よりも、官吏よりも一層基礎的な人格的及び社會的眞必要に絶えず成るたけ十分なる注意を拂ひ、國法に對する進歩と善用の最高可能を盡す根本意思を明確に持つことが肝要だ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

制度の上に多少根本的な反省と、批判と、したがつて相當の改造と廢棄及び創設とが切實な人格的及び社會的必要とされる折り〱に臨んでは、國家は保守すなはち現狀維持に傾き、國內に於ける進步的勢力は國家によつて保護される性質よりも、迫害される性質を代表的に感覺し、意識するといふ悲劇が古來繰り返へされた。現代は、疑ふ餘地もなくその一活例だ。國家とはなにかといふ一問が、かくの如き時代に於いては、官吏及び爾餘の民衆によつて、すなはち國民の各員と全體とによつてまじめに提起され、そして研究され、思索され、解答される必要がある。國家は國民中の資本家階級、世襲的特權階級の延長であると同時に保護機關であり、無產勞働階級にとつては多少敵であるといふ理解と知識が妥當性を帶んで成り立つ餘地がすこしでもある限り、國法を立て、また行ふかたちに於いての、それの直接責任者は、爾餘の民衆と共に、或る意味に於いては爾餘の民衆以上に、良心の不安と、その不安の積極的救除とに勇氣と努力をおしんではならん。

いはゆる左傾といはゆる右傾とが、動機に於いて純眞に公的であり、道德的であるならば、殘る困難は見解の差だけだ。國家及び國家官吏は、動機に於いて十分に公的であることを要することはいふまでもないが、見解に於いて標準的眞理の把持

者、追求者たる責任を自覺しなくてはいかん。

暴力、脅迫、強請等の各種行動に對する官憲の意思と能力と成績が、現在よりも公正と聰明と周到と確實と、それから制度とに於いて、はるかに增すべき餘地が考へられる。公刑の眞意と實力が完全にされるにしたがつて、私刑的行動は或ひは提僻し、或ひは無用にされ、要するに發現の可能と機會を失ない且つ掃はれる。

もしも官憲が、相爭ふ國內の兩勢力に對して公正に審判し、制裁せず、みだりに一方に加勢し、友援するならば、ついには他方も暴力を準備する必要に目ざめる可能がある。右傾的思想と左傾的思想との對抗が、同時に右傾的暴力と左傾的暴力との對抗と化さば、動機と觀念に於いて十分に國家的でない國家よりも、國內に於ける平和の維持といふ目的をば、その力の釣合の方が却つて好成績に達しうるだらう。つまり、十分に正しくない、また十分に强くない警察に信賴する廢刀制よりは、帶刀制の方がまだましだといふ可能があるのだ。廢刀令を布いた以上は、中央の制裁力は飽くまで公正周到でなくてはいかん。國內に於ける個人際及び團體際に私營軍備を必要とする制度は、これを不必要とする制度に比して明確に野蠻だが、その代はり、その進步した制度は、實に於いて遺憾なく徹底しなくては、時

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あつてか、社會民衆の迷惑この上もない。

暴力の流行と社會病理

長谷川如是閑

今日頻りに言ひ囃されてゐる暴力の流行といふことに就いては、先づ第一に考へなければならないことは、果して暴力の支配が一般の感じてゐるほど、今日その極點に達してゐるかどうかといふことである。ヒポコンデリイ患者は、自分で病氣を捏造して、それがかなり重態に陷つてゐるとさへ考へる。少くとも些しの病氣を過敏に感じて、非常に重い病人のやうに感ずる。社會にも亦さういふことが有り得る。現代社會が暴力の横行について懐いてゐる感じは、幾分このヒポコンデリイに類するものがあるやうに思はれる。

　然しそれは全然捏造された自覺症ではなく、確かに或る程度まで暴力の跋扈がある。ただそれを心理的に過度に鋭敏に感ずることが稍々病的なのである。故に暴力の問題は所謂社會病理學的に觀察すると　二つの缺陷を見出すのである。一つは暴力そのものの存在で、他の一つは暴力に對する病的恐怖である。ヒポコンデリイに於いて、實際の病氣と、それを過度に感ずるといふ二つの事情があるのと同じである。暴力は、然しながら必ずしもそれだけで病的現象とは云はれない。今日問題となつてゐる暴力が、どういふ意味で正常（ノーマル）の狀態を失つたものであるかは研究を要する。それは暴力が社會生活の上でどれだけ有力に一般の組織に影響してをるか、而かもその組織が果して人間的生活の生存條件と如何に背馳してゐるかといふことによつて定まる。今日行はれてゐる暴力は、その意味でどれだけ生活の條件を脅かしてゐるかといふことは、尙ほ研究を要するが、然し私一個の考では、歷史の他の時代と比較して、さう暴力が生活に食ひ込んでゐるとは思はれない。成程日々の新聞紙には盛んに我邦に於ける暴力の跋扈が誌るされてをり、外國でもイタ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

リイの政府は暴力團によつて占領された。更に最近ブルガリアの政府は、同じく暴力で占領された。支那の大統領は暴力によつて逐はれてしまつた。さういふ事件の頻發に對して、尙ほ暴力が働いてゐることを否定する譯には行かない。然しながら、かやうな暴力の現れに就いては、それが如何に深く生活に食ひ込んでゐるかどうかといふこと、並びに暴力がさういふ風に働き出したことが果して歷史的に暴力時代として傳へられてゐる時代に比して暴力的であるかどうかといふことを考へて見なければならない。

便宜上、右の第二の場合から考へて見る。今日の暴力の現れは、これを社會全體の健全狀態から考へて見ると、實は反對に過去の暴力時代に比して、社會が健全性を增してゐることを示してゐるのである。詳しく云へば、暴力的強制が甚だしい混亂を惹き起さずに、一定の支配を構成するといふことは、實は全社會の上からは健全性の增してゐるとを證據立てるのである。例へばイタリイの例でも、暴力團が殆ど血を流さずに政府を乘取るといふやうなことが出來たのは、寧ろ暴力そのものよりはもつと有機的な働きが同時に働いてゐたとを示すのであつて、社會がもつと暴力的な時代であつたならば、フアシスチの暴力に對して他の暴力が働いて、そこに大混亂が起らなければならない。それは即ちイタリイのあの政治的變化は暴力的であつたが、そこにあゝいふ變化を起す有機的作用が働いてゐたことを思はせるのである。更に考察すると、暴力の形式が物理的より有機的になつたといふことは、そこに社會的健全性が增したといふことを示すのである。これは小さい社會的集團に於いて、暴力の支配が次第に平和的となつてゐることと關聯して考へることが出來る。腕力家もさういふ集團に於いては、何か腕力以外の、もつと有機的な力を作はなければ全く無力である。柔道三段の男は皆政友會の陣笠であつて、決して有力者ではない。彼は物理的な力の外に、集團を支配する有機的な作用を使用する能力を有つてゐないからである、今日の暴力はこの有機的の作用を作はなければものにならないといふところで、過去の歷史の暴力に比して、內容上進化した暴力なのである。ムツソリニも昔の蠻族が文明國を襲つたやうな具合にイタリイを征服した譯ではない。この意味に於いて今日の暴力の支配は、地震や雷のやうな恐怖すべき物理力ではないのである。さういふ恐怖はもはや恐怖するに足らないことになつた。暗殺その他の暴行も、つひ二三十年前に比すれば、決して今日を流行的であるとは云はれない。ロシアの恐怖政治と雖も、事實は昔の革命の度毎に行はれたそれに比べて甚だしいかどうか分らない。これも

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

過度の敏感から來た恐怖である。

現在日本に行はれてゐる暴力的傾向といふものも、過去の暴力時代のそれに比して――暴力時代でなくとも、今日に似た動搖時代のそれに比して、さう劇烈であるかどうかは研究を要する。小作爭議でも、德川時代のそれのやうな、又維新當時のそれのやうな暴力にまで發展したものはない。ただ通信機關の發達の爲めに、迅速にそれが蔓延することと米騷動の如きがある。而かも大部分は威嚇的で、財物に對する外に人民同志の鬪ひは次第に減退してゐる。

市民間に於ける暴力の流行は、階級的權力が高壓的になれば必ずそれに應じ、又はそれに反抗して起る現象であつて、結局その權力の崩壞と一緒に消滅する性質のものである。いづれにしても權力の高壓が烈しくなつたといふことが現代的特徵であるとすれば、右のやうな暴力の橫行は、それに附隨する現象として當然起り得るのである。資本主義の自由主義的放任時代が經過して、權力的高壓が資本主義的組織の維持に必然の手段であるといふことになれば、そのこと自體が、暴力を市民的生活の上に導き入れるのである。

然かしこの暴力が有力である程度は、昔ほどではなく、ただそれが有機的の智力と結び付いた場合に、より有力で有り得ることは前述の通りである。而かもそれを恐怖することが、昔に比べて一層であるのは、即ち第二に研究すべき點で、そこにヒポコンデリイ的症候があるのである。それは社會的に感覺が過敏になつてゐることと伴ふのであつて、個人で云へば一種の神經衰弱である。今日の社會的神經衰弱は、既に指摘されてゐる通りに、人間が自分自身の創り出した文明組織の爲めに壓迫され丁度黃金の兜で頭を締められて頭痛を起してゐるのと同じである。暴力を過度に恐れるのは一つの錯覺であつて、文明人が彼の頭の中に作つた世界に於ける暴力の芝居を、自分で恐れてゐるのである。無論それは全然根據のない妄想ではなく、前言つたやうに、暴力の橫行が現代的特徵である事情は存在してゐるのである。然しそれが徹底的に生活の組織の根柢に干與してゐるか何うかは問題である。言ひ換へれば、現在の日本の生活の秩序が如何なる程度まで暴力に根柢した制度の上に立つてゐるかを考へなければならない。暴力が如何に橫行しても、それが組織そのものゝ上に何れだけ働き出されてゐるかといふことを觀察すると、決して根本的の力にはなつてゐない。それにも拘らずこれを過度に感ずるに於いては、二つの理由がある。一つは近代の生活が軍國的暴力時代から產業的平和時代に移つて、少くとも國內的生活の理想は、亂暴な武力より平和な生產に轉じたの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

である。この近代生活の特徴の上に立つた社會は、それ故に、前の時代が生活の基本を武力による掠奪に置いたに反し、生活の互ひの利益の上に置いたものであるから、平和な交渉が所謂生活の一般感情を造り上げる。この狀態の下に於いては、僅かの暴力が非常に反社會的であるといふ感じを起させる。刀をぶら下げて歩くことさへが、殺人に關する恐怖を喚び起させる。厳めしい言語擧動がそれだけで平和を害する如く感じられる。肩を怒らし、肘を張るといふことが何もせずに暴力的に受取られる。かういふ生活情調の上に生きてをる人々は、次第に權力的となつた資本主義の支配が、昔の權力政治に於けると同じやうな暴力を誘發せしめたことに對して、非常の恐怖を感ずるのは當然である。

今一つの理由は全く病的のそれであつて、大規模な資本主義の産業、それに伴ふ大規模の政治組織、並びにその次第に生活の現實を離れた文化組織……さういふ現代的諸現象は、次第に人間を生理的並びに心理的頽廢に導いて、感覺の正常狀態を失はしめた。その病的狀態は藝術に現はれ、哲學に現はれ、迷信的宗教に現はれ、殊に露骨に新聞紙に現はれる。それは寧ろ一種の創造の世界であつて、野蠻人の偶像と同じく象徴主義の産物である。その恐しい怪異的な象徴を彼自身造り出して、彼自身それに怯える。今日の社會に於いて、例へば資本家が一方で暴力を有力なものと感じて、それを使用しようとし、他方でそれに恐怖するといふのが即ちそれである。これは一種の病理的現象である。

かういふ傾向に對して權力者がどういふ態度に出るかといふことは想像するに難くない。前言つた如く、現代の暴力は資本主義の高壓的權力の作用と相應じて起つたものであつて、その資本主義的權力は政府の權力の背後の動力を爲し、國家權力の背景を爲すものである。時の政府は、それ故に、必ず或る點でこの權力の産み出した暴力と親族關係を有つ。故に有力な暴力團が政府の有力者と互に連絡を保つといふことになる。國粹會にしろ大和民勞會にしろ、それぞれ現代の權力の本質的のものと連絡を保つてゐるので、有力に成立つのである。同時にかやうな權力に反抗する暴力團が起り得るのは、要するに高壓的權力に誘發されたのであつて、大名旗下の町人に對する高壓に對し、幡隨院長兵衞などといふ町奴の類が起つたのと同じである。ただ現代的特徴として前に見ることの出來なかつた性質は、支配者の高壓權力が何時も所謂少數者の暴力であるに對し、現代の反抗的暴力は多數的である。幡隨院長兵衞は單數でな

く、複數となつた。そこには個人的英雄はなく、ただ集團の力だけがある。而もこの多數の力は、實は本來からの暴力ではなく、もともと平和な社會的集團である。これを權力者が暴力と感ずるのは彼等が時々騷擾を起すからではなく、實は平和の集團そのものを暴力と感ずるのである。集まることとそのことが權力者に取つて暴力である。權力者はこの集團に對する恐怖の爲めにイリウジョンを造つてゐるのである。「多數集合し」といふことが德川時代の一揆の罪狀の一つになつてゐるが、多數の集合そのことは權力者に取つて暴力以上の恐怖なのである。而してこれを暴力視するところから、多數者の實際の暴力が誘發されるのである。事實上多數者が暴力化する時は、權力者が多數の集合を暴力視して、これを取扱ふことに原因しない場合は少い。言ひ換へれば權力者が自分に對抗する社會的勢力を自己に對する暴力と看做すか又は暴力以上にそれを恐怖することが、多數者を暴力に導く原因なのである。

近代國家はこの多數の集合を有機的に調節することを發明した國家である。議會制度並びに集會結社の自由は即ちこの新發明の機關である。それは實に近代の產業的自由主義の產んだ組織である。然るにこの自由主義の資本主義組織が、高壓的權力を必要とするに至つて方向は逆轉して、多數者の有機的調節即ち社會的勢力は、權力者に取つて危險となつた。そこで彼等は議會を無力にし、集會結社を壓迫するに至つた。既に多數者か有機的に調節される機能をさういふ風に壓迫するならば、そこに暴力が代つて起るのは當然である。

かう觀察して來ると、現代の權力によつては暴力が征服されるどころか、現代の權力は寧ろ暴力と結び付くことを自然の狀態とし、同時にそれに對する反抗的暴力を誘發してゐるのである。人はよく警察の無力を訴へる。然し警察は畢竟時代の權力に對し盲目的態度を取るより外仕方のない機關であつて、時代の高壓的權力が產み出した力に對しては、それが暴力であらうと、學問であらうと、手品であらうと、魔法であらうと、それに干涉する力はない。故に今日の組織に於ける警察を責めても仕方がない。若し警察をしてもつと社會的生活の理想の上で働かせようとするならば、その組織を極端に自治的のものとするより仕方がない。そして出來るだけそれを日常生活以外の勢力――政府、政黨、組合等の勢力――から引離すのである。然し日本の自治團が今日のやうな有樣では、その自治團とさへ引離すことにしなければなるまい。それよりも困ることは、各國の政府が皆警察を人民自身の生活の上の機關と考へないで、國家

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

的生活、政治的生活乃至資本主義的生活の擁護機關と考へて、決して自分の手から引き離されることを肯んじないことである。暴力に對して警察を有力に働かせやうとするならば、警察がさういふ傳統的地位を固執することを必ず打ち破らなければならない。

日本の警察はまだ比較的他の勢力に動かされてゐない方であらう。十分に自治的ではないが、官僚的であるといふことが、或る意味では政黨や商人の手から警察を引離してゐる。然しそれも程度の問題で、事實はだんだん先進資本主義國のそれのやうに、背後の勢力が漠然たる官僚といふものよりも、もつと現代的な力となれば、やはり現代的權力に敵對する譯に行かなくなる。

現代の暴力は要する現代的權力が社會的自然の基礎を失つて階級的高壓の上に置かれた結果であるとすれば、この狀態は恐らく何等かの社會的進化を經るに非ざれば、改められないものであらう。故にそれに對する努力が肝要であると同時に、現狀に於いては月並ながら高壓的權力をもつと市民道徳の基礎の上に働かせるやうに市民の輿論を喚び起すより仕方がない。正義が看板である時代には、もつと正義らしい正義を主張することがかなり看板を掲げてゐるものを動かすに足りる。讀書子の輿論が支那の軍閥を右に向け左に向けてゐるやうに、市民的正義が現狀を右に向け左に向ける範圍内に於いて糊塗してゐなければならないのが我國の現狀である。その意味で暴力をもつと階級的勢力の利用から遠ざけ、社會的生活の道徳で壓迫するやうに法令の改正を促すといふやうな具體的手段が攻究されなければならない。然し徹底的には高壓的權力に依頼するを得るに至つた資本主義組織の何等かの變化が、初めてもつと平和な世界を持ち來し得るであらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國家的「力」の發現を公平ならしめよ

安部磯雄

近頃になつて大分いろ〳〵な方面に於て暴力を用ひる事件が起つた。最近には早稲田の軍事研究團と文化同盟との間に種々な誤解を生じ、其結果學校の内部ばかりでなく、外部からも或一部の者が暴力に訴へるやうな事をした。又それに引續いて社會主義者の一團が赤化防止團の米村辯護士を襲ふて、其處にも多少の暴力沙汰が行はれ、遂に其一人なる社會主義者がピストルで打たれた。其次に起つたのは東洋大學の紛擾で數十名の學生が暴行をして學長及び幹事を毆つたといふやうな事があり、少し古い所では國粹會と水平社との對立が遂に或程度迄暴行に陷つた事は當時奈良縣下にあつた事實として猶世人の記憶に新なる所である。斯くの如き暴力事件が最近に於て連續的に起つた事は我々の深く考へて見なければならない所であると思ふ。

今の處ではそれ程大事件とは云へぬが今後に於ける日本の警察力が暴力事件に對して如何なる態度を執るかといふことはかなり重要なる問題である。若し警察力が全然暴力を禁ずる態度を執れば今云つたやうな暴力事件は次第に少くなつて、我々がそれがために心配をする必要もなくなるに違ひない。勿論國家の警察力を以てするならば今述べた程度の暴力を取締ることは困難ではない。若し警察力で足りなければ兵力を以てしても出來ることであるから、政府の態度如何に依つては暴力といふ事はさほど問題とする事柄ではないのである。併しながら今日までの警察の態度を見ると何處か甚だ煮え切らない點があるやうに思はれる。暴力を取締ることは議論のない所であつて、其處に反對意見はない筈であるのに、どういふ譯か日本の警察の之れに對する態度がキビ〳〵して居ないやうに感ぜられる。或場合には警察力の活動が甚だ緩慢で、時には傍觀的態度を執るやうなことすらもあるやうである。で、或人は斯ういふ疑問を抱くやうになる。それは或場合に限つて警察が故意に傍觀的態度を執るのではないか、寧ろ暴力などを用ひて或一派、即ち社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

會主義者などに對して亂暴な取扱ひをする者があつたと警察は痛快に感じて居るのではないかといふことである。若し斯ういふ事實が實際にありとすれば國家のためにも社會のためにも甚だ遺憾とする所であるが、此點に鑑みても今後の日本の警察力はもつと敏活に働くべきであつて、平常警察が餘り好い感じを持たぬ社會主義者であらうが、或は又反動的團體であらうが、一度暴力を用ゐた場合には、そこに何等の區別なく、速かに彼等を懲罰する態度に出でなければならない。若し警察が一方の團體に對して嚴重であり、他の團體に寛大であれば今後に於ては暴力は一層盛んに行はれることになる。今日では二大思想の潮流が國民の間を貫いてゐて、一方には社會主義の思潮の流れを汲む者があり、他方には反動思想の潮流に投ずる者があつて、早稻田大學の事件ありて以來反動的思想を有して居る者は國民軍事研究團といふものを組織して社會主義の思想に對抗しやうとしてゐる。此社會主義の思想と反動的思想とが單に思想として兩立してゐるといふ丈けのことであるならば別に大した問題ではないが、若し其中の一方が暴力を利用して幾分でも成功したといふことになれば、其結果はどうなるかといふことは深く考慮しなければならない點である。暴力は或意味に於て際限がない。一方が暴力に訴へて反對黨を屈服せしめたとしてもそれは一時的の征服に過ぎない。壓迫された團體は必ず又對抗策を考へるやうになる。暴力とは決して腕つ節の强いといふ丈けのことではなく、それは單に暴力の最初に現れる形式であつてさういふ場合には腕力の强いといふことが有利であるが、然し暴力は常に其處に止まらぬ。若し一方がピストルといふ武器を用ひることになれば腕力は最早頼みとするに足らないのであつて、今双方がさういふ武器を以て爭ふことになれば結局命知らずの人間の多い方が勝ちを制することになる。で、此事實に依つて見ても、或手段に依つて暴力を以て反對黨を壓迫し得ると考へるのは一つの夢に過ぎないのであつて、其結果は必ず恐るべきものとなるに相違ない。

議論は議論と爭ふのが正しいのであるが、思想も思想と相鬪ふべきであるならば、其處にいろ〳〵な思想の現れて來るのは喜ぶべきことでなければならない。何故なれば社會の進歩はさういふ種々な思想の爭ひの中から生れるものだからである。然るに暴力からは社會の進歩は生れない。暴力は其性質として際限がないから一方が負ければ必ず復讐の手段を考へるやうになる。若し軍事研究團の方で在郷軍人の團體を利用することにすれば、社會主義者の方にも亦暴力團がそれを援助することにならぬとも限らぬ。今日では勞働階級は其思想に於て社會主義に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

傾いて居るが、反對派が暴力で來るならば敢て相手たるを辭せぬ覺悟を持つて居る者もあり、殊に勞働者の中でも鑛山などに働く者は最も激烈なる思想を有ち、又何時でも自分の命を投げ出して戰ふ丈けの考があるから、假りに反動派が一時彼等を屈服し得ても結局に於て彼等の復讐は免れることは出來ない。

今反動思想家が國粹會と提携して彼等の腕力に依頼する考があるならば、今日の形勢から見て水平社の大多數は勞働階級と一種の聯盟を形造ることになりはしないか。水平社の運動と勞働運動との間に段々接近する機會の生じて來たことは見逃すべからさる事實である。勞働階級も水平社も孰れも虐げられたる階級であることに於て共通點があるが、其點に於て兩者の間には互に同情がある。これは斷言は出來ないけれども勞働階級と水平社の運動は將來一つになり、更に之れも虐げられたる階級といふ意味から朝鮮人なども此聯盟の中に加入することになれば問題は一層重大である。此七月の四日に京都で勞働總同盟の演説會が開かれたが、それは官憲が暴力を用ひることを糺彈する意味の會であつたらしく、新聞の報道に依ると勞働者の集る者二千五百名、大阪方面からも水平社員三百名が應援に出向いたとのことである。斯くの如き今日の形勢に際して、萬一警察が暴力の濫用に對して傍觀者の態度で看過することあれば將來由々しき大問題を生じはしないであらうか。勿論思想の對立といふことは止むを得ざることであつて今後各國とも其國内に於ては社會主義思想と反動思想とは對立して行くことであらう。只此兩者が結局暴力に陷入ることがなければ兩者の思想の對立といふことは決して恐るべきものではなく、寧ろ思想と思想の爭に社會進化の動力があるといふ點に於て、社會主義思想と反動的思想の對立の意味もあるのであるが、然し一度之れ等の思想が暴力に陷入ることになるとそこに救ふことの出來ない爭ひが生ずる。爭ひが生ずると群集心理で兩方の黨派に屬する者が段々增えて來て騷動は簡單に治らなくなる。斯くの如き場合に暴力を見逃すことは甚だ危險であるが、警察は何時もかういふ時には最も公平なる立場に立つて、急進、保守、其孰れの團體であつても、少しでも暴力がましい行爲があつたならば假借なく處罰する態度を執るべきである。社會主義者にして暴力を用ひたり、他人の家を訪ふて不穩な態度を示したり、或は又金錢などを强請することがあつたならば警察力を以て斷乎として取締らなければならぬと同時に、其代りに又反動思想家の側で暴力を以て社會主義者を壓迫するやうなことがあれば之れ亦警察力を以て嚴重に處分しなければならない。

更に他の方面から見ると、今後政府當局者の最も恐れる所の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ものは勞働者の直接行動である。若し勞働階級の多數が暴力に訴へることになれば、遂には到底警察力では間に合はなくなつて兵力の發動を見るに至るかも知れない。勞働者の直接行動は今日世界各國に於て其主義が盛に說かれ、それを目的とする團體もあつて、此大勢の下に在つて日本だけが其影響から免れるといふことは困難であるが、事實此種の思想は何處からともなく入つて來るのである。フランスのサンヂカリズム、アメリカのI・W・Wの如きは其急先鋒である。此種の思想を抱いて居る者は時機が來れば總同盟罷業（ゼネラル、ストライキ）を行つて、一擧にして資本家制度を倒さうと計畫して居るが、併し其時機が容易に來ないとなると彼等は暴行的態度に出でる。先年彼等の一派がニューヨークの下町で、最も多く銀行家などの集る建物を爆裂彈で破壞しやうとしたことがあつた。勿論斯ういふ暴力は出來るだけ豫防しなければならないが、さういふ行爲を生んだ思想は取締ることが出來ない。外來の思想の拒絕は一層困難である。併しさういふ思想がある以上何時それが行爲となつて外に現れるかも知れないといふ危險から行爲を取締る前に先づ思想を取締る必要があると考へ、さういふ思想團體があれば行爲の起らぬ以前にそれを潰すべしと說く者がある。此點に就いては我々はもう一步進んで考へて見る必要がある。さういふ思想の由來する淵源を尋ねて、行爲の生ずる豫防策を講ずることが第一番に肝心な點であるが、さういふ淵源は何處に在るかといふに、直接行動派の人の書いた書物にも現れて居る通りに、自分等が直接行動をやるのは、其戰術は皆政府から學んだものであつて、政府がやることを應用してそのまゝにやつて居るのであるが、サボタージュや、ストライキや、其他一切の暴力は總て源を其處に發するものである、或意味から云へば資本家代表たる政府がやるから我々は復讐的にさういふ手段を執るのであるといふ彼等の言葉を聞いて、自分等のやることが勞働階級の一部にさういふ思想を與へて居るといふことに氣付いたら、政府當局者は直接行動を恐れる前に先づ政府自身としての態度に反省しなければならない筈である。それは何であるかといふに政府は力を持つて居る、即ち警察力と兵力とを有して居るのであるが、我々は其點に反對するのではなく、國家を組織する以上、警察力や兵力のあるのは當然であつて、一國の平和は之れが無ければ維持することが出來ないが、只政府の有つ力が公平正當に發動しないで、其力が勞動階級、無産階級に向けれる時は恰も暴力であるかの如き感を與へる。それが直接行動思想を誘發する原因となつて、政府もやるから我々も暴力を用ひるのだといふことになる。國家が警察力や兵力を有つことを如何なる人も不同意では

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ないが、それが總ての階級に公平正當に用ひられない所に直接行動思想なども生れるのであるから當局者は此點に注意する必要があるのである。

もう少し言葉を費して云へば、トルストイは人の知る如く絕對的無抵抗主義者であり、極端な基督教の教訓の遵奉者であつて、如何なる場合にも人に抵抗することをしなかつたが、又彼は個人であると國家であるとは問はず暴力を用ひることには極端に反對した。而も暴力を用ひること最も多きはトルストイの言葉に從へば個人よりも何よりも國家自身である。これはロシヤに生れたトルストイの痛切に感じた所であらうが、彼の著作の中の「愛(ラブ)と(エンド)暴行(ヴァイオレンス)」を讀むと彼は政府が暴力を用ひることに對して極力反對して居る。從つてトルストイの無政府主義者である所以も政府が暴力を一番除計に濫用するといふ事實に依つて見ても分るのである。此「愛(ラブ)と(エンド)暴行(ヴァイオレンス)」の書物が日本に於ても飜譯されて居るが、日本の内務省がよく其出版を許したと思はれる程トルストイは暴力を非難して居る。併しトルストイは無政府主義者ではあつたが同時に又無抵抗主義者であつたから、其間に少しの危險性もなく、其點に於て彼は特異なる無政府主義者であつた。トルストイが此書物の中に述べた言葉は隨分烈しいものであるので政府自身にとつては辯護すべき餘地もあるかも知れないが、併し暴力の問題は如何なる國の政府にとつても愼重に考慮すべき問題である。此問題に關してトルストイが感ずるやうに、勞働階級も政府が暴力を濫用するのを見て、同じ行動に出ることは差支ないといふ考から直接行動の思想が彼等に受け容れられることはあり得ることでなければならない。

勿論私は暴力に對しては絕對に反對する者であつて、それが譬へ勞働階級であつても暴力の行使は飽く迄も否認するのであるが、私が云はうとする所は勞働階級が何故にさういふ傾向をとるやうになつたかといふことであつて、原因は國家自身が省みて責任を感じなければならない所以を指摘したのである。

トルストイが警察力や兵力の要らない社會を考へるのは理想としては望ましいが其處まで到達する過程は容易ではない。國際聯盟も其理想から云へば世界各國は皆一團となつて、丁度アメリカが四十八州集つて合衆國を組織して居るやうに一大聯盟を形造り、其曉に於て各國が軍備を撤廢することでなければならないが、それは少くとも國際聯盟に加入する或者の企圖でもあり、平和主義を唱へる者の抱く理想であるに違ひない。併しながら國際聯盟が完成しても其國々に平和を保障するためには國際陸海軍の常備が必要であり、假りに陸海軍を撤廢しても少くとも警察力はなければならないのであつて、それがなければ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國と國との間に爭や紛擾が起つた場合に解決することが出來ない。で、國際聯盟には國際陸海軍があつて、各國が各自に兵力を動かして戰ふことを防ぎ、斯くして五十年、百年後にはトルストイの理想のやうに全部陸海軍を撤廢することが出來るやうになるかも知れぬが、其處に到るまでは猶軍備は必要なのである。私は理想としては極端なる平和論者であるが、實際論者としては國家に軍備や警察力の必要を認める者であつて、譬へ國際聯盟が完成しても世界平和の維持の上から國際陸海軍が備へられなければならないと考へるのであるが、たゞさういふ兵力や、警察力が存在することが好いか悪いかといふことは此場合問題ではなく、如何に兵力や、警察力が行使されるかといふことが今日の實際の問題となるのである。

最後に簡單に述べたいのは、前に私は警察力の行使は常に公平でなければならないことを述べたが、それは結局國家的「力」の發現の公平なる態度を望むことに歸着するが、其關係をもう少し明にして置きたい。國家の警察力とか兵力とかいふけれども、それは其當時の支配階級の持つ警察力や兵力であつて、國家や國民全體の外にこれらの力を動かす者が支配階級なのである。而も今日の支配階級は所謂役人ではない。形式的には政府は役人の支配であるが、何處の國でも資本家階級が支配者の地位を占めて居るのである。從つて暴力の責任は最初には警察、又は政府、次には當時の支配階級、即ち資本家階級に在ることになる。其點に於て警察や政府の責任は寧ろ輕いと云はなければならない。今日自己の階級の安全と幸福が脅かされるといふ所から、資本家階級が勞働階級や社會主義者に對して暴力を以て壓迫を加へることは間違つた態度であつて、其責任は到底回避することが出來ない。支配階級が暴力を用ひる結果は常に蹉跌に終らなければならないのであつて、劍を執る者は劍に依つて亡ぶやうに、暴力を賴む者は暴力に依つて破れることになる。支配階級は將來自己の地位を擁護するためには此點に就いてもつと深く反省しなければならないのである。

「力」を頼むの弊

文學博士　三宅雪嶺

人が道で衝き當つて喧嘩するのが珍しくなく、平生穏かな人で案外習つたり腕を振上げたりする。鬪爭の本能が教養及び習慣を破つて現はれるのである。文明は鍍金とか云ひ、厚く鍍金したのは急に剥げず、薄く鍍金したのは直ぐと地金が現はれる。何處でも悉く純金といふ程のものなく、將來にも之を見出し難いが、日本の現狀では、舊幕時代の力任かせが現はれ、寧ろ源平時代の地金が現はれやうとする。力自慢といふ事が無遠慮に現はれる。原始時代からの力自慢があり、種々の手段で之を押へ、同じ腕にも天鵞絨の手袋を嵌めたが、機會があれば之を振ひたくなり、愚闘愚闘云ふ者はどやして終へとて、自らも愉快とし、聞く者も愉快とする。打たれた者は亂暴と云ひながら、事によつて殴り返さうと試み、口で爭ふよりも、腕で爭ふのを愉快らしく思ふ。弱いので辛抱するものの、力さへあれば其の儘にして居らず、時として弱いのが眞劍になつて武者振りつき、案外強いのを困らすことがある。大抵の者は、いくらか腕力で爭ひ得るを覺え、之を振ふを愉快とする跡がある。他に爭ひを決する方法が備つて居れば、斯くて腕づくに爭ふを恥とするけれど、それ程設備の整はぬ間、力自慢が流行らうとする。幕末に尊王攘夷の徒が幕府側に働く者を斬らうとし、伊藤も山尾と共に、塙二郎の殺害に與つた程であつて、物騒千萬となつたが、幕府側では田舍侍が生意氣なことをする、一つ腕の力で目に物見せてやらうとて、新選組の如きものが動き出した。坂本龍馬もそれで殺されたと云はれる。何處でも斬つたり拊つたりしたが、それで當初豫期した通りになつたか何うか。幕府の權力の衰へた時、何とも仕方が無いとし、明治政府で一片着いても、腕づくで爭ふことが已まぬ。大きな所で西南戰役があり、小さい所で壯士が仕込杖を携へて爭つた。明治二十五年の選擧干渉の如き、政府の雇ひ壯士が滅多斬りに斬つて歩き、巡査まで拔刀したのがある。其の當時親方株は、其處に男子の本領があるやうに心得て、得意を感じた。それで成功したならばいく

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ちか其の儘に續いたらうが、見苦しい失敗に終つたので、餘り下らぬ眞似をする事でないと云ふ事になり、壯士を用ひやうとせず、壯士が下火になつた。壯士風の者が卑しめられ、玄關拂ひ又は門前拂ひされる。

併し刀自慢の氣風が續き、何事かがあれば腕捲くりし、相手の頭を毆ち、之を愉快とする。維新頃に働いた連中は、斬るとか切腹すると云ふ事が口癖になり、何でもない事で叩き合ひする。山田が行なり山縣の頰をいやと云ふ程毆つた事がある。後の官吏は前の官吏と違ひ、總じて秩序立つて來たが、愚鬪愚鬪云ふものはどやしてやれと云ふ氣分が失せぬ。手出しをせず、話し合ひ論じ合つて納得をさせるやうにするのは良い事と知りつゝ、分らぬ者と話し合つても仕方が無く、勝手にしろ、已れに所存があるぞと云ふ所を見せようとする。文明の本場といふ國でも、いくらかさうであり、ビスマルクの如き、直ぐと決鬪しようと云ひ出した。併し公人として立つ者は、腕力に訴へるまへに相當の手數を要し、行政上でもナポレオン三世のクーデターを褒めやうとせぬ。英米では嘗て決鬪を必要としたのが、厳禁するやうになつた。愛蘭黨が亂暴するとか、議院で亂暴するのがあつても、政府自ら人を毆ち叩くまでに種々の手段を試み、萬已むを得ぬといふ所まで持つて行く。英國が愛蘭に對し鎭壓を事としたけれど、伊國でムッソリーニが内閣を組織し、片々から反對者を縛り上げるといふやうな事のあるべきでない。憲政の先進國だけあり、流石に其邊は進んで居る。伊より東の方は兎角政治上に腕力沙汰が絶えず、ブルガリアも隨分劇しい。日本では外の事を考へるよりも伊太利でムッソリーニが愉快な事をしたとて、すぐに之に倣はうとするのがある。これが良い事か惡い事かを考へず、そいつは面白い、さうなくてならぬとし、早くも之を是認して終ふ。つまり舊幕時代から引續いた腕自慢をして見たいのである。

社會主義者とか共産主義者とか、現狀に不平を抱く者は、何とかして、現狀を變へやうと欲し、警察官に睨まれ、之と喧嘩したりする。癖に成つて喧嘩が面白く、或は面白くなくても喧嘩する。若し政府に之と十分に議論し、之を說得し得るやうな者が居れば、騷ぎを起さずに濟むのであつても、さういふ譯に行かず、官吏はさういふ事をすべき者でないとし、いつその事口先きばかりの者に腕力の恐るべきを示すの得策を考へたりする。さすればそれ相當の連中が集り、互に都合の好い事を言ひ合ひ、腕力で向へば賈者になつて終ふと云ひ、實にさうだ、腕力に限ると相槌を打つのがある。賣り込むのがあり買ひ込むのがある。國家の爲めに生命を抛つて辭せぬと云ふ調子で打つて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

出る。何俸勳何等とか云ふので感心な事と褒めるのがある。警察が後立てになつて居れば、毆ち叩く位は何でもなく、殺したとて正當防衛になるとするが、一應それで事が片着きさうで、さうは行かぬ。柔道何段といふ者を悉く買ひ込む譯に行かず、買ひ込んだとて段の無い者が必ず有段者に負けると云へず、況して數が多くては、有段者の方が蒼くなつて終ふ。お雇ひの野郎只で置かぬぞと責め付けられ、腕力といふ程腕力がなく、蒼くなつて退く事がある。さうなつては腕力で押へ付けやうとしたのが、逆に反對者をして腕力を恃ましめる事になる。政府の大部分の知つた事でなけれど、小部分が時として餘計な事をするので困る。之と云ふも舊藩時代から程遠くなく、何となく腕力に愉快を覺える所から來て居る。愚圖愚圖云ふものはどやしてしまへといふ事が頭の何處かに殘つて居る。それは大抵の人にあるとし、直きに現はれるやうになつて居る。年を經れば次第にそれを押へるやうになるが、今のところ、僅かの事で起らうとする。高位高官に於いて深く之を怪しまず、それも已むを得ぬとするのでなかなか改まらぬ。

何と云ふても力の崇拜が絶えず、御上の御無理御尤と云ふのを、餘儀ない事とし、政府に於いては、自ら力を以て威壓すると共に、力を以て抵抗せられねば、耳を傾けようとせぬ。事實上、力を以て要求するに限つて居る。陳情するとか議論するとかでは、頭から叱り付けられ、當局者を困らすやうな行爲を敢てすれば、いくらか目的を達する事が出來る。勤王軍の中堅を形造つた薩摩で、勝てば官軍、負ければ賊と唄つたのは、有りの儘を云ふたのである。何分にも力づくで事が定まる。焼打ち事件とか、何とか騷動が起らねば、内閣更迭が難しいとて、之を待ち設けるやうな事がある。前に東京帝大で天下り總長に快らず、法科教授が連袂辭職したので、總長が取替へられた。京都にも類似の事があつた。總長は自治的に職員で推薦するやうにと申出しては、何程足を摺んでも聞き届けられず、騷いで云ひたい所を見せるので、漸く聞き届けられる、東京、廣島兩高師が職員學生總掛りで脅かすので、昇格問題が落着する。總辭職、總退學といふやうな事を以てせねば頭から問題にされぬ。高等師範學校はさういふ性質のものでないと撥ねつけられる。學校の存亡に關するとなつて、それでは仕方が無いとて、高等師範の性質を考へ直すに務める。自ら力を以つて威壓する代り力を以て抵抗せられれば、之に從ふ。

歐米には學校騷動が稀で、勞働者の同盟罷業が多く、日本では學校の連袂辭職、連袂退學が、同盟罷業に先じ、且つ多く行はれる。智識か學校より廣まつたからでもあるが、學校は議論の効能

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

少く、腕力の効能多きを知るやうになつて居る。學校として共の反對となるべきであるのに、さうでなく、力を伴はぬ主張は効能ないと心得て居る。何でも當局者が處置に困るやうにすれば、何うにかなると考へる。それで學校に何等か當事者と意見が合はず、我が是認する所を行はうとするには、力を示すの計畫を立て、同盟休業で聽かれねば、混棒を以て打ち叩くといふ事になる。當事者の方でも、力を以て威壓すれば事が濟むとし校長の權能で教員を罷免し得るので、主立つた者を放逐するに取かゝり、互に力を以て爭ふ。互に何程議論を戰はしたとか問へば、特に云ふ程の事なく、而と向つて相ひ知らぬ顏をして居る。議論しても徒事(ムダ)であつて、各々爲すべきを爲さうといふの形である。物の分らぬ連中でなく、外で話し合ふ時、何うもかういふ事で困ると術を窮めながら、自ら從事する所は、力を現はさうとするのであり、その力は暴力を意味する。聽かねばひどいぞと云ふを仄めかしてゐる。小學校では數が多く、騒動が起つても、すぐ始末をつけ得るので平穏に過ぐるが、多くの小學校が連合して取かゝつては、當局者も要求を聽かねばならなくならう。今のところそこまでに到らぬが、政府全體として力を本位とし、六上の御無理御尤を怪します、議會で多數を制しさへすれば何をしても構はぬと云ふやうになつて居り、一概に力次第で何うにもなると考へるやうに傾く。文明は鍍金にしても、斯くては餘りに甚だしく、付焼刃とも何とも云ひやうがない。日本の文明や、文化や、それ程まで程度の低いものであるべきでなからう。高位高官とて知れたもの、之れに希望を屬したり、責任を負はせたりしても、仕方がないと云へばそれまでの事、今少しく程度の高きを欲するならば、力づくとか力次第とかいふ事に第一の重きを置かず、成るべく道理を考へ、いやでも之を尊ぶやうに努むべきでないか。廢藩置縣後五十年、年が淺いと云へば淺いけれど、さういふ事で自ら云ひ譯せず、力自慢より一層自慢すべきものを求むべきでないか。今の狀態ではかなり淺猿しい、見苦しい、聞苦しい。力の無い癖に力自慢するに到つては、片腹痛いどころの話ではない

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

思想的亂闘時代の一現象

林癸未夫

所謂暴力團體なるものに對つて、汝等は暴力の行使を目的として徒黨を組んで居るのかと表向きに尋ねたならば、彼等は恐らく否と答へるに相違ない。そして彼等は何等かの主義の宣傳とか、思想の研究とかを其目的としてゐると說明するであらう。又警察官憲に對つて、公等は暴力團體の横行を默認しつゝあるのかと訊いたならば、彼等もやはり否と答へるに違ひない。そして若し法規に違背するやうな行爲を爲す者があれば、容捨なく之を取締る方針であると辯明するであらう。それにも拘らず現に暴力の行使によつて。自己の敵視する個人或は集團を膺懲し脅迫することを目的として居ると一般に認められるやうな團體の多數が存在してゐることは、今日周知の事實となつてゐる。そして此種の團體は、過去に於ても絕無ではなかつたであらうが、この一兩年間に特に增加して、屢々世人の視聽を聳たしめるやうな行動に出でつゝあることも、亦否認のできない事實である。何うしてゞあらう。私は其原因に就て、いさゝか考へて見たいと思ふ。

○

惟ふに現代は急激なる思想上の過渡期である。恐らく吾等は世界文化史上に於ける第四次の思想的大變革の時代に遭遇しつゝあるものと思ふ。その第一次は希臘及羅馬の哲學に對する基督教の完全な征服であつた。その第二次は文藝復興であつた。その第三次は佛蘭西革命であつた。そして現代は個人主義に對する社會主義の鬪爭から必然期待されるところの變革である。

併しながら、この第四次の變革は今現に進行中に在るのである。社會主義的思潮は澎湃として個人主義思想の鐵壁に押寄せ來つては撥ねかへされ、そこに怖ろしい狂瀾怒濤を捲き起しつゝあるのである。結局個人主義の鐵壁が崩壞して、社會主義の浪が世界を併吞するに至るであらうとは容易に信じられないにしても、少くも此鐵壁が次第に波濤の力によつて浸蝕せられ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新たなる方法を以て大に之を改造しなければ、到底將來に維持のできない狀態に立ち到るであらうといふことだけは、私に取つては毫も疑ひのないことである。從つて目下進行中の思想的大闘爭が、どんな形に於て終局を結ぶにせよ、それが基督教や文藝復興や佛蘭西革命と同じやうに、人類の歷史に一新紀元を開く原因となるに相違ないことだけは、明白に豫想されるのである。

かくの如く現に進行中の變革の結果が重大であるだけに、此結果に到達するまでの過程に於て、各種の公爭、私爭、明鬪、暗鬪が、此處にも彼處にも渦を卷いて、それが政治上にも經濟上にも、ゆゝしい紛擾の種子となり、一般の社會的不安を惹き起しつゝあることは當然の事態としなければならぬのである。そして世界の各國は、過去半世紀に亘り、多少の程度こそあれかくの如き社會的不安に脅かされなかつたものはないと言つて可いのである。しかも此不安は、思想的に比較的最も早く進んだ諸國に於て最も早く經驗され、次第に其深刻の程度を加へつゝ今日に至つたのであるが、今尚何れの國も、此問題に對し、思想的にも實際的にも、最後の解決を與へ得たものは一つもないのである。唯露西亞だけは、少くも外形的にだけは、一應解決を與へ得たやうな觀を示してはゐるが、それが果して露國國民全體としての眞の解決を意味するのであるか何うかに就ては、まだ疑を挿むべき餘地が少からぬやうに思はれる。況んや其思想上の解決に至つては、單に露西亞に於ける一群の共產主義者の短時日の經驗からだけでは、到底實現さるべきものではないのである。從つて今日では、只識者によつて大勢の趨ふところを推斷され得るに止まり、一般の民衆は羅針盤を失つた船の如く、徒に時世の波に翻弄されながら、不安の裡に其日を過ごしつゝあるものと見て可いのである。

）

右に述べたやうな形勢は、何れの國も略同樣であるが、殊に我日本に於てはそれが一層顯著であるべき理由があるのである。それは我國は歐米の一流國に比べると　總べての點に於て新時代の文化に浴することが遲れたけれども、就中社會改造の新思想、即ち最も廣い意味の社會主義に接觸することが甚だ晚かつたのであつた。その原因は蓋し三つある。その第一は、維新以來我國民を指導したる朝野の實務家及學者が、主として外形的な文物制度を歐米に模倣して、我國を改造することに專心焦慮し、形而上學殊に非アカデミックな社會思想などを討究するの志向を有たなかつたことである。その第二は、偉皇室を中心とする政府の倫理教育方針と日清、日露の二大戰役が國民の間

に國家主義的思想を涵養したことである。又その第三は、最近十數年間、政府が特に社會主義思想の輸入禁遏に努力したことである。是等の政策の是非は姑く措いて、それが我國民をして社會主義思想に接觸せしめる機會を、著しく遲延せしめる原因であつたことは爭ふべからざる事實と認められるのである。

然るに社會主義思想と敵對的關係に置かれてゐる個人主義思想は如何と見るに、これも亦我國では歐米先進國ほどに進んではゐなかつたのである。それは社會主義思想の傳來が遲れたのと略同じ理由に基くのであるけれども、多少異る點がある。それは我國の法律制定に當り、傳統的なる家族主義、詳しく言へば戸主の家族に對する又夫の妻に對する優越的地位を確保するの必要が顧慮されたこと、並に、倫理教育の上で、主從、親子兄弟の分を明かにし、其序を正すことが重要視されたことである。そして我國では、此非個人主義的思想が、西洋に於けるが如く、社會主義思想を誘發する原因とはならないで、却つて國家主義及家族主義を偏重するの傾向を招徠したことも注意しなければならぬ。

次に社會主義學説發育の素地を爲すところの資本主義的經濟制度なるものも、我國は今尚遙に幼稚な狀態に在るのである。歐米一流國に於ける產業の急速なる進步は、自由競爭に依る企業者の經濟的危險を極度に増大したゝめに、營利主義的生產組織の上に何等かの改造を試みなければ、社會主義の攻撃がなくても、それ自らを保持することが困難となつて來たほどに、資本主義は既に其爛熟期に到達してゐると言へるのであるが、これに較べると我國の商工業は、僅かに紡績を除けば、尚發達の中途に在るのであつて、殊に主要なる電氣及化學の兩工業は、尚其萌芽時代に在ると言つても差支ない狀態なのである。

かくの如き現狀であるからして、我國に於ける個人主義思想も資本主義經濟も、決して西洋諸國民の間に於けるほど強力なものとはなつてゐないのである。從つて若し日本が思想的に西洋から隔離してゐたとするならば、今日西洋に行はれつゝあるやうな社會主義思想が、自發的に我國に生れる理由は甚だ乏しかつたのである。言ひかへれば現在までの日本は、思想的には國家主義及儒教道徳が勢力を有ち、經濟的には溫情主義の下に於ける工場工業と家内工業とが並立して居つて、一般の情勢は未だ社會主義思想を發生せしめ得るほどに進展してはゐなかつたと言へるのである。

○

然るに最近數年の間に、突如として日本に社會主義思想が押寄せて來たのである。しかも其勢は外觀頗る強烈に見えたゝめ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に、一時は朝野之がために震駭するの慨があつたのである。歐米が何うであつても我帝國だけは大丈夫と安心してゐた官僚も資本家も、此勢に當面して俄に狼狽し初めたのであつた。初期の民主主義運動も、非軍閥運動も、勞働組合運動も、普選運動も、要するに最廣義の社會主義運動の一支流と見るべきものである。しかしそれが明かに我が帝國の××及び××××を根本的に改造しやうとすることを直接の目的とする運動となつて現はれ初めたのは、極めて最近の事に屬するのである。所謂「主義者」の團體が急に增加し、その機關雜誌の發行や、勞働爭議の勃發などが、之に伴うて激增し、學生や青年勞働者の中に、過激な言動を誇示するが如き風の見え出したのも、僅に兩三年この方の現象である。

しかも是等の學生や勞働者の群を精神的に指導しつゝある社會主義學者は、常に競うて西洋に於ける最新の學說を採取して之を我國に紹介することを以て、最要の職能と爲しつゝあるのである。そして彼等の「最新」は大抵の場合「最左翼」を意味するのである。言ひかへれば數年來我國の社會主義學者は、歐米に於て見出さるゝ限りの「最極端」の左傾的思想を、「最速」に紹介して、「最先」に紹介することを、「最大」の名譽と心得てゐるかに見えたのである。そして彼等は、歐米に於てかくの如き思想を產み出した政治的、及經濟的の背景や、社會的、及道德的の誘因には何等の注意を拂ふことなしに、若くはそれに對する己れの無識を自白することなしに、只最新學說の一部を、之を支持する他の一切の關係から切り離して、奇を好む我國の學生や勞働者の前に操つて見せることに、非常な愉快を感じたのであつた。そして其處に安價な低級な喝采を浴びて、ホク／＼悅に入つたのであつた。

社會主義學者が悅に入ることは必ずしも妨げない。が併し彼等の紹介に係る最左傾的思想によつて、正直に感動せしめられた學生や勞働者の群が、その思想の背景や環境を爲す事情には、歐米と日本との間に著しい相違のある事實を沒却して、ひたすら實際運動に突入して行かうとする傾向を帶びて來たことは、大に憂慮すべき事態であつた。

それと同時に又、日本現代の青年の中に、傳統的な國家主義思想を深く信奉し、飽くまでそれを捧持し宣揚することによつて、新來の社會主義思想を驅逐しやうとする志を懷いて居る者の、案外少くないことが發見されたのである。彼等は社會主義思想が今日ほど橫行しない間は沈默を守つてゐたので、殆ど其存在が認められなかつたのであるが、最近に至つて、社會主義思想の勃興に反撥し、初めて其頭角を現はし來つたと共に、一

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

種の團體運動をも行ふことになつて、社會主義者の團帶と隱然對立するやうな形勢を示すに至つたのである。

○

歐米に於ける各種の主義思想は、何れも其淵源が比較的に遠く其抗爭の歷史も亦長いのである。從つてそれ等の思想は、善かれ惡かれ、相應に整理されて居り、洗練されて居り、又之を以て相戰ふ敵味方にも、相當の訓練があり、組織があり、統制があるのである。從つて兩軍の隊形や作戰は甚だ大規模である代りに、無節制な小ぜり合ひや、不秩序な亂鬪は滅多に行はれない。常に慘として驕らざるの風があるのである。然るに日本に於ては、道德上の個人主義も、政治上の國家主義も、經濟上の資本主義も、皆西洋からの輸入品であつて、まだ十分咀嚼も實行もされてゐないに拘らず、是等の諸主義を正面の敵として相戰ふとする社會主義——しかも其最も鋭角的な部分が一度にドツと輸入されて、從來の諸主義に挑戰したのであるから、端なくも其處に一場の混亂を惹起したのである。敵も味方も一向戰鬪準備がない。のみならず隊伍の編制も、指揮の統率もない。從つて誰が敵やら味方やら、本當の見極めも付けずにぶつつかる奴は何でもなぐれと言つたやうな鹽梅で、俄に到る處で不秩序な亂鬪や無節制な小ぜり合ひが行はれ初めたのである。しかも元來が戰鬪準備の無い雜兵どもの盲滅法の戰ひであるから、鬨の聲ばかり徒に高くて、實彈射擊は餘り行はれず、唯右往左往に驅け廻るばかりで、全體として形勢は、誰にもトンと見當が付きかねるやうな渾沌狀態に陷つたのである。やれ過激思想とか、やれ階級鬪爭とか言つて、今にも大騷動が勃發しさうな風評だけは盛に行はれるが、それは單に風聲鶴唳として一笑に附してゐる人々もあるかと思へば、戰々兢々として憂慮に沈んでゐる人々もあるといふ有樣である。一言以て之を蔽へば、思想的亂鬪時代と名くべきものが即ち現在の日本の實狀であると私は考へてゐるのである。

○

所謂暴力團體の出現も亦この思想的亂鬪時代に當然發生すべき一現象と看做すべきものである。暴力を手段として異主義者を威嚇しやうとしてゐる徒輩は、暴力を以てしなければ禁壓することができないほどに、其敵の思想的の勢力を强大視してゐるのではなくして、寧ろ言論を以て敵を征服し得るほどに鞏固なる思想が自分自身の方に無いからして、餘儀なく口より手で行かうとしてゐるのである。彼等は双方ともに、十分に討究され、洗練され、確立された思想的信念を有つてはゐないのである、一應の理窟はこねて見るが、いづれも俄仕込の附燒刄であ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るから、他流仕合になると物の役には立たぬ。しかも短氣で、鼻柱が强くて、負け嫌ひで、逆上性と來てゐる日本男子同士のことであるから、理窟の太刀打で埒が明かぬとなると、直ぐに握り拳で組打となるのである。尤も元來が敵の命まで取らうといふほどの意趣遺恨があるわけでもないのだから、大體は鼻血を流すくらゐで其場は治まるのであるけれども、何うかすると周圍の見物が面白半分にけしかけたり、喝采したりするものだから、ツイ調子に乘り過ぎて飛んだ怪我人をこしらへ、未決監へ投り込まれてから、ハテこんな筈ではなかつたがと後悔するやからも少くはないやうに思はれるのである。

すこし言葉が碎け過ぎて冗談らしく聽えたかも知れないが、併し事實はやはりそんなものであらうと私は信じてゐるのである。從つて所謂暴力團體なるものは、名前は如何にも恐ろしさうに聽えるけれども、其實双方とも極く末輩どもの集團であつて、少し粒の大きい連中は、決してそんな仲間に入つて、下手な素人芝居を打つやうな眞似はしてゐないのである。例へば所謂「主義者」の中でも、多少世間に知られてゐるやうな人々、殊に横文字が讀めて、筆達者な連中は、そんな危い藝當はしないでも、原稿料稼ぎで資本主義的新聞雜誌に御奉公さへしてゐれば、立派に安易な生活を送りながら、一部の浮薄な學生や輕佻な勞働者から、革命の神樣のやうに崇め奉られてゐることのできる當世であるから、決して暴力團體などに關係するやうな馬鹿な事はしないのである。

之を要するに暴力團體なるものは、正直で、短氣で、向不見で、そして少しばかり知慧の足らぬ連中が組織してゐるものと斷定して、恐らく誤りはないと私は信じてゐるのである。從つて若し我國に於ける思想的亂鬪が、時を經て、整理され、統制され、敵と味方とが判然二大軍隊として對抗すべく編制された曉には、自然と影を沒すべきものなのである。果してさうだとすると、我國民は、彼等の存在を深く懸念するには及ばないのである。

○

が併し、暴力團體なるものゝ存在しつゝある事實が明白である以上、それは何人に取つても決して名譽な事ではないに違ひない。就中それを最も恥辱と考へなければならぬのは政府である。警察官憲である。何となれば彼等の緩怠が、かゝる團體の存在を可能ならしめる直接の原因であるからである。道途傳ふるところによると、暴力團體中の或者は、警察官憲から間接の庇護を受けつゝあるとか言ふことであるが、併しこれは恐らく訛傳か然らざれば中傷であらう。餘りに非常識な話だからであ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。併し若し假にそれが事實であるとするならば、警察官憲としては全く恥の上塗と評すべきものである。何となれば彼等は國家の權力を背後に擔うて、國法を嚴正に施行すべき地位に在りながら、正々堂々と之を施行することを爲し得ないで、僅かな恩を雜兵末輩どもに施して、官憲に抗ふ快からぬ者等に間接の痛手を負はさうとするが如きは、いかにも舊江戸の惡旗本と町奴との喧嘩にでもやりさうな圖で、大正昭代の事としも覺えないからである。それは唯政府としての威信を傷け、ますます不逞の徒の跳梁を誘發するだけで、彼等の憂ふる過激思想も階級鬪爭も、激成こそされ、沈靜される氣づかひは毛頭ないのである。若し現在の法規にして足らぬとすれば、新たなる法規の制度を議會に提案するがよろしい。そしてそれを嚴正に施行さへすれば彼等の任務は足りてゐるのである。それ以上の事は哲人や經世家の方寸に在ることであつて、刀筆の吏僚の能く知るところでない。それにも拘らず彼等が一廉政治家氣取りで、陰謀的小策を弄するが如きは、其本分を辨へざるの甚しきものである。私は彼等が眞實さうであると信ずべき確證を有つてゐるわけではないが、世評之を承認するもの少からぬやうであるから、一言彼等を誡めて置くのである。

思想に對しては寛大なれ、暴力に對しては嚴格なれ

東大教授　高柳賢三

一

最近に於ける世上の出來事を眺めて見ると、大分險惡な氣分が一般に擴がつて來た樣だ。「險惡な氣分」と云ふのは所謂「危險思想」でも「左傾思想」でも無い。「危險思想」にせよ「左傾思想」でも、それが「思想」として考へられ、論議せらるゝ間は私は未だ「險惡」だとは考へない。併し、「忠君愛國思想」にせよ將た又「右傾思想」にせよ、それが不法なる「暴力」の形を採つて現れた時は、それは甚しく「險惡」である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

早稻田大學に於ける、軍事研究團と文化同盟との爭の暴力化、東洋大學に於ける校長對學生の爭議の暴動化、高尾對米山事件に於ける暴力の使用等は、「暴力」が使用せられたる點に於て、「險惡」性を帶びて居る。同樣の現象があらゆる爭議に現はれて來れば、それは、論議の「正否」は背後に隱れて腕力の「強弱」が萬事を解決するに至る。それが吾々の希望せざる狀態である事は云ふを俟たない。「社會秩序」を維持する事は國家の負ふ最小限度の任務である。國家は最善の努力を盡して此任務を果さなければ、國家の存在理由の大部分は失はれて了ふ。吾々は此點に於てすべて嚴肅な法の執行に關與する人達即ち、警官、檢事、裁判官に滿腔の同情と出來得る限の應援とを與へなければならない。

□

思想及び言論に對して、國家は寛大でなければならない。又公平無私でなければならない。

勿論、爲政者——國家を代表する——も、普通一般の人間である限り、正當なりと信ずる政治的、經濟的、社會的思想を懷いて居り、且つ之に反する思想を誤謬なりと認め、且つその傳播を危險なりと感ずる事は當然な事である。又其委託せられたる國家權力を利用してその主觀的に非なりとする思想及び言論を抑壓せんと欲する事も亦理解し得る。從て爲政家の其思想に對する信仰が強烈であればある程、そして爲政家が其使用し得る官權に對する自信が強ければ強い程、彼は反對思想を抑壓せんと努力する。彼は危險なる行動を取締る事を以て滿足せずして、其源泉たる思想其者に斧を加ふるのが一番有効だと考へる。

かゝる爲政家は、識見を有する點に於て、果斷なる點に於て、遙かに何等の見識なく、何等の確信なく、只々時勢を巧に泳ぎ廻る、そして殆んど智識ブローカー以上に出でない所謂「政治家（ポリティシャン）」の群を拔いて居るのは事實だ。併しながら、彼は更に反省せねばならない。歷史は諸種の政治的、經濟的、社會的思想が、之を信奉する人に取つては絕體的であつたにせよ、全體の上からは相對的であつたと云ふ事を物語つて居る。そして相戰ふ諸思想の中からして、新しきそして一層良き思想が生れるのだと云ふ事を洞察するであらう。かくして初めて彼は宜しとする其思想を強く主張しつゝ、然も尚ほ之に反する諸思想に對して寛大である丈の謙遜を學ぶ。「寛容」の精神は其處から生れる。リベラリズムの眞の精神も亦其處にある。「寛容」と「リベラリズム」は「我不關焉（インディファレンティズム）」ではない。多年人類の經驗した結果發見した尊き政治的聰明である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Free trade in ideas 思想の自由貿易、それが國家として採る可き賢明なる方針でなければならぬ。思想の保護貿易は現今に於て國家として採る可き方針ではないと私は考へる。かくして初めて眞理に近い思想が生み出せる。それには多少の危險を伴ふかも知れない、併し個人の生活と雖もこれ位の危險は伴ふのだ。それを恐れては一日も生活出來ぬ。眞理の究局の勝利、それを信じて多少の危險を冒すのが結局良いのであらう。

□

併しながら、「暴力」に對しては國家は全力を盡して戰はねばならぬ。その暴力が政府當局と思想を同ふせる個人又は團體から來る場合と、之と異つた思想を懷いて居る個人又は團體から來る場合とを問はず苟くもその暴力が違法なる以上之を嚴格に處罰すべきである。

處が此公平な態度が政府當局として割合に困難である。それは自分と思想傾向を同じくする人は之を大目に見、自分と全然反對の思想を懷く者は之を嚴格に觀察するのは人情の弱點だ。併し、公權を行使する爲政者としてこの點を誤れば自ら暴力を誘起する結果を引起す事を忘れては成らぬ。國粹會が國粹を發揚し、之を宣傳するは大に宜い。併し、若しもそれが暴力に依て反對者を抑壓せんとした場合に國家が默して居るとすれば「反對者」の方でも亦暴力を使用して其主義を貫徹せんとするのは當然である、それが彼等の「正義心」に合致する。政府當局は之を責める譯に行かなくなる。

法律執行の均等、それが「暴行」に就て是非共爲政者が採る可き態度である。若しも爲政者に此點に就て過誤ありとせば、暴力主義横行の大部分は爲政者に其責を歸せねばならぬ。

國家は思想及言論に就ては寬大なれ、「反動思想」に就ても、「左傾思想」に就ても。

國家は「暴行」に就ては嚴格なれ。そして「反動思想」に基く暴行と「左傾思想」に基く暴行との間に秋毫も差別的待遇を置いてはならぬ。

吾々は政府が不當に思想及言論を抑壓する時に之と戰はねばならない。

併し、國家が不當なる「暴力」を退治せんと努力する時に吾々は全力を盡して之を應援せねばならない。そして又吾々は暴力退治が公平に且つ均等に行はるゝ樣に當局者を激勵せねばならない。（一三、七、十）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一視同仁たれ

水野廣德

曩に本誌は暴力團是認に對する當局の怠慢を糺彈したことがある。其後官憲當局が暴力團に對して如何なる態度と政策とを執つたかは知らぬが、暴力行使團、直接行動派、乃至脅迫強請連は減滅せざるばかりか、近時却つて增加するの傾がある。暴團力の価を作りたる國粹會が近時自省したるものか、餘り暴力行使を聞かぬは、國家の爲めにも、社會の爲めにも、又同會の爲めにも大に祝すべきである。之に反し、他方には一部の學者等に依つて暴力行使、直接行動をば露骨に主張せる團體も出來た樣である。其他何々團、何々會と銘打つて、表面或る主義を標榜しながら、裏面に於て脅迫強請を事とせる無賴の徒の集團も少くない。

是等の諸團體には右黨を標榜せるものもあれば、左黨を標榜して居るものもある。而して右黨に屬するもの〻主義主張なるものは多くの點に於て、現狀維持に依りて利益を受くる特權階級の利害と一致して居る。之に反し、左黨に屬するもの〻主義主張は總ての點に於て、特權階級の利害と相反背して居る。之を以て特權階級者は自己利益の擁護物として、動もすれば右黨暴力團を經濟的に後援する。之と同時に特權階級の番兵たり衛兵たる官憲も亦右黨に對しては、思想的には共鳴し、政策的には便利上權力を以て之を保護し且つ利用せんとする。故に右黨暴力團は此の後援と保護との下に、形態的には急激に發達する。從ふて主義上より見たる不良分子が多い。彼等は經濟的後援に依りて酒色に耽り、官憲諒解の下に脅迫強請を敢てする。

之と反對に、左黨團體は其純然たる思想團なると、或は過激なる暴力團たるとを問はず、經濟的には何等の後援なく(或は外國の資金を受くるとの世評あるも眞僞は明らかでない)、官憲よりは猛烈なる不斷の壓迫を受けて居る。從つて其の發達は甚だ遲々たると同時に、彼等の多くは幾多の苦難缺乏を忍びて主義に對しては極めて忠實熱烈である。

資本主義國殊に日本の如く資本主義の尚ほ發達の道程に在る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國に於て、政府が社會主義を恐れ嫌むは當然である。官憲が法律の許す範圍內に於て、左黨に對し強壓迫害を加ふることも亦已むを得ないであらう。從來屢耳にせる如き低級警官に依つて行はるゝ人權蹂躪は別とし、左黨に對する官憲の壓迫をば或る程度に於て諒とする。之を爲さゝれば官吏自身の位置が保てないのである。彼等とても官服一枚脫げば其の大多數は、不合理多き現代の社會制度組織を呪つて居るであらうと信ずる。素より新聞が社會主義者などに對して狂の字を付けるのが不都合じやなどゝ、社會主義者を以て犬猫同樣に見て居る役人も無いではない。併しながら現在行はるゝ如き左黨強壓政策が果して賢明にして有効であるや否やは別問題である。吾人は現在の如き極端なる封建的強壓策は、決して時世に適したるものでないと信ずる。素より政府は政府として見る處あり、官憲は官憲として信ずる處があるのであらう。唯吾人の信ずる處は、人間の主義思想なるものは權力の迫害や脅嚇に依つて、左右せらるゝものでないと云ふことである。假令一時の表面を壓へ得るとするも、反抗は潛熱となりて裏面に伏在し、いつかは顯熱となりて大爆發を表すであらう。政府も、官憲も、露國革命の歷史は知つてる筈である。

左黨に屬する暴力行使團や、直接行動派や、脅迫強請連に對する官憲の取締は既に至れり盡せりで、之に對して吾人は官憲の緩慢を責むるの餘地は無い。夫と同時に吾人は官憲の態度を妥當とは認めぬが、必ずしも不正とは思はない。素より打つ蹴る、擲ぐるなどの暴行は斷じて許すべきでない。惟ふに社會主義者と雖ども資本主義の日本に生活する以上、日本法律の適法なる行使に由る壓迫に對しては忍ばざるを得ないであらう。

吾人の當局に望む處は、右黨に屬する暴力團體乃至強請連に對しても亦、苟くも法律に違背する以上正當に之を取締らんことである。然るに左黨に對する當局の取締は峻嚴を極むるに反比し、右黨に對する取締は甚だ緩慢なるの憾みがある。彼の早稻田大學に於ける縱橫俱樂部員と文化同盟團とに對する當局の態度の如きは、其の最も顯著なる例證である。斯くの如き當局者の偏頗なる行爲の結果、右黨に屬する不良分子は或は思想的反感より、或は官憲追縱より、往々左黨に對して私的迫害を加ふることあるを耳にする。法律上正當なる官憲の壓迫に對しては忍び得る左黨も、斯かる不法なる私的迫害に對しては忍び得ぬであらう。

最近發生したる戰線同盟員と赤化防止團員との殺傷事件の如きは其の眞相尙ほ不明なるも、斯かる事件を發生したる動機に就きては既に略ぼ明らかである。此の事件の是非曲直が何れに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

在るか、射殺者の行爲が正當防衛なるや否やの問題の如きは、唯單なる法律上の小問題に過ぎない。併しながら左右兩黨をして互に暴力を行使し直接行動に依つて事を決せんとするに至らしめたることは、社會問題としても、國家問題としても極めて重大である。國民は事件の裏面に存する現代社會相に留意すると共に、官憲は兇器携帶禁止令ぐらいの姑息手段のみを弄することなく、自己に顧みて一層深き根蔕を凝視するの必要があるであらう。

吾人は右黨たると、左黨たるとを問はず、暴力行使に依る直接行動を惡み且つ之に反對するものである。併しながら若しも暴力を行使するにあらざれば自己を生かすの道無きに至りたる場合には、暴力の行使も亦已むを得ずと是認するものである國家に於ても然り、個人に於ても然り、社會的團體に於ても亦然りである。窮鼠却つて猫を咬む、國民の或者をして自暴自棄に陷らしめぬことが、政治の局に當る者の心すべき點である。

吾人は當局が左右兩黨に於ける暴力行使團や直接行動派に對し、等しく嚴重に且つ適法に取締らんことを希望し、勸告し、要求する。況して脅迫強請是れ事とする社會の害虫に對しては最も峻嚴なる方法に依つて之を撲滅すべきである。唯之が取締を爲すに當り、當局者の記憶すべきは、勇氣ある人間は常に正しき弱者に對して同情すると云ふことである。

暴力に頼らずして凡ての事を處理したし

菊池寛

暴力團體の發生は、國粹會が、嚆矢らしいから、これも官僚の徒の蒔いた種だと云へよう。最初は、自分達に都合のい、暴力團體の存在を許して置くと、だん／＼自分達に不都合な團體が發生して、おしまひにはこの兩側の團體の敵視反目から、とんでもない大事を惹起すに至るだらうと思ふ。

とにかく、如何なる意味に於ても、暴力は忌避したいと思

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふ。それが何んなに正しい目的に向つて行使される場合でも、暴力はいけないと思ふ。人間が、とにかく現在の文化に達してゐるのだから、暴力に依らなくても凡ての事は、爲し得ると思ふ。官僚の人々が、自分に都合のいゝ暴力團體の存在を許すと云ふことは、暴力を肯定することに依つて、やがて暴力革命を遠く肯定してゐる事になりはしないか。

人間の意志と理智とに依つて、凡ての事は爲され得る筈だと思ふ。社會改造の如きも、現在に於てはたゞ時の問題である。これを暴力に依つて、早めようとしたり延ばさうとしたりすることは、却つて物の當然の進行を妨害混亂して、人間を不幸にするばかりでなく、早めようとする事が却つて、遲れさせることになつたり、延ばさうとすることが却つて、早めさせることになつたりする。

が、官僚の徒が、權力に依つて、物の道理と自然の進行を妨げようとする場合などには、これに對抗するために、暴力の發生することは、又止むを得ないことだと思ふ。

とにかく、我々は暴力に頼らずして、凡ての事を處理し得ると云つたやうな信念の下で、進んで行きたいと思ふ。

先ず自己に反省せよ

今村力三郎

正義、共同、互讓の精神が缺乏して團體の統制力が弛緩し民心が乖離した時代には凡ての力が不正に行使せられる。社會の表面に公々然と不正行使の力が顯はれて來るやうになると其社會の治安は亂れ其極まるところは一大暴風と爲り更に次の時代に移ることは歴史の示すところである。徳川幕府の中頃から旗本や町奴が暴力を賴んで市中を横行し幕府の末路に近づくに從つて益甚しくなり遂に幕府の顚覆を見るに至つた。斯る時代には獨り腕力が不正に行使せらるゝのみならず財力も權力も悉不正に行使せらるゝのであつて賄賂も公行せられ驕奢の風も盛んになるのである。力の行使に於て暴力が硬派で賄賂が軟派と言

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つても宜しかろう。

力を合法的に整理したのが權力であるから權力の行使は常に合法であつた權力の發動を目して暴力と呼ぶ場合のあるべき筈はないが權力の行使にも自ら一定の制限があるから此制限を超へたる權力の行使は形式的には合法であつても實質的には暴力に異ならぬ。加之權力の不正行使は反動的に個人の暴力を促し國家の亂階と爲るのであるから古來思慮ある爲政家の最深く自戒したところである。

憲法政治とか法治國とか進歩した政治の様式は團體と個人の力を整理して其不正行使を豫防するものと見ても差支なかろう。然るに國の内外に渉つて正義や互讓の精神が萎縮し反對に腕力や財力の不正行使が旺んに爲りつゝあるのは困つたことである。

戰爭が人氣を殺伐にする。夫れに今度の世界戰は經濟問題や階級問題や人種問題を一層深刻にしたばかりで一つも解決しないのであるから益人心を險惡と不安に導くばかりで此先一歩づつ平和に近づくのか或は反對に第二の動亂に趨くのか何人も的確の判斷は出來ない。此世界の風潮は戰爭の災禍より免れたる日本の人心にも襲ひ來つて種々なる方面へ種々の形で顯はれるに至つたことは止むを得ない。

呉王が劍客を好むと百姓に瘢痕が多く楚王が細腰を好むと宮中に餓死する婦人が多かつた。政友會が國粹會を作り憲政會が水平社と連盟する時代に血腥い何々團何々會と暴力第一義の集團の簇生するのは怪しむに足らない。

甲黨と乙黨とが相陷擠するに手段を擇ばないのも當局大臣や政府委員が虚僞と詭辯とを耻としないのも呉王の劍客や楚王の細腰と同じ勢で人民に反映することを考へねばならぬ。

暴力で勝敗を決せんとするは獸類の享受する稟性である暴力で他人の意思を强壓せんとする心理は暴力で他人の財物を奪はんとする强盜の心理と異ならぬ我々が幸に生を人類に享けたる限りは最後の決定を暴力に託して諦めることは出來ない。其處に人間の靈性の尊貴を思ふのであるが或時代に或事變が勃發すると此靈性に曇りが懸ることがある。

至公なること鐵の如く至平なること水の如しと形容せらるゝ國家の裁判でさへ或場合に公平を疑はるゝことがある。或主義を懷抱する者が被告になつて夫れが治者より惡く睨まれて居ると其主義者に對する裁判は他の被告人の場合より科刑の重いことがある。犯罪たる行爲は同一の程度にあつても被告の主義に因つて社會に及ぼす危險の程度に差異があるから其處に科刑に輕重の差を生ずると云ふのも一理あることながら世人が視て以

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て餘りに不公平と感ずるまでに至るのは大に考へねばならぬ。刑罰を重くして長く獄舍に繋いだり若しくは或者を死刑に處しても夫れで、或主義や或運動を威嚇して敗滅せ　むることは出來ない。

刑罰で阻止することの出來るやうな主義運動なら放任して置ても自然に熄んで仕舞ふ。根柢ある主義運動なら刑罰に反抗して益險惡になるばかりである。

國法も信賴するに足らずと考へたときに之に對抗する唯一の手段は思想あるのみであるが夫れが迂遠に感ずるときに暴力に訴へる。從つて治者の位地に在るものは不逞の徒として嚴酷の態度を以て之に臨む。臨まれたものは思想や暴力で出來るだけの反抗を試みる。責任は孰れにあるか。

互に他の責任を云爲するよりも自己に反省するが急務である。

明治天皇が松平容保等を寬典に處せられたときの詔勅に

『松平容保ヲ始メ伊達慶邦等ノ如キ百官將士ヲシテ議セシムルニ各小異同アリト雖モ其罪均シク逆科ニアリ、宜ク嚴刑ニ處スヘシ、就中容保ノ罪天人共ニ怒ル所死尙餘罪アリト奏ス。朕熟ラ之ヲ按スルニ政敎世ニ洽ク名義人心ニ明ナレハ固ヨリ亂臣賊子無ルベシ。今ヤ朕不德ニシテ敎化ノ道未タ立タス　加之七百年來紀綱不振名義乖亂弊習ノ由テ來ル所久シ、抑容保ノ如キハ門閥ニ長シ人爵ヲ假有スル者今日逆謀彼一人ノ爲ス所ニ非ス。必首謀ノ臣アリ。

朕因テ斷シテ曰其實ヲ推テ其名ヲ恕シ其情ヲ憐ンデ其法ヲ假シ容保ノ死一等ヲ宥メ首謀ノ者ヲ誅シ以テ非常ノ寬典ニ處セン。朕亦將ニ自今親ラ勵精圖治敎化ヲ國内ニ布キ德威ヲ海外ニ耀サンコトヲ欲ス、汝百官將士其レ之ヲ體セヨ』

不世出の　聖主が朕不德にして敎化の道未だ立だずと自責して容保を寬典に處し玉ふ大御心は唯感涙に咽ぶ外言葉の出ずるところが無い。

明治大帝の神去りまして玆に十有二年、旦暮に洪恩を感謝すべき日本臣民は上下共に最大切なことを忘れて居るのでは無いかと思ふ。

莫遮あれ、人類は畢竟有情の動物である。時去り時來つて人情美の燃ゆるとき我等は眞の平和に煕々雍々たる時代を迎るであろう。然らずんば何れの處にか人類の靈性を認め得べき。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

群衆心理に通曉せよ

井上忻治

○

多數は力である。それ自體に於て力である。しかし、立憲政治の一要素としての多數は、それが一定の意見を支持し得べきが故に力なのである。暴力の基礎となり得べきが故に、そうなのではない。

不法なる暴力若しくば直接行動は、立憲政治の下に於ては、絶對に許さるべきことでない。しかるに、現今では、何かといへば、直にき腕力沙汰である。殊に、多數者運動には、暴行が殆ど附き物であるかの觀がある。何といふ物騷な世の中であらう。あれは、確かに、今日の社會に於て見出される最も呪はしき傾向の一つであらねばならぬ。わたし共は、毎日の新聞紙上で、この種の忌はしき記事の一つや二つ、殆ど見ない日とてはない。明かに、それは、一つの流行をなして居るのである。殊に、最近、早稻田大學、東洋大學その他の學生騷動に於て見るがように、この傾向が、近來、著しく學生社會にまで瀰漫して來たのは、特に慨嘆すべきことではあるまいか。早稻田大學の場合は、兎も角も或る思想的背景の下に行はれて居るのであるから、まだしもとして、東洋大學の事件のごときは、徹尾徹尾、醜惡なる情實の曝露ではなかつたか。殊に、その校長に對して、直接、脅迫を加へ、暴力を用ひたがごときに至つては、その暴狀、殆ど聞くに堪へない。府立第二中學の場合とて、また同樣である。のみならず、これに類似の學校騷動は、中等學校だけでも、昨年中に、三十餘校四十何件から行はれて居るといふことである。この事實は、わたし共に、何を敎へるものであらうか。勿論、それは、一般的に認められる現代の道德的危機を立證する一例に過ぎないのであるが、それと同時に、それはまた、等しく、現代に於ける自我中心の倫理敎育が、正しく破產の危機に頻して居るものであることを、最も雄辯に立證するものにほかならないのである。

○

現在が文明の末期であることは、第一、その社會情調の上に於て、明らかにこれを認めることが出來る。凡てが紀末的徴候を帶びて居る。頻々と行はれる直接行動や、暴力行使團の横行は、また明らかにこの世紀末的傾向を表示する最も代表的な特調であつて、凡ての過渡時代に免かれがたい現象ではあるが、しかし、それは、この時代に於ける最も危險な特調であることを忘れてはならぬ。それ故に、爲政家は、常にこの傾向の抑壓若しくば緩和のために、特に深甚の注意と、最善の努力とを須ゐねばならないはずである。何故なれば、それは明かに危險なる革命的情調の反映であつて、この病的傾的の發展は、またそれだけ革命的氣運を促成することになるからである。そして、革命は進化の邪道として、極力避けねばならないものであるからである。しかるに、當局者は、この惡傾向の取締りに關して、果して、確固たる方針と定見とを有つて居るのであらうか?。わたし共は、遺憾ながら、この點に就いて疑ひなきを得ない。寧ろ、結果に於ては、當局者自からが、却てこの傾向を助長して居るかの觀さへある。彼等は、餘りに社會の心理、若しくば群衆の心理に盲目なのではあるまいか。

○

人間は一體に強い模倣的本能を有つて居る。そして、それは小兒の動作を見ればすぐ分ることである。小兒の動作には少しも決意といふものを伴つて居ない。單に他人の行爲によりて、自働的に誘導されるのが常である。卽ち、それは模倣衝動の働きなのである。殊に精神的頹廢の徴候を有つた者や、暗示に對して極めて敏感な發育期にある青少年には、殆ど小兒と同樣な模倣的衝動が認められる。極めて輕微な暗示に對しても、彼等の想像力の及ぶ凡てのものが、直ちに他人の行爲を模倣しようとする強烈なる無意識的希望を喚び起すものである。それ故に、模倣心は、意思とは殆ど關係のない一つの自然的作用なのである。

また人間の模倣心は、同時に好奇心と密接な關係を有つて居る。愛新性は人間の通性なのである。人間は兎角、新しい物好きである。何でも目新しいことは、わたし共の注意を惹く、そして、わたし共の想像に活躍の翼を與へる。しかるに、この想像力に培はれた事物の觀念は、わたし共に極めて力強い、無意識的な、而も發作的な欲望を喚び起すものである。そして、この欲望が、また模倣作用の大きな導火力となるのである。愛新欲の最も強い青年に取つて、この模倣衝動が特に危險なのは、またこれがためである。

人間に凡てかような性質を有つて居る。それ故に、善惡とも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に、他から與へられた範例は、恰かも音樂的韻律のように、わたし共の意識の上に反響するのである。殊に、劣惡なアブノーマルな範例ほど、一層強い模倣の暗示力を有つて居る。傳染性を有つて居る。流行は悉く模倣の心理なのである。最近に於ける多數運動の兇惡化は、また明かに流行の一種である。傳染性を帶びた病的心理なのである。大學生の騷動が、直ちに中學生に傳染して行くのは、極めて當然の心理過程であつて、そこには少しの不思議もない。また、東洋大學生の暴行が、赤化防止團長米村某の殺人事件が報道せらるゝと同時に、實行されたことは、決して偶然の暗合ではない。兩者の間には必然的因果關係を有つた一つの心理過程なのである。殊に、社會の上下を通じて、一樣に紀末的情調の漲つて居る現今の社會相にあつては、この模倣の心理は、最も危險な性質を有ち得るものであることを、特に銘記する必要があるであらう。

○

社會の凡ての現象は悉く人間の模倣性によつて說明されるといつても良い。その強大なる無意識的作用は、殆ど一種の神秘性を帶びて居る。等しく、世紀末的徵候の一つをなして居る最近流行の自殺は、また最高度の模倣現象なのである。こゝで模倣の社會心理をくだくだしく說明しては居られないが、要するに、わたし共の日常生活の方法なり、樣式なりは、悉く範例の支配の下に模倣の法則によりて規定され、形成されて行くのである。

それから模倣は大體上から下に下つて來るものであるといふことが、それの根本的法則の一つである。優者は劣者に對して、常に模倣の範例を供給する。精神的に、社會的に、若しくば物質的に優越な地位を占めて居るものが、常に模倣の指導的要素になるのである。社會的階級制が、人間の模倣的本能を著しく發達させたことが、この事實を說明して居る。模倣の指導階級が往時は貴族であつたのが、今日では、それがブールジョワにまで變つて來た。時代の支配階級が、また常に模倣の指導階級なのである。思想にせよ、言語にせよ、習俗にせよ、生活上の必要にせよ、凡てこれを規定するものは、常に支配階級なのである。從つて、あらゆる社會的弊風や、惡德や、罪惡を作り出す本源も、また支配階級なのである。「上の行ふところ下これに倣ふ」は、正に模倣心理の一面を端的に說したものである。

今の支配階級は、この點に於ては、模倣心理の指導的要素としての彼等の使命に、或は最も忠實なものであつたのかも知れない。彼等はあらゆる社會的害惡の模範を作つた。そして直接行動や、暴力使用の悪風のごときも、また明らかに、彼等自からが指導したのである。それは何をいふのであるか。先づ第一

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

には、政府の誤れる思想取締の方針、卽ち言論壓迫、暴力肯定の政策が、それである。第二には、極端なる官尊民卑の時代錯誤、殊に、歐米何れの國に於ても今日その例を見ないほどの警察權行使に伴ふ非常識なる殘虐性が、それである。第三には、議會の頽落、殊に、多數黨の橫暴によりて、言論の絕對自由が保障されてあるべきはずの神聖なる議政壇上をまで、宛然腕力の修羅場と化せしめて居ることが、それである。曰く何、曰く何、細かいことまで拾い立てたら、恐らく限りがないであらう。只、一と言、言つて置かう。國粹會といふがごとき、暴力の行使を寧ろ公然と威嚇の表看板にして居るような、奇怪至極な團體が、たゞにその存在を認容されて居るだけではなしに、寧ろ、政府自からが、陰に陽に、これを庇護するものだとさへ言はれて居るではないか。また、最近、米村某の殺人事件に於てゞも犯人が赤化防止を標榜するものであるが故に、その取扱ひを普通の場合と異にするといふようなことは、明らかに暴力肯定の思想を奬勵するものではない。極左、極右、その何れもが社會の正則なる進化を妨ぐる危險分子であるの點に於て、寸毫も選ぶところのないものであることに、政府は氣が附かないのである。殊に右殺人罪の犧牲者であつた高尾某を表示するに、新聞紙が「君」の字を使用したのが不都合だとかいふので、警視總監ともあらう人から、特にお小言があつたとか傳へられるに至つては、寧ろ沙汰の限りといはねばならぬ。若し高尾某が社會主義者なるが故に、これに對して君の字の使用を禁ずる必要があるならば、何故に、米村某に對しても、また同樣の必要を感ぜないのか。國法を犯した重大犯人として、寧ろより多くその必要があるはずではないか。かういふ些細な事柄が、却て社會心理上、極めて重大な惡影響を與へるものであることに、彼等は少しも氣が附いて居ないのである。警察官や司法官は、特に深刻なる心理研究者でなければならぬ。わたし共は、この點に就て、切に彼等に忠言したい。

○

來るべき時代は、民衆の時代でなければならぬ。しかし、それは純理上の要求としてそうなのではない。たゞ近代文明によりて運命づけられた進化の必然的過程として、そうなのである。それ故に、この過程が善い惡いに拘らず、如何なる理論も、如何なる實行の天才も、この過程の推移を、結局、どう變化せしめることも出來ないのである。從つて、賢明なる爲政者　ために殘されたる唯一の問題は、この必然的過程の推移を、如何に善導して、その正則なる進展を期待すべきかである。

現在が眞の民衆の時代に移らむとする過渡期であるだけに、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勢ひ思想の動搖は免かれがたい。それだけにまた、爲政者の所置にして、若し宜しきを得なければ、確かに一つの大きな危險を伴つて居るものであることも否定しがたい。しかし、この思想の動搖は、結局あらゆる傳統の惰力と、これに代らむとする新理想との爭に基因するものであつて、しかも、その傳統の支柱は既に悉く覆滅されて居るものであるかぎり、結局、落ち附く先きは、明瞭に判りきつて居るのである。爲政者にして、この大局を見誤らないだけの聰明をさへ有つて居るたらば、少しも血迷ふことも、狼狽することもない。思想の動搖は一向に怖るゝに足らない。そして、この過渡期の民衆を善導して行く上に於て、必ずしも左程重大な困難を感ぜずとも濟むはずであると私は考へる。それ故に、今日の政治家にして、儘りに民衆を制御することを望まないまでも(そして、それは恐らく不可能なことであらう)、せめては、餘り甚だしく民衆のために制御されることを欲せないならば、先づ民衆の心理に通曉することが、何よりも、彼等に取つて肝要なことなのである。

○

集團運動若しくば多數集會より生じ得べき兇暴化の危險を取締る場合に、注意すべき最も大切な點は、固より群衆の被誘性であることは言ふまでもない。群衆は、一般に、批判的能力を缺いで居る。その感情は急速に一定の方向に趨り易い。これを一定の方向に誘導するには、單に暗示の一點火をもつて足りるのである。かの聖ジョージが、エルサレムの城壁に於て、全十字軍の前に現はれた前に、彼を認めたものは、確かにたつた一人でしかなかつたに違いない。しかるに、この唯一人から報ぜられた奇蹟が、暗示と傳染とによりて、直ちに、全體の人心を動かすに至つたのである。それ故に、例へば、或る特定の目的を有する集會の取締に於て、ただ注意を要するのは最初の辯論一つである。危機は最初の辯論の最初の五分間に存するのである。最初の辯論が常に暗示の核心を形作る。そして、一度暗示が成立したらば、最早如何ともしがたい。これに續く辯論が、假令穩健であらうと、過激であらうと、大體に於て、一度成立したる暗示そのものには、本質的に何等關するところはない。取締の第一秘訣はそこに存するのである。

併しながら、群衆は、常に破壞的であるとばかり思つてはならない。固より壓制と暴虐性とは、總ての群衆に共通な性質ではあるが、しかし、その破壞性は常に一時的に止まつて、寧ろその本質に於て、群衆は著しく保守的な本能を有つて居るものなのである。のみならず、個人的には無規律であり、無道德であり、獰猛であるようなものでも、一度群衆中に沒入すれば、そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の個人的性能を喪失して、全然集團精神に支配される結果、假令、一時的にせよ、著しく道徳化されて、丸で別人のような道徳主義者にまでなるものである。かの一八四八年の革命時に猛り猛つて、チユイルリーの王宮を占領した困窮せる民衆の一團は、彼等の目を眩惑せしめた數多き高價なる什物の何物にも（その一品は恐らく彼等の幾月かの生活資料とするに足りたであらうが）、全く手を觸れることさへもしなかつたと傳へられて居るではないか。それ故に、群衆それ自體は決して危險なものではない。その指導若しくば取締の方針さへ宜しきを得れば、却て、社會的に隨分有益な、大きな働きをさへなし得るものである。

從つて、集團運動の取締に際して、最も肝要なことは、專らその指導者の人物如何である。その構成要素が何であらうと、そんなことは、さして氣にするには及ばない。群衆精神は常にその指導者によりて形成される。そして、一と度これが形成さるれば、群衆を構成する個々の意思は全く獨立性を失つて、それ自體に於て危險な働きをするものではないのである。これは取締上充分心得置くべき大切な呼吸である。この心理を無視して、見當違ひの取締を行つたがために、求めて運動を惡化せしめた例が、どれだけ多いか分らない。

しかし、こんなことを一々列べて居たら限りがない。要するに集團的性質を帶びた運動の取締には、常に社會心理的基礎に基いた徹底的方針を必要とするのである。

○

革命は進化の正則なる過程でないだけ、それは必ず行き過ぎに終るべき性質のものであつて、社會一般に恐るべき害惡を與へることになるのであるから、政治革命は何としても避けねばならぬ。しかるに、現今見るがごとき、暴力行使團の存在や直接行動派の横行は、明かに革命情調を著しく醸成しつゝあるものであることは否定しがたい。これに對しては、充分徹底的な鎭壓策を講ずる必要がある。思想の惡化を助成しつゝあるものは、決して新思想そのものではなくて、暴力是認の一般的傾向が卽ちそれなのである。そしてこの傾向を直接助成しつゝあるものは、極右、極左兩方面に存する暴力團體なのである。それ故に、これ等の暴力團體を徹底的に撲滅することは、急務中の急務とされねばなるまい。要之、思想そのものは成るべく自由に、行動の惡化は出來得るだけ峻嚴に取締ることを以て、何れにしても、取締の根本方針とせなければならないのであるが、當局の從來の遣り方は、明らかにこの精神を履き違へて居た嫌いがある。切に當局の反省を望む次第である。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新らしき職業

會社ごろ

―某大學教授と某大會社秘書との對話―

武龍家

A「やあお待ち遠うさま、お機嫌よう」

B「やあしばらく」

A「隨分しばらく逢はないね、どうだい學校の方は忙しいかい」

B「もう濟んだよ、暑中休暇になつちまつたから此方のものだよ」

A「もう暑中休暇か、外の事はそう羨山しくはないが暑中休暇だけは大學教授はいゝなあ」

B「君は隨分忙がしいんだなあ、隨分いろんな人が來るんだね」

A「そうだねまあならして一日に三十人はくるよ」

B「その三十人がみんなあの調子かい、あれじやまるで喧嘩じやないか」

A「そうだね、中々恐ろしい事もあるや、今撲ぐられるか、今撲ぐられるかと思ふてはら〳〵して居るんだよ」

B「そりやそうだろう、僕がねあゝやつて隣りの室に五分位居てさへ、大變なんだものな、僕はね今君が撲ぐられやしないか、撲ぐられやしないかと思ふて僕の方ではら〳〵してゐたんだぜ、友人たる君が今撲ぐられても、僕は例の通り此の痩腕じやどうにもならないし困まつてたんだ」

A「そうだつだかい、難有う大變心配させちやつたね」

A「しかしありや一體何んだい」

A「あゝ云ふ商賣なんだよ」

B「商賣へー、へんな商賣もあるもんだね」

A「そりや君、もう今の日本は全く目茶苦茶なんだよまるで御維新頃みたいにね浪人跋扈の絶頂になつて居るんだ。御維新頃にはよく浪人どもが押込みてね町家へ這入つたものだ、それは大抵夜やつたものだが、今はあゝやつて白晝堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

々とやつてくるんだよ」
B「そうかい、それだからあんなに大きな聲をするんだね」
A「おどかしてやろうてんでね、あんな聲を出すんだよ」
B「そりや困まつたものだね、何の事はない金を出せてのかい、どう云ふ理由で錢を出せて云ふんだい」
A「理由も蜂の頭もありやしない此れから雜誌を出すんだから重役に錢を百圓貰ふてくれてのだと、惡化せる思想を善導するからその運動費として五百圓貰ふてくれとか、或は吾々プロの生活安定の爲めに七百圓貰つてくれの、やれ皇室中心説の宣傳費として千圓貰つてくれのつてんだ」
B「成る程ね」
A「それもそれが全くその精神から出て居るのならいゝんだが、實際それなら僕だつて貰へるものなら貰ふてやるよ」
A「じや君、思想の雜誌のプロ生活の皇室中心のと云ふても、そりや何んでもないのかい」
B「そりやそうさ君、實際雜誌を出すの、思想を善導するの何んのかんのと云ふて、それでそれが商賣なんだよ」
B「うんそんな商買があるんかね、驚いちやうね」
A「だから困まるよ。大學教授は宜しく速かに書齋より街頭へ、象牙の塔より早く出でよだねアハハハ……」

B「アハハハハ……でもね君と話して居るのを聞いて居ると、貴様は此の國士を何と思ふて居るの、此の志士を何と思ふてるの、原敬がどうの東京驛だの中岡とか、資本家の走狗とかまた直接行動だの、安田が大磯のつて云ふて居たね」
A「そんな事も云つたろうよ、しかし僕にやそんな言葉は耳に何度も聞かされるものだから、てんで何とも響かないんだ、つまりそんな事を云ふと錢を出すと思ふんだね」
B「じや君は出すのかい」
A「一々出すもんか、出さないからあんな大きな聲を出すのさ、出せばすぐにも歸るさ、然し出して居れば會社は破産して仕舞はうね」
B「だつて君出さなけりや大變だろ」
A「うん絶對に出さなけりや撲ぐられるよ」
B「實際に撲ぐるそりや亂暴だね」
A「そうさ君」
B「君は撲ぐられたかい」
A「僕は一度も撲ぐられた事はない撲られて堪るもんかい」
B「そうかい、じや君撲ぐられた人もあるんだね」
A「そりやあるよ」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

B「うん、亂暴だね、錢を出せ、出さなければ撲ぐるそれじやホントの强盜じやないか、いくらなんでもまさかそんな亂暴はしまい」

A「處がね、僕は一度も撲ぐられないがよく撲ぐられる人があるんだぜ、」

B「嘘だろ、それが事實なら實に現代の不祥事として大に悲まなければならない、それがホントなら政府と云ふものは頼み甲斐がないね」

A「處がね此の丸の内のすぐ向ふの郵船會社で僕みたいな仕事をして居る男がやられた事があるんだ」

B「郵船會社でね」

A「燒けたあの家でね」

B「辱けなくもあの二重橋の本通りの家でだね」

A「撲つたつてのはこうなんだ、兎に角ね例の國士がやつて來て、そこは何と云ふたか知らないが要するに錢を出せつてやつたんだ、處がその秘書はそれは理由のないものとして斷はつた、するとその國士が眞赤になつて、貴樣は此の國士を遇するの道を知らん奴だ、禮儀を知らん奴だと、眞赤になつて大聲に吠え立てて立上つたかと、思ふと、鬼の握拳みたいな拳固を振上げて、ボカンとその秘書の右の横面をたゝきつけた、するとその秘書は、極く平氣なものでお序に左の方もどうですと云ふて顔を差出した、國士は怒り頭髪を立てゝ居たものだから、こいつめとばかり左の頬をまたボカリとやつたんだ、撲つた奴は晴々して居ると、撲られた方で、どうです眼から火が出ました樣なたゝき方で非常に力が這入り過ぎてましたから、もしやお手にお怪傷はありませんですか、隨分痛く二つまでおたゝきになつたのだから、さぞやお手の方も痛いでしょうとやつたものだそうだ」

B「ふん、それでどうしたい、」

A「さすがに手も痛いとは云はなかつたそうだ」

B「その秘書はクリスチヤンだね、右の頬を打つたものに左の頬を打たせるなんて處は實に勇敢だね」

A「君にそう勇敢だつてほめても、撲ぐられてる當人は隨分痛いぜ」

B「それでどうしたい」

A「撲られ損の撲り徳て奴さ」

B「撲られた時、何故警察に出さないんだ、それこそ勇敢に警察につき出せばいゝじやないか」

A「ところがそうじやないんだ、もしその國士をだね、警察に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

突出せば、その國士は拘留されるだろう、するとその國士の友人がまた郵船へ行つてだね、君の處で屆けたものだから、あゝして拘留されたのだ、拘留されては自由がないから誠に氣の毒だ、此の際友人として何か差入れものをしなくてはならない然し吾人には一番大切な錢が無いのだからその錢をくれと云ふてまた大弊を出すと云ふ段取りだ」

B「こうかね」

A「それで錢を出せばよし、出さねばまたポカリとやられる、然し錢を取ればその錢で何も差入れなんかしないよ、みんな自分達が飲むか女を買つて仕舞ふんだからね」

B「そうかね、驚くね」

A「君は非常に驚いてるが、初耳かい」

B「初耳にも何んにも、そうしてその男が國士だなんて云ふて居てゝ、政治にでも關係してゐるのかね」

A「關係して居るのもあるし、ないのもある。要するにこれが飯を食ふ種なんだ、商賣なんだよ、此れを要するに國士業者たり政黨なら政友會業者たり、憲政會業者たり、皇室中心業者たり、勞働運動業者たり、社會主義業者たりで、つまりブローカーの一種さ」

B「うん、政治に關係してゐてもブローカーかね」

A「さうさ君、今どき自由黨當時の氣骨稜々と云ふた壯士なんてものはゐないよ、それは芝居に居るんだ、意氣のある壯士は一匹だつて居ないよ、實にごろつきばつかりだよ、大正押込ばつかりだよ、それにまた今の政治家達もよくない、壯士を飼つて置くと云ふ事をしないで、自分の黨の必要な時にはそれを利用する、そうでない場合は棄てゝ置く、だから喰ひつなぎに、大に國士張つてごろ／＼して歩るくのさ、政治家て時代遅れの實に低級者の群だからね」

B「成る程ね、政治が墮落してると云ふ此れが生きた證據だね、實に君の此の生きた話をきくと益々出でて益々醜惡なものだね」

A「どうだい驚いたかい」

B「實際君なんか命懸けだね」

A「そうだよ、毎日／＼今日は擲られやしまいか、今日は擲ぐられやしまいかと、國士志士がくれば、それが歸るまでは戰々兢々たるものたんだよ」

B「でも君でもたまにはやる事もあるんかい」

A「そうだね、あんまり、八釜しく云はれると擲られ想になると此れでアイスクリームでも飲んでくれ給へつてね五十錢か一圓はやるんだ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

B「そうかい、あんな紋附を來た男のおぢさんがそれで歸るのかい」

A「然しね會社銀行に依ると、少し暗い處があるとあの大聲に驚いて振え上つちやつて、百圓やつたり五十圓やつたりするんだそうだ、だから月に少くとも二百圓から三百圓位にはなるとさ」

B「そうかね、驚くね、また君來たぜ來たぜ名刺を見せ給ひ、なに亞細亞青年聯盟總理て肩書だね」

A「總理さ、然し此んな聯盟だつてタッタ一人なんだから驚くよ、總理も小使も書記も此男一人なんだぜ」

B「そうかね、君僕は此の次ぎに來て要事を話すから早く逢つてやり給へよ、あれあんな大きな聲を出して居るぜ、總理が來たのに資本家の犬め早く出て來いなんて云つてるぜ、驚くね君實際君の仕事は命懸けだね」

（了）

暴力行使、直接行動、脅迫强請等の取締は緩怠に非ざるか

法學博士　堀江歸一

近頃新聞紙上に現はれる記事に據ると、何としても世間の風潮の險惡であることは、爭うを得ない。盛に暴力を行使して、自己の欲する所を遂げようとするものがある。一人二人に止まらず、多數の人々が結社を作つて居る場合もあり、又時に直接行動と稱し、理否を問はず、他人に腕力を加へる者がある。又何か理屈を付けて、會社銀行又は個人に脅迫を試み、金錢を强請することも行はれるようである。人の口に戶は立てられないと云ふのは、古來の諺であるが如く、人の思想は絕對自由を認められ可き領域に居るものであつて、何人の容喙を許さない。而して人が腦裡に感じたことを言論として、文章として世間に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

發表する場合に於ても、社會の秩序を壞敗するに至らざる限り、自由に置かれ可きものであつて、若しも是等に對して反對の意見を懐く者があるとすれば、同じく言論文章の力を以つてしなければならない。此方則を逸して、言論文章に對するに暴力を以つてし、文筆言論の士に危險を加へることの豫感なり、實感なりを與へて、其所信を二三にせしめようとか、又は沈默を守らしめようとか云ふことが起つたならば、其れは甚だしき非違であつて、文明國の光輝に一點の汚辱を印したものと云はざるを得ない。

直接行動と稱するもの丶如き、外國の勞働運動に行はれる「デヰレクト・アクション」の意味を履き違へて、我國に流行するに至つたものと思はれる。資本家が頑冥であつて、正義の何ものたるを知らない。集團の力を藉りて、勞働者を壓迫し、勞働者の主張には如何に道理があつても、耳を傾けない、斯る場合に勞働者は最後の手段として資本家の覺醒を促す爲めに、直接行動に出づるものであつて、事情の諒とす可きものありとされるに拘はらず、尙ほ世間の非難を招き、公衆の同情を失ふの趣きなきを得ない。然るに全然境遇の違つた者が名を直接行動に藉りて、自己の非望を充さうとする、其失當の所業たるや論を俟たないのである。

金錢を强請したり、金錢に換へられ可き物件を强要したりすることも亦近頃の流行であるやに聞く。畢竟一方には資本主義に據つて、徒手鉅萬の富を獲得する者があれば、他の一方には資本主義に壓迫されて、自己幷に家族の生活に要する一日の糧を得ることの出來ない者がある。後者の内、自己の境遇に堪へられない、又何としても此境遇を脫するを得ない者は如何なる處置に出るであらうか。此内の聊か狡智に富む者は詐欺をする、腕力に豐なる者は脅迫をやると云ふのが現代の世相ではあるまいか。然しながら之を以つて資本主義に對する天の配劑としてならば、大なる間違である。資本主義に伴ふ過誤の著しき場合には、吾人は合法的手段に訴へて、資本主義其ものを掣肘することを必要とする。資本主義に對するに暴力主義を以つてし、兩者を爭鬪せしめることに依つて、勢力の均衡を得ようとするが如き、法治國にあるまじき所として、吾人の排斥する所である。

斯の如く我國に暴力行使、直接行動、脅迫强請等の行はれるに至つた原因は何處に在るであらうか。數年間の歐洲戰に於ける實驗に依つて、「力」の如何に强いものであるかと云ふことに就て、世界の人々が盡く教訓を受けたことも一の原因であらう、戰爭に依つて、國民の感情が荒み、殺伐の事を好むに至つたのも、他の原因であらう。然し私は斯る惡風が特に我國に甚だしきを見るに至つたのは、我國に於ける政治上の實物教訓が之を然らしめたものであると考へる。即ち最近數年間我國政界の實狀を窺ふに、道理に根據を置いた政治は少しも行はれて居らない。多數を擁する力があれば、如何に民衆の利益に反した事であつても、行はれるし、力が伴はなければ、如何に條理に適つた事も行はれるを得ない。立憲政治だ輿論政治だと云つた所

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で、實際には如何なるものであらうか。言論の府たる議會に於ても、肝腎な言論は多數の力を擁した所謂野次なるものゝ喧騷に敵するを得ない。之を經濟社會の實際に徴しても、資本家が團結して、非望を遂げようとすれば、之を達するを得るし、株主總會の如きも、力の强弱に依つて、何とでも決議の左右されるとがある。斯る事例を擧げて考へると、腕力と最も緣の近い、卽腕力の最も多く勝れた者が優者と爲り得ると云ふ社會は國技館ばかりでなく、世間一般或は然りとするに至つたのではあるまいか。唯一般世間と國技館と違ふ所は國技館に於ては自ら腕力を有する者が優者であるが、世間では腕力ある者を使役し得る人が優者と爲る一事に外ならない。卽ち今日の狀態を以て進んで行つたならば、封建時代に富豪や、町人が相撲取りや町奴を多く抱へて、自家の安全を謀つたと同一の事相の出現するとを免かれないであらうし、又斯る輩を多く召抱へた者は他に對して如何なる非道をも敢てして、憚らざるの結果を生ずるであらう。

私が暴力行使、直接行動等を以つて不可なりとするは、其正義の觀念に反するの故を以つてゞある。或は云ふ、一部の團體は決して輕擧盲動を敢てするものではない、正邪の判斷を嚴重にし、理否曲直を明確にし、法律の威力の及ばざる所に向つて、制裁を加へるのである、而して金錢の如きは全然眼中に置くものでないと。斯る場合には運動者の心事は之を諒とす可きであるが、由來少數の人々が集まつて、或る事相なり、或る人物なりに就て、判斷を下すに當つて、果して其の公正の保たれると云ふ保障があるであらうか。自ら批判者自身の性癖が事物の判斷を左右することを免かれない、斯る偏した考へを以つて、或る者を指彈したり、或る者を懲戒したりする、其結果は如何であるかと云へば、幕末に行はれた天誅騷ぎ、今日學校の寄宿舍などに見る鐵拳制裁、合衆國の西南部にある黑人に對する私刑と同一の弊害を醸さゞるを得ないであらう。他人に就て金錢を强請する場合の如き、强請者は或る人が法律に問はれないまでも、反社會的手段を以つて、暴富を獲得したものと認め、其上前をはねることを當然であるとして、之を爲すのであつて、恰も藝者屋や、待合に町内の地廻りが出沒して、振舞酒を飮んだり、小遣錢を貰つたりするのと趣きを一にするものと見られる。然し此場合に於ても、以前の場合と同じく、何人を以つて暴富者とするか、誰れを以つて、不正利得者とするかの判斷は甚だ困難であつて、浮つかり道途の風說などに動かされて、所謂不正者流と認めた者の征伐を企てたならば、社會の秩序は全然破壞されざるを得ない。

私は斯る風潮を制する爲めに、何故に警察がモツト活動しないかと云ふことを不思議に感じる。社會に暴力跋扈の風を生ずる、脅迫强請の習を橫行せしめるが如き、警察力の缺陷を示すものであつて、天下の良民は世に處する上に於て、危險の念なきを得ない、而して警察の活動と共に、必要であるは、行政當局者が司法官憲と協力して、綱紀を肅正し殊に官紀の紊亂を矯正し、苟も不正の富を貪り不義の利を漁する者に對しては其れが如何

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

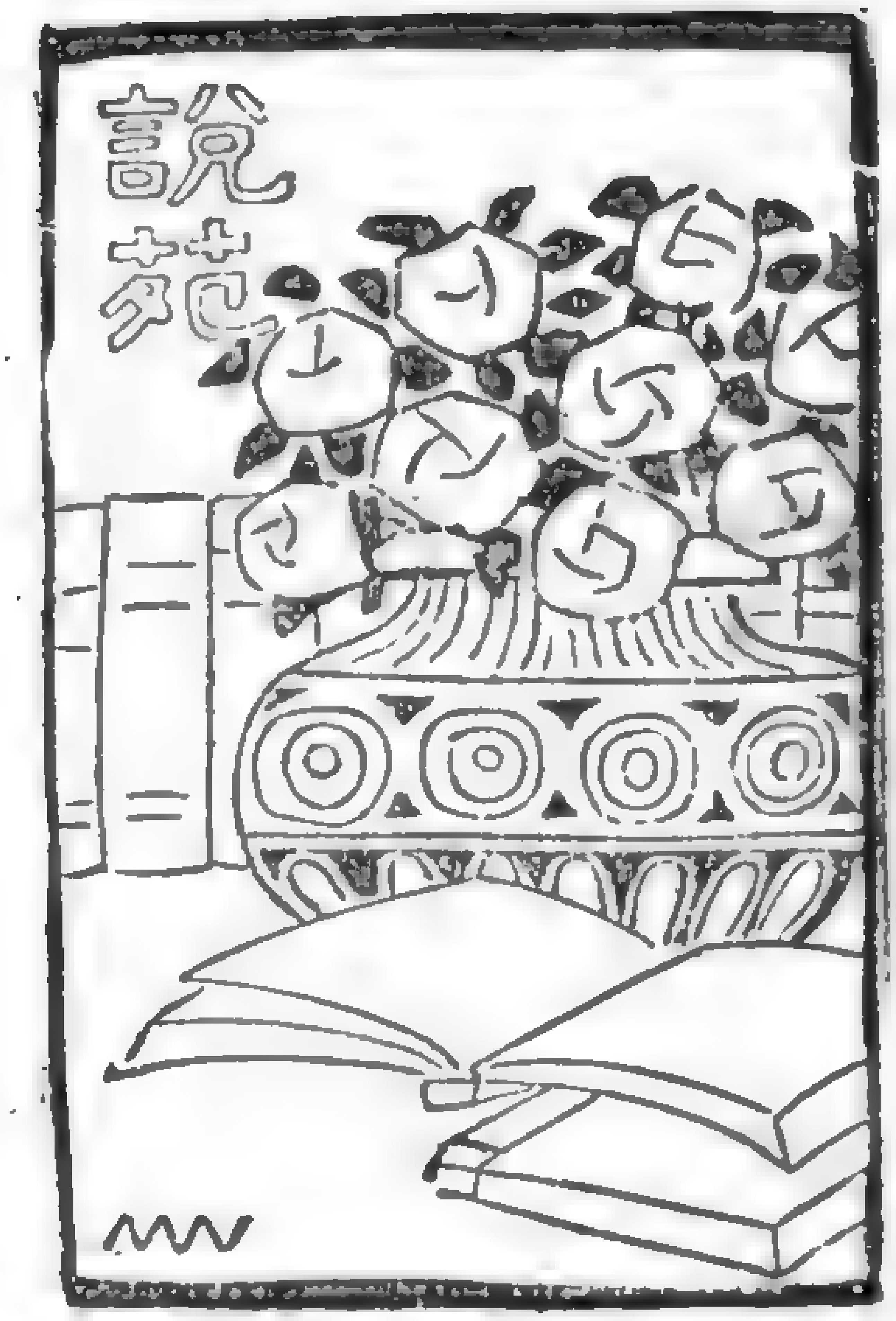
なる官位に居り、高官に列する者もあらうが、假借する所なく、之を檢擧して、司直の實を擧げることである。思ふに暴力行使、直接行動、脅迫強請等が特に近頃に爲つて、著しく人目に觸れるに至つた如き、社會全體の綱紀の紊亂之を然らしめるのではあるまいか。果して然らば其本を匡すのが急務であつて、事の末にのみ趨つた所で、徒勞に終らざるを得ない。此點から云へば、資本主義の產物として、社會を毒するが如き奢侈逸樂が行はれたり政治の要地に居る者の素行に指彈す可きものがあつたり、實業家と稱する者が存外實業に志さずして、虛業に耽り、政權を利用して、暴富を占め、更に其暴富の一部を獲取する政黨領袖があつたりするとは、盡く社會の綱紀を亂し、腕力ある者をして暴力行使や、直接行動に狡智ある者をして強請脅迫に赴かしめるのである。古い言葉ではあるが、上の好む所、下之に傚うと云ふのは、恰も我國今日の時弊に適中するものであらう。

最後に私が時弊匡正の爲めに、世人に望む所は輿論の制裁を嚴にすることゝ、識者が世に處する上に、態度の毅然たることの二點である。前者に就ては、別に說明を要しない。後者に就て一言すれば、我國に於て所謂有產者階級に屬する者は兎角事勿れ主義であり、又後難を恐れる念に強く、強請脅迫に會へば、些細の金錢を與へて、厄介拂をしようとする。是れが我國に於て斯る事を業とする者を跋扈せしめる所以であつて、若しも實業界なり、其他の方面なりに於て、地位ある人々が固く相戒めて、總て脅迫強請を擊退する申合せをし、若し不正非理の要求に應じた場合には、之に相當する曲事を犯したものと認める位の考を持つに至つたならば、自ら強請脅迫に依つて、金品を貪る者を絕滅し得る方法と爲るのである。然も實際に此事の行れないのは、實業家などの心事行藏に後暗い所があつて、其虛に乘ぜられるのではあるまいか。然らば毒を以つて毒を制し、血を以て血を洗ふの道理であるが、然も社會一般に及ぼす弊害を考へれば、彼等を取扱ふに、喧嘩兩成敗を以つてするを得ない。不正者流に對して總て課するに法律上并に道德上の制裁を以てす可きである。尙ほ一ツ私が強請の一種として、最も嫌忌するものは孤兒院とか、養老院とか云ふ看板を揭げたり、所轄官廳の免許狀を示したりして、粗惡なる物品を高價に賣付けたり寄附金を強要したりする徒の徘徊することである。孤兒老癈者を憐れむの念は何人も之を持つて居る。彼等をして路頭に迷はしめる、他人に憐れを乞はしめることの如何に氣の毒であるかも能く知つて居る。彼等を救濟し、生活の安定を得させる國家的施設の存しないのは、社會政策上の一缺點であつて、國家としては一方に貧困に對する徹底的防止策を講ずると共に、乞食の所業を爲す者を有罪とする位の決心を持たなければならない。前者に於ける國家の施設の不備である爲めに、貧民をして強請の所業に出でしめる、孤兒院の兒童などの內に、身振り巧みに、人に憐愍の情を催さしめる者のあるを目擊する每に、私は彼等が將來如何なる人に爲るか、社會に負擔を加へる底の所業を爲すに至りはしないかと思を走らせて、嘆息するを禁ずるを得ざる次第である。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

不思議な都「上海」

村松梢風



(一) 着いた日の事

昨日――三月廿一日――の午前九時に長崎を出帆した長崎丸は、一晝夜の航海をして、今朝は明け方から楊子江を遡つてゐた。

私は、眼が醒めると直ぐベッドの上で服を着て、キャビンを出て甲板の方へ歩いて行つた。船の動揺が全く止んでゐて、それに昨夜うまく睡れたお蔭で頭が輕くなつてゐるので大變氣分がいゝ。かう言ふとなんだか海が荒れでもしたやうに聞えるが、實は昨日からの航海は、一年中にもこんな日は滅多に無いといふくらゐな上凪ぎだつた　だから船酔ひなぞしてゐる弱蟲は船ぢう探したつて目つかりつこはなかつた。處が私は、昨日午頃五島沖へ差掛つて、食堂へ出た時船がユラユラツと感じたので、忽ち怖ぢ氣づいてキャビンへ逃げ込んでしまつた。私は無類に船に弱い。十二三歳の時分に漁船に乘つて遠州灘へ運び出されて、ヘドを嘔き乍ら目を廻したことがあつたが、それ以來海と船とは怖ろしくて仕方がない。五間か六間の漁船が五千噸の汽船になつても、遠州灘の荒浪が盥洗の水のやうに平らになつても、矢つ張り怖さに變りはない。船底がガリガリ地にくッ附いてゐれば安心だが、それでは船が進まないし、あの底知れぬわだつみに浮ふんでゐるのだと考へると、それだけで不氣味でたまらない。船に乘つてゐることは、てうど地震に遇つてゐる時

のやうなあの極度の不安定な恐怖を連續的に感じてゐる。だから揺れようが揺れまいが、私は船に乗れば醉ふものだと自分で極めてゐるのだ。そんな譯で、直ぐにベッドへもぐり込んで、恥も外聞もなく寢通して、食事はボーイに運んで貰つて食べた。——が、今朝は全く元氣を恢復してゐた。私は昨日の事は知らないやうな顏をして、確りした足取りで、廊下を歩いたり階段を昇つたりした。

甲板へ出ると、冷つこい朝の風が寢起きの顏へぶつかるやうに吹いて來た。私よりも早い人々がチラホラ散歩してゐる。私は手摺につかまつて四方を眺めた。が、から見渡したところが、一向河らしい樣子はない。黄色い泥濁みの水が眼の屆く限り續いてゐる。空は朝からカラッと晴れて、眩しいくらゐな太陽が其の濁水の上をキラ〳〵照り付けてゐる。水平線はくッきりと見えるけれども、其の向うには青い空があるばかりで何物の影も無い。「是れでも河かしら」と私は思つた。けれどもよく〳〵見ると、波の立ち具合が海とは何處か異つてゐる。そして、其の水は船と反對の方向へ向つて可なりの速度で流れてゐる。ノアの洪水を眼の邊りに見たら恁うだらうかと云ふ氣持がした。つまり、世界が洪水に浸つてゐると思へば間違ひはない。支那は大國だからすべての物が規模が大きいと聞いてゐる。けれども、此の楊子江は、大きいばゝりで何の風情も無かつた。風をひきさうだから私は間もなくキャビンへ戻つた。

十時頃淏松を通つた。楊子江の支流の黄浦江の口もとの河港だ。私達を乘せてゐる船も其處から本流をそれて黄浦江を遡り始めた。さすがの楊子江もこゝら迄來ると餘程河幅が詰まつて漸う陸が見えるくらゐになつてゐたが、黄浦江へはいると更に其の幾分の一かに狹ばまつて來て、兩岸の景色がはつきり見えるので初めて河らしい氣持になる。淏松の港には無數のジャンク船が木の葉を散らかしたやうに碇泊してゐた。入江のほとりの村にはもう青々と芽をふいてゐる楊柳が茂つてゐた。對岸には煉瓦造の倉庫が建つてゐる。堤防の上の道路を幾人もの支那人が長い服の裾を風になぶらせながら歩いてゐる。それを見て私は初めて支那へ來た事を強く意識した。

船客は大抵甲板へ出てゐた。畫家らしい人は、スケッチブックを展げてジャンクの形を樣々にスケッチしてゐる。私の横に立つてゐた一人の紳士は、河べりに倉庫が建ち並んでゐるのを見ると、未開地の旅を續けて來た人が急に文明の風にあたつた時のやうな歡びの聲を上げて、伴れの人を顧て言つた。

「どうです、立派な倉庫ですなあ！支那もうんと開けて、此の河岸にべつたりこんなのが並んぢなはんけりや嘘ですわい」

彼は此の黃浦江の河べりに、一本の楊柳は愚か草の根さへ絕やしてしまふ日を空想して見るかのやうな眼つきをした。餘念なくスケッチをしてゐた畫家は、ジロリと橫眼で事業家を睨んだ。

「何を云つてやがるんだ、折角のいゝ景色が、あの殺風景な倉庫のお蔭で代無しになつちまつたぢやないか、此の上建てられて溜るもんか」と、其の眼はありあり語つてゐる。

沿岸の風景は進むに從つて文明化して行く。軈て一時間ばかり經つと、私達の眼の前には、河に臨んだ純洋風の大市街が出現した。長崎丸は滙山碼頭に着いた。

稅關で手荷物の檢査を受けねばならない。が、それは船へ出迎へてゐる旅館の番頭に委せて置いて波止場から自動車に乘つた。初めて上海の街を見た。其の通は殆んど西洋建築ばかりだつた。ニス塗の人力を曳いてゐる苦力が無數にウロ〳〵してゐる。人がゾロ〳〵歩いてゐる。頭を布で包んでゐる印度人の巡捕が棍棒を持つて往來の整理をしてゐる。どの巡捕もどの巡捕も眞つ黑い頰鬚を生やして、軀幹長大容貌魁偉でタゴールのやうな風采をしてゐる。こんな立派な體格と容貌とを持ち合せてゐる國民が外國に征服されて巡捕位で甘んじてゐるのは不思議な話だ。私はふと印度の獨立運動を聯想した。と、向うからお葬式が遣つて來た。眞紅の服を着た西洋樂隊が先登に立つて、其の後から道化役者のやうな着物を着た支那の樂人が隨いて來る。棺を載せた馬車は美しい造化で飾られてゐる。先登の樂隊が囃し立てることか、「あな嬉し、喜ばし、戰ひ勝ちぬ——」あの行進曲を、ドンチャン〳〵と囃し立てる。亡者が浮かれて馬車の上から踊り出しさうだ。

西華德路の豐陽館といふ日本旅館へ着いた。

(二) 明るい上海、暗い上海

今年の東京はいつ迄も寒さが續いたので、日本を發つ時は冬衣の儘で出て來たが、上海へ來ると氣候が一と月先へ進んでゐた。楊柳は綠の新衣を着け、桃や櫻が一どきに咲いてゐた。畠は菜種の花盛りで、麥が一尺位に伸びてゐる。其の上每日無類の上天氣が續いて殆んど一片の雲さへも見る日は無かつた。道ゆく人は輕さうな春の帽子や着物を着て歩いてゐる。月夜の晩に自動車を驅つてフランスタウンの住宅區域邊りをドライヴすると、日本の春と違つて大氣が澄んでゐるので月が皎々と冴え渡つて、街路樹の梢や建物の屋根の線がくつきりと墨で描いたやうに寫し出される。月の光を背後から浴びた大きな煉瓦建の家の高い窓から明りが漏れて、桃色のカーテンの掛つた部屋の中

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

では、此の家の獨り娘が樂譜を前に置いてピアノのおさらへをしてゐるのだらうか？それとも、若い細君が、今夜は莫迦に遲い良人の歸りを待ち佗びて今しも讀みさしの小說本を邪慳に拋り出したまんまソファーに凭れながら、夢見るやうな眼つきをして、結婚當時の樂しかつた事を追想したり、良人が歸つて來たらあゝ言つてやらう怎うも言つて遣りませうと口說の種を考へてゐるのだかも知れない――。私の空想は、一瞬間の長さで、自動車の飛び行くまゝに消えたり寫つたりする。

暖かい午後。同宿の人に誘はれてジエスフヰールド公園へ遊びに行つた。靜安寺路といふ大通（西洋人は此の通をバブリングウエルロードと呼んでゐる）を行き盡した處に靜安寺といふ古刹がある。其の前の往來の眞ん中に大きな古井がある。古來名高い井戸ださうで、側らに「天下三泉云々」と其の由緖らしい物が石に彫刻してある。のぞいて見ると五六尺位で水があつて、其の水は溝水のやうに汚なく金氣が浮いてゐるところへブク〳〵瓦斯が吹き出してゐる。是れで天下三泉が聞いて呆れる。此處が電車の終點になつてゐるので、それから先は黃包車（ワンポツ）（人力車のこと）へ乘る。公園迄廿丁位の間一直線の大道路が通つてゐる。此の附近は新らしく開けた住宅地で、庭園を廣く取つた立派な住宅が並んでゐる。日本で見る西洋建築と違つて、材料は概して粗雜だが、様式が複雜で、屋根だの壁だの窓だのの色彩の變化があつて、調和がよくとれてゐるのでどの家も藝術的な感じがする。白煉瓦ではり詰めた豆腐のお化けみたいな家は無い。西洋へ行つて見ない自分はせめてこんな處で所謂文化的生活をやつて見度いものだなぞと空想しながら、車の上から一軒々々のぞいて行く。公園の前には風流なカフエーが二軒ばかりある。澤山の自動車が道端に列を作つて各々の主人の歸りを待つてゐる。入口には印度人のお巡りさんが立ち番をしてゐる。公園は可成り廣いが、それが實地以上に廣く思はせるやうに自然の形象を主んじて造られてゐる。わけても一番奧へ寄つた木立の間の道が私は氣に入つた。小鳥が頻りに囀つてゐる。蝶々が舞ひ戯れてゐる。道ばたには、白や紅の美しい花が咲いてゐる。家族伴れのや、女ばかりのや、戀人同志や、いろんな組みがゐる。女達はどれもこれも目の醒めるやうないゝなりをしてゐる。遊蕩兒らしい男が三四人の女を伴れて木蔭の芝生で遊んでゐる。眞紅の着物に同じ色の帽子を冠つて、はでな靴下をはいた女は、厚化粧の顏で見るとくらうとらしいが、どうしたものかたつた一人で芝生の上に寢轉がつて、やけにシガレツトばかりふかしてゐる。黑地に紅の裏を附けた服を着て、黑の羽根帽子を冠つた若い細君がベンチに腰掛けて寫眞機をいぢつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てゐる良人の側へ寄り添つて顏を覗き込むから、何か內緒話しをするのかと思つてゐたら、チユーツと音を立てゝキッスをした。私は男同志では始まらないのでいゝ加減にして公園を出て前のカフエーで茶を飲んで歸つた。

上海ではソシヤルダンスが大變流行つてゐる。支那の芝居は別として、外國人の娛樂機關と云つては活動寫眞ぐらゐより外には無い土地だから、ダンスが流行するのも無理はない。大きなホテルやカフエーには必ずダンシングホールの設備があつて、每晚多くの男女が其處に集まつては夜通し踊り拔いてゐる。上海人の生活を最も華やかに濃厚に彩けるものはソシヤルダンスである。就中一番大きくてそして最高級の踊り場がニユーカルトンカフエーである。其處では、活動寫眞館と、食堂と、舞踏場との三つを兼業してゐる、食堂へ行つて晚餐を取つて、九時十五分から十一時迄活動寫眞を觀て、それからダンスをすると云つた趣向になつてゐる。勿論其の一つだけでも差し支えない。が、ダンシングホールが開かれるのは十時からだ。一時二時に至つて益々たけなはになるのだから、普通明け方の四時五時とならなければ全部の室は退散しない。何時行つても百組位の客は這入つてゐるが、特に土曜日の晚は恒例で各國の領事夫妻を初めとして一流の紳士淑女はみんな遣つて來るので數百のテーブルが塞がつてしまふ。踊り場は楕圓形で差し渡し三十間位の廣さだ。正面がステージでオーケストラの人數は二十人位ゐる。周圍は總二階で此處にもテーブルがある。私はダンスは眞似事も出來ないので二階に陣取つて酒をのみながら見物するばかりだ。大體私なぞと來ては、厭に東洋趣味に出來上つてゐる人間だから、本當を云ふとダンスなぞといふ毛唐人のすなる柔弱な遊びは性に合はないのだが、併し其の偏屈な私でも、あの陽氣なホクスロツトや、靜かなワルツの曲につれて、互ひに抱き合つた男女が巧みに踊り出すのを見ると、何時か自身の魂も浮かれ出して一緖に踊り度くなるのである。爺さんも踊る、婆さんも踊る。若い娘は戀人の胸に顏も體もぴつたりとくツつけて、死んでも離れまいといふやうな眼つきをしながら踊つてゐる。そこへ假裝した幾組かゞ舞ひ込んで來る。曲線と色彩の渦卷を紅や靑のサーチライトが橫ざまに照らし付けて、人々の歡樂を彌が上にも高調に導いていく。踊りの合間々々には、テーブルに着いたレデイ達が、寶石を鏤めた踊り衣裝と厚化粧の顏の美しさとを競ひ合つて、鳥の羽根の團扇を使つたり、五色の酒を盛つた盃を口に當てたりしながら、伴れの男に機嫌を取らせてゐる。

此處のほかで私の見物した踊り場は、オールドカルトン、カフエーパリジヤン、マキシムぐらゐなものだ。パリジヤンやマ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

キシムになるとニユーカルトンの何分の一しかないので雄大壯麗の點では到底比較にならないが、其の代りにぐツと平民的になつて余く異つた氣分がある。天井や柱に電燈を仕組んだ造花だの果物の實が生つてゐるやうな裝飾がしてあつたりして、オーケストラの人數も半分位になる。此處ではソシヤルダンスのほかに、專屬のダンサーがあつて餘興にバレーダンスをして見せる。來る客もさう改まつたなりではなく、ふだん着の儘で踊つてゐる者もある。眼ぶちを黑くして頰べにを濃くつけた商賣人の女が、自墮落に頰杖をついて、いゝ客はないかといふやうな眼つきでギヨロ／＼見廻しながら、强い酒を飮んでゐる。蘇人らしい男もゐれば、水兵の服を着て踊つてゐるのもある。黑ん坊の樂師が滑けた顏つきをしてクラリネットを吹いてゐる。醉つぱらひの爺さんが、踊り半ばに靴が片つぽ脫げてしまつたので、龜の子をブラ下げたやうにブラ／＼やりながら、變な腰つきをしてテーブルへ戾つてくる。總じて極く自由で、餘り廣くないだけに一層濃厚な、胸ぐるしいほどの歡樂と淫蕩の氣分が滿ち滿ちてゐる。かうして夜は音樂と踊りとで更けて行く。

上海といふ處は、のどかで、明るくて、さうして華やかな都會である。が、それは物の一面を見たばかりである。私は更に振り返つて、暗黑な上海の一部分を覗つて見よう。

上海へ來て、私は怖ろしい話を幾つも聞いた。其の一つは、今年の正月頃の出來事だ。

或る日本の婦人が、大馬路を歩きながらショーウインドを眺めてゐた。大馬路といふ街は、所謂南京路といふ大通で、東京の銀座以上の大商店の櫛比してゐる上海第一の繁華な處だ。ホリイトアウエイとか永安公司とか、其のほか有名なデパートメントストアなどは大概此の通のうちにある。眞ん中を電車が通つてゐる。車道には自動車が絕え間なしに續いてゐる。兩側の人道は極く幅が狹いのに人通りが劇しいので少しうか／＼してゐようものなら忽ち車道へ突き落されてしまふ。其の賑やかな大馬路を右の婦人は買ひ物でもするつもりで步いてゐた。ショーウインドの前に立つてうつとりと中の商品に見惚れてゐると、其處へ一臺の自動車が走つて來て、一人の西洋人が自動車から飛び降りて、ツカツカと婦人の側へ寄つて行つて肩のあたりをポン／＼と叩いた。婦人はヒヨイと振り向いたが、彼女は其の途端にフラ／＼として西洋人の腕へ倒れ掛けた。一寸見ると甘つたれてゐるやうにも見えた。西洋人は其の婦人を兩方の腕で抱くやうにして自動車へ連れ込んだ。自動車は直ぐに走り出した。それは僅々一分か二分の間の出來事であつた。往來の人々はそれを目擊してゐたけれど、無論其の日本婦人と西洋人とは親しい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

間柄だとしか思はれないので誰れも怪しむ者はなかつた。處が、其の日本の婦人の家では、晝間彼女が大馬路へ買ひ物に行つた儘夜になつても歸つて來ぬので非常に心配し始めた。段々騷ぎが大きくなつて警察部が活動すると、漸く前の事柄だけが判つたので、彼女は魔醉劑を嗅がせられて誘拐されたものだといふ事が確められたが、犯人が上らないので何處へ連つて行かれたのか判らない。其の日本の婦人は、いまだに行方不明である。

日本から來たばかりの若い夫婦者が、夜街を見物に出て其の歸途に通りすがりの黄包車（ワンボウ）に乘つた。良人の乘つてゐる車が先に走つてゐて、妻を乘せた車は後から來た。處が、途中で良人はふと後ろを振り返つて見ると、何時の間にか妻の車が見えなくなつてゐた。大騷ぎをして探したが結局行方が知れなかつた。其の細君も、到頭其の儘何處かへ伴れてかれてしまつて、いまだにありかが判らないといふ。それも最近の出來事である。

或る名譽ある日本の紳士が上海へ來てホテルに滯在してゐたが、ある晩街を散歩して小公園の中を通ると、ベンチに腰掛けてゐた西洋婦人が「グルナイ――」と小聲で呼びかけた。一寸驚いたが同じく「グルナイ」と答へて其の前まで立ち戻ると、女は愛嬌のある調子で、

「日本の紳士、少し話していらつしやいな、わたしは今晩たつた一人で淋しくて仕方がないんですから」と言ふ。

紳士は「ハヽア淫賣婦だな」と氣が付いた。が、彼は豫てから西洋の淫賣婦を買つて見度いと思つてゐたところなので、誘はれるが儘に女の脇へ腰を掛けて、互ひに怪しげな英語で話し合つた。其のうちに女は、是れからわたしの家に遊びに行かないか、家へ行つてもわたし一人だからちつとも心配はいらないと言ふ。紳士は内心期待してゐた處ではあるし、それに薄暗い電燈の光で見たところなか／＼の美人だから、直ぐに承諾の旨を答へて女と腕を組んで公園を出ると、折よく一臺の幌馬車が來かゝつたのでそれへ乘つて女の住みかへ行つた。女の家は、フランス租界も街はずれに近い淋しい處にあつた。彼は暫くは其の異人種の女の濃厚な愛撫を受けて有頂天になつてゐた。すると其處へ誰れか人がやつて來て部屋のドアを劇しくノックした。女は顫へ上つて言つた。

「さあ大變です、あなたは殺されますよ、實はわたしは亭主持ちなんですが、彼はちつともわたしを構つて呉れないからわたしは秘密にこんな商賣を始めたのでした。今ドアをノックしてゐるのは其の殘酷なわたしの良人なのです……」

ドアは破れんばかりに叩かれる。此の善良な日本の紳士も女に劣らず臆病者だつたので眞つ蒼になつて顫へ出してしまつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。女は向うへ行つてドアを明けた。と同時に、水夫上りか何かと見える一見獰猛な相貌をした大男が飛び込んで來て、ピストルを突き附けて何やら分らぬ言葉で呶鳴つてゐる。紳士は其の時初めて美人局にかゝつたのだといふことを覺つた。けれども抵抗すれば本當に殺されてしまふ。殺されて、裸にされた自分の死骸が、黄浦江へ投げ込まれてしまふことを想像して彼は全く戰慄した。彼は悪黨共の自由になつてゐるよりほかはなかつた。悪漢の夫婦は、紳士のポケツトからホテルの部屋の鍵を奪ひ取ると、彼一人を其の部屋に殘した儘外から鍵を掛けて遁いて何處かへ行つてしまつた。紳士がどうなることかと思つてゐると、一時間餘り經つて悪者共は歸つて來て、今度は紳士を身ぐるみ脱がしてシヤツ一枚にして戸外へ突き出した。紳士は顫へながら夜更けの街をさ迷ひ歩いて漸うホテルへ辿り着いた。そして自分の部屋へ還つて見ると、現金入りの鞄やら、トランクやら、旅行道具やら、いつさいの物が失くなつてゐた。「先刻あなた樣から頼まれて來たといふ貴婦人がお見えになつて、部屋の鍵を御持參で、品物をお持ち運びになりました」と、間拔けな支那人のボーイは澄まして言つた。

上海へ來ると、かうした探偵小説の發端になりさうな話がザラにある。物騷と云へば是れ程物騷な土地は世界にあるまい。人間が行方不明になるぐらゐなことは、てうど犬か猫が迷ひ子になつたほどにしか思つてゐない、そしてそれらの迷ひ子は永遠に戻つて來ないのだから駭く。上海といふ處は、嚴密な意味では警察權といふものが存在してゐないと云つていゝ。警察署は澤山ある。支那政府の警察、各租界の警察、各國領事館の警察――といふ具合にあり過ぎる程澤山ある。そして往來を歩くと、西洋人の巡査、印度人の巡査、支那人の巡査、安南人の巡査、日本人の巡査――といつたやうに各國の巡査にぶつかる。まるで巡査の品評會だ。處がこの巡査が殆んど何の役にも立たない。否、巡査が間拔けと限つたわけではない。そも〳〵それ程澤山の警察はあるけれど、其の間に統一も無ければ聯絡も無いのだから、寧ろあり過ぎるのは邪魔になるだけだ。甲の租界で悪事を働いた奴が追はれて乙の租界へ逃げ込んだが最後、雨だれ一とすじ飛び越したばかりで、往來で帽子を取つて「御苦勞さま」と挨拶をされても、甲租界の警官は指を啣えてゐなくてはならない。其奴を捕縛しようといふには、乙租界の警察へ行つて諒解を得て來なければ手出しをすることが出來ないのだ。さうして漸う諒解を得て戻つて來る時分には、悪漢だつて脚があるから何處へでもフツ飛んでしまつてゐる。假りに其の悪漢が大野呂馬で再び警官に見出されたにした處で、丁度よく往來でぶつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かれば捕縛することも出來るが、家屋の中に潜伏してゐる奴を踏ん込んで引つ捕へる權能は與へられてゐない。租界警察の權能は道路の上だけに極限されてゐる。家屋內に及ぶ警察權は、其の家に住む人の國籍の如何に依つて、各國領事館警察の手に屬してゐる。其處で右の甲租界の警官は、其の家屋の住み手が英國人ならば英國領事館へ、獨逸人ならば獨逸領事館へ、ポルトガル人ならばポルトガル領事館へ出掛けて行つて、其處の警察署の同意を得て其の手を借りて捕縛して貰はなければならないのだ。大抵間抜けな泥棒でもとつくの昔尻に帆を掛けて行つてしまふ。それでも各警察間に諒解の成り立つ場合はいゝが、何處の國の警察でも警察などといふものは依怙地で軋轢ばかりしてゐるから、なかなか諒解が得られない。「是れ是れの重大犯人が貴國の租界へ逃げ込んで現在斯々の場所に居るから捕縛し度い」と言つて行つても、「それは當方でも知つてゐる。が、あの人間は貴國の租界に於てはどんな悪事をした奴か知らないが、當方の租界へ來てからは至極神妙にしてゐる、そんな重大犯人とも嫌疑者とも信じられない、折角の御依賴ではあるが、當租界內に居る間は捨てゝ置いて貰ひ度い」とポンと撥ねつけられてしまへばそれまでだ。人殺しを百遍やつた殺人鬼だらうが、百萬弗の現金を持ち逃げした大泥棒だらうが、眼の前にゐる奴に指一本さすことが出來ないのが上海の警察狀態だ。此の物騒極まる上海のうちでも、フランス租界は殊に警察權の寛大な土地になつてゐる。それはフランス本國の政治思想及國民一般の極端な自由思想から根本を發してゐるのである。だから各國の重大犯人が一度上海のフランス租界へ逃げ込んでしまへば、其處で再び大した悪事を働かぬ限りは先づ先づ一身に別條は無い。個人の生活に取つて是れ程自由な世界は無い。だから、日本を逐はれた無政府主義者でも、ロシアのボルシエヴイーキの宣傳本部でも、朝鮮の獨立政府といふやつでも、支那本國の政黨の本部でも或ひは在野の政治家連の住宅でも、すべて所謂官權から畏れられたり睨まれたりしさうなものはみんなフランス租界內にある。上海のフランス租界は、世界に於ける自由郷だ。

兎に角上海といふ處は物騒な處だ、考へて見て、怖いと思ひ出したらきりもなく怖い處だ。其の代り悪事を働く奴に取つては都合がいゝ。人殺しや大詐欺師でも、タキシードを着てホテルの食堂へ出れば一流の紳士で通る。そして得た大金を持つて競馬場へ出掛けるならば、有數の富豪として持て囃されること請け合ひだ。道路警察が完備してゐて、道路に於ける犯罪及過失の豫防は相應に努めてゐるが、其の眼をくらまして悪事をや

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つつけてしまへば後は氣樂なものだ。フランス租界へ逃げ込むまでもなく何處にだつて安全な隱れ家が幾らもある。惡い奴に出會つた者が災難だ。そこで各人は、頼みにならない警察を頼んでゐるよりはと自分自身でさういふ目に合はないやうにと絕えず警戒してゐる。家屋の構造も非常に嚴重に出來てゐる。西洋人の住宅は無論の事だが、支那人の家でも日本人の家でも、入口の扉をピンと締めてしまへば、もう蟻一匹出這入りは出來ないやうな造りになつてゐる。往來を歩くにもボンヤリして歩いてはゐられない。幅の狹い街を、電車、自動車、馬車、人力車が織るが如く走つてゐる。そこを人が押し合ふ程に歩いてゐる。何處から恁んなに澤山の人間が出て來るだらうと思ふくらゐだ。ウジヤ／＼と汚い程人間が歩いてゐる。一寸油斷したが最後金入れだらうが時計だらうが失敬されてしまふ。おまけにウカ／＼してゐると、自動車に轢き殺されるか、それほどにいかないまでも、あの莫迦に長い黃包車の梶棒でどてつ腹を厭といふ程ゑぐられる。上海では、自動車や電車が人を轢いても大した罰は受けない。日本では轢かれた方がアリ／＼わるい場合でも兎に角人を殺傷したといふかどで運轉手は重い處罰にあふが、此處では、それが電車軌道乃至車道の上の出來事である限りは、電車や自動車を人道の上まで乘り上げて人間を轢かない限りは、縱しんば背後から追ひ廻して無理に轢き殺したところで、運轉手の罪科は精々重くて何弗かの罰金位で濟んでしまふ。遺恨のある奴は往來で追つ掛けて自動車で轢き殺して遣るに限る。轢かれた者は轢かれ損、轢いた方は轢き得だ。蛙を踏み潰した人間と、踏み潰された蛙とで、喧嘩にならない。東京の往來を歩くやうに呑氣な了簡で歩いてゐると忽ち一命をフイにする。上海や北京で永く暮した人が「支那人が醉つぱらつて往來を歩いてゐる處は一度も見た事がない」と言つた。元來支那といふ國は餘り國が大き過ぎるために昔から政治が微細に行き屆かない。國家が個人の生命や財産に對する安全を確實に保證して吳れない。そこで各人は止むを得ず常に自分自ら自己の生命財産の安全を計るやうに努めるのが習慣になつてゐる。此の積年累代の習慣が後には支那人の性格をつくり出してもゐるが、醉つぱらつて往來を步かないのも其の一例で、どんなに醉つてゐても一歩門外へ出るとチヤンとしてしまつて些かも醉態を見せないのが支那人の通有性だと云つて其の人は私に說明して聞かせた。さう云はれて氣を付けて見ると、料理屋や酒館には客がいつぱい這入つてゐるにも係はらず、往來で醉つぱらつてゐる支那人をついぞ見掛けた事がない。ねぎま屋で引つかけた勢ひで「矢でも鐵砲でも持つて來い」と威張つて歩ける日本

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人は幸せだ。

或日私と同宿の人が二人。三人づれで大馬路の電車停留所で立つてゐると、向うから一名の支那人がやつて來てニコ〳〵笑ひながらシガレットを一本づつ私達に突き付けた。何氣なく手に受けると相手はもうマッチを磨つてつけてくれる。餘り深切過ぎるが多分煙草の廣告だらうと思つてゐると、何んぞ計らん直ぐ後から來た奴が名も知れぬ變な煙草を一袋宛押し付けて「一個十錢」と言ふ。「不用々々」と言つて見たが先方が承知しない。「それなら何故今の煙草をのんだのだ」といふやうな事を言つて急に權幕が荒くなつた。支那は物見高い國だ。忽ちわツと人が寄つて來て私達を取り卷いてしまふ。言葉はろくに通じないし、高が十錢のことで爭ふのも見苦しいと思ふからめい〳〵一箇宛買つて遣ることにしたが、合憎私は小銀貨を持ち合せてゐないので一弗の銀貨を持つて行つて近所の錢莊で小洋(小銀貨)に替へようとすると、煙草賣りが「釣りを遣るからよこせ」といふらしい事を言つて私の持つてる銀貨をひツたくつてしまつた。一弗銀を小洋に替へると、普通二十錢銀貨が五個と十錢銀貨が一個、それに銅貨が六七枚付いてくるから、私は其の割で釣を取る氣で手を出してゐると、彼の煙草賣りは二十錢銀貨を二個出したばかりで更に煙草を二つ三つ私の手に叩き付けて、私が苦情を云ひかけると、お負けに私の胸倉を二つ三つ小突き飛ばして、其の儘ツーツと行つてしまつた。初めからお終ひ迄が僅か二三分間の出來事である。其の遣り方が實に敏捷で、野呂馬な私が「あつ」と口を開いてる間に、相手はたうに居なくなつてしまつた。江戸は生き馬の眼を拔く處だと昔日本では云つてゐたが、上海では生き馬どころか浮か浮かしてゐると生きた人間の眼の玉をくり拔かれる。

あらゆる文明の設備が完全して、華やかに美しく、そしてほしいまゝな歡樂に飽くことを知らぬ上海といふ都會は、一歩裏面へ踏み込むと、陰慘とした物凄い幕で包まれてしまふ。其處では有ゆる犯罪が行はれ、あらゆる罪惡で充滿されてゐる。泥棒、殺人、詐欺、賭博、誘拐、密輸入、秘密結社、淫賣、脅迫美人局、阿片吸飲——其他大小無數の犯罪が白晝でも深夜でも、處嫌はず年が年中行はれてゐる。さうしてそれらの惡漢共は誰れ憚らず大手を振つて歩いてゐる。

臆病者の私は、上海へ着いた當座怖くて〳〵溜らなかつた。晝間はともかく、日が暮れたら一人では一歩も戸外へ出られなかつた。夜中でも人がゾロ〳〵歩いてゐる。其の全部が何かの惡事をたくらむでゐる。人間のやうに見えてくる。往來の端の暗がりの軒下には、怪しげな支那人が蝙蝠のやうに壁に吸ひ付いて佇

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

んでゐる。彼は私が其の前を通り過ぎるのを待ち受けてゐて、矢庭に背後から飛び付いて咽喉を絞めるか脾腹を刺さうとしてゐるのかも知れない。マドロス風の西洋人、陰慘な表情をした苦力の群れ――私は子供の時分に受けた支那人といふものに對する不思議な恐怖を心に呼び返した。それはよく田舍廻りの壯士芝居などに出る支那人といふものから與へられた印象が原因になつてゐるので、六神丸の原料にする人間の膽を買ひに來る支那人であつた。其の支那人は、膽を買ふばかりでなく、可愛らしい子供達をも誘拐してしまふのだつた。日暮れまで遊んでゐると「支那人の人買ひにさらはれてしまふぞ」と言つて脅された。支那人と云へば怖ろしいもの、何かしら不思議な、秘密の惡事をたくらむでゐる人間のやうに思はれてゐた。永年私の心から忘れられてゐた其の支那人に對する謂はれのない恐怖が、今上海へ來ると急に胸に甦つて來たのである。しかし、私の此の妄想に近い觀念は、あるひは正當に近い觀念であると云へるかも知れない。其の證據には、アメリカあたりで製作する活動寫眞を見ると、其の中で出て來る支那人は必ず惡人で、しかも何かしら不思議な戰慄するやうな罪惡をたくらむでゐる。私達が子供の時分に受けた觀念と一致してゐる。して見ると支那人といふ人種は、世界中の何處の國の人に對してでもさういふ印象を與へてゐるところから考へると、あるひはそれが眞個なのかも知れない。陰險で、殘忍で、强慾無道なのが支那人の性格だと思ふと怖ろしくなつた。

併し、幾日も經たぬうちに私はさういふ怖れを感じなくなつた。此の罪惡の巢窟である上海といふ都會に身を置いてゐるといふ事に就いても何の不安をも抱かなくなつた。けれども、それは私の恐怖や不安が全然小兒の妄想に近いものであつたからだとは云へない。寧ろ反對に、日を經るに從つて私は此の土地が如何に多くの戰慄すべき秘密を藏してゐるかといふ事の事實を知るばかりだつた。只不思議なことには、私の心持が、さういふ罪惡や秘密が有つてゐるところの毒々しい魔藥を嗅ぐやうな誘惑の力に識らず／＼のうちに惹き付けられて行くのだつた。私は恐怖したり不安をおぼえたりしなくなつた代りに、反つてそれを讃美し憬がれるやうな氣持になつた。そして私自身も惡漢の群れに投じて、巧妙な手段を用ゐて有らゆる惡事を働いて見度いやうな氣持になつた。さうした活動寫眞的な奇怪な空想を驅使するためには、上海の何處の一部分を取つて來ても是れ程適當な舞臺は無いのである。

明るい上海は表面だけの事實である。幕一重奥へ這入れば暗黑と秘密を以て滿されてゐる。そしてそれが上海の本體である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

(三) 夜の上海

上海といふ處は、夜と晝との區別の無い處だ。といふ譯は、どんな眞夜なかでも、往來を人がゾロ〱歩いてゐる。自動車が飛ぶ、黄包車(ワンポヤ)が走る、其の中を空(から)の黄包車が、鵜の目鷹の目で迂路々々迂路々々歩いてゐる。尤も場末の住宅街だの、一流●商業區域になると、夜間はピタリと表を閉めてしまふからそれ程でもないが、上海の繁華の中心地點である四馬路(マロー)(福州路)や三馬路(漢口路)附近へ行くと夜なかの二時三時といふ刻限に往來を押し合ふ程人が歩いてゐる。一體支那の人は時間の觀念が無いのださうだ。夜と晝との區別もなければ、今日と明日との遷り目もはつきりしない。顯官や富豪が客に應接するのが夜半の十二時一時からだ。新聞社の主筆は夜の十一時頃から社へ出勤する。宴會は必ず明け方迄續く、所謂長夜の宴だ。上海全市が不夜城だ。劇場のハネが早くて一時、大抵二時頃になる。淺草式の娯樂場でも人の出盛るのは十二時頃からだ。ダンス場では夜通し踊つてゐる。料理店でもカフエーでも旅館でも酒館でも、藝者屋でも淫賣屋でも、夜通し營業してゐる。否、夜なかが寧ろ主要な營業時間になつてゐる。だから支那の遊蕩兒は、遊び出したが最後夜が更けようが陽が出ようがそんな事には頓着しない。赤の終電車に乘り遲れる心配も無ければ、料理屋で「お火を落します」と言つても來ないし、待合で「お時間です」と言つて斷られる畏れもない。遊び度いだけ遊んで、食ひ度い時に食つて、睡たくなつたら寢るだけだ。場所と時とを選ばない。げに上海は遊蕩兒の天地である。

此の不夜城化した上海に夜の生活を送る女の多い事は當然である。夜の女が多いから不夜城化したのだとも云へる。それ程上海は賣笑婦の多い都會である。ある人が私に向つて言つた。「上海の往來を歩いてゐて、男が來たら泥棒と思ひ玉へ、女が來たら、淫賣婦だと思ひ玉へ」それは中らずと雖も遠からぬ言葉である。上海全市何處へ行かうが賣笑婦が群を成してゐる。街頭でも、公園でも、カフエーでも、劇場でも、活動寫眞館でも。そして賣笑婦の種類も限りなくある。人種的に區別しても廿何箇國の賣笑婦がゐるさうだ。勿論其の中にも上中下の區別があつて、各々異つた形式と特質とを賣り物にしてゐるわけだ。賣笑婦の研究家は居ながらにして、世界の材料が蒐まる。あの壯大華麗なニューカルトンのダンスを觀て恍惚としてゐた私の耳元で、「今晩此處へ來てゐるレディーの半數は淫賣婦ですよ」と或人が呟いた時、私は眞に花園から蛇が這ひ出したやうに駭いた。だが、それ程各種の賣笑婦が生活してゐる土地ではあるが、矢張り何

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と云つても支那の賣笑婦か數の上では絕對多數を占めてゐる。上海の夜を濃厚に彩つてゐるのは「長三」や「么二」の所謂妓と「鷄」と呼ぶ密淫賣婦等の群れである。長三といふのは純粹の藝妓で酒席へ呼んで唄をうたはせる妓で極つた旦那の外は決して賣淫はしないことになつてゐるが、同じ妓でも么二は二枚鑑札だ。次に鷄であるが、是れにも普通の鷄と野鷄との區別がある只の鷄は謂はゞ高等內侍で、一定の場所へ呼ばれて行つて客を取るだけだが、野鷄となると、茶館でも娛樂場でも往來でも處嫌はず出張して客を引つ張つて來る。野の鷄だから餌の落ちてゐさうな處なら何處へでも行く。密淫賣婦と云つた處で、鑑札を受けないといふだけで商賣は憚りなく公々然とやつてゐる。

四馬路に青蓮閣といふ名高い茶館がある。茶館は上海の到る處にある。茶館は本來茶を飲みながら雜談に耽つたり眞面目な商談でもしたりする場所だが、それが夜になると鷄の稼ぎ場と化してしまふ。青蓮閣は、間口四五十間もあらうと思はれる總二階建の家で、階下は幾軒にも仕切つて普通の商店になつてゐる。二箇所に、往來から眞正面になつて幅の廣い階段が附いてゐる。或晚私は友人と二人で其の樓へ上つて見た。往來と同じやうに人が押し合つて昇つたり降りたりしてゐる。階段を昇つたかと思ふ間もなく、私も友人も忽ち鷄に捕へられてしまつた。

處々に柱の立つてゐる廣い〳〵二階には幾千人とも知れぬ客が這入つてゐた。テーブルについて茶を飲んでゐる者、欄干につかまつて往來を見下してゐる者、素見して步いてゐる者。其の中を無數の鷄が右往左往してゐる。客に附き纏つてゐる者、巫山戯合つてゐる者、一緒にテーブルについて茶を飲み乍ら喋つてゐる者。煙草の煙りは濛々と渦卷いて電燈の光を曇らせてゐる。其の混雜其の喧騷。私は茫然としてしまつたが、軈て氣が附いて自分達を捕へてゐる鷄の顏を見ると、友人のはふのは一寸齡がいつてゐて圓顏の眼のクリクリとした女だが、私のは十四五歲位と見えるかぼそい、セルロイドの人形を見るやうな感じのする小娘だ。どちらも餘り美人でない。友人は上海語でそれを擊退しようとしたがなか〳〵離れない。

「日本人大好き、妾達の家へ行つて遊ばふよ」

さう言つて章魚のやうに絡み付いてゐる。鷄一人に必ず一人の娘姨が附いてゐる。ダブ〳〵の淺葱の布子を着て苦力の娘のやうな恰好をしてゐる。其の娘姨が同じやうにくツ付いて步いてうるさく鷄をけしかけてゐる。テーブルに着くと直ぐ樣ボーイが茶を持つて來る。茶碗が六箇ついてゐる。執拗な鷄はどうしても離れない。頸ツ玉へ噛り附いてキッスをする。氣味の惡い事夥しい。邊りの人がみんな私達の方を見て笑つてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

到頭根負けして鷄の家へ行くことにして茶代を廿錢置かうとすると、ボーイが噛み付きさうな顔をして「一人前が十錢だ、六十錢置いてけ」と呶鳴り付ける。仕方が無いので六十錢拂つて出ることにした。裏階段を降りて薄暗い土間を通り抜けると漸う戸外へ出た。裏通りは一間位の狹い道が縱横に通つてゐて其處らは門並みの娼家だ。鷄が往來へ出て客を引つ張つてゐる。私達は其の一軒へ伴れ込まれた。二階の狹い室。帷を垂れた寢臺が置いてある。壁際に腰掛が並べてある。鏡臺、テーブル、茶道具、其の他ゴチャ〳〵した安つぽい小道具が女郎の部屋らしく並べてある。紅い唐紙に「屛花帶雨春遲麗」「水檻風晩更空」と對句を書いたのが二枚貼つてある。娘姨が湯呑へ茶を注いで呉れる。西瓜の種を出す。

「トンヤンニン、チョーカ、ホレシイ」を連發する。日本人大好きと云ふ事である。先方は好きでもあらうが、こつちは少しばかり迷惑だ。私のセルロイドはまだ商賣馴れてゐないので多くは無言の儘で私の腕につかまつてゐるばかりだが、友人の鷄(チー)は、鷄(にはとり)なら老鷄のはふで、場合に依れば軍鷄とも化せんばかりの代物なので、盛んに表情を用ゐて喋つたり誘惑したり、最後には誰れに教はつたのか怪しげな調子で日本の唄を唄ひ出したりする。卅分ばかり見物して一弗宛の茶代を置いて私達は外へ出た。

競馬場に沿うた西藏路といふ通に「一品香(イッピンシャン)」といふ西洋風のホテルがある。支那のホテルでは大東旅館と此家が一番大きくて有名である。此家には勿論普通の泊り客もあるが、併し大部分は其處で妓や鷄を聘んで泊り込む客ばかりだ。三階建の所謂中西折衷の建物で設備も相應に整つてゐる。そこで二三圓の部屋代の外に十圓か十五圓の玉代を出すと、ボーイが承知して直ぐに妓を伴れて來て呉れる。此處へ出入する者は賣れない妓か若しくは上等の鷄(チー)で、服裝なども中々立派なのが遣つて來る。見た上で氣に入らなければ一圓の祝儀だけ持たして歸してやるのに文句はない。何遍でも取り替へて呼んで見られる。夜なかの二時三時に、口を掛ければ幾人でも遣つて來る。ボーイも決して厭な顔はしない。しない筈だ、其の玉代の半分近くがボーイの懷ろへはいつてしまふのだから。

其處へ泊つた朝、賑やかな支那の音樂で眼を醒ましたことがある。訊いて見ると階下の廣間で婚禮の式が始まつてゐるのだと云つた。

又或る朝は大層霧が深かつた。窓を明けて外を見ると、霧に閉された競馬場で馬を練習させてゐるのが見えた。霧が次第に薄らいで來ると、馬の姿も、騎手の姿もはつきりと浮き出し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て來た。

或晩朱さんといふ上海へ來てからの友人が遣つて來て、「今晩は面白い處へ案內するからと云つて自動車へ乘せて私を伴れ出した。自動車はフランス租界へはいつて、霞飛路といふ廣い眞つ直ぐな通を走つた。

「一體どんな處へ伴れてくんです」

「極く秘密の家です、秘密の家だけに變つた趣味があります、まあ見ていらつしやい」朱君は巧みな日本語で答へた。とある小ぢんまりした家の前で自動車を停めて朱君は先に立つて這入つて行つた。とツつきの部屋では男ばかりが二三人テーブルに向き合つて何か話してゐた。奥から一人の婆さんが出て來た。朱君は一言二言婆さんと話してから、婆さんに隨いて私と一緒に奥の梯子段を昇つて行つた。二階は二室に別れてゐて、私達はとツ付きの部屋へはひつた。そこには四十位の阿母と、その娘らしい十八九の女と、七八つ位の女の兒とがゐた。私達は部屋の片脇に据えてある大きな紫檀の上へ並んで腰を掛けた。テーブルの上には樣々の料理が並べてある。

隣室には大勢客が來てゐるらしく、ガヤガヤ話す聲がして、ガチヤ〱ガチヤ〱と騒々しい音をさせて麻雀といふ賭博をやつてゐる。婆さんも阿母も娘もみんな人が惡くなさゝうで感じが善かつた。娘は顏立ちも十人並以上で、體格が素敵に良く、それで何處か素人娘じみた初々しさを有つてゐた。けれども着物は粗末な木綿の服を着てゐた。私が名前を訊くと彼女は何やら答へたが發音が聞き取れなかつた。すると彼女は私のポケツトから鉛筆を執つて「桂英」と紙へ書いて見せた。彼女は學校へ行つたことがあると言つた。

テーブルの上の料理は順々に隣りの室へ運ばれた。桂英も其の母親も向うへ行つたりこつちへ來たりして忙がしさうだつた。隣の連中は酒が始まると暫らく麻雀を停めて喋り始めた。「廿一條」といふ言葉が盛に言ひ交されてゐた。不思議に思つて朱君に訊ねて見ると、廿一條問題や大連旅順還附の問題で議論してゐるのだと朱君が言つた。淫賣宿へ來 博奕を打ち乍ら國事を談じてゐる處は流石に支那だといふ氣持がした。

朱君は桂英の姿を指さしながら、「どうです、いゝでせう」と言つた。私は正直にそれに同意した。すると朱君は「では貴郎にお世話致しませう」と云ふかと思ふとさうは云はなかつた。桂英は今夜は此の通り家に客が多くてさうしてゐる暇が無い、だから近日又來ることにして、今夜は是れから么二といふ二流藝者の處へ遊びに行きませう、それは長三と異つて二枚鑑札の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

藝妓だが、餘程風變りで日本人なぞは滅多に行かない處だから貴君は屹度面白がるに違ひないと朱君は言ふのだつた。茲で一寸朱君の事を説明して置くが、彼は浙江の人で、郷里では農園を經營してゐるさうだが、平常は上海へ來て暮してゐる。金持の坊ちやんらしく上品で、それで可なり人ずれてゐて、女にして見度いやうな美男子だ。二十歳前後の頃日本へ行つて大阪で二三年暮したことがあるとかで日本語は實に巧みだ。其の朱君と私は上海へ着いた日に日本人倶樂部で人に紹介されて知り合ひになつたが、彼は格別仕事も無いと見えて毎日自動車を乘り廻して遊んでゐた。綠牡丹といふ役者を可愛がつてゐて、それを伴れて私の處へやつて來たりする。典型的の遊蕩兒だ。

時計を見ると一時過ぎだ。が、朱君は例の時間の觀念を超越してゐるから平氣なものだ、私達は表へ出て、向ふの曲り角で車を停めて白河夜船でゐる運轉手を揺り起して、今度は棋盤街といふ處へ出掛けた。其處は狹い露地なので入口で自動車を下りて石だゝみの道を歩いて行つた。可成り奧深く行くと兩側に妓館が並んでゐる。妓の名前を書いた標札が門口にずらりと並べて掛けてある。往來が薄暗いところへどの建物も古色蒼然としてゐるので、花街とは思はれない陰氣な氣持がする。それでも素見し客が三々伍々歩いてゐる。私達は試みに一軒の家へ飛び込んで見た。

階下の中央に駄々ツ廣い室がある。正面には祭壇のやうな處があつて、眞紅な蠟燭がトロ〳〵と炎を上げてゐる。其の下には帳場らしい處があつて、恐い顔つきの男が其處からじろりと睨め付ける。胡弓彈きの藝人だの、菓子賣りなどが客の這入つて來るのを待つてゐる。それは山奧の無住寺のやうに古びてゐて、幽靈屋敷のやうに陰氣だ。其の廣い室の周圍には幾つもの室があるらしくて、方々からやり手婆だの若い女の顔だのが覗いてゐる。それが益々不氣味な感じをそゝる。番頭みたいな男が出て來て入口の側らの部屋へ私達を通した。それから彼は二階の方を振り仰いで何やら大きな聲で呶鳴つた。忽ちワヤ〳〵ガタ〳〵と騷がしい音があたりから起つて、大勢の女が其の部屋を目がけて押し寄せて來た。十五六人から廿人位は居るであらう。其の女達は、狹い入口の處で目白のやうに押し合ひながらてんで〳〵の聲で何やら喚ぶのである。

「どれでも速くお極めなさい」と朱君は私の肩をつゝいて言つた。

私が面喰つてウロたへてゐると、女達は猶更喧ましく呼び立てた。後ろの者は床の上に爪立ちをして丈を高くして自分の顔を見せようとした。前髮を垂れた圓つこい顏が十五も二十も私

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の眼の中でクル／＼廻つた。朱君は再度私を促がした。私は漸く自分に一番近い小娘の手を執つて側へ寄せた。女達は「ワーツ」と聲を上げて潮の引くやうに戸口から立ち去つた。

「どうも驚いた」と私は額の汗を拭きながら言つた。

「あゝマゴ／＼してゐては不可ません、手ツ取り早くどれにでも極めるんです」朱君が笑つて言ふ。

「しかし、あゝ大勢一時に押し掛けられちやあ、餘程慧眼でないと早くは極められないね

私の選んだ妓は十六位の娘だつた。眼だけは一人前に大きいが、鼻も口も玩具のやうに小さくて、手なぞは小兒のやうにかぼそかつた。彼女は言葉の通じない客の側へ腰を掛けて、山から捕はれて來た小鳥のやうに寒さうに肩をすぼめてゐた。私達はやり手が注いで呉れた血のやうな色をした茶を一杯呑んだばかりで、一圓の祝儀を置いて其處を出た。

其の次ぎに這入つた家でも同じ事が繰り返された。併し今度は相方の妓が極まると、二階の其の妓の室へ伴れて行かれた。幅の狹い眞つ急な梯子段を昇つて行くと二階の内廊下へ出た。構造は前の家と同じことだつたが、其の二階から見た光景の不思議さよ。家の中央が眞四角に空虚になつてゐて、階下は其處が床張りの廣間になつてゐる。二階は四面に内廊下があつて、其の外側に幾つもの妓の室が並んで附いてゐる。頂上の屋根は溫室のやうにガラス張りで、星のまたゝいてゐる空が眺められた。けれどもそれは左樣に風流には感じられなかつた。なぜかと云ふと其のガラス屋根の下には縱横に綱を引き廻してそれへ洗濯物が隙き間もなく掛けてあつたから、深夜の空は僅かの部分から覗かれるに過ぎなかつた。

其の家も何んといふ古さであらう。柱も、欄干も、戸板目も油と埃とで塗れて鐵のやうに黑ずんで燦び返つてゐる。それはてうど孤島へ打ち寄せられた幾年も經過した難波船の船底へ這入つて行つたやうに寂れてもゐる。私は是れ程汚ならしい、是れ程陰慘とした場所が此の世の中にあらうとは思はれなかつた。戸口から白粉を塗つた女の顏が覗いてゐる。流しの藝人を呼び入れてゐると見えて閉した部屋の中から胡弓の音が漏れて來る。

妓の部屋へ這入ればそれほど陰氣でもなかつた。長方形の可成り廣い室の一方の端には帳を垂れた大きな寢臺があつて、それと反對の側にも普通の寢臺が据えてある。紫檀のテーブル、腰掛け、鏡臺、其の他一切の世帶道具が其處ら中に置いてある。一つの部屋には大概二人位の娘妓と、妓の見習ひの小娘が一人ぐらゐ居た。娘妓はダブ／＼の汚い着物を着て、油氣のない頭

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

をして、どれもこれも人の惡さうな顏つきをした婆あばかりだ。茶碗と箸を持つて、飯を食べながら客の側へ來て、ベチヤクチヤ喋り立てる。其の下品さは譬へやうがない。其處へ菓子賣りが箱を持つて賣りに來る。「不要」と言つても、買つて遣らないうちは立ち去らない。

同じ樣な樓を私達は何軒も見廻つた。或る樓で一人際立つて美しい妓を發見した。其の妓は丈が高く、色が雪のやうに白くて、髮の毛は眞つ黒く光つてゐた。さうして潤んだ大きな眼と、紅い小さな口許をもつてゐた。

名前を聞くと

「高文仙」と答へた。

「お前の故鄕は何處？」

「蘇州――貴郎は蘇州を御存じ？」

私はまだ上海の外へ一歩も出たことがないので蘇州を知らないといふ事を朱君に言つて貰ふと、

「蘇州は靜かでいゝ處です」と高文仙は何か考へるやうな眼つきをして言つた。

先刻から一人の男が其の室へ這入つて來て向うのテーブルで何か書き物をしてゐる。何を書くのかと聞いて見るとそれは手紙の代書人だと言つた。私は其の背後へ行つて覗いて見た。「今宵高文仙有不虞之厄」といふ句が眼に付いた。

高文仙は事實何か心配事があるのだと云つて浮かぬ顏をしてゐた。

（四）綠牡丹

例の朱さんが遣つて來て「今晩綠牡丹の芝居を見に行きませんか」と言つて誘つて呉れた。私は支那劇は着いて間もなく同宿のK氏といふ人と四馬路の第一舞臺へ行つてたつた一遍見物したばかりだ。其の舞臺は可成り大きくて立派だつた。そして背景だの電氣仕掛けの大道具などが中々進步してゐると思つた。併し悲しい事には肝心の劇が一向筋道も解らない。部分的の所作も何を爲してゐるのか解らない。劇は「一粒萬金丹」といふ外題の通しだつた。併し、あの無闇矢鱈に騷々しい下座の音樂も耳に馴れてくると其の喧騷の音色の中から湧いてくる一種の氣分が感じられた。胡弓に合はせて俳優が歌ふ歌の音律からも底知れぬ歡樂と悲哀の調子が生まれてくるやうに感じられた。何雖秋といふ女形俳優の顏や姿も美しいと思つた。けれども只それだけしか解らなかつた。綠牡丹といふ役者の名前だけは聞いてゐた。彼は現在上海に於ける人氣を獨りで脊負つてゐるやうな女形で、南方の梅蘭芳などと稱されてゐる。丁度其の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

頃彼が日本へ行くといふ噂があつたので、新聞記事に依つて私もそれだけの事を知つてゐた。

十時頃から出掛けた。場所は開封路の春華舞臺だつた。其の劇場は外觀も立派だが、舞臺も看客席も廣く出來てゐた。上海市内の劇場の構造は殆んで歐風化してゐる。私達は二階席の舞臺の眞上に陣取つた。其の日は八分位の入りだつた。

丁度綠牡丹が舞臺へ出てゐた。彼は田舍娘に扮して、もう一人の劉玉琴といふ女形と二人で所作めいた事を演つてゐた。それは殆んど日本の歌舞伎の所作と變る處がない程よく似てゐた。扇を持つ代りに花を持つてゐて、差す手引く手も足拍子も殆んど日本の踊りと異はない。鳴り物も笛や大鼓が主で至つて靜かだ。

綠牡丹の體は眞個の女であるとしか思はれないやうにしなやかだつた。日本の女形に見るやうな固い線や畸形的な感じは體中の何處にも見出されない。容貌も實に美しい。私は殊に彼の眼に惹き付けられた。ながし眼で物を見る時の表情は無類に艶だ。

「綠牡丹は齡は幾つです?」私は朱君を顧て言つた。

「十七歳です」と朱君は西瓜の種を割りながら答へた。

「十七——?」私は駭いた。十七や十八の少年の肉體や心持ちでよく是れ程の色氣を表はしうるものだと不思議な氣持がした。支那人には何處か異つたさういふ特質があるのだらうと私は考へた。

觀客は絶えず煙草を吸ふか、物を食べるか、茶を呑むかしながら芝居を見て居る。二階席の前通りが花柳界の女達に依つて占領されてゐる點は日本も支那も變らない。併し劇場全體の空氣は日本の芝居に比べると遙かに質素で平民的だ。其の代り、惑はすやうなあの濃厚な華やかさは此處では見られない。

朱君は一人の支那人を伴れて來て私に紹介した。

「陸さんといふ小說家です」

其の人はまだ若い人で、黑の色眼鏡を掛けてゐて、にこにこ笑ひ乍ら私と二言三言話しをした後で、五六段上の席へ上つて行つて芝居はちつとも見ずにペンを持つて何か仕事をしてゐた。

「樂屋へ行つて見ませんか」

と朱君が言ふので一緒に行つて見ることにした。小說家陸澹盦氏の席を通つたから一寸挨拶をして覗いて見ると、陸さんは本の校正をしてゐるのだつた。それは「綠牡丹詩集」といふ表題で、全國の文人の綠牡丹を讃美した詩を一冊に集めた物だつた。一旦戶外に出てそれから樂屋口へ廻つた。其處は矢張り芝居の樂屋らしい混雜を示してゐた。大道具の岩だの立木などが立て掛けてあつたりする。異つてゐるのは樂屋に二階が無い事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、全部土間になつてゐる事である。部屋は幾つにも仕切られてゐて、各室に大テーブルを中央へ据えて、その周圍に各々小さな鏡を立てゝ顔を作つてゐる。立役は立役同志、女形は女形ばかりの部屋に集まつてゐる。綠牡丹の部屋は六疊敷位の廣さで、其處でも四人ばかりがテーブルを取り卷いて顔を作つてゐた。綠は劉玉琴と向き合ひに入口の方を向いて化粧をしてゐた。眉を濃く引いて、頭に羽二重を卷いてゐる少年は、朱君の顔を見ると、舞臺の獨唱や科白とは全く異つて聲變りのした太い聲で快活に話し掛けた。それから朱君が私を紹介すると、是れだけは舞臺と變らない美しい眼でニコ〳〵笑ひ乍ら默つてお辭儀をした。彼は此の次の「女俠十三妹」といふ革命事件を脚色した劇に出る十三妹といふ將官の娘の扮裝に取り掛つてゐるのだつた。私は暫く側で其の化粧を見てゐた。玉のやうに滑らかな皮膚の上に幾通りも幾通りも限りなく脂粉を施してゐる。其の化粧の丹念さは日本の俳優の比ではない。顔が出來て鬘を附けると、側で見てさへ男子とは思はれない程艶麗だつた。

「君のやうに綺麗な役者を見たことがない。日本に、中村福助といふ役者があります。それから尾上榮三郎といふ役者があります。どちらも有名な娘形だが、君は其の二人を一つにこね合はせた位美しくて、そして藝もそれ位上手ですよ」

と言つて私が讃めて遣つたら、綠牡丹は餘り讃めゝ過ぎて極りが惡かつたと見えて、彼の役の十三妹が戀人の事でも言はれたやうに羞かんで見せて笑つた。

其の翌日、朱君が綠牡丹と其のお父さんとを伴れて私の旅館へ遊びに來た。綠のお父さんは黄吉人といふ名で、俳優ではなく相當に文字もあつて、革命當時は國事に奔走して幾度びも生死の境を潜つて來た人だといふことだ。さう云へば、痩せた海髯を生やした其の柔和な顔つきの何處かにも、志士の果だと思はれるやうな精悍な樣子が殘つてゐる。綠牡丹は本名黄琬字は玉麟と云ふ。九歳の年成艶永の弟子となつて初めて劇界にはひつたのであつた。在來の支那の女形俳優は大概相公と稱する男色の出身であるが、綠牡丹だけはさうした正しい家庭で育てられた少年であつた。良家の子弟を俳優にするといふ事は、舊慣を重んずる此の國では殊に善い事であるとは人から云はれなかつた。併し彼は全く俳優の天分を具へてゐた。僅かの年月の間に南方支那の名優として謳はれるやうになつたのも偶然ではないと私は考へる。

「日本へ行くといふ事が新聞へ出てゐたがあれはどうなりました？」

「あの話はうまく行かないやうです。中間に立つてる人が帝國

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

劇場へ交渉したのださうですが、此の秋迄はあきが無いといふやうな話でした。それに何しろ一座百五十人ばかりで經費が澤山掛りますから實現は覺束ないでせう」と綠のお父さんが言つた。

「それは殘念ですね。併し、今年は行けないにしても其のうち是非一度は日本へ行つて御覽なさい。何んと云つても日本の芝居は進歩してゐるから、それを見て來るのがあんた方の爲めには何より有益ですからね」

私がさう云ふと綠牡丹は日本の芝居に憬がれるやうな眼つきをして

「私は只でも行き度いんですけど、座元の人が算盤ばかり彈いてゐるものですから」

其の日は間もなく芝居が始まるといふので父子は一緒に歸つて行つた。

其の後私は他の舞臺へも時々行つて見た。亦舞臺の歐陽予倩は早稻田大學の出身で支那劇壇唯一の新人である。或友人が同君を私に紹介してくれるつもりで一度同道して私の處へ來てくれたのだつたが、丁度私は不在だつた爲めに會つて親しく話しをする機會を逸してしまつた。北京の名優尙小雲が來た時も二度ばかり見物した。支那劇の見方も少しづゝ分つて來た。肝心の科白が解らないから筋の運びがよく分らない憾みはあるが、併し支那劇は一種の歌劇であるから、筋の分らぬ處でも其の劇の有つ氣分や味は比較的よく呑み込める。ましてや個々の俳優の藝の巧拙に至つては一見して直ぐ分る。下手な藝は分つても見てゐられないが、上手な藝は分らなくても面白い。劇其のものとしては、支那劇は極く單純幼稚なものだ。併し、俳優の中には優れた藝を持つてゐる人が少なくない。どういふ形式や約束の下に置かれて育てられても、個人の力は伸びる處迄は伸びるものだと思つた。私の見た支那の俳優の中にも名人が相當に澤山あつた。けれども其の人達は何れも可なりの齡をしてゐる。綠牡丹のやうな乳臭の少年で、而もあれ程の天分を發揮しうる者は他には見出せなかつた。私は彼の將來に大きな望みをかけてゐる一人である。

（五）田漢先生

佐藤春夫君の紹介狀が貰つてあつたので、支那の新らしい靑年文士田漢君を訪問しようと思つて靜安寺路の中華書局編輯局へ出掛けた。其處は電車の通らない住宅街で、道路の幅が廣くて、大きな邸宅ばかり並んでゐる純然たる西洋の街だ。中華書局の編輯局と印刷局とが其處にある。赤煉瓦造りの工場や事務

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

所の建物もなか〳〵大きな物だ。中華書局の店は四馬路の角にある。出版も印刷も書籍文房具の小賣りもしてゐる。先づ博文館といつた格式だ。

受付で名刺と紹介狀とを一緒に渡すと應接間へ案内して吳れる。應接間には二組ばかり客がゐて私には分らない支那の言葉で頻りに話してゐる。直ぐに田漢君が這入つて來た。

「よう入らつしやいました。いつお着きでしたか？」と田君は立派な日本語で言ふ。

「五六日前に來ました。直ぐお訪ねしたかつたけれど、勝手が分らなかつたもんですから」

「何處にお泊りです？」

「西華德路の豐陽館といふ日本の宿屋に泊つてゐます」

「さうですか。前に知らせて下されば船へお迎ひに行くのでした。そして私の家には明いてる部屋が幾つもありますから、あなたがお泊りになつてもいゝのでしたが」

私達は一見舊知のやうな氣持で話し始めた。田君は廿六七位で、瘠せた丈の高い青年だ。長い頭髮は櫛を使ふ代りに指で掻き上げてゐるのでモジャ〳〵絡み合つてゐる。青白い神經質な顏で大きな眼は絕えず憂鬱に臆病さうに動いてゐる。其の體には、上下ぶつ通しの淺葱色の木綿の服を着てゐる。

「僕は毎日午後四時からは閑になるのですが、今日は是れから直ぐ歸りませう、僕の家は直ぐ近くです、一寸お待ち下さい」

田君は恁う言つて私を殘して出て行つたが直きに戻つて來た。

「お待遠樣でした」

私達は其處を出て道々佐藤春夫君の事など話し乍ら歩いた。田君は六年間日本に留學して、昨年の秋日本から還つて來たばかりの人だ。最初は高等師範學校へ入つたのだつたが、途中から目的が變つて文學をやり始めたので學校のはふは止してしまつた。

直ぐ近くの民厚北里に田君の住居はあつた。露地を奥深く這入つた突き當りに門があつて、一丈も高さのある木の扉が半ば明け放してある。門の二倍位の高さの土塀が隣家との境をなして、其處に樫に似た古木が枝を擴げてゐる。家は可成り大きいらしくて階下の横手の部屋には節取つた婦人の姿などが見えた。田君は勢よく梯子段を昇つて行つて二階の自身の書齋へ私を案内した。其の部屋には質素な寢臺が据えてあつて、其處で廿位の若者が睡つてゐたが、私達が這入つて行くと眼を醒まして出て行つた。本箱を見ると、英文の小說類や、日本の文學書類が一杯詰まつてゐる。机の上には、何かの校正刷りが積つて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐる。

私は上海へ來た自分の目的などを話した。田君は、彼が現在勤め先でしてゐる仕事のことや、將來の計劃などに就いて話した。小說はトルストイやドストイエフスキーの物を多く讀んでゐるが、彼自身としては將來ドラマチストとして起つ積りだと言つた。田君は廿六歲ださうだ。

「東京は僕に取つては第二の故鄕ですからなつかしく思ひます、それに二年前に僕は東京で結婚しました。僕の家內の易さんと僕とは從兄妹で小供の時から許婚だつたのです。ですから易さんも東京をなつかしがつてゐますよ。僕の故鄕は湖南ですが、現在は亂れてゐるので僕達も故鄕へ還つて生活することは出來ません、僕のお母さんも易さんのお母さんも現在僕達と一緖に此の家で暮してゐるのです。それから僕の弟と、今年の正月易さんが產んだ赤ん坊とそれだけの家族です」

「あなた方のお父さんは？」と私は聞いた。

「僕の父は僕が小さい時分に亡くなりましたが、易さんのお父さんは、易さんが東京へ來て僕と結婚した直ぐ後に故鄕で暗殺されたのです。易さんのお父さんは政治家でしたから。そんな事があつたものですから、僕達は結婚して嬉しかつた時ですが同時に、悲しい日を暮らさなければならなかつたんです」

田漢君は其の癖である上眼を使つては一言々々考へ乍ら話した。

田君は階下から赤ン坊を抱いて來て「是れが易さんの產んだ子です」と云つて私に見せて、それから可愛くて溜まらぬやうに頰ずりをしたり膝の上で搖すぶつたりしながら話した。支那の文壇の話が出ると、

「支那の文壇は全く振ひません。傳統の文學は殆んど形骸ばかり殘つてゐて其の中に何等の生命がありません。現在一番勢力を占めてゐるのは、主に上海で發行される通俗文學の雜誌や書物ですが、其の全部が俗惡低級な物ばかりで全く駄目です。僕達は友達ばかり集まつて『創造』といふ雜誌を發行してゐますが、其の仲間には支那で一番新らしい小說家の郁文さんや、詩人でドラマチストの郭沫若さんや、批評家では成灝さんなどが居ります、いづれ其の人達をあなたに御紹介致しませう。僕は今迄は主に飜譯ばかりやつてましたが、今後は創作を主にやり度いと思つてゐるんです」

「ドラマを書くといふと、現在やつてゐるあゝいふ芝居の形式の物を書くのですか、それとも異つた物ですか？」

田君は急いで手を振つてドモリながら言つた。

「全く異つた物です、支那の舊劇は僕達のやうな新しい文學運

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

劇に携はつてゐる者に取つては全く交渉の無い物です。全然今の劇場の看客を相手にしないで、別の方面を開拓するより外に道はありません。現在でも折り折り新しい芝居を學校などでやることがあります、僕の物も二度ばかりやりました。併し、現在では女優に適當な人がないから矢つ張り駄目です」

「僕の見る處では上海の女學生は非常にハイカラで活潑なやうだから女優に適した人が幾らもありさうなものだと思ふが」

「それはあります。けれどもさういふ人はあつても家庭が許す程にまで支那は進んでゐないのです」

「さあ、女優になる事をいゝ家庭で許すやうになる時期はいつになつても來ないかも知れませんね。さういふ點では何處の國でも同じ事でせう」

そんな話しをしてゐるうちに五時頃になつたので私は歸ることにした。すると田君も私の宿屋をおぼえる爲めに一緒に送つて行かうと云つた。階下へ降りてから

「あなたの奥さんに紹介して下さい」と私が言ふと、田さんは横手の部屋へ行つて

「易さん、易さん、一寸入らつしやい」と日本語で云つて奥さんを部屋の外へ呼び出した。

易さんはニコ／＼笑ひ乍ら出て來た。色の白い、眞ん圓い顔で、斷髮にしてゐる。易さんの齡は廿二ださうだが、支那服で斷髮なので特に若く見える。

「よう入らつしやいました」と易さんは彼女の良人よりも餘つ程アクセントの正しい言葉で私に挨拶をした。

「上海と東京とどちらが貴女はお好きですか」私がそんな風に聞くと、

「東京の方がずつと宜敷うございますわ、上海は自分の國でもちつとも良い土地だとは思ひません」と易さんは靜かに答へた。

田君と私は電車のある處迄行つたが、丁度電車が來ないので途中迄歩くことにした。田君は大股に非常な早足で歩いた。道で會つた竹を擔いで行く苦力が耳輪を嵌めてゐるのを見て私は異樣に感じた。

「男が耳輪をしてゐるのは妙ですね」

「あれはネ、詰まりかういふ迷信があるんです。運の惡い人間が體の何處かを傷けると其の人間の運命が變つて行くといふのです。子供の時分によくやるのです」

「へえ！それは妙ですね。だが其の迷信は無意味だといふ事は、あの男が生涯苦力で竹を運んでゐることが一番よく證明してゐる譯ですね」

其のうちに電車が來たので乘つた。電車の中で又話しを始め

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。
「あなたは新世界や大世界へおいでになりましたか?」と田君が私に訊ねた。
「否え、どちらも行つて見ません。どんな處です?」
「日本で云へば淺草式の民衆娛樂場です、併し、矢張り淺草とは異つた氣分があります。非常に規模が大きくて、其處へ行くと支那の有らゆる演藝が見られるんです」
「どんな演藝があるんです?」
「いろ／＼ありますが、其の中で是非あなたにお目に掛けたいものは大鼓(だいこ)といふ藝です。それが今上海では大變流行してゐるのです。所謂民衆藝術としても相當に價値のある物だと僕は思つてゐます。其の中でも新世界へ出てゐる晩香玉といふ娘がありますが、大鼓の藝人の中では一番上手で大變人氣を持つてゐて、土曜日には新聞や雜誌に關係してゐるやうな若い智識階級の人達が連中を作つて見に行くくらゐです」
　それから田君は電車の中で其の大鼓といふ藝はどういふ物だかといふ事を丁寧に私に話して聞かせて呉れたが、矢つ張り實物に接して見なければそれがどんな風に面白いのか私には見當が付かなかつた。が、田君の話し振りで何んとなく面白さうに想像されるので、私は急にそれが見度くなつて來た。其處で田君に賴んで、一度宿へ戻つて夕飯を食べてから出直して新世界へ案内して貰ふことにした。

（六）新世界、大世界

八時頃から田漢君と二人で新世界へ出掛けた。其處は大馬路の一番端れで、電車道路の兩側に分れて大きな建物が二つ對き合つて建つてゐた。どちらも新世界である。
　二十錢の木戸錢を拂つて中へ這入る。一見したところ、以前淺草にあつたルナパークや大阪の樂天地を、あの數倍規模を大きくしたやうな物らしい。私達は最初圓形の大きな演藝場の前へ出た。正面には自由廳といふ額が上つてゐる。其處は一段高くなつてゐて、周圍の低い處にはテーブルを置いてカフエーみたいになつてゐる。田君は一寸演藝場を覗いて見たばかりで
「今は丁度詰まらない物をやつてゐますから、一寸其處らを見て來ませう」と言つて私を伴れて庭園の方へ出た。
　庭園と云つても矢張り花屋敷風の庭だ。驢馬を乘り廻す狹い馬場があつたり、大蛇の見世物があつたりした。
「二階へ行つてもいろ／＼な演藝をやつてゐますが、今覗いた處が一番面白い物ばかりある處です。そろ／＼戻つて見ませう」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私達は又以前の圓形の演藝場へ行つた。中には一杯客が這入つてゐた。私達は最初横の方で立つて見た。

「丁度大皷が始まつた處です、あれは蓉鳳といふ人です」と田君は言つた。

高座では、テーブルを前にして男が三味線を彈いてゐる。其の右手に立ちながら女の藝人が何か歌つてゐる。歌ひ手は、歌の合間に、細い脚の臺の上に載せてある直徑六七寸で厚みが二寸位の小さな太皷を細い一本の撥で打ち乍ら、左の手には小さな拍子木のやうな物を持つて太皷と合せてチョキ〳〵鳴らしてゐる。三味線には、大蛇の皮が張つてある。其の棹は義太夫三味線に比べても倍も太い。音色は只ペコ〳〵と鳴るばかりだ。其の棹を眞つ直ぐに押し立てゝ、至極單調にペコ〳〵〳〵〳〵と彈いてゐる。女藝人の歌は、半ば歌つて半ば語つてゐる。歌曲が急調になつて來て追ひ込むやうに、節と言葉の中間で語る處などは一寸浪花節の趣きがあるが、音聲の使ひ方が全然異つてゐるし、又あれほど野性的なものでもない。蓉鳳といふ其の女の藝人は色が黒くて鼻が低くて、顏には何一つ取柄がなかつた。

私達は人が起つのを待つて一番前の方へ出て腰を掛けた。場内を見廻した處が支那人ばかりだ。髯を生やした老人がゐるかと思ふと、それ者らしい身なりをした若い女が來てゐる。月給取らしいのも、勞働者らしいのも、商人のかみさんらしいのも種々雜多の階級の人々が此處へ集つてゐる。出方が茶を持つて來る、タオルを熱湯で絞つて持つて來る、菓子を賣りに來る。支那では料理屋でも芝居でも娛樂場でも何處へ行つてもタオルを絞つて何遍でも持つて來る、支那人は平常油ツこい食物を取つてゐる關係からノベツにタオルで顏だの手だの拭いてゐる。綺麗なタオルなら使つても氣持がいゝが、概して消毒が不完全だから往々傳染病の媒介をする。此處はそれが殊に甚しい。吝蝿くタオルを勸めるから「不要〳〵」と言つて斷つても、平氣で人の顏へ押し付けてくる。料理屋などとは異つて一度使へば若干かの錢を拂ふのだ。

演藝は廿分位宛で交代した。手品や曲藝、盲人の三味線彈き動物の鳴き聲を眞似る男、そんな物が濟んだ後で私達の目的の晩香玉と其の妹の晩香蓮が高座へ出た。例に依つてテーブルの向うへ三味線彈きが腰を掛けると、少し遅れて出て來た姉妹がテーブルの兩脇へ立つ。姉の香玉が大鼓を打つ。拍子木の代りに金屬の櫛のやうな形をした物を二枚倂せて持つて、其の手を耳の側迄擧げてチャリ〳〵チャリと鳴らすのだ。番附を見ると大鼓にも種々の流儀があるらしいが、晩香玉の名の下には梨花

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

太鼓としてあつた。

「王熙君の事を歌つてゐるのです」と田漢君が言つた。

晩香玉の音聲は非常に細く、柔かく、そして艶がある。其の代りに聲量の乏しい憾みがあるが、態度と云ひ調子と云ひ前に出た容鳳とは比較にならぬ程品が良い。彼女は廿位であらう。小柄なはふで、前髪を上げてお下げにして、其の髪を紅い糸で卷いてゐる。美人といふ程のこともないが、藝人としては温和し過ぎる位優し味のある顔立ちである。殊に口許を時々結ぶやうにする癖が可憐な感じを起させる。

「此の人が人氣を得てゐるのは主に藝のはふからですか、それとも顔が主なのですか?」私はそツと田君に訊ねて見た。

「さあ――藝と、顔と、それから此の人は藝人に似合はない品行が善いとか、それから親孝行だとか、さういふいろんなものが一緒になつて人氣を作つてゐるやうです」と田君は答へた。

其の後にもまだ干佩雲だの小黑姑などといふ女藝人の太鼓があつたが、私にも矢張り晩香玉が一番良く思はれた。十一時頃に後の演藝は見殘して外へ出た。そして田君と別れて私は宿へ歸つた。

田漢君とは其の後私は度び／＼會つてゐる。最初田君の紹介で「創造」の同人である郁氏、郭氏、成氏などとも知り合ひになつて、其の人々とも追ひ／＼別懇な交際を結ぶやうになつた。其の事は別に書くとして、私は初めて田君に依つて其の趣味を教へられた太鼓を聽くために其の後も度び／＼新世界へ足を運んだ。耳に馴れるに從つて其の趣味に深く入つて行くことが出來た。其處では西洋人は愚か日本の人を見ることも殆んど無かつた。支那人ばかりの中に交つて、此の國の人でなければ解らない特殊の藝を味はつてゐるといふ事は、詰まり彼等の生活の中へはいつて行くといふ事だと思ふと、それにも私は人知れぬ樂みと滿足があつた。

新世界と同じ物で大世界といふ娯樂場がある。大世界は新世界以上に規模が大きくて、十數箇所の演藝場では、芝居、茶番、活動寫眞、藝妓の唄、講釋、太鼓などを始めとして支那にある限りの演藝をやつてゐる。料理店、球突き、スケート場、其の他あらゆる娯樂機關が備はつてゐる。新世界にしても大世界にしても其の廣いことは驚くばかりだ。廊下を曲り曲つたり、階段を昇つたり、地下道を潜つたり、屋根上へ現はれたり、庭園へ降りたり、螺旋梯子を攀ぢたり、場内の通路は網の目のやうに複雜でさうして迂餘曲折の限りを盡してゐる。一度や二度行つたぐらゐでは中の地理は分らない。全く迷宮だ。是れが日本ならば成るべく分り易く分り易くと設計をする處だが、支那で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は出來るだけ混み入らせて迷はせるやうに迷はせるやうにと造つてある。さうしたあくどい幻怪な事を喜ぶ支那人の趣味性が遺憾無く其處に發揮されてゐる。

もう一つの此處の副産物は野鷄の群れである。彼等は其處を唯一の稼ぎ場にしてゐるのだ。演藝場の人混みの背後の方や兩側に立つて藝を見るでもなく邊りの人を物色してゐる女達や、寂しい屋上へ出て人待ち顔なのや、庭園の間を氣取つた容子で散歩してゐるのや、それらの女達は悉く鷄である。彼等は大低相應な身なりをしてゐる。藝者風、奥さん風、女學生風、いろんな風俗がある。男に會ふとジロリとながし眼で見る。男の方でも應じるともう一遍秋波を送つてそろそろ歩き出す。すると男は其の後へ隨いて行く。女は、四五間位行つては後を振り返る。男が隨いて來るのを見ると又歩き出す。曲り角へ行くと立ち停つて又振り返る。さうしてグル／＼グル／＼と迷宮の中を何處迄も男を引つ張つて歩く。最後に人の居ない處を目つけて男の方から話し掛けさせるのだ。女の方からは決して話し掛けない。此處へ來る女達は、茶館などへ押し掛ける野鷄から見るとずツと高等の賣春婦だ。中には隨分美人も居る。

夜の十時過ぎ頃から、粋ななりをした女達が黄包車で乘り着けて、威勢よく木戸を這入つて行く。遊蕩兒連もみんな其の時刻から押し掛ける。夜の上海は此處からも幕が開かれるのである。

（七）學校見物

拜啓者參觀學校事廿六日晨九時至十時之間周君頌西到貴處接洽請在宅稍待此頌

大安　　張繼　廿四日

散歩から歸つて來ると机の上に見慣れない手紙が來てゐるので開いて見るとさう書いてあつた。昨日上海の新聞關係の二三氏に伴れられて中國々民黨の本部へ行つて張繼氏と居正氏に會つた。其の時支那の學校を參觀したいものだと私が張繼先生に言ふと、先生は大變贊成して呉れて「それは大變いゝ事です是非見て下さい、私は近來教育界とは縁が遠くなつてゐるが、然る可き方法もあるから近日中に手續きをきめて當方からお知らせしませう」と言はれたので宜しく頼んで歸つた。それを心にかけて早速手續きをして呉れたものと見える。

翌日約束の時間に私は中國々民黨交際部副部長周頌西氏の訪問を受けた。周頌西氏は宿屋の應接間で私と顔を合はすが否や頗るあく抜けのした態度で私の手を握つて「自分は張繼氏の友人だが、貴下の學校參觀について張君は少々多忙で御案内が出

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

來ないから、其の代理に今日やつて來た」といふ事を非常に流暢な英語で話して其の後で「馬車も用意して來てあるから御都合がよかつたら直ぐに出掛けよう」と言つた。餘り周君の英語が流暢なので私は面喰つてしまつた。聽く事はどうやら解るけれど其の應對をして喋る事は六か敷い。

「私は殆んど英語を語る事を知らない、幸ひ貴下が日本語を御存じだつたら何卒それでやつて頂き度い」と私が言ふと、

「不幸にして私は日本語を一言も解しない。併し、貴下は大層良い英語を語られるではないか、それで上等だ」

　何上等な事があるものではない、流石に支那の政治家だけに辭令がうまい。が恁うなれば仕方がないので憶面なくやることにして、事が面倒になつたら筆談と覺悟をして一緒に宿を出た。向うの四角で馬車が待つてゐた。

「學校はどういふ種類の學校を御覽になり度い御希望ですか?」と周君は訊いた。

「さあ、成る可く生徒の小さい處を見度いと思ひます。それから男子よりも女子の學校の方に興味を多く有つて居るのですが」と私は答へた。

「承知しました、さあ何卒」

　さう言つて周君は私を先に馬車へ乘せて、それから支那語で馭者に命じて馬車を走らせた。

　周君は私と同年位の紳士だ。動作が快活で、新形の脊廣服が體によく合つてゐる。色が淺黑くて、少し縮れた柔かい髮を綺麗に撫で付け、度の强い近眼鏡を掛けてゐる。春風の長閑な、埃の舞はないコンクリートの道路を馬がカタカタと威勢よく蹄の音を上げる。街は相變らず人がゾロ〳〵步いてゐて賑やかだ。

「貴下は上海は初めてゞすか?」

「さうです」

「御來遊の目的は?」

「只、變つた土地が見度かつたから來て見たのです。が、出來る事なら上海の上層下層明暗兩面共十分に研究した上で、此の土地を舞臺に取つて何か長篇の小說でも書いて見度いといふ考へは有つて居るのです」

「それは面白い計劃ですね。處で、上海は貴下のお氣に入りましたか?」

「非常に私は氣に入つてしまひました。私は西洋も東洋も他の外國の事は知りませんが、今度來て見て此の上海位面白い土地は世界中探したつて他にはあるまいと思ひました」と私は正直な氣持を答へた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「何處がそんなに面白いのでせう？」周君は不思議さうな顔をした。

私は其の返辭で急に躊躇つてしまつた。何故かと云ふと、私が上海をそれほど面白く感じるといふわけは、決して此の土地の人々の生活が文明的だからだといふわけでもなく、或ひは景色がいゝといふわけでも氣候がいゝからだといふわけでもない。寧ろさういふ點では上海位詰まらない土地は無い。成る程何處へ行つても堂々たる歐風の大建築が並び立つてゐる。立派な公園がある、道路は横丁から露地の中迄隅から隅迄コンクリートで固めてあるから日本の往來を歩くやうに膝迄ぬかるみへ踏み込むやうな恐れはない。其のほか有らゆる文明的の設備が施されてある。けれどもそれが何んだ。單に人間の生活に物質文明といふ華やかな外套を着せてあるに過ぎないではないか。肝心の生活の基調となるべき精神の文明が上海には無いのである。それは無いのが當然だ。其處は支那の國内とは云ひ乍ら政治上の主權は支那政府の手に屬してゐない。城内一廓を除くの外は悉く外國の租借地で、列國の管理に屬してゐる。さうして世界各國の人間が入り込んで來て各々異つた生活を勝手に營んでゐる。世界中の有らゆる人種が寄り集まつて上海といふ都會を形造つてゐるのだ。政治上の主權を失つてゐるばかりでなく、其處には支那の傳統的文明も無ければ精神も無い。支那でもない西洋でもない一種の變形的な生活をしてゐる支那の國民が單に人數の上でだけ絶對優勢を占めてゐるのに過ぎないのだ。さうした雜然混然とした空氣の中から優れた文明や人類の善き生活が生れ得る道理はないと私は思ふのである。男は利慾に沒頭し、女は奢侈に惑溺する。さうして其處には、限りなき淫蕩と限りなき放縱との生活が始まるのである。誰か是れを呪はずに居られよう。

只其の中に立つて私一人が歡喜に似た叫び聲を擧げてゐるのである。華美に目眩み、淫蕩に爛れ、放縱に魂を失つてしまつた有らゆる惡魔的生活の中に私は溺れ切つてしまつた。さうして、歡びとも、驚きとも、悲みとも、何んとも名狀しがたい一種の感激に撲たれてしまつたのである　それは何故だらうか？現在の私にはよく判らない。只、私を惹き付けるものは、人間の自由な生活である。其處には傳統が無い代りに、一切の約束が取り除かれてゐる。人間は何をしようと勝手だ。氣隨氣儘な感情だけが生き／＼と露骨にうごめいてゐる――。

私は今さういつた自分の心持を周君に對つて正直に告白することは出來なかつた。「私がお前の國の此の上海に對して興味を感ずる點は、其の無秩序無統一な事だ、混沌として會得の知れ

ない處だ。罪惡の巣窟で、無節操無道德の社會を現出してゐる事だ」とはどうして私に言はれよう？

「吾れ〳〵は此處では全く解放されてゐるでせう。それが私に取つては何よりも有難いのです」私は周君に向つて單にさう答へた。

そんな談話をしてゐるうちに馬車はゴタゴタした支那街のとある横丁の入口で停まつた。見ると「堅秀中西女塾」と書いたペンキの看板が入口に掲げてある。周君は馬車から飛び降りてさつさと先に立つて横丁をはいつて行く。奥へ行くと割りに閑靜で兩側は壁造りの住宅になつてゐる。半丁餘り行つた處の左側にペンキ塗の柱に同じ扉の附いてゐる學校の門があつた。私達が其の門の側迄行つた時門内から一人の老婦人が人力に乘つて出て來た。周君は中折帽子を取つてお婆さんに話し掛けた。するとお婆さんは人力から降りて愛想よく何か云ひ乍ら門内へ引つ返して私達を案内した。お婆さんは七十位の年頃で、白髮で腰が曲つてゐる割りに元氣だ。

「此の老婦人はどういふ方ですか？」

「此處の校長さんです、此の學校はキリスト教の學校で、經費も教會から出てゐるのです」と周君は答へた。

正面に煉瓦造の二階建の校舍が一棟あるが、其の他は木造で平屋の粗末な建物ばかりだ。其の煉瓦造りと云つた處で精々間口七八間位の小つぽけな建物である。運動場といふ程の物もないが、僅かの空地に草花などがつくつてある。校長のお婆さんは私達を隅つこの幼稚園へ導いた。そして代りの先生を伴れて來て「自分は外出しなければならないから」と云つて私達と握手をして、小さな足でヨチ〳〵しながら出て行つた。幼稚園の教室は半分遊び場にして半分には机が並べてあつて其處には四十人位の幼い子供達がガヤ〳〵騷ぎ乍ら折紙をしてゐる子もあれば積木をして遊んでゐる子もある。房々と前髮を眼まで隱すやうに垂れて金の耳輪を嵌めてゐたり、もつと小さい子は髮の毛を三處で抓んでそれを紅の糸で固く卷いて筆の穗のやうにしてゐるのもあれば、お河童さんもある。みんな可愛い支那服を着てゐる。女の先生が二人で世話を燒いてゐる。一人は醜い顏だが、一人は若くて美しい先生だ。子供はみんな可愛くて綺麗だ。どうして恁んなに綺麗な子供ばかり集めたものだらうと思ふくらゐ綺麗な子供だ。

「此處は幼稚園から中學程度迄あるのです」と周君が言つた。

それから私達は校長さんの代理の四十位の女の先生に案内されて幾つもの教室や膳堂（食堂の事）まで參觀して廻つた。本館の教室は整つてゐたが、別棟の舊い校舍の教室はどれも狹くて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

狹くて非常に粗末な造りだつた。花壇の向うに一棟離れて物置のやうな小屋があつたがそれも教室だつた。生徒の數はごく少なくて一番多い教室で漸う十五六人位、少ない室はたつた三人位で授業を受けてゐる。尋常三年から英語を教へてゐた。六年位の生徒は美事な發音で先生と會話をしたり六か敷いリーダーを讀んだりしてゐる。先生は男と女と半々だつた。女の先生はどの人も非常に活潑で、そして不思議な程美人がゐる。生徒にも驚く程美しい子がゐる。そして日本の女學生に比べるとずつとハイカラで氣が利いてゐる。ガランとした食堂の隅で十六七の生徒がたつた一人で上手にオルガンを彈いてゐた。

　生徒の顏はみんな愉快さうに見えた。そこには親しい自由な空氣が流れてゐる。「何んといふ幸福な子供達だらう」と思はずには居られない。靜かな陽が屋根の上や花壇の上を照り付けて其處で幾つもの蝶々が舞つてゐる。

　私は莫迦にいゝ氣持になつて其の學校に暇を告げた。電車通へ出ると馬車が待つてゐた。馬車は再び賑やかな街を走り始めた。今度は神州女學へ行つた。其處も矢張り横丁で、其の狹い横丁には荒物店だの、饅頭などを並べた飲食店だの、鍛冶屋だの、そんな小店がゴミゴミ並んでゐる。併し學校は堅秀に比べると餘程大きかつた。

「此の學校は蔣作賓氏の夫人が經營してゐるのです。御存じでせうが蔣氏は革命の功勞者として支那でも有名な政治家です」と周君が最初に教へて呉れた。

　廿七八位の男の先生が應接室へ私達を案内した、名刺を出すと先方からも呉れた。「謝六逸」といふ先生であつた。

「私は少し日本語を話します」と謝六逸氏が突然日本語を使つたので私は吃驚した。「日本の雜誌も折り〳〵讀みます、貴下のお書きになつた物も澤山拜見しました」

　謝六逸氏の日本語は實に立派なものだつた。私は何んだか自分が日本人に戾つたやうな氣持がした。謝先生は教室を案内して廻り乍ら學校の組織に關する事や教授方針などに就いて丁寧に說明して呉れた。此の學校は小學校から中學程度迄と、其の上に專門部が設けてあつた。美術科もあつた。十七八位の美術科の學生達が石膏のモデルを寫生してゐた。

「あなたは日本へおいでになつたことがおありですか」と私は謝先生に訊いて見た。

「否え、一度も」

「それにしては大變日本語がお上手ですね、日本へ入らしつて見ては如何です？」

「えゝ、是非行つて見度いと思ひます、お國は教育が發達して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐるから私達が行けば大變利益を得るだらうと思ひます。それに反して支那の學校は總てが不完全ですから、御覽になつても詰まらないでせう」

「否え、私の氣持は全くそれの反對です。成る程日本の學校は大きくて立派です、そして義務教育ですから生徒の數も澤山あります。併し、さういふ處でする教育は概して形式的になつて個性に應じた教育は施されてゐません。私はかういふ自由な學校であなた方に教育されてゐる生徒は實に幸福だと思ひました。それに大體私は教育家でも何んでもないのですから學校の制度などには餘り興味を持ちません。私が學校を見せて頂きに參つた理由は、支那の中流以上の家庭の子供を見るのが主なる目的なのです。殊に女の子を見るにはお國では學校へでも來て見るよりほかに便宜がありませんから、それで今日も主に女學校を見物して歩いてゐるわけです」

「解りました。で、生徒を御覽になつてどういふ事を一番強く感じられましたか？」と謝先生は私に訊ねた。

「正直に申しますと、一番私が驚いた事は、生徒の中に美しい子の多い事です。一般に眼鼻立ちがよく整つてゐて、此の子は醜いと思ふ子は一人もゐませんね」

私がさう云ふと謝先生は笑ひ出した。

「それ程の事もありますまい。只、支那といふ國は、上流階級と中流階級との間にはさう大した懸隔はありませんが、中流階級と下層階級との間には非常な距離があります。それは生活狀態の相違ばかりでなく、容貌でも頭腦の發達でも其の間には大變な懸隔があるのです。處で、あなた方が往來で御覽になる婦人は大部分下層社會の人々です。それを御覽になつたばかりで支那の女は皆あゝいふものだとお考へになつては間違ひです。中流以上の女子は是れ位が普通の處です」謝先生は些か得意の體で言つた。

私は謝先生と再會を契つて別れた。時計を見ると正午を過ぎてゐた。私達は大東旅館へ行つて食事をすることにして馬車を走らせた。

「上海へ來て何より氣持のいゝ事は道路のいゝ事です。それを一番最初に感じる程日本の殊に東京の道路は惡いのです」埃も立てずに自動車や馬車が走つてゐる其の砥石のやうな道路をさう言つて私が褒めると、

「貴下に幾ら褒められても、是れ等の道路の一筋も我が國の管理に屬してはゐないのだから、吾れ〳〵には夫れを誇る權利が無いのです」と周君は少し不機嫌に皮肉な調子で言つた。

私は惡い事を言つたと氣が付いた。私は彼の氣持をよく解す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐることが出來る。それは上海にゐる多數の支那人の心持でもあつた。上海は支那の上海ではない、外國人の上海だ。其處では支那共和國の勢力と云つては毛一とすじ程の力も無い。上海で私は三つの大きな公園があるのを見た。ジエスフイルード公園、フランス公園、新公園の三つである。處が、其のどの公園でも支那人だけは中に入れない。入口に巡査が立つて見張つてゐる。何故かと思つたら、外國の租借地へ外國人が造つた公園だから入れようと入れまいと勝手だからさういふ規則をこしらへたのだといふ。支那人を入れることになると夥しく浮浪してゐるあの苦力達がいゝ寢場所が出來たと云つて無闇に這入り込んで來るにきまつてゐるから、それを防ぐ爲めに設けられた規則でもあるさうだ。苦力が一杯入り込んだ日には公園の美觀も何もあつたものではない。それは困るけれど、其の取締り方は何か方法がありさうなものだ。其の爲めに一般支那人の入園を禁じてしまふといふのは餘り亂暴すぎるはなしだ。世界中のあらゆる人種が、浮浪人だらうが淫賣婦だらうが出入自由のパブリツクガーデンだのに、其の地面の眞の持主である支那の國民だけが、紳士だらうが淑女だらうが子供だらうが一歩も入ることが出來ないのだ。私は上海の公園へ遊びに行つた度び毎に、柵の外に小さくなつて固まり合つて羨ましさうに中を覗いてゐる支那人の子供達を見ると可哀さうになつて來て折角の遊山氣分も消えてしまふのだつた。理屈はどんな事にもつけられる。けれ共、かうした非人道的制度の撤廢を要求する事は當然である。近年支那國内に有らゆる利權回收運動が盛んになりつゝあるのも無理はないやうな氣持がして來る。

大東旅館は一品香(ピンシャン)と同じやうな中西折衷式のホテルだ。一品香に比べると更に明るい感じがする、それだけに雜駁で落ちつきが乏しい。周君と私は別室のテーブルについて話しながら食事を始めた。

日貨排斥問題が話題に上つた。それは昨日張繼居正の兩氏に會つた時にも當然話題に上つた問題だつた。其の時張繼氏は、

「廿一條問題などはそも／＼末梢に屬する問題である。日支兩國の政治家並びに國民は更に／＼高所に於て理解し合はなければいけない。其の曉に於て初めて日支兩國間の完全なる親善が結ばれ、東洋の平和が確立する」

といふ意味の理想論を吐いた。それに對して私が横槍を入れて、

「先生の御説は御尤ですが、さういふ理想的の時代が何時になつたら來るでせう？私は反つて先生と反對に、國家と國家とが存在し、國民の生活や思想が異つてゐる以上は永遠に其の門に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は爭闘が續くだらうと考へてゐる。殊に日本人は、私自身の口から云ふのも可笑しいが可成り征服慾に燃えてゐる國民である。そして世界のどの國民よりも强い人種的差別の觀念に囚はれてゐる國民なのです」其の一例として私は、奈良で起つた國粹會と水平社との爭闘に際して在郷軍人團や靑年團が應援團に繰り出したといふから、弱きを援ける日本魂から云つても無論水平社の味方をすることゝ思ひきや、喧嘩ならお手の物の國粹會の尻馬に乘つて竹槍を振り廻したり鐵砲を擔いだりして騷いでゐるのだと知つて呆れ返つてしまつた。兎に角それ程人種的差別觀が强くて、而て征服慾に燃えてゐる日本の國民及び其の政府に對つて眞の理解とか國家的親善とかを要求した處でそれは木に緣つて魚を求めるの類であらうと言つて、更に朝鮮問題まで擔ぎ出して、書生流儀の馬鹿正直さを曝露してしまつたので、一座が白けて顏を見合はせるばかりだつた。其の時張繼氏はテーブルの上へ兩腕を投げ出した儘私の方へ體をねぢ向けて「フン〳〵」と頷き乍ら聽いてゐた後で、例の重厚な調子で、「貴下の言はれる事が或ひはほんたうかも知れない。併し、其の實現不可能の理想をも實現させようとして努力する事が、人類に與へられてゐる使命であるとも言へる」と私を諭へるやうに言つた。

後で同行の某氏から「張繼は理解の深い人だから差し支えないが、側にゐた居正は排日の急先鋒だ、其の前であんな馬鹿な事を言はれては困る」と言つて叱られた。それに懲りてゐるから今日は素人の政治論めいた事は一切口にせぬつもりでゐた。處が周君は政治家だけに頻りに政治の話をする。彼は年が若いだけに隨分過激な思想を抱いてゐるやうであつた。彼は日本の政府が支那の北方ばかりを援助する。金を貸したり武器を供給したりする、それが爲めに民黨が何時も負けてしまふ。吾々民黨は北方の奴等に負けるのではない、日本の政府に負かされるのだと言つて不平を言つた。そして日本の官僚や軍閥を盛んに攻擊して、「日本も威張つた事を言つてゐるが、あんな政府を戴いて有難がつてるやうでは話せない。支那ではいまに吾々が政權を執る日が來る。さうしたら理想的の政府を造つて見せる」と言つて氣焔を上げた。私は釣られるのだとは知り乍らさう日本の惡口を言はれると少し癪に障つて來た。かう見えても忠君愛國で固まつてる人間だ。官僚や軍閥は嫌ひだが、日本が負けることとは何より癪だ。

「貴下はさう惡く言ふけれど、日本の官僚や軍閥は增長する代りにはドン〳〵外國を侵略して國家の富を增進させて吳れる。同じ官僚軍閥と言つても支那の夫れのやうに外國と喧嘩をすれ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ば屹度負けて損をして、其の穴埋めに國民の懐ろから捲り上げてお負けに自分だけは儲けようといふのとでは大いに選を異にしてゐる。日本人だつて算盤は知つてゐるから、さう一概に悪くばかりは思つてゐない」

と言つて私は大いに官僚や軍閥の有難味を論じた。如才ない周君は莞爾々々笑ひ乍ら

「吾々も政権を執る日が來たら其の點だけは日本の官僚や軍閥に學び度いと思つてゐる。」と言つた。

私達は午後は南洋女子師範學校と、郊外の交通部大學とを參觀した。交通部大學は堂々たる建築で總ての設備が完全してゐた。其の宏壯な建物が郊外の景色と良い調和を示してゐた。

かうして終日の學校參觀で可なり疲れた體を私達は馬車に揺られながらアカシヤの並木に夕陽の宿つてゐる平坦な道路を上海の方へ戻つて來た。

（八）露人の家に移りて・友人來

上海へ來て半月以上の日數が夢の間に經つてしまつた。土地の様子もほゞ分つて來た。さうなると何時迄も日本旅館にゐたのでは面白くないから、何か變つた生活がやつて見度いと思つて、それには西洋人の家の部屋を借りて自分勝手な生活をして見るに限ると考へ、四月十日頃の或日のこと貸間探しに出掛けた處が、老靶子路(ローポーツロー)の九十五號といふ處で、主人が露西亞人で、大變上等の貸し間が目つかつたので早速翌日其處へ引つ越してしまつた。

處が、それと同時に、私の一身に或る偶然の事件が持ち上つた。と云ふのは、そも〱其の貸し間を探しに出た日のこと初めて私が知り合ひになつたY子といふ、矢張り老靶子路の外人の家を借りて社交ダンスの教授をしてゐた日本の女性と、其の後僅か三日ばかりの間に、特殊の關係が生じてしまつた。それは視る人の解釋次第でどういふ批判でも下せる事柄だが、少くとも當事者としては眞面目で眞剣だつたので、第三者との間に生じたいざこざに構はずY子はそれ迄の彼女自身の生活は其の日限りうつちやつてしまつて、私の處へ來て同棲する事になつたのだつた。

孤獨の旅人であつた私の環境は俄かに一變してしまつた。人生の行路には實にさま〱の運命が待つてゐるものである。私は全く夢にも知らなかつたところの新らしい生活にはいつて行つた。其の生活は、刺戟に餓えて飽く事を知らぬ私の慾望をも十分に滿足させずにはおかなかつた。Y子はまだ廿六歳の女だが、彼女は殆んど有らゆる人生を經驗して來てゐる。それは主

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に彼女の美貌と情熱と才氣とが、彼女をさういふ複雜な徑路に導いたのだつた。それが爲めに彼女の容貌には凄慘な魅力が加はり、性格は複雜化して來た。温く平坦な人生は益彼女から遠ざかるばかりだつた。私は、それが彼女に取つて不幸であるか或ひは幸福であるかといふ事に就いては判斷が出來ない。が、經驗といふものを一番重んじる人生の觀方もある。それも確かに正しい觀方である。私は彼女の豐富なる經驗を私自身の智識にして、そして彼女をモデルにする長編の創作を試みようと決心した。彼女も勿論私の企てに贊成した。そこで彼女は話す、私は聽く――さういふ仕事を幾晩も續けた。

私とY子がそんな生活を始めて四五日經つた處へ、私の親友の田中貢太郎が日本から到着した。其の日は珍らしく小雨が降つてゐた。私は貢太郎が乘つて來る長崎丸を迎へに滙山碼頭へ行つた。船は定刻より少し遲れて一時頃に着いた。甲板へ出て港を見てゐる一等船客の群れの中に、脊廣の上へカーキー色のスプリングコートを着てペチヤンコの茶の中折帽を眼深に冠つてゐる眞ん圓つこい丈の低い貢太郎の姿を發見して私がハンカチを振り／＼してゐると、餘程經つてから彼の方でも私を見出して、髭の中で顏を崩して笑ひ乍ら帽子を取つて振つて見せた。

船へ行つてから訊いて見ると、貢太郎は同鄕人の某氏の家を宿にする手筈になつてゐると云ふ。而も某氏の住所は私と同じ老靶子路の百卅號で隣と鼻の間だつたので、是れは奇妙だと云つて笑ひ合つた。兎に角一先づ私の處へ行つて先方へ電話を掛けた上のことにしようといふので、雨の降る中を黄包車に乘つて戻つて來た。

部屋へ這入ると貢太郎はいつものセカセカした口調で、東京を發つ前の事や道中の話などをした。大阪で三日居て其の間呑み續けたので少し體の調子が惡いなど〻言つた。そんな話しを暫くした後で貢太郎はグル／＼部屋中を見廻した。ドアの裏の帽子掛けには、鳥の羽根のついてゐる黒い繻子の帽子や、フランス式の紅い繻紗の帽子が掛つてゐる。淡紅色のシヤツや樺色のスカートがベツドの手摺に掛かつてゐる。Y子は今朝床屋へ行き度いと云つてゐたからおほかた其處へ行つたものと見える。貢太郎はニヤ／＼笑つて、

「ふん――やつてるね」と言つた。

それまで私は彼にY子の事を話す折が無かつたので默つてゐたが、もう隱してもゐられないので極く簡單に成り行きを話した。

「ふーん、さうか。俺は又女房と一緒に居るのかと思つたよ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

や、何んにしてもいゝさ、大いに遣るんだね」と貢太郎はおだてるやうに言つた。

「時に君の洋服は大變よくうつるぢやないか」

　私は今日が初めて見る貢太郎の洋服姿をしげ〴〵と眺めた。私が東京を發つ前から、貢太郎も一と月位遲れて支那へ來ることに決まつてゐた。或る日中央公論社で落ち合つて其の事で打ち合せをした。其の時私が、

「時に君も支那へ行くなら洋服を拵へなけりやいけないね。支那といふ處は馬鹿な處で、日本の着物を着てゐると日本人までが馬鹿にするさうだよ」と言ふと、

「うん、俺もそんな話をきいてるんだ。キリシタンバテレンになるといふ譯でもなし、まあ郷に入つては郷に從へだから、洋服を拵らへる積りではゐるんぢや」と貢太郎は答へた。

　田中貢太郎は、世間で知つての通り土佐つ子で、土佐人の豪快な氣風を多分に有つてゐる。そして是れも御承知の通り酒呑みである。而も呑み出したら痛飲淋漓曉を越えても熄まないといふ呑み方だ。日常生活もさういつた調子だ。武士と仙人とを搗きまぜたやうな男だ、世が世でない爲めに原稿を賣つて飯を食つてゐるといつた調子がある。彼は元來洋服が大嫌ひで、其の癖西洋の小說は耽讀するのだが、生れて未だ洋服といふ物を身につけたことがない。洋服は愚かな事、シヤツすら決して着たことがない。シヤツなんか着たら體が腐ると云ふ。

「洋服屋は懇意な處があるかね？」

「無論無いさ」

「ぢやあ、つい此の近所に僕の懇意な洋服屋があるから其處へ誂へちやあどうだね。なんなら今一緒に行つてもいゝ」

「さうか、それは有難い、ぢやあ早速賴むかな、何しろ着たことのない物は誂へるにも見當が付かないからね」

　私達は、其の時はまだ本郷三丁目にあつた中央公論社を出て電車道を越えた向うの四丁目の洋服屋へ行つた。店で生地の見本を出させて見ながらも貢太郎は「うん、いゝだらう〳〵」で何んでも私に任せてゐる。愈寸法を取る段になつた。貢太郎は袴を脫ぎ着物を脫ぎ越中褌一つで仁王樣のやうに往來の方を向いて突つ立つた。

「いゝお恰幅で御座いますなあ」と洋服屋の主人は前へ廻つて眺めてゐる。

「窮屈なのは御免だよ、布を惜まずタップリ拵らへて吳れよ」

「へい〳〵畏まりました」

　そんな風で出來上つたのが、今彼が着てゐる洋服である。洋服屋は布を惜むと思はれまいとしてせい〳〵タップリ仕立てゝ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある。そこへ貢太郎が肥つてゐるので全く大々して立派だ。

「さうか。併し洋服もいゝが、どうも此の喉が痛くてね、此の喉がネ」と言ひ乍ら貢太郎はカラーの中へ指を入れてグイグイ引〃ぱつて見せた。

「汽車の中で睡る時は弱つたよ、睡り掛けると喉がキュッと締まつてネ。支那には首枷の刑が今でもあるが、あいつお辛いだらうと思つたよ」

其處へ上海で發行してゐる上海××日報とい邦字新聞の記者が私を訪問して來た。他に用のある筈はないから、Y子の一件が新聞社へ知れて記事にする積りでやつて來たのに違ひなかつた。其處で私は田中貢太郎を記者に紹介して鋒先をそつちの方へ曲げてしまはふと思つた。記者は貢太郎に向つて來遊の目的を尋ねたり、如才なく怪談文學の話などを持ち掛けたりした。

「吾輩は支那の怪談も隨分讀んどるがね、實地を見て置かんと感じが浮かばないからね……」貢太郎は專賣物の講釋を始めた。

併し記者は其の後で私に向つて、私自身の事件について質問を發することを忘れなかつた。私は、筆を持たせればどんな事だつて書いてしまふが、自分の事を口で話すのはテレ臭くて話せない。私が困つてゐるのを見て貢太郎は側で面白がつて、

「君、構はずウンと追窮したまへ。遠慮はいらんよ。どうも、此の男は吾輩の友達だが怪しからん、せい〳〵毒筆を揮つて筆誅し玉へ、手加減をしちやあ駄目だよ」と記者をけし掛けた。

其の晩M君といふ私の友達の御馳走で、貢太郎と、Y子と、私の三人が何酒家といふ日本の料理店へ招かれて行つた。大廣間へ藝者が十人ばかり來て騷いだ。が貢太郎はいつになく酒も澤山飲まず詰まらない顏をしてゐた。そこでいゝ加減に切り上げて、今度は四人が一臺の自動車へ乘つて四馬路を見物に出掛けた。まだ雨が降つてゐた。四馬路の夜を彩る無數の燈火が、水に映つたイルミネーションのやうに濡れてしほたれてゐた。

M君は更に自動車を走らせて、フランスタウンにある或秘密の家を貢太郎に見せる積りで伴れて行つた。其の家は、朱君の友人の楊さんといふお醫者様の案内で行つたのが最初で、其の後私も一二度遊びに行つたことがある家だつた。落ち付いて、靜かで、そして家も綺麗だ。其處には二人の姉妹娘と其の母とが住んでゐる。姉は十八で玉銀寶、妹は十六で玉潤寶といふ名前だ。實の姉妹ではないだらう。姉の方は圓顏で色が淺黑く眼が潤んでゐて、顏立ちも氣だても溫和しく、何やら淋しく考へてゐるやうな娘だが、妹の潤寶は姉とは何處から何處迄も反對で、細面で色が白くて眼は小鳥のやうに愛らしく冴え〳〵して、性質は優しいけれども快活で、いつでも嬉々として戯れてゐる。そ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れも其の筈で、姉の方はお客を取らなければならなかつたが、妹はまだ生娘なのだつた。母親は四十位で、額に薄い菊石があるけれど、色が小白くて愛嬌がある處へ、若い女と同じやうに前髪を垂れてゐるので一寸見は卅位に見える。彼女は上等の翡翠の耳飾を付け金の腕輪を兩方に篏めてゐた。眼つきも聲もまだ婀娜つぽかつた。此處では主に餘所から女を呼んで來るのらしかつた。

貢太郎は不思議さうに室內の光景を見廻してゐる。かういふ處へ初めて來たY子も頻りに珍らしがつて二人の娘を眺めてゐる。人なつこい潤寶の方は直ぐに慣れてしまつて喋々としてY子に話しかけた。がY子は支那語が解らないので潤寶はじれつたがつて相手の頸つ玉へ細い腕を卷き付けたり、頰つぺたへキツスをしたりする。

「君、あれは何ぢや?」と貢太郎は部屋の隅の帷の掛かつてゐる處を指差して言つた。

「あれは寢床さ」と私は答へた。

貢太郎は紫檀の寢臺の側へ歩いて行つてシユーツと帷を引き明けて中を覗いて見て、

「成る程解つた、垂帳紅閨と云ふのはこいつのことだつたんだ」

さう言つて貢太郎は破れた帽を其の閨の上へゴロツと横に倒した。

翌日一日貢太郎は顏を見せなかつたが、その次ぎの日は朝早くやつて來た。

「昨日はね、此の土地の俳人の飲み仲間に伴れられて南京路といふ處の――何んとか云つたつけなアあの家は――其處で紹興酒といふ酒を呑まされた。實に支那の酒はいゝ。堪まらん。うんと飲んで醉つぱらつて家へ歸つたのも知らずさ。いゝ氣持だつた。其家では、酒の肴に小さな蛤の干し固めたやうな物を出すが、こいつが又莫迦にうまかつた。おい、今日は其家へ行かう」

正午頃から三人で見物に出掛けた。貢太郎は私の處にゐる間に飲んだチエリーブランデーのお蔭でもう可成り醉つてゐた。

「ちよいと、田中さんのカラーがおかしに飛び出してゐるわよ。注意して上げるといゝわ」と往來を歩いてゐながらY子が私に囁いた。

見ると、成る程カラーが釦から外れてしまつて、兩方の端が上と下とへ一寸位宛飛び出してゐる。喉が痛い〳〵と言つてゐたので今日はソフトカラーを掛けてゐた。其の飛び出したカラーの上へ、手拭でも卷き付けるやうにネクタイを卷き付けてゐる。尙くどく描寫をする日になると、更に其の上を彼の嚴めしくも縮れた顎髯がボサリと覆ふてゐるのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「君、カラーが飛び出してるぜ、どうしたんだ」

「うん此奴か？どうも此奴は始末が悪い、ネクタイを強く結べば喉を締められてしまふし、弛めて置けば此の通り飛び出すんぢや」

「釦を掛けたらいゝだらう」

「處が、釦が小さいのか穴が大き過ぎるのか、うまく留まらんて。第一此のネクタイといふ奴が——どうもいかん、おいッ、誰か手を貸して呉れんかあ」

支那人の煙草屋の前を通ると貢太郎は店先に並べてある五本で十錢の葉卷を買ひ込んだ。

「君、そんな煙草はのめりやしないよ」と言ふと、

「いんにや、きのふこいつを買つて見たがなか／＼のめる、こいで結構ぢや。おい、一本やつて見んか」

文壇の先輩田中貢太郎は、五本十錢の葉卷を啣えて焦茶色の煙を棚引かせながら、洋館立ち並ぶ上海の大道を、往來狹しとばかりに濶歩するのである。

貢太郎は四五日上海にゐたばかりで友人に伴れられて地方へ旅行に出掛けてしまつた。揚州、蘇州、杭州——と各處からの彼の通信を私は受け取つた。民船に乘つて長江を下るといふ知らせなどもあつた。さうかと思ふと「奴は十六ちんぷんかんきぬぎぬや」といふ句を書いてよこしたりした。

江南の天地、風光明媚、酒に老酒がある。白樂天陶淵明の故事を學んで、貢太郎の詩囊は益肥ゆるばかりである。彼が這の回の紀行が、文章となつて現はれる時こそ、まさに刮目して睹るべきものがあらう。

(九)「創造」の同人

或る日田漢君から書面で、幾々日に家庭で晩餐を供し度いから來て呉れといふ案内を受けたから喜んで參上する旨を答へて置いた。田君なら氣の置ける人でもないからと思ふので、約束の時間にY子も一緒に伴れて先方へ行つた。直ぐと二階へ通されたが、見ると五六人の先客があつて私を待つてゐた。

「やあ、お待ちして居りました。今晩はね、あなたに御紹介しようと思つて、此の通り私の友達にも來て貰つたのでした」と主の田君が眞つ先に席を起つて言つた。

其處で私は田君の紹介で一人／＼に挨拶を交はした。郭沫若君、成瀕君、林祖涵君、黃日葵君、其の他の人々であつた。處で、今度は私の背後に立つてゐるY子を一同へ私から紹介しなければならぬ場合になつた。實は田君一人に會ふことに思つて遣つて來たのだつたので、不意にかう大勢の前へ引き出される

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、どう言つてよいか困つてしまつた。田君一人なら何を言つても氣は置けないし、事實を話すのも一つの興味だと思つてゐたくらゐだが、初對面の大勢の人の前で眞逆そんな話しも出來ない。

「これは私の妻です。つい此の頃東京から參りました」と私は言つた。

食卓が開かれる前に又二三人客が殖えた。若い人達は大がい中華書局の編輯局員だつた。

「今晩のお料理は私の母と弟との手料理ですから純粹の湖南省の田舍の料理です。どうかさう思つて召し上つて下さい」と田君が言つた。

テーブルは直徑一間位の圓形のテーブルだつた。料理が次ぎ〳〵と切りもなく運び出された。それは素人料理とは思はれない程凝つてゐて美味だつた。普通の家庭の主婦が是れ程の料理を作れるといふ事は日本などでは見られない事だ。兎に角數が二十品位出た。大皿や大丼へ山盛りに或ひはなみ〳〵と盛つて出された料理を、全部の客が同時に匙を出し合つて掬つて食べるのである。酒は、紹興酒とか茄皮酒とかいろんな酒が出た。一人が順に盃へ酒を注ぐと、一同が同時に盃を上げてグッと一いきに飲み干すのである。支那では昔からさうだと見えて芝居の酒宴の場などを見ても矢張りさういふ飲み方をする。日本のやうに獻酬をしないのはいゝ事だが、私のやうな下戸は是れでは逸早く參つてしまふ。茄皮酒といふ酒は色が紅くて、甘くて且つ强い、が口當りがいゝので私は勸められるにまかせて何杯も傾けた。

郭沫若君は福岡の醫科大學を卒業して今年の二月本國へ歸つて來たばかりの、支那隨一の新らしい詩人で同時に戲曲家である。成灝君は東京の帝國大學出身で、造船學專攻の工學士だがそれと同時に文藝批評家としては支那に於ける第一人者だ。兩士とも田君と共に「創造」の同人である。「創造」の同人の中には小說家として名高い郁達夫氏もあるが、今日は郁氏は都合が惡くて來られなかつたと言つた。「創造」は今年の三月から四馬路の泰東圖書局を發行所として生れた支那に於ける殆んど唯一の純藝術雜誌である。其の同人の人々は、それに據つて新興藝術の先驅者として花々しい努力を續けてゐる。郭君でも成君でも郁君でもみんな揃ひも揃つて學校では畑違ひの學問を專攻して來てゐるのも不思議だが、今はどの人も藝術のみを爲事とし生命として活動してゐる。

「日本へ留學する當時迄は私達は新らしい文學の事などは知らなかつた、だからみんな變な科へはひつてしまつた。處が、高

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

等學校時代から文學に親しみ始めて、大學へ進んだ後は一層それに對する興味が旺盛になつて、厭々乍ら學校だけは卒業したけれど、今では何が本職だか分らない狀態です」

と郭君は優しいねばりのある言葉使ひで莞爾々々笑ひ乍ら言つた。郭君は色が白くて、强度の近眼鏡の下で少し飛び出してゐる眼には、藝術家らしい無邪氣さと陰鬱な惱みとを漂はせてゐる。成君は、丈が低くて圓つこい顏を有つてゐる。顏の色は眞つ黑だ。其處へ白々とした齒が脣の外まで飛び出してゐる。非常な靜かな人で大抵は默つて人の談話ばかり聞いてゐる。が、偶に一と言位ポンと人の談話の中へ抛り込む。それが胡椒のやうにピリヽと來る。まことに大作の批評家らしい。

三時間位、飮んだり食つたり喋つたりノベツ幕無しに口を動かし續けた。私は腹の皮が破れさうになつてゐる上に、更に醉つぱらつてしまつた。餘り遲くならぬうちにお暇を告げようとすると、郭君が「僕の家も直ぐ側ですから一寸寄つて下さい」と言ふ。私達二人は、郭君と成君に伴れられて田君の家を出た。成君は郭君の家に同居してゐるのだ。

私は醉つぱらつてフラ〱しながら步いた。其のコンクリートのトンネルみたいな民厚北里を向うへ拔けると其處に小さなマーケツトがある。其の街を橫に突つ切つて行くと、民厚南里の入口へ出る。非常に規矩整然とした露地で、中央に向へ突拔けてゐる一すぢの道があつて、其の左右に規則正しく同じやうな枝露地がある。東側で五ツ目の露地を一寸這入つた處に郭君の家はあつた。取つ付きの玄關みたいな部屋にテーブルや椅子があつたり洋書が詰まつてゐる本箱が置いてあつたりする。

「只今僕の家内を御紹介しますから」郭君はさう言つて私達を其の部屋へ待たせて置いて奧へ行つた。

暫くすると郭君は戾つて來たが、其の後から赤ん坊を抱き乍ら出て來た奧さんを見ると、紛れもない日本の婦人で日本の着物を着てゐる。私達は意外の感にうたれて奧さんの顏を見守つた。

奧さんはいゝ體格で非常に愛嬌のある顏立ちで絕えず莞爾々々笑ひ乍ら初對面の挨拶から始めていろんな話しをした。抱いてゐる子の外にまだ二人のお子さんがあるさうだが、其の子供達はもう寢床へ這入つてしまつてゐるので伴れて來られないと郭君は言つた。

「支那へ參つたのは今度が初めてゞすの、まだ何んにもこちらの生活に慣れないものですからほんとに困ります」

と奧さんは言つた。奧さんは佃寄の人ださうである。私は自分の尊敬する外國の人の家庭に來て、其の人の夫人が自分の同

胞だつたといふ事が何んだか奇蹟的に考へられた。兎に角私は一種の感激的氣分に浸つてしまつた。非常に昂奮してしまつた。

歸る時には、馬車屋のある處迄郭君と成君と、奥さんも赤ん坊を抱いた儘で送つて來て吳れた。馬車屋には非常に立派な黒塗の箱馬車があつた。私とY子は其の人々と別れて馬車に乘つた。

坦々たる大道をカツカツと走る馬の蹄の音だけが聞えた。私は馬車の中で醉ひ潰れて睡つてしまつた。

それから二三日後に、私は郭君、成君、田君の三人の訪問を受けた。そして午後の三時頃から、Y子と私は其の人々に伴れられて外出した。靶子路から北四川路を眞つ直ぐに大馬路の方へ歩いて行つた。Y子は一番氣の置けない田君と肩を並べて話し乍ら先きへ行く。私と郭君とは一番遲れて、互ひの仕事に對する心持なぞを話し乍ら隨いて行つた。成君は其の眞ん中位を例に依つて默々として歩いてゐる。

大馬路へ出てから

「今日は私の故郷の四川の料理屋へあなた方を御案内する豫定ですから」と郭君が言つた。

いつも〳〵御馳走になるばかりで濟まないとは思ふが先方の厚意を考へると嬉しいので其の言葉に從ふことにした。さうして歩いてゐるうちに

「おやツ、成さんがゐない」と誰れかが云ひ出した。

「つい今し方まで確かにゐたんだがね」

「どうしたんだらう？」

先へ行つて見たり後戻りして見たりして探したが見えない。

「眞逆あの黒い成さんでは誘拐して伴れて行く物好きもあるまいね」みんな笑ひ出した。

併し成さんが一人缺けては詰まらなくなるので兎に角探さうといふことになつて、みんなでキヨロ〳〵しながら四馬路迄歩いて、「創造」の出版元の泰東圖書局へ寄つて「成灝君は來なかつたか」と訊いて見ると來ないと言ふ。私は序でに其の店で郭君の戯曲詩歌集「女神」を買つた。それから又四馬路をブラ〳〵歩いて行くと、向うから來る成君とばつたりぶつかつた。

「何處へ行つてゐたんだ」

「うん、君達にはぐれたから美麗へ行つて見たらまだ來てゐないといふから、大方泰東圖書局だらうと思つて來て見たのさ」

成さんは別に不思議な論理は其處に無いといふ風にニコリともせず言つた。

勢揃ひが出來たので直ぐに三馬路の四川料理「美麗」へ出掛けた。それは角店でなか〳〵ハイカラな店だ。日本の支那料理は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

全部廣東料理だが、上海へ來ると、北京、廣東、四川、湖南――と各地方の料理がある。料理屋は各々專門の看板で客を引いてゐる。其の中で現今一番流行してゐるのが四川料理だ。就中此の美麗は最上級の家で食通間でも評判になつてゐる。併し私が其の家を覺えたのは其の日が初めてであつた。

打ち合せがしてあつたと見えて其處へ郁達夫君がやつて來た。それで急に賑やかさを増した。彼は實に氣持のよい才子だつた。今日はみんな洋服だが、郁君のスタイルは水際立つてアク拔けてゐる。彼は流麗極まる日本語で圓轉滑脱の話し振りをする。東京の帝國大學で經濟を專攻した法學士だが、法學士なんかはすつぽかしといて小説を書いてゐる。

料理は例に依つて幾らでも出る。酒はいろんなのを持つて來る。郁君と郭君とは競爭で飲み始めた。Y子も紹興酒を飲んで頻りにはしやいでゐる。とにかくみんな醉ぱらつて愉快になつてしまつた。

唄を唄はふといふことになつたが、一同がY子に皮切りをやれと言ひ出した。

「ではわたしは印度の國歌をやりませう」と言つて彼女は變てこな歌をうたひ出した。

「もう一つ〳〵」とみんなでおだてる。

すると彼女は今度は自分の生れた國の信州の俗謠をやつた。諏訪明神の御柱を運ぶ時の木遣りだの、伊奈節だの、木曾のなかのりさん――。

「今度は僕が一つ湖南の調で空城計を唄ひます」

色白の田君は醉つて眞紅な顏をしてゐても例の眞面目な調子で斯う斷つて、孔明が屋上で琴を彈ずるあの物語を唄にして唄つた。彼は非常に巧みに唄つた。しかも腸をしぼつて發る其の悲痛な調子は、支那の古い物語を聯想させるべく最も適してゐた。

すると今度は郭君が負けない氣になつて矢張り何かの古い物語の芝居唄をやり出したが、此の方は途中で苦しがつて止めてしまつた。

みんな勝手に何かやり出した。

郁君と郭君は拳みたいな事をして負けた方が一杯宛飲んだが、郭君はノベツに負けてノベツに飲まされるので最後に彼はグデ〳〵に醉ぱらつてしまつた。

其の後私は郁君には會ふ機會がなかつたが、其の他の人々とは度び〳〵會つた。或時私が郁君の噂をして

「郁さんは才子ですね、あゝ才子では世間がいつ迄もあの人に文學ばかり遣らせては置かないでせう」と私が言ふと、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「全く才子ですよ、私達の仲間では郁さんに江南の才子といふ名が付けてあるんです」と郭君は笑つて答へた。

郭君は詩人らしい詩人である。彼は四川の生れだが、國慣れない妻子を伴れてゐるので現在は上海にゐるけれども、此の雜然騷然とした濁つた上海の空氣を彼は非常に厭つてゐて、もう少ししたら何處か田舍へ行つて暮したいと思つてゐると言つて沁々と私に話したことがある。

「さうして折り〳〵生活を變へて違つた事を考へて行くやうにしたいと思つてる」と彼は言つた。

彼の作る詩は所謂漢詩ではない、全然異つた新らしいものだ私は「女神」の中に納めてある「上海印象」の一篇を拔いて讀者に紹介して彼の詩の一般を想像して貰ひたいと思ふ。それは彼の作中の佳作だからといふ意味からではなく、單に「上海」といふ點からそれを選んだにすぎない。

上海印象

我從夢中驚醒了!
Disillusion 底悲哀喲!

遊閑的屍、
淫囂的肉、
長的男袍、
短的女袖、
滿目都是骷髏、
滿街都是靈柩、
亂闖、
亂走。
我的眼兒淚流、
我的心兒作嘔。
我從夢中驚醒了!
Disillusion 底悲哀喲!

(一〇) 競　馬

去年の暮頃に上海へ行つて見ようと決心をしてから、上海にゐたことのある人に一人二人會つて話をきくと、どちらも云ひ合はせたやうに上海の競馬の話をした。

「上海へ行つたら是非競馬も見物しておいでなさい、それは實

に盛んなものですから」と言はれた。

競馬場の規則などは話できいてもさつぱり呑み込めなんだが、只、一番大きいのを當てると十弗の元で廿五萬弗取れるといふ話だけは的確に私を吃驚させた。「各方面を見て來ようといふには無論さういふ場所へも一度は行つて見なければならない」と思ふと同時に、私も一つ馬券を買つてアハよくば其の廿五萬弗をせしめ度いものだと考へた。

それから今年の松の内に母親が成田山へ初詣りに行つた。母親を玄關へ送り出した時私はふと思ひ付いたので「お母さん私の御籤を頂いて來て下さい」と言つて頼んだ。母親は忰が急に迷信深くなつたことを喜んで承知して出掛けたが果して御籤を頂いて來て呉れた。これは大胡摩をたいてイの一番に頂いた御籤だよと云つて母親は勿體をつけて出して見せた。見ると素晴らしい御籤だ。「八十六大吉」としてあつて其の下に實に縁喜のいゝ句ばかりが四行に並べて書いてある。其の一句は「車行進財寶」といふのだ。

「どうも大した御籤だネ。ねえお母さん、此の車行進財寶といふのは、詰まり早く云ふと車に積んだ寶物といつたやうな意味でネ、お金が有り餘る程出來るといふ事さ、どうも有難いな」

大した御籤だ、大した御籤だといつて家内中の者がそれを祝き込んだ。私は大切にそれを折り疊んで財布の中へ仕舞つた。其の時私は直感で「こいつは競馬が中る」と感じた。どうもそれより外に私に金の授かりようはない。それから三月近い間私は其の御籤を戀人の便りのやうに大事にして持つてゐて時々出して見ては樂しんだ。此の安つぽい紙切れ一枚がいまに私に廿五萬弗といふ莫大な財産を授けて下さるのだと考へると、どうも我れ乍ら運といふものはわからないものだといふ氣がした。廿五萬弗の使ひ道を考へて置く。先づ半分は家族の永久の生活費として取つて置いて、殘りの十二萬五千弗を持つて世界漫遊に出かけよう。最初は紐育へ行つて佐々木指月に遇つて、貧乏してゐる指月に一萬弗も遣つて喜ばせてやらう、それからヨーロッパへ行かうか、それともメキシコ邊りで暫くうろついて見ることにしようか……?

發つ前の日に芥川龍之介君に會つて競馬の話をすると、同君も大いに私の開運を祝福して呉れたはいゝが、其時認めて呉れた上海の同君の友人への紹介狀の中へまで此の事を書いて、「中つたら君も五萬弗分けて貰ひ玉へ」と餘計な事を書き加へてしまつた。芥川君は人の懐ろだから構はないだらうが、常人の身になると、中々見ず知らずの人に五萬弗分けて遣る氣にはなれない。其の日は大變御馳走になつたりして門出を祝つて貰つたが、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

是ればかりは迷惑した。

上海へ着いてから同じ宿で懇意になつた競馬通の人から詳しい話を聞くと、廿五萬弗の口は五月の大競馬のチャンピオンレースの中り籤だからそれ迄待たなければならないが、平常土曜日毎に二ケ所の競馬場で交替に競馬がある。それでも俗に「ガラ」と云つてる富籤のやうな馬劵が中ると五弗で三千弗位は取れると言つた。三千弗ではチト目算が違ふが取り敢えずそれも中てゝ五月迄の滯在費でも稼いで置かうと考へた。

三月廿八日に初めて江灣の競馬へ行つた。芥川君の紹介で懇意な友人になつたS君といふ人と、其のS君の紹介で知り初めた例の朱君と、三人で出掛けた。S君は上海に滿二年住んでゐるが、競馬へ行くのは今日が初めてだと言つた。

「競馬へ行くと柄が惡いやうでネ」と紳士であるS君は言つてゐた。

ちつとばかり柄が惡くても廿五萬弗になりやあ文句はないと私は思つた。

江灣といふ處は、上海の市街から一里ばかり離れた北の郊外の地である。麥畑の田園の間を廣い道路が走つてゐる。競馬會社で造つた道路だ。自動車が數珠つなぎに走つてゐる。畑の中には點々として塚がある。黑い墨で塗つた棺がむき出しに置いてあつたりする。二十分位で競馬場へ着いた。入口で一弗出して入場劵を買つて這入る。

大きな建物が正面にある。其の屋根の下には人が一杯群がり押し合つてゐる。馬劵を賣り始めてゐるのだ。其の前の廣場には二ケ所にボールドが上つてゐる。それには番號、馬名、騎手、封度が順を追つて掲示してある。それを根氣よく眺めて比較してゐる人々もある。

朱君は威勢よく一番向うの端れのスキープ所謂ガラの札賣場へ行つて十弗の紙幣を出して二枚買つた。私とS君は譯は分らないが朱君の眞似をして一枚宛買つた。何しろゑらい人だ。一丁位ある大きな建物の中が一杯の人で歩かれない程だ。間もなくチリン／＼と振鈴が鳴ると、賣場では一齊に札を賣るのを停めた。群衆はゾロ／＼とグラウンドの方へ押し掛ける。階段を昇つて行くとスタンドの一番下の處へ出る。スタンドの廣さは優に二三萬の人を容れることが出來る。其處から見ると馬場は一と目に見渡された。果しもない平野だ。空は靑い鏡のやうに透明だ。馬場の彼方に村落が見える。麥畑がある。森がある。

レースが始まつた。スタートが遠いので、馬が玩具のやうに小さく見える。騎手は豆のやうに見える。段々スピードが加はる、馬も人間も大きくなつて來る。最後にスタンドの前へ來

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る、群衆がどよめく、決勝點へはいる。何が何んだかさつぱりわからない。

「朱さん、此の札はどうなつたんだね？」

「行つて見ませう」

スタンドを降りて朱さんはサツサと先へ立つて行く。スヰープの札賣場の横手の處にもボールドが上つてゐた。朱君は自分の札と私とS君の札とを手に握つてボールドと見比べてゐたが「駄目です」と言つた。

それから二三回續けてスヰープを買つたが番度び中らない。併しスイープといふ馬券の性質だけはやつと呑み込めて來た。スヰープは、一から始まつて千なら千迄の札を順序に賣る。賣り切つた處で、係員が一號から千號迄の小さな圓い珠を眞鍮の圓い釜みたいな物の中へ入れて、それを廻してガラン／＼と混ぜた上で、底の螺旋を捻つてポトリと一箇落す。又ガラ／＼と廻してポトリと落す。馬が十頭出る時なら十個、十五頭出るとすれば十五個の珠を捻り出す。其の出た順に依つて珠の番號と馬の番號とを引き合せて記して行く。其處で十個の珠に十頭の馬がそれ／＼振り當てられることになる。それをレースが始まらぬうちに掲示する。レースが始まつて一着二着三着迄とる。最初に十個の珠の番號と同じ番號の馬券を買ひ當てた人の中から、更に自分の番號が振り當てられた馬が一着から三着迄へはいつた人だけが配當を受けるのだ。だから詰まり、最初に馬の數だけを捻り出す時自分の買つた札と同じ番號の珠ころが出なかつたらもう駄目だ。よし其の珠が出ても三着のうちへ入らないとには配當は十弗しか來ない。其處で配當の律はどうなるかと云ふと、假りに千枚札が賣れゝば玆に五千弗の金がある。其の内二割といふものを競馬會社で天引きに取る。殘つた四千弗の内約七割を一着に配當し、其の殘りを七三の割合で二着と三着とに配當する。千人の中の三人だけが幸運の籤を引き當てるのである。

私はポケットの成田山新勝寺の御籤に手を觸れて見た。確かにある。怎んな筈ではなかつたがと少し心細くなる。

「スヰープは無理です、今度は確かなのをやりませう」と朱君は言つて今度はプレースとウヰンの札を一枚宛買つた。私もS君も眞似をして買つた。

プレースでもウヰンでも馬の數だけの札賣場がある。其處には番號と馬名が出てゐる、プレースの方は三着迄配當がある代りに金額が少なく、ウヰンの方は一着だけしか配當がない代りに、配當額が大きい。

人氣のある馬の札賣場へに人が殺到してゐるが、人氣のない

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

處では札賣の係があくびをしてゐる。朱君の眞似をして二三遍買つたが皆外れてしまつた。

「どうも朱君は當てにならないね」とS君が到頭愛想を盡かして言つた。

私は私で別に考へた。「是れは朱君を恐むから惡いのだ、俺には成田山が附いてゐる、だから自分勝手に遣れといふ成田山のお告げかも知れない」其處で今度は出鱈目の感じでウインを一枚買つて見た。すると美事に中つて五十弗の配當が來た。現金渡し場から十弗紙幣を五枚掴んで歸つて來た。

「どんなもんです？」と私は威張つた。

「うまくやりましたね」とS君が羨ましさうに言ふ。「一體誰に教はつたんです？」

「教はるもんですか。感じで行つたんですよ。人の云ふ事なんか聞いてちや駄目だね、感じでやるに限る」私は成田山といふ後立てがゐることだけは隱して專ら自己の直感の的確さだけを吹聽した。

「ぢやあ僕も今度は感じで行つて見よう」

其の次ぎのレースには「箱根」といふ馬が出た。日本の名が付いてゐる處から一つは愛國的精神も手傳つて其の馬をウヰンとプレースと兩方で買ふと、又美事に一着を取つた。

「どうです、え？」

「どうも不思議だなあ」又滑つてしまつたS君は驚歎して言つた。

併し、箱根はいゝ馬だと見えてなか〳〵よく賣れたので配當は前より少なかつた。

レースは午後一時から始まつて、十一回迄あつて六時頃に終つた。私は結極九十弗位儲けて歸ることになつた。朱君とS君は持つてつたゞけの金をカラカラにすつてしまつた。

朱君の自動車に乘つて歸つた。自動車と馬車が何處迄も〳〵蟻の行列のやうにノロ〳〵と續いてゐる。

「チエッ、莫迦々々しい、競馬なんかへ來るんぢやなかつた」S君は恐ろしく不機嫌な顔をして言つた。

朱君はニヤ〳〵笑つてゐる。

途中で、意外な光景を私達は目撃した。それは一臺の馬車が背後から來た自動車に突きのめされて、道端の濠の中へ逆樣に落ち込んでしまつたのだ。乘つてゐた人も馬も諸共に篏まり込んでしまつた。馬は首だけ水の上へ出してゐた。客は西洋人で家族伴れらしかつた。卅位の婦人は水の中から這ひ出さうとして棒杭に片手を掛けてゐた。四十位の紳士が其の娘らしい八つばかりの女の子を抱きながら濡れ鼠になつて引き上げられた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女の子は髪を藻くずのやうにしてグナリと父親の腕に抱かれてゐた。顔のあたりが血のりで眞つ紅に染まつてゐる――。

何んといふ酷たらしさだつたらう? 彼等は夫婦親子が揃つて樂しい半日を暮して、そして今我が家へ歸る處だ。恁んな殘酷な運命が道に待ち伏せしてゐようとは誰れが想像しよう――?

朱君は其の美しい顔を顰めて「ツッツ」と激しく舌を鳴らした。堪まらない呪はしい氣持が見る人々の胸を襲つた。血のやうに赤い夕燒けが其の悲劇を强く彩つてゐた――。

競馬は毎土曜日大馬路と江灣とで交替に行はれた。私は缺かさず出掛けた。二度目には損をした。三度目には少しばかり儲けた。四度目には大損をした。どうも成田山が怪しくなつて來た。「もう決して競馬へは來ない」と言つたS君も毎回一度も缺かさず出掛けた。彼は決して儲ける事を知らない紳士だつた。何時だつて持つてつただけ宛吐き出して歸つた。其の歸り途では「もう決して來ない」と言ひ〳〵した。

損はするけれどもお蔭で競馬は大分通になつた。いゝ馬の名前や有名な騎手の名前位は覺えて來た。其處でさういふいゝ馬へいゝ騎手が乘つたのを買へば確かだ。がそんなのは誰でも買ふ。馬券がうんと賣れるから配當が少ない。五弗の金が六弗か七弗になつて返つて來る位のものだ。甚だしい時はウインで五弗十仙などといふたつた十仙の配當しかないやうな莫迦々々しい事もある。而も、どんな確實な馬を買つてゐても三度に一度は屹度滑る。チビ〳〵儲けて大きく損をするから差引き幾らか損になる。さういふ番狂はせがあつて賣れない馬が勝にはいると、配當が大きくなる。プレースでも百弗二百弗となることがある。ウヰンの大きな番狂はせで千五百弗出たことがあつた。其處で今度は穴狙ひを始める。處が穴は何時何處に明くのか見當が付かないから買へども〳〵中らない。結局損が大きくなる。

田中貢太郎も私といふ惡友のお蔭で競馬を始めてしまつた。

Y子は競馬が嫌ひだつた。彼女は私に引つぱられてたつた一遍江灣へ行つたがそれ切り行かうとしない。

「あんな厭な感じの惡い處つてありやしない。誰も彼も自分だけ儲けりやいゝつてやうに人を突き飛ばしてさ。ほんとに淺間しくなるわ」と彼女は言つた。

「其の淺間しい處がいゝのさ。穴を買つたりスチープを買つたりするのは詰り大勢の人に損をさせて自分一人儲け度いといふ明瞭な心理なんだ。けれども吾々のやうに平常善良な心を持つてゐる人間は、競馬へでも行かなけりやさういふ不道義な淺間しい心理に自分自身を引き入れて見る機會がないからね」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「それならそれで偶にやあ儲けて入らつしやいよ。心理ばかり味はつてゐないでさ、實感も味はゝなけりや何の薬にもたりやしない」

私は彼女に隠れてはコソコソと出掛けた。そして勝つた人間の心理と負けた人間の實感とを常に味はつて歸つた。

五月七日から九日迄大馬路の競馬場で「春季大賽馬」が開催された。其の一週間程前から電車は運轉臺の前の處へ競馬のポスターをぶら下げて走つた。其の三日間は、上海中のあらゆる銀行會社が業務を休止してしまつた。大商店といふ大商店は店を閉め、支那人でも西洋人でも日本人でもみんな競馬へ出掛ける。春秋二季の大賽馬は上海に於ける最大の年中行事になつてゐる。

初日に私は出掛けた。田中貢太郎も旅から歸つて來てゐて行つた。S君は勿論行つた。入場料は平常の倍で二弗取る。はいつて見ると人が一杯だ。

大馬路も江灣もどちらも一哩四分の一の圓周である。坪何百弗といふ市街のまん中にこんな大きな地面を明けて置いても誰も何んとも云はない。

廿五萬弗のチヤンピオンレースは九日の九回目に行はれるが、其のレースのスヰープの札は幾月も前から賣つてゐる。爲替を送れば何處にゐても買へる。馬券は世界の果から果までちらばつて行く。私も十日程前にたつた一枚生涯の運試しの積りで買つて置いたが、今日來て見るともう三日程前に十萬枚の札が全部賣り切れてしまつて、Bレース札を賣つてゐた。是れは總數二萬枚で〆切る、一等が八萬弗だ。

其の日も私は滅茶〳〵の損だ。いつもより資本を餘計持つて行つたので損も前例なく大きい。貢太郎も負けた。彼は初回から最後迄六の札を買ひ續けた。

「靈感で行くんだよ、靈感で。今朝、確かに六の豫感があつたんだ」と貢太郎は豫言者のやうな口吻で言つた。けれども其の靈感も當てにならなかつた。

二日目も行つて負けて來た。愈あと一日きりだ、運命を決する日だ、天下分け目の關ケ原だ——。處がY子が憤り出した。

「さう負けて何が面白いか知らないけれど、大抵いゝ加減になさい。いまに日本へ歸る旅費も無くなつてしまひます。それにあたしだつて、夏が來れば夏が來るでちつたあそんな支度だつてして貰はなくつちやあ——」てうどコケた博奕打ちを亭主に持つたかみさんのやうに。私も實は遅蒔き乍ら、行けば屹度損をするといふ自信が付き始めたので、Y子の忠言をいれて其の日は競馬で損をしたと思つてそれを旅費にして二人で杭州へ旅行に出掛けてしまつた。杭州では西湖畔の新々旅館へ二た晩泊つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

名所舊蹟を見物して歩いてゐる時でも、私は九月のチャンピオンレースの廿五萬弗が自分に中つてゐさうな氣持が絶えずしてゐた。上海へ歸つて新聞を見るのを樂みにして、若しか中つてゐたら……と考へた。

三日目の晩上海へ歸つた。が、廿五萬弗が到頭私に授からなかつたといふ事は、現在斯うして私が雜誌の原稿を書いてゐるので一番よく證明されてゐる。

（二）歸國の日の事

今日は私はいろんなものに別れなければならない。第一此の部屋に別れなければならない。何んといふ懷かしい部屋であらう。此の紅い壁の部屋こそ、私の全生涯のうちで一番樂しかつた生活を其の中で營ませて吳れたのだ。此の椅子は、ソファーは、テーブルは、其處は私達二人が毎晩夜を更かしては語り合つた紀念すべき場所だ。幾つもの鏡は、私達のいろんな姿を寫して吳れた鏡だ。懷かしい部屋よ——。

酒飮みで淫亂の此の家の主人でも、私達より後から此の家へ來た主人の細君である自墮落な五十女でも、玄關脇の部屋を借りてゐる憐れなロシアの伯爵夫人でも、其の可愛い息子でも、若い夫婦者でそしてよく私達の用をしてくれたボーイとアマでも——それらの人々に皆私は別れなければならないのだ。

私は此の窓から、よく露地の向う側の家を眺めたものだ。二階のヴエランダーの奥の部屋で、午後の茶の時間には家内中集まつて睦まじく茶を吞んでゐたイギリス人の家族をもう見ることは出來ない。其の隣りの家の同じやうな二階の部屋に住んでゐる一寸綺麗なフランス人の女が、外出する前に鏡の前へ立つて帽子の恰好を直したり頸飾を取り替へたりしておめかしをするあの姿ともお別れだ。

すべての物とお別れだ——。

荷物は晝のうちに船へ送つてしまつた。其あとで親しくした二三の人の處を暇乞ひに廻つて今此處へ戻つて來たところだ。

「上海の生活も愈是れでお終ひになるんだね。もう二度と繰り返せない生活だ。繰り返した處で同じ物ぢやあない。物の終りといふものは厭なものだね」と私はY子に言つた。

「それあ誰だつて厭だわ。けれども、一つの物がお終ひになると同時に次ぎの新らしい物が始まつてるんだから、結局お終ひなんだか始まりなんだか判らないわ」とY子はまだ少し時間があると思つたのか被つてゐた眞紅な帽子を脫いでベッドの上に置き乍ら答へた。

「さうも云へるね。けれども是れは矢つ張り是れでお終ひさ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日本へ歸れば俺達の生活でも心持でも全く違つた物になつちまうんだから」

「何故？上海にゐる時と同じ心持で生活が出來ないといふ筈はないわ、少くとも自分達だけの問題ではね」

「僕だつて現在はさう思つてるよ、併し恐らくそれは六か敷いだらう、現在の僕でもお前でも想像してゐないやうな運命が遲かれ早かれ必ず遣つて來るに違ひない、それがどんな物でどんな形になつて現はれて來るかは其の場になつて見ないことにやあ分らないが」

「いやだわねえ、そんな不安心な位ならいつそ日本へなんか歸らない方が增しだわ。そしてフランスタウンへでも行つて住めば、もつとずつと感じがよくつてそして經濟的な生活が出來るんぢやないの」

「それが出來る位なら何んでもない、歸らなきやあならなくなつてゐるのがすでに一つの變化だ。いゝぢやあないか、構はず何んでも來る奴からぶつかつて行かうよ、どうせお互ひに體一つを元手にして生活してゐる人間なんだ、いつ迄も同じ事をしてゐた日にやあ體が腐る、良くても惡くつても變つた經驗を味はつて行かなきやあ駄目だ」

「あなたがさう云ふ氣持は解つてゐるが、わたしはそんな氣持では歸れないね、只此の舞臺をぐるツと廻して東京へ移すだけのつもりなの」

「舞臺が廻るのに、役者がいつもおんなじ事を言つてちやあ芝居にならないぢやあないか」

そんな事を言つてる處へ、今度偶然私達のあとを借りることになつてそれで知り合ひになつた旅で來てゐる日本人と、其の友達の人と、二人の紳士が私達を船まで見送りに行くと云つてやつて來て與れた。同時に、Y子が親しく交際したJ氏といふ人が花籠を持つて別れを告げに來た。

間もなく馬車が來た。J氏を除いてみんなが一臺の馬車へ乘つた。

船へ行くと S君と田中貢太郎が來てゐた。貢太郎は近々廣東へ行くことになつてゐた。狹い二人部屋のキャビンへ壽司詰めになつて南瓜の種を食べ乍ら一時過ぎまでみんなで話した。

其の翌朝私が眼を醒ました時には、船は揚子江を出て海を走つてゐた。キャビンの窓から私は黃色い海を眺めた。私は一瞬間に二ケ月の上海生活を回顧した。其の時の私の氣持を一言で云つて見ると、それは蕃界の探險を終へて還る探險家の心持——といつたやうな氣持だつた。——終——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新聞記者懺悔録

——此の一篇を池邊三山氏の靈にさゝぐ——

松崎天民

記者生活二十三年、いろ〳〵と書きたいことが、それからそれへと際限なく、私の追憶に浮かんで出る。こゝには「東京の巻」の中期として、東京朝日新聞時代を點檢して、三十代の若かつた私の面影を偲びませう。

一、感激の涙

「今年は君と田井君とに、大に働いて貰はねばならぬと、先日も阿部君とね、逗子で話したことなんだ。君の葬式は、此の社で出す積で居た位なんだが、……ま、大に遣つて見るも宜いだらう。他で面白くなかつたら、また何時でも歸つて來たまへ……。君は他の人達と違つて、國民新聞社とは一種の因縁がある人だから……」

いよ〳〵田井羊公君と私とが、東京朝日に入社の事が極つてから、私は改めて德富先生へ、お別れの挨拶をした。薄暗い例の應接室で、先生から斯うした言葉を浴せかけられた時、私は何んなに感激したことであらう。心の弱い私は「先生がこんなにまで思つて居て下されたのなら、何も國民新聞を辭退しなくても宜かつたに……」と、さうも氣持が動いた程であつた。

然し何も彼もが、時と場合との勢ひに依つて、ズン〳〵運んで行つたやうなものであつた。澁川玄耳氏は、私達二人を入社させるために、わざ〳〵大阪の本社まで急行して、相談されたらしかつた。そして二人の中で、一人は大阪朝日の方へ勸めることになつたが、二三ケ月の間は見習と云ふ格で、二人とも東京朝日に勤めて居た。月給は二人とも六十圓であつたが、それも豫算が一杯のところを、澁川氏が算段してくれたらしかつた。折角、多大の希望を抱いて、國民新聞に入社しながら、僅に二年ばかりで去つてしまうやうな、輕はづみの事をしながら、當時の私は、別に悔るやうな氣持にはなれなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「何だか國民新聞へ、相濟まんやうな心持がするやないか。後足で砂を掛けたやうもなんやさいかなア……」

田井君は斯う云つて、淋しさうに笑つた。

「濟むも濟まないも、仕方の無いことなんだよ。何も彼も運命にして置くんだね、そのうちには自分等の心持も判るから……」

私は斯う云つて、一緒に東京朝日へ出頭した。

二、東京朝日

日吉町から瀧山町へ、國民新聞から東京朝日新聞へ、それは明治四十二年一月十二三日のことであつた。

東京朝日の編輯局は、廣くて賑かで、人數も國民の三倍からあつた。池邊吉太郎、松山忠次郎、土屋元作、澁川玄耳、杉村楚人冠、佐藤眞一、弓削田精一、桐生悠々、安藤正純、米田實の諸家の他に、社會部には山本笑月、黑田撫泉、水谷幻花、根本吐芳、西村醉夢、坂元雪鳥、澁井秀一、美土路昌一、河野玄隆、丸田一郎、戸谷、石川などの諸氏が居た。電話部の西岡雄說、大阪朝日の小池眞美、政治經濟部面の宮部、荒木、黑澤、村山、太田その他の面々など、何となく充實して居るやうな氣持がして居た。

私達は澁川氏に連れられて、池邊氏を初め、佐藤、松山、土屋と云ふ順に、次々に紹介された。その年の中央公論新年號に「時子」を書いた杉村楚人冠氏は、病後と見え大島紬の着流しでヒヨロリとした姿を見せて居た。土屋氏とは大阪朝日に居た頃から、顏馴染になつて居たが、その他の人々とは、大抵、初對面が多かつた。夏目漱石氏は、月末になると顏を出して居たが、既に入社して居た長谷川二葉亭氏は、一度も姿を現したことは無かつた。朝日には此の他、饗庭篁村、半井桃水、武田仰天子など云ふ、出社せぬ社員格の人が多かつた。客員では中村不折瀧節庵など云ふ人々が、重視されて居た。

國民新聞へ迎へられた時にも、故鄕に歸つたやうな懷しい氣持がしたが、東京朝日に入社した刹那にも、私は知らぬ他鄕へ旅したやうな、そんな淡い氣持は少しもしなかつた。

「俺の記者生活の本舞臺は、いよ〳〵これからなんだ」

私はそんな心持がして、前途の明るさに祝福されて居ることを感じた。過去十年を最初の修行時代とすれば、東京朝日に入つてからの私は、第二期の修行時代に入つたやうな、心の頂躍を覺えたのであつた。

三、東京の女

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「ほんとに其の頃は、俺も若かつたよ。晝も夜も外交、編輯と何でも遣つたし、酒も飲だし、女も漁り歩いたし、健康と元氣とに、少しも屈托と云ふことを知らなかつたからね。爲事に脂が乘つたと云ふのは、彼の時分の俺達の事を云ふのだらうと思ふ……」

「東京朝日での最初の爲事は？」

「さうだね、東京の女を三十回書いた。あれが先づお目見え爲事のやうなものだつたよ。いろ〳〵の文體で、各方面の女流を訪問して書いたに過ぎなかつたが、それでも彼の時分には一寸、評判になつたものさ」

「さう〳〵、三面の方には荒木氷魂郎が、實業家めぐりを書いて居たね。楚人冠、無絃人、岡野告天子、桐生悠々、玄耳と云ふ風に、賑かなものだつたね」

「それに楚人冠の隨筆物が、何と云つても注目されたものだよ。英國へ行つた紀行や小品などは、たしかに新聞記者の文章に一時代を劃した觀があつたからね」

「澁川と云ふ人は、兎にも角にも、強い特色を有つた記者らしかつたね」

「鐵野椋十の文章ばかりではないよ。島崎藤村の春を、一回十圓で買込だり、坪内博士や東儀、中村など云ふ人に、新しい劇評を書かしたり……。朝日と云ふ舞臺も良かつたけれど、澁川さんは何時も、第一義的の爲事を目論見して居た人だよ」

「君の新聞記者修行が出たのは、朝日に入つてからだつたかね。例の大きな顏の表紙に、我々を驚かしたものだつたが……」

「あれは明治四十三年の五月さ。古い原稿を百圓で賣つて、有樂社が出版してくれたのだが、少しも賣れなかつたらしいよ」

「けれども僕達は、彼の時分から松崎天民の存在を、羨ましく思つて居たものだよ。いろ〳〵に云つたところで、君の新聞記者生活は、順境で幸福であつたと思ふね」

「さうかねえ、さう見えるかねえ」

四、澁川玄耳

私の記者生活二十餘年の間、私と云ふものを最も快く働かしてくれたのは、結城禮一郎氏と澁川玄耳氏とであつた。此の二家の鞭韃と激勵とが無くては、何んなに私に惠まれた才分があつても、それを極度に發揮することは、思ひも及ばぬ事なのであつた。

東京朝日に於ける私の爲事は、社會部面の凡てに亘つて、編輯の内勤でも、外交の外勤でも、晝夜の別なく課せられたものであつた。坂元雪鳥と西村醉夢の兩家は、やがて自ら退社して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鎌田敬四郎、鈴木文治、名倉聞一の三氏や、その他にも二三の若い人々が、出たり入つたりした。政治部の方にも、中野正剛氏を初め、緒方大西など云ふ青年が入社して、社内には何時も活氣が横溢してゐるやうな觀があつた。何處までもコセ〳〵せずに、何處かに大世帶のやうな、悠揚として迫らぬ長閑さが漲つて居る心地がした。

澁川社會部長の命令は、何時も嚴格で性急であつた。精細な取調べを要する事の他は、何でも速時に速日に辨ぜねば、その機嫌が惡かつた。私は主として社會觀察的の續き物や、世相批判的の續き物を書かせられたが、大抵一日か二日の猶豫しか、與へられぬのが例であつた。「小芝居めぐり」とか、「寄席印象記」とか、「銀座界隈」とか、「カフエーとバー」とか、「新女優の運命」とか、「蠻カラ列傳」とか、「現代の女學生」とか、「浪花節の盛衰」とか、「秋晴十日間」とか、「上野淺草記」とか。さうした物を書くことに、私は强い興味を有つて居たと共に、私に最も適した爲事であるかのやうにも、自惚れて居たのであつた。

餘り健康で無かつた澁川氏は、何時も澁い不快な表情をして居た。それでも或る目論見が出來ると、「や、おもしろいぞ」と笑顏になつて、

「おい、これから直ぐ、日光へ行つてくる。そして宮内大臣に逢つて……判つたか。終り……」

など、愉快さうに笑ふのであつた。當時の社會部長では、何と云つても傑出した一人であつた。

五、名編輯長

二六新聞に居た渡邊利喜松君が入社して、社會部には新鋭の氣を加へたりした。田井羊公君は、二三ケ月して大阪朝日に轉じたが、彼は大阪へ行つてからも、有力な働き手の一人であつた。

「君は東京向で、田井君は大阪向だよ。それに君は大阪に居たから、東京で働く方が宜うおますよつて……だよ……」

澁川氏はこんな事を云つて笑つたりした。池邊三山氏は毎日出社して、論説を書いたり、人事に關つたり、編輯局を統裁して居たが、編輯の實務は、佐藤眞一氏が受持つて居た。この佐藤氏は天性の編輯記者で、三十年近い歳月を、編輯の實務に從事しても、少しも倦むことを知らぬ名編輯長であつた。

「今晩あたり一杯やるに宜いな」

など、云つて、社内の若い飲み仲間と一緒になつても、少しも氣の置けぬ好人物であつた。その三十年の祝賀會を、木挽町の萬安で催した時には、池邊三山氏も、「自分の女房役としての佐

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

藤氏の功勞」に對して、感謝の表書を呈した程であつた。佐藤氏は盛岡の人で、原敬氏とは親類の間柄であつたが、別に強い政黨臭味があるのでもなく、割合に公平無私で、編輯振にも、記者の提出した原稿の採否にも、穩健な常識的な判斷を下して居た。けれども愛憎の念は強かつたやうで、人一倍の好き嫌ひを、じツと堪えて居た怜悧さには、私達も心から感服させられて居た。

桐生悠々氏は、べらんめえ生などゝ署名して、面白い政治上の批判などを書いて居たが、何うも池邊氏とは合はぬやうであつた。池邊氏は「桐生君は稀有の名記者だ」と云つて、常に「書き給へ、書き給へ」と勵めて居たが、桐生氏は間もなく退社して信濃毎日新聞に招聘され、その主筆職に赴いたりした。

妙な觀察ではあるけれど、その頃から東京の朝日新聞には、二大勢力の對峙と云つたやうな觀が、流れ漂うて居るやうであつた。

六、勢力爭ひ

「さうですか、それは何う云ふ譯ですか」

「社長が村山龍平さんと、上野理一さんと二人ある以上、そこに二つの分派が出來るのは、自然の勢ひと云ふものなんだ」

「それが二大勢力の對峙ですか」

「いや、違ふ。それはたゞ、氣分の問題で、村山派上野派など と、そんなものは不問に附する方が宜い。上野さんは女房役で、村山さんの下目に續いて來た人だから、勢力の對峙など有りやう筈は無いのだ……」

「すると、他に何か有るのですね」

「東京の池邊、大阪の西村、この二人が、一種の色彩を異にした對局を見せて居たのさ。西村派に呼應する者に土屋、弓削田、吉村、岡野、桐生の面々あり、池邊派の流を汲む者に鳥居、松山、杉村と云つた形が、見られて居たものよ」

「その兩派を巧に操縱して、業務の上に鎬を削らせるなんて……村山翁も偉いもんですね。それには上野翁の存在が、何んなに一種の融和になつたことでせう、ね」

「萬事が斯う云ふ風だから、社内にも二つの分派が出來さうなものだが、そこは利巧者が多いからね。局外中立もあれば、何ちらにでも向く人種があるし、中には此の二大勢力の對立を利用して、第三勢力の扶植を企圖して、現にそれに成功してる人もあると云ふ話だからね。何にしても、大世帯の空氣は違つたものだよ」

「土屋、弓削田など云ふ人々は、殊に兩派を擁したおほん人に

見られて居たんですね」

「いや、いろ／＼と面白い事が澤山あつたよ。池邊、瀧非、松崎の三人が、小野瀬不二人と一緒に飯を食つたら、三人は小野瀬を社へ引込む運動をして居るなどと、眞面目に言觸らした大馬鹿者さへあつたからね」

「今の東京朝日の編輯局にも、さうした勢力爭いとか分派とか云ふものが、常に暗中飛躍を遣つて居るのでせうか。

「昔の事だよ。今日の事は知らん！」

七、池邊三山

洋畫家では名取春僊君が居て、一種の風味ある挿畫を畫いて居た。そこへ岡本一平君が入社して、最初の間は私と一緒に「秋晴十日間」を書きに歩いたりした。例のべらぼうに手の大きい漫畫を初めたのは、岡本君が入社後、半年ほど經つてからであつた。

文藝欄が出來て、森田草平氏がチョコ／＼社の應接室へ來るやうになり、例の「煤煙」で、大に文名を擧げたりした。その後篇とも云ふべき「自叙傳」では、大阪の西村天囚居士や、東京の弓削田秋江翁などが、描寫の材料云々に就いて、反對の氣勢を高めたやうであつた。「あんな小說を掲げるのは、反道德的で面白くない。一體、何人があの小說の登載を容れたのか」と云ふやうな問題が、幹部會議にのぼつたりした風であつた。

「松崎さん、あの自叙傳ね、何うですか」

社の前の朝日倶樂部で、玉を撞いて居た時に、池邊三山氏は斯う私に云はれた。

「文章も新いもんですし、何しろ一生懸命と云ふ作品ですね。私は傑作だと思つて居ますが、世間でも評判が好いやうですよ」

斯う私が答へると、池邊氏は如何にも滿足したやうに、

「さうでせう、私もさう思つて居る。」

など〻云はれた。文藝と道德との問題ではあるが、それを一種の反池邊熱に應用して、三山氏に肉薄したかのやうな傾があつたと、一部では取沙汰する者さへあつた。

牛込若松町に、家屋を新築されてから間もなく、池邊氏は社を引退することになつた。池邊氏の人格に對して、一點の暗影を投げるやうな、心無い取沙汰が、反池邊黨の間には傳へられて居たが、それは恐しい事であつた。

「如何に御引留申しても、池邊君は御承知が無いので、誠に遺憾ではありますが」

などと、其の事を編輯局で披露した時、村山社長は惻然として

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

申渡されたりした。

私には、何が何やら、少しも判らなかつた。」

八、編輯動揺

時の首相桂侯爵の心事に對して、池邊氏の論法には、理解があつたり、同情が見えたりした。「池邊君も夕ガが緩んだ」などと、社内でも取沙汰する者があつたらしかつた。「自叙傳」事件以來、家居の新築や、此の論法の推移などで、痛くも無い腹を探られたやうな氣持がして、渡邊氏も面白く無いやうであつた。

池邊氏の引退に依つて、社内には大きな動揺が、強く渦を卷いたやうであつた。佐藤氏の編輯局長に、澁川氏の社會部長兼編輯次長、兼政治經濟部次長、松山氏の政治經濟部長に兼大阪通信部次長、弓削田氏の大阪通信部長に、兼政治部次長、杉村氏の調査部長に兼社會部長と云ふ新しい役割は、編輯局の人心を極度に昂奮させたものであた。その前から、「夏目漱石を追出せ」など云ふ運動が政治部の人々の間に企てられて居たが、それは池邊氏の言葉一つで、何うにも爲らないものに、結末が濟いて居たのであつた。

安藤正純、中野正剛など云ふ人々は、若い連中を引いて、何か知ら劃策して居る風に見えた。杉村氏に對する反感とか、澁川氏に對する反感とか言つた風の氣持も、社内には流れ漲つて居た。その前に、世界見物の旅へ出て、一時、氣を拔いて居た澁川氏は、大に捲土重來の意氣込みに見えたが、何となく社内の空氣は、低迷して居るやうな感がした。それが池邊氏の引退に依つて、一層、濃厚となり、一帶に何となく不安な狀態の下に、推移して居るやうな氣持がして居た。

常陸山と共に筑波山へ登つたり、日糖事件で奔走したり、桂首相を大阪驛に迎へたり、私の爲事は忙しかつた。そのうちに、一世の耳目を聳動した大逆事件が起つて、私達は忙しくなつて行く一方であつた。社内の空氣が何んな風に動いて居るのか、そんな事にのみ心を寄せて、暢氣らしく構へて居る譯にはいかなかつた。

九、大逆事件

私は朝早くから夜遲くまで、活動をつゞけて居た。

「あの大逆事件は、何と云つても明治年代末期の大々事件でありましたね。事の經緯は何んな風であつたか、私達には未だ判らぬ節々もありますが、何しろ一世を震駭した大事件だつたと云へますね」

「廣い公判廷へ、三十人の被告がズラリと列んだ光景は、忘れ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ることが出來ないね。蒼い沈んだ顔色をして居た幸徳秋水の姿も、割合に平氣らしく見えた管野すが子の表情にも、僕は心を惹かれたものだよ」

「あなたは、何んな事を受持つて居ましたか」

「別に、受持の分擔も無かつたが、裁判言渡の日には、朝から裁判所へ詰め掛けて、號外を出す準備をして居たのだ。報知から社會部長の中山丙子君が出張して、四五人の記者を指揮して居るのが、如何にも大事件らしい氣分を起させたものだ。朝日からは僕と、今、淺草の帝國館の主任をして居る森岡君と、他にも一人か二人が、原稿の聯絡や、雜觀の方を受持て居たんだ」

「いよ〳〵死刑宣告の刹那は、何んな風でしたか？」

「裁判長が嚴かな口調で、死刑に處すと言ひ放つて、並居る被告は一齊に、靜まり返つて居たが、裁判長以下がドヤ〳〵と退廷すると、直ぐ立上つたのは、たゞ一人の女である管野すが子であつた。そして、皆さんお先に失禮いたします……と云つて、顏色自若たる風で退廷したが、僕は其の刹那の氣持を、今でも明瞭に覺えて居るよ」

「幸徳は何んな風でしたか？」

「背後の辯護士席や、傍聽人席の方へ、ジロリと一瞥を投げたが、別に驚いたと云ふ風は見えなかつた。何んなに反逆の血が燃えて居ても、法廷ではしかたが無いさ。僕は「死刑宣告の刹那」と題して、その時の印象を一寸書いたが、何にしても働き榮えのある事件の一つであつたよ……」

「そりや面白かつたでせうね」

一〇、火葬場へ

いよ〳〵死刑が執行されて、幸徳、管野、内山などの死體が監獄の不淨門から運び出されるのを、私は其の附近で待受けて居た。他社の人々は、死刑執行の光景を典獄から聽き取つて、そのまゝ歸社したけれど、私と報知の毛呂君とだけは、差入物屋で晩飯を食べた後、何時までも監獄の附近を徘徊して居た。

「何だか、まだ事件が殘つて居るぞ」

私はそんな氣持がしたので、社の方へも電話で、豫じめ通じたりした。殘んの寒冷たい星月夜で、不淨門の附近は、陰慘として、一種の鬼氣が迫るやうな心持さへした。

堺利彦氏や、二三の人々が來て、三四個の丸い棺を受取り、その後に續いて、落合火葬場に向つたのは、九時を過ぎた頃であつた。内山愚童の弟とか云ふ人も、堺氏などゝ共に、火葬場の方へ歩いて行つた。背の高い警部が一行を監視して、「新聞記

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

者は續いて來てはいかん」など〻、嚴重に警戒して居た。私達は人力車で、落合火葬場へ先廻りして、休息所で一行を待受けて居た。そこにも正服の巡査や、角袖らしい人が居て、捲煙を吹かして居た。何か材料になる出來事が……と云ふ豫感が、私の心持を緊張させた。

火葬場の竈口に運ばれた棺は皆で三個か五個あつた。そこには巡査が一人と、隱坊が二人と居るのみで、大きな煙筒からは人間を灰にした黑い凄い烟が、一種の死臭を漲らして居た。彼等の竈口にある丸い棺桶の中には、幸德や内山などが、冷たく眠つて居るのであつた。

「これが内山ですか……。若し間違つて居ると困るから、君、一寸、この蓋を開けてくれませんか。兄の最後の姿に對面します……」

内山愚童の弟は、一つの棺の兩端に兩手をかけて、少し前屈みになりながら、思ひ餘つたと云ふ風で、斯う云ふのであつた。

「さうだ、さうだ、それが宜い……」

と堺氏も其の棺の傍に立寄つた。

一一、棺桶の蓋

巡査は別にそれを制しやうともせず、たゞ默つて立つて居た。隱坊は一寸、躊躇する風に見えたが、やがて大きな金槌で棺の蓋の一方をたゝいて、釘付になつた蓋をメリ〳〵開けて見せるのであつた。

火葬場の陰にこもつた建物の中で、その蓋を壞す音は、物凄く四邊に響き渡つた。

「うむ、兄です、兄です。内山愚童に相違ありません」

弟なる人は斯う云つて、如何にも感慨に堪えぬ面持で、じツと蒼い五分刈頭の死顏を凝視て居た。私は何う云ふ劇的の光景であらう、何と云ふ生々した雜報的の光景であらうと、その事のみを考へて居た。此の氣分なり感じなりを、讀者の胸に傳へるには、何んな風に書いたら宜いであらうと、稀有の場面に行き合せたことに、私は昂奮しきつて居た。

「ついでに、君、この方の蓋を取つて見てくれ給へ。幸德君にもお別れをしやう」

突然、斯う云つたのは、堺利彦氏であつた。隱坊は唯々として、一方の蓋も直ぐ取つたが、そこには此の事件の大立物である幸德が、五分刈頭の冷たい死骸になつて居た。

「何うだ毛呂君……、あのまゝ引揚げなくて宜かつたね。こんな大きな事件が、君と僕だけを祝福してくれたんだ。もうぶ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ツポツ引取つても宜さゝうぢやないか」

私はそれから社へ歸つて、三段近い原稿を書いて、ついでに市内版の編輯をして、社の門を出たのは、午前二時を過ぎた頃であつた。政治部の方には、弓削田氏が殘つて居て、

「そりや面白かつたね。今夜は慰勞のために、夜を徹して飲まうぢやないか……」

と云ふので、私は河野玄隆翁と共に、パウリスタ横の八洲亭へ入つて、東が白む頃まで、弓削田氏と盃を重ねたりした。

朝日では二段抜きの大標題を使はぬ頃であつたが、それでも私の記事は、讀者の好奇心を唆るに十分な精彩を放つて居た。

一二、石川啄木

――近頃の雜報の中で、今朝の愚童の火葬場の記事ほど、私の神經を強く刺戟したものはありません。あれは大兄がお書きになつたものと思ひますが、私は彼の事實に就いていろ／＼考へさせられます……」

「君、この端書はね、病氣で寢て居た石川啄木がくれたんだ。僕は嬉しかつたよ」

「啄木はその前から朝日に入つて、校正係の方を勤めて居たのでせう。そして、歌の選をしたり、文藝評論を書いたり……」

「ところが、入社して間もなく、腹が次第に腫れ初めて、肺の方も悪くなつたらしい。三十にならぬ若さで死でしまうには餘りに惜しい天才であつたのに……」

「獨歩と同じやうに、死でから其の業蹟や思想上の先覺者たる事を認められた譯ですね」

「僕は妙な口語體の歌を作つては、能く啄木に見て貰つて居たよ。何時だつたか、大逆事件の管野すが子の話をして、大阪に居た頃は紫の袴を穿いて、黄色の大阪朝報とか云ふ新聞の婦人記者を勤めて居たことや、宇田川文海老人と親しくして居たことなどを云ふと、啄木は面白さうに聽いて居たよ」

「その管野が、幸徳と同棲したり、大逆事件に連座したりして死刑に處せられるなんて、ほんとに人間の一生ほど、判らぬものはありませんね……」

「啄木は病氣で寢て居ても、僕達以上に彼の事件には興味を有つて居たらしい。それから僕と云ふ人間だが、夜遅く、酒に醉ばらつて、用も無いのに編輯局へ入つて行くと、啄木は何時でもニコ／＼して、僕の相手になつて居てくれたよ。」

「月給は何の位でしたらう！」

「たしか二十五圓か八圓だつたと思ふが、それでも啄木は不平など云はなかつた。よ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「ほんとに偉い人でしたね。北海道を放浪して居る頃から、エラかつたのですね」

「偉い奴は、早世すると見えるよ」

一三、カフエー

臺灣喫茶店の他に、新橋の角にはビーヤホールが出來たし、日吉町にはカフエープランタン、尾張町の四ツ角には、カフエーライオンと云ふ風に、東京の世の中は、次第に時の流れと共に遷つて行つた。八洲亭で洋食を食べたり、時事新報横の喜仙で、とり鍋をつゝいたり、銀座の加六で正宗を飲で居たりした私達のために、歡樂の明るい場面は、次から次へと展開した。

ライオンには美しいウエートレスが居て、艶めかしい色香の秋波に、若い浮かれ男達の心をときめかしたものであつた。プランタンは一種の社交倶樂部のやうになつて居て、文士や畫家や俳優や、記者や學生や藝妓などが、賑かに出入して居た。私はそこで、正岡藝陽とも食べたし、押川春浪や阿武天風とも飲だし、長田秋濤とも興じたものであつた。正宗白鳥、岡田三郎助畫伯、八千代夫人、生田葵、小山内薫、市川猿之助、南薫造、平岡權八郎、井上正夫、横山勝太郎、恒川陽一郎、赤坂の萬龍新橋の樹勇など云ふ人々も、能くプランタンに姿を見せて居た。

中央公論の瀧田哲太郎氏と、ヒヨツコリ逢つて、正宗白鳥氏の紹介に依り、初對面の言葉を交したのも、プランタンでの事であつた。その頃から丸々と肥滿して、紅潮した面持をして居た瀧田氏は、ニコ〳〵笑ひながら、例の急き込むやうな口調で、

「や、松崎さん……私、瀧田です。中央公論に何か書きませんか、あなた一流のものを……面白い物が宜いのですが……」

と云ふ風に、勵められるのであつた。楚人冠の「時子」に感心して、あゝした物を書きたいと思つて居た私は、何んなに其の瀧田氏の言葉を、嬉しく有難く思つたことであらう。

「え、是非、書かして頂きます。いろんな人に宛た手紙風にして、旅で逢つた女の事を書きたいと思つて居ますが……」

と、私は直ぐ答へたほどであつた。

一四、淪落の女

私の淪落の女が、初めて中央公論に掲載されたのは、明治四十五年二月のことであつた「黑縮緬の女」としやうか、「黑縮緬日記」にしやうかと、いろ〳〵思ひ惱んで居る時に、同僚の渡邊利喜松君は、私に「淪落の女」と云ふヒントを與へてくれた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のであつた。

「利根川べりに行つて來たが、君、あの邊には酌婦が澤山居るよ。俺は其の酌婦を相手にして、酒を飲で居るうちに、フと同是天涯淪落の人と云ふ一句を思ひ起したんだよ。淪落の人々と云ふ題にして、君なら面白い物が書けるよ、乾度……」

喜仙で飲みながら、渡邊君は斯う云ふのであつた。

「面白いな、淪落の人、淪落の人々、淪落と云ふ言葉が宜いよ。さうだなア、四五人の知名な人に宛て、手紙風にした文體でそんな類の女を見た僕の心持を書くのだね。さうだ、淪落の女としやう、好い標題ぢやないか、淪落の女……」

私は斯う云つて、いろ〳〵と書いで行く上の段取を考へるのであつた。その年の春には、東宮殿下甲州行啓の盛觀を傳へるため、甲府市に出張したけれど、私は社の仕事の副產物の積で、「淪落の女」を執筆した。甲州へ出張して、「甲州見聞記」を書いたり、東宮殿下の御動靜を報じたりする時にも、私は「淪落の女」のことばかり考へて居た。そして其の年の暮に、「淪落の女」が一冊の本となつた頃、私はゴノコッケン菌のために、木挽町の病院に入院して居たのであつた。

「淪落の女が祟つたのだよ」

と、社の友僚は笑つて居たが、私はその頃、もう三人目の男の子の父となつて居た。それでも、桃中軒雲右衛門が、二頭立の馬車で見舞に來てくれたり、下山京子女史や、馴染の藝妓が見舞に來てくれたりするのが、私には嬉しくて嬉しくて堪らなかつた。

未見の婦人からも、見舞の贈り物を受けたりした。

一五、三山の死

「その時分のことだよ、社内に一種の犬のやうな男が居てね。僕や渡邊が酒を飲むとか、淫賣を買ふとか云ふことを、大阪の村山社長に宛て、密告した奴があつたのは！」

「へえ、なか〳〵戰國時代なんでしたね」

「一種の勢力爭にと云つて宜いか、天下取りの暗鬪と云つて宜いか、そんな厭な鼎傾向が、編輯局の一隅にあつたと見えるのだよ。そこへ持て來て、引退して居る三山池邊吉太郎氏は卒然として死去されるし、目に見えぬ騷ぎは、次第に大きくなつた譯さ」

「死なれて見ると、矢張り傑出した紳士的の名記者でしたね。德富蘇峰の次に數える者は、何と云つても三山居士でしたよ」

「僕は夜遲く池邊邸へ馳せ付けて、松山忠次郎、澁川玄耳、安達謙藏の諸氏と一緒に、故人の冷たい骸に禮拜したよ。さす

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

がに一番に馳せ付けたのは徳富先生であつたが、その徳富先生が「池邊君は天性の新聞記者だつた」と云つて、話してくれた感想談には、皆が敬服して居たね。同郷で同業の徳富先生にして、初めて池邊三山を評し得るのだもの……」

「大木が倒れるやうに、呆氣なく死でしまはれることが判つて居たら、何も引退を餘儀なくするやうに、周圍の者が持掛けなくても宜かりさうなものでしたのに……ね」

「池邊さんも心の中で、そればかりは無念に思はれて居たらうと思ふ。時の人氣の流れや空氣の漂いと云ふものが、共同生活に在つては、實に恐しい力となつて、人間を生かしたり殺したりする實例を、僕はまざまざと見せ付けられたやうな氣持がしたよ」

「三山氏の失意、死亡と云ふことにも、然し時代と月日との動きは見られますね」

「さうさ。いろ／＼の勢力爭いなど云ふ事を超越して、時代の心と云ふものが、その人を活殺するからね。強い色眼鏡を掛けたやうな觀察ばかりは出來ないよ……」

「それは、ほんとに、さうですね」

一六、天皇崩御

何と云つても、私の記者生活に於ける大きな事件は、明治天皇の崩御と云ふ事であつた。

兩國の川開きか何かで、松屋呉服店の今様會に招かれ、福井樓の大廣間で涼んで居た時、「陛下御不例」と云ふ號外を見たのであつた。私達の仕事は、それから急速度に忙しくなつて、いよ／＼崩御の號外を出すまで、幾日も、幾夜も不休不眠と云ふ狀態が續いた。宮内省に詰める者、御容態書を持てX博士の許へ走る者、寫眞を集める者、御逸話を探る者など、社會部は全員が緊張して、晝となく夜となく活動を續けて居た。

貸自動車もボツ／＼出來て居たので、私達は二臺も三臺も借切つて、各方面に出動して居た。御危篤の御容態となつてからは、二重橋前の祈禱者が増加すると共に、坂下御門の出入は、次第に頻繁になつて行つた。編輯局と宮内省の記者詰所との間には、社員が五六人も出して居て、人間で聯絡を取つた程であつた。大阪朝日とは電話を繋ぎツ放しにして、一刻を爭つて凡ての通信を送つた。私人として、國民としての大きな悲みの前に、その悲しみを職業とする私達は、一種の榮譽をこそ思へ、決して疲勞などは感ぜぬのであつた。

「……崩御遊ばさる……誠に恐懼の至に堪えず……」

宮内省係からの電話を受けて、電話口で、鸚鵡返しに斯う云

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つて居た山本笑月氏の聲は、編輯局内に刹那の靜默を傳へた。待設けてならぬ事ながら、いろ〳〵其の時が來たと知つた時、皆は俄かに力拔けがして、高い聲で話す者さへなかつた。午前二時過ぎの深夜を、私は自動車に乘つて、新橋から京橋日本橋へと刷り上つた崩御の號外を撒いて歩いたりした。

翌朝私が第一番に訪問したのは、青山穏田の下田歌子女史であつた。女史は「ほんとに大きい偉い方が……」と云つて、聲を放つて慟哭するのであつた。「私達の陛下は崩御遊ばされた」と云ふことを、私は女史の涙に依つて、初めて強く明かに、意識したやうな心地がした。

一七、乃木將軍

乃木將軍夫妻が、赤坂の私邸で殉死を遂げたことを、私が初めて知つたのは、京都繩手の旅宿の一室であつた。京都に於ける大葬儀の盛觀を傳へるため、私は山本、西岡、薄井など云ふ同僚數名と共に、その前日から京都に出張して居た。そして東京で大葬儀を行はれた當夜、私達は十二時近く就寢すると間もなく、東京の本社からの至急電話に依つて、此の驚くべき出來事を知つたのであつた。

「おい、おい、諸君皆起きて來給へ。大變なことを報告するから……」

と、電話口から戻つて來たのは通信部長の西岡雄政氏であつた。「西岡さんが、また我々を、かつぐのか」と思つても見たが、その呼起す聲音には、如何にも大事件らしい眞實らしい強い響がこもつて居た。

「諸君、驚いてはいかんよ、腰を拔かしてはいかんよ。乃木將軍夫妻が、今夜、赤坂の自邸で殉死したのだ。自刄したのだ……」

私は頭からガーンと、強く撲られたやうな氣持がした。そして、身體がブル〳〵ツとして「ほー」と太く呼吸するのみであつた。長い間新聞記者を勤めて居ると、その神經は一種の痲痺狀態を起して、何んな悲しい怖しい大事件にも、顏色一つ動かぬのが例であつた。

けれども其の時だけは、新聞記者など云ふ職業人でなくて、眞に日本人としての國民性に、大きな強い響を傳へたのであつた。殉死その事の正否は別として、そんな事を思考する何の猶豫もなく、或る激しい感激の情か、私の身うちを戰慄さしたのであつた。

この事が傳へられた爲めに、京都に於ける山陵の儀は、一層嚴に行はれたやうであつた。乃木將軍とは一二回、短い言葉を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

交して居たゞけに、私は其の思ひつめた心中が、何うやら察せられるやうな氣持さへした。

「泣くな、怒るな、笑ふな」と云つても、私のやうな記者心理を有つて居る男は、ついホロリとさせられる事が多いのであつた。

一八、廻り燈籠

「この大葬儀が済んでから間もなく、澁川氏は退社することになつたのだ。僕達には寝耳に水の感があつたが、矢張り一種の暗闘の延長で、血祭りになつたのだね」

「それから何う云ふ風に變りました？」

「佐藤編輯長が兼任の社會部長で、山本笑月君が次長と云ふ譯さ。澁川派と目されて居た松崎、薄井は、みじめなもので、反澁川派の連中が、俄に擡頭した譯さ」

「……と云ふと、何んな顔振れです？」

「山本、鎌田、美土路、名倉などに、社會部の中心勢力が異動して行つた譯さ。尤も此の人達にしたところで、見ように依つては、別に陰謀をした譯でも何でも無いが、斯う云ふ風にも見れば見られると云ふ迄のことさ」

「長い間、辛抱して居た甲斐があつて、山本笑月さんにも、月日が廻つて、來たのですね！」

「それはさうだけれど、これも月日が問題を解決してくれるからね、廻り燈籠のやうなものさ。それから美土路時代を經て今は原田時代になつて居るさうだが、私は何となく仲間の中心から排けられたやうな氣持がして、自惚れ根性が承知しなかつたのさ。君は大阪時代から因縁もあるから、辛抱してくれ給へと、山本君からも懇談されたけれど、村山社長に宛て辭表を提出した譯さ」

「それから、何うなりました！」

「佐藤氏も仲に入つて、いろ〱と心配してくれたので、村山社長からお手紙を頂けば、辭意を飜へしませうと云ふ事にしたのだ。すると社長から、益々社務に勉強してくれと云ふ、懇篤な親書を頂戴して大詰さ」

「一寸、信任を問ふた形でしたね」

「けれども、何うせ長い事は無いと思つて、成行を眺めて居たのさ。その騒ぎの最中に、陰謀派は渡邊君に辭職勸告をして、居堪らぬやうにし向けたが、僕は國民の伊達源一郎氏に渡邊を紹介して、調査部の方へ入社することになつたのさ……」

「いろ〱面白いことがありましたね」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一九、十五年振

大正二年は私にとつて、忘れることの出來ぬ厄年であつた。中央公論には「女八人」と云ふを連載し、次第に姓名を知られて來たが、私の生活は放縱至極なものであつた。青山南町五丁目五番地に轉じて、子供も次第に成人し、月給も七十圓近くなつて居たが、たゞ食うて行くと云ふに過ぎなかつた。

恰度、大葬儀の前、澁川氏が退社する前に、私は大阪每日の奧村不染氏から、大每に入つて働いては何うかと、松内冷洋君を介して勸められて居た。月給は當分の間九十圓であるが……と云ふ條件は、私の心を動かさずに居ぬのであつた。けれども妻の反對や、澁川氏の不同意に依つて、此の事は此方から沙汰止みにして、松内、奧村の兩氏に、面目を失ふやうな事もあつたりした。

私は其の年の夏八月、二週間の休暇を得て、十五年振りに歸省したのであつた。美作山中の夏は、東京で思つたよりも暑かつたけれど、私は舊友達に歡迎されて、懷しい思ひ出に耽ることが出來た。行商をしたり、村役場の使丁を勤めたりして、十四五の頃から苦勞して居た私も、立身出世した一人として、故鄉の風物や人々やに、正面することが出來たのであつた。何が出世だ、何が立身だ。私の心の中には、まだ多くの充されぬものがあると思つても、村の人々は私のために、心から喜びの盃を擧げてくれるのであつた。

その喜びの歸省と背中合せして、妻や妹が腸チブスで死ぬるやうな、子供二人の他に、親戚の誰彼が十人餘も、重い腸チブスを病むやうな、陰慘な秋が待受けて居ることを、何うして想像することが出來やうぞ。久し振の歸省に依つて、人生の樂しさを飽喫しながら、東京の町へ歸つて來ると、そこには恐しい病菌が、私の一家を包圍して居たのであつた。

月日はそれから十年を過ぎたけれど、私の心の生活は、肉體の生活は、仕事の生活は、安住する所を知らずに、轉々したのであつた。

二〇、同僚の情

その大きな災厄の中で、私が最も感激したのは、社の同僚達の熱い同情と云ふことであつた。社に積立て居てくれた有使貯金を出して貰つても、まだ不足勝であつた災厄に對して、同僚達は幾度も見舞の金を贈つて、私の窮乏を助けてくれたのであつた。

編輯局には、一種の暗鬪みたいな事があつたけれど、同僚同志の交際は、親密でもあり紳士的でもあつた。一緒に飲食する

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

機會があつても、私達は何處までも親密に、厭な口論一つしたことも無かつた。一帶に何處となく應揚で、コセ〳〵せず、社の利益も大切であるが、社員の慶福と云ふことに就いても、常に心を用ゐて居たのは、他の社に見られぬ美しい特色であつた。半期〳〵の賞與金なども、その頃は何の新聞社よりも、會計に貰へて居たやうであつた。いろんな不平は聞えても、金に就いての不平などは、一つも聞くことが無いやうであつた。

佐藤氏の死に依つて、弓削田、安藤、中野氏等が、中心勢力になつて居たが、それも長いことでは無かつた。

暫く失意で居たやうに見えた松山氏は、やがて弓削田氏に代つて、局長としての正位に就くやうな氣勢に見えた。この間に在つて、漁夫の利を占めた者は、利巧に立廻つた安藤鐵腸君だなどゝ、心無い評判も聞えるが、それは私には判らなかつた。ただ大阪朝日時代から一緒に居た安藤氏が、トン〳〵拍子に出世して、編輯局長となり、代議士となつた榮譽に對して、私は舊同僚の一人として、心から祝福を寄せて居るのであつた。

同僚達の同情に背くのは、心苦しくもあつたけれど、私は何うしても心を安んじて、勤める氣持にはなれぬのであつた。「妻が死だのを一轉機として、何も彼も遣り直しにしやう」私はさう思ひながら、大正三年を迎へた。

妻に死別れて、獨身者になつた私の生活が、一層、放縱に流れて行つたことを、私は私の力では、何うすることも出來ぬのであつた。

二一、獨身時代

「中央公論で拜見しましたよ、あの時分の君の心持や生活などは……」

「要するに、獨身時代の放縱な生活に原因して、社の方も辭職したくなつたようなものなんです。別に追出されもしないし自分から退かねばならぬ表面の理由と云つては、何一つ無かつたのに……。氣分一つで出處進退を極めるなんて、僕も大馬鹿者でしたよ」

「けれども、君の心持だけは、私にも判るやうな氣がしますね……。何だか斯う行詰つて、一つ局面の展開でもしなくては何うにも此うにも仕樣が無かつたのでせう」

「まアさうですね。それにこれは僕の惡い癖ですが、昔から一所に澁滯して、一つの形の中の物を凝視めると云ふことが平凡で單純で、堪えられなくなるのですよ。世俗に云ふ辛抱氣の無いのとは、少し意味が違ふけれど、普通の人には此の心持を語つても、判らないから默つて居るのです」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「獨身時代には、いろ／＼面白い事があつたでせう」

「赤坂の藝妓に戀をして、ほころびを藝妓に縫うて貰ひながら、寢ころんでふけを取る男悲しも…と云ふ歌を作つたり、或る女事務員と出來合つたり、蠣殻町の私娼に戯れたり、他愛の無いものでしたよ。それで居て酒を飲で醉ぱらふと、涙がこぼれてしかたが無かつたり、思ひ出したやうに子供が可愛くなつたり、ほんとに三十七八歳の僕は、狂人のやうな、ものでしたよ」

「然し、貴い經驗をして來た譯ですね」

「經驗を經驗するにしては、餘りに貴い代價を拂ひ過ぎて居ますよ。それに獨身時代にはね、何んな女にでも惚れッぽくなつて、それが私には恐しくて仕方が無かつた……」

「女房や子供があつてこそ、戀の戯れは中年者に面白いのですからね……」

「それに心持が荒んでね、感傷的になつてね、怒りッぽくなつたり、泣き上戸になつたり……」

二二、辭表提出

日獨戰爭が初つて、從軍記者達が青島へ向つて出發した後、私はいよ／＼辭表を提出したのであつた。何が動機であつたか、何うしても思ひ起されぬけれど、私は日吉町のカフエー、プランタンで、醉つた勢ひで其の辭表を執筆したやうであつた。

社でも、松崎のやうな男はしかたが無いと思つたのであらう、今度は私の希望通り、事が運んで行つた。これが「諭示退社を命ず」と云ふのだと、そこに憐憫がかゝるのか、退社手當金も多額に貰へるのであるが、自分から辭職する者は、ホンの規定通りの金しか受取れぬのであつた。松山忠次郎氏は、

「少しも知らなかつた、何うして辭職したのです。私に相談なさると、慰勞金の方でも、少しは何とか出來ぬことも無かつたに……」

と云はれたが、私はもう何の考へも無く、遮二無二、辭職してしまひたかつたのであつた。何處の社に入ると云ふ見込みも無し、何をして食べて行くと云ふ見當も付いて居ないのに、ほんとに無謀な退社なのであつた。けれども弓削田中野の兩氏も去らねばならぬやうになつたし、松山氏も退社せねばならぬやうになつて行つたことを思ふと、今日の私としては、更に何の悔ることも無いのであつた。

「何も彼も成行なんだ。それからの後半生に、何んな浮沈があるにせよ、新しく出直すことにするのだ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私はさう思ひながら、社の會計課へ行つて、五百圓足らずの金を受取つた。とり屋の斎仙には、瀧田樗蔭氏が私を待つて居て

「え、たつたそれだけ……少いですねえ」

などゝ、笑ふのであつた。

「社から、追出されるやうに持掛けると、千圓ぐらゐは異れたのでせうが、自分から退社した者は、こんなにみじめなんですよ」

私はさう云つたけれど、少しも自分をみじめだなどゝは思はなかつた。初めて浪人した快さに、放たれたやうに自由を感じたりした。

二三、廣告文學

三十二歳から三十七の秋まで、それでも私は六年の月日を、東京朝日新聞記者として過したのであつた。その頃は物價も安くて、月に七八十圓もあれば、一家の生計だけは支へて行かれたが、私には別にそれぞと云つて、一定の收入は無いのであつた。

「遊んで居るのなら、何うです、廣告文學の方を研究して見ては……。將來は此の廣告文案と云ふことだけでも、立派に生活して行けますよ」

斯う私に云つてくれたのは、銀座一丁目の化粧品商佐々木商店の佐々木玄兵衛氏であつた。國民新聞に居た頃から、廣告部の人に頼まれて、中將湯やゼムや命の母の廣告文を書いたし、東京朝日に居た頃にも、花王石鹸の廣告を書いたことがあつた。さうした因縁から、廣告の文案や意匠に、一種の興味を抱いて居た私は、遊び半分と云ふやうな心持になつて、毎日、午後の一二時間を、佐々木の廣告部で暮して居た。そこには佐々木十九君や、美術學校を出た三國久當伯などが居て、私は割合に樂しい心持で、仕事をすることが出來た。

市村座や帝劇の總見に行つたり、料理屋や待合で飲だり、私は案外のん氣であつた。「新聞記者を罷めても、何うやら此うやら生活して行ける」と云ふことが、私には何よりも嬉しかつた。新聞記者として見た世の中と、新聞社の背景を持たずに、獨自一個として接觸する世間とに、今まで心づかなかつた種々相が映じて眺められるのも、私には愉快であつた。

「今までは一種の型にはまつた觀かたをして居たのだ。新聞記者と云ふ色眼鏡を掛けて、人と事とを眺めて居たのだ。この事實の相違は浪人しなくては判るものでは無い」

私は何人に向つても、こんなことを云つて居た。自由で、囚はれずに、心も身も輕かつたけれど、何處やらに一種の物足り

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なさ、心淋しさの巣ふて居ることだけは、何としても否むことが出來ぬのであつた。

二四、大正四年

「大正四年と云ふ年が、僕にとつては又、大變な年だつたよ。九段坂の上で、ヒョツコリ小野瀬不二人氏に逢ふと、何うだ遊んで居るのかと云ふから、目下浪人中ですと答へたものさ。困るでせうと云ふから、え、困つて居ますと答へると、何とかせねばいけないね！　と云つて、そのまゝ右と左に別れたのさ。その街上の立話が緣となつて、僕は東京毎夕新聞に、月五十圓で原稿を書くことになつたけれど、それは六月からのことなんだ」

「で、大變な年だと云ふのは……」

「今の妻と知合になつてね、沼津通いなどゝ云ふ、熱烈な戀の一幕を演じた話さ」

「ははあ、近頃出た君の本、「闇路を辿る女」の卷頭の「或る戀の記錄」がそれですね」

「あれは小說のつもりだけれど、さう見られても、別に否定はしないつもりで居る」

「今の奧さんを娶つて、それから東京毎夕に關係するやうになつたのですね」

「新妻が出來たのに、浪人では養つて行くことが出來ないからね。米代と家賃ぐらゐは稼がなくては、生きて行かれないもの……」

「毎夕時代は、何んな風でした？」

「永代靜雄君と云ふ名編輯記者が居て、愉快に仕事が出來たものさ。探偵物を書いたり、自殺探訪とか、帝劇女優の興味記事とか、何時も署名して書いて居たよ」

「何うして、その毎夕を罷めたのです」

「永代君が居なくなつて、黑田湖山君が入つて來た頃、淺草印象記の「地獄か極樂か」と云ふのを書いたことがある。その記事に就いて、木村と云ふ社長がね、飛でも無い僕の人格を疑ふやうな怪からんことを云つたからさ」

「あゝあの事ですか。中央公論に「その夜の氣持」と題して、大に痛快に書いたのは……」

「さうさ、あの通りの始末さ。小野瀬さんや黑田君には氣の毒であつたが、あの時分の僕は、まだ若かつたからねえ……」

二五、過去の墓

――と、こゝまで書いて來て、私は今、ホッとして居る。い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ろんな感情がこんがらがつて、追憶の場面〳〵に、強く私を引張つて行くのである。

凡ての愛憎も不平も、一夢のやうに消えてしまつて、殘つて居るものは、たゞ私の馬鹿であるやうな氣持さへして居る。自分で自分の歩いて來た足跡に向つて、憤りの鞭を當てたところで、それもこれも徒勞のことであるやうな、アツ氣無さをさへ思ふ。自ら僅に慰めやうための思ひ出にしては、餘りに支拂つた月日の代價が、高きに失して居るではないか。――

何でも彼でも、時代だ、時代だと云ふけれど、時代に魁して居るものが、今日の新聞紙であるとは受取れない。若い二十代三十代の人達が、時代人らしい面構へをして、新聞界に妄想して居るけれど、彼等の何處に「時代人」としての優越があるのであらう。未だ舞臺に着かぬ足どりで、花道の七三どころで、いろんな科白をして見せてくれたところで、私達は何處を拍手し、喝采して宜いのやら判らぬ。反つて暴露された現實に、胸を衝かれるやうな事が多い。――

いや、さうでは無い。こんなものを書くお前の心持からして既に過去の「墓標」を建てるやうなものではないかと、一方の心は囁いて居る。お前が何んなに、若い人達の世の中を呪つても、そこには時代が祝福して居る。徒らに思ひ出の糸を手繰るお前の上には、たゞ「過去」が忍び足に這寄つて居るのみだと、強い囁きの聲も聞える。――

私の記者生活は、それから後も、曲折が多かつた。都、二六大阪新報と云ふ風に、轉々して行く間にも、私は私として生をることのみを考へて居た。今日では、今の我がまゝ氣儘の境涯を、自分に最も適した境涯として、感謝して居るけれど、まだほんとの落着く所には、到り着いて居ぬのであつた。

私は更に、追憶のページを繰らう。(東京の卷中期、完)

天民附記――都、二六、大阪新報の事や、記者印象録は、次號に於いて、發表したいと思つて居ます。(七月一日夜)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

紫野の大徳寺

笹川臨風

一

天龍寺納豆と、大徳寺納豆とどう味が違ふか知らないが、大概似たり寄つたりのものであらう。禪家と納豆とはつきものと見えて、菩提寺からも能く和尚さんが寺納豆を屆けてくれる。食べて見ると、何だか禪らしいやうな香ひがする。夢窓國師も一休和尚もこれで湯漬でもかき込んでゐたのであらうか。しかし永平寺で故森田悟由師の居間をのぞいて見たとき、此ではまさか納豆でもあるまいと感ぜられた。故日置默仙老師に會つた時も、ちつとも納豆の感じが起らなかつた。

天龍寺は托鉢興行の本家である。緇衣の連中が市中を托鉢するのを見ると、納豆の味を思ひ出さゞるを得ない。然し松林を通つて大徳寺の門を潜つて、山門を仰ぐときには、納豆の味よりか茶の香がどこからともなく聞えて來るやうだ。黄檗山を思ふときには、普茶料理を連想するが、大徳寺は宇治でなくても茶どころである。

頽廢氣分はいづれの古寺院にも見られる。大徳寺だとて其御多分には漏れぬが、塔頭の或ものは舊大名と因縁の深いのもあるから、此等は頽廢以外に超然としてゐることが出來る。しかし多くの塔頭は檀家もなく、御朱印もなくなつて、細々と香烟を繋いでゐるばかりである。建築に特別の保護があつても、寶物に國寶があつても、何のたしにもならぬ。教外別傳不立文字と洒落れてゐたところが生活問題を如何にすべきか。氣紛れの學者や藝術家が來て、賞め立てゝくれたところが、一毫の利益もあるわけではない。歸りは北野へ廻はつて大市のすつぽんでも食べようか、それとも嵐山の千鳥かほとゝぎすかなどと遊覽客は勝手に相談してゐるが、大徳寺は依然として納豆の境遇に甘んぜねばならぬ。しかしそこを馬鹿々々しいと考へては祖師に對しても相濟まぬわけだ。禪味と茶味とは一にして二ならずと悟つて、何事もそれ風流恬淡、本來無一物のこと。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大德寺の末寺は隨分と數が多い。方丈の緣側に立つて末寺一覽の札を仰ぐと、流石に此寺の勢力偉大なることが偲ばれる。しかし此等の末寺は國々の名刹であつても、もう過去の寺院である。同じ過去にしても本願寺さんとは大分違つてゐる。大德寺の末寺は休火山であるが、本願寺の末寺は猶餘烟を噴いてゐるけれど本堂の前栽に對し、更に緣先から洛中を一目に見るときは、鴻の間飛雲閣の美觀はないにしても、過去の香のゆかしいのを追懷せざるを得ない。富士も箱根も休火山であつて、餘烟を噴かぬにしろ、其の美しいのに於て更に異存はない。富士や箱根が國の誇であると同じく、大德寺も亦大なる誇である。

紫野行き、標野(しめの)行きと謳はれた紫野は、此邊一體の名稱である。蓮臺野もあり北野も平野も遠くはないから、茫漠たる原野が迷つてゐたことゝ察せられるが、紫野の名は最も艶で、納豆にふさはしくないほどに優しい。けれど大德寺の大伽藍が建立されてからは、紫野と云ふと、大德寺となつて、紫野は大德寺の代名詞で、一つとなつてしまつた。同じ紫野に古くは雲林院があつて、輪奐の美を極めるとともに、櫻花の名所として知られてゐたが、今日では目につかぬほどに、見すぼらしい小さな堂宇を殘すばかりである。大德寺が今猶紫野を獨りで背負つて立つのに比ぶべくもない。墨蹟に紫野物があつて、後の黃檗物に對し、大德寺派の遺勁を示してゐるのでも、紫野の名は不朽であらう。

大燈國師以來大德寺に高僧知識は多かつた。徹翁・言外・養叟一休・春浦・實傳・古嶽・大林・笑嶺・春屋・古溪・萬江・玉室・江月・天祐・清岩・江雪・玉舟・翠岩なんどと云ふ和尚さんは、いづれも禪林の龍鳳であつても、僧侶としての價値よりは、寧ろ墨蹟に於て珍重されてゐる。人物と墨蹟との關係は無論あらうが、世に在る時の行事學識風格よりか、流風餘韻は遺墨に存してゐる天寧の圜悟や、徑山の大慧や、育王の佛照・靈隱の松源・徑山の無準・育王の橫川・徑山の虛堂・天寧の楚石・靈巖の了庵、育王の印月江・天目山の中峯の如きは、禪機活殺の妙を極めた大知識であつたが、其の超世脫俗の筆は希覯の珍として尊重措く能はざるものである。更に下つて歸化したる宋元の高僧は如何。建長寺の開山大覺禪師、(道隆蘭谿)一たび渡來して博多の聖福寺に留錫し、後相州の巨福山(建長寺)に駐り、久しからずして歸國したる兀庵、圓覺寺の開山佛光國師(祖元無學)、淨智寺の開山佛源禪師(大休正念)、建長・圓覺・淨智・南禪諸寺に跡を留めたる寧一山、建長・南禪・建仁・廣嚴の諸刹に入山したる俊明極、南禪寺に異彩を放ちたる梵竺仙、疊秀山開善寺を創めたる大鑑禪師(清拙正澄)の徒は、我が禪門史の英華であるが、其墨蹟は僧家

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の賓であつて、諸家の賓立に於て、最も人目を聳動させる。よし贋作の流傳は多いにしろ、隱木卽を初めとして、高泉・獨立・獨湛・大鵬等いはゆる黃檗物は世間に其數少しとせぬが、紫野物に至ると、適に其の存するもの乏しく、歸化の諸禪師に至りては墨蹟の顯著なるもの數點を限るべく、支那諸禪師の筆になると、蓋し珍中の珍であらう。

近頃商賈人仲間で儒者物と稱する江戸時代の漢學者の筆蹟が漸くもてはやされて來たが、其以前に於て歌切の外に珍重されたのは黃檗物であつた。けれど黃檗物のもてはやされる以前は紫野物に限つてゐたのである。蓋し傳系を支那諸禪師歸化諸禪師に發して各寺刹の諸禪師に及んだのであるが、流石に大德寺には其道に堪能なる諸名僧がゐたから、紫野物は儼然として世間の好尙を博したのである。しかし其の大なる理由としては、茶と大德寺との間に密接なる關係があつたと云ふことを擧げねばならぬ。

祖傳考に、藪内流の淸隱齋が序して、「いそのかみ古きを考ふるに、茶祖珠光は一休和尙に參し、圜悟禪師の墨跡を法信に賜りしを、丈室にかけ、爐裏に湯を煮て同志の友を招き、茶味と禪味とを樂しめり、相續いて紹鷗・利休・吾祖劍仲・紹智皆禪法によりて、古德に參得せり、故に茶席の一軸は其座の風流非説の具にあらず、高德碩師の墨跡をかけて其德を慕ひ其語に參せしめむが爲なり」とあるは、茶と禪との關係を或點から道破したもので、紫野物が珍重された所以を說いたと云つてよい。

君臺觀左右帳記に、三國以來唐宋元明の諸家の名を列してゐるが、すべて之れ畫で、書はないのである。中に無準和尙の名はあつても、「人物讃多し、山水墨繪」とありて、其墨蹟に言及してゐない。しかし御飾記に「西六間北面をうくる、南の中柱迄に曲彔を置かれて、上に夢窓國師の墨跡一幅懸らる」「次西の四帖半敷、障子に夢窓國師の道歌の色紙を置かるゝ」とありて、禪僧の墨蹟を尊んでゐたことは明かであつた。喫茶往來には「左は思恭の彩色の釋迦、靈山說化の粧巍々たり、右は牧溪の墨繪の觀音、普陀示現の姿蕩々たり。普賢文珠は脇繪となり、寒山拾得は面前となる」とありて、張思恭の極彩色物や牧溪の墨繪が、茶室の掛物として代表されてゐるが、墨蹟のことは更に見えぬ。蔭凉軒日錄にも張思恭の釋迦圖、吳道子の觀音像、馬麟の二幅對、牧溪・伯心和尙・月壺・芳汝・李龍眠・馬遠・顏輝等の畫圖に就いての記事はあるが、禪僧の墨蹟に就いては扁額以外に記事が見えてゐない。しかし墨蹟が珍重せられないのではなくして、其の禪と茶、東山藝術との關係はなか〳〵に深かつたのである。如拙周文を初め當時の畫家が描いた畫圖の上には

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

必ず五山禪僧が贊詩を題したのも、書と畫と相待ちて、そこに美しい光が放つと云ふ觀念に基いたのであらう。如拙の瓢鮎圖作家不詳の芭蕉夜雨圖・周文の竹隱讀書圖の如きは、いづれも多くの題贊を載せてゐるが、其中でも瓢鮎圖が夥多の贊詩を隙間もなく列べてゐるのはまことに異觀と云はねばならぬ。獨り畫圖が精彩を放つてゐるばかりでなく、此等の贊詩に依りて更に錦上に花を添へたところに、書畫の二つながらもてはやされたのを思ふのである。

茶と禪とは密なる關係を有つてゐたが、とりわけ、大德寺は茶に緣が深い。されば茶に深い緣のある大德寺諸知識の墨蹟が茶室に珍什として重ぜられたのは當然であらう。若葉の蔭は濃くなつて踏む敷石の苔も青い。禪寺の晝は森閑としてゐる。方丈の緣側に立つと、其前には廣い前栽が、境の清淨と相待つて明るく、氣持よく、のんびりとしてゐる。案內者は小堀遠州作だと教へてくれたが、都林泉名勝圖會には天祐和尙作としてある。明智門を背にして、ところ〲に石を立て、樹木を植ゑ、美しく砂を盛つてゐて、こせ〲してゐないところを見ると、どうも遠州ではなさゝうな。更に此庭の背景は比叡から如意ケ嶽、東山の一部を取入れて、洛中洛外を見渡す大觀に於て優れてゐる。花晨月夕、晴に雨に、氣象萬千の風景とり〲に面白いであらうが、特に雪の趣は四季を通じて第一の佳なるものであらうと想像されるのである。雪見酒は京都に於て圓山を以て其絕好地としてゐるが、鴨川を隔てゝ東山を望む三本木・木屋町は又別の趣がある。しかし圓山と云ひ、木屋町と云ひ、雪に脂粉の香が搖曳してゐるではないか。置炬燵のさし向ひと云ふところに纏綿たる情緒がある。しかし大德寺方丈の雪見は恐らく風流至極の雪見であらう。情界の風流ではなくして、清淨境の風流である。納豆汁に舌を鼓するか、風呂吹大根に寒さを忘れる雪見酒であらう。さもなくば一服の茶を靜に喫しながら乾坤一白の美を賞するのであらう。一休歌て曰く、「人は多く入り得たり大燈の門、這裡誰か師席の尊きを揖つるや、淡飯麁茶我に客なく、醉歌獨り倒す濁醪の樽」と。して見ると、淡飯麁茶よりも、どぶろくに醉つぱらツて管を捲いた方がよかつたと見える。流石に一休らしくてよい。

一休はそれでもよいが、滿山の圓顱が、どぶろくに醉ひつぶれてゐては佛地も何もあつたものでない。尤もどぶろく宗のやうに見える一休でも、「酒肆詩僧久しく交りを絕つ、獨り吟ず月影松梢に滿つ」と云つてゐるところを見ると、此方が寧ろ本領であつたらう。一休には別に本領があるから、よいとして本領のない手合がどぶろく宗では祖師も何もあつたものではない

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、其心配は無用である。大徳寺の法燈は長く明るく、茶の清香は馥郁としてゐるではないか。

珠光・利休・庸軒・石州・遠州・不昧侯は、大徳寺と淺からぬ因縁があつた。連歌師の柴屋軒宗長は眞珠庵を初め諸堂の建立に力を盡し、最後に金毛閣を建てたと云はれてゐる。秘藏の定家卿眞筆の源氏物語を賣り五十貫を得て、其功を成したと云ふことである。どこまでが實說か、それとも全部が實說かは明かでないが、宗長はとにかく大檀那であつたのであらう。諸國漫遊の連歌師として、頗る見上げたもので、正に金毛閣の高きに比すべきものがある。しかし大徳寺と連歌との關係は漸くして、茶の關係に於て大徳寺は光つてゐる。

珠光は茶道の開山だけあつて、流石に図抜けて風流らしかつたが、利休になると、覇氣があつて、猾くて、體のいゝ、幇間らしいところがある。しかし同じ幇間にしても、桃山時代の幇間太閤秀吉の幇間であるから、わざとらしい所がなく、どこかに規模が大きかつた。ところが小堀遠州となると、形式に囚はれた、跼蹐したところがあるばかりでなく、人を馬鹿にした圖太い、氣障な幇間であつた。大まかな磊落風のあつた利休と違つて、こせ〳〵してゐて平氣で茶を毒してゐた。利休を秀吉型とすると、遠州は正に家康型である。茶道は遠州に依りて有難味をつけられたかも知れぬが、賊せられたことは夥しい。茶道本來の主旨から云ふと、利休はそろ〳〵之を墮落に導いてゐるし遠州になると、之を奈落の底へ突き落してゐる。今日の茶は其奈落の殘滓を拾つてゐるのである。

利休は茶をそろ〳〵墮落に導いたと云つた。しかし開山の珠光だけでは、茶もあれだけ發展はしなかつたであらう。茶道流行に就いて利休の功があつたことは否むわけにゆかぬ。差引すると、利休はまだ茶道の功勞者であるが、遠州になると、功罪相償はない。

大徳寺にある利休の墓石に穿たれた穴に耳を當てると、松風の音が聞えると云ふことだ。ところで當てゝ見たが、一向に聞えない。聞えないのは、無縁の衆生であらうが、まア利休の墓ならさう云つたところで甚しく差支はなからう。然しそれを假りに遠州としたらどうだ。松風の音でなくて、劫火の炎がちら〳〵燃えやしまいか。

更に考へ直して見ると、利休は同じ狩野にしても永徳あたりであらうが、遠州になると、探幽以後の狩野である。規則づくめの官僚式の臭が紛々として鼻を撲つ。しかし之も時代の致す所と思へばあながち遠州のみを責めるには當るまい。大徳寺は茶道流行の此徑路を語つてゐる。今日の大徳寺は茶道の殘骸を

見ると同じである。但し其間に依然として昔ながらの味は納豆であらう。禪や茶が變化しても納豆だけは變らない。

二

眞珠庵・大仙院・孤蓬庵と特別に塔頭を尋ねて見ると、塔頭のうちにも榮枯盛衰はある。中には今名のみ存してゐるものもないではない。しかし東山藝術と大德寺との間には往來の繁き津梁があつたのである、相阿彌・蛇足・宗湛・等伯は大德寺と離るべからざる緣故を有してゐた。

相阿彌は作庭の名人と傳へられてゐる。銀閣寺の林泉を初め龍安寺の虎兒渡・大仙院の庭は其作中の代表品の如く吹聽されてゐる。相阿彌のやうな、畫も描き、鑑定もやり、茶にも長じ尺八をも巧に吹いたほど多藝多趣味の人のことだから、隨分作庭の工もあつたであらうが、作庭のことは單なる傳說だけで、確かな文獻は一つも存在してゐない。同時代に善阿彌と云ふ作庭の名人がゐたことは蔭凉軒日錄の處々に記載されてゐるが、相阿彌の作庭については一言半句も見えない。然し君臺觀左右帳記や御飾記に座敷飾を事細かに說いたほどの人であるから、木や石の配置、泉や水の曲折に就いても必ず一隻眼を有してゐたことゝ思はれる。よしや善阿彌ほどの工はなかつたにしろ、意見はあつたであらう。或は相阿彌の高名なるが爲に善阿彌などの名は蔽はれて、林泉などが相阿彌作と云はれてゐるやうになつたかも知れぬが、相阿彌だつて、林泉に無關係だと云はれぬ。文獻がないと云つて、相阿彌を作庭から排除してしまふは考へものである。

東山殿が銀閣寺林泉の意匠を案出したと云ふのも文獻はないもとから此地は惠雲院の地で靑山佳絕の處であつたから、自然美はあつたのである。之に人工美を配置したのは、東山殿の作意であらうが、相阿彌が之に參加したのも、ありさうなことである。「彼地は山回り水流れ、雲興り霧擁し、松門岩庭、塵外の景尤も美なり、其傍に慈照の小院を構へ、燒香小立して之を見れば、前面に數峯庭に列し、左に水流れ出で尤も美なり、仍りて山を築き水を引くに其便宜あり云々」とあるに依りても、自然美に加ふるに人工美を巧に配合したものであることは分る。同仁齋の名稱を選ぶにも、あゝのかうのと、苦心慘憺を極めた東山殿の洗錬せられた趣味を見ると、銀閣寺の林泉に東山殿の意匠があつたことは爭ふべからざる事實であらうが、相阿彌の意見も必ずや參酌せられたであらう。「彼者は山を築き水を引くに、妙手比倫なし」と云はれ、「前夕、睡隱に從いて小屛を築くを見る、善阿築くところなり、其の遠近の承調尤も奇絕た

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るなり、之に對して飽かず、忽然として歸路を忘るなり」と云はれた善阿彌も銀閣寺の林泉に關つたことは文獻に見えぬが、此名手が若し生存してゐたならば關係のせぬことはあるまい。善阿彌に關する記事は文正元年頃であるから、文明十一年に銀閣寺の工を起すまでには十三年ばかり隔つてゐる。此間に善阿彌が死去したならばいざ知らず、生きてゐたならば、さしづめ作庭の棟梁となつてゐたらう。然し既に死去した後であつたらば、相阿彌は其後繼者として必ず東山殿の相談相手に水石の配置をしたこともあらう。して見ると作庭に關する文獻の有無は大した問題でもあるまい。林泉などに關する文獻はないのが當然で、之を以て相阿彌は全然作庭に關係なしと斷定するのも、ちと氣が早過ぎはしまいか。

銀閣寺の庭は姑く置いて、龍安寺と大仙院とはさてどんなものだらう。龍安寺の庭は虎兒渡の庭と今一つ水を湛へた大池のある庭とが倶に名高い。都名所圖繪などには此池の繪を載せてゐるが、北尾政美の畫いた繪本都の錦にも金閣や清水・高尾などとともに此庭に水鳥の多く集まつた圖を描いてある。今往つて見ても、棄て難い幽趣のある林泉である。大澤の池に比しては小さくあるが、亭々たる樹立物古りて、水際には蘆荻生ひ茂り、鑑をなせる水には漣を寄せてゐる。しかし虎兒渡になると、一水一木を用ひず、唯白沙の上に點々として奇巖十數を列ねてゐるばかりである。山州名跡志には之を細川勝元の作るところとしてゐる。此寺最初は徳大寺左大臣實能の山莊であつたのを、長祿二年二月十日、勝元が徳大寺公有から讓り受け妙心寺の義天和尚を開基として此に寺を建てた。其方丈は即ち勝元邸の書院を移したものだと云ふことである。勝元は文明五年五月十一日死去したのであるから、此庭は其以前に造られた筈であるが、事實どうであらうか。寺傳には相阿彌の作としてゐるが、之にも異說ありて、金森宗和の作と云ふものがある。宗和の作とすると、ずつと後のものであるが、相阿が宗和になつたのか、宗和が相阿になつたのか詳かでない。とにかく此庭は盆石から案出した奇構であらうが、東山時代には盆景盆石が非常に流行してゐる。寛正四年には、將軍義政が五山并に諸寺院より盆景を徵發し、之を隱匿するものは重き罪科に行ふべしとまで沙汰してゐる。即ち蔭凉軒日錄、寛正四年五月二十五日の條に、「叢林中の小石に諸草を之を着けて之を養ふもの悉く召寄せられて、御覽ぜらる、尙難澁にして出さゞるの方は某寺奉行を以て尋ね究められ、若し之れあらば則ち御罪科あるべきの由仰せ出さるゝの由、千科刑部少輔予に語る、仍りて重ねて寺家に命じて證狀を請ふなり、嚴命を以て諸寺院より諸盆山并に石菖

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

諸草を獻ぜらるゝなり」とありて、将軍は無理往生に五山の珍栽を沒收してゐる。盆石盆景は自然を縮摸したもので、林泉の小なるものである。當時の詩僧が「我れ水を吹いて四海の洪濤を鼓起し、峯に瀉いで九天を下るの飛瀑を垂れ、石を洗へば乾坤を整頓し、水を換ふれば溟渤を掀翻す」と云へるが如く、我れ自ら造物者となりて、自然の景を小規模に作りなしたのである。虎兒渡は盆景の大なるものではなくして、盆石の大なるものである。白砂は即ち浩渺たる波濤で、十有餘個の奇巖は蓬萊瀛州方丈か、然らずんば海表に突出する峨々たる島嶼である。しかも其巖石の隱見出沒端倪すべからざるところに此庭の工夫がある。

踞して姑らく之を諦視してゐると、目も遙かなる滄海の大觀が幻出して來る。一帆は行かず一鳥は飛ばずして、さゝんの波がこゝもとに寄せ來るやうである。突兀たる岬角、嵯峨たる峯嶺は嶙峋の壯觀を極めてゐる。漁村蜑舍はなくとも、鮫宮貝闕は藏れてゐるであらう。積水滔天の裡には魚龍夜嘯くの光景がありはせぬか。蘋瀾崩濤の間には鮫人の涙も灑がれるであらう。之を畫にすれば馬遠夏珪の筆意があらう。秀潤穩雅の趣はないが、雄渾勁拔の態はある。恰も是れ北畫の闊幀である。後世の林泉がわざとらしく跼蹐してゐるとは全然異つてゐる。之れを相阿彌の作と斷言し兼ねると同じく、宗和の創意と定案を下すことも難い。勝元の作と稱するが如きは、蓋し勝元の寺院建立から出た想像說であらう。

龍安寺の庭は海洋の縮圖であるが、大仙院の林泉は溪流の摸寫である。其の水を用ひぬところが、兩者相似通つてゐる。大仙院は眞珠庵のすぐ隣りで建築に見るものはないが、其の林泉を以て孤蓬庵等とともに大德寺中の奇觀をなしてゐる。孤蓬庵の林泉は遠州好みで、どこまでも氣取つた庭らしい庭であるが、大仙院のは中々に解し兼ねる庭である。本法寺の本阿彌光悅の三巴の庭を謎の庭とすると、大仙院のもその方に近いが、さりとて三巴ほどに難解のものではない。よく〳〵見てゐると、急瀬奔湍の溪流が水なきに迸る。

寫したのは、其形でなくして其神である。石と木と砂とをわざとらしからずに配置して、それで水沫濺漿を開かせようとするのである。幽溪ゆるく廻つて、深潭を作り、解澗急に瀬をなして、驚湍を現出する、白石異流には翡翠來く、桃花潭水には夕陽紅に映る。石の數は二十、ところ〳〵に木のあるは峯巒若しくは幽林であらう。久しく見てゐるうちに油然として感興が湧いて來る。

此庭にしたところが、相阿彌の作であるか否やは確かでない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しかし之を打消すだけの材料のない以上は相阿彌の創意と見て置いても差支はあるまい。なぜかと云ふと此寺院には相阿彌作山水畫の襖がある。落款がないから、之も傳相阿彌ではあるが、如何にも相阿彌の筆らしく、しかも相阿彌としての傑作であらう。潤ひのある溫味のしつとりした構圖の大きい玉のやうな畫である。しかも其玉は小さな玉でなくして、白玉の大なるものである。庭の北畫式と相對して、南畫の粹を發揮してゐる。現時此畫は表裝されて京都帝室博物館の陳列棚を飾つてゐる。

相阿彌は東山時代が産出した一つの奇寶で、同時に時代を粧飾した名玉であつた。中尾氏三代のうちで最もすぐれて、東山殿の懐刀であつた。東山殿の趣味は相阿彌の趣味で、相阿彌の趣味は即ち東山殿の趣味である。もう一つ云ひ直すと、東山殿の趣味が東山時代の趣味を作つたと同じく、相阿彌の趣味も東山時代の趣味を作つてゐる。祖父から父、父から子と三代が時代趣味時代藝術と大なる關係を持つてゐるのは他に比類少い珍らしい事實である。

中尾氏三代と云ふが如く能阿彌が藝阿彌の父で、相阿彌が藝阿彌の子であることは爭はれないことであるが、蔭凉軒日錄を繙いて、いつも疑はしく思ふのは、果して相阿彌は藝阿彌の實子であらうかどうだらうかと云ふことである。曾て此點に疑問を挾んで一案を出したが、今も依然として此疑を解くことが出來ぬ。それは文明十七年十一月二日の條に、「相公（東山殿義政）曰く、相阿、父の喪に在り、來月十日比出仕すべし云々」の記事があるからである。同じ十二月八日の條には、「十僧畫の草案、相阿出仕以後、相阿と相議定し、之を調へて可なるかの由之を白す、相公曰く諾」とありて、同月十八日の條には「相阿鹿苑助（狩野正信）を招いて之を濟す」とあれば、十一月から十二月の中頃まで相阿彌は父の喪に丁りて、出仕しなかつたのである。然らば父の藝阿彌は此頃死去したかと云ふに、事實は在世して達者でゐたやうである。藝阿彌が文明十三年に五十歳であつたことは、啓書記に與へた瀧布の圖の左方に鹿苑眞藝五十歳と明記してあり、此圖に橫川景三が贊して、「相陽の啓上人は繪事に遊ぶものなり、文明十年戊戌歳上國（京都）に觀光し、國手藝阿に就いて畫を學び三年にして業成り云々」とあるが如く、成業歸國の際に餞別に贈つたものであることを詳にしてゐるので明かである。して見ると、文明十七年は正に五十四歳である。然るに實隆公記永正六年閏八月十二日の條に「今日留守の間、藝阿來り、八景の押繪持ち來る、秘藏、自愛々々」とある。永正六年は文明十七年を隔たること二十四年の後であるから文明十七年に五十四歳の藝阿彌は此年方に七十八歳であ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。此時に在世であつたとすると、猶長命してゐた筈である。此實隆公記にある藝阿が中尾氏の藝阿である以上は、藝阿彌は文明十七年頃に死んでゐなかつたのである。死なないとすると父の喪と云ふ父は果して誰であらうか。實隆公記の藝阿が中尾氏の藝阿彌でなかつたならば相阿彌の父に疑問はないが、其實中尾氏の藝阿彌であつたらば、相阿彌は藝阿彌の實子でなくして、別に實父があつたのではあるまいか。畫工譜略に相阿彌を傳して、「生國は越前朝倉家のもの、後に東山慈照院義政公へ召出さる」とあるは何に依つたか知れないが、或は相阿彌は召出された後に藝阿彌の養子にでもなつたのではなからうか。

大仙院の庭は見てゐるうちに次第に心に融會して次第に感興が加はつて來たが、相阿彌に對する疑問は依然として解けぬ。東山時代の藝術史には不審と不審とが押し合つてゐる。

三

大仙院には相阿彌の遺香が芳しいが、眞珠庵には曾我蛇足の餘韻が傳はつてゐる。蛇足と周文若しくは秀文との關係は畫史中のやかましい問題であるが、周文の畫系を承けたと、簡單に云つてのけて置かう。蛇足の家系が議論のあるより前に、周文それ自らが難問題であるが、村庵小藁の周文都管像の贊詞が簡略で要を得てゐる。小涼軒日録にある雲居寺の彫像等のことも村庵小藁は立派に之を褒書してゐるから、或人の說の如く畫と彫刻とを兼ねてしかも僧侶であつたのに疑を挾む餘地は更にない。平安朝頃の藝術家は此等を兼備したものが少くなかつたのである。しかし越溪周文と稱したのに就いては何か謂れがあるであらうが、之を明にしたものはないやうである。本朝畫史に「其印文、越溪周文は、所謂江州山上永源寺の境なり、故ありて此處に在りて之を稱す」とあるのは果して信を得てゐるであらうかどうか。當時の記錄には越江ともあるが越は或は越前であらうと說くものもある。現に眞珠庵に傳ふる眞珠庵十五世普巖宗賢首座が書き置ける畫傳には「周文は相國寺の僧なり、職都官に至る、初めは如拙を師とし、後に直夫を學ぶ」、「李周文明人、越の前州に居る、故に越溪周文と號し、畫を以て稱せらる」とある由なるが、之も非常に混線して更に信を措き難い。越溪周文は文都管の周文で、明人の李周文は李秀文であらうが「越の前州に居る、故に越溪周文と號す」とある說は、一考すべき價値があらう。李秀文が越前の朝倉氏家臣の聟となつて曾我蛇足を生んだと云ふ說を傳へるが、之も頗る疑はしいもので秀文の跡は飛驒にあるが越前にはない。しかし翰林詩集に「人の越に之くを送る」とありて、「越溪遊已に落ち、洛浦春初め

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て歸る」の句があり、同じ書に「永上人の越に之くを送る」とありて、「洞華古より越備能くす、三一の聲名四海に騰る、今日荷花溪上の寺、君が歸り去るを待ちて詩燈を續けん」の詩、「人の越上に歸るを送る」とありて、「聞くならく若耶溪上村」の句、「正宗上人の舊業圖詩」とありて、「若耶の新綠蘆根を浸す、想ひ見る故廬溪上の村」の句を載せてゐる。越前にありて蓮花の名所であつた溪上の寺刹と見える。正宗上人舊業圖詩の小序に、其圖を叙して、「山は畳りて水は紆り、村は深くして林密に、窈窕たる其門は疎梅叢竹の間に髣見し、惟れ寂惟れ寞たるは問はずして知るべし」とある。蓮花のことはないが、暗香疎影の春景であるから固より之を畫いてゐないのであらう。

さて此荷花溪上の村にあつた寺は何寺であるか。越前名勝志を初め越前の地誌類、日域洞上諸祖傳、日域洞上聯燈錄などを披見したが、それらしいものはとんと見當らない。しかし越溪と洒落れて稱へられてゐた寺刹が越前にあつたことは事實である。周文の傳は善く分らないが、蔭凉軒日錄に依ると、俗姓の藤倉氏だけは記されてゐるけれど、どこの人で、どう云ふ經歷があつたかは不明である。臆測すると、或は越前の山寺にゐて、それから相國寺に來り、都管となつたのでもあらうか。江州の永源寺にゐたと云ふのは確證がないらしいから、越溪で思ひついた一つの說ではあるまいか。

畫史に名を春育と稱したとあるのも杜撰の誹を免れまい。一體春育と稱したと云ふ出所は何であつたらうか。早川氏の賣立に出た周文の畫上には紫瑟林春育童子識とありて、多くの贊詞が載つてゐたが、童子の語は先づ變ではなからうか。此畫を周文の眞筆とすれば、中年以後のもの、恐くは晩年のものであらう。いゝお爺さんをつかまへて童子とは聞えぬ沙汰であるが、此春育童子はお寺の稚兒さんか何かで、此畫の持主と見るが至當で、持主から坊さん達に贊詞を依賴したと見れば一切が了解される。して見れば、春育は周文の名でなくして、赤の他人の可愛いお稚兒さんであつただらう。

さて七面倒くさい考證は姑らく其くらゐにするとしても、猶それ以上に周文なるものに不可解な點がある。一體周文の遺作はどれが眞正であるか。傳周文なるものは相當に多いがいづれを正しとすべきであらうか。越溪周文の印、周文の印を捺したものはあるが、果して其印章は同一であらうか。中には印章の違つたものもあり、印文の感服しないのもある。如拙のやうな數の少いものは、まだ取扱ひ好いし、瓢鮎圖の如き正確なものもあるから見當はつけ易いが、周文になると、標準畫と定むべきものが明確でないので、少からずまごつかせられる けれど

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雪舟が師事して崇拜してゐたのであるから、雪舟の畫から割り出して見ると、遺作中に眞筆と思ふものもあるし、あらぬ他人の描いたものだと思はれるのもある。

曾我二直庵は自ら周文六世の孫と稱してゐる。即ち周文から蛇足、紹仙、紹祥、直庵、二直庵と其系を繫いでゐるのである。蛇足は一休と師弟の約があつたと云ふことでそれが爲に遺作を多く眞珠庵に存してゐるが、同じ大德寺の塔頭養德院にも此畫家のすぐれた筆を傳へてゐる。曾我系は武人畑であつたから、自づと筆致に勁いところがある。しかし從來蛇足の畫を評するものは其用筆の粗莽にして氣韻の瀟洒なるを說くが、其遺作を見るに必ずしもさうではなく、寧ろ清潤の氣があつて溫雅の筆であつた。其の畫く所の阿彌陀佛像の上に慈父重賢大德のために畫くとあると、本朝畫史に記してある所を見ると、世間に傳ふるが如く李秀文の子でないことも明かである。

蛇足は越前の朝倉氏の家臣らしい。李秀文が歸化して朝倉氏家臣の聟となつて蛇足を生んだと云ふ傳說は、血統を朝倉氏の家臣に受け、畫系を周文に繫いだと云ふ二つの事實を混同したものであらう。周文の越溪を假りに越前とすると、此兩者の間には自づと師弟となるべき緣故があつたのではあるまいか。相阿彌も朝倉氏の家臣だとなつて來ると、越前と東山藝術とは少からぬ關係があるのみならず、相阿彌と云ひ、蛇足と云ひ、供に大德寺とは多少の緣故があり、小栗宗湛の子宗栗は若狹の小濱に居て、後に大德寺に寓したと云ふことであるから、益々東山藝術と北國との因緣、大德寺との關係を思はざるを得ない。

五山の叢林は學問の寶庫であつたばかりでなく、藝術の發祥し溫醸されたところであつた。大德寺の如きは其尤なるもので東山藝術は納豆の裡から盛んに醱酵したのである。納豆の力も亦偉大ではないか。一休曾て大衆に誨へて云ふ、「酒を飲むならどぶろく、肴は糟を食へ」と。糟よりは納豆の方がまだましであらう。

周文は相國寺の僧であつたから、大德寺には緣が薄かつた。相國寺には周文の畫蹟はあつたであらうが、劫火に脅かされたために、全く其痕跡を失つて、東福寺に明兆の遺芳を傳へてゐるのとは同じくない。西山の西芳寺には曾て周文の鯉の間と云ふのがあつた。もと四幅あつたが、應仁の亂で行方を失つて、武藏の國へ飛んだのである。多分東國武士が掠奪して往つたものであらう。然るに長享二年頃に其中の二幅を西芳寺へ寄進したものがあつたが、不思議や此畫が到來すると、池中に尺餘の鯉が十一尾も浮泳したと云ふことだ。尤も應仁の亂に池水は切つて落し、一面の芝草が叢生してゐたのを、東山殿御成とあり

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、俄に草を除く、水を湛へたところが、どこともなく、名畫の魂が抜け出したと見えて、三十六鱗が尾鰭を振つて悠々自得、往來翕忽の奇觀を呈したのである。其後東山殿はあと二幅を早革武藏國より召上げ之を臨模すべき命を下した。此名畫の持主は飯沼彈正左衞門尉と被官藤行次郎左衞門とであつたが、今は上野の白子にありとのことであつた。しかし此二幅がどうなつたか、此下には話がないやうである。室町將軍の威勢が凋落した當時に、しかも遠國から分取品を召上げることは頗る困難なことであつたらう。要するにあと二幅はもとの西芳寺に還らず、多分利根川あたりで勇ましく游泳してゐたでもあらう。

西芳寺に還つたと云ふ二幅の鯉も今日では同寺にない。黃金池には緋や白や黑や、大小幾十の鯉が藻に隱れ渚に集ひて、或時は落花を趁ひ、又或時は水を打つてひらりと飛揚してゐるが今の佛殿は新らしい粗末のもので舊觀を止めてゐないから、いつの世にか鯉の圖も拔け出して寺僧の齋の料とでもなつたであらうか。今と昔とは其規模を異にしてゐるもの丶西芳寺の林泉は夢窓國師の意匠になつたと云はれるだけありて、自然らしく深みのある幽邃閑適を極めたものである。伏見の人、島之介なる庭作が荒廢したのを修築したと云ふことで、どのやうに修築したかは明かでないが、夢窓國師の當時は遙に今日のものよりも宏大であつたらしい。銀閣寺の林泉も範を此に取つたほどに足利期の名林泉であつた。斯う云ふところに周文の眞筆が存してゐたならば、黃金池は鯉で塡まるばかりでなく、周文畫鬪の標準となつたであらうに洵に惜いことをしたものである。それに較べると、大德寺の諸塔頭に、緣故ある東山藝術の粹を鍾めて保存されてゐるのは、珍重すべきこと丶云はねばならぬ。

大德寺は禪月の五百羅漢を初め、名畫名器も少くなく、又禪林の墨蹟に富んでゐる。後醍醐天皇を初め禁裡仙洞の御崇敬は淺からず、足利大樹の歸依も厚く、龍源院は畠山義隆に依りて興臨院は同義綱に依りて（前田利家の重修）、瑞峯院は大友義鎭に依りて、聚光院は三好義繼に依りて、黃梅院は小早川隆景に依りて、正受院は蜂屋賴隆に依りて、高桐院は細川忠興に依りて、玉林院は眞瀨正琳に依りて、大光院は豐臣秀俊に依りて金龍院は金森長近に依りて、昌林院は蒲生氏郷、同秀行に依りて、龍光院は黑田長政に依りて、芳春院は前田利長の母芳岩夫人に依りて、瑞源院は水野勝成に依りて、高林院は片桐貞昌（石州）に依りて、寸松庵は佐久間實勝に依りて、孤蓬庵は小堀政一（遠州）に依りて建立せられ、總見院は織田信長菩提の爲に造立せられ、天瑞寺は秀吉が其母大政所の爲に建立し、三玄院は淺野幸長、森蘭丸同忠政を檀越とし、大慈院は大友義鎭の女見

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

性院・信長の姉安養院・村上義明等を檀越とし、龍泉庵は多賀高忠の子孫を檀越とするが如く、足利氏より織豊二氏を經て德川氏まで諸武家の大德寺を信仰し後援したものは少くなかつたのである。大德寺の燒香場は劇に講談に秀吉得意の境場であつた。

以上の塔頭の外に存在してゐたものは、雲山德禪寺。開祖は徹翁で當寺塔頭の第一位と呼ばる。次に如意庵は言外宗忠和尚の創むる所で、後奈良帝の塔所。大用庵は養叟宗頤和尚及養叟和尚の開創で、松源院は春浦宗熙和尚の創めた所であつた。眞珠庵は一休禪師の塔所で、宗臨祖溪和尚の新建するもの、養德院は實傳宗眞和尚の塔所、大仙院は古岳宗旦和尚の塔所、清泉寺は實傳和尚の中興するところ、梅岩庵は天祐和尚の塔所見性庵は萬江和尚の塔所、常樂庵は古溪和尚の造る所で、後に大岸和尚が再興したものである。此等の諸塔頭の襖畫は東山桃山及江戸初期の畫家に依つて描かれてあつた。舊記の述ぶるところに依ると、周文・相阿彌・小栗宗湛・同宗栗・曾我蛇足・長谷川等伯・狩野元信・同之信・同永德・同直信・同探幽・同永眞・同洞雲・同洞春・同興意・同安信・同益信・同常信・同永納・同周信・雲谷等顏・同等益等を其の重なるものとしてゐる。京都の諸寺刹には多くの諸名畫の襖を有してゐるものが少くないが、大德寺ほど多いものは稀れであらう。しかも之は單に襖繪のみであつて其他の書畫幅は此中に算して居らぬ。

利休は曾て其木像を金毛閣上に置いて太閤の怒を買つたと云ふ説である。事實はどうかは確かでないが、其木像なるものは今に猶存してゐる。茶氣滿々たる利休のことであるから、案外こんな人騒しをやつて見たかも知れぬ。一休もこんな徒らはやり兼ねぬ人物だが、一休には利休のやうた衒氣がないから、こゝまではゆかぬ。まして機鋒穎脱するから、云ひぬけもちやんと心得てゐる。一休と利休とは段も違へば人間も違ふ。假りに一休がやつたとしたら、太閤も怒りはすまい。一休には太閤に一目も二目も置かせる資格もあれば禪機もある。利休になると、增上慢の鼻持ならぬ所があつて、茶に隱れて欲ばる技術も心得てゐる。茶人とは云ふもの丶、商人根性もあり、政治家氣質もあつた。太閤に好かれたのも此にあつたが、悪まれたのも亦此にある。それでも流石に氣骨稜々たる所のあつたのは、彼が其怒りを全うしなかつた所以である。

一休は佛に隱れ利休は茶に隱れたが、周文・相阿彌・蛇足等は畫に隱れて、遺業を後代に傳へてゐる。同じく皆當代文化史の一面を語つてゐるものである。大德寺は此等文化の結晶したもので、博物館の陳列棚とは違つて、土地や建築や林泉の生き

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た文化史の背景をもつてゐるところに、大なる興味と教訓とがある

四

小栗宗湛の書蹟は甚だ乏しい。乏しいわけである。東山殿の御用繪師で、御止筆になつてゐたものだ。蔭凉軒日錄の寛正四年六月十五日の條に、「雲澤軒障子圖畫の事、宗湛に命ずべきのこと、仰出さるゝなり、上命の外寫するべからざるの由以前仰出さるゝなり、仍りて上命を以て免許せらる、尤も恩榮の至なり」とある。將軍(東山殿)御成の時、其宿坊では先づ將軍の許可を得て御座所の障子に宗湛の畫圖を請ふほどであつた。石山寺參詣の折に、將軍の宿坊なる岩坊では將軍允許の上で宗湛が其障子に描いてゐる。又飯尾肥前守第に臨んだ時も宗湛は之に圖してゐる。即ち寛正六年十月十日の條に、「來る十七日、石山御參詣、御宿坊は即ち岩坊なり、御座敷障子の畫は宗湛の手を借るべきの由、飯尾左衛門大夫之を申す、即ち殿中に參り、伊勢七郎右衛門尉を以て之を伺ふに、御免許の由仰出さるゝなり即ち宗湛を召して之を命ず」、文正元年二月二十三日の條に、「飯尾肥前守の所へ、來る廿五日御成、仍りて御座の間は、宗湛上座之を圖す、往いて之を見るに、華麗莊嚴の由之を披露す且らく御一笑なり」とあるものは之れである。支那では餘り大した評もないが、宋の釋法常は水墨淡の道釋人物・山水・花鳥を畫いて秀潤な氣韻の高いものを作つた。法常は即ち牧谿である。牧谿の畫は東山時代に非常に珍重せられたもので東山御物中に多く其畫幅があるばかりでなく、蔭凉軒日錄の處々には牧谿畫に就いての記事が散見してゐる。文明十八年正月十八日の條、同十九年正月廿四日の條、同月晦日の條、同年二月三日の條、長享二年五月八日の條の如きは其例である。これほど大切にされ。これほど愛玩された牧谿の牧の字を取りて宗湛は自牧庵の號を得たのである。寛正四年二月六日の條に「畫師宗湛なる僧あり、愚老に就いて菴號を求む、仍りて名けて自牧と曰ふ、夫れ如何、紫野の養叟の弟子となり、禪を荷擔し、又畫を能くす、故に牧牛或は牧溪和尚の牧を取りて自牧と名くるの由之を披露す、即ち御感あり即ち宗湛に語る、拜屈して寵光となすなり」と見えてゐる。宗湛先生ひどく重ぜられたもんだ。

東山殿義政は藝術好きであつただけ、繪の鑑賞に就いては一隻眼を備へてゐた。此義政が宗湛を恩寵して特別なる御用繪師として、御止筆としてゐたのであるから、宗湛は當代第一であつたらう。正に前に周文あり後に宗湛ありと云ふべきである。宗湛の俸給は周文の例に從ひて廿貫文と定めたと云ふことである

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るから、先人の周文と肩を比べたのである。然るに周文がもてはやされるのに、宗湛が後世にそれほど云はれないのは、御止筆の爲に眞蹟が乏し過ぎるからである。多過ぎるのはよくないが、少な過ぎるのも決して名聲價格の爲に得策ではない。雪舟が十四萬圓で、周文が四萬圓と云ふやうな變な相場なのは、必ずしも雪舟が畫名を擅にしてゐたばかりではなく、雪舟は相當に眞蹟のあるのに、周文は傳周文が多くて、確たる眞蹟が甚だ乏しいと云ふのも一つの原因であらう。宗湛になると、殆んど紛はしいものばかりのやうな氣がする。蔭凉軒日錄延德二年十月廿四日の條に、「曉來、九峯と北房と來る、商人あり畫軸を賣る。白牧翁の筆する所なり江山の畫なり。二老と予と三人、其讃詩を寫して軸を返す」とあるほど、死後幾くもないのに、同時代の、しかも知人に貴ばれてゐた。延德二年は多分宗湛死後のことであらう。蔭凉軒日錄は文正元年九月以後、文明十六年四月までの記事を闕き、其後にも闕文が多いから、宗湛死沒の年月は不明であるが、文明十五年六月以前のことであらうと思はれる。ゆゑ如何にとなれば、京華集に依ると、文明十五年六月二十七日、東山の慈照寺へ義政は移つて、狩野正信に瀟湘八景の圖を障子に描かせたのである。若し宗湛が存世なれば、無論宗湛が描くべきに、宗湛でなくして、新人の狩野正信が一世一代の晴れの技を揮したのは、もう宗湛が此時に死沒してゐたからである。

慈照寺の障子畫を新人の正信が描いたことに就いて、本朝畫史は其推薦者を雪舟であると斷言してゐる。雪舟が明から歸つて泉州の堺に宿したところが、其家に花鳥の屛風畫があつた。雪舟は之を見て、此畫は誰が描いたのだへと尋ねると、主人はさればでござる、公方家の御家來に狩野大炊助と云ふ方がござらつしやいまして、小栗宗湛先生の御門弟であるとの御話、これは其方の畫にございます。むう中々旨いものだと雪舟老は感服の體であつた。やがて歸洛すると、公方家から、東山の新殿は宗湛畫く筈であつたが、死去致したから、其方仕れとの沙汰があつた。雪舟謹んで言上するには、御近侍の中に狩野大炊助と申すものが居りますが、畫が達者でございます、又御殿の畫は坊主の畫くは恐れ多いことでございますから、大炊助に御命じ下さらばよろしからうと存じますと云ふ。おうそりや初耳だ、わしは知らなかつたよと、そこで正信に命ぜられたと云ふ。

ところが此話はどうも解し兼ねる點が多い。第一に御殿の障子は果して出家の描くべきものでなからうか。周文・宗湛はいづれも出家であつたが、ともに御殿に描いてゐた。假りに之は雪舟の假托として見ても、畫に明るい東山殿がそれまで正信を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

知らぬゝ可笑いし、よしや雪舟の推薦はあつたにしろ、技倆を面のあたり見ない正信に新殿描圖の責任を命ずるのも變である次に不審に堪へぬのは、雪舟は歸朝して、果していつ頃近畿地方を巡錫したのか。雪舟の歸朝は文明元年で、正信推薦は文明十五年に近い頃であつたらうが、其頃雪舟は上洛したものであらうかどうか。九州周防あたりに留錫してゐた雪舟は果して近畿地方に來たことがあつたであらうか。之には文献がないから、一切不明である。若し來たことありとすれば、ほんの僅かのことであつたらうが、蔭凉軒日錄は此頃の記事を欠いてゐるから、描畫の下命があつたかどうかは分らない。しかしどうも雪舟は實際來たらしくないやうに思はれる。雪舟が明に在りて淸見寺の景を描いたが、そこに五重塔を書き添へた、然るに歸朝後淸見寺を實見して、塔のないのを知り、自ら勸進して塔を建立したと云ふ傳説がある。此圖は二本描いて、一本は日本へ持歸つたと云ふことで、今細川侯の所藏に一幅あるが、もとは妙心寺にあつたものだと云ふ説もある。如何にも此圖を見ると、左に五重塔が畫かれてあるが、歸朝後の建立説は信ずべきであらうか。雪舟は入明以前に東國邊へ出かけたことは事實であるが、歸朝後は斷じて東國へ行かなかつた。否東國のみではない近畿地方へも巡歴しなかつたであらうと思はれる。雪舟は應仁元年に入明して文明元年に歸朝してゐるが、此入明の歳であつた應仁元年は應仁大亂の初めで、文明元年頃は汗馬洛中の東西に馳せ違ふ光景であつた。文明五年は大亂の發頭人たる山名宗全細川勝元は相ついで死んだが、結んだ兵はまだ解けずに文明九年に至つたのである。雪舟が京都に歸らずに豐後に留り周防に留つたのも、到底歸洛の非なるを悟つたからであらう。若し歸洛したとすれば、文明十年以後文明十五年までの間であらうが、洛中洛外は大概焦土となり、寄る邊もないところにわざ／＼歸つたであらうかどうか。寧ろ豐後の大開圖畫樓・周防の雲谷庵に優遊し、折々其附近を巡錫して、もてはやされた方がよかつたであらう。公卿文藝の士が多く京を去りて大内氏や今川氏に依つた時代に、わざ／＼荒廢した舊都、野邊の夕煙を見て涙をこぼすやうな感傷的の花洛に歸つたなどとはどうしても思はれぬ。正信を東山殿に推薦したなどは、一種の作話であつたとより受取れない。然らばどうして正信が慈照寺の障子に圖したかと云ふに、正信は宗湛の高弟として既に知られて、東山殿も夙くに其技倆を認めて居られたのであらう。されば障子の圖も宗湛に其沙汰はあつたが、間もなく歿したので、正信をして之を繼がしめたと、斯う解釋して置くのが、一番尤もらしいではないか。畫史畫傳にある挿話は得て斯う云ふ類が多い。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

之に依りて考へて見ても、宗湛の死去は文明十五年に近い以前であつたらう。

宗湛は大德寺塔頭の大用庵禮之間、大壽院、及養德院客殿、中ノ間、同衣鉢ノ間に圖したとある。大用庵は養叟和尚の開創であるから其弟子の宗湛が襖に畫圖を描く因緣はあるし、又養德院は後小河殿と稱せられた養德院殿足利滿詮（將軍義詮の子で、將軍義滿の同母弟）の塔所であるから、御止筆の宗湛が之に描いたのも尤もである。

宗湛はもと足利氏の家臣であつたが、其後僧となつて、相國寺に居たと云ふことだ。しかし在俗中の子があつたと見えて、其子宗栗の名が傳へられてゐる。宗栗は晩年若松小濱から京に歸り、大德寺に寓したと云ふことである。之も宗湛との緣故があつたせいであらう。

宗湛は相國寺にゐたと云ふ。周文も相國寺の僧であつた。宗湛が相國寺に入つたのは、周文の眞弟子であつたがためか、周文の門下とならうが爲に相國寺に入つたのか、どちらかであつたらう。とにかく相國寺は新藝術の發祥地であつた。可翁如拙は源泉に違ひないが、周文の高且つ大があつて、初めて新藝術勃興の氣運は熟したので、周文は新藝術の祖であつた。相國寺に興つた新藝術は一方雪舟に依りて九州に發達し、一方大德寺に跡を留めて、此に天下を席捲するの勢となつた。其後元信に至りては大德寺より更に妙心寺に入つて靈雲院に名畫を留めた藝術史上の大德寺は特筆されるべき價がある。

佛教　術が法隆寺を初め大和の古刹に遺存するのは當然であるが、宋元風の新藝術も畫僧の將來し宣傳したるが爲に洛中洛外の諸寺刹に殘つてゐる。應仁の大亂がなかつたなら、古藝術の名品は非常に數多く現存してゐたであらう。相國寺が新藝術の發祥地たるにかゝはらず、遂に何等の名物もとゞめず、又新藝術開展の功も成し遂げ得なかつたのは、蓋し應仁大亂の渦中に漂ひて、しかも其中心たりしが爲めであつたらう。清淨なる佛地は鎧の袖を片敷いて、一夜の夢を結ぶ處となり、佛殿は血腥い風が習々として吹くばかりか、劫火の炎に包まれたのである。どうして藝術などに悠遊して居ることが出來ようぞ。此點に於て大德寺はよし兵燹に罹つても、久しからずして再建せられ、新藝術の大立物に依りて粉飾せられて、新藝術開展の楔子となつたのである。同じく名禪刹であつたが、新藝術は天龍寺に移植されずに、大德寺に移植された。大德寺が諸家の歸依篤く、幾多の名僧知識を輩出した所以もあらうが、茶道と緣故のあつたことが、大なる原因ではあるまいが。珠光利休以後に於ても、片桐石州は高林菴を再建し、小堀遠州は孤篷庵を造り、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

恐王庵の林泉は蜂村俏軒に依りて作られてゐる。新藝術と茶道との因緣は深い。

當時の藝術は時代精神の發露であつた。五山の叢林は時代精神の出發點であつたから、禪刹に依りて新藝術が發祥し、保護せられ開展されたは、偶然でなかつた。しかし禪刹を打壞し、燒き拂つた文化の破壞者もまた時代精神の表現であつた。德政を呼號するものも、土一揆を起すものも時代精神の表現であつた。一は知識階級の時代精神で、一は無產級の時代精神、いづれも時代精神たりしに於て異らなかつた。此双つの時代精神は其觀に於て甚しく相違せる如くあるが、實は同一のものであつた。古い土佐繪にはもう何等の新味がなかつた。隆能や光長や隆兼信實等が時代の粉飾者であつた其藝術も、末流に於ては微々として振はずなつた。佛畫ももう光彩を失つて來た。人は古きに飽いて、新しきを望んでゐる。禪・宋元の文化・茶の湯は此に新藝術を將來し、此に新しいもの〻樹立となつた。舊藝術が其地位を新藝術に讓つたのは自然の數である。

德政と云ひ土一揆と云ひ、應仁の大亂と云ひ、いづれもそれぞれの原因はあるにしても、其根本の所由は門閥の打破、階級の打破と云ふ社會的運動に歸せねばならぬ。舊社會を破壞して新社會を建設せんとするのが其歸趣であつた。卽ち舊文化を崩潰して新文化を樹立せんとするのが其目的であつたのである。東山殿が茶の湯を喜び、新藝術を玩んだのも舊の打破新の建設であつた。洛中洛外の打壞し、燒き拂ひも舊の打破で、新に進まんとする其道程であつた。觀じ來ると、いづれも時代精神の發露で、唯其當事者の階級が相違してゐたのである。進むべき路は一つであつた。

大德寺は當時の時代精神を見るべき最も好き記念物である。其器蹟其林泉其畫圖は皆一に之を語るものではないか。銀閣寺が茶道興起の記念物で、新文化樹立の遺跡であると同じく、大德寺も亦當時の移り變りを物語るよい遺物であつた。しかし銀閣寺は首腦者の記念物であつたが、大德寺になると、より多くより廣く普及された記念物である。一方を源泉とすると、他は卽ち本流であつた。しかも銀閣寺は唯に東山時代を記念してゐるが、大德寺は東山より織豐二氏・江戸初期を記念してゐる。

大德寺に近く鷹ケ峰の光悅寺がある。之は大德寺に繼いで、新しい文化の新運動を語つてゐる。大德寺と光悅寺との間に今宮がある。

五

今宮は疫神を祀る社である。今では、牛頭天王を勸請すると

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

云ふ。此社に名高いのは夜須禮祭である。疫神を祓ふ祭禮で、三月十日加茂上野の里人が烏帽子を着け素襖やうのものを穿ち太刀をかたげ、羯鼓・鉦鼓をならし、此社を廻りて、やすらひ花よと囃すのである。やすらひ(夜須禮)は休らひであらう。疫神をなだめ鎮めるための催しだと云ふことだ。しかし今宮でより以上に最も珍なのは、あぶり餅である。今も社頭の兩側で賣つてゐる。小さくちぎつた指の先ほどの餅をさゝらのやうになつた串へ一つゞゝ刺して、一所にこんがり焦したのに味噌をつけたものである。元祿以前寛文あたりの香がするもので、一向に旨くはないが、鄙びた原始的の形と味とがあるので、無上に氣に入る。大徳寺の納豆と距離は近いが、納豆のやうに一般的でなくして、特殊的なところが何となく嬉しい。京で保存すべきものゝ一つだと、いつでも思ふ。淺井了意の作と云はれる東海道名所記などを見てゐると、どことなくこのやうな香ひがしてゐる。

慶長寛文と來ると、つい近い所に光悦寺がある。其時代の藝術町であり、又信仰町であつた。禪の大徳寺に對して、法華の光悦寺である。光悦を中心としての藝術町信仰町は大徳寺と別殊の組織ではあつたが、斯う云ふ見地から云ふと、大徳寺も亦一種の藝術町信仰町であつた。光悦寺と大徳寺との共通點は、双方とも茶の湯趣味を共點としてゐるところにある。但し光悦寺の藝術町には吉野太夫の埋玉塚を殘して紅一點の俤があるが、大徳寺は累々たる圓顱のみである。光悦町は納豆の淡素だけではなかつた。寺院藝術であつた東山藝術は桃山に入り、成金藝術となり、光悦町に入りては町人藝術とならうとしてゐる。藝術は叢林殿閣から民間へと逸出した。しかし一切を通じて茶の湯趣味が汪洋として流れてゐる。

茶の湯はもと禪僧のものであり、貴族武家のものであつたが次第に民衆に普遍することゝなつた。茶の湯が普及するとともに新文化は其の波及の範圍を擴大して來た。藝術も之に依りて其領域を加へたのである。大徳寺から光悦寺へと歩を運ぶとき共感を深くする。

茶道は趣味であり、又信仰であつた。其力に依りて興つた藝術や文化は偉大なる權威であつて、獨り當代のみならず、後世まで多く影響する所があつた。小堀遠州以後の茶道を見て、往日の茶道を見ようとするのは大なる錯誤である。茶道に依りて興つた藝術や文化を見れば、往日の茶道なるものゝ力が如何に偉大であつたかを知るに足りよう。納豆やあぶり餅は現代人の口に適すまい。適さないからと云つて、古人の納豆あぶり餅に對する嗜好を笑はうとするのは餘りに淺はかな考ではあるまい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

か。

大德寺の前には依然として納豆の看板がぶら下つてゐる。嚙まば淡素のうちにゆかしい味も出よう。現代人に其妙味が分らないと云つて、納豆の價値は寸毫も減ぜぬ。春風に吹かれながら秋雨に降られながら、青嵐に時雨に、平然として看板は時の過ぐるのを知らぬ顔である。墓には苔も生へようが、納豆は日々に新しく作られる。過去の香と味とを持ちながら、今日も明日も、來年も又再來年も。

層雲峽より大雪山へ

大町桂月

一 層雲峽の偉觀

富士山に登つて、山嶽の高さを誇れ。大雪山に登つて、山嶽の大さを誇れ。

大雪山は北海道の中央に磅礴して、七八里四方の地盤を占め頂上の偉大なること、天下に比なく、群峯攢つて天を刺し、旭川の市街を壓す。最高峯は海拔七千五百五十八尺、啻に北海道の十國島に冠たるのみならず、九州になく、四國になく、中國になく、近畿になく、奥羽になし。信濃を中心とする諸高山には劣るも、緯度高きを以て、山上の草木風物は、信濃附近の一方尺以上の高山と匹敵する也。

路伴れは田所碧洋とて、鐡骨稜々たる快男兒、旭川市を根據として嚮導を求めしに、成田嘉助氏といふ豪の者を得たり。植木を業とせるが、年來盆栽になるべき珍木を巖壁の間に求めなとて、數日の糧を齎らし、唯一枚の油紙を雨具とし、鉈の外には、何も利器を持たずして、單身熊の巢窟に入り、險を踏み、危を冒して、偃松の中に眠り、大雪山は言ふに及ばず、化雲嶽を窮め、忠別嶽を窮め、戸村牛嶽を窮め、石狩嶽を窮め、硫黄嶽を窮め、十勝嶽を窮めて、北海道の中央に連亙せる高山には足跡到らぬ隈もなし。今一人と求めしに、前川義三郎氏とて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

豆腐屋を業とせるが、山登りが好きなれば、人夫賃を雇賃に充てゝ、豆腐を製造する人を雇ひ、喜び勇んで、我が人夫となれり

旭川中學校より天幕を借り、數日の米を用意して、旭川驛を發し、比布驛に下りて徒歩するに、路は眞直にして、その盡くる所を知らず。家は見えずして、きり〴〵すの聲左右に滿つ。下愛別に至れば、小市街を成す。三人の幼兒の乘りたる箱車を牽く犬もあり。石狩川の水を引ける堀割の傍に宿屋ありけるが、小熊を鐵鎖にて木に繋げり。大人も小兒も打寄りて見物す。その小熊ぐる〳〵廻りて、時々ちゆう〳〵と掌を甞む。熊は大熊とても、何となく可愛らしくして、獅虎の如くに猛獸とは見えず。小熊はなほ更可愛らしく見ゆ。この小熊の行末は動物園の檻に入れらるゝか、それとも撲殺せらるゝか、いづれにしても人に捕へられたる以上は、もがいても、あせつても、泣いても、叫んでも、熊としての天分を全うする能はざるべしと、本人の小熊は知らざるべきが、人から見れば憐れ也。人とても、無形の鎖に繋がれて、もがきあせり、泣き、叫ぶは、なほ一層憐れなりとて、暫し見物す。目には小熊を見、心には人を見る也。中愛別に午食して、留邊志部の旅店に投ず。人家四五十相接し物賣る店もありて、附近に農家散在す。石狩川平原の中を貫き大雪山の數峯前に當る。石狩川は下流に石狩平原を有し、中流に旭川平原を有し、上流に留邊志部平原を有す。留邊志部平原が、石狩川の有する最後の平原にして、これより、いよ〳〵山の中也。比布より下愛別へ三里、下愛別より中愛別へ一里半、中愛別より留邊志部へ三里半、今日は八里の路を歩けり。

眞勳別に至って、山の根に取りつき、層雲別に至りて、いよ〳〵層雲峽に入る。魚槍を肩にし、創口より血なほ滴れる鱒を提げたる男、霧の中より露はれ來る。堀立小屋に醉うて歌ふものあり。舊土人なりと云へり。石狩川は名たゝる大河、中流にて神居山脈を貫き、上流にて大雪山の腰を貫く。いづれも貫くに急湍を以てせずして、平流を以てす。神居山脈を貫く處に神居古潭あり。大雪山の腰を貫く處、即ち層雲峽也。神居古潭は北海道の勝地として世に知られたるが、深さの非凡なる外には格別の風致もなし。層雲峽は未だ世に知られざるが、天下の絶勝也。石狩川こゝにて凡そ五里の間、高さは二千尺、低きも千尺を下らざる絶壁に挾まる。川の幅は、三四十間より漸次狭くなりて、終に十間内外となる。水は淺くして、殆んど背なし。石狩川も神居古潭あたりは濁れり。旭川あたりも澄まず。層雲峽に至りては、澄みて底石數ふべし。兩岸の絶壁は、相迫ること、始めは十町内外、五六町となり、一二町となり、終に十間

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

内外となる。その絶壁の頂は一様に平かなるに非ず。巌峯の連續にして、支溪をり〱單調を破る。その巌峯は流紋岩にして、柱狀の節理を成す。奇怪と云ひても盡さず。靈妙と云ひても盡さず。唯これ鬼神が天上に樓閣を造れるかと思はるゝばかり也。

　その鬼神の樓閣に迎へられ、送られ、近く石狩川の清流に接して、青葉茂れる木下路を行く心持。嗚呼何にか譬へむ。加藤温泉とて、思ひがけずも、一軒の家あるに、如何なる泉質かと鼻にて先づ知りしが、手を入れて、硫黄泉なるを確めぬ。もとは、幾んど直立せる巌壁を横絶したりけむ、今は丸木橋にて渡りて、間もなく、鹽谷温泉に投ず。五里の層雲峡中、人家あるは、加藤温泉と鹽谷温泉との二軒のみ也。他にあらば、原始的の粗末なる家なるべきも、こゝにては仙家也。熊の皮に迎へられて、爐火に對し、一杯の酒を飲めば、身既に仙化す。温泉は鹽類泉にや、硫黄の氣の鼻を衝かぬも、病なき身の疲を醫するには、いとうれし。このあたりは河原廣く、且つ長く、川の中に巨大なる蓬萊巌ありて、二つの丸木橋にて、彼岸に達すべく巌頭に立てば、大雪山の數峯の頂も見えて、川を見上げ、見下す風致も、浮世のものならざる也。

　明くれば一行の外、温泉の若主人鹽谷忠氏、畫家青積長谷氏加はりて、層雲峡を溯る。峯上に奇巌多し。巨巌の上部に小巌立ちて、恰も人の子供を負へるが如きもあり。人の立てるが如きもあり。鉾の如きもあり。これは〱と足を進むるに、一峯直立して、高さは二千尺もあらむ。峯の正面は流紋岩の長柱を連ね、その長柱は峯の兩側面に及ぶ。余巌峯を見ること多けれども、斯ばかり不可思議なる巌峯を見たることなし。驚歎して、腰を石におろし、煙草呑みても、物足らず、一杯を傾けて、山靈に謝す。嗚呼これ山か。山ならば神劍鬼斧の奥手を盡したる也。昨日層雲峡に入りて、鬼神の樓閣かと思ひしも、今日より見れば、まだほんの鬼神の門戸なりし也。

　昨日は鬼神の門戸を鬼神の樓閣と思ひしが、今日は始めて鬼神の樓閣を見たり。その鬼神の樓閣一下して、墻壁となるかと思はれしが、又崛起して樓閣を起し、二長瀑を挂く。右なるは三百尺、左なるは五百尺もやあらむ。南畫も描いて、こゝまでには到らずと、又も一杯を山靈に捧ぐ。その樓閣の石柱續きて、盡くる所を知らず。余は見物しつゝ行き、二人の人夫は魚を釣りつゝ行く。時には遅れ、時には先んず。大箱とて、左右の石柱の絶壁、相距ること、ほゞ一町ばかりとなれる處に至り、釣り得たるやまべを下物として、上戸は飲み、下戸は從す。

　二人の人夫は望むがまゝに待たして置きて、なほ釣らしめ、

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

進んで小箱といふ處に至る。さても造化は變化を極めたるもの哉。石狩川も小箱に至りては、幅僅に十間、兩崖の高さは三四丈に減ぜるが、依然として石柱の連續也。石理殊に明瞭也。水は音なくして、緩かに流る。徒渉して左岸に移り、石柱の下をつたふ。いよ〳〵鬼神の樓閣の室に入りたる也。右崖一缺したる處に、飛泉懸りて仙樂を奏し、一峽呼應す。更に材木巖の奇少なしとせざれども、天上に樓閣を造り、谷底に幽室を造ることは、層雲峽の外には求むべからず。大箱の長さは二十町、小箱の長さは十町、小箱の盡くる處、一大淵を成す。左岸はつたふべからず。徒渉して右岸に移る。淵の上は、二流となる。右は稍大にして本流也。左は稍小にして支流也。海よりこゝに到るまで、百里にも餘らむ。石狩川こゝにて始めて小溪流となれり。鹽谷溫泉は五里の層雲峽の中央にあり。鹽谷溫泉までは細徑ありて、右岸に通ず。鹽谷溫泉より上は徑なくして、唯「やまべ」釣りの踏みたる跡、右岸にあり。その跡も時々絕えて、岸邊の石を飛び〳〵に歩かざるべからず。鹽谷溫泉までの巖峯だけにても、天下の絕景なるが、これなほ鬼神の門戶にして、溫泉からが樓閣也。その小箱に至るまでの神秘的光景は、耶馬溪になく、昇仙峽になく、妙義山になく、金剛山になし。天下無双也。層雲峽を窮めたる者にして、始めて巖峯の奇を説くべき也。

歸路、藤助氏は溪中にて、死したる鱒を拾ひ上げしが、食ひても旨からずとて棄つ。魚の中にて、能く急斜面の溪流を登り得て、最も深く最も高く山に入るものは、此鱒のみ也。その鱒は清溪に生れて、荒海に出で、もとの清溪に戻りて交尾し終れば雄直に死し、雌も間もなく死す。鱒にありては、戀愛即ち死滅也。

往復僅か五六里と油斷して、戾りは宿の提燈に迎へられぬ。鹽谷氏は年少氣鋭、歩くこと飛ぶに似たり。誤つて深淵に落ちけるが、水泳を心得居るを以て、着物を濡らせしだけに止まりたりき。山に登らむ者は、水泳を心得ざるべからずとは、余の常に説く所なるが、今鹽谷氏の例を實見して、益余の言の人を誤らざるを知れり。

二　大雪山の第一夜

層雲峽は石狩川の有する一大偉觀なるが、その鬼神の樓閣と思はるゝ巖峯は、大雪山の腰なれば、大雪山の有する一大偉觀のなりと云ひても可也。

鬼神の樓閣を下より眺めたるのみにては、普通遊覽の域也。山水に徹底せむには、その樓閣の上に登りて、大雪山の頂を窮

めざるべからず。然るに鹽谷溫泉の人々とても、こゝより登りたることなし。さすがの嘉助氏もこゝよりは登らず。よし〳〵、樓閣の割れ目の澤を登らば、登られぬことなしと見當を付け、昨日の一行に、榊原與七郎氏といふ測量家と人夫とが加はりて將に發せむとせしに、水姓吉藏氏飄然として來る。留邊志部小學校の校長なるが、幾度も登攀して大雪山を我庭園の如くに思へり。余が大雪山の登攀を企つと聞き、嘉助氏といふ豪の者を伴へりとは思ひもかけず、或は目的を遂すること能はざるべきかと危ぶみ、自から進んで嚮導とならむとする也。余好意を謝して其容貌を見るに、魁偉にして筋骨逞しく、磊落にして豪傑肌なる快男兒也。いよ〳〵心強く覺ゆ。氏とても鹽谷溫泉より登りたることなきが、どの澤でも登らば登らるべしとて、余等と同じ考へ也。

鹽谷溫泉より數町下りて、左の澤に入り込む。はじめの程は小さき平流なりしが、間もなく溪壁迫りて、翠屏を立てたるやうになり、瀑布連續す。水姓氏は四五貫の荷物を負へるに、危險なる處に至れば、先んじて登攀して、後より來る者を引き上ぐ。余一行に尾す。急がずして餘力を存し、且つ靜かに風景を味ふ也。一瀑を登りしに、又一瀑あり。其間の溪流の中に、孤巖頭を出し、その巖尖に一蛇とぐろを卷く。在來多く蛇を見たれども、そのとぐろを卷けるを見るは、これが始めて也。珍らしと見入りて、憐れに思ひぬ。この蛇活きては居るが、半死までの樣子となりて、その身もいたく痩せたり。思ふに翠屏の壑中に陷りて、出るに出られず、食ふに物なく、弱り果てゝ力なき身を溪流の中の膚寸の地に托するものなるべし。空しく死を待つよりは、今一度活路を求めて見よとて、杖にてとぐろを解きて、下の瀑に落しぬ。

溪流二つに分れて、右は狹けれども、水量多く、左は廣けれども、水量少なく、傾斜急也。余心の中に右溪を取らざるべからずと思ひながらも、一行の左溪を取れるに尾して行くに、果して絶壁に行きつまる。ともかくも午食して右溪に下り、瀑〃瀑を攀ぢ登りしに、終に十餘丈の大瀑に行きつまる。これは見事と見とれしが、攀づべくもあらざれば、引きかへし、右崖を攀ぢて峯稜を行く。根曲り竹の藪を三時間もかゝりて潜り拔け、偃松帶に取付きて、ほつと一と息つく。時計を見れば、午後四時十五分也。そろ〳〵野宿の用意を爲さゞるべからず。上り〳〵て、果して水を得るや否や。數町下に水ある處ありき。上らむか、下らむかと、問ひて見たるに、誰れも下ることを肯んぜず。水姓氏右手の直徑二十町とも見ゆるあたりに、雪田あるを見出し、今夜はあの雪田に水を得て野宿せむといふ。一同

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

發成す。水姓氏先んじて、數町ばかり行きしに、水あり／＼と喜聲を發す。うれしや、偃松の林裂けて、幅十間長さ四十間ばかりの小池あり。蛙の子の棲めるを見て、毒水にあらざるを知る。偃松の餘したる處、一面の御花畑也。苔桃、麝香蘭、岩梅、ちんぐるま草、栂櫻、岩鏡、千島龍膽など生ひて、池中の巖石にも及べり。偃松の中は、數百千年の落葉つもり／＼て、厚さ三四尺に達し、之を踏むに、恰も彈機の如し。山上の寒さは擧ぐる火に消えたり。鍋の飯も出來たり。下戸は先づ食ふ。上戸は醉うて陶然たり。十九夜の月出づ。火炎高く昇れるが、火炎の中に數十條の赤線直上し、其末火花となりて、半天に四散し、下界の烟火などには見られざる壯觀を呈するに、酒益味を加ふ。天幕は張らずに敷きて、一同其上に臥す。焚ける火が一同の掛布團也。

三　大雪山の第二夜

鹽谷溫泉の連中は、日歸りの出來るぐらゐに思ひて、食物も十分に用意せず、草鞋も代りを持たず。さしあたり草鞋を作らざるべからずとて、材料を求むるに、綱、繩などのみにても間に合はず、我一行より不用なる手拭、風呂敷などを與へたるに、嘉助氏と溫泉の人夫とが、四足の草鞋を作れり。いさとて

偃松帶を上る。根曲り竹ならば、押分け／＼て上らるべし。偃松は押分くること能はず。手にて其枝を攫み、足にて其枝を踏みて、斜に上るの外なし。上るに從つて、偃松小さくなり、傾斜緩なる處に至りて、低く地に偃す。其上を踏みて行くを得べし。うれしや、偃松を踏みて行くを得るやうになれば、頂上は遠からざる也。四面の眺望も開けたり。屏雲峽の樓閣脚底に落ちて、留邊志部平原も見ゆ。偃松いつしか盡きて、こゝに黒嶽の一峯の上に立てり。さても大雪山の頂上の廣きこと哉。南の凌雲嶽、東の赤嶽、北の黒嶽の主峯など、ほんの少しばかり突起するだけにて、見渡す限り波狀を爲せる平原也。その平原は一面の砂石にして、處々に御花畑あるのみにて、月を遮るものなきのみならず、足を遮るものもなし。少し下り、凌雲嶽を右にして行くに、お花畑連續す。千島龍膽は紫也。雪間草は白也。小櫻草は紅也。兎菊は黄也。梅鉢草、岩桔梗、四葉鹽釜など一面に生ひて、足を入るゝに忍びざる心地す。石原の處には、駒草孤生す。淸麗にして可憐なる哉。これが高山植物の女王なるべしと云へば、水姓氏頷づき、嘉助氏も頷づく。廣義の高山植物は樹木をも含めるが、狹義の高山植物は草花也。その草花の長さ一二寸、大なるも四五寸を出でず。その割に花は大にして、その色の鮮麗なること、底下界の花に見るべくもあらず。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

余は大雪山に登りて、先づ頂上の偉大なるに驚き、次ぎに高山植物の豊富なるに驚きぬ。大雪山は實に天上の神苑也。

大雪山群峯の盟主とも云ふべき北鎮嶽の頂に達して、更に驚きぬ。周圍三里ばかりの噴火口を控へたり。その噴火口は波狀の平原に連れるが、摺鉢の如くには深く陷らず、大皿の如くにて、大雪山の頂上は南北三里、東西二里もあるべく、その周圍には北鎮嶽、凌雲嶽、黒嶽、赤嶽、白雲嶽、熊ヶ嶽、など聳起し、南に連りて旭嶽孤立す。南に少し離れて忠別嶽あり、化雲嶽あり、その末一段高まりて戸村牛嶽となる。その奥右に十勝嶽あり、左に石狩嶽あり。北は天鹽北見界の峻峯群起して我れと高さを競はむとす。氣澄まば、旭川も見ゆべく、北海道の東部に雄視せる阿寒嶽も見ゆべく、西部に雄視せる羊蹄山も見ゆべく、日本海も見ゆべく、太平洋も見ゆべし。飲める口の水姓氏には酒を分ち、飲めぬ口の鹽谷氏には氷砂糖を分ちて、一行二分す。旭川よりの四人は殘り、層雲峡よりの五人は下れり。

殘れる四人も北鎮嶽に殘らむとするに非ず。南に下りて、雲の平を行く。この雲の平のみを以てするも、數十萬人を立たしめて、なほ餘あるべし。白雲嶽を目ざして行く程に、濃霧襲ひ來りて、日も暮れむとす。濃霧稍解けたる方角に雪田あるを見たれば、下りて其雪田に就く。微雨至りければ、天幕を張る。

火を熾にすれば、雨にも消えざるもの也。今夜も焚火に山上の寒さを忘れたるが、天幕に雨を避くることゝて、焚火を掛布團とすることは出來ず。九人が四人に減じて、何となく寂し。殊に我等は天幕を有すれども、温泉の連中は天幕を有せず。下りとは云へ、路もなき天下の至險なれば、下ること却つて上るよりも難く、昨日にぎやかに野宿せしあたりにて、雨に濡れながら夜を明かすなるべしとて、心落付かず。心配しても仕方なしと思ひながらも、なほ心配せしが、終に疲れて眠れり。

四　大雪山の第三夜

昨日は他所事と思ひしに、今日は我等も一足分の草鞋が缺乏しさう也。綱は以て草鞋の緒とすべきが、綿になるものは、温泉の連中に與へ盡したり。思案するまでもなく、余は六尺褌を解く。我もとて、嘉助氏も六尺褌を解く。碧洋と義三郎氏とは解かうとせず。西洋人の眞似して、猿股を着け居れるなるべし、猿股にては、緊褌一番といふことも出來ず。緒に處して、何の役にも立たずと、氣焰を吐けど、二氏は何とも云はず、唯二褌を比べ見て、にや〱笑ふ。余の褌は新しくして白く、嘉助氏の褌は古くして黒き也。

砂の急斜面を登りて、火口丘に達し、幾度か上下して火口丘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

をつたひ、兜獄とて、巖のみの重なり合へる峯に突き當り、右折して火口丘を下る。お花畑の連續にて、傾斜も緩也。蝦夷はこよもぎあり。大雪山中こゝのみに生ず。白龍膽あり。これもこゝのみに生ずと、嘉助氏云へり。駒草もこのあたりに多し。白雲嶽に取り付けば、これも巖ばかりの山也、刀の刄に似たる頂上をつたひ／＼て、最高處に至る。この嶽は大雪山の東南端に位して、外側に火口を有す。その火口は十數町四方、底平らかになりて、一面の御花畑也。大雪山こゝに一頓して忠別嶽に連り、その先に化雲嶽の臥し、又その先に戸村牛嶽起つ。戸村牛嶽の左に石狩嶽樹を帶び、その右に硫黄嶽煙を噴く。眼を西に轉ずれば、旭巖と北鎭嶽とが近く相對峙す。在來の書物には旭嶽よりも北鎭嶽を高しとせるが、距離は旭嶽が遠しと思はるゝに、我が目には北鎭嶽よりも高く見ゆ。陸地測量部のこのあたりの五萬分圖は未だ世に發行するに至らざるが、測量は既に終れり。その測量を聞き合せて、余の見る所の誤つて居らざるを知れり。旭嶽は七千五百五十八尺、北鎭嶽は七千四百十尺、旭嶽の方が十五丈も高き也。ついでに附近の諸嶽の高さを記さむに、我立てる白雲嶽が第三位にて、七千三百五十七尺、戸村牛嶽が七千六十五尺、凌雲嶽が七千三十二尺、赤嶽が六千八百五十七尺、石狩嶽が六千五百七十三尺、黑嶽が六千五百四十九尺、忠別嶽が六千三百四十九尺也。

下つて御花畑に逍遙せしに、微雨至る。去らむとすれば來る。もとの路を取りて、昨夜野宿せし跡を左に見下し、前に見し北鎭嶽を左にし、終に後にして、雲の平を南に下れば、熊ケ嶽斷起して、十町四方の火口を控へたり。風を巖陰に避けて午食し更に南に下れば、大雪山一頓しかけて、旭嶽を起す。二峯となりて、東なるは低く、西なるは高し。雪田を踏み、砂礫を攀ぢて、二峯の中間に達し、東峯を後にして、西峯を攀づ。砂の斜面急也。五六歩毎に立ち留まりて、五つ六つ息をつく。山に登るに急げば、苦しくして、疲れ易く、持久力を失ひ、風景も目に入らず。さればとて、度々腰を卸しては、路あまりに捗らず疲れ切つては、休息しても、元氣を恢復すること難し。疲れぬ前に、一寸立ち留まるだけにして、息を大きく吐き、腰を卸さずに、徐々として登れば、苦しきこともなく、疲れもせず、持久力を失はずして、風景を味ふことを得べし。口に氷砂糖を含まば、なほ一層元氣を失はざるべし、立ち留まること百回にも及びたりけむ。頂上に達して、始めて腰を卸す。頂上は尖れり。西面裂けて、底より數條の煙を噴く。世にも痛快なる山かな。大雪山の西南端に孤立して、圓錐形を成し、峯容大雪山の中に異彩を放つ。眺望も北鎭嶽と相伯仲す。こゝにては大雪山の頂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の大なることを見る能はざるが、南より西へかけての一帶の臺地に、姿見の池を始めとし、多くの小湖の散在せるを見るを得べき也。

南に下り、姿見の池を右にして、溪谷の中に入る。天地は椴松と白樺とに封ぜられたり。溪即ち路也。水、足を沒す。膝までには及ばず。岩石あれば、岩石より岩石へと足を移す。澤蟹が居りさうなりとて、嘉助氏石を取りのけしに、果して居りたり。一同傚ひて、行く／＼之を捕ふ。大さ一寸乃至二寸、身は蝦にて、螯だけが蟹也。この夜、溪畔に天幕を張り、之を煮て食ふ。旨しとは思はざるが、ともかくも余には初物也。天麩羅にすれば旨しと、嘉助氏云へり。午前二時目覺む。雨の音を聞く。ことく／＼と鍋の動く音をも聞く。雨が動かすに非ず。風が動かすにも非ず。熊にや、狐にや、狸にや。嘉助氏咳して、目覺めて居る樣子なれば、問ひて見たるに、木鼠なりと云へり。うと／＼して、三時半目を開きしに、樹影天幕に映れり。うれしや、雨止みて、月出でたる也。

次の日も溪の中を行くに、溪の幅次第に廣く、水次第に多し。幣の瀧を下り、二三十人を立たしむべき磐石の上に立ちて、瀧を見上ぐ。十丈もあらむ。飛沫日光に映じて、虹を現はす。瀑の左に直立せる絶壁の面に穴多く、岩燕出入して、虹の中に舞へり。溪ます／＼廣し。虎杖人より高く、蕗も人より高し。をり／＼川鳥きゝと鳴きて、水面を掠む。雀を二倍したる位の大さにて、羽の色黑し。この鳥陸上に食を得る能はず。さればとて、水搔なければ、水にも浮べず。木にとまらずして、巖にとまり、橫に溪上を飛び、魚を見ては、水中にもぐり込む也。二見の瀑を下りて顧れば、二段になりて、上段は一丈、下段は三丈もあらむ。幣の瀧より低けれども、水量多くして、勢壯也。

凡そ四時間にして、溪中を出でたり。蝦夷松の林開けて、瓢沼、瓢の形を成す。毛氈苔一面に生ひて、石を踏み盡したる足の快さ言はむ方なし。岸に近く、浮草にすがりて、一羽の蜻蜓の尾を水面に上下するを見る。卵を生むにや。試に杖にて追ひて見たるに、逃げむともせず。子孫の爲めに、己れの命を顧みざる也。

天神峠に至りて見下せば、絶壁直立すること、千尺にも餘れり。之を下るかと思へば、心自ら悸きしが、熊笹や灌木を攫みて、後向きになれば、下られざるにもあらず。半頃より左に近く羽衣の瀧を見る。下りて見上ぐれば、高い哉、八十丈と稱す。直下せずして、曲折するが、日光の華嚴瀧よりは遙に高き也。この瀧の水、落ちて間もなく、忠別川に入る。川に沿ひ、數町下りて、松山溫泉に投す。忠別峽中の一軒屋也。こゝより旭川

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

までは、一日の行程也。幾度も忠別川を徒渉せざるべからざるが、ともかくも道路あり。旭川まで歩かずとも、美瑛驛に至れば、汽車の便ある也。松山溫泉より旭嶽に登るには、人の踏み付けたる跡あるのみにて、道路なく、大部分は溪水の中を歩かざるべからず。天神峠の嶮さへあり。されど、鹽谷溫泉より登るに比ぶれば、遙に平易也。每年大雪山に登るもの百人內外、忠別川を溯りて松山溫泉に一宿し、次の日姿見の池の畔に野宿し、その次の日旭嶽に登るだけにて、引返して松山溫泉に再宿するなりと、嘉助氏云へり。それだけにては、大雪山の頂上の偉大なることも判らず、御花畑の豐富なることも判らざる也。羽衣瀧も壯觀なるが、他に共比なしとせず。層雲峽の絕景に比すべくもあらず。鹽谷溫泉の連中は、旭嶽と羽衣瀧とを閑却したるが、その代り層雲峽と北鎭嶽とを窮めたり。この方が旭嶽と羽衣瀧とを窮むる者よりは、要領を得たりと云ふべし。されど旭、北鎭、白雲の三嶽に登らずんば、大雪山の頂を窮めたりとは云ふべからず。羽衣瀧も閑却すべからず。若しも層雲峽を閑却するならば、これ大雪の一半を見ざる也。

在來大雪山に登るものは往復四日を費したるに、余は共二倍の日數を費したりしかば、思ひがけずも、北海タイムスに、行方不明となれりと傳へられたり。旭川の有志、明日は搜索隊を出さむと騒げり。出張の途次、余を訪ひたる甥の政利も、其際に加はらむとせり。余無事に旭川に戻りて、甥は愁眉を開き、有志も安心せり。然るに余の郷里の新聞に轉載し、なほ筆を舞はして、多年登山に慣れたる人なれども、猿も木より落つといふこともあれば、氣遣はるゝなりと付け加へたり。余に同腹の兄妹四人あり。二兄一姉死して、一姉なほ郷里に存す。之を見て大に驚き、打電して東京の家族に問ひ合はす、家族も驚きて、北海道の知人に打電せしが、家族は余の平生の登山振りを知り且つ余に關する新聞の虛報に慣れて居れば、姉ほどには驚かず。この頃相知りたる北龍村の西島清太氏も驚き、わざ／＼札幌に出でゝ、卜者に見て貰ひしに、安全なりとの報を得たるも、なほ未だ全く心を安んぜざりき。一片の虛報は、四方八方に心配を惹き起せり。されど、眞の事實世に卦ぜられて、余が月並の遊覽者に非ずして、登山に熱心にして徹底することが、世に明かになり、到る處、余を歡迎するの度を加へ、登山に便宜を得ること多く、禍轉じて福となりける也。(終)

有島さんと波多野さんの記念の爲めに

瀧田哲太郎

○

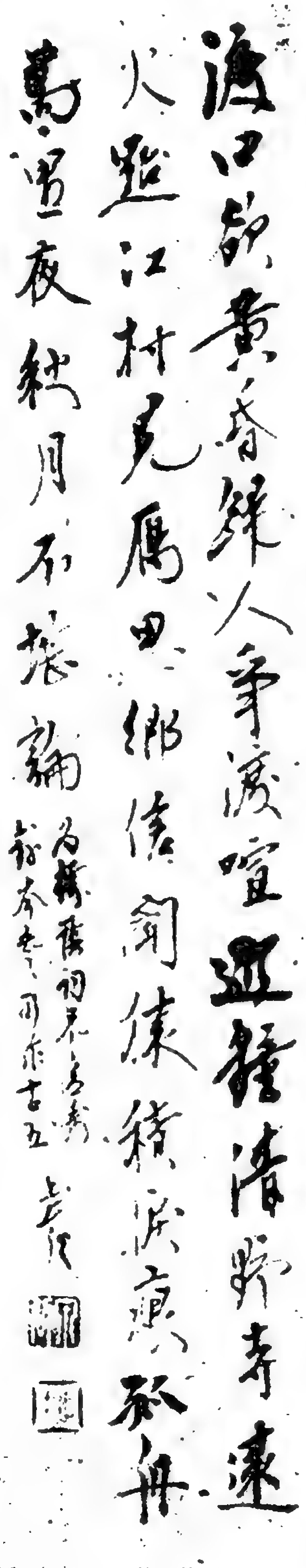
差出しの日附が五月廿九日となつてゐるから、多分翌三十日であつたらう。其朝十時頃に、社の使の者が、「中央公論」夏季増刊號の校正の爲めに、牛込市ケ谷の秀英舍に行つて居つた僕に、他の郵便物と一所に、社宛てにして僕に出された有島武郎氏からの可なり厚味のある封書を屆けて與れた。何心なく開いて見ると、中には有島さんの書かれた、筆蹟の極めて立派な、唐紙の半折が入つてゐあつた。他の記者諸君も、僕の眺めて居る其半折の周圍に集つて「旨いなア」と讃歎して居つた。半折に書かれた文句は、

渡口欲黃昏　歸人爭渡喧　近鐘淸野寺　遠火點江村　見鴈思鄕信　聞猿積淚痕　孤舟萬里夜　秋月不堪論　爲樗蔭詞兄之淸囑　錄岑參所作古五　武郎

と云ふのであつた。（第一圖參照）そしてそれには他に手紙が添へてあつた。手紙の文句は、

瀧田樗蔭様

いつかお話のあつたのをいゝ事にして紙を汚がしたのをお目にかけます。あなたが私のいたづら書きをほめて下さるとあ



第一圖

（有島武郎氏筆蹟）

なたの方の波多野さんに遇つた時聞いたのでいゝ氣になつた次第です。

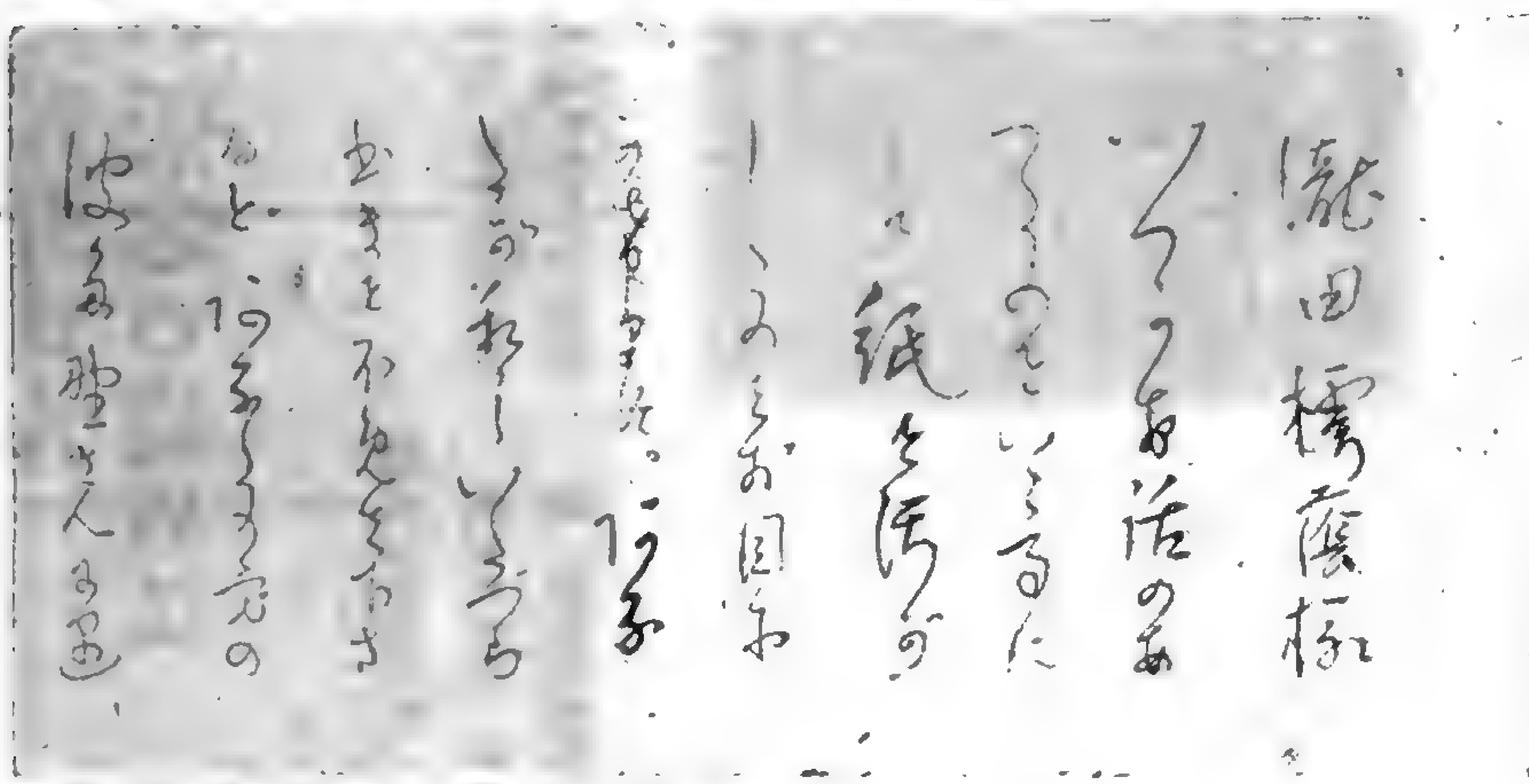
五月廿九日

有島武郎

と云ふのであつた。(第二圖參照)

○

僕は此時一寸變に思はぬではなかつた。有島さんと社との間には、頻繁にと云ふ程ではなくとも、月に一度や二度の交渉はあつたし、又近時波多野さんが屢々出入される機會があつたやうに想像されたから、何にも郵送でなくともよいやうな氣は一寸したのであつた。然し僕の悅びは疑ひに打ち勝つた。僕は直ちにヘガキで、筆蹟の美事なる事、早速表裝をして御禮旁々箱書に伺ふべき旨などを申し送つた。「あんまりよく出來たから嬉しくて直ぐに送つたのだらう」と云ふやうな氣も心の片隅に起つたので、郵送の理由を深く疑はなかつたやうにも思はれる。



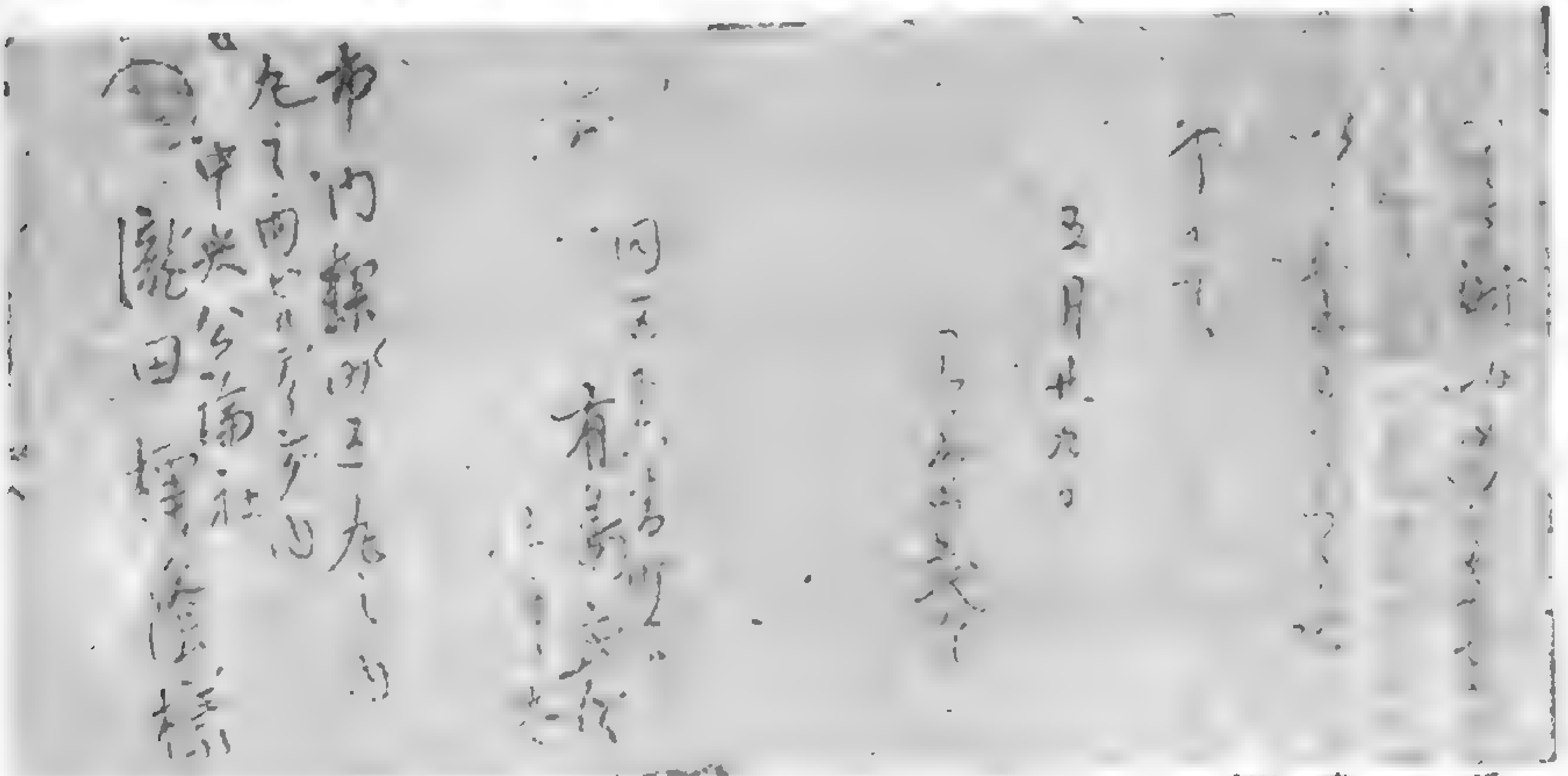
第二圖（有島武郎）

○

波多野さんが、高島米峰氏の紹介で、中央公論社に入社され、「婦人公論」の記者となられたのは大正七年のことで確か春の初め――三月中旬頃――であつたらうと思ふ。當時社は本郷西片町の本社長麻田さんの邸内にあつて、門を入つた右側の二階建の洋館がそれであつた。其頃は「中央公論」も「婦人公論」も同じ二階の間で編輯し、階下は應接間になつて居た。僕が波多野さんを最初に見たのは、階下の其應接間に、後ろ向きか横向きかになつて、たつた一人で座つてゐる姿であつた。僕はそれを門を入つた建物の外の舗道から見た。多分波多野さんが、初御目見得として社に來られたのだらうと思ふ。顏は見えなかつたが、姿丈けでも美人らしい感じを與へた。それから間もなく、麻田さんの紹介があつたやうに思ふ。僕は誰にもやる僕のいつもの流儀

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で、極く無遠慮に、平氣に何かべら〳〵饒舌つたやうな氣がする。波多野さんは僕より一廻り下の午年の生れで、當時廿五歳であつた。近づいてよく見ると、顏にうつすらと雀斑の見えるのと、一體が少し嚴丈に出來てゐて、柔か味と圓味に乏しいやうな感じのするのが、缺點といへば缺點であつたけれど、背は高く、肉附も程よく、血色もよく、殊に眼が大きく活々と輝き、顏の輪廓や鼻の形などは希臘型で、何處から見ても先づ言ひ分のない美人と云つてよかつた。身の扮裝もキチンと調つて、華美に流れず、地味に失せず、其好みは誰にでも好い感じを與へるに十分であつた。起居動作も日本の女としてはハキ〳〵した方で、書いたものなどには潑剌とした才氣が溢れてゐた。可なりの素養もあり、才氣もあるのに、前に云つたやうな容貌と服裝だから、波多野さんを見た人は誰でも「素敵な美人だ」「なか〳〵美い女だ」といはぬものはな


五月廿六日
有島武郎
中央公論社
瀧田樗陰様

（氏の書簡）

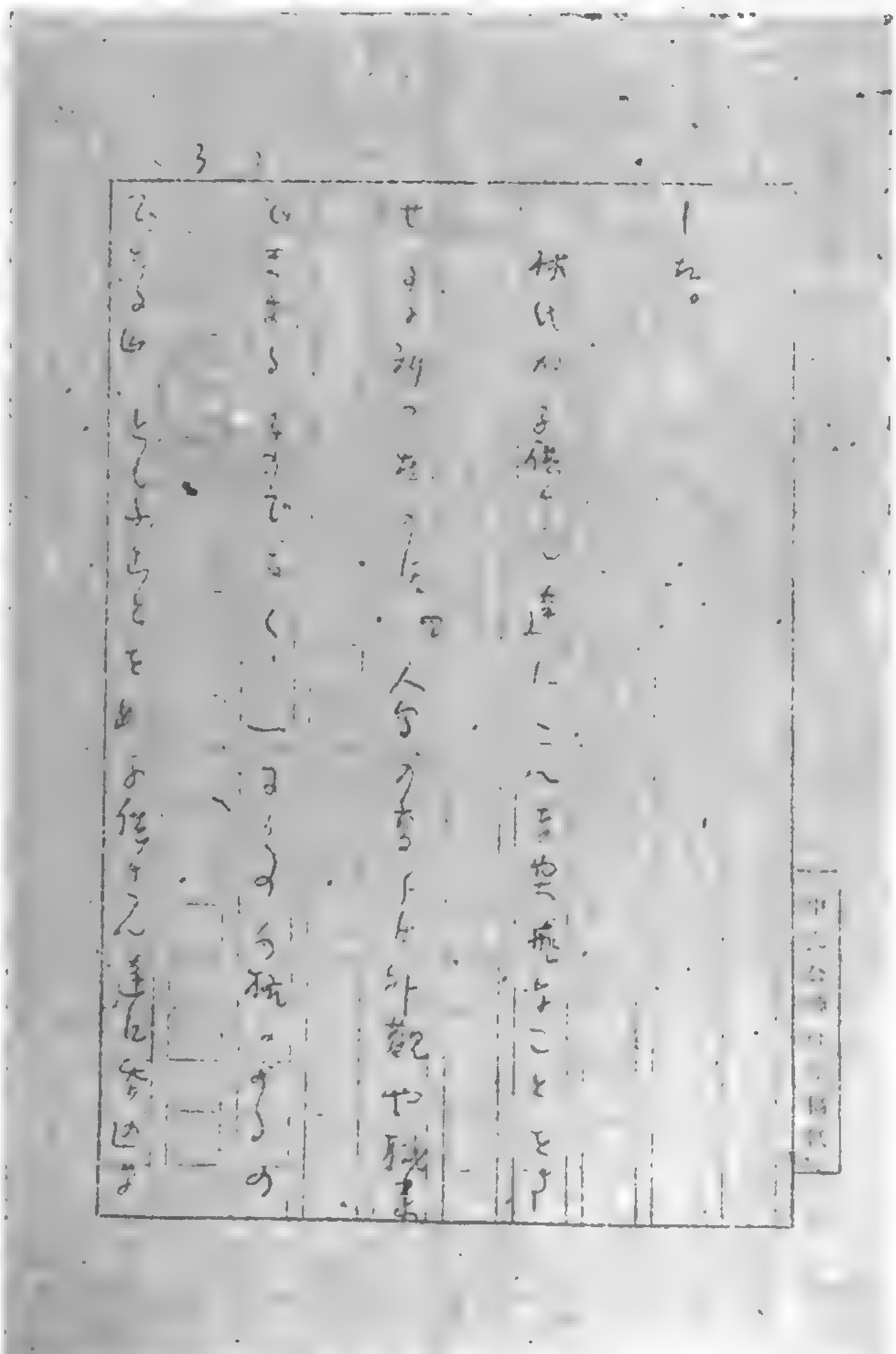
かつたやうである。殊に波多野さんは遠見の引つ立つ人で、一所にカフエーなどに入ると、五つ六つ隔てたテーブルのあたりから「シヤンだなア」などゝ云ふ、醉つぱらつた學生の聲がよく聞こえたものだ。街上を歩いてゐる波多野さんと擦れ違つて、振り返らぬ男も女も殆んど無かつたやうである。芝居や角力に一所に行つても、隨分遠方の方から双眼鏡を差し向けてゐるのを見かけた。如何に波多野さんの美貌が人目を惹いたかと云ふ、興味ある一つの例を語るならば、曾て上山珊瑚、畑中蓼波などが、有樂座で、チエーホフの「アンクル・ワニヤ」を演じた時である。僕等の社の連中は、南側の一階のボックスに陣取つて、波多野さんは確か僕と並んで座つてゐた。一幕が濟むと、故岩野泡鳴氏は土間の椅子席からズカ〳〵とやつて來て、椅子席の最左端の通行路の所に立ちはだかり、僕等のボツ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

クスに首さし伸べ、僕の顔に顔近附けて「瀧田君、君の隣りにゐる別嬪は誰だ。何と云ふんだ。」と畳みかけて訊くのであつた。僕が、僕の方の婦人公論の記者で波多野と云ふ人だと云ふ事を答へると、「君、僕のとこの「十日會」へ入れて呉れ給へ」と短兵急に要求するのであつた。先生は内證で僕に耳打ちした積りらしいが、持ち前への高聲だから、波多野さんに聞こえぬ筈もなかつた。「アレが岩野泡鳴さんです」と云つて先生の後ろ姿を指して笑つたことがあつた。これなどは岩野氏の生一本な愛嬌振りを發揮する一面に、波多野さんが、何處に行つても人目に立つ美貌の持主であつたことを證明する事柄だと思ふ。

〇

その頃僕等はよく飲み食ひをして歩き廻つた時代なので、波多野さんをもよく引つ張り廻したものだ。「婦人公論」を刊行してから一二の婦人記者の居たこともあるし、又女事務員などもゐた事もあるけれど、皆我々の興味を惹くやうなものではなかつた。そこで波多野さんの入社された事は、我々にとつて一つの事件に相違なかつた。それによい事には、波多野さんは酒の趣味を解してゐた。強いといふ程ではないが一合位は飲めた。ビールも飲めた。殊にビコンと云ふ



第　圖　（波多野秋子氏の原稿）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

食前に飲む、飲むと身體全體が氣持よく醉つて、腰のあたりに一種のだるさを感じるあのビコンと云ふのを好んで飲んだ。本郷の燕樂軒などに行くと乾度ビコンを飲んだものだ。醉ふと波多野さんも、頬のあたりを赧くし、眼を潤るまして、男の僞善や輕薄を憎むやうな口吻を洩らしてゐた。

○

波多野さんが入社されて間もなく、即ち大正七年の四月の花の頃、小雨のしと／＼と降る夕方、社員の四五人と、上野の櫻を見てから、不忍の池の中の笑福亭に飲んで、水を亙つて來る「時の鐘」を聞きながら頸縊りの話をした事や、自動車に乘つて荒川堤まで花見に出かけ、歸路に大勢の人の中を分けて進む自動車に反感を有たれて、石を抛たれさうになつた事なども思ひ出される。僕等も醉つて自動車の中で、握手したり、調戯半分に波多野さんを「八方美人主義」などゝ評したら、波多野さんは「私も男の中に交つて仕事をするんですから、みなさんから少しでもよく思はれたいと思つて、努めてやつてゐることを、惡口をいふなんてひどい」と涙を落された事もあつた。

○

それから何ケ月か後に、「婦人公論」の編輯は二階。「中央公論」の編輯は階下と云ふ風に、編輯所が階上と階下とに分れたので、顏を合せて話し合ふ機會も少くなり、それに、人間の神經は美にも醜にも馴れ易く、長く連れ添へば美人の妻君も美人と見えず、醜い夫も醜いと感じなくなると同じ理窟で、波多野さんの美貌も我々に對するチャーミングな力を時と共に多少減じたものと見え、波多野さんを引つ張り廻して飲み歩くといふやうな事も次第／＼に少くなり、此二三年は、社の會や何かの外に、個人的に飲み合つたといふやうな事は殆んど無かつた。それに年齡のせいもあらう。波多野さんの容貌も此頃はいくらか素枯れて、雀斑も目立ち、身體も肉の厚味を減じて少し骨ぽつたく見え、殊に昨年あたりからは一層に元氣無く、何か病氣にでも取り憑かれたのぢやないか知らんと云ふやうな氣さへされた。

併し波多野さんは美人であると云ふ一般の評判はなか／＼衰へず、「婦人公論には素敵な美人がゐるさうですネ」とか、「波多野とかいふあなたの方の婦人記者は大した評判ですネ」とかいふやうな事はよく聞かされた。現に今年の初め、芥川龍之介氏を訪問した時も「婦人公論の島中君に宣傳して下さい。他の人には波多野と云ふ別嬪がよく原稿を頼みに行くさうですが、僕の所へは一度もよこさないのは怪しからんですな。今度から他の人が來ても書かないといつて下さい。」と笑ひながらいはれた程だつた。此事が實現されて「婦人公論」三月號の「猿蟹合

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

戰」は波多野さんが行つて芥川氏に賴み、芥川氏も快く寄稿されたのだとも云ふ事だ。それからつひ四月の初め田山花袋氏を訪問した時も、「君の方の波多野といふ人は非常な評判だが君はどう思ふ」と云ふお話なので、僕は前に書いたやうな事を答へると、氏は「僕の家内などは大した褒め方で、あの位の女は一寸他にないやうに云つて居るよ」といふやうなお話であつた。（因に一寸附け加へて置くが、其時氏は島崎君とか有島君とか云ふやうな境遇にゐる人は、一人の異性に熱愛を注ぐ代りに、周圍に集つて來る大勢の異性によつて淋しさを慰められて居るんだネと云ふやうなお話があつた。僕も面白い觀察だと思つてゐたが、今になつて見れば、少くも有島さんの場合には當らなかつたと云はざるを得ない。）

○

波多野さんについて思ひ出す事、從つて書いて置きたい事は、之で盡きたのではない。併しそれを書く前に、茲で一寸波多野さんの夫君たる波多野春房氏の事について、僕の感想を述べて置きたい。何となれば、波多野さんが今度死を決せられた事を、一つの物理的現象として觀るならば、春房氏と云ふ今迄波多野さんの行動を支配してゐた一つの引力と、有島さんと云ふ新たに出現した他の一つの引力との間に挾まれた波多野さんが、遂に舊き引力から身を振り切つて、新しき引力に合體されたと云ふ事になるのであるから、舊き引力の何物たるかを知らずしては、到底今回の事件の正確なる判斷は出來ないからである。之は恰度太陽の引力と地球の引力とを究めずしては、其二つの牽引作用によつて、地球の周圍を運行する月の軌道を知ることが出來ぬのと同じやうな事である。

○

波多野春房氏と僕が最初に逢つたのは、波多野さんが中央公論社に入られて間もない時の事だから、矢張り大正七年の春の終り頃であつたらうと思はれる。新聞の報ずる所に依れば、春房氏は波多野さんより一周り上の午年、つまり僕と同じ年の今年四十二歳とあるから、（人によつては四十三才とも或は四十五才とも云つて居るが）當時は三十七歳であつた譯だ。背のすらりと高い、色の蒼い程白い、一體の顏立や鼻や口元のきりゝと締つた、殊に縁無しの鼻眼鏡で兩眼頭を鼻柱の處に引き挾められた眼は寧ろ凄い程鋭く、善く云へば當代稀に觀るの美男子、惡るく云へば五月の市村座で演つた羽左衞門の民谷伊右衞門と云つたやうな色惡らしい所もないではなかつた。そうして僕に向つて最初に云はれた言葉は「どうぞ秋子を可愛いがつてやつて下さいナ」といふのであつて、其調子には同性に向つて放た

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れたと云ふよりは、異性に向つて媚を求むると云ふやうな響があつた。その時僕の心には、甚だ卑しい想像ではあるけれど、「此人は自分の×××××、××××××××××××××××性質の人だらう」と云ふ風の事が感じられた。其後、此人は烏峰と云ふ雅號の持主で、筆も立つて著述などもあり、殊に英語に堪能で、印度人を初め、其近隣の亞細亞人を相手にする英文の印刷物などを出して居る事、マホメット教信者にして「一錢の持ち合せがなくとも、世界中を楽々と旅行し得るものはマホメット教信者丈けだ」といつて居る事、外務省あたりにも出入して、一部の東洋人から外交通と思はれてゐる事などが、波多野さんや其他の人の口から聞かされた事がある。又××××からは「曾て人の××××××××××××事がある」と聞かされたこともある。波多野さんが醉へば、男の僞善や輕薄を憎むやうな口吻を洩らすと云ふ事を先きに書いたが、其中には無論春房氏を指して居るやうな事も感じられたし、殊に「宗教家程僞善なものはない。私は宗教家は大嫌ひ!」と云ふことは餘程强調して云つて居られた。

○

其後春房氏とお目に懸つたのは、昨年の秋上野精養軒に於ける本社長麻田さんの長女壽子さんの結婚披露宴の時と、今度波多野さんの遺骨を弔すべく、七月九日朝府下高圓寺のお宅に伺つた時との二回に過ぎないから、氏の性格、閲歷、行動等については固より深く知る所は無い。二三の新聞には、氏は有名な色魔で、其毒爪に罹つた婦人はあらゆる階級に亘つて數多くあるとか、今も尙淺草邊の活動女優と關係があるとか、僕の最初の想像に幾層もの輪をかけたやうな記事が載せられたけれども、固より其眞僞は明かでない。只氏も波多野さんと同じく、寄る年波には敵はぬものと見え、最初にお逢ひした頃に比べては、隨分と男がわるくなり、昨年の秋などには一寸人違ひぢやないかと思はるゝ程瑞々しさを失ひ、今度お宅でお目にかゝつた時などは、顏色が神經的に蒼くなり、眼に險を有つて、異性を惹き附ける力も甚だ乏しくなつたやうに見受けられた。

○

波多野さんが春房氏と一所になられたのは、春房氏から英語を敎はつてゐる中に出來たのだと云ふやうな事は前から聞いてゐたけれど、春房氏は其前に已に夫人のあつたのを離縁して波多野さんを迎へたと云ふ事などは、今度新聞によつて初めて知つた事だ。又波多野さんが、林さんと云ふ實業家の子である事、而かも其人のお妾の子であると云ふ事も夙うから聞いてゐたけれど、其お妾と云ふのは、新吉と云ふ有名な新橋藝者であつた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事、而かもなか〳〵心立ての立派な、男と娘の爲めに一身を犧牲にして、男と別れて尼の如き生涯を送り、娘を藝者にはせまじと萬事を捨てゝ娘の教育に熱中した名妓とも賢婦とも稱すべきエライ人であつた事なども、今度初めて新聞で知つたのである。之は僕が、人の素性や經歴を根掘り葉掘り訊くことの嫌ひな爲めでもあらうが、波多野さんも、自分の良人の身の上や、自分の生ひ立ちなどを餘り人に知られたくない爲めに何にも話されなかつた爲めでもあらうと思はれる。

（）

たつた三回しか面談した事のない春房氏の人物や性行については、素より語るべき多くのものを持ち合はさないし、又多く語る必要も無い。僕の云はんと欲する所は。波多野さんの良人は、頗る附の美男子でありながら、人格や行動の上に於て、波多野さんとソリが合はぬ所あり、波多野さんは精神上に於て、夫君に對する十分の敬愛の念を有つて居られぬやうに見受けられたと云ふ一點である。尤も波多野さんの遺書には「十二年間愛しぬいて下すつた」とか、「私一人の爲めに活きて居る彼」とか、「貴方をたつた一人ぼつちにして行くのが可哀想で」とか、「私はどうしても波多野を忘れません、それで居て私は武郎を捨てるとは出來ないので御座います」とか云ふ言葉ばかりで、夫君に對する反感や侮蔑の念の微見える字句の絶無なのを見れば、僕の觀察が全然違つて居るやうに思はるゝ讀者もあるだらうけれども、之は僕の解釋によれば、女はどうも死ぬ間際までも男のやうに赤裸々になれぬ爲めに、自分の弱點を世間に曝らすことが出來ぬ、殊に波多野さんのやうに名譽心の強い人は、自分が永い間不滿な家庭生活を送つたと云ふ事を人に知らしたくないといふのが半分の理由で、他の半分の理由は、彼の近松翁の「鑓の權三重帷子」に於けるが如く「油壺から出す樣な男、しんとんとろりと見とれる男、どうでも權三は好い男」の「伊達者」の權三と一所に死に行く十二年上のおさゐでさへも。妻敵打の夫一之進に出逢つた時に「なふ懐しや」と走り寄る所を見れば、今はの際には、永年連れ添うた夫に對しては、其厭やな方面は大抵掩ひ隱されて、美しき懐しき思ひ出の方が多く殘るものと解して置きたい。波多野さんの遺書はどうも波多野さんとしては極めて不出來なもので、いつもの波多野さんの筆と思はれぬ程まづい。あの中で、僕等の參考になるものは．有島さんとの關係が出來てから、二人とも、もうこれ切りで關係を斷たうと言ひ合ひながら、何時か知ら、どつちからともなく誘ひを破つてゐたと云ふ一節丈けで、他はどうも少ししら〳〵しいやうに感ぜられる。また「國民新聞」に石川六郎氏によつて公け

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にされた五六年前の波多野さんの手紙を見れば、春房氏との結婚は戀からではないとか、春房氏をば父のやうに思ふけれどもお互に戀は感じませんとか云つてゐるが、之は春房氏への遺書にある「十二年を愛しぬいて」（記者曰く尤も戀しぬいてとは書いてないが）といふ字句とも矛盾する。要するに最後の波多野さんはいろ〳〵の心痛から身心共に疲れ切つてもゐたらうし、又僕の想像するやうな二つの原因が不知不識の間に自己判斷の鏡を曇らしたものと見るのが本當ぢやなからうかと思はれる。

○

波多野さんの事を語つて思はずも長くなつた。僕はこゝで一轉して有島さんの事を語らねばならない。

○

有島さんとの御交際は、大正六年の夏頃からで、波多野さんの社に來られた一年前からであるけれど、いはゞ、文壇人としての有島さんと、中央公論記者としての僕との御交際であつて、私人としては別に深いと云ふ程の關係ではなかつた。隨つて私人的には語るべき多くの材料はないし、公人としては天下の新聞雜誌が殆んどあらゆる方面から記載し評論して居るから、改めて書く必要もなからうし、それに紙數も豫定より餘り長くなり過ぎたから、極く掻い摘んでザッと書き記すに止めて置く。

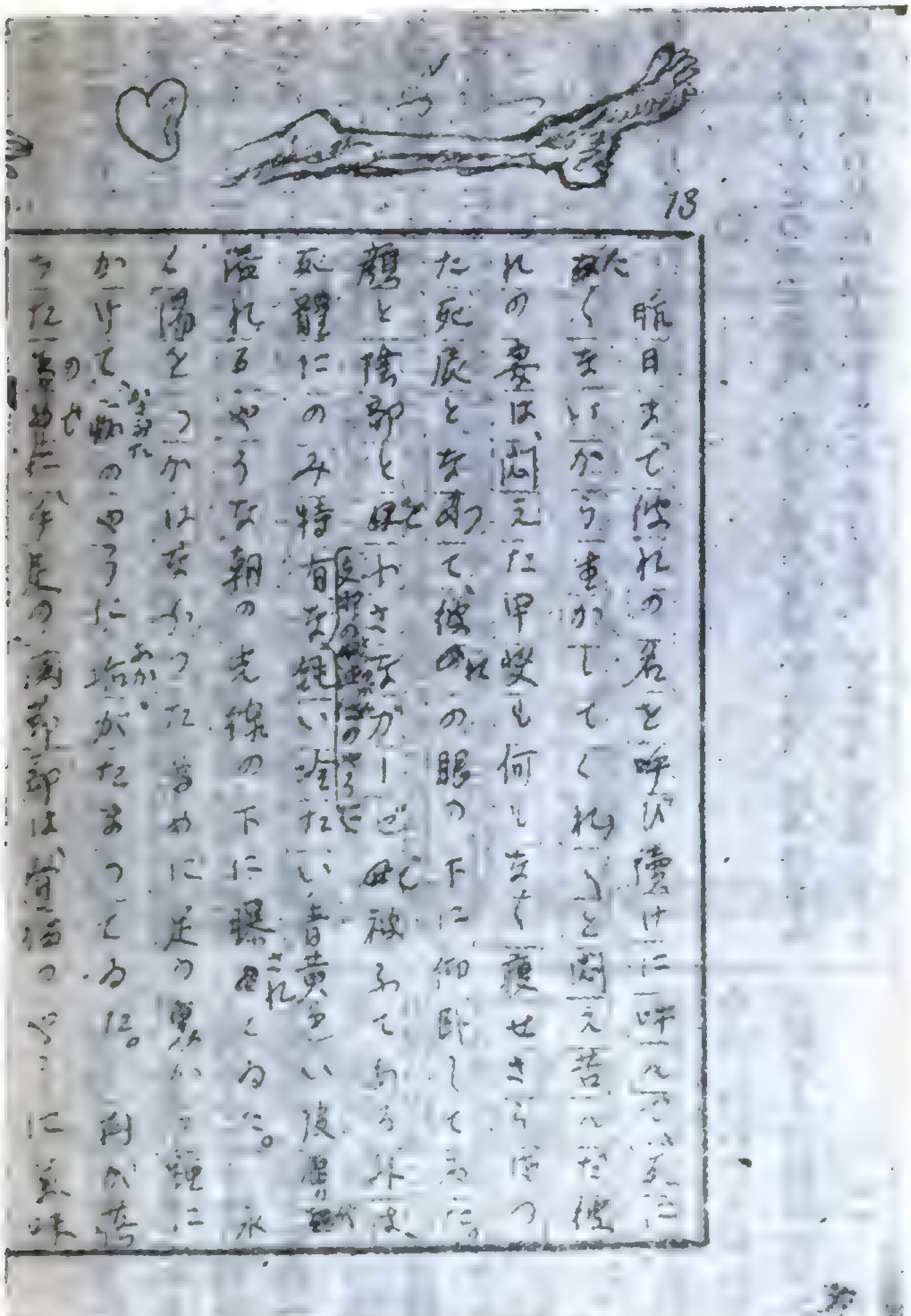
有島さんが僕の方へ書いて下すつたのは、大正六年八月十九日、今度亡くなられた輕井澤の別莊で脫稿せられた「實驗室」と同年十月十九日稻毛に於て脫稿せられた「迷路」と、それから其翌年か翌々年の「動かぬ時計」の三篇の小說と、數篇の隨筆、感想、評論等である。殊に初めの二篇には原稿の所々に其小說の記事に因んだ繪が書いてあつて（多分當時の情景を再現する爲めに書かれたものだらう）而かも其繪が素晴らしく立派で、專門畫家以上にも思はれたので、僕は此二つの原稿を製本して保存して置いた。（第四圖、第五圖、第六圖、第七圖參照）話は一寸岐路に渉るが、有島さんの繪の巧い事を云つた序に、今少し繪の事を話して置きたい。さうしてそれは有島さんと波多野さんの關係の深かつた事の一證にもなるのだから。

○

今年の四月頃波多野さんは罫川紙にペンで書かれた二枚の繪を示して「瀧田さん、此繪はどうです」といはれた。一枚は水仙の繪で、裏に同じくペンで「月闌水仙」と雙鈎體(かごじ)の草書が書いてあり、一枚は豐滿な肢體の五六の裸婦がニンフ風に踊つて居る頗るエロチックなもので、其方は其繪の上にペンで二三本の線を引いて掻き消して居る。何れも實に面白いので、「誰が書

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いたのです」と云ふと、「有島さんです」と答へて「お氣に入つたら上げませう」といはれる。「併しあなた惜しくないんですか」と云ふと「いゝんです」といはれるので、僕は水仙の方を貰ひ、其時一所に居つた「婦人公論」の半澤君は裸婦の方を貰つた。其時僕は「出來るなら有島さんにサインして貰ひたい」と云ふと、波多野さんは「よう御座んすとも」といふやうな口調で、三四日經つと水仙の方には T. Arishima—1923—とサインし、裸婦の方には單に T. A. とサインして返つて來た。その時僕は「波多野さんは隨分有島さんと頻繁に往來してゐる」といふやうな事を感じたけれど、二人の關係は少しも疑つてゐなかつた。其時であつたらう。僕は原稿に書いてある有島さんの繪の巧い事や、書の立派な事を盛んに褒めたのは。最初に揭げた書を僕に郵送して呉れたのも、多分波多野さんから、其話が傳はつて、そして波多野さんは「瀧田さんに書を一つ書いて上げて下さい」と云つたのであらう。二人の心の底には多分僕に對する遺品と云ふやうな氣持があつたゞらうと、今の僕には感得される。



第四圖　(「實驗室」の原稿の一節)

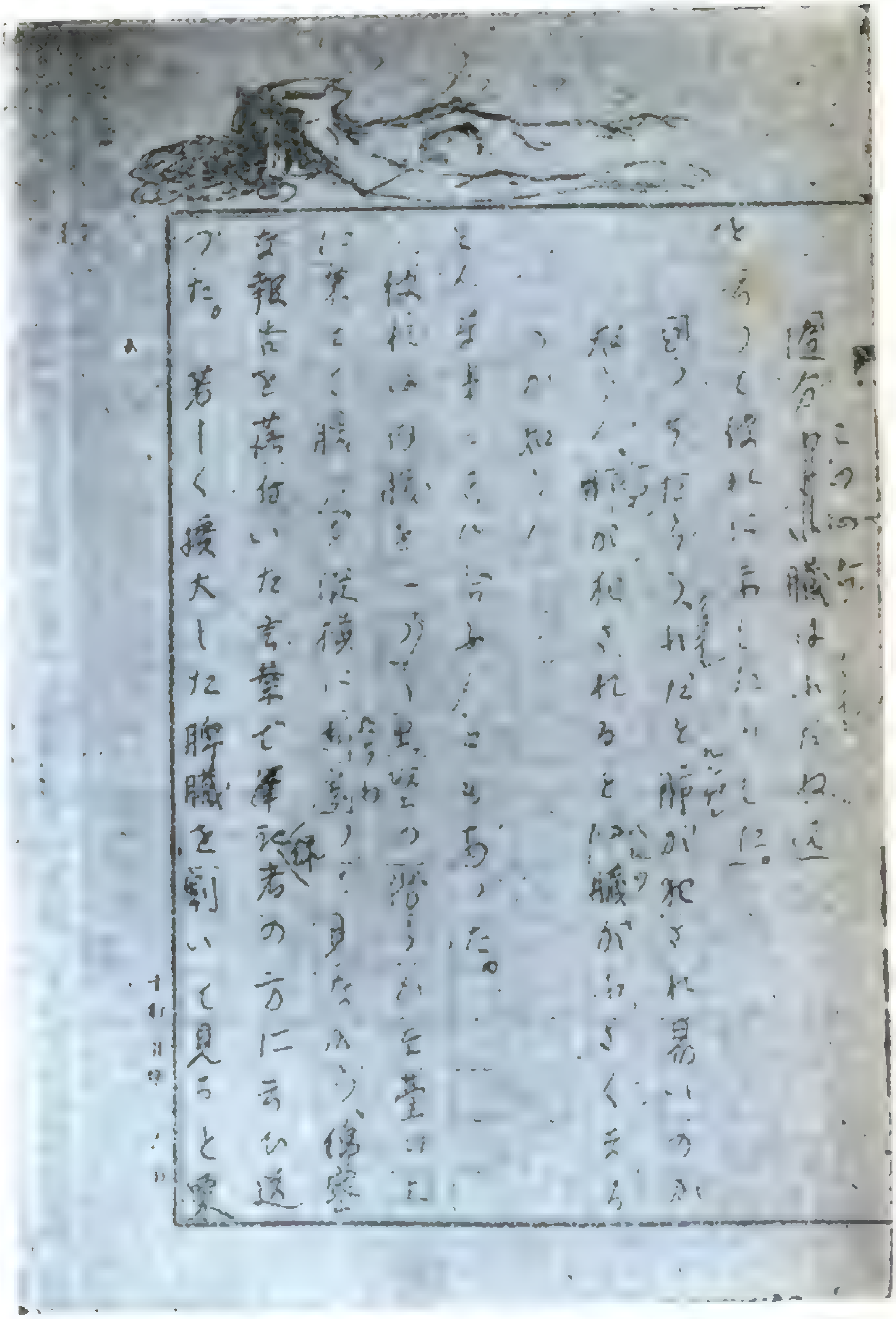
○

有島さんと僕との私人的關係は深くはなかつたけれど、全然無い

と云ふ譯ではない。公人としての有島さんに言及する前に、一寸其事を書き附けて置く。

○

有島さんはよく親切に人の世話をする人なのだから、いろいろな人が原稿を持ち込むのであるが、それをよく有島さんは



第五圖（「實驗室」の原稿の一節）

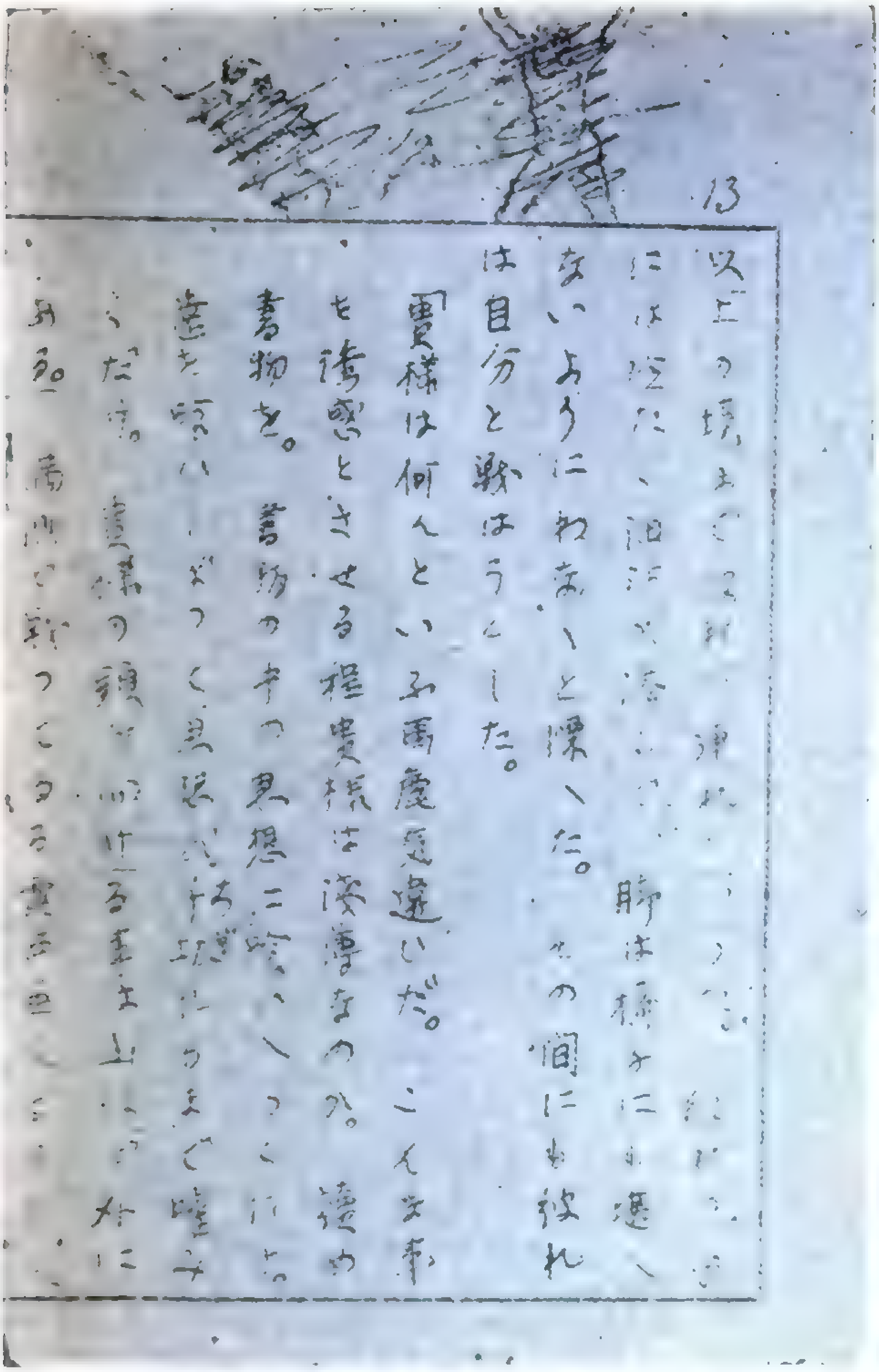
僕の所へも紹介された。有島さんの紹介で以て中央公論に載つた人は、野村愛正、塚原健二郎、大森眠歩の諸氏で、僕の方で載せなかつたのは×××、××××氏等であつたやうに記憶する。又財產拋棄を企てられた頃に、「今此人は金が要るのですが、僕は金の代りに此繪を上げましたから、貴兄が此繪を買つてやつて下されば幸です。私は百圓に買つたのでしたが、原價で願へれば結構です」といふやうな有島さんの手紙と共に、村山槐多氏の松林の油繪を持つて來られた人もあつた。それから有島さん自身僕の家へ來られて「あなたに見て貰ふのが一番だと思つて持つて來ました。こゝは大丈夫でせうか、發賣禁止の虞れはありませんか」といふて、確か「或る女」かの一節の船中で女を強姦する所を示されたこともあつた。それから極く最近――三月十七日に大橋房子さんの洋行さるゝ送別會を帝國

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

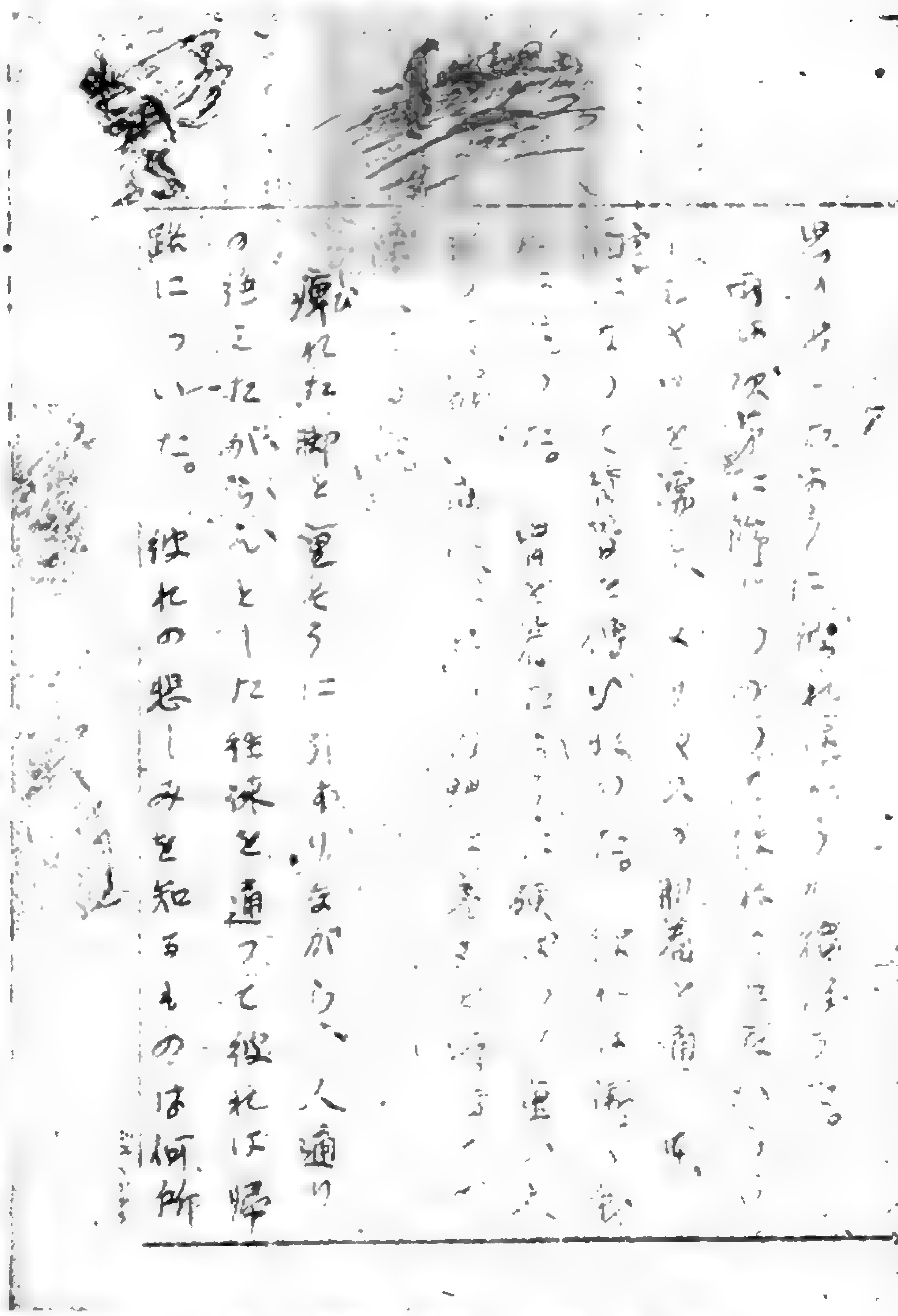
ホテルで開かれた時の印象は、最も鮮かに思ひ出される。

○

昨年の暮からずつと病氣で約百ケ日を家の中に引籠つてゐた僕は、三月上旬になつて初めて、當時本郷三丁目にあつた社に出勤したのであつた。其日に大橋さんは婦人公論の原稿の事で波多野さんを訪ねられたのだが、燕樂軒で御一所に晝飯を喰べることになつた。食後「文壇では誰が一番いゝ男だらう」と云ふ問題が起つて、僕が七分波多野さんが三分饒舌り、大橋さんはいつものように少し俯向加減にして一寸上眼を使つては又眼を伏せ、偶に僕が「貴女は誰が好いと思ひます」などゝ問ひかけても、口の中で低くモグ／＼さするのみでよく聞き取れなかつた。其時の話を綜合すると×××氏はいゝ男だらうけれど、何となく蟲が好かぬとか、××氏は眼は涼しいけれど、丈が低く、それに近來は少し額が脱け上つて來たとか、××氏は少し貧弱過ぎるとか、××氏はこの三四年はひどく醜くなつて、猫背になつて來たとかいふので、文士は一般に評判が惡しく、僕はまア××××氏などがいゝ方だらうと云ふと、波多野さんは「私は文壇の誰れよりも壽三郎（坂東）の方が好きだ」などゝ云うて居られた。尤も壽三郎は僕も可なり好きなので（僕は顏よりも態度なのだが）波多野さんは多少僕の思惑をも兼ねて云はれたのかも知れない。其席上で、大橋さんの送別會が近々東



第六圖 （「途路」の原稿の一節）


痺れた脚を重そうに引ずりながら、人通りの絶えたがらんとした往来を通つて彼れは帰路についた。彼れの悲しみを知るものは何所

第七圖 (「迷路」の原稿の一節)

京會館か帝國ホテルで開かれるから僕にも出席して欲しいとの話があつたので、十七日の會へ出かけて行つたのであつた。會に集つた人は有島(武郎)氏、小山内氏、山田(耕作)氏、三宅やす子氏、土方(與志)氏夫人、波多野さん等約廿名許りであつたが、會の始まる前から有島さんと波多野さんと僕の三人はヴェランダに出て物語つたり、有島さんの案内で帝國ホテルの内部を全部見せて貰つたりした。其時僕は有島さんの邸宅の賣却の話を持ち出して、さう云ふ高いものは今の不景氣の場合容易に買手がないかも知れぬと云ふやうな事を云ふと、今にして思へば、有島さんの調子には、さう云ふ事はもうどうでもいゝと云ふやうな捨鉢な響があつたやうにも思はれる。それから前に書いた文壇好男子品さだめの事を有島さんに話すと、有島さんは「僕の評はどうでした」といはれるので、僕は「貴君(あなた)は評に上らなかつた」と答へると、「どうもそれは怪しからんですナ」と笑ひながら戯言(じやうだん)らしく云はれたが、之も今にして思へば、波多野さんがどう云ふ風に自分を評したかを聞きたかつたのぢやないかとも猜せられる。其晩は會が終つてから小山内、山田、波多野、僕の四人の間に怪談が始まつて、盛んに縊死の話やお化けの話

が取り交はされたが、其席には有島さんの顏は見えなかつた。兎に角有島さんと最も親しく、最も長くお話したのが其時で、而かも波多野さんとたつた三人でお話し、さうしてそれが有島さんとの最後の御面會であつたんだから、僕には最も印象深い會合たらざるを得ない。波多野さんとは、其後今の丸ノ内ビルデングに引移つてからも五六回は會談したけれど、多くは事務的の話で、しみ〲とお話したのは矢張それが最後であつた。波多野さんと最初に花見に出かけた時にも縊死の話が出、最後にも盛んに縊死の話が出たのも一寸妙に感ぜられる。

○



第八圖　（有島武郎氏筆水仙圖）

有島さんと波多野さんと會談した事を書いた序に、此二人の關係に就て僕の所感を簡單に述べて見たい。僕は此二人の間に相愛の關係が成り立つたのは、多分昨年の夏頃の事ぢやないかと思ふ。昨年あたりから中央公論と婦人公論の校正がよくかち合ふので、牛込市ケ谷の秀英舍で顏を合はせる事が、寧ろ社に於てよりも多い位であつた。世間一般の評では波多野さんを派手好きといふて居るやうだけれど、僕の觀る所では最初に書いたやうに、華美に流れず、地味に失せず、波多野さんの好みはなか〲よい好みであつた。其波多野さんが昨年夏頃になつて、急に恐ろしく派手好みになり、美しきパラソルを携へ、而

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

京玉で飾られた黒い綸繻子の奇麗な手提袋を手頸に掛け、時には裾に大銀杏の葉を染め拔いた濃い紫の金紗お召の羽織を着流し、時には或は臙脂、或は黒のショールを唐宋の樹下美人の如く両肩から長く垂れ下らし、俄かに廿二三才の若拵裝をし初めた。それから社を引揚げる時間も、從來はみんなと一所に歸つた人が、今日は用事があるというて早く歸つたり、又外へ廻る所があるというて一人後に殘つたりすることが多いやうに見えたので、「此頃の波多野さんは少し變だ」といふやうに感ぜられたのであつた。「戀は人をおしやれにする」といふやうな言葉も今になつて思ひ合はされる。今度僕が春房氏に逢つた時に「二人の關係は昨年の夏頃からぢやなかつたんですか」といふと「僕もさうだらうと思ひます」というて居られた。然しそれは只相思の仲になつたらしいといふので、肉體的の關係が其頃から始まつたといふのでは勿論ない。足助素一氏などは肉體的の關係は今年の五月以後だというて居るし、又僕が三月十七日にお二人とお話した時も、そう云ふ關係がある人のやうには見えなかつたけれど、波多野さんの遺書にある、「もう關係を斷たう〳〵としても、何時かしら、どつちからともなく破つてゐた」といふ意味の文句から推せば、五月以後といふやうな事はあるまい。先づ今年の初め頃からといふ邊ぢやないかと今の僕には想像せられる。

○

波多野さんと有島さんとは何故戀に落ちたか。戀は神秘であり、戀人同志の間でさへも的確な判斷の出來ぬ事であらうから、漫りに外間の推測や想像を許さるべきものではない。只僕の竊かに想像する所によれば、波多野さんの方から云へば、有島さんの人格、德望、名聲である。さうして其に對する渇仰に油を注ぐものは春房氏の性行に對する不滿である。有島さんの方から云へば波多野さんの美貌、才氣、性格である。さうして其に對する愛慕を燃え立たしむるものは、過去七年間の孤獨の生活である。波多野さんは有島さんに於て、高き理想の把持者、溫かき人情の懷抱者、美しき德操の實行者を見た。有島さんは波多野さんに於て、美しき、然しながら毅然たる、優しき、併しながら女々しからざる珍らしきタイプの一異性を觀た。有島さんは其弟妹に與へられた遺書に於て、「秋子と知り合になつてから段々暗くなりつゝあつた人生觀が一時に明瞭に輝きました」といふやうな意味を洩らして居るのは、此間の消息を語るものぢやあるまいか。

○

波多野さんと有島さんはなぜ死を決したか。之はなぜ戀に落

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ちたかと云ふ問題よりも更に複雑で、更に神秘な問題である。或人は波多野さんを死神ででもあるかのやうに思つて、死にたい／＼といつて相手を求めてゐたのだといふし、又或人は有島さんも折角思ひ立つた財産拋棄の事もいろ／＼の故障があつて、自分の思ふ通りにも行かず、世の中がイヤになつたのだなど〻も云ふ。併し二人の情死が、二人の情交に基くといふことはどうしても否む譯には行くまいと思ふ。假令如何なる事情、如何なる理由あるにもせよ、有夫姦と云ふ現行法律と觝觸する事件の世に公けにされる以上は、其儘に濟まさるべき譯はない。六月六日の海上ビルヂングに於ける有島、波多野（春房）兩氏の會見は談判不調に終つて、波多野氏が警視廳に訴へ出でんとするや、最初蒼くなつて慄へてゐた有島さんは、突然意を決して、「君の手によつて二人が牢に入るのは寧ろ本望だ。さア之から直ぐ警視廳に行かう」と云つて兩波多野氏を促して立ち上つた。途中春房氏が、「三人の子供のある貴下を入牢せしむるは情に於て忍びず、何か他に解決の手段なきや」と有島さんにいひ出すと、有島さんは冷笑一番「十數年連れ添ふた女房を入牢せしむるを甘んずる君が、他人の子供に忍びずといふは矛盾に非ずや」と詰つたと云ふ話を聞いた。若し此話が本當であるならば、記者は有島さんだ、よく云つたといふ嘆賞の念が涌くと共に、僕には今一つの觀察がある。それは意識的か無意識的かは分らぬが、「法律の制裁」を受けて「社會的の批難」を薄くしようと云ふ心持だと思ふ。又誰がどう云ふ風に切り出したかよく分らないが、「壹萬圓」で解決めようと云ふ話も出たといふ事だが、有島さんは「金でこう云ふ話を決めるのは厭やだ」と刎ね付けたと云ふのだ。之も有島さんの人格をあらはす美しい話と思ふけれども、僕は矢張り「金で話をつけるのは厭やだ」といふ心の外に、「金では話のつく問題ぢやない」といふ考もあつたのぢやないかと思ふ。ナゼならば一旦壹萬圓で話を纏めても、翌月は五千圓、其翌々月は又五千圓といふ風に、有島さんの財産のある限りは兎のつかぬ話になり易いのだからである。又社會の道德的批判は有島氏の從來の聲望に一大打撃を加ふるに極つてゐるからである。足助氏などは、有島さんを人間以上の神様のやうに祭り上げて、利害の打算などは全くなかつた人のやうに新聞などに話して居られるやうだけれど、之は贔屓の引倒しといふもので、若し今の世に、利害の打算をせぬ人があるとすれば、僕の眼には神様と見えないで、馬鹿に見える。

○

又波多野さんは平素から「死にたい／＼」と云つて居つた。有島さんは其犧牲になつたのだといふ觀察もあるやうだが、僕

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ば之を否定する。波多野さんが「死にたい」といふた事は餘り聞いた事はない。若し之を口癖のやうに云つて居つたとすれば、それは一種コクヰツテイシユに云つたものと解したい。現に波多野さんはよく「大橋房子さんの十八番は男の方に甘へるやうにして、私死にたくなつたわといふのですよ」と笑はれたことがあるから、或は其大橋さんの眞似をして見たのかも知れないと思ふ。又人間は容易に死ねるものではない。有島さんは足助氏に宛てた遺書に「愛の前に如何に死が無力なるかを知つた」といふやうな字句があつたけれど、之も矢張り死の苦痛と恐怖を忘れんとする一種の催眠歌とも見らるゝと思ふ。恰度戀の苦痛を戀歌によつて忘れ、胴突女がヤレコラの音頭で以て其勞働の苦痛を紛らすやうに。

○

有島さんと波多野さんの死を決した原因は一つでなく、澤山の理由の堆積であると見ることも出來やう。然し其中の最も大いなる一つは、戀の歡樂の絶頂に於て死にたい、と云ふ感じでなかつたかと思ふ。波多野さんは有島さんに於て、夫の美貌よりもわが心を捉ふる人格と徳望と名聲の具現者を見た。有島さんは波多野さんに於て、七年間の孤獨寂寥を破つて濃艶甘美なる歡樂境を見出した。二人は已にデユーマの「椿姫」だかにある「戀愛に入るの門は二つ。一つは肉より、一つは靈より。而かも肉より入るも終に靈に達し、靈より入るも終に肉に達し、行きつく先きは同じく一つ」の言葉通り、假令二人は靈の門から入つても、肉に到達して其戀を全うした以上、現在の法律上の問題となるの日の必ず到達すべきことは、最初の夢幻境より眼醒めた瞬間から、二人の心を暗くした痛切な問題であつたに相違ない。現に二人とも今年の秋の終り頃には必ず死なうと決心して居つたことは其遺書などによつても窺はれる。それが六月四日の外泊によつて豫期したよりも早く問題が持ち上つて了つた。已に問題が持ち上つた以上、法律的には勿論、道徳的にも、社會的にも、心理的にも、大きな暗い影と、深い痛手とを二人の身と心とに持ち來さないと云ふ事は如何にしても出來ることではない。問題が如何に解決しようとも、從來の如き、秘めやかな、秘めやかなるが故に一層甘い歡樂を續けて行くことは到底出來ない。それに鐵は火爐を出でたる時最も熱く、戀はその成立つた初めに於て最も烈しい。背後に囁く世人の嘲笑を氣にしながら冷めて行く戀の滓を舐るのは堪らない。有島さんは已に四十六歳である。五十に幾何も餘さない。西洋人ならば兎に角、東洋人の五十は決して若いとは云はれない。波多野さんは已に三十歳である。美貌も之からは衰へる一方であらう。そんな事に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

思ひ及ぶと、今が歡樂の絕頂だ。之れ以上の歡樂は今後再び來まい。死ぬならば今だといふやうな聲が二人の死を促したものではないかと思はれる。

○

僕が今度の事件に氣が附いたのは、新聞の發表と、事件の發生との恰度中程頃――事件後二週間、發表前二週間即ち六月の二十三四日頃であつた。僕の方の社員高野君の嚴父が兇刄に斃れられた六月二十一日の翌二十二日丸ノ內ビルヂングの社に於て、社長麻田さんに逢ひ「高野君のお父さんの事は驚きましたね」といふと麻田さんは聲を潜めて「君、實はもう一つ驚くことがあるんだ。波多野君が行衛不明だ。多分死んだかも知れない」といはれた。此時一道の寒氣が僕の背筋を傳はつて流れ、足が妙に輕くなつたやうに感じた。多分額にも多少血の氣が薄らいだやうな氣がした。そして僕の頭に最初に閃いたのは波多野さんは或は××に殺されたのぢやないかと云ふ事だつた。僕が其事を麻田さんに言ふと、「僕も一寸さう思はぬではなかつた。併しそれは全然違ふ。つまり一種の戀愛關係だといふ事はいひ得る。然しそれ以上は絕對秘密だ。對手も有名な地位のある人らしいから、事實が自然に發表さるゝ迄は絕對秘密にして吳れ玉へ。×××あたりでは多分死んだらうといふ說なさうだが、若し生きて居るとすれば、世間への發表はつまり當人同志の死を早めることになるから、君、絕對に誰にも話して吳れ玉ふな」といふ事であつた。それから中一日ばかり置いての夕方、僕がいつもの通り、庭の池に泳いで居る鯉の群を眺めながら、日本酒を飲み畢つてビールを飲み初めて居ると、波多野さんの行衛不明――死といふ事が考へられて、頭がひどく熱して來た。そして麻田さんが、自分では知つて居るやうでありながら、僕等にまで眞相を明かさぬのが甚だ面白からぬことに考へられた。世間に洩らす洩らさぬはいはゞ世間的道德ではないか。一方は人の生死の問題である。六年間も一所に仕事をした人の生死の問題である。かゝる大問題を世間的道德の爲めに默過して居る譯には行かぬ。儀禮を重んぜらるゝ麻田さんとしては秘密嚴守を第一と見らるゝか知らぬが、人間の生命を最も重しとする僕としてはどうしても默過することは出來ぬ。そこで僕は酒杯を抛つて起ち上つた。一寸後ろの床の間を振り返ると、そこには有島さんから送られた半折が、黃の支那絹に藍筋共明朝、長い撥形の牙軸の文人風の仕立にして其夕方經師屋から出來上つて來たのが掛けられてあつた。其刹那僕はハッとした。對手は有島さんだ！　といふ考が電のやうに閃いた。兩三日中箱書に行かうと思つて急いで造らした文人風の箱も出來て來て其傍にあつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。僕は心を波立たせながら直ぐに麻田さんに駈け附けた。家人にも憚る用事だからといつて、麻田さんに門の外の薄暗い通りに出て頂いた。そして「眞相を明かして秘密を守れといふなら聞こえてゐる。然し眞相を話さずに秘密を守れといふのは無理だ。波多野さんは六年も一所に働いた同僚だ。其同僚の生死を不問に附することは僕には出來ない。あなたがどこまでも事實を話されぬなら僕にも覺悟がある。警視廳に出てなりとも僕として眞相を確めたい」とせき込んで談じ込むと、僕の氣質をよく飲み込んで居る麻田さんは、「君としては尤もだ。併し此事は波多野家と對手の家と警視廳と三方共絶對秘密を守る約があるので、僕とても對手のあたりをつけて居る丈けで、名は直接に聞いたのでない」との事だ。「あたりがつけば僕も滿足しますが、對手が身分があるとか大した人だとかいふのは×××の官吏とか華族とか××とかいふんですか、そんなことなら僕は腑に落ちませんよ」といふと、「イヤさう云ふのぢやない」との答。そこで僕は「文壇の人でせう」と云ふと「君、そこまでは追及して呉れるな。」といふ事なので、「それなれば分りました。決して他言しません。實は有島さんから書いて頂いた書の表裝が出來たので、明日あたり箱書に行かうかと思つてゐたので、ウツカリ行つて笑はれるといけないと思つたものですから」といふと「行つて見るのも面白いでないか」といふ風なことでお別れしたが、それ以來波多野さんの對手は有島さんといふことに極めて了つたのであつた。併し僕は二人が死んだとは思はなかつた。多分浦鹽か上海あたりに高飛びをしたのぢやないかと考へた。併し一方が有名な、世間との交渉の多い有島さんであり、他方は兎に角人目に目立つ波多野さんであれば、何時までも秘密の保たるゝことはあるまい。今日の夕刊に出るか、明日の朝刊に出るかと每朝每夕多少ドキ／＼した、併し一方ではそれを待ち受くるやうな心持で、新聞を開いたけれど、とうとう有島さんの死は七月の八日の朝まで、對手が波多野さんであることは其日の夕刊まで世間に公けにされなかつた。飛耳長目鬼の毛ほどのことも見逃さぬ新聞紙としては多少間が拔けて居つたやうにも考へられる。×××あたりでは智能の發達した人の情死はよく死骸を隱くすものだから海中にでも飛び込んだのぢやないか、さうすると半年位分らぬことがあると云うて居つたさうであるが、つい眼の先きの、而かも誰でも一番先きに氣の附きさうな輕井澤の別莊で縊死して居つたのを一ケ月も知らずに居つたのは、捜索上に手ぬかりがあつたやうに思はれる。併し二人とも氣が附かれぬやうに餘程用心したものと見え、現に有島さんも「二人の遺骸は腐爛して發見せらるべし」といふ意

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

味を書いて置らるゝ所を見れば、容易に見つからぬといふ事には餘程自信があつたものと見える。尤も死體が腐爛して蛆が一面について居つたといふ記事を讀めば可なり厭やな氣になるけれど、然し縊死によつて醜くなつた生々しい死體を見らるゝよりは增しなのであらう。兎に角二人の意志通り腐爛して發見せられたのは、流石に智能的の自殺と首肯かるゝ。

○

波多野さんの遺書の不出來なのに比べて、有島さんの遺書は流石に、惻々として人を動かす眞情に溢れてゐる。母堂と三人の令息への遺書、弟妹への遺書、皆人間味が濃やかだ。殊に前者にある「かゝる決心が來る前まで私は皆さんをどれほど愛したか」の結びに至つては涙を押へかねる。又其表書きに「池さん、戸川うめ、千代、みつ、ぢいやによろしく」と召使らしいものゝ名まで書いて別れを惜んでゐらるゝのを見ると、如何に有島さんがすべての人に對して溫かき情の持主であつたかゞ窺はれる。以上の二つの手紙が「文豪」としての有島さんよりも「人間」としての有島さんをあらはしてゐるに對し、足助氏に對する遺書は「人間」としての有島さんよりも「文豪」としての有島さんをあらはしてゐるやうだ。「山荘の夜は一時を過ぎた」のあたりは文章としても素晴らしいものだ。「僕の著作の印税全部は將來三兒にやつてくれ給へ」といふやうな箇所は、私有財產拋棄を思ひ立つた有島さんとしては、理窟からいへば不徹底だけれど、人間は元來矛盾性の多いものな事を考へる時、人間としての有島さんに一層の懷しみを感じる。

○

公人としての有島さんについては天下の新聞雜誌爭つていろいろの方面から記載評論して居るし、又今後も久しきに亙つて批判研究の的とならうと思ふ。殊に其「著作全集」の出版は文壇及び思想界に限りなき幾多の評論の題目を供給するであらう。又彼の財產拋棄の一事の如きも可なりの重要の意味のあることであり、僕と雖も五枚や十枚は評論して見たいとも思ふ。併し今は其時間もなく餘白もない。それで公人としての有島さんをも批評して見たき最初の計畫を全然拋棄して、只有島さんの著作は、明治大正を通じて、教養ある人士に博く讀まるべき資格に於て、夏目漱石先生以後の第一人者であると云ふ一言を附するに止めて置く。

○

こゝまで僕は成るべく自分の感情を抑へて、只二人について思ひ出づるまゝを、順序もなく、修飾も加へず、たゞだら〳〵と書き記して來た。さうして考へて見ると、最初に書からうと思

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つた、やつと半分しか書いてゐない。然しもう書き疲れた。感情ももう抑へ切れない。こゝで二人に呼び掛ける言葉を書きつけて此稿を終らう。

○

有島さん！　あなたは全く惜しい人だ。尊敬すべき人だ。あなたに接した人であなたをわるく思ふ人は恐らく一人もないだらう。自分一人が正しく生きようとするのみならず、世の中のあらゆる人と共に正しく生きようとしたあなたの心情は萬人の胸を打つ。思想の根は年と共に芽を出し花を咲かせて、生長する。あなたの思想、人格、情操、皆新らしき呼氣となり溫かき血汐となつて、心ある人の心臓を波打たせる。尤も今度のあなたの死に對しては非難する人も可なり多くある。之からも絶えずあるだらう。法律上、現今の社會道德上あなたは確かに非難さるべき一つの行爲を敢てした。併し法律は死者に對しては無力である。社會道德も時と共に變遷する。又標準を異にする。現にあなたを最も批難して居る所謂道學者とか倫理學者とかいふ人の說を讀んで見ると、如何にも舊くさく形式的で、只空洞の中で叫ぶうつろな聲のうつろな響のやうにしか聞えぬではありませんか。カイゼルのものはカイゼルに、神のものは神にといはれたやうに、法律上の事は法律に、社會道德の事は社會道德にお任かせなさい。戀愛は人間のあらん限り人間の胸に宿る永遠の存在だ。私有財產拋棄を企てたあなたに於て、私は一個聰明にして溫情なる現代人の模型を見た。併し戀に一身を捧げたあなたに於て、私は眞個熱烈にして純情なる永遠人の權化を見た。只永遠の情緒を汲むことの出來る人のみが、永遠にあなた方の心持に涙を濺ぎませう。それでよいではありませんか。文豪としてのあなたの効績と偉大とは　あなたの著作其物が如何なる批評よりも雄辯にそれを物語るでせう。あなたの著作より永く世に殘る批評は世に一つもあり得ない。あなたはもつと生きて居られても、今まで公けにされたものより、もつとよいものを書かれたかどうかは疑問だ。併し有島さん！　それは何でもない。あなたは、あなたがもう四十六年生きて居られても到底書き得さるべき大きなドラマをあなたの生命其物を以て書かれた。あなたの今度の死は世界の文豪の如何なる大作よりも大きい。明治大正の文壇に於て島村抱月氏に殉じた松井須磨子氏の死は意味が深い。然しあれはいはゞ後追心中だ。あなたと波多野さんとの死はもつと意味が深い。お二人の死に向へば戀の强烈と神秘と悲壯とに胸を塞がれる。

○

波多野さん！　あなたは美しくもあり、識見もあり、才氣も

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あり、當世得易からざる一才媛だ。然しあなたに缺けて居るものは女らしき情緒だと僕は思つてゐた。男性的、中性的と云ふのが、僕等のあなたに對する批評であつた。併しそれは今となつて見れば僕等の淺見だつたと云ふことが分る。隨分不仕合せな境遇に育ち、並ならぬ生ひ立ちを有つて居られたあなは、普通の女らしい女としては世に生きて行かれなかつたに相違ない。それで恐らく強い、負け嫌ひな、男のやうな性格を作られたのだらうと思ふ。然し女は矢張り女だ。約三十年の間胸の奥深く潜められた女の情熱は、有島さんといふ敬すべき尊ふべき對象を得て初めて燃え上つた。而かも久しく抑へられてゐた丈け一層猛烈に炎々と燃え上つた。其火は有島さんを燒き、又自らを燒いた。僕等は最後の瞬間に於て、あなたが本當に女であることを見得た。僕等はあなたの爲めに非常にそれを喜ぶ。あなたの夫君たる春房氏は決してあなたの死を快くは思つてゐられないやうだ。九日の朝强雨を冒して高間寺のお宅まであなたの遺骨を拜みに行つた時も、誰にもお斷りして居るというて、拜ませて下さらなかつた。あなたは固より夫君を捨てた人だから夫君から觀れば無理もない事だ。併し波多野さん！　それでいゝぢやありませんか。あなたは兎に角あなたの望み通り、有島さんといふエライ人を捉へて一所に死んだんだから、あなたとしては滿足だらうと思ふ。あなたの名は有島さんと共に不朽である。

〇

有島さん！　僕はあなたと同じ時代に生れて、親しく御交際を願ひ、あなたの清き、高き、温き人格と、深く大いなる思想と藝術とに接し得たことを誇りとするものである。

波多野さん！　僕は六年の間あなたと同じ社に勤務して、同僚の一人としてあなたと共に働いたことを毫しも恥とせぬものである。（七月十七日）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

眞夏の感じ

眞夏の感じ

徳田秋聲

東京の夏がさう夏らしい感じを與へなくなつたのは、強ち私が年を取つて、寒氣より暑氣の方が凌ぎ易くなつたばかりではないやうです。この二三年、殊に今年の如きはもう七月だと云ふのに、十月半頃のやうな冷かな風が吹いて空氣に濕氣が多く、からりとした夏らしい愉快な日は一日もないやうです。自然界が約束どほりに、夏なら夏のやうな煌とした暑さを地上に持來してくれないで、毎日曖い日がつゞくと、何だか極りがつかないやうで不安心です。私のやうな一日一日の天氣模樣が生理的にも氣分のうへにも、ひどく影響するやうな體質に產れついてゐるものに取つては、約束通りの夏を待つてゐる氣持が、思ひのほか苦しいのです。私は梅雨期の青苔のむした庭に、赤い柘榴の花が落ちちつて、梅子が黄熟する時分の漢詩氣分も好きですが、暑さの烈しい眞夏の朝夕も、なか／＼棄てがたいのです。勿論夏に限らず、東京は年々生硬な物質的生活が暴威を振つて來るばかりで、單に建築だけを見ても、都會生活がいかに自然と遠ざかりつゝあるかゞ判ります。同じ都會生活でも、歐米のはもつと秩序立つた、氣持の好いものだらうと想像されますけれど、東京の生活は日一日と亂雜、不便、殺風景を積み重ねるばかりのやうで、昔しあの三菱ケ原に、凉しい木蔭があつて、甘酒屋なんかゞ出てゐて、往來の人が草原に晝寢をしてゐたことなどは、今ではちよつと想像がつきますまい。

東京も入谷の朝顏のあつた時分は、さう云つたやうなものが、

一般人の夏の享樂であつたやうですが、今は少し氣の利いた人間は大抵山か海かへ暑を避けてしまひます。しかし私は眞夏の旅行は生活事情が許さないので、一昨年も去年もこの陋屋に閉籠つてゐました。

ひどい暑さに怯げて、ちよつと病人のやうな感じのすることも、二三日はあつたけれど、しかし冬よりは凌ぎ易いのです。一昨年の夏などは、妻が子供六人をつれて、田舍へ行つた留守を、のう／＼した氣持ちで、昔の獨身時代のやうな自由と靜安を樂しむことができたのです。そして偶には梅干を賽の子のうへに擴げたり、草花に水をやつたり、また食べたいと思ふものを、自分で拵へたり何かしてゐたのです。若しもう少し庭が廣くて、裏に竹藪でもあつて、そこに四疊半くらゐの瀟洒な書齋でもあつて、寢ころんで好きな本でも讀んでゐられるなら、その凉味は萬戸候にも換へがたいものだらうと思ひます。しかし又夜が更けてから、一二枚雨戸をあけた緣からすや／＼流れて來る風にあたりながら、何か書いてゐる時の氣持も惡くはありません。ひどい暑さの日に、淺草のやうな熱鬧な町へ出て、防きの多い活動館へなぞ入つてゐたこともあり、銀座あたりへ出かけて、雪白の卓子クロースのうへに、フオクやナイフのちか／＼する清潔な食堂で、煽風器の風に顏をほてらせながら、料理を食べるなども、眞夏の少しぼんやりした頭腦には、好い刺戟になるものです。

眞夏の幻影

豊島與志雄

廣々とした平野である。はてしもなく續いてる荒地の中に、狹い耕作地が散在し、粗らな木立や灌木の茂みも所々に見え、その間を、一筋の街道が眞直に續いてゐる。誰の手に成つた耕作地か？ 誰が通るための街道か？ 見渡す限り、農家の部落もなく、道行く人の影もない。そしてそれらの上に、澄みきつた大空が、闊く蔽ひ被さつてゐる。大空の眞中に、白熱した大

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

きな太陽が懸つてゐる。太陽から發散するぎらぎらした光が、空と地とに一杯漲つてゐる。凡てのものがちりちりと蒸されてゆく。大空の圓天井に閉ぢ籠められてる空間は、電球の内部のやうに、干乾び窒息して小搖ぎだにしない。大地は暑苦しさに喘いでゐる。耕作地は陽炎（かげろふ）の息を吐き、草原は凋びきつて色褪せた匂ひを立て、樹木の葉は力無げに垂れ下り、街道は白い埃に埋つてゐる。そして何物をも燒きつくさんとする炎熱が、凡ての上に力一杯のしかゝつてゐる。そよとの風もない。

やがて、街道の上に、背の高い一人の男の姿が、何處からともなく、いつのまにか、幻のやうに現はれてくる。擦り切れた草履をはいて、すたすたと歩いてゐる。歩毎にぱつと舞ひ上る埃が、またすぐ靜に消えてゆく。男は無頓着な足取りで、ふらふらと歩き續ける。縞目も色合も分らない弊衣を一枚まとつて伸びるに任した蓬髪の頭には、帽子も被らないでゐる。前方をぢつと見据えた眼には、云ひ知れぬ獰猛な色が浮んでゐる。もし誰かに出逢つたならば、うむを云はさず力の限りに、抱き緊めるか或は毆りつけるか、どちらかをしさうな眼色である。

さういふ眼付で彼は、前方の何物を見つめてゐるのか？　それは遠い地平線のあたり、眩しい大空の光と、陽炎の立つ大地の温氣と、凋びた草木の色褪せた匂ひとが、一つに融け合つて茫とした霧を作つてるあたりをである。その地平線のあたりに、人の心を誘ふ何物かゞ潜んでゐる。光と炎熱とのこの天地の熔爐は、其處にたゞ一つの出口を持つてるかのやうである。蓬髪の男は、その一つの出口へ向つて、獰猛な眼を見据ゑながら、狂人の足取りで、眞直な街道を辿つてゆく。

果して其處が、天地の廣大な熔爐の出口である。其處から、靜に靜に空氣が流れ込んでくる。その空氣の流れに乘つて、白い一團の雲が頭を覗かせる。それが見る見るうちに大きくつゝ立つて、やがて天空を蔽ひ初める。廣さと深さとの測り知られぬ鬱積した密雲で、頂邊に白銀の光を藏せながら、影に闇黑な鬼氣を藏して、中天に翔り上つてくる。地平線の彼方に巨大な根を据ゑてる、さういふ密雲の幾群かゞ、先を爭つて太陽に襲ひかゝる。太陽の光の波の下に、頭を押へつけられながらも胴體からむくむくと脹れ上つてきて、また昂然と無數の頭をもたげ、傲然たる勢に駈られて、互に衝突し融け合ひ反撥し合ひ、天と地とにのしかゝつてくる。その威壓の下に、萬物は一堪りもなく慄かせられる。空氣の流れが次第に强くなり、息をついてはさつと地面を掠め過ぎる。

弊衣の男は、蓬髪を風に吹かせながら、恐れる氣色もなく顔を擧げて、光の波と雲の屑との鬪ひを眺める。その眼に沒表情

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

な白目となつて、醉ひ痴れたやうな眼付になる。そして彼の頬は弛んできて、口を大きく開きざまに、呆けた高笑ひが喉から飛び出してくる。なま温い風が、その哄笑を野末に吹き拂つてしまうけれど、後から後からと哄笑は起つてくる。彼は何を笑ひ續けてるのか？　恐らく彼自身でも知らないだらう。それは全く物に憑かれた狂人の空洞(うつろ)な笑ひである。

と俄に、彼の哄笑とそれを吹き拂ふ風とが、息を切つたやうにはたと止む。雲の頭が太陽を蔽ひ隱して、墨を流したやうな闇黒が空の大半を占領して、暗澹たる氣が天地を包み込み、怪しい戰慄の沈默が落ちてくる。その沈默の中に何處ともなく遠い雷鳴が聞えたかと思ふと、さつと一陣の風が起つて、横ざまに大粒の雨が襲つてくる。そして忽ちのうちに、雷鳴と電光と驟雨との擾亂の世界となる。天と地とが渾沌たる一體のうちに融け合つて、眞黒な激怒の翼と電光の鋭い爪とが、凡てのものを打ち叩き折り挫く。もはや何物の形も見分けられない。男の姿も闇に呑まれてしまう

その渾沌たる暴虐の世界の中に、やがてぱつと光がさしてくる。尊嚴な太陽が姿を現はしたのである。中天を蔽つてゐた巌のやうな黒雲が、胴體の半ばから横ざまに折り拉がれて、空低く流れ落ちてゆく。雨が止み雷鳴が消え風が凪いで、紺碧に澄みきつた大空と雨水に濡れた大地とが、燒くがやうな太陽の直射に照らし出される。空は光を含んで益々冴え返り、地面は浴び飲んだ水が沸き立つて、熱い吐息に喘いでゐる。そして崩れ落ちる暗雲は、くず折れくず折れして益々低く、地平線の彼方に沒してゆく。

もはや白々と乾きかけた一筋の街道を、先刻の男がなほ辿つてゐる。雷と雨とに打たれて首垂れながら、たゞ機械的に足を運んでゐるらしい。髮の毛が眞光に乾ききつて、逆樣に縮れ上つてゐる。ぐつしよりと身體にくつついてる着物からは、湯氣がぽツぽツと立つてゐる。そして彼の吐く息も、周圍の地面や草木の吐く息と同じに、蒸れ臭く熱つぽく喘いでゐる。底濁りのした眼の光も消え、顏の色も蒼ざめてゐる。一時の濡ひと暑氣とに氣力つきてる樣子である。

それでも彼はなほ、燒くがやうな日光に蒸されながら歩き續ける。何處まで行くつもりなのか？　地平線のほとりは、一時に發散する大地の湯氣のために、茫とかすんで見分けられない。彼はその方面に何かを見定めんとするかのやうに、なほ眼を眞直に見据ゑて歩いてゆく。と突然、雨に洗ひ出された道の小石に躓いて、二三歩よろよろとたゝらを踏む。その足を踏みしめて、一寸つゝ立つてみたが、そのまゝ力つきたかのやうに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

路傍の叢の中に折れ屈んでしまう。そしていつまでも動かない。それはもはや、叢の中に埋もれてる一塊の石ころに過ぎない。

さうした彼の頭の上に、ぎらぎらした日光の漲り溢れてる大氣の上に、先刻の雷雲よりも遙かに高く、太陽よりも更に高いかと思はれるあたりに、眞白な悠久な一團の雲が、刷毛ではいたやうに靉いてゐる。靉きながらも、眼が眩むばかりの勢で而も徐々に、大空の上を押し移つてゐる。光の翼のやうなその白雲の悠然たる動きを除けば、天地はひつそりと靜まり返つて眞夏の太陽の光に蒸されてゆく。

鷹爪花

佐藤春夫

鳳山——臺灣南部の古い都市——を見物に行つた時だ。陳といふ人の案内であつた。二十六七の青年だ。やはり同姓の陳といふ人が鳳山にゐる。そこへ遊びに行つて見ようといふのである。

八月末のことであつた。もう涼風が立つてゐたらうて？　場所は臺灣だよ。臺灣の涼風はおそらく二月末にでもなつたら(！)吹くだらう。

鳳山の陳は米屋であつた、支那風の家屋の米屋の二階だ。米屋の二階の夏と言へば、それだけでも、もう暑さはたつぷりの氣がするだらう。狹つ苦しい部屋なのだ。風は死んでゐた。「暑い」と互に挨拶をするけれども、事實は、彼等はさうそれを苦にしてはゐないらしいのだ。その暑さにビールを飲ませるのだ。それや渇を醫すにはいいだらうが、それ以上にあとから汗を發散するのにもつと有力だ。だから、僕は辭退するけれどもなか〳〵聞かない。たうとうコップに三杯ほど飲まされちやつた。さてこれから散歩でもして、夕方にそこらをぶら〳〵して見ようかなどと言つてゐるところへ來たのがひとりの憲兵だ。すると、主人でない方の陳が、少し暑いけれどもこの近くの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

尼寺があるから行つて見ようと言ふ。さうして俥を二臺命じた。どうも憲兵が來たので仕方がなくその部屋から出なければならなくなつたやうな事情らしいから、僕もいやだとは言はなかつた。幌をした俥の中の暑さは論外だが、そのうちにどこかで遠雷がして來て、今まで死んでゐた風がどうやら少し動き出したらしい。

尼寺への道には川があつて橋があつた。我々の俥の渡つたのは新らしい橋だつたが、その少し遠くに古い橋がある。何でも古くからある有名なものださうだ。それを見ながら行くと田圃へ出た。片側はその地方特有の竹林であつた。竹の葉を動して風が來る。

尼寺は竹林のなかにあつた。大きくないお寺だ。皆、ひる寢でもしてゐるのかひつそりしてゐる。尼寺だから男は入れないのださうだけれども、陳は金持でもあるし、この尼寺へ喜捨したりした事があるので、この一番えらい尼さんとも知り合ひだから見物できるのださうである。――つか〱と本堂へ這入つて行つた。誰も居ないし、香の煙も立つてゐない。それで本堂の次の間へ行つた。そこは客をもてなす部屋である。そこにも誰もゐない。陳はその部屋へ這入なり自分のうちのやうに氣安げにそこの長椅子へ身を横にしながら、何だか高らかに臺灣語をしやべつた。――人が出て來た。婆さんであつた。何かお世辭を言つて、お茶をくれた。僕はそのお茶を――極く熱い奴を吹きながら飲んでゐた。その時僕を陳が肘で突つついた。何かの相圖だ。目をあげると、その瞬間、陳の目が教へたものは本堂を通して向ふの部屋の扉のかげからちらと僕たちの方を覗いた女であつた。白い顏は印象をとらへるひまもなく、ただ水色の姿だけが眼底に搖れて殘つた。

「陳さん――鳳山の陳さんの妹！」

さう陳が囁いた。それから話しつづけた。

「あの人、男を嫌ひ。それで尼さんになると言つてここへ來ました。まだ本當の尼さんではありません。――そのうちに尼さんになるでせう。」それからまた陳は言つた。

「鳳山の陳さん兄弟、男二人あります。兄さん阿片密輸入して今調べられてゐます。弟の陳さん、米のことで詐欺になる。それで憲兵さん、そのことで來たでせう。兄さんたちよくない人でも、妹さん、おとなしい。」――そんなことを、そんな日本語で陳は言ふ。私はふと、その尼さんにならうとしてゐる友人の妹を、この陳が好いてゐるのぢやないかなどと空想してみた。陳は小柄なきやしやな美男子だつた。

……庭の方を見ると、日が當つてゐながら、雨がぽつぽつと降

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り出してゐた。道理で暑いのをちよつと忘れてゐたと思つた。急に日さしがかげつて、大粒の雨がそれから土砂降りに落ちて來た。雷がはためいた。怖ろしくなつてどうじやうかと思つてゐるともう、日が當つて來た。何といふ氣違ひのやうなお天氣だらう。

「ここ、臺灣でも神鳴一番よくなります。このもつとさき、臺灣で一番大きな鐵橋ありますそこ、よく神鳴落ちる。きつと今日も落ちたでせう」

僕たちは、うそのやうな驟雨の晴れたあとの庭へ出た。竹林のかげに、芝生があつて、紅い大きな花が何と鮮やかであること！ 竹つ葉にはみんな露を持つてゐた。それが、ぱらぱらと雫くして滴つた。そのお伽噺のやうな花園で、陳は僕にへんな形の——佛手柑のやうな形で、しかし小指の三分の一ほどのさうして青い花を捜し出して摘んでくれた——

「この花、いい匂でせう」

全く蜜のやうにあまつたるくつて蒸せるようだ——

「いい匂です。何といふ花です？」

「鷹の爪の花——鷹爪花」

石油、ニコチン、雨

小川未明

林檎の木に蟲がついた。赤錆の出たやうに幹のところ〴〵が蝕まれてゐた。この地方には、林檎の木が少なかつた。それは雪が深く降るために枝が折れて育たないといふことも一つだが、一帶に地味が、この木に合はなかつたからでもあらう。

一本の林檎の木は、圃にあつた他の木々よりも、それがために大事がられた。今年は、杏の樹に、實が澤山なつたが、それも大抵は蟲にやられて、半分黒くなつた、不具の實ばかりであつた。そして、葉は穴が無數にあいて、滿足なのが見られない程だつた。

「どうして、今年は、木に蟲がつくだらう」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「梅雨に、よく降つたからだ」
「こんな年も、ないものだ」

隣の主人が他の人と、かう言つて話をしてゐるのを私は、聞いたのであつた。そして、私も、林檎の木と、杏の木に、ついてゐる蟲をどうかして除いてやりたいと思つたのであつた。

「蟲をとるには、何がいゝですか？」

私は、他の人に、問うたのであつた。

「石油を塗つてやれば、大抵の蟲は、死んでしまひます」

私は、石油を木の枝や、幹に塗つてやらうかと思つた。

あつい日がつゞいた。空には、雲がなかつた。絹布のやうなすきとほつた雲が、湧いたかと思ふと、いつの間にか、奥底の知れない青い空の胸の中に吸ひ込まれてしまつた。

赤い、火の彈のやうな太陽が、ぢつと、いつまでも一處に止まつてゐるやうに、すべての物を燒き盡さうとしてゐた。しかし、それでも太陽の位置は、動いてゐるのであつた。午過には空の色が、黄色かつた。

私は、ぢり／＼と照り付ける圃に出て、林檎の木を睨んでゐた。このあつさに、石油を木の幹に塗つて、木が枯れぬものだらうか？　さう、思はれたからだ。

すぐ、あちらの土手では、子供等が騒いでゐた。

「さゝれるよ！」

「そら！　飛んで來た。飛んで來た」

子供等は、口々に叫きながら、騒いでゐた。彼等は、蜂をかまつてゐるのだ。こゝからはたゞ、赤地の露出した、土手だけが見える。子供は、小石を拾つては、土手の一處を目あてに投げつけてゐた。

そこには、地蜂の巣が、あるらしかつた。彼等の二三人は、長い、青竹の先に、杉枝の茂つたのを結び付けて持つてゐた。そして、それで蜂を叩き付けてゐた。

「あ、痛い！」と、そのとき、子供等の中の一人が、大きな聲を上げた。

蜂は、敏捷に、竹竿を傳つて、手許に來て刺したと見える。つゞいて其の子の泣く聲がした。

濕氣といふものが全く消えて、カランとした旱天の下で、其の泣聲は遠くまでひゞいた。やがて、づき／＼と痛むのであらう。毬の如く毒で腫れ上つた左手を、右手で抱くやうにして、其の子は、乾いた小石の浮上つた往來を下駄を引摺りながら、家の方に歸つて行つた。

私は、白くなつて、ボロ／＼につた、木の下の地に、石油が紫色のキラを浮かして流れ落ちるとすぐに浸み込むのを見た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

塗られた、石油は、すぐにあとから乾いてしまつて、たゞ、刺すやうな鋭い臭いだけが、漂ふばかりだつた。しかし、私はこの臭ひを嗅ぐと、未知のうら悲しい世界を幻想に描いたのだ。

「石油が、根に廻はつて木が枯れはしないかな」

私は、厚ぼつたい、つやつやとして、日光を反射する、林檎の木の葉に指先を觸れながら思つた。もし、枯れるとしたら、木は、まだ、この瞬間に何事も氣付かないで、かうして、たとへ蟲はつきながらも、生を享樂してゐるのが、皮肉のやうなまた、限りない傷ましいやうな氣持がした。そして、それは、また刹那であつて、永遠の姿の如くにも感ぜられた。

私は、幾たび、林檎の幹に、石油を塗るのを抑へたか知れない。しかし、やりかけると隙勢で、「枯れるなら、枯れてしまへ」といふやうな投げ出した氣持もされて、石油をたつぷりと刷毛に染ませて、塗りこくつた。

「あ、石油をこの暑さに塗つたら、焼けて木が枯れてしまひやす」

隣の主人が、鼻をつまらせた聲で、傍から言つた。

「だつて、田の中へ撒くぢやありませんか?」と、私は、問ひ返へした。

「見てゐてご覽なさい。石油のついた、葉先きが黒く焼けてゐやす」

成程、葉の縁の色が變つてゐた。そして、地面は、石油の滲込んだ跡だけが、特に光つてゐた。

あくる日、私は、朝のうちに、町の農具店へ行つて、殺蟲劑を買はうとした。

「これは、舶來品です。なかなか強い殺菌力を持つてゐるといふ話です。ニコチン劑ですな」と、農具店の主人は、言つた。

「ニコチン……………ですか」

私は、この赤黒い色をした液體の一壜を求めた。家へ歸るともう日は、いつの間にか高く、空に上つてゐて、私の體は、流れ出た汗でびつしよりだつた。

午過、私は、圃に出た。昨日、石油を塗つた林檎の木の下に行くと、臭ひがまだあたりに漂つてゐた。そして、昨日、石油にぬれた葉は、悉く、黒く焼けてゐた。

太陽が、灸の火のやうに、赤く、小さく、空にぢつとして、見詰めてゐる如く燃えてゐた。

私は、菊の若芽についた蟲を殺すために、ニコチンを塗つた。林檎の幹にも、また杏の樹の荒皮にも塗つた。この藥液は決して、花や、葉を汚さないと効能書にあつたので、私は、塗

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れるだけ、園の木や、草に、塗つて見たかつた。

「この旱天に、何を塗んなさるか知らないが、木も、草も、枯れてしまひますぜね」と、隣の主人が、園の作物を見まはりながら言つた。

「これだ、ニコチンといつて、少しも、草や木に害にならないといひます」

「なんであつても、この乾き切つてゐる際に塗つたら、たまりません。みんな焼けてしまひます」

主人は、私の手から、ニコチン液の罎を受取つて、その赤黒い液體を太陽の光りに透かして見てゐた。

この時、子供等が、あちらの土手で、竹竿のさきに何か結んでそれに火を付けて、地蜂の巣にやつて、蜂を殺してゐた。火は、傍の草や、雜木の枝に燃え移つて、ぱち、ぱちと音を立て、剝ねるのが手に取るやうに聞えた。

「餓鬼共めが、この旱りに火を焚くやつがあるか!」と、誰か、大人の聲がして、怒鳴つた者があつた。

「一雨來てくれると助かるんですが、茄子でも、胡瓜でも、みんな土が焼けて、莖が上つてしまひました」と、隣の主人が言つた。

「晩方になると、毎日、夕立が來さうになつて、流れてしまひますね」と、私が、言つた。

「どこへか、吸ひ取られてしまひやす」

ほんたうに、面積の廣い芋の葉に、ぽつり、ぽつりと大粒な雨が落ちても、すぐに止んでしまふのであつた。

青い煙が、こちらの田圃の上にまで、漂つて來た。生木の燒けて剝ねる音が、なほ耳に頻りについたのである。

俥屋が、隣の主人と立話をしてゐた。

「背中に、火を負つて、駈けるやうなもんでさあ。何里行つたつて、頭の上には、雲一つなく、お天道様に、照らしつゞけですもの。倒れてしまひやすあ。まだ、頭がぐら〳〵して、眼が廻つてゐやす」

この男は、今日、仕事をして、倒れたことが、其の話で分つた。

私は、その時、赤い、灸の火のやうに、ぢつと一處に動かずに燃えてゐた、晝間の太陽を眼に描いた。

その太陽は、いまは、西に沈んだ。

「こんな、大きな地蜂の巣があつたよ」

子供等は、土中から堀出した、三階にも、五階にもなつてゐる、灰色の巣を、一人が抱へて、他の、多勢がそれを圍むやうにして、往來を歩るいて行つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「町の藥屋へ持つて行くと、買つてくれるぞ」と、俥屋が、ほんとらしく言つてゐた。

小供等は、立止つて、話し合つてゐたが、つひにあちらへ行つてしまつた。

日は、暮れても、あたりは蒸暑かつた。私は、圃に行つて見た。そこには、石油の臭ひと、ニコチンの臭ひで、息詰るやうな氣がした。その空氣の底に、青い葉が、藥液のために、その緣が、黑く隈取られて、いまにも根や、幹が枯れさうになつてゐた。

夜になると、風が全くなくて、室の裡にゐると窒息しさうであつた。

窓を開けて、遠くを見ると、かすか、あちらに、電が、闇を斷ち切つて、折々閃いてゐた。

「今夜こそは、夕立が來てくれゝばいゝが」

私は、闇の中で、惱んでゐる草の葉や、木の根を思つた。强い藥液を塗られて、傷んでゐる幹や、細い莖などを思つた。それを瀧のやうな、大雨で一洗してくれないものか？ そして、この息詰るやうな暑さを洗つて、久しぶりで、晴々した、笑聲を地上に蘇返へらせてくれないものか？

急に、私は、障子に、ビリ、ビリ、と鳴り響く雷の音を聞いた。

「いよ〳〵來るかな」

家の前を步るいて行く、人がかう言つて、急ぎ足になつた。

あちらの、森の頭が、すつかり見えるやうに、空はまた光つた。

四方で、雨戸を繰る、慌しい音が起つた。

雨が、木の葉の上に落る音が、闇の中から聞かれた。

濕氣を充分に含んだ、冷かな風が、窓に立つてゐる私の顏に吹き付けた。急に、涼氣が肌に染みて、覺えず、慄然とした。

私は、この雨を待つてゐる地上の一切のものに思ひ至つた。白く乾いた地面、石塊、草、木……そして、藥液に燒けた葉、石油のかゝつた幹……存分に、雨が、それを洗つてくれることを祈つた。どんなに、水に渴してゐる一切のものが、それを吸ひ取るだらう。

雨は、だん〳〵强くなつた。雷は、空を駈けめぐつた。電は空と地とが相揉み合ひ、摑り合ふ物凄い光景を刹那的に見せた。

一夜は、かうして更けた。そして、夜が明けた時には、空は奇麗に拭はれたやうだつた。私は、圃に行つて見た。木も、草も、すつかり蘇返つて、地は濕つてゐる。そして梢から滴る雫に、朝日がもう射してゐた。

——一三、七作——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

眞夏の苦熱と涼味

近松秋江

六月の末から赫つと照りはじめた暑さは、七月のお盆も過ぎて土用に入ると、たるみもなく、一日々々と劇しさが加はつた。そこへ以つてきて、西南の風が四五日もつゞけて吹き荒れるので、連日の炎天に乾燥しきつた沙塵が、巷や市中の廣場に濛々と捲き揚つてゐる。道を往く者は、じは〳〵と汗のにじむ肌にその沙塵がざら〳〵と吹き付けるので、まるで人心地もしないほど氣持ちが惡い。奇麗に撫でつけた女の頭髪には埃が白くたかり、男の絽の羽織には、肩のあたりが沙文字が書けさうである。

長い間の炎暑に、身體や金の自由の利く人は都塵を離れた山の上、海のほとりに去つてしまつて、東京にはたゞ働く人間ばかりが踏み留まつてゐる。夏日の清新味も七月のお盆過ぎまでゞ、それが過ぎる、人々の面には連日の暑氣に倦む疲勞の色が表はれる。いかなる健康さうな屈強な男子の容貌にも、日々炎熱と闘ふ苦痛の痕が浮び、憔悴の影が伴ふ。私はそれを見て、何ともいへない無慘な感じがする。人間は、かくまでして酷熱なる氣候と闘はねばならぬのかと思ふ。そして、かくして苦熱と闘はねば妻子眷族を養ふことが出來ぬのかなあと思ふと、人生は實にミゼラブルのものであると感ずる。

それは七月の二十日過ぎ、土用に入つて四五日過ぎてからであつた。私は三間しかない、狹い家の茶の室になつてゐる四疊半に西日が酷しく射込むので、——それを遮るために、六月に此處に移つて來た時、もう西日を豫想して、手ごろの梧桐を二本、植木屋を賴んで植えてもらつたのであるが、その時肝腎の入日の方向を少し見當はづれしたので、折角の梧桐が効ひがなかつた。——そこへ日おほひをしようと思つて、テント様の物を買ふつもりで、四谷の通りに出掛けていつたが、どうも特別に注文しないと、丁度恰好の物がないので、たうとう四谷を通り越して銀座まで電車に乘つていつてしまつた。銀座まで往くと、もう十二時を過ぎてゐたがさすがに人通りの多い銀座街もまる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で深夜のやうに人の往來少く、ひつそりとしてゐる。兩側に軒を並べた店舖も來客が殆ど絕えてゐるので、閑靜としてゐる。店の者も奥に入つて店頭には、何處の店にも人の多くゐる氣はひもない。鈴懸けの路傍樹も、ぐんなりと烈日の威に凋れてゐる。その間を電車が、尖つた神經を刺戟するやうな喧しい響を揚げて走つてゐるばかりである。

私はそんな時に、銀座を歩いてゐて、何ともいへない盛夏の市中の寂莫に襲はれる。

去年の夏の炎暑は、私がはじめて東京に來てから殆ど三十年に近い間に嘗て遭遇しなかつた暑さであつた。東京の暑氣は、七八九月の夏の間に九十度を越す日は三日か四日かくらゐのものである。然るに去年は九十度を越した日が二十幾日もあつた。八月が來ても又九月が來ても、初秋の爽凉なる空氣の色を見て喜ぶことが出來なかつた。

自然は實に不可思議である。單に氣象だけについて考へてみても、「今日は實に好い日だなあ。」と、生存の幸福をしみ〴〵と感じて、天に向つて甘えたいやうな心地にならされるとがあると思ふと、今年の四、五、六のやうに、淫雨三ケ月にわたりても倘ほ霽れないといふやうな不愉快な天候を辛抱せねばならぬこともある。かういふ時には、まるで冥府にでも住んでゐる如く生きてゐる心地もせぬ。生存がつく〴〵厭はしくなる。

ある年の夏八月の、もう土用が明けてから十日あまりも立つてからであつた。二十日ばかりも息も繼がせぬやうに炎天の打ちつゞいたあと、一夜軒下の泥溝に瀧の流れ落ちるやうな豪雨がして、夜一と夜降りとほした雨は、翌日の午頃になつて奇麗に晴上がつた。私の住んでゐる處は、牛込の赤城の高臺の阪の途中であつたが、二階の、西北に向いた高窓から眺めると、のろい勾配になつた牛込臺が江戸川の低地の方に次第下がりに低くなつてゐるのが一目に見渡されて、その向うの方には目白の丘、その左方には早稻田の方から遠く雜司ケ谷、鬼子母神の欝蒼たる杉の森も見えてゐる。そして倘ほその彼方には秩父の連山も見えるのであつた。それが先日中炎暑の打ち續いてゐる間は、天地が濁つた空氣に鎖されて、紅のやうに赤熱した夕陽が毎日毎日毒瓦斯のやうに餘炎を放射しながら、そつちの方に沈んでゐた。

すると、その夜來の豪雨の名殘りなく晴れた日の午後、いつもの高窓から、のろい勾配を成した地面の形なりに人家の瓦屋根の連續してゐる方を見やると、昨日までひどく濁つて不透明であつた其等の屋根や瓦甍に交じる樹木などが非常に透明に見えて來た。蒼く晴れ渡つた大空の空氣の色も爽かで、いつも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は毒々して黄濁してゐる西北の空の果ても今日は清く澄み、藍に染まつた秩父の遠山が、手に取る如く見えてゐる。

「あゝ、もう、すつかり秋だ。」

と、口に出して獨り言をいつた。

その頃から市中には、葉唐辛を賣る聲がよく聞かれる。

「唐辛しやい、とうがらしやい！」

といふ百姓の寢呆けたやうな賣り聲を呼びとめて私はよく自身で葉唐辛のつくだ煮をこしらへる。

凉しい朝餉の膳に、ちやうど漬き加減の茄子の色は朝顔の色と紫紺を競ひ、冷水に拭き滑めた身體には、案外、酷しい暑中にも似ず健康な食欲の進むのを感ずる。

その頃から市中の燒芋屋に拇指ほどの大きさの新芋を煮で賣つてゐる。私はその新しい風味を好む。里芋や枝豆もその頃から、おいおい本當の味になつて來る。ビールの冷したやつをぐつと呷りながら、さういふ清新な野菜で夕飯の膳に向つてゐると、新秋の凉は膳の下から膝のまはりに湧いてくる。（七月四日夕）

扇書き

室生犀星

心凉しからば己が身も凉しかるべしと言へども、俗人俗腸の心つねに凉しきことなく、暑き日をなほ暑く送るが常なり。されど訪ふ人なき眞夏の午后過ぎ、古き支那の詩など拾ひ讀みするうち、何となく支那風なる凉しき心湧くごとき思ひす。――まことに支那の詩はその心に俗念なきゆえ、人間離れして凉しきなり。

方丈渾連レ水。天台總映レ雲。人間長見レ畫。
老去恨二空聞一。范蠡舟偏小。王喬鶴不レ羣。
此生隨二萬物一。何處出二塵氛一。

不忍池のほとりを時をり電車して過ぐるに、早や蓮の翠傘池の央ばを掩ひ、風氣まことに頰に冷たきころとはなりぬ。——われいまだ書生のころより、この池のまはりを幾びか散歩などしつ、つねに心に悲しくは映せるなり。われ成人の後、池畔に臨める楼の裡に坐して一杯を擧げんには、そのときの樂しさ限りなかるべしなどと思ひ、夕もなほ白き觀月橋を亘りぬ。——いま見れば既に一杯を擧げんに痼疾をわづらはらし、十年來の酒を廢したるの後なり。されどむかし貧しかりしものは今もなほその心貧しかるべき諺に漏れず、杖して池の畔を歩めるとき、何やらむ心悲しく思ふ。

享保版「江戸名所花暦」の記すところによれば、毎年初夏のころに蓮茗といへるもの、このほとりの茶店に淹れられしとあり。——蓮茗は蕊強き花に濃く煎じたる茶を程よきほどに注ぎ込み、その花びらを蕾のごとく蓋して後糸にて括り、さかさまにして漏れぬやうにしたるを、別にうすき茶に交ぜて客に侑めるなり。さすれば匂ひ高く、又涼しき翠傘の揺ぐを眺めながら喫まんには、心のどかなりと記せり。——その茶店今いづこにも名殘りを停めず。いたづらにカフェの白き窓かけのほとりに、髮捲ける廳大なる女らの、いとあさましくロオレライを唄ふあるのみなり。

庭をつくり池をうがち池に涓滴の音あらば、その庭に呼吸かよへるごとき心地するべし。池なき庭はあまりに靜か過ぎて、やや退屈の感あらんか？——石を置き水を打つは又涼しかるべし。されど涓滴依稀として絶えざるは、何となく「庭に誰か話したらん」ごとき心地す。

庭に拜石といふものあり。「築山庭作傳」に依れば、庭中第一の石にて、石上は禁帝下萬民に至るまで本朝の神祇八百萬神及諸佛菩薩を遙拜するの所以なり。されば庭中最も清淨なるところに据え置くべしとあり。われは今にいたるまでこの拜石を知らざりしなり。古き人の自然人事に約束せること、その思ひみな涼しからぬはなし。——石は濡れざるべからず。又苔から さるべからず。石は庭の位を高める唯一のものなり。されど今の世は千貫の石を牛車して購ふことは、却つて心さわがしくがするなり。

赤倉溫泉にいと古き一小祠あり、石手洗に筧して清水を灑りて滾したるを見しとき、その石手洗のことごとくが苔蒸し蒼然たるに恍惚とはなりぬ。苔は水清きために肥えずに瘠せ、ちりめ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

んのごとき粗き肌にはあらず、むしろ天鵞絨のごとき細かき肌をして、なめらかに水に砥がれてあり、掬んで手にふくめば、なほ苔の蒼さの偲ばゆ。むしろ妙高山麓の悲冷なる冬季にすらなほ蒼きを湛ふるを思はば、神かけし苔のごとく思ふなり。旅する人の忘りなく見たまへ。

わが庵に一坪のとくさあり、欲して舊きを刈り、新莖のすゐすゐたるを立たしむ。さき細きが、正しく節の列ならびて、或ひは雨後の淋々たる風情、又た夕は蕭條たるの趣意を眺むべし。わけて朝日のこぼれたる光のその列に綿状にさすとき、緑莖みな斑點となりて透きとほり凉味掬すべきなり。されど箒を入るるべからず。一雀の來たるあれば、すなはち莖折れて哀し。——長さは三尺を越え細き筆の軸くらゐの太さなり。聞く信州伊那の里はとくさの名所にて、今なほ一間くらゐのもの、蘆芦のごとく並立てるとなり。旅して眺めたらんには心嬉しかるべし。袖垣に土賊腰と云へるあるは、黒き棕梠縄にてよきほどにとくさの黒き節をまねたる結びやうなるべし。

とくさは下草のなかにては品のある育ちやや卑しく悲しきものなれど、上臈の庭になほ木犀の北に位すべきものなり。池のまはりや石手洗(つくばえ)を圍ふによく、役石の右すべき下草なり。姿は雨のごとく透明ならざれど、雨のごとくなよやかに且つ深緑色なり。されば水邊に育ちよく、乾けるところにはよく育たず、風には勁し、——花は土筆のごとき穂を頂けども、土筆のごとく快活なる相(すがた)なし。陰氣にさびしく折々我がこころに寄り添える姿也。

凉しきはあぢさいの色なり。夏は概ねこのあぢさゐ色なるとき凉しからぬはなし。女の身にまとふものは此あぢさゐ色なり。日落ちんとしてさし覗く夕の空も又この色なり。

あぢさひ色は上品にして少し悲哀を帯びるごとく感ず。猫に金眼(きんめ)なると銀眼(ぎんめ)なると二た色あり、銀眼とはすなはちあぢさゐ色なり。——銀眼の猫すくなしといへども市上たまたま見るところなり。されど魚の眼はあぢさゐいろと言はんより、むしろ藍色ならんか? 池あり洞洗(うろ)を出づるときの魚の眼はまことに靜かにかつ悠乎たるもの也。魚ほど驚きやすきものなく、又落着けるときの靜かにおういうなるはなし。魚の驚けるとき×印のごとく慌へて泳ぎ去る。かれはつねに直線或ひは曲線に又は圓珠をえがくものなるに、×印に泳ぎ走しるとき全く驚ける姿に接

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

するの思ひ深きなり。人間の吃驚りしたるときの心の有態もよくこれに似て悲し。

西洋人の眼はあぢさゐいろなり。田端聖學院の老婦人のたまたま十七八才くらゐの娘を、たづさへ、三四年前よく散歩せるを見受けたり。碧眼まことに涼しきアメリカ娘なりしが、頃日この娘の既に人生の母親となり、その夫とともに白帆のごとき幌立てたる乳母車を押しながら、綠の土手の上を散歩せるを見る。——まことに碧眼やうやくに艶失せたりといへども、一味のあぢさゐ色のいまだ艶乎として走れるなりけり。異國にして己が兒を生み育てる情の、ときに何かと不自由にも感じ悲しくもあらんと思ひたればなり。されど多くの西洋人のごとくともかくも幸福げに綠の路を白衣の裾ひきながら行けるは、その鼻高く且つ紅き夫と歩けるを嬉しと思ひしならん。

越前久頭龍川の上流、平泉寺村に旅行したるとき、とある溪間に髮洗ふ女を見たることありき。——朝の間のすずしき流れに髮洗ふ女は背後向きになり、爪二つたてにならべたらんごとき肌おしひらき、滔々たる流れの音のなかにいと靜かげなり。あたりはこれ幽翠、苔類の蒼然たる色のみ。むしろ艶乎といはんより凄艶なり。されど何となく俗人離れしたるところありて淸楚なりといふが適せんか。山中人語なく、村家ただに散在するあり、予も默して溪間を下れり。——爾來十數年、よくこの情景をかへり見ては、興深く耽讀せし書物を思ふごとく、思ひ出とはなすなり。

鹽原山中に鹽の湯といへるありて、溪間に浴槽を併ぶ。流れ迅くしてをりをり浴槽を洗ふがごとし。三五の女人、人魚のごとき浴後の肢體をあらはにす、却つて俗趣なく風雅なり。河鹿の聲、山蟬ときそひ啼きして山泉澄み亘り夏日の永きを知らずといふべし。又晝寢をするによく、身、山間にあるを思はば步は幽かに思ひ迥かなり。

海水浴は文明的なるものなり。われ海水浴を思ふごとに吉井勇の歌を思ふなり。「麻の帶いさごの上にながながと、解きてかこちぬ身さへほそると」このごとき情趣はわが窺ひ知るところにあらずといへども、又何となく夏の思ひ出をつづるによく、誦して青春の時おもふによし。——濱なでしこ、濱百合、松並木などみな海水浴の思ひ出なり。昨夏、熱海にて都門の紳士淑女の泳げるを見しが、いま思へばこれ一枚の繪葉書をひろ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

げ眺めしごとし。

海水浴といへばアメリカものの活動寫眞を思ふべし。マリイ・プレボストの裸體など美し。――頃日、ワンダーホオレンの美貌に感心す。どうやらアメリカ臭みなく、おつとりと凉しげに見ゆ。

すべて活動寫眞は凉しきもの也。然して悲しく子供らしきが故に、しばしば扇を手にばつちりとはね、暑き日の、しんかんたる淺草に行くべし。行きて西洋美人のこよなき白衣の姿に見惚るるもよかるべし。

眞夏のことば

上司小劍

一

夏は暑いものと昔しからきまつてゐる。それを凉しく生活さうなんて、贅澤だ。

○

夏暑いなんて、金のないやつのいふことだ。

○

夏は暑いのがよい。暑いのを暑いがまゝにおくる。それが夏だ。

○

暑いと言つても、日本なんか、溫帶の暑さだ。たへられないほどの暑さではない。

○

日本は濕氣が多いから、蒸發熱のいやな暑さだ。からつと乾燥した氣持ちのよい暑さではない。

○

印度の曲馬師が來て、ある夏を東京で興行したが、暑くてやりきれないと言つてゐた。實際日本の暑さは、いやな暑さだ。赤道直下の暑さのやうな、男らしく強烈なのでなくて、陰險な、御殿女中式の暑さだ。暑さまでが、日本のは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

コセ〳〵と、小またすくひに出來てゐる。

○

風を呼んで涼しがらうとするのは、野蠻だ。それは冬の日なたぼツこに比すべき原始的なもので、文化的の涼味は、どうしても室全體或は家全體に冷却裝置をすること、丁度冬のスチームと同樣でなければならない。煽風機で空氣を掻き廻はして涼しがつてゐるなぞは、殊にいけない。

○

夏になると、上水道の水が乏しくなる。あれは實に困る。もちろん都市生活者だけのことだが、自然にそむいた都市生活者が、夏になつて一層其の不自然な生活に思ひ惱まされるのは、水の足りないことゝ、なまぬるいことゝだ。深山の岩間に湧き出した淸冽な水や、深い〳〵井戸の底から汲み上げた水とは、まるで別の液體としか見られない。なまぬるい水、機械的の栓へ、人工の鐵管から運ばれて來るなまぬるい水、あれはどうも仕樣のないものか。さうしてそれが夏は兎角足りないのだ。水の儉約なんて、ベラボオな。……水はふんだんに使ひ得るのがねうちだ。湯水の如く……と金錢を浪費するのにたとへるではないか。

○

西瓜、梨子、桃なぞの果物や、若しくは魚類を冷たい水にひたし、或は深い井戸に吊して、それを樂みながら一日の勞働ををへた時、引きあげて喰べる。冷藏函といふ工作物の中で、機械的に冷たくしたものとはまるで味がちがふ。『神が田舍を造り、都會を人が作る』といふ言葉の最も痛切に思ひ浮べらるゝのは夏だ。

○

これは夏に限つたことではないけれど、都會に住んでゐては、鐵瓶のよくなりツこはない。水道の水には石灰分がないから。

○

東京の夏はよい。殊に夏の夜がよい。銀座の散歩。おいしい食物、飲物。美しい人。田舍の夏は空想の世界にしておくべきものだ。實際行つてみると、人は汚ない、食物はまづい。晝は蠅に、夜は蚊に責められて、とてもたまらない。

二

夏の言葉として、私が每年〳〵、人々の口から聞いたことは、大抵以上でつきてゐる。これ等の意味が、今年の夏もまた少し言ひかたをかへて、繰りかへされることであらう。何んと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

言つてみても、夏は暑い。

しかし、全體私は、まだ苦熱といふほどの暑さを感じたことがない。一體に冬よりも夏の方が好きなからであらう。――暑さよりも寒さの方がつらい、といふのではない。――新緑の頃からそろ〳〵、生甲斐があるやうに思ふ私は、眞夏の頂上になつて、遂に到着すべきところに到着したといふやうな氣がするのである。もつと暑くなるのであらう、さアもツと暑くなれ、と覺悟をきめて待つてゐると、それほどの暑さも來ないで、そろ〳〵秋風が吹き初める。言ひ甲斐のない暑さだ。物足りない夏だ。汝の力はもうそれツ切りか、といふやうな氣がする。

私は昔し支那の詩人の歌つた『大火西に向つて流る』（杜詩）といふ句が好きだ。眞夏の暑さを通り越して、金風が城門をたゝく頃の氣持ちは、この一句に盡きてゐると思ふ。したがつて、大火の下に生きてゐる眞夏の生活の花々しさが嬉しくなる。支那の川は多く東に流れてゐるが、大火は斗とゝもに西を指す。西に流れ行く大火の行方（ゆくへ）！　夏には支那の古い詩人が懐かしくなる。

三

眞夏の苦熱の味はれるのは、奈良だ。あの古い都には殆んど川がない。都市として發達しなかつた原因もそこにあるのであらうが、川のない都の暑さ、寂しさ。大内裏のあつた昔しも、眞夏には猿澤の池の畔が、唯一つ涼味の掬び場所であつたのであらう。これは今も同じことだ。荒池といふのが出來て、其の畔の奈良ホテルでは、聖武の帝も知りたまはなかつた、美酒佳肴はあらうけれど、沈滯した池水からは、どうしても清爽な涼味を掬びにくるものだ。ちよろ〳〵水の小川でも、流るゝ水が暑さをしのぐ生命である。『風（かぜ）そよぐ奈良の小川の夕暮（ゆふぐれ）はみそぎぞ夏のしるしなりける』と平城朝期の詩人は歌つてゐる。

膝までも浸（ひた）さない小川で、水浴をして、涼を入れ、且つ身を清めた昔しの奈良市民の暑かつた如く、今の奈良市民もまた眞夏の暑さに弱つてゐる。佐保川で水浴といふやうな、のんきなことも、今は出來ないから。

奈良の夏は、春日山の麓を、水谷川（みやがは）の流れに沿ふて、一里半奥の鳶の瀧に行く。そこはこの古都（こと）で、一番涼しいところだ。大軌電車に乗つて生駒山の長い隧道（トンネル）へ入（はい）るのも涼しいけれど、電車が停電か脫線でもしない限り、十分間とは居られない忙しい涼味だ。

四

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私のまだ書生時代だから、もうよほど前のことだ。ある夏の日中に、其の頃高輪の車町で、美しく若い奥さんと二人で生活してゐた堺利彦先生をたづねると、先生襯衣一枚に猿股で、奥さんの團扇に煽がれながら、机に向つてゐた。築地の下宿屋から徒歩で漸く辿り着いた私が、暑い／＼と言ひながら、奥さんの（今の奥さんではない堀紫山先生の妹さんで、其の又妹さんが曾つて大杉栄氏の夫人だつたといふ因縁だ）。團扇の風のお裾分けに預らうとすると、主人は大きな聲で、私が暑い／＼といふのを笑つて、

『君、夏暑いなんて、金のないやつの言ふことだぞ。』と、一喝した。私は實にこの金玉の銘言をこの時におぼえて、一生忘れないのだ。さうして、主人は私を近所の潮湯へ連れて行き、一浴の後浴衣に着更へ（と言つても、私の着て行つた着物よりは、ズツとそこの浴衣の方が上等であつた。）風通しのよい二階で海を眺めつゝ、冷しビールに、洗肉か何かの御馳走になつた。成るほど涼しい。世の中にはこんな涼しい世界もあるのだと、私は其の時つく／＼感心した。

『夏暑いなんて、金のないやつのいふことだ。……』

それを、後年日本共産黨の首領になるべき人に教へられたのだから、殊に味がある。

この時の涼味を、今に忘れ得ない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時論

法學博士　吉野作造

兵卒に代りて
……軍隊改善問題の一端……

◎

僕が兵卒保健問題を本誌に紹介してから、各方面の未見の友より頻繁に賛否兩面の書信を接受する。軍隊のアラをさらけ出し國民並に兵卒の士氣を沮喪せしむるとは怪しからぬ非國民的行動だと、まじめに責めらるゝ方もあるが、默つて此儘に放任することが却て民間に軍隊反感を釀成する所以なるを信ずる僕は、どうしても事實を有りの儘に紹介して國民を警戒し又當局の反省を求めずには居られない。已に之れまでも再三同じ問題を論じたが、次にまた最近に得た二人の友の愁訴を其儘發表しやうと思ふ。現に苦み惱んでゐる人の飾りなき告白は、百の議論よりももつと雄辯に問題の急要を說くものと思ふからである。最後に僕は二人の筆者はみな最も信用するに足る着實な青年であることをことわつて置く。

◎

先づ一年志願兵として先頃特科生となつた方のから紹介する。特科生とは普通の一年志願兵が中學を卒業したばかりなるを常とするに反し、各々專門學校以上の卒業生で、首尾よく行けば軍醫、藥劑官、主計等に任用さるゝものを云ふらしい。之は執銃演習は全然なく、代りにそれ〴〵特別の學課を授けられ首尾よくゆくと十一月末に任官されることになるのださうな。書面の一節に曰ふ。特科生は入營のため各自職業の方で打擊を受けてゐる故、皆一日も早く除隊したがつて居る。所が之は人數が少い故餘程怠けても任官される恐れがある。試驗の時なども「忘れました」「出來ません」の連發を競爭するのだが、それでも任官されるのには閉口する。私もこの十一月には如何にして落第しやうかと今から氣が氣でならぬと。變な制度もあつたものだ。

彼れ曰ふ。間稽古の猛烈といふことは先きの御命の中にもあ

つたが之には私も呆れて居る。主として上等兵候補者に限るのだが、朝食前と夕食後と隨分烈しくやる。ことに夕食後は助教（軍曹）助手（上等兵）の顏が見えなくなるまでやらさるゝ。志願兵は割合に呑氣で夕食後、馬鹿話をしたり端書を出したりして居れるが、時々暗闇のうちから『俺の顏が見へなくなつたからつてズベタラにやると承知しねェぞ。もつと氣合をかけてやれ』と云ふやうな助教の聲をきくことが屢々ある。胸膜炎にかゝる者の多いのも無理はないと思ふ。

懲罰の慣行に就ては曰ふ。普通にやる罰に速駈けといふのがある。朝の集合の際服裝に一寸した欠點があつたり整列が少し遲れたりすると二百米突以上も速駈けさせられる。營庭と違つて練兵場となると五六百米突に及ぶことも珍らしくない。而かも其の駈け方が遲かつたり又いやく駈けてゐる風が見へると、もう一度駈けて來いと呶鳴られる。斯くてヘトくに疲れた所を一般兵と共に猛烈な演習をするのだから堪つたものではない。更に非常識なのは、卷脚絆（ゲートルのこと）をまく競爭をさせて遲れた最後の三分の一の人數に速駈けを命ずるといふのである。私も入營以來毎朝三四十人の速駈けをやつて居る兵卒を見ぬことはない。

更に毆打の蠻風に付て曰ふ。なぐることは割合に少くなつた樣に思ふ。が自分の現に目撃したものゝ中から二三の記憶を述べると、此春のある雪の朝、私達全部營庭の雪掻きをした時、初年兵教官たる某將校が「氣を付け」の姿勢がわるいといふ丈けで一人の兵卒を平手で五つばかり張りどはし、足がらみで雪の上に、投げ倒した上更にも一つ蹴飛ばしたのを見て驚いた。その後またある將校が初年兵の全部を平手でピシヤく毆つてゐるのを遠くから見たこともある。志願兵はなぐらるゝことは絕對にないが、普通兵はどんな人でも一度もなぐられたことのないといふ者は絕無だらうと思ふ。斯んなことは餘りに普通なので此頃は見てもピンと胸にひゞかぬ樣になり少くも異樣に感ぜぬ樣になつて了つた。

彼は結論に於て曰ふ。保健問題との關係を暫く論外とするも、刻下改造の急要第一なるは言ふまでもなく優秀なる下士の養成である。軍隊でも努力してゐないではないが、今の儘では結局駄目だ。一般兵の中から出る上等兵殊に伍長勤務上等兵などには時々敬服に値する立派な人物が居るが、正式の下士となると、之を志願する者が悉く下らぬ兵のみなのでとても御話にならぬ。而して實際兵卒と一番よく接近し彼等の運命を最も緊切に支配するものは、實に班長と稱する軍曹伍長ではないか。その軍曹伍長がドンく上司の命令を奉じて兵卒を牛馬以上に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

酷使するのでは、將校連がいくら中央で苦心しても軍隊改造は全然徒勞に屬するの外はない。演習から歸つた下士が自分の寢臺にねそべつて當番の兵卒に靴の紐を解かせるなどは、今時は我儘な大名にもない圖だと思ふ。靴の紐でさへ斯んな有樣だから、洗濯其他一切の雜用を命ぜらるゝは勿論である。要するに制度の問題ではない、下士たるべき人の問題だ。こゝに着眼して一大英斷の擧に出るなくんば、軍隊はいやな處、恐しい處、馬鹿々々しい處、悔しい處とする感念は、到底兵卒の印象の中から削り去ることは出來ない。

筆者は更に傳令に付ても意見を述べて居る。傳令は取も直さず昔の從卒だ。從卒として受くる物質上の苦痛や精神上の屈辱やは此前にも說いたから玆には紹介の勞を省く。

◎

もう一つは普通の兵卒の書信である。筆者は中等程度の學校を卒へた者だが事情あつて一年志願をやらなかつた。從て前書の所謂初年兵としての苦痛をば十分に嘗めたものだ。彼は云ふ。彼等から觀れば一年志願兵は神樣のやうに取扱はれて居る。兵營生活の悲慘苦惱は普通兵でなくては味はれるものではないと。斯くてポツ〳〵と語る所を次に摘記して見る、

……今私の隊では、上等兵候補者の開稽古が最も激烈に行はれてゐます。朝は起床即時より約二時間、夕は空き腹で六時から七時半頃まで銃劍術をやらされます。少し緊張を欠いたと見ると、すぐ「早駈け」と來ます。遲いと二度も三度もやらされます。武具を着けたまゝ聯隊一週といふのが普通です。私共は精も根も盡きて時々卒倒することもあります。

……入營してから私の隊に四名の自殺者を生じました。或は鐵道自殺、或は縊死。上官は其都度申します「彼等は氣が狂つたのだ」と。併し少くとも私の識つてゐる右の四名は、情誼にあついごく眞面目な青年達でした。上司の酷待より兵營生活を極度に呪つた結果としか思へません。

……內務班の掃除がわるいとか、下士に對するつとめが足りないとかの理由で、多勢の初年兵に「廻りなぐり」といふ罰を課せらるゝことがあります。初年兵同志有らん限の力を絞つて全友兵の頬を順繰になぐりまわるのです。何といふ情けないことでせう。この時だけは堪えがたき懊惱に本當に死にたくなります。もう何度やらされたことでせう。確に七八回は繰り返されました。

以上の外なほ他に二三項の改革意見を述べて居るが、いづれも言ひふらされたことだから略する。

孰れにしても軍隊が今日猶ほ斯んな狀態に放任されて居ると

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いふは餘りに甚しき當局の怠慢ではないか。己れを責むる者に惡意の罵倒を浴せるひまに、はやく自家頭上の蒼蠅を拂つて欲しいものだ。

小題小言

◎

有島君の死はわれ〱友人に取つて何と云つても堪へ難き悲みの種だ。社會的に謂つても彼を喪つたことは非常に惜しい。僕の知る限り彼程良心に忠實な人はない。彼程自己の所信に忠實たらんと努めた人は外にあまり多くなかるべく思はるゝ。その所謂良心なり又所謂所信なりが、客觀的判斷に於て眞の正しきものであつたかどうかは別問題だが、彼自身の問題としては彼は徹頭徹尾眞と誠とを以て自己の生活を一貫せんと奮鬪した人だ。

併し世間の事は自分の思ふ通りにのみは往かぬ。世の中がもと〱不完全な以上、自分だけ正しい純な生活をしやうといふのは土臺無理だ。が有島君に於ては此意味の妥協をすら認容するを肯じなかつた。而して彼れは物質的にも精神的にも頗る惠まれた境遇の裡に順調に育まれて來た丈け、彼の生活はさうした環境から到底離れ去り得ざるに拘らず、彼の良心は常に自己の低迷安住を烈しく責めて已まなかつた。我々に在ては單に食ひ且つ眠るといつた類の所謂日常茶飯事に就てすら、彼は常に深刻なる反省を加へ痛烈な煩悶を感じて居つたらしい。君と會談する機會をもつ毎に、僕は其の異常な苦勞性を笑ふよりも、寧ろ自分のなれ切つた平凡さに恥ぢ入らしめらるゝことが多かつたのである。

されば或る意味に於て有島君に取て生は則ち惱みであつた。こゝに彼れの作物なり行動なりに現はるゝ光りの一面の源はあつたと思ふ。而して彼れに大なる過失を犯すことありとせば、以上がまた同時に其の有力なる一原因でなければならぬ。

◎

何時何んな場合に於てゞあつたか忘れたが、僕が君の樣にさう堅苦しく考へては一日も此世に活きては居れぬではないか、斯うしてうまい料理に舌皷を打つてるといふが既に自分の思想に取つては大きな妥協なのだ、絶對的に所信に忠ならんとすれば死んで了ふの外はない、と冗談まじりに放言すると、有島君は意外に沈痛の面持にしばし沈默深思して一座を不思議に緊張せしめたことをおもひ出す。今になつて考へて見ると、有島君は結局良心の純眞を傷けるに忍びずとして肉體を棄てゝしまう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

運命の人であつたのかも知れない。

◎

併しこの運命を遂ぐるの機會を波多野夫人との戀愛昂進の際に求めたことに對しては、どう考へても遺憾の情を禁じ得ない。外の場合ならイザ知らず、此場合我々の觀て居た本當の有島君は、まだ〳〵死の解決に急ぐべきでなかつたと僕は思ふ。

有夫の婦を戀するのが間違だと云ふ樣な陳腐な考は僕と雖も固より執らぬ。在來の結婚法の不都合な結果、有夫の婦が異日夫以外の男に戀愛の對象を見出すといふ事實を不思議とも思はない。從つて斯うした婦人に在來の道德を強ゐ形式的の貞操を迫つて其自由を極度に拘束するの不當なることをも僕は承認する。目覺めたる婦人が舊式道德よりの解放を要求するのは、其の方法の是非は暫く措いて、其事自身頗る意味のあることだと信じて居る。併し乍ら我々の飽くまで忘れてならぬことは、そはその婦人の問題であつて、斷じて他の男の問題ではないことである。換言すれば、有夫の婦が其夫に向つて自己の新しき戀愛關係の處理を求むるが當然の話だとしても、其間に新しき戀人たる男が干入して人爲的に其解決を促進せしむべき權利は毫頭ないと信ずるのである。

波多野夫人のことは別問題とする。彼女が現在の夫をすてゝ有島君に走らんとせる經緯にも諒とすべきものはあると假定して置かう。而して來り投ずるが儘に之を受け容れて事件を退つ引きならぬ極地に追ひ込むは、俗情の誘惑だ。有島君にして本當に波多野夫人に眞心からの戀愛を感じて居つたのなら、出來る丈け波多野夫人の此際に於ける義務の成就を助くべきではなかつたか。義務とは何かといふに、所謂三角關係の處理を、古き形式的道德の打破から新しい合理的秩序の建設へ導く樣に片附けることに外ならぬ。この點に於て有島君の執つた態度に僕達は限りなき遺憾の情を禁じ得ない。

◎

さは云へ有島君の悲慘なる解決は、やはり彼の飽くまで所信に忠ならんとする努力の結果に外ならぬことは認めない譯にゆかぬ。道德的批判に於て僕は到底彼に與みすることは出來ぬけれども、彼が徹頭徹尾眞と誠とに終始せることを觀て、僕は彼の生涯は亦眞個一藝術品たるを失はぬと思ふ。間違つたとしても一種人を魅する味がたゞようて居るではないか。

料理法の指示に從て彼れ此れと精密な調合をしてもうまい味が出ると限らない、出ても必しも同じ味とは限らない。法則に合はねば概してうまい味の出ぬを常とするが、名匠の手にかゝると、破格の調合からも云ひしれぬ特異の味の出ることがある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

教訓を求むる様な目で有島君の死を觀てはいけない。一種の味をあぢはうときに始めて死んだ彼も我々の間に仍ほ昔ながらの親しみを以て再現して來る。彼は我々に對して餘りに親切であつた。概して彼は人として餘りに美しかつた。彼自身の足助氏に送つた「溫い思出のみ殘る」の一言は即ち今の僕達の感情そのものだ。而してこの溫い思ひ出がまたどれ丈け我々殘されたる友人達の心を溫めるか分らない。只之が爲に我々は彼の過失に對してまでも眼を掩うてならぬことは勿論である。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

東京上野

松坂屋いとう呉服店

（振替東京五八〇〇番）



夏のよろこびは旅！

御用品は松坂屋へ

▽飴色柳製服入鞄
二四……十九圓
二二……十六圓七十錢
尺八……十三圓

▽バスケット
六十五錢以上各種

▽千代田袋
三圓三十錢以上各種

▽同　籠底
七圓十錢以上各種

▽膝掛
自……七圓
至……三十圓

▽ステッキ式洋傘
自……六圓六十錢
至……十圓三十錢

▽折疊式洋傘
十四圓七十錢均一

▽海水着
自……一圓二十錢
至……二圓五十錢

▽浮袋
自……一圓八十錢
至……二圓十錢

▽登山袋
自……二圓九十錢
至……七圓七十錢

▽ゲートル
並……一圓三十錢
上……四圓三十錢

▽マホー瓶
一合七勺……一圓六十錢
二合七勺……一圓九十錢

▽水筒
並……一圓三十錢
上……二圓

御旅先からの御注文はお葉書一本で迅速にお間に合せいたします。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



押し花

室生犀星

「唯今、――」

さういふ聲がすると俊子はうしろ向きになつて玄關から飛び込んで來たのに、お歸へりなさいと言つたがさういふ隙間もなく襟合せから、冷たい手を挿し込まれて乳房のあたまを觸られた。

「きらひ！　そんな出し拔きにお乳房なぞに觸つたりするのは？」

「でもけふは早いでせう。一番さきに歸つて來たんだもの。」

少しくらゐ極まり惡るさうにしてゐてもいいのに、寧ろけろりと別のことを言つたりして子供らしくもないと思つた。そのけろりとした顏付でまだ手を胸のところから出さうとしなかつた。

「そんなに急いで歸へらなくともいいわ。お友達ちと一しよにかへつてゐらつしやればいいのに。」

「お母さんは一人きりだから寂しいだらうと思つて早くかへつたの。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

俊子は微笑んで默つて光三の手を自分の胸からハネ退けた。光三はその手を所在なささうに膝の上に置いた。——俊子の母親は、あの子が一番心配だつたのだが、ふしぎに馴染んで了つていい鹽梅だ。あの子にすねられたら立つ瀬がなくなるよ、——と左う言つたが、俊子は默つて微笑つて、「六年も母親なしで育つて來たんだから無理はないのよ。けれどもあの子は年格恰から言ふと酷くませてゐるんだから別に馴染むわけもあるやうな氣がします。」と言つてべつにその理由を言はなかつた。

子供らしくもないと思つたことは再度や三度ではなかつた。もう一つ何處へ行くにも連れ立つて歩くので、どうかすると姉弟としか思はれなかつた。とつて六になる俊子は、十一になる光三とは、若づくりなだけ弟のやうにも人の眼に際立つて見えた。それに人込みや電車のなかで光三は言ひにくさうにもしないで、お母さんと呼んで俊子のかほを赧らめさせた。ただ馴染んでゐると言ふばかりでない。——何となくその馴染み方がくどいやうな氣がした。俊子はそのことを考へると怕いとも思つた。

「お前が來てから妙に光三が外へ遊びに出なくなつたやうだよ。以前はちつとも家にはゐなかつたんだが……おれも光三がなついで呉れるんで何よりだと思ふんだ。あのくらゐの年になると却つてどうやら分りのよいものらしい。」

夫の新井も左う言つて、やはり俊子がよくしてくれるからだと考へてゐるらしかつた。俊子には始めはよく光三の氣が分らなかつたので、ただ平常のやうにしてゐたが、來た翌くる朝からお母さんと呼んだのには愕いてしまつた。

「姉弟みたいなお母さんだわね。」

俊子は戯談に言つてみたものの實際はその通りに見えた。そんなことも氣になつて買ひ物に出ても、拉れ立つてゐる光三がひどく不調和で、親戚の男の子とでゝ歩いてゐるやうで、決して親身のものとは思はれさうもない——。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「だんだんお前たちの仲に若がついて來て、しまひには本統の親子のやうになつて見えて來るよ。」

「だつてあんまり大きいんですもの。」

俊子は今のうちは光三も珍らしいからなつくものの、珍らしくなくなると、あの子の氣性だと辛いこともあるだらうと、さうも心づかひがされた。——ちよつとした手紙を書いてゐても、煩さくそれは何處の誰に出すのだと言つて聞かなかつた。そればかりではない、家中にきれの長い可愛らしくもない眞面目らしい眼付が瞠つてゐて、氣の弛むところもなかつたのである。——今もぴつたり體軀をよせて動かうとしない……。

「そんなに家にばかりゐると弱虫になりますよ。ちつと外へ出てみなさんと遊んでゐらつしやいな。」

「外へ出たくないんだもの。」

「ぢやお母さんは忙しいんだから、あつちへ入被つしやい。そばにばかりゐちや何もできはしないから。」

「だつてお父さんがそばにゐて僕がゐてはいけないつてことは無いぢやないか。僕何もすることはないんだもの。」

俊子は平氣でさういふ光三をみると、やはり尋常の子ではないと思つた。

「そんな口のきき方をするものぢやありませんよ。その子はみんな面白さうに遊んでゐるぢやありませんか。」

「遊びたくないんだ。」

俊子はぢや勝手になさいと言はうとしたが、いまからそんなことを言ふ日になつたら、末々困るだらうと思つて默つて了つた。——光三は不圖こんなことを言つて、俊子を吃驚させた。

「お父さんがお留守のときにはなるべくお母さんのそばにゐるんだよ、と左う言つてゐたんですもの。」

「何故?」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「なぜだか知らないけれど……」
「それでお母さんの傍ばかりにゐるの。まるでお母さんの見張り役だわね。光ちやんは？」
「だつてお父さんの言ひ付けなんですもの。けれど僕何も言ひつけはしないんだ。」
光三の顔を見つめてゐると、その顔が新井そつくりに掏り變へられたほど、似てゐた。磊揚でそのくせ細心なところのある新井のことだから、これは光三の作り事ではないと思はれた。それにしても光三とそんな話をしてゐる閑暇が何時あつたのだらう、——そんなこともあるかと自分でも能く注意してゐたのだつたが、よくよく閑暇を偸んだものに違ひないと思つた。
「光ちやんはよくそんなにお母さんなんて來たばかりのわたしに言はれるのね。それもお父さんから教はつたのでせう。」
「ええ、ずつと前から左う言はなきやならないつて言はれてゐたんです。」
「ぢやわたしの來たのがやはり光ちやんには嬉しかつたの。きつと然うでせう。いつも獨りでゐたんだから無理もないことだわね。」
俊子はむしろ甘やかしさうに優しくさういふと、光三は脆く感情的になつて、もぢもぢして顔をあからめた。それがすぐ親くならないだけ、俊子の注意を惹いた。いつか新井が、「肝腎のおれよりも光三が夢中になつて、何日來るなんて毎日せがんで爲様がなかつたんだ。」と言つたことを思ひ出しても、光三が、待ちあぐんでゐたことが分るし、しぜん可愛相な氣もして、できるだけ甘やかして遣りたいとも思つた。けれども才が發けて何んでも氣のつく光三だけ、氣味わるいところが咎めて、向ふでなつくほど、心では却つて冷淡な氣もした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「さきのお母さんとどつちが好き、――。」

「どつちも好きさ。」

「どつちも好きぢや分らないぢやないの。餘計に好きなところのある方を言つてごらん。」

俊子はわざと光三の手を取つて、表情のない顏から腹の底までも見透すやうな眼付をしたが、やや考へてゐた光三はふと此麼ことを言つた。

「さきのお母さんの事はもう忘れてしまつたの。」

「そんな筈はない！　たつた六年にしかならないぢやないの。」

俊子は自分にもなく意氣込んで、初めて氣付いたが、光三はれいのけろりとした語勢で言つた。

「ほんとに覺えてないの。まだ小ちやかつたんですもの。」

そんな筈はない！　俊子は小ましやくれた光三の顏を見るだけでも腹立たしかつたが、反對に言葉は優しかつた。

「さう言へばさうね。五つや六つでは何もおぼへてゐられはしないのね。」

「けれどもお母さんも好きなの。」

光三は氣が濟まない顏をして、あまえて俊子の膝にもたれかかつたが、俊子はそつとその手を除けた。――光三にはその平氣な顏をしてゐる俊子が際立つて冴えた眼をしてゐるだけ、コワい氣がした。――暫らくしてから光三は

「僕そとへ行つて遊んで來やうか知ら。」

これまで言ひ出したことのない事を寂しさうに言ひ出した。俊子は脅かされたやうな氣がした。が思ひ切つて、わざと柔しい聲で言つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「えゝ行つてゐらつしやい。」

が、光三はべつに遊びたいやうな氣振りも見せないで、まだぐずぐずしてゐた。あんな當て付けを言ふほど心が拗れてゐる……と思つた。

隣の寫眞屋の植込みを隔てて、もう一叢だけこちらでも植込みをしてあるだけ、をりからの椎の若葉で靑い反射のくる椽側に、たゞたてに長い總象牙の古い支那の鳥籠が吊されてあつた。鸚哥か何か入れたらさぞ美麗しいだらうが、いまは空のまゝになつてゐる。丁字形の止り木にもまだ一度も鳥を入れた痕がなかつた。

「何か鳥を入れたらどうでせう。こんな空の鳥籠を吊つてをくのはおかしうございますわ。」

新井は何度も俊子から左う言はれても、鳥を入れやうとしなかつた。

「空の鳥籠といふものもいいものぢやないか。ああやつて置くと中にゐるやうな氣もするから――朝なんぞ全く中にゐるやうだよ。」

「まだ一度も入れたことがないやうですわね。すこしも汚れてゐなんですもの。」

「中にいつでも居ると思へばいいぢやないか。」

「古くからあるんですの。」

新井はすぐ答へなかつたが、光三は籠を覗き込んでゐたが、思ひついて言つた。

「僕この籠に蟬を入れてはよく逃がしたりしたの。目がこんなに粗いんだから幾ら捕つて入れて置いても、朝になるときつと居なくなつてゐるんだもの。はじめは少しも氣がつかなかつた。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「蝉ぢや逃げてゆくでせうね。」

そんなに古くからあるのか知ら？——俊子はそれ以上問ねないで默つてゐた。新井は何かの辨疏らしい調子で「何時でも今度こそ鳥を飼はうと思つても、ふしぎに途中で人に會つたりして買へないんだよ。だから飼はないことにしてゐるんだ。」と言つた。俊子はその言葉がはつきりと頭に殘つた。

「餌を入れてをくところにSの字があるでせう。戸の鍵のところにね。これだけあとで拵へたものらしうございますね。」

光三のそばへ寄つて何氣なく俊子は、白い象牙の、いかにも後から細工したものらしいSの字を見た。支那の鳥籠にこんな西洋の文字があるのが些つとふしぎな氣がした。

「細工人が勝手にこさへたものさ。あとで氣がついたんだがどうにも爲樣がなかつたものだから。」

新井は鳥籠に目もくれないで、新聞の上に目をさらしながら、べつに變らない聲音で言つた。Sの字——俊子は思ひあたつて、鳥籠を離れた。

「何か鳥を買つてきて頂戴。——青い鳥がいいな。」

「でもお父さまが、入れない方がいいつて仰つてゐらしやるんだから……べつに飼つたらいいわ。」

新井がそのとき突然に顔をあげて言つた。

「飼つたつていいよ。」

「どんな鳥がいいでせう。」

「さうだな、鸚哥がいいだらう。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「鸚哥つてどんな鳥か知ら?」

「青いきれいな鳥だよ。あの籠だと恰度大きさもいい。」

新井はすぐ俯向いて又た新聞の上に眼を注いで了つた。なるべく俊子と話を深入りさせまいとするらしい。――俊子は今からすぐに鳥屋に行つて呉れといふ光三をなだめながらも、ひよつとすると此の鳥籠に何か因縁があるやうに思はれてならなつた。左う言へば何時か新井の手文庫の何かの書類のなかに入れてあつた半身の寫眞の姿が、その鳥籠のそばに立つたこともあるやうで、わざと鳥を入れないで吊つて置くのにも深い意味が匿はれてゐるやうにも思はれた。――その後寫眞をもう一度見ようと思つて搜したけれど、手文庫の中にも若しやと思つた新井の財布のなかにもなかつた。俊子は隣りの寫眞屋にまだ種板が殘つてゐるに違ひないと思つた。

「でもね。お父さんが買つていらつしやるまで待つてゐる方がいゝわ。今からつて直ぐ出掛けられはしないんだから。」

「そんなに待つてゐちや何時のことだか分らないんだもの。詰らない。――」

光三はすぐ立ちさうもない俊子の肩をゆすぶつてゐたが、ふと新聞紙から放れた新井の鋭い眼さきを感じて、ぐずぐず言ひながらも扛げて言はなかつた。そして不機嫌さうに玄關から通りへ遊びに出た。

「お前だけだと妙に家にばかりゐるやうで、おれがゐると遊びにでかけるのはおかしいね。ためて氣づけて見てゐるんだが……。」

「そんなところもありますね。」

新井が不在のとき俊子のそばに居るやうにと言つたのは、あれは光三の作りごとだつたらうか。あんな子供がさう甘く作れるものぢやないと思つてみたが、いまの新井の言葉を聞くと新井は何も知らないやうでもあつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「光三はすこしも馴つてやらなかつたものだから、まるで野放しそつくりなんだよ。だからお前も氣骨が折れるだらうが、まあ面倒を見てくれるんだね。それに馴ついてゐるんで何よりだと思ふんだ。なかなか馴つかないものらしいからね。」

「それはわたしもいい鹽梅だと思つてゐますの。あんまり人なつこい子なものですから却つて……まるで姉弟のやうに見えますの。」

「あの通り大がらだからね。」

　新井のさきの女は、寫眞で見ただけでも肉厚な、光三のからだ付きから察しても色の白い女らしかつた。よく光三の言ふには茶の間の電燈が新井よりも女の方が、スヰッチを捻る役目をしてゐたとのことだつた。いつか俊子は茶の間に下つてゐる古い電燈の球の下へ立つたが、電球までには充分二寸は隔つてゐて、爪立てをして漸つと指さきが、とどくくらゐだつた。だから身長もよほどすらりと高い大がらな女らしくも思はれた。始めのうちは何とも思はなかつた新井の亡妻が、二タ月三月と經つたこの頃ではまだ生き永へてゐる對手のやうに思はれ、細かい些つとしたことでも知りたくてならなかつた。隣の寫眞屋へもそれとなく七年忌だとか言つて、寫眞を一枚だけ手元に取り寄せて、どんな女か最う一度よく見て置きたいとも思つた。それにしても新井は自分が手文庫の寫眞を見たことを、どうして知つたのだらうかいや知らないで片づけたのかも知れない。——

「それにあいつはすこし變だよ。あんなに懐いてゐるのも、たんにお前を母親としてではなく女としてなついてゐるやうなところがあるよ。」

「まさか、そんなことはありますまいよ。まだ十二やそこらぢやありませんか。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「あれは他の子供とは違ふ。よく氣をつけてごらん、きつと思ひ當ることがあるから……。」

新井の言ふまでもなく、俊子にはいろいろ肯づけることもあつたが、故意と知らないふりをして、呆れたやうな顏容をして見せた。新井は考へるやうにして俊子を見詰めながら、いくらか光三のことを言ふことが、明らかに俊子に示す好意の顯れでもあるやうにも、眼慧い俊子は見て取つた。

「いつ頃からあんな風になつたか分らないが、實際驚くほど變化つたませ方をしてゐる。――此間大森へ行つたときにお前は誰かに會つたらしいね。」

「ええ。」

俊子は、あれを口止めして置かなかつたのが、今になると却つてよかつたとも思つた。若し左うだつたら、その口止めまでしたことが、そつくり新井に知れたのだと思つた。

「伊豆でおあひした方ですの。三木さんて方でございますの。光ちやんがそんなことまで言つたんですか。」

「うむ、それも何だか子供らしくない告口だからね。べつにその他のことは言ひはしなかつたがね。」

切長い新井の瞼が神經的に震えてゐるやうで、俊子はこんな夫の表情をいま初めて見ると言つていいくらゐだつた。滅多に怒らないねつちりした性分だけに、異樣な壓迫があつた。が、言葉は依然靜かで冷然としてゐた。

「わたし些つとご挨拶しただけでございましたが、光ちやんにもこまりますわ。そんな風に取られちや全く！」

「あれも何氣なしに言つたんだらうと思つてゐたが、しかしあとで考へると奈何にもあれらしい見付け方だと思つたのだよ。いや氣にするほどでもない。――」

新井の口さきばかり靜かなところが、却つて俊子には何も彼も監視づけて置いて、自分は一向それに預らない風をし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てゐるのは、質の鈍い切れもので觸られたやうで、觸つた氣もちになつた。――あながち光三ばかりが惡ばしこいのではなくて、新井の附智惠が手傳つてゐるとも思つた。

「溫泉にゐる間にお知り合ひになつただけですもの。それきりなことなんです。」

何か尋ねるかと思ふと、新井らしくそれには答へないで、その話をけろりと形づけてしまつて、

「しかし學校の成績はわるい方ぢやないんだ、あれで學校までわるくては最う完全な不良少年だよ。」

と言つて、學校だけはずつと質さへよければ、大學まで續けてやるのだと言つた。いかにも樂しさうで望みをかけてゐるらしい口振りだつた。――俊子は、大學の制服を着けた光三の姿を想像するだけでも、急に末恐しく行手が寒がるやうな氣がした。

日が移ると椽側の障子に鳥籠の影がある。日かげがうすれると、籠の目がおのづから薄墨色にぼかされ日かげがなくなると、籠の姿がない……。

「見てゐらしやい。こんどもすぐ消えてしまふから。」

曇天の日で、光三は俊子のそばを離れやうとしなかつた。頸だとか手だとかに煩さく纏ひついて、むやみに甘えるときは方圖もなく甘えた。……たてに長い鳥籠は日のかげがすると映つたり又消えたりする。俊子はやはりその傍に新井の亡妻が立つてゐるやうな氣が、昨日見た寫眞の感じからも手傳つて、變な氣もちになつた。

「ほら、あの柱が窪んでゐるでせう。あれは何時かお父さんが、癇癪を起して、女鎭を投げつけたんだよ。せんのおさんのゐるころなんだ。」

柱の角がへこんで、まだ生新しげな傷があつた。氣になつてゐたが何氣なく光三の言葉を聞くと、へいぜい默つてゐる新井の內攻してゐる氣持ちが手に取るやうに見えもした。直ぐ傍に寫眞の女のつッ伏してゐる姿が、やはり目に見えるやうな氣がした。

「しよつちう其麽ことをなさるの。」

「しよつちうぢやない、――旅行から歸ると何時もさうなの。いつかも母さんと話してゐて茶碗をへし潰してしまつたことがあるの。こんなにして――。」

伎子は、光三の手眞似をしてゐるのを見ると、その細い手つきまで新井に似てゐるやうで無氣味だつた。

「此間電車で挨拶をしてゐたのをお父さんに告ひつけたのね。」

「ええ。」

光三はちよつと極りのわるい赤い顏をした。

「あれはお父さんから尋ねたすつたの。それとも光ちやんが言ひつけたんですか。」

「お父さんからなの。僕惡いことを言つてしまつたな。これから言はないから、こんどはごめんなさい。」

「言つたつて關はないことなんだけれど、いろんな事をたづねられると困るからね。光ちやんも言つていいことと惡いこととは知つてゐてもいいわね。」

「ごめんなさい。」

光三は、正直にさういふと、眉白んで悄氣てしまつた。伎子はわざと光三の手を取つて、膝のところへ引き寄せて、何か內密のことでも話すやうに生優しい聲で言つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「これからずつと光ちやんと一しよに暮らしてゆくのでせう。だからどつちも助け合つて行かなければいけないわ。光ちやんのいけないところがあつても、みんなお母さんがかばつてあげるし、又お母さんのいけないところも光ちやんは我慢しなければいけないわよ。そして二人でちやんとして行つたら家の中が樂しくなるのよ。」

光三は凝乎と聞いてゐたが、子供らしくいい氣もちになつて、

「僕これから何んでもみんなお母さんの言ひなりになる、——そして意地わるも告口もしないから、これまでの事はみんなごめんなさいね。僕、わるいつて事はみんな知つてゐたんだけれど……。」

と言つて、熱のあるけはひを眼の内に見せた。倹子は甘い言葉で益々やさしい調子になつた。

「たとへば光ちやんが些つとしたことからお母さんの告口をするでせう。そしたらお母さんも自棄になつて光ちやんのあら捜しをはじめるでせう。そんなつまらない事を繰り返してゐたら、一生かかつても追つつかないことだし、お互ひ啀みあつてゐるばかりぢやないの。それよりかお互ひに善いことばかり仕合つて居れば、毎日氣もちよく暮せるんだからね。」

倹子はさう言ひながらも自分でもつい感情的に昂奮してゐるごとに氣がつくと可笑しくもあつた。

「寫眞の事だつてべつにお母さんがお隣へ頼んで燒いてもらつたわけぢやないの。ひよつこり應接間の古い寫眞帖に挿し込んであつたのを貰つて來たばかりなんだから——考へてもごらん、お母さんが先のお母さんの寫眞が何んで要るものかね。光ちやんにしたつてさう思ふでせう。」

「ええ。」

「それを光ちやんが見ただけでせう。だからそんな事なんさ言ひこなしにするのよ。お母さんはもうできるだけ光ちや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

んを可愛がつてあげるんだし、光ちやんだつてお母さんを大切にしてくれるでせう。」

俊子に抱きすくめられた光三は、追つかけて話されてすつかり涙ぐんで、何を言つても首肯づくばかりだつた。それにこれまでになく溫かい胸のところに抱かれてゐるので、光三は心の内でも俊子の喜ぶやうなことを言ひたいと、そればかり頭のなかで考へたが、あひにく目新らしい俊子を嬉しがらせることも思ひ當らなかつた。

「それにね、光ちやんが大きいから、一しよに外を歩くとみんな姉弟だつて言ふでせう。それでも關はないぢやないの。それとも厭？」

俊子は自分で自分の言葉に醉つて、光三の冷たい頰に脣をあてた。そして光三が呆れながら感激をしてゐるのを見ると快よい勇ましい氣になつた。——

「僕、關はないけれど……」

やつとさう言つて、これも半ば醉ふたやうな眼を上げた。

「心の内でさう思つて居ればいいわ。けれどもそんなことを人に言ふものぢやないものよ。自分一人だけでちやんと考へてゐるものよ。」

「え。」

が、俊子は妙に色の白い表情のすくない光三の頰を見つめてゐるうち、不圖櫻の蕾のやうな腫れ物を額に見出すと、何だか汚ならしいものに觸れたやうな氣がして、先刻からの快よい昂奮もすぐ消えてしまつて、徒らに重い光三のからだを持て餘した。も一つこのころ氣づいたことであるが、光三の體臭がすこしづつ匂つて、俊子の鼻さきをおそふてくることだつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「ちよつと退いて頂戴。」

倹子は光三を前へ坐らせると、膝のしびれを感じた。急にこんな子供をつかまへ、かなり熱心に話してゐたかと思ふと、自分でもどうかしてゐると些つと苦笑ひが浮ぶやうな氣がした。しかし光三は好意に輝やいた眼付をして、凝乎と倹子を見てゐた。何か話すことがないか知ら？　光三は倹子に對ふ新鮮な好意をどう表はしていゝかに迷つて、頭を惱ました。

「光ちやんは少し遊んでゐらしつたらどう。お母さんはそろそろ晩のお支度をしなければならないんだから。」

とにかくあの寫眞のありかを知つてゐるから、光三のゐないところで匿すなら隱して了はなければならないと思つた。何氣なく隣家で復製して貰つて歸ると、帶を解いてゐる間に、ひよつこり這入つて來た光三の眼に發見つて、これなあに、と然う言はれたときには隱すことが、できなかつたのだ――。自分の母親の寫眞だと氣附いたときの、眞面目な歪みを見せた全く子供らしい顔貌が、すぐ小利巧げに匿されて了つて、わざと元の位置に置いて何處にあつたかとも尋ねなかつたのは、新井の性分によく肖てゐた。却つて倹子の方でまごついて取亂して言譯らしいことを言つたのも、今になると口惜しくもあつた。ちよつと見ると子供らしくはあるが、腹の奥底は解らなかつた。

「ちや僕、電車通りへ行つて來ます。」

充分な倹子の愛撫に甘やかされた光三は、急にあらはれた倹子の煩さげな眼付には有繋に氣が付かなかつた。

光三が表へ出ると、倹子は簞笥の上にある一枚の寫眞を取り上げた。百合の花を生けた卓子に倚れた先妻のかしらには、古い束髪が乘つてゐて倹子にはそれが可笑しかつた。がそれにも拘はらずふくら肉の、垂り頬な、がつしりしたからだつきに品があつて、劣情ばかりの男には却つて好かれるところがあるやうに思はれた。倹子はちよつと新井の顔

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を思ひ浮べると不快な氣もちになつた。はじめ新井との話があつたときにも、新井の品行などに目も呉れないで手元の樂なことや、姑のないことに話を纏めてしまつて、そして俊子自身もきれいに過去のことを洗ひ上げて了ふ氣だつた。第一嫉妬がましい氣の起ることなぞもなからうと思つてゐたが、かうして寫眞を見てゐると對手がもう亡くなつてゐてさへも平氣で眺められなかつた。それほど新井を愛してゐるかと思ふと、そんな氣もしなかつた。新井にしたつて家の中の道具くらゐに思つてゐるのだらうし、劣情以外には役立たないとしか思つてゐないらしい——さう俊子は寫眞を手早く簞笥にしまひ込んで、考へたりした。——先きの永田へ嫁つたときは、何んでも吃驚りしたやうな氣もちの續きだつたが、新井のところでは却つて落着いて、新井の眼付きさへ見て居れば、大概のことは考へたとほりの新井だつた。

永田と三年同棲してゐるうちよりも、温泉へ行つてからよく永田のことを思ひ出さないではなかつたが、それも二三月經つとすつかり忘れてしまつた。からだの惡かつた俊子は、實家の親戚の手傳ひに行つた温泉の或る大きな料理屋で、不圖したことから關係がついて、まる二年といふものを或る呉服屋の旦那の世話になつてゐた。それも實家の母から劇しく言つてきたので、つい毎月仕送りしたらと言ふことになつてその爲め母親も爲方なしで、金錢づくで、俊子の好き放題にしてゐた。その旦那には本妻もあつたし、他に妾もあつたから、俊子はしまひに少し自棄になつて琵琶歌をならふのだと言つて、町の或る二階にゐる學生のやうな男のとこへ通つてゐるうちに、それが旦那に知れて、温泉場を引上げることになつて、間もないこんどの緣談だつた。それ故面白く可笑しく暮らすことも、みんな温泉場で仕盡したやうな氣がして、こんどは腹を決めて眞摯な暮しをしないと、落着くさきがないやうな氣がした。

「女といふものは男を疲らせなければ、つまり何んだな、その、思はせ振りつて奴も必要なんだよ。」

旦那だつた何も彼も仕つくした男は、こんなことを言つて下卑た笑ひ聲を立てた。お前のやうな乙な上品めいた、言はば蟲も殺さない顏容をしてゐるものは、それだけで何も彼も胡魔化すことができるとも言つた。――電車で合つた琵琶歌の先生とも、身を固めかけてゐるので、俊子はむしろ他人がましい挨拶をしたに過ぎなかつた。自分でも白々しくできるものだと思つたくらゐだつた。何時も少しばかりの手土産を提げて通ふ溫かい湘南の溫泉町に、片側だけに日かげが麗らかに射し込んでゐるのを、毎日のやうに樂しく眺めて通つた二階家が、よく俊子には唯一つの樂しい時のやうな氣がした。年の若いくせに氣のつく琵琶歌の先生は、俊子の訪ねてくるころには眞水のすくないこの町の端れまで汲みに行つたのを沸かして、すぐにでも茶を淹れられるやうにしてあつた。或る時は二階の窓から顏を出して、浴客の散步姿の間を縫ふてくる若作りな俊子の顏を見ると、手で招いてまで見せたので、よく極りの惡い思ひをして人眼にあやしく映つたりしたが、今から考へるとあともさきもない、あんな闊法螺な、しかし樂しい時はなかつた。

「おつれさへ關はなければ些つと步きませんか。」

耳近く電車の中で合つたときに囁やいたが、ふとその呼吸づかひさへ懷しい氣がしないではなかつたが、眼を据えてゐる光三が眼にはいると、俊子はすぐ心を引き緊めることができた。

「いえ、わたしおともは既うできませんの。わるく思はないでくださいな。」

俊子はいくらか凛として言つたが、對手はいつものやうに何度もおじぎをして、あれだけ關係があつたにも拘らず、諦らめよく別れてしまつた。いかにも素氣ない氣がしないではなかつたが、それくらゐの事に新井と固めかけた身をしくじつたら――と云ふ氣さへした。

「あの人、誰?――。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

俊子はさういふ光三を、この子はなぜ人の眼の内を見つめる癖があるのだらうと思ひながら、何んでもない風をした。

「ちよつとした知り合ひですよ。」

「帽子に大學の徽章がついてゐたよ。大學へ行つてゐるんでせう。」

俊子さへ氣のつかないのに、素早い眼だと思つた。まだ何か問ひたさうにしてゐる光三を急がして、すぐ電車を下りた。

俊子は新井には永田へ一度嫁つたことを言つたが、他のことは一切何も話さなかつた。ただ、からだが惡くて温泉にゐたことと、永田とも一年ばかり一緒に居たと左う簡單に話して置いただけだつた。

中野の實家へ行つて一泊して歸へると、新井が椽側へ出て、小火鉢に膠を煮立てて、何か缺けものを繕いでゐるらしかつた。光三が初めて外泊したのが珍らしく、そのためか大きな聲で格子先きから吐鳴つたが、新井は熱心に俯向いて碎片を繕いでゐた。

「唯今、――もつと早くかへりたかつたんですけれど、お母さんが無理に停めるものですから。」

俊子は外套のまま椽側へ出たが、新井は、あ、さうかと言つて、やはり膠を筆の穂につけてゐた。

「どうなすつたんですか。」

「珈琲茶碗さ、――淹れやうとすると、把手から破れてしまつたものだから……。」

俊子は新井がさう言つたまま、やはり熱心にやつてゐるので、あとから聞てもよささうだと思つた。それに珈琲茶碗が此家にあることを始めて知つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「わたし初めて見ますわ。どこにあつたのです。」

「もうせんからあるんですよ。」

光三が横合からさう言つたが、新井はうつ向いた人らしい憂欝な聲でこたへた。

「四五年も使はなかつたが、それでも破れてゐるのは此ばかりなんだ。閑暇だから繼いで見たが、どうだいこれなら大丈夫だらう。」

膠が汚なくハミ出してゐるが、しかしがつしりと繼げてゐた。わざわざ自分で繼がなくとていいのにと何故か俊子は氣に障つた。

「このごろでは此麼無細工な珈琲茶碗なんて殆うなくなつたね。これでも以前はかなり新しい方だつたが、時勢つて變なものだね。こんなものにまで推移があるんだから……。」

藍色で呑み口に二本の線があつて、厚手な厳丈なだけでも、このごろの纖細な文様や質にくらべると、まるで別物のやうに變つてゐた。

「カフエなどへ行つても、場末でないかぎりこんな珈琲茶碗なんか使ひはしないよ。しかしどこか古風なところがあつて、可笑しくていいぢやないか。」

「ええ、ですけれど矢張り纖然なのがようございますわ。何んだかお百姓の茶碗みたいぢやありませんか。」

「さう言へば左うだが、しかし五六年前はまだ家庭なんかに今時のやうに珈琲茶碗なんか使つた家はすくないよ、今ぢや氣の利いた裏長屋だつて用つてゐる家があるけれど……。」

「ぢやそのころハイカラでしたのね。ここの家は？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

俊子は諷刺めいて言つたつもりではなかつたが、新井はきふに返辭をしなかつた。——寫眞を見てから鮮になつて浮んでくる、品のある育ちもわるくないらしい先妻のおぼろげな顔貌が、おぼろげなだけなほ明瞭と俊子の眼を遮ぎつた。男といふものは全で見當の違つたところで子供らしいことをするものだと聞いたことがあつたが、俊子の留守に珈琲を淹れて喫むなどといふことも、そんな思ひ遣りもあるものだといふことに、俊子は不圖氣づいたが、そのせいか先刻玄關から這入つて來たときに新井がいくらか狼狽てゐたことや、暫らくして却つて落着いて見せたことなど思ひ浮べた。そんなときに冷笑つて見たい氣もしたが、反對にこんな年中土地賣買のために地圖と睨みつこしてゐる男にもしほらしい氣があるものかと、不圖琵琶歌の先生のことまで思ひ出した。

「さあ、ハイカラの方だつたかも知れないね。おかしなハイカラだが……。」

新井もいくらか誰に示すともなく自嘲してみせた。俊子は一體何處にしまつてあつたのだらうと、自分の手のとどかないところのある此家の中を思ひ浮べた。

「でも何處からお出しになつたんですの。わたしこれまでこんな物があることは、少しも知らなかつたです。」

「高押入れにいろんなものが一杯詰つてゐるのよ。ねお父さん、あそこから出したのでせう。」

光三は押入れの上の、天井ぎわに二尺戸のある高押入れを指差した。火鉢や上敷などの詰つてゐることは知つてゐるが、何しろ大變な埃で手のつけやうがなかつた。どうせ碌なものがなからうと思つてゐたが、今になると俊子の見知らない秘密めいた先妻のものが、或ひは思の外積み累ねてあるかも知れないと思つた。

新井はちよつと光三を見たが、不機嫌さうに肯づいてみせた。そして言ひがかりらしい爲方なしに俊子を見て言つた。

「高押入れも一度掃除して置かなきやいけないな。久しく打つちやつて置いたものだから大變な埃だ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「何が入つてゐますの。」
「がらくた物ばかりなんだ。――よく覺えてないがどうせ詰らないものばかりなんだらうよ。」
「わたし氣はついてゐたんですけれど、默つてお掃除するのも何んだし……ぢあ、そのうち致しますわ。今日だつてしたつていいんですけれど……。」
「今日はいいよ、お前も疲れてゐるだらうしするから。」
新井はハッキリと止めて置いて、「實家の方はみんな達者かい。」と尋ねた。そして光三が庭の廣いことを仙山に言つて、すぐ新井をつかまへて、
「僕、金魚の卵つてものを初めて見たの。透きとほつた粟粒みたいなものよ。それに小ちやい金魚の子がたくさん居た。――まるで蓄音機の金針みたいなの。それが一杯に泳いでゐたよ。」
「すこし貰つてくればいいのに。――惜しいことをしたね。」
「ほしかつたんだけれど、おぢさんが呉れはしないんだもの。」
「おぢさん、――つて誰れのこと？」
新井は俊子と母親と妹きりの家に、そんなおぢさんなぞ曾つて聞いたことがないだけに聞き咎めた。
「離れに下宿してゐる方なんです。その人が金魚を飼つてゐるのです。好きで遣つてゐるものですから、なかなか分けてくださらないんです。長岡の人で遠縁に當りますの。私立大學へ行つてゐるんです。」
「ふう、初耳だね。」
新井はかういふと默つた。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「僕、金魚つてものは、あんな鹽鱈なんぞ咏つてゐるものだつてことは、初めて知つたの。外には何んにもやらなくていいんだつて――僕もこれから然うしやうか知ら？」

光三はそれから、金魚だつて日射病があるとか、米粒は胃腸をコワすとか、聞きかじりのことを喋つて埒がなかつた。――俊子は何か新井の頭にこだわつてゐることがあるせいで、妙にいつになくむつつりしてゐるのだと見て取つたが、やはり泊つて來たのが氣に障つてゐるのだらうと思つた。ひよつとしたら泊つて來てもよいかと言つたら、そんなに不機嫌さうにもなく、あ、いいとも、とさう言つて、却つて俊子の留守を喜んでゐた容子さへ見えてゐたのに、どうもやはりじんねりと新井の心持ちの硬さが感じられてならなかつた。――或ひは何か高押入れから捜し出して、さきの妻のことでも憶ひ出したために、（男といふものは存外きちやうめんに尖つた女のことを考へ出すものだ、と言ふより絶えず他の女と自分の女と較べてゐるものだと俊子は考へた。）――溫泉場にゐるときでも、留守をすると定つて旦那の機嫌がわるかつたが、いつでも眼悲い俊子にも原因がわからなかつた。それが大して探い魂膽があるものでなく、言はば氣の悒ぐやうな氣分のつづきで、そのため急になほりさうもなかつた。――俊子は、新井の氣もちも大方そんなところにあるのだらうと思つた。

「お前のところでは、あの離れをしよつちう人に下宿させてゐるのかい。小じんまりとした勉强するには持つて來いつていふ部屋なんだから――。」

「いいえ。」

俊子はさう答へると、實家の遣り繰りを棒切れで觸られたやうな氣がして、自分にもなく顏を赧らめた。

「知らない方には一切おかししないんでございますの。引つかけられたりすることが能くあるさうですから。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「その方がいいね。專門に食ひつぶす奴がゐるから。」
「でもそんな人は初めて見てもどこか容子が粗野ですから、何となくわかるやうな氣がしますわ。」
「分るよ、そりや——。」
新井の言葉は俊子には鋭どくひびいた。離れの六疊には實際どれだけの人が出たり這入つたりしたか分らなかつた。暗い枇杷が屋根を覆ふてゐたが、それでも父のゐたころ普請道樂だと言つてゐ　ほどの凝つた建具ではなかつたが、しかし今になると些つと廉くは建たない、——戸袋、押入れ、床の間などにも金目を胡魔化すやうな材料がつかつてあつた。そこへ交る交るさまざまな人が下宿して行つたが、しかしどの人も居心地のよい部屋のわりに落着かなかつた。どんな理由だかよく分らなかつたが、永田へ嫁に行つてからの俊子には、下宿人の落ちつかないところが能く分つたといふより、腹の底の見え透いた人々をどうして自分があの時分解らなかつたのだらうと思ふと、いつも苦笑された。がその反對にそんなことの一切分らなかつたあの時分が、いまより綺麗だとは考へられなかつた。——西日のさす冬でも溫かい部屋の中で、實際ほとんど下宿人のみんなが俊子の手や心にふれることばかりに專心してゐたことも、よく分つた。今になるとそれも最もなことだと思ふが、しかし男といふものは邪氣のあるやうでないものだとも、考へた。
晩食後、新井が依然むつつりしてゐるので、俊子も默つてゐた。光三は相渝らず俊子の肩さきにまつはりついて、煩さくてならなかつたが、時が時だしなるべく避けるやうにしたが、しまひに新井の方で煩さがつて、
「すこし復習(さら)つたらどうだ。煩さい!」
さう聲を荒くしたが、光三は新井に盾向つて沸々言ひながら、やつと俊子の胸から手を出した。俊子が擽ぐつたがると、なほ面白がるのも子供らしくない別の人間にいぢられてゐるやうで、吻つとして俊子ははだけた白い胸元を正し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。

「父親を睨む奴があるか？」

新井がかう言つて、怒つてゐる光三の顔を見つめると、口惜しさうに後手を組んで、ぴつしりぴつしりと指を打つて、音をさせた。俊子は新井がもつと怒り出してくれればいいと思つた。

「睨んでゐやしないよ。」

「口答へする奴があるか？」

「だつて――。」

俊子はしかたなしに立つて光三の肩に手をやつて、「さあ行つておやすみなさいな。これから煩さくしなければいいんだし、それにお母さんがよく謝まつて上げとくから。」さういふと、光三はしくしく泣き出した。「あいつの泣き出す聲つたら、まるで一人前の大人が泣くやうだよ。」新井が何日かさう言つたが、全く厭らしい泣聲で可愛らしくも哀れでもなく、むしろ不快をともなふ陰氣さがあつた。

「着物も着かへてね。」

俊子は寐間へ光三を連れて行つて、床をとると、すぐ光三を入れた。――昨夜、實家で寝る前にも甘つたれて、しまひに煩さくなつたので、思はず手荒く突き飛ばしたといふ氣ではなかつたが、煙草盆に躓づいて光三が倒れた。それでも起直つて煩さくむしやぶりついて來たので、癪にさわつてこんどは意識的に突き飛ばした。それが障子際へ叩きつけられたのにも拘はらず、却つて興味がつて何度もそんなことを繰り返した。しまひに思はず平手で一つそつとやつたつもりだつたが……光三は有繋に泣き出して、あとの機嫌とりが面倒だつた。何を言つても聞かなかつた。そのくせ直ぐ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に眠入つてしまふと、子供はもつた經驗はないが、眠てゐる顏をいくら憎らしくても抓る氣にはならなかつた。「あの子にはもう懲々よ。」さう俊子は母親にいふと、「脹らしい子だがあんな子は却つてうまくなつかせることができるものだよ。そこが骨の折れるところさ。」何事もなく言つたが、母親には光三の氣性がよく判つてゐないらしかつた。

俊子は光三を寢かせて夫の居間へくると、新井はそんなに不機嫌さうでもなく、むしろ宜いほうだつた。俊子は心でうなづくことができた。

「もう寢たか？」

「ええ横になるとすぐ……。」

新井は暫らく默つて眞面目な顏をしてゐたが、俊子はその故意とらしい眞面目さの中に何があるかといふことを、むしろ冷淡な氣もちで推し測ることができた。俊子のかんじてゐた人生の微妙さの中では、極めてこんな男のくそまじめさが過去のもの影と一しよに頭を掠めた。そんなとき俊子はいつでも對手に惚れてゐてもやはりだまして見やうと言ふ好奇心が湧いた。半分は自分自身のために又の半分はだまして見やうといふ氣が手傳つてゐたのである。それが夫と定めてもやはり急所々々は角が出てならなかつた。

「そのうちにゆつくり溫泉へでも行つて見やうぢやないか。お前のゐたといふ伊豆あたりへでも――。」

「ええ、よござんすね、けれども最うあちらは溫か過ぎはしませんでせうか？　東京とは十度くらゐ違つてゐるんですから。」

「溫かい方はかまはないよ。さむいよりいいから。」

俊子は心であの湘南へは行きたくなかつたが、若し夫に腹を見られたりしてはと思つて平氣で答へたものの、あちこ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ちに知り合ひがあつたりして、煩さいことを騷ぎ出されはしないかといふ危惧がすぐ起つた。も一つ先きから話はあつたやうなものの、新井に何か下地のある考へがあつて言ひ出したのではないかとも疑はれた。いつも默つて一切合切根を掘つてものの正體をつきとめるまでは、何も言はず眼と心で捜る新井のことだけに、俊子の胸や心に有り餘るほど苦手なところも多かつた。しかし今日の話の模樣では動機が動機ゆゑにそんなに深い氣もちが潜んでゐないやうに思はれたが、それと言つてもどう變化つて騷ぎつけないでもない。——

「でもお仕事の方が片つかないと行けないんぢやないんですか。」

さう誘ひを出して見たが、常から物質的に強い男だけに遊びの方にも強かつた。

「なあに、關はないよ、それぢや行くとしやう、——あれも連れて行かずばなるまい——。」

「その方がよござんす。」

俊子のべつに嬉しさうにもしないのを、この女のいつも落着いてゐるくせだと思つてゐるらしい新井は、べつに氣にも止めなかつた。俊子は不快な氣もちで別に一人で寢たいと思つたほどだつたが、そんな譯にもゆかなかつた。——夢ともうつつともなく、何時の間にか湘南へ行つて例の干物屋の二階の、琵琶歌の先生の居間で、若いくせに年寄りじみた先生と話してゐるかと思ふと、光三が表を通りかかつて二階の窓を見上げてゐるのに慌てて障子を閉めると、眼がさめて、光三が廁へ行くために俊子を呼んでゐる聲に氣がついた。

海岸通りにはまだ海水浴の客はなかつたが、初夏らしい濕つぽい聲をしたものが、松並木を砥ぐ潮風のまにまに啼いてゐた。すぐ目の前の樹にゐるかと思はれる啼聲は、殆際限もなく遠いところから起つてゐるので、光三は無駄足をつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かつて、それでもあちこちを馳つてゐた。
「へえ、あれが蟬かい。――それにしてもまだ蟬の啼くには早すぎるぢやないか。」
「こちらは東京とは一と月くらゐ何んでも早いんです。三月には蟻が這ひ出すんですもの。」
「ぢや蟬もべつに早くはないわけだ。蟬の啼くのをきいてゐても、やはり東京を離れてゐるといふことがハツキリして
いいね。」
新井はこちらへ來てから上機嫌だつた。しかし俊子はなるべく町を歩く機會を少數くして、誘はれて爲方のないとき
の散歩は、いつも海岸通りか町端れを選んだ。大通りは軒並みに知つてゐるし、うつかり挨拶でもされたらといふ縣念
も手傳つて、去年ゐた庭の廣い旅館の方へはわざと行かないで、松原の旅館が親切だと言つて泊つた。幸ひ知り合ひの
女中もなかつたが、番頭の顏に見覺えがあるやうな氣がしたので、わざと此土地は始めてだと言つて置いた。――かう
して散歩してゐても眼ざとく通行人を物色するだけでも、俊子は寛りとした氣もちにならなかつた。ふとしたことから
手なづけた表通りの足袋屋の白犬までも、そんな格恰の犬を見るたびに久振りだといふふうに飛びついて來はしないか
と、空恐ろしく氣懸りだつた。あんなに暢氣にしてゐたこの土地が一年も經たないうちにこんな居苦しい氣もちに趁は
れて歩くなどといふことも、行末が分らない人間のことでも、餘りに遊び過ぎてゐるのを今さら振り顧られた。
「なるほど冬は溫かさうだね。」
「ええ、そりや溫かでございます。――まるで冬知らずですもの。」
ほかほかした松林の中に、幾組かの若い男女が散歩づかれの足を投げ出して、碧い海づらを眺めてゐるのが、全く暢
氣さうに見えた。が、俊子の不安ばかりに刺戟されてゐる心には、なるべく早く歸つて、人目のない旅館でゆつくり憩

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

みたい望みで一杯になつて、何を見ても樂しみどころではなかつた。

「あれはみんな干魚にするのかね。あれぢや全で蝿の中で干してゐるやうなもんだね。」

「こちらでは註文しておくと、干魚はすぐできるんです。まあ大へんな蝿ですわ。」

鯵や鰯が銀紙をならべたやうに干してあるのに、どこから集つて來たのであらう、虻ほどの蒼蝿がめいめい羽根をぶむぶむさせながら、紙鳶のやうにうなつてゐた。俊子はそんなものにも脅かされて了つて、かへるときには少し註文しとくといいねなどいふ新井の言葉もそこそこに通り過ぎた。

宿へ着くと俊子は初めて氣を弛めることができたかはり、きふに草臥れて湯にも入らなかつた。同宿の人は大概知らない人ばかりなのにも氣がゆるせて、すこし疲れ過ぎたと言つて、涼しいつげの木の青いやつの覗く円窓の下で一寢入りした。眼がさめたときは日暮れに近かつたが、新井は湯にでも入りに行つたのか居なかつた。光三はと見るとこれもゐなかつた。俊子は起き上ると、そこへ女中が這入つて來たので尋ねると、ちよいと町までと言つてお出掛けになりましたと答へた。この間からなるべく外へ出さないやうに仕向けてゐたのは、あんな人柄だから何を聞き出すかも知れないと思つたからである。――それだのに不意に出かけたのも、自分の眼の屆かないせいだと、些つと口惜しいやうな氣した。

「松島屋といふ太物屋はこちらへはいりますか知ら。」

「いいえ、こちらは北村の方が來つけになつて居りますの。奥さまはよくごぞんぢでございますわね。」

「いえね、表でちよつと見かけたものですから鳥渡おたづねしたんです。知つてゐるものですか？ こちらは初めてですもの。」

俊子は女中が曖昧に笑ふので、何だか知つたか振りがして見たかつた。が餘り立入つて物言ひも危ないやうな氣がして、舌を出してみたいやうな巫山戯た氣がした。——海の方でぼおーと汽笛がものうげに鳴つた。

「熱海へのおしまひの船ね。」

女中は着物をたたみながら、ちよつと可愛い上眼づかひをして、「まあ、ほんとによくごぞんぢですね。十日もゐらしつても時間の分らない方がありますの。汽車だの汽船だのの時間はいくらよく覺えて置こうと思つても忘れるものですのに、奥さまは、まあ——。」と言つた。

「だつてもう四日もゐるんですもの。」

俊子は熱海からよく小田原へ出て東京へ出たことを思ひ出して、そのたびにかなり餘裕をつくつて樂しかつたことを考へ出した。今だつて餘裕はあるがこれは新井の金で、あの自分は自分のからだについた金のやうに思はれた。金にもこんな區別があるか知ら？と可笑しく思つた。——太物屋と別れ話の出たときに「そりやあなたはわたしにも未練はあるんでせうけれど、內實はわたしにこれまで下すつたお金にもみれんがあるのよ。男つてものはお金にみれんがあるのと、女にみれんがあるのと一しよにしてゐるんですよ。女の方ぢや根が女だからお金にみれんがあるんだとばかり考へるんです。」と左ういふと、さすがの男もそりやよく當つたと言つて笑つてゐたが、別れ際のよい男だつた。——俊子はこの土地で何も彼も仕盡したあげくに、かうして遣つて來ても誰一人それと氣のつかないところなぞ、ときどき人間は迂濶なものだとたかを括つてせせら笑ひたいやうな氣になつた。それに太物屋にでも表の通りで出會したら、あの人は一たいどんな顏をするだらうと思つても見た。

女中と入れかはりに、新井が光三と一しよにかへつて來たが、光三はすぐ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「明日運動會があるんだつて――この町と村との聯合運動會なんですつて。つれて行つて頂戴。」

と言つてきかなかつた。さう言へばそんな季節か知らと思つたが、ふと鯛づくめの料理を考へると、毎年お祭のやうな運動會のあることを思ひ出した。

「あんな人出はお母さんは頭が痛んできらひよ。それにハグれたりするとこまるから止した方がいいわ。東京で懲らしてしまつたぢやないの。」

「だつて僕、田舍の運動會つてものを見たことがないんだもの。どこかきつと變つてゐるよ。」

「かはつてはゐませんよ。どこだつて同じですよ。」

が、新井が横合ひから「退屈さましに行つて見るのもいいぢやないか。町の子供はもうけふから豫習のやうなことを遣つてさわいでゐるのを見ると、大人だつて見たくなるよ。」

さう言つて足首をさすつた。――この土地の運動會は子供のためより町の人の退屈さましのやうなもので、實際近村からも人が集つて祭禮と同じ騷がしい賑(にぎ)やかさだつた。俊子は去年は待合の子をつれて出かけたが、心の浮くやうな砂埃の立つた町外の景色も、いま考へると悒欝(うつ)しく頭も濁るやうな氣がした。それに誰かに見付かるに定つてゐるし行つてはならないと思つた。

「わたしはさわがしくて厭なんです。ぢやお父さんにつれて行つてもらつたらいいでせう。」

俊子は光三にさういふと、呼鈴をならして飯をいそがせた。

「お前のゐたといふ宿屋は此處とくらべると大へん立派ぢやないか。ありや一流だといふぜ？ なぜあそこにしなかつたのか、全くこことくらべものにならないほど庭なんか廣くていいよ。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

やはりあそこを見に行つたのだ。默つてする遣口がにくらしく腹立たしかつた。
「わたしあそこには暫らくきやゐなくて、すぐ町で室屋借りをして自炊してゐたんです。あそこは客もいいせいでせうが、取扱ひがひどいんですわ。だから止してをいたのです。」
新井は考へてゐたが、「そんなところもあるにはあるが……しかし立派だ。」
さう言つて飯を待遠しがつた。
「わざわざ見にゐらしつたんですか。あんなに遠くまで……」
「いやね、つい廻り道で出てしまつて、氣がつくと大鳳館ぢやないか?」
俊子は新井の語尾にあせり氣味なところのあるのを見て取つて、さぐりを入れられてゐるといふ氣がはつきり感じられた。が、新井はすぐそれをかんづいたのか、「二流どころが却つて親切でゐどこちがよくていいかも知れないよ。」と言つて、自分で立つて呼鈴をならした。
晩、新井の入浴してゐる間に、俊子は光三を呼んで、わざと優しい聲をして、兩肩に手をやつて涼しい椽側で言つた。
「光ちやんはこちらが好きになつたの。もう表はひとりで歩かれるやうになつたでせう。」
「え、何處でもよ。」
「ぢや、ひるま大鳳館へ行つたのは、初めつからお父さんがあそこを尋ねて行つたのかね。」
「途中でたづねてやつと分つたくらゐなの。あそこは今でも一人でゆけないやうな氣がするの。」
「ぢや、ただ前を素通りしただけなんですか。」
「さうなの。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

俊子は吻と息をついた。通つただけなら關はない！　そんな氣がした。光三はなほ俊子に甘えかかつて明日は是非つれて行つてくれと言つたが、この子まで人の氣も知らないでと思つて、手をハネ退けた。どういふものか光三は俊子から邪險にされるほどあとを慕つて、何んでも用事を聞いて歩いた。それが俊子にはなほいやらしかつた。女中の前でもお母さんなどと故意とあまへるのも、この子の氣もちの淺猿しさが透いて見えるやうで厭だつた。

新井が不圖こんなことを言つた。

「お前は妙にこちらへ來てから外出をしないやうにしてゐるね。ここは東京と異ふから歩いたつて、そのままの着物でも關はないぢやないか。」

散歩をいやだと言つたので新井は色をつくつて言つた。俊子は自分の顏が、赧くなつたか知らと思ひながら言つた。

「そんな氣ぢやないんですけれど……唯靜かによこになつてゐりやよい氣もちなんですの。さうおしやるとわたし厭味を言はれるやうな氣がしてならないんでございます。」

「だつて些つとも外出をしないで、外してばかりゐるぢやないか？」

「でも出る氣がしないんですもの。」

俊子は剛情にさう言ひ張つてみたが、新井は、「それなら仕方がないさ。」と穩當に言つた。俊子は妙につッかかりたい氣がした。

「わたし故意と出かけないわけぢやないんです。」

新井は默つてゐたが、ぷいと立つて庭へ出て行つた。俊子は自棄な氣もちで光三が何か慰さめ顏に囀するのを耳騷がしく感じながら、新井の家へ來てから初めて諍ひを忌々しく感じた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

翌日は晴れあがつて女中まで交替で運動會へ出掛るのだと言つて、暮のお伺ひを何日になく早く聞きに來たりして。俊子は朝から落着けなかつた。

「ぢや出掛けやうぢやないか。」

新井は羽織を引かけながら、まだ鏡臺の前に端手拭で襟足を滅してゐる俊子の前へ來て言つた。光三は俊子の外出着を一隅へ着よいやうに積みかさねてゐるのが、なほ俊子をいら立たしく悲しくさへさせた。

「ええ、でもこの儘ぢや出られはしませんわ。――光ちやんそれをいぢくらないで頂戴。」

さう光三を優しく叱つて置いたが、「何だ子供らしくもない女の着物なぞをいぢくつたりして？」新井は傍から又口を添えた。何時でも着られるやうに一ところに集めてをくんだ。さう光三は長い帯をしつしつと鳴らせながら言つた。

海岸べりで景氣のよい花火がぽんぽん騰つて、そのたびに大勢の人々のわめき騷ぐ聲が起つた。俊子はそのたびに胸も冷える不快な思ひに閉ぢられて了つて、指さきに力もなく、刷けない白粉がぺたぺたして氣もちが悪かつた。

「そこに立つてゐらつしやると、わたし困りますわ。」

俊子は何だかけふの外出さきで、誰かにつかまりはしないか？　それだけでも逆の誰のやうな氣がしてならなかつた。濁つた砂ほこりの彼方にいろいろな人の顏がさし覗いて、あのころでさへも町の人からしやれ者のやうに異端視せられてゐたから、けふ會つたら決つと後指差されるだらう、――それをぢかに新井が仕組んだやうに見えるのも、こんどの溫泉行の本統のやうに思はれて、あんなに心を入れ換え、じつくりと一人前の暮しに辿りついてゐる自分の將來が、もう滅茶苦茶になるやうな氣がした。俊子は腹立たしさと、も一つ自棄な態度胸とで、やつと帶を締めながら鏡を

さし覗くと、白粉にむらがあつて、それを見ただけでもかつとして了つた。

「早くしてくれないか。」

洋杖を持つた新井の姿がきふに何か人間を折檻する男のやうで、黒檀の洋杖まで硬苦しげな手痛い音を敷石の上にひびかせた。あんなにして自分を引き摺り出さないでもよささうだと思つて見たせいか、これまで知つた男にない慘酷らしげな額の詰つた顏が、鏡の中でいらいらしく映つた。

「そんなに急がせたつて駄目ですよ。」

つい氣が焦つて光三の手さきを突き拂つた。新井の眼前だつたが、なに、關ふものかといふ太々しい氣になつてゐた。なるべく地味なつくりをして出て、パラソルを深くしたがそれでも人眼に立つて、パラソルを深くさしたので暑くるしくてならなかつた。——通りの人込みを避けて裏へ出て、會場へ出た。風船賣や氷店などがぎつしりと詰め合つて、顏見知りの人があちこちに雜つて、そのたびに一々胸にこたへるせいか、光三を引いてゐる掌がびつしより汗を搔いて、氣分惡かつた。

「ずゐぶん出たものだ。」

あんな靜かな町や近村によくこれだけの人が出揃つたものだ。——新井は往來の女に眼をつけてゐるのを、俊子は氣づいて認めたが、不圖見たことのある女だと思つたのが、れいの瑠璃ちやんといふ出島尾にゐた藝者とも女中とも分らぬ女だつだ　俊子のゐたころもその風儀の惡い町の中では瑠璃ちやんは王女のやうに振舞つて、しまひに何とかいふ博士の子息と別莊住ひしてゐた。ふとり肉で眼の大きい女學生風なそれでゐて女優とも肯づける顏立ちは、すぐ新井の眼にふれて思はず振りかへつたりしたのを、俊子はにがにがしく之加も可笑しい氣もちでながめた。この女には見られず

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に済んだが、いつも我儘放題で暢氣に溫泉につかつて同年輩の男と一しよにゐるのが、今のちやんとした自分にくらべて、亂次なく、あひかはらずの女だと輕蔑するやうな氣になつた。

ところどころに二三日前からこの町へ入つて來た朝鮮人の飴賣が、白い觀世撚りを五六本、客の前へ突き出して何か唄ひながら籤引きをさせてゐたが、どれも當らないらしかつた。

「ぐるぐる廻つて、一と廻り。男か女か子ができて……。」

俊子はその群衆のそばへ寄らうとする光三の手をぐいとわざと邪慳に引いて、歩き出したとき不意に又花火が上つたので、俊子は聲を立てるほど吃驚して思はず新井の手につかまつた。

「氣が小さいぢやないか?」

新井にさう言はれたときに、俊子は頭痛を催した。が、會場ではそれぞれ遊戯がはじまつた。走つたり飛んだりしてゐる子供が、疲れてきよときよとしてゐる俊子の眼には、むしろぼんやりとしか映らなかつた。あたりに知つてゐる人もゐなかつた。たゞ、むやみに息苦しく呼吸をすると吹き返されさうな生熱い人いきれと日の匂ひに蒸されたあたりには、酸ぱい食物の臭ひが走つてちくりと鼻さきを刺戟した。そのためにも嘔氣がつゞいた。——俊子は何かの赤い旗がはたはた動いてゐるのを自分の頭の中にあるやうな思ひで、そればかり茫乎と眺めてゐた。そのときどうしたのか向側の人垣のあたりが少しづつ崩れはじめて、何か叫びごえらしいものさへ起つた。蟻の穴をほじくつて散つた蟻のやうに十分間後には、向ッ側の人山の崩れが波紋のやうに次第に大きく、次第に亂次なく、しまひには反對の側までも散りはじめた。間もなく俊子のまはりの人人まで少しづつ動き出した。——その時は全く向ッ側の人垣は完全にくずれた。俊子はうしろのめりになりさうな自分をやつとささへると、うしろでも叫びごえが起つた

「何だらう？」

新井がさう言つて誰かに聞からとしたが、そのときには場内に巡査が走り出した。そしてすぐ近くの蜜柑山の方へ人なだれが次第に餘勢を盛つて、ながれ出した。もうとくに運動は中止になつた。そしてみんな蜜柑山の低い平地をさして走つた。一とかたまりの人が走ると、それに又新たに一と群れがさそはれ出したのが、最後に大群衆になつて騒がしく喚きながら走り出した。俊子はそんな大勢の頭數のうごくのを見ると、さつきから耐えてゐた眩暈が急に引き摺り出されさうで、こんどは前のめりにならうとした。――先刻の朝鮮人がどこかの子供をさらつて、山へ逃げ出したのだと言ふものが多かつた。實際、山の方へ群衆はみな馳け登つた。そろばん玉のやうに詰つた人々は山平を込めて、わめきごえを上げた。

俊子は繩張りの杭につかまつてゐたが、その繩がぐらぐら動くので體軀までうごいた。そのとき初めて自分の名を呼ばれて、新井にもたれて歩き出した。――「あれは誰だい、お前のそばへやつて來たのは？」俊子は自分の耳を疑つて

「誰とも話はしなかつたのですのに、へんなことを仰いますわね。」

さう言つて氣がつくと、いろんな人が自分の顔を覗き込んでゐる。――黄ろい皮膚が一杯に張りつめられてゐるやうな氣がした。宿につくとほつと呼吸をついて、今朝から張りつめた氣がゆるんで、初めて涼しい思ひをした。が、新井はむんずりした顔に冷笑をうかべながら、寢そべつてじろじろ俊子を尻眼にかけた。俊子はあのとき何か下手なことを言ひはしなかつたか？　と、さう考へたが「ひとりぢやないんです。」と、きつぱり言つたきりだつたこと、太物屋もそれきりあの男らしく氣を利かしたのだつた。――が、眼前に新井の諦り切つてゐる顔をみると、疲れてしまひには倒れさうになつたあの時だけに、ひよつとしたら見付つたかも知れないと思つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「明日あたり歸らうと思ふんだ。しかしお前はまだゐるつもりかい。」

「歸つてもよござんすね。こんなに暑くつては？」

俊子はふと新井を見たが、新井は微笑つ默つてゐた。それが俊子には氣味わるかつた。何んでもあけすけに言つてくれないで、いつも一分試しにするのが男でもないと思つた。それにしても早く此町を切り上げて、ゆつくりと手足を延して寢ころんで居られる東京へかへりたいと思つた。こんど歸つたらこんな危險な土地に近づくまい、——そしてやはり最初の決心のやうに身を固めやうと思つた。どんな男だつて同じだといふ氣もあつたが、新井の一風變つた遣口は、ひしひしと骨に沁みるやうな氣がした。

寢る前に一浴したが、相變らず光三が一しよに入りたがつた。そのしつこさも、どうやら此頃になつて新井によく肖てゐるところが多かつた。

翌朝、自動車が迎えに來たときに、やつとこの土地へ來てから初めて安心が出來た。早く歸京したいといふ心持ちは何となく新井の不機嫌さうにしてゐるのと較べては、氣懸りではあつたが、歸京すれば何んでも言ひ遁れができることを信じてゐたから、氣もちは樂だつた。

「干物(ひもの)はどうしたんだ。」

新井は思ひ出して干魚のことを言つたが、俊子は出かけなかつたので、注文してもなかつたと答へた。

自動車が本通りへ出ると、れいの毎日通つた二階屋に青い伊豫簾がかゝつて、西洋葵の花が一鉢出されてあつた。西日に燒けた疊の日影を趁つて止まる蠅を氣にしながら、我儘を言つて若い學生を困らしたことが、その窓を見上げたときに思ひ出された。全く俊子は何も彼も……心もからだも彼の二階家で濫ひ果して了つたやうで、懐しい氣で今は反對に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生涯再度と訪ねて來る機會とてもないこの町を振り顧つた。そしてどんなにしても身を固めたいと深い決心をした。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



その頃のこと

宮島資夫

フランス語の講義が終ると、彼等の仲間は××協會の二階からぞろ〳〵とそとに出た。講義が終つてしまへば、講師である松野も、彼等に取つては親しい先輩であり友人であるに過ぎなかつた。

『どうもこの謄寫版に紫インキで、くずして書いてある教科書は讀みづらくつて憶えにくいような氣がして仕方がない。だからどうも下調べも滿足に出來ないが、君なんか平氣ですか』と石川は笑ひながら松野に尋ねた。

『少し馴れゝば平氣だよ、然しこの次ぎまでにはちやんと本を揃へておかうよ、何しろこれは本が一冊しかなかつたものだから』

十月末の空は綺麗に晴れて、街には澄み切つた光が輝いてゐた。石田は一週間に一度づゝある、フランス語の講義を、今日も滿足に聞き終えたと思ふと、彼の心は輕々とした喜びに滿ちてゐた。長い間、語學の教養の不足に苦んでゐた自分も、やがては名前だけ聞かされて、味ふ事の出來ない果物のように思はれてゐた書物を、どうにか

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

讀みこなすことの出來る日も來るであらう。それからまた、自分達より遙か以前に、目覺めてゐた人々の思想や智識にも接する事が出來るだらう、——彼はそれを考へると、如何にも愉快でたまらなくなるのであつた。そしてそれと共に、この××協會の二階の小部屋が限りなく懷しいものにさへ思はれた。そこではまた、このフランス文學研究會のほかに、月に二回づゝ、同志が集つて勝手に自由に、物の喋舌れるS研究會も開かれてゐた。××主義と云ふ名前だけすらが、恐ろしく强惡な、殘忍な、非人間的なものに思はれてゐたその當時には、彼等の仲間の多くは世間に出ても、彼等の抱いてゐる思想の上に、何かしら厚ぼつたい假面を被らなければ暮せなかつた。可なり進んだ思想を持つてゐると思ふ人の家ですら、たまさかついて來た尾行のゐるのを發見されると、

『君にも矢張りつくのですか』などゝ聞れて、沈默の澁面でその來訪を拒まれるような事すら少くなかつた。そんな時に、月に二度づゝ心おきない同志が、集つて、自由に勝手に、自分の希望や不平を語り合ふ事の出來る、S研究會の集りは、彼にとつては、心から息拔の出來る樂みな處だつた。

秋晴れに輝く街を、その日も彼等は無邪氣な事を語り合ひながら、もつれ合つて阪を下つて行つた。そしてやがて、各自が別れなければならない街角に出て來た時に、それまで仲間の後にゐた房子が、松野のそばに進んで來て、

『本當にお困りなら、今夜私の家へ來てお泊りになりませんか、二階の部屋は開いてゐますから、わたくしの方は一向構ひませんの』

と淡白に、事務的らしくそう云ひつゝ松野の顏をぢつと眺めた。

『え、有難う！』と云つて、松野はまた何かどもるように少時だまつてゐたが、『明日の晩はまた會だから、さうして貰ふと都合が好いんだけど』と云つて、大きな眼をくりくりさせて、にこにこと笑つてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『本當に私の方は一向構ひませんの、ですから何卒』と房子はまた繰返した。

『や有難う、ともかく今日は、校正を急ぐので、○○社まで行かなければならないんだが、あなたも手すきなら手傳つてくれませんか』

『わたくし、校正は餘り得手ではないのですけど』といつて房子は輕く笑ひながら『でも今日は午後から格別用もありませんから、何ならお手傳に行つてもよござんすが』

と云つた。

『それなら丁度好い。何しろ今日は餘程出てゐるわけだから、これからすぐ行つた方が、好い。ぢや諸君失敬する』

と松野が云つたので、

『そうですか、それではご一緒に參りませう』

と房子は答へた。そして、皆なの方を振り向いて、

『では私もこゝで失禮します』と、心持はにかむように笑ひながら頭を下げた。そして二人は肩を並べて何か語り合ひながら、長い阪を下つて行つた。

松野に房子が行つてしまふと、あとに殘つた四五人の者は、てんでんに別れてしまつた。一人きりになつてぽつ〳〵歩き出した石田はその時なんとなく自分の家に歸りたくなくなつた。彼の心には、何か微かな、不安に似たいやな豫感がまつわりついて來たのであつた。

『どうしたら好いのか知ら』彼は思はずそんな事を呟きながら、電車道の方へ向つて歩いてゐた。

松野と房子が、——まさかそんな事が、と彼は强て自分のいやな考へを打消さうと試て見たっけれども彼がそうして、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二人の事に强て目をつぶらうと思へば思ふほど、それに增した疑念が、強く湧き上つた。今年の春に、房子が、彼女の郷里から上京して來て、間もなくS社の婦人記者となつてから、松野に紹介する爲に、房子を連れて行つたのも石田夫婦のした事だつた。その時の房子の態度には、個人として心から、松野のやつてゐる仕事に同情を持つて進んで行つたのか、或はまた、彼女の職業上の準備の爲に、松野に會つておきたいと云ふ心持だつたかは、二人にもよく別らない事だつた。それにまた彼女自身の職業上の關係からも、彼等の行動に公然と身を投ずると云ふ事は不可能な事でもあつた。けれどもそれよりもずつと以前に房子は、因習的な婦人の生活に反逆の聲を揚げた、B社の同人の一員ともなつてゐた。從つて房子自身も、さうした方面には可なり興味と熱意とが、ある事は信じられた。たゞそれだけにその時の房子に對しては、即くとも即かないとも周圍からの判斷も出來ず、房子自身もまたさうした態度より外には出なかつた。

松野が、フランス語の研究會を始めてから、房子もすぐに其生徒の一人となつた。そして半歳に近い月日が流れたが、その間に房子の松野に對する態度の中には、何かしら、變つた熱意を持つやうになつて來たのが、石田の眼にも明らかに映るやうになつて來た。そしてそれと同時に、或日松野が、石田に云つた言葉がはつきり、思ひ出されて來た。

それは何でも暑い日の事だつた。その頃雜誌發行の都合の爲に、田舍に住んで東京に通つてゐた石田は、松野の家を足溜りにして、そこで休息したり田舍にない風呂へ入つて歸る事にした。その日も彼は松野の家に來るとすぐに、手拭をぶら下げて、朝から步き廻つた爲に、砂と埃でざら／＼になつた身體を洗に出かけて行つた。巷の錢湯には先に來てゐた松野のほかには人氣もなかつた。靜かな湯槽にひたりながら、二人は呑氣な無駄話に耽つてゐた。その時の事だつた。石田は『さう／＼、房子女史もだん／＼こつちの事に好意を持つやうになつて來たと見えてね、陰ながら何か手傳ひたいと云ふやうな事を云つてゐた』と房子がいつか話た事を思ひ出して、ふとそんなことを話した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『そうかね、好意を持つなら徹底的に持つて貰ひたいね』と云ひながら、松野は彼の癖である、いたづららしい笑をちらりと洩した。それが石田の心に、何かぴりゝと觸れたものがあるように思はれた。その時までの松野の房子に對する態度には、微かな侮蔑の交つてゐる事が、言葉のはしぐ\にも見えるように彼は感じてゐた。そしてそれは、房子の性格そのものに對してゞあるか、或はまた、自分等の間近まで寄つて來ながら、こちらの仕事に身を投じ切れないでゐる人に對する反感が、比較的呑氣で解放的な房子のような性格の人に、無遠慮に反射したものであるのかは、石田にもよく解らなかつた。然し今の松野の言葉には、何かそれ以外に、悪戯か興味か、好意であるのか好奇心か、妙な期待が含まれてゐるように思はれた。そしてその時以來石田は松野に、房子の事については餘り多くを語らなくなつてしまつた。

松野の妻君が松野より、十才近くも年長である事も、彼はその時ふと思ひ浮べた事だつた。その日までの石田は松野がそうして年上の妻君を持ち、そしてその人がともすれば如何にも姉ぶつた我儘な態度に出る事が、多いのも、ぢつと壓しこらへて暮しながら、彼自身の仕事の爲には、いつも勇敢に情熱を燃えたぎらせて進んで行く態度に可なりの敬意を持つてゐた。松野にしても、彼の親しい友人だつた山内にしても、同じように年長の妻君を持ちながら、外に心を奪はれるような事もないのは、たゞぐ\彼等が彼等の仕事に、熱意と信念を注ぎつくしてゐる爲だと思つてゐた。そして、遂一年程前に、彼等の仲間に身を投じた當時には、牢獄も死も何も厭ふものかと、絶望に近い勇氣を持つ事の出來てゐた石田自身が、その後妻を持ち子が出來てから後は、だんぐ\にその勇氣が失せて行くばかりか、久しく親しまなかつた酒にさへ、兎もすれば浸り勝になつて來た、彼自身を鞭韃する種とさへしてゐたのだつた。

晴れ晴れとした晩秋の日を浴びながら石川は變に薄暗い氣持に襲はれて歩いてゐた。

松野と房子、彼等がそうして一歩づゝ親んで行かうとするならば、自分はどんな態度に出たらば好いのであらうか、

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

或は單にそれが自分の臆測に止つてゐるとしたならば、彼等の前に自分の醜劣さを晒すだけに過ぎなくなつてしまふのだ。そして、そうした事が、また成立たない以前に、餘りに騷ぎ立てるのは、岡焼じみた事であるし、もしそれが成立してしまつた後であつたら、自分の言葉なぞは何の役にも立たなくなつてしまふ事なのだ。彼はその時、さまざまと思ひ亂れて、ぽつ／＼と歩いてゐた。そして最後に、彼は、松野の爲には先輩であり、妻君のたか子に取つては近しい縁戚でもある、岡田の家でも訪ねて見ようと思ひながら、來合せた電車に乘つてしまつた。岡田に會つて見た所で、こうした茫漠とした問題が、すぐ右から左へ解決のつく話でもない事は、彼自身にも判つてゐたが、たゞそうして話をしてゐる中には、世馴れた岡田が、何か考へ出すかも知れないし、また自分自身にも、好い考が浮んで來るかも知れないと云ふような、取止めのない事を考へながら、彼は岡田の家を訪ねた。

石田が二階に通されると、丁度そこには山内と、松野の妻君のたか子とが來合せてゐて何か笑ひながら話してゐた。

石田は心に丁度好い所へ來たと思ひながら、皆に挨拶してから、

『あなたは、松野君と一緒にお出でになつたのですか』とたか子に尋ねた。

『いゝえ、私は一汽車遲れて來ましたの、ほかに用事があつたので出て來なければならなくなつたものですから』と、年よりは若く見える顔に、笑を湛えながらそう答へた。石田の心では松野はどこへ行つたか、と問れる事を待つてゐたのだが、たか子が如何にも淡々とそう云つてしまつたので、彼は少し間誤ついたが、今度は彼の方から、

『僕は今しがた、松野君と別れて來たばかりなのです。松野君は雜誌の校正をするのだと云つて、木元君(房子)と一緒に○○社へ行きました。何か用がおありなら、○○社へ行けばまだゐますよ』とわざとそう云つた。然し彼にはその時も、房子が泊りに來ても好いと云つた事を、たか子の前で云ふ勇氣は出なかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『あゝ、そうですの、今日は私別に松野に用事もありませんから』

『然し木元君と一緒ですからね、あつちの方へ序があるなら行つて見た方が好いぢやありませんか』石田はなにか言葉の外に、意味を含ませるようにくどくど云つた。けれどもそれは彼の希望には副はなかつた。たか子は石田の言葉を聞くと、彼女の誇りを傷つけられたようにむつとした。そして、

『一緒だつて好いぢやありませんか、あんな人とどうかなるなら、なつたら好いでせう』

まだ訛りがどこかに殘つてる、尻上りの言葉でそう云ふと、如何にも無理らしく苦笑してぢつと默つてしまつたのだ。石田はそれ以上何も云ふ事が出來なかつた。彼は自分が最初から、房子の云つた事をたか子に告げる勇氣のなかつた事を、自分で自分を輕蔑しながらも、再び言ひ出す事は出來なかつた。四邊はへんにしらけてしまつた。とその時、

『どうだねフランス語は、ぐん〱進んで行けるかね』と世馴れた岡田は、にこ〱笑ひながら石田に尋ねたので、彼はやつとほつとして、

『駄目ですよ、あの本ではまだ六つかしいのに、紫インキの謄寫版と來てるからなほ判らないのです。それにどうもあの本は、母方の何とかで、そのまた何とかでなんて變な母系性の説明なんかあるのが聞てるだけではとても善く判らないんで、頭が變になりますよ』

その教科書は岡田が得意な本だけに、彼は平素の不滿を洩しながら話をその方へ變へてしまつた。そして、それからやがて山内と三人して、彼等の周圍の事柄や何かについて、雜談に耽り初めてゐた。少時するとたか子は

『あゝあたし、それではあそこへ行つて來なければなりませんから、一寸失禮します。では皆さん御ゆつくり』と上京すれば岡田の家に泊るたか子は、そう云ひながら立ち上つて、やがて階段を下つて下へ行くと、そこで岡田の妻君と少

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

電話をして、玄關から出て行つてしまつた。

たか子の足音が、表の方に消えてしまふと石田はまたほつと息をついた。そして

『いや實はね』と岡田に向つて話し初めた。

『なに？なにか工合でも惡い事があつたのかね』岡田は不思議そうに聞き返した。

『工合が惡いつて云ふんでもないんですがね、たか子さんが○○社へ行つてくれるとよかつたんだけど』彼は思はずそう呟いてしまつた。そして、今日房子が松野に話してゐた事を話してしまつた。

『だから僕は、たか子さんが○○社へ行つてくれると好いと思つてそう云つたんですがね、どうもそれが反つて惡い結果になつてしまつて實際弱つたんですよ』と云つて、弱つたやうに苦笑した。

『ふゝん木元君が、松野に好意を持つてゐると云ふのかね、それで松野の方はどうなんだね』

と岡田が聞き直した。

『さあ、ふだんはいやに輕蔑したような事を云つてゐるんですがね、それが實際どう云ふものなのか、今日の僕には判らないんです』

『いや、そりや實際君危險だよ、肉を抱いて餓虎の許に投ずるようなもんだ。僕はあの木元君の變なこう、何つて云つていいか判らない恐ろしく派手作りな姿を見て本當に驚いちまつたんだ。ありや君少し變だからな』と房子に餘り好意を持たない山内は、その時横から口を出して、へへと笑つた。

『うむ、そう云へはどうもあの女の姿は少し若作りすぎるな、それにこう身體全體が如何にも健康らしくつて、熟し切つたと云ふような感じもあるからな、餓たものには好いだらう』と云つて、岡田も甲高い聲を揚げて笑つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『それがどうも世の中は皮肉なものでね、房子女史も、木川や村野のような餓えた者ぢや相手にしないだらうしな』と山内は皮肉らしく云つてまた笑つた。

『ふゝむ』と石田も仕方がなさそうに笑つたが、『併し本當に何ですな、僕も今日は歩きながら、さんざ考へた事なんだけど、こんな事はね、出來ない中に騷げば變に岡燒じみていやだし、そうかと云つて、出來てしまつてからぢや間に合はないんですからな、それにいつどうなつて出來るんだかは、二人よりほかに知る事の出來るものはありやしないんだ。それだから實際弱つて、こゝへやつて來たんですよ、たか子さんさへあんな事を云はないで○○社へ行つてくれゝば、今日だけの事は僕だつて安心出來たんだが』と云つたので、

『ふむ、そりや本當にそうだ。それに何しろあの松野の事だから、下手に變な事を云ひ出すと意地になつてもそつちの方へ轉つて行く男だからな、』と云つて、岡田もぢつと考へ込んでゐた。

『ぢやあ君、これから二人ですぐ○○社へ行つて見ようぢやないか、そうして皆なして何か話してたらまさか向ふも二人きりで出かけて行くつて云ひ出しもしないだらう』と山内が云つた。

『然し、松野君はきつと房子女史の家を知つてゐると思ふんだけど』

『そりや仕方がないさ、松野が一人でそつと行くつて云ふ事まで、我々は防ぐ事は出來ないもの、今日はまづそうしといて、あとはたか子さんがどうかするだらう』それで二人は行く事にきめてしまつた。

『いやどうもとんだご苦勞だな』と岡田も少し氣が輕くなつたらしく、また快活にはゝと笑つた。

『どうせ僕は○○社に行かなけりやならないのだが、然し餘り氣の利いた役廻りぢやないですな、犬に喰はれる方だからな』と云つて山内も笑つてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『然し松野は、本當に木元に對して好意があるのか知ら』その時になつて岡田はまた考へ出したように云ひ出した。

『さあ、それがさつきも云ふように、僕にはよく判らないんです』

『そうだらうな、然しこれが、例のあや子にでもそうなつたとすると、多少世間に對しても面白くなつてくるだらうし、そしてまた二人並んで運動することにでもなつたらな』岡田は妙な興味を含ませたような口調で云つた。

『そんなことが本當になつたらば、それこそたか子さんが、大變だ』と立ちかけてゐた山内はそう云ふと、『ともかく僕等は行かうぢやないか』と云つて立ち上つたので、石田も

『それぢや失敬します』と岡田に云つて、山内のあとに續いた。

そとに出ると、彼れは何だか岡田の家に來なければよかつたように考へた。そしてまた一つ纏りのつかない不快な氣持を背負こんだように思はれた。房子が今年の春上京したのも、彼の妻がしきりとそれを勸めた事がまだ考のきまらない房子の心をきめる爲に可なり有力な動機となつたらしかつた。そして房子は彼の妻のたゞ一人の同性の友人である事も、凡てが知つてゐる事だつた。それだけに彼れは彼れの眼の前で、房子の悪口を云はれる事は餘り愉快とは思つてゐなかつた。それに先刻、岡田が云つた、松野も對手があや子であつたら、と云ふ言葉が、恐ろしく彼には不快に響いたのだ。戀愛も運動も、凡てを社會的効果か反響にのみ重きをおく、岡田の態度を彼はいつも慊らず思つてゐた。そしてそれはやがて、社會的効果に自己を媚させたり、或は大向の喝采ばかりを期待する事になるように彼には思へて仕方がなかつた。何よりも自分が自分に忠實に生きさへすれば、そしてそれが力強く生き切れば、やがてそれこそ本當に、社會をも動かす事が出來るようになるに違ひない。彼自身には出來ないまでも、それが彼れの信條だつた。どうする事も出來ない性癖の相違が、岡田に合ふ度毎に、いつも不快な氣持を抱かせられるのを○○社へ來る道々でも、石田は自分

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ながらいやな事だと考へた。

『離れて見れば、苦節をまげない點だけでも、可なりの敬意を拂つてゐられるのだが』彼れは房子の事よりも、そんな事を餘計に考へて電車に乘つたり歩いたりしてゐた。

部屋の隅まで西日の射し込むでゐる、埃だらけな○○社の二階に二人が、上つて來た時には、松野や房子はもうそこにはゐなかつた。そして、彼等の仲間で校正上手と云はれてゐた青本がたつた一人で、落ついた調子で、ゲラ刷に朱筆を入れてゐた。

『君、松野は今日來なかつたか知ら』青本とは殊に仲の好い山内は、彼のそばに寄つていきなり尋ねた。

『さつき來た。けれどもすぐに歸つていつた』

青本は靜に朱筆を下におきながら、皮肉らしくにやりと笑つた。

『え、もう歸つた。そうして二人で一緒にか』

『一緒は一緒だつたよ、然し女史は社へ行くと云つてゐたし、松野は何か用があるから、よろしく頼むつて出て行つたがね。何かどうかしたのかね』

『いや別にどうもしないさ。たゞ房子女史が松野に今夜自分のとこに泊つても好いと云つたと云ふんで、石田君が、心配して岡田のとこへやつて來たんだ。それで今急いで來て見たんだが』と山内はさつきからの事を説明した。そして、『なんだよ、石田君も云ふんだが、そんな事は出來ない中に騷げば岡燒じみるし、出來てしまつてからでは間に合はんしね、實際厄介な事だ』彼はそう云ひながら、わきにあつた椅子にどたりと腰を下した。

『仕方がないさ、何しろ子供ぢやないんだからな』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

吉本は大した興味もなささうに云ひ捨てると、また朱筆を取り上げて、ゲラ刷に目を落した。

晝飯も喰べないで、ソワ〳〵と歩き廻つて來た石田も、その時は疲れ切つて、何一つ云ふ勇氣もなくなつてゐた。かつとした西日の射し込む、ザラ〳〵した部屋の椅子の一つに腰を下して考へてゐると、何も彼もどうでも好いようにさへ思はれて來た。自分が如何に彼等のあとをばた〳〵と追ひ廻して見た所で二人の間に湧き上つた感情をどうする事が出來るだらう、全く彼等は子供ではないのである。彼はさう思ふと、つまらない事の爲に、半日歩き廻つた自分が恐ろしく愚劣なようにさへ思はれてくるのだつた

『どうします君、君は房子さんの家を知つてゐるんだから、今夜向ふへ行つて見ますか』

山内は思ひ出したやうに石田に尋ねた。

『さあ、行つて見たつて仕方がなかないでせうか、まさか、松野君、君はこゝへ泊らない方が好いでせうつて云ふわけにも行かないでせうからね、それにどうも今夜行くつて云ふのは變ですよ、一體ならやつぱりたか子さんが先刻すでに來てくれさへすりやよかつたんだ』彼はたか子の來なかつた事に責任をなすりつけて、重苦しい自分の心を少しでも輕くしようと試みた。

『そりやそうだな、それぢやまあ仕方がない。』山内も何だかげつそりしたやうな聲で云つた。それつきり二人はだまつてゐたが、やがて石田は立上ると

『ではすまないけど、僕はさきに失敬します。』

と云つたまゝ、さつさと部屋を出て暗い階段を下つて行つた 泥田の中に足を突込んだような、わけのわからない暗い氣持が、頭の中に一杯になつてゐた。彼は家へ歸つてから彼の妻に簡單に今日の出來事を話してから二階へ上つてこ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ろりと横になつてしまつた。そして、どうかして今日一日の間に起つた出來事を、はつきりと解釋して、自分だけの態度の爲にでも、きちんと整理しておきたいと思ひながら、幾度か繰り返し繰り返し考へて見た。けれどもそれはまるで、チアンのように、にちや／＼して、烟のように漠然とした事で、どこから手をつけて好いのか彼には判らなかつた。いつまでたつても、同じ事實を繰り返し繰り返し、頭の中で轉回させるだけよりほかには出來なかつた。

『仕方がないや、全く子供ぢやないのだから』

彼はそうつぶやいて、重苦しい考を頭の中から投り出した。

その翌晩は、彼等の仲間が××協會の二階に集る日であつたので、石田は彼の妻と二人して、夕飯が終るとすぐに家を出た。彼等が××協會に來た時は、定刻より三十分ほど早かつたが、松野は已にもうそこで、今夜講演する材料を熱心に調べてゐた。石田の夫婦がその部屋に入つて來ると

『やあバカに早いね』と愛嬌よく笑つた。

『君の方が早いぢやありませんか。』と云ひながら松野のそばに腰を下した。そして机の上にある赤い表紙のパンフレツトを眺めながら

『今夜の話はこれですか』と尋ねた。松野も漸く出來上つた草稿をそろへながら、

『あゝそうだ。話をするのにも下調をするのが本當にいやだよ、ふだん暇な時に調べておけば好いんだが、どうもそれがうまく行かなくつてね』

『だつて君なんか、何も調べなくつたつて、話したい事はいくらもあるでしよ。』石田は少しからかふように尋ねた。

『そりや本當にそうだよ、ふだん考へてゐる時には、話したい事は無盡藏にあるように思はれるし、またあるべき筈だ

んだ。然し、いざ話をするとなると、やつぱり整理しないと甘く出ないからな』

『整理しなくつたつて好いでせう。僕には近頃誰の書くものも、餘り整理し過ぎるのでその中に情熱が拔けて行くように思へて仕方がない。何でも好い、思ひついたまゝに話て行つて、それで本物になつてゐるんでなくつては、どうも本當でないような氣さへするんです。』

『それはそうだ。だが、然し、整理すると云ふ事も、やはり、一種の情熱を要する』松野とそうして話てゐると、彼が房子に對して、イタヅラ好きな態度に出ようとした事などは、どうしても本當の事でないように思はれて來るのだつた。それよりも精悍で、豹のやうな飽くまで自己の思想に忠實に生きやうとする彼の精神が、ひし／＼とせまつて來るやうに石田には思はれた。そして彼の態度を疑つたり、彼をもつと輕侮に取扱はうとした自分が更に卑しいものだつたようにさへ思はれて來る。それでその時石田はふと思ひ出したように

『どうでした。昨夜は房子女史のとこへ泊つたんですか』と強て輕い調子で尋ねながら、探るような眼つきで松野の顏をじつと眺めた。くる／＼した大きな彼の眼の中に、皮肉な惡戯好きな笑か、ちらりと浮んで消えた。

『あゝ泊つた。昨夜遲くなつてからやつて行つてね、とめて貰つたが、なんだかごみ／＼した町なので、家がわからんので弱つたよ』

松野は如何にも恬淡とした口調でそう云つてにこ／＼笑つた。石田はそれ以上の事を何か尋る勇氣もなくなつてゐた。そこで彼は

『房子女史も今夜やつて來るでせうな』と訊ねて見た。

『あゝ、きつと來るだらう。今朝出掛る時にそう云つてたから』二人はそれつきりその事については語らなかつた。そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の中に彼等の仲間もぼつ〳〵とやつて來た。そして房子も可なり遲れてからやつて來たが、石田はもうその事は云ひ出さなかつた。

松野と房子との間がどう云ふ風に進んで行つてゐるのか、その後の二人がどんなにして接近し合つてゐるのであるか、石田は強てそれを知らうともしなかつた。彼は、自分としてはもう既に、たか子にも一應の注意はしてあるし、岡田にも山内にも、自分の考だけは話してある。そしてその二人は自分より先輩でもあれば、また、松野と親しい間でもある。石田自身として見れば、房子にはそれ等の人々より親しくもあるし、また曾て松野に紹介した事が、彼の責任感を脅す種となつてゐるようにも思はれた。然し、岡田や山内が松野に對して、形も見えぬ事柄について何か忠告をする事が出來ないように、石田にも房子に何か云ひ出す事は出來なかつた。毎週に一度づゝフランス語の講義を聞きに出て來ても、彼は何も云ひ出す事が出來ない、彼等の態度を細に觀察しようとも努めなかつた。それは全く、彼の力の範圍外に屬する事と彼は考へた。ともすれば自己の卑怯を罵るような聲に脅かされながらも、彼は實際そうするより外に道がなかつた。

一と月ほどたつてから、彼が吉本に逢つた時、

『ねえ君、こないだ高等が僕のとこへ來て、この頃松野さんは、おつの所へ泊るそうですな、と云つて、いやに皮肉らしく笑つてゐましたよ』と彼もまた皮肉らしく笑ひながら話した。

『え、おつのところですつて、おつつて一體どんなとこです』石田は松野の泊り先が、どこであるかは判つてゐたが、彼もまた強てそう訊ね直した。

『いやそれはね、その黒表(ブラックリスト)の乙つて云ふ事なんですよ、だからつまり房子女史の家なんでしよ』と云つてふゝんと笑

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つた、そしてさらに『松野も隨分物好きですな』とつけたした。

『あゝ、そうですか、房子君が乙になつてるんですか、然したゞおつのとこつて云ふと、乙だか異だか判らない。けれどもまあ、所謂おつぢやありませんね』と笑つて彼もゴマカシてしまつた。

石田はその時ばかりでなく、松野と房子の間の事を、ちよく／＼聞される事が多かつた。そしてそれ等の話手は、房子に親しい石田は何も彼も知り切つてゐるように思つてゐるらしく彼には思はれた。石田にその事を話し出したら、更に深い事柄を聞き出す事が出來ると考へて、探り出すような態度がいつも見える度に、彼はたまらなく不快に感じるのだつた。それは彼自身が、松野と房子を取り持ちでもしたような、不快な響が、その中に籠つてゐるようにも思はれるし、松野の爲にも房子の爲にも、その不自然な接近を惜みながら、彼自身にはどうする事も出來ないもどかしさを感ずるが爲でもあつた。彼はそんな話が出る度に、いつも默つて笑つてゐた。

松野が初めて房子の家に泊つてから、二人が石田に對する態度の中にも、何か物のはさまつたような、變な息苦しさが湧いて來た。そしてそれは日增にだん／＼濃くなつて來て、それまでは一週間に二三度か時としては毎日のように、石田の家に遊びに來た、房子の足もだん／＼に遠くなつた。どちらからかゞ、進んでその空氣を破らない限り、彼等の間に出來た溝はだん／＼に擴がつて行くように石田には感ぜられた。そしてそこでもまた、進んで何かを云ひ出す事の出來ない自分自身の腑甲斐なさが、或は事件自身がそうした事柄なのかも判然わからない、妙なもどかしさを石田はいつも感じてゐた。重苦しいいやな空氣の中で暮すような月日が、二た月ばかり流れて行つた。

それはもう暮の押し詰まつた、寒い冬の晩だつた。今まで餘り來た事のない松野が、突然石田の家を訪れた。

『どうしたんです、珍しいぢやありませんか、何か急用でも出來たのですか』と云ひながら石田は松野を茶の間に迎へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。そして、彼自身では、何か彼等の間の仕事の事にでも就て松野が來たのではないかと思ひながら、
『何か急な事なのですか、何なら二階へ行つても好いけれど、下にはあれが、ゐますからね』
と部屋の隅に何か仕事をしてゐた、小さな子守を頤でさした。
『いや、今日はそんな事ぢやないんだ、たゞ遊に來たゞけだよ、それにその一寸面白い話もあるものだから』と云つて、いつも傲然としてゐながら、ともすると小娘のようなはにかみを見せる、松野の癖をちらりと示した。
『はゝあ、あゝそうですか』と云つて石田もまたにやりと笑つた。そして『そんならまあどうか、ゆつくりして行つて下さい、何なら泊つて行つても好いんでしよ』と聞き返した。
『無論泊て貰ふつもりで來たんだ。君からも隨分非難や議論を聞される事と思つてやつて來たんだからね、』と石田に云つてから、彼の妻の方をくるりと向いて、『あなたによく聞いて貰ひたいんです』と云つて、松野はまたにこりと笑つた。
『たいてい判つてゐますよお話は』と云ひながら、石田の妻もくすりと笑つた。
『全く、たいてい判つてゐる事とは思ふんだが、ともかく正式に一應話に來たんです。それはその僕と房子の間の事なんだが、』と云つて彼はまた石田の方に向き直つた。
『ふん、それでどうしたんです』石田は固くなつて聞き返した。
『いやそう固くなられても困るけど、要するに、僕と房子との間に、戀愛關係が成立した。それを今日まで君達に話さないでゐたが、いつまで秘しておくのもいやなので、ともかく君のとこの夫婦にだけ話しておく方が好いと思つて今夜はそれを話に來たんだが』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『そうですか、それは僕達にだつてたいてい判つてゐましたよ、然し僕はそれを突込んで聞くのがいやだつたから默つてゐたんです、が或は他の人達は、僕がよくそれを知つてゐて、ひよつとしたら、僕が取持つたようにまで考へてゐるかも知れないと思つてゐるんです。僕はそれが爲に、可なり不快な思もさんざして來たんですが、まあそんな事はどうでも好いとして、それで、あの人と君とそう云ふ風になつて、たか子さんは一體どうするつもりなのです』

『たか子に對しては、僕は別にいまこれと云ふ考へもない。が、まあ、あの人がぢつと默つて、僕達の關係をゆるしておいてくれさへすれば、そのまゝで好いと思ふんだが』

『そうですか、それで房子君も現在の關係以上に、格別どうしようつていふ要求もないんですね』

『それはあの人もよく承知してゐるさ、要するに僕達は、二人の間に愛が生じたから、それを自然に自由に享樂しようつて云ふだけだ。僕は人間はみんなそうあるべきが本當だと思つてゐる。そうしてもし、お互の間に愛がなくなつたらその時も自由にサツパリと別れようつて云ふだけだ。それ以上にどうする事が出來るのだ』松野がそう云ひ切つた時、石田の心には何か不純な、こなし切れないものが、松野の言葉の中にあるように思はれた。――要するに彼れは理論にこびてゐるに違ひない――石田は心の中でそう思ひながら、

『そうですかね』と云ひながら首をかしげた。

『それで何ですか、君は房子女史も愛するが、たか子さんもやつぱり從來のまゝに愛して行けると云ふのですかね』と訊ねながら、石田はまた松野の顏をじろりと眺めた。

『つまり何だろ、君の聞きたいつて云ふ事は人間が同時に二人の人を愛人として持てるかどうかつて云ふ事だろ』松野はそう訊ねながら、石田の顏をじつと眺めた。石田は默つてうなづいた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『それはね、今の僕は必ずちやんと出來ると思つてゐるんだ。が然し、同時に同じようにと云つても、その質なり内容なりには多少の相違があるかも知れないが』

恐ろしく純理的に、結末をつけようとしたがつてゐる、松野の言葉を聞いてゐる中に、石田はだん〳〵變な不快な氣持になつて來た。然しまた、それと同時に、松野自身が自分のしてゐる行動を、どうかして正しくして行かうとしてゐるような心持も、彼の心ににじんで來た。

『そうですかね、同時に二人の人を同じように愛せるか知ら、然しそれは、言葉の上では同時と云ふ事が出來たつて、やつぱり一人の人に愛をそゝいでゐる瞬間には、片方の人の事は考へてゐられないぢやないですか、だから時間的に云へば、どうしたつて同時とは云はれない。それに君だつて、質なり内容なりに多少の相違があるかも知れないつてさへ云つてるぢやないですか、だから僕は決して同時に同じようには愛せないと思ふんです。だから、それは、まづそれとしてたとへば今度はあのたか子さんが、君の知らない中に愛人を作つて、そうして君を同時に愛するからつていつたらば君もやつぱり平氣でゐられるか知ら』石田は自分自身にも、はつきりとは解決の出來ない事を、執念深くまた訊ねた。

『それは僕だつて不快だらうさ』松野はすぐ簡單にさう答へた。

『そうでせう、それだから君が、不快な事を向ふにだけは忍ばせるつて云ふ事が、僕には變に思はれるんです。だからやつぱり僕だつて、たとへば一寸位ひ美しいなと思つたり、氣持の好い人だなと思ふような女の人に出逢つても、いつでも僕はそれ以上には進めないのです。男と男の間なら、可なり親しくつき合へば、どんな事でも話し合ふ事も出來る。然したとへそれにしても、結局同性の間の事つて云ふものは、異性と本當に愛し合ふほど親しくはなり切れない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けれども今度は、その異性に對しては、或程度まで親しくなつてからは力足を踏張つて、踏止まらなければならなくなる。つまり女に對しては、どんなに親しくならうとも、或一定の矩を越える事が出來なくなる。だから僕は異性の友人に對しては、いつでも他人行儀で暮すよりか仕方がなくなつてくる。それ以上の矩を越えれば、それだけの責任がすぐに生れてくるんだから、そうしてそれは結局同時に同じように二人の人は愛せないつて云ふ事が原因になると思ふんだが』

石田はそれより半年程前に、彼自身が或る女の爲に、苦しい氣持に惱まされた日の事を思ひ返しながらそう云つた。

『君のように云へばそりやそうかも知れないさ、然し僕は、平氣で同時に二人の人を愛して暮して行けるようにしたいと今は思つてゐるだけだ』松野は遂にそう云つて、『まあ好いから、當分この事は誰にも默つて、じつと見てゐてくれないか、木元との間だつて必ず長く圓滿に進んで行けるかどうだかも解らしないんだ。つまり僕は、僕自身としての或る行爲をいま熱心に試てゐる所だ。結果はどうなるか僕にも解らない。然し人間は自分が、それを正しいと思つたらやつて見るより外に方法はないぢやないか。松野にそう云はれてしまふと、石田ももう何も云ふ事は出來なかつた。同時に二人の愛人を持つ生活が現在に於てそれが不自然のように見えるとも、將來に於ても必ずそれが、絶對不變のものと云ひ切る勇氣は彼にはなかつたからだつた。然しその時石田は、曾て松野と語り合つた事をふと思ひ出した。それは彼等の間の、信條であり理想である、共産的な生活が、この現在の世の中では、彼等同志の間ですら、圓滿に行なはれないと云ふ事だつた。

『そうですか、それならまあやつて見るより外に仕方はないでせうね、然し、今の世の中で、お互同志に共産的な生活が出來なかつたように、今のまんまの狀態で、戀愛だけ自由にやられようとは、僕には本當に思へないんだが、』石田が苦しそうにそう云つたとき、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『それは僕にもわからんさ、然し、各人が各自で、自己の生活を確立させて行つたらば、やれない事もないと思ふんだ。ともかくまあ、もう少し默つて見てゐて呉れ給へ』石田は松野からそんな話を繰り返し繰り返し聞くよりも、寧ろどうして松野が房子を戀するようになつたのか、そして、自分自身が如何に勇氣を振つても、免れる事の出來ないその自然のワナの中に陥つて行つたのかの心持を聞きたかつたのだつた。けれども結局いくらそれを松野に望んでも駄目らしいと考へて、彼はそれ切り、その事に就ては默つてしまつた。そして、

『然し君は、先には隨分あの人を輕蔑したような事ばかり云つてゐたのが、そう云ふ關係になる位なら、やつぱりどつか好い所があるんでせうな』と云つて笑ひながら、强てくつろぎたいような心持で、石田はごろりと横になつた。

『ふゝ、それやあるね、今はまだ何も彼も眠つてゐるようだが、あれがはつきり眼覺めたら可なりよくなるだらうよ』

松野は笑談とも眞面目ともつかないやうな態度でそう云ふと、彼もごろりと横になつた。彼等はそれから、彼等の間の雜誌の事や、用もない雜談に耽つてゐた。そして翌朝松野は早く起て

『これから歸りに一寸木元の所へよつて、君に話した事を報告して僕は一應家へ歸る』と云つて、歸つて行つた。

松野と房子の間にそう云ふ關係が起つてから、彼等の仲間の間の空氣も少しづゝ動揺し初めた。それは松野のそうした行動が、仲間の者の多くの人達に、何か輕卒らしい感銘を與へた爲であつたかも知れなかつた。そしてそれまでは多くの事も、松野の發案と獨存に一切を任せてゐた人達までが、彼に對して何等かの苦情を云ひ初めるようになつて行つた。然し石田はいつも、誰よりも勇敢に、誰よりもよく働き、誰よりも大膽に進んで行く松野に、一切の事を任せておく事は、決して彼を偶像視する事でもなく、寧ろそれが、當然の事のように信じてゐた。そしてもし松野のする事に、逃しい誤があつたらば、その時こそ、無遠慮に非難も反抗もすべきであるが、たゞ彼自身が多くを發案したり、變更し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たりする事に對しては何の反感も持つべき理由はないと信じてゐた。

然し房子の事が、初まつてから以來、それまで彼に一番親しかつた山内までが、だん／＼と彼から離れて行くような態度を見る度に、今はまだ僅の仲間であるそれ等の仲ですら、そうした背反がある事を思ふと彼の心は何となく暗くなつた。そして石田自身としては、もつと無邪氣に元氣よく、彼等の仲間に加つた當時の、勇氣がだん／＼と失せて行き、更にそうした、暗と冷たい何物かに打つかつたのを、悲むような氣持にもなつてゐた。

『一人になつて、もつと眞劍に本當に考へつめて見なければならない事に違ひない』彼はその頃よくそんな事を思ひつめてゐた。本當に孤獨になつてしまはなければ、そしてそこから湧き出てくる動揺しない勇氣をもつとはつきりと掴まなければ、彼はまたそんな事もよく考へた。そしてともすればその渦卷の中に捲き込まれそうになつて來る、松野や房子の事件さへも、彼には煩はしく思はれた。

大晦日の日になつて、遂に房子が彼の家にやつて來た。そして

『わたくし本當に濟なかつたと思ひます、決してあなた方に隠してゐようとは思はなかつたんですが、矢つ張り言ひ出すのが何だか變に氣遅れがしたものですから』と云つて、改めて松野と自分の間の事を、彼女自身の口から簡單に云ひ出した。

『いや、どうも別に僕には何てお話する事もありません。こうして出來てしまつた事を、僕がどう云つたつて仕方がないわけですからね、然しあなたは何ですかたか子さんにはどう思つておられるんです。そうして以後もどんな風にして行かうと思つてゐられるのです』と彼はまたすぐに訊ね初めた。

『たか子さんに對しては、わたくしも濟まないと思つてゐます。けれどもわたくしは、あの方の現在の地位をおかすよ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うな事はしようとも思つてをりません、そうして、松野に對してゞも、我々の愛がつゞく間はやつぱりそれを續けて行かうと思つてをります。それでもしも、お互の愛がさめて行つたらその時は綺麗に別れようと思つてゐるだけですの、つまりこうあの花瓣がしつくりと合つて咲き出して、散る時は自由にサツパリと別れて散るようにしたいと思つてゐるだけです』房子は骨組のしつかりした手を合せて見ながら、心持顏を赤くしてさう云つた。

『そうですかな、戀愛と云ふものが、そんな風に、理屈通りに行くのなら本當に結構な事に思ひます。然し惚れる時にだつてどう云ふわけで、そんなに好きになつたのかわからないのが、別れる時だけ、そんなに綺麗に行くでせうか、僕のように理智の乏しい、感情にばかり走りやすい人間には、松野君やあなたの云はれるような事はどうしても解らない。それよりも本當は、どうしてもこうしてもあの人が好きだからこんなになつた。そしてこれから後もどうなつて行くか解らない。けれども今はあの人を得たんで喜んでゐる、そう云つた方が、僕には何だか正直のように思へるんですが』石田はそれまで持つてゐた、自分にもよく解らない謎な不滿を、房子の言葉にそゝぎかけた。

『えゝそれは或はあなたの言はれる方が、本當かも知れませんわ、然し人間は誰れだつて、自分の行爲をジヤスチフアイしたり、そうしてそれを、更に正しく進めて行かうとするのは、當然の事と私は思ふのですが』負け嫌な房子は、さつきの恥しそうな態度とは反對にハキ〳〵した言葉でそう云ひ切つた。

『あなたもやつぱり、松野君と同じような事を云はれるのですね』と石田は妙な顏をしてにやりと笑つた。『そうしてこれからそれを、正しく合理化して生きて行きたい、と云はれゝば、僕には何とも云はれなくなつてしまふんです。まあ、あなた方の幸福を祈るとでも云ふより仕方がないでせう』皮肉らしく彼はそう云つて、またにたりと笑つたのであつた。

そして彼は、全く彼等も子供ではないのだから、――と云つた吉本の言葉を思ひ出した。本當に彼等も子供ぢやない、

彼等の事は、彼等自身が一番よく知つてゐるのだ。彼はそう思ひ直して、再びその事には觸れようともしなかつた。

一月になつても、石田は變に、暗い心持で暮してゐた。彼等の仲間が少しづゝ、揉め出して來た事や、松野と房子の關係などが、彼の心を變に息苦しくしてゐたのだ。彼はその新年を、いつものように飲み歩きにも出なかつた。山手の奥の小さな二階家の一室に閉ち籠つて、變な憂愁の日を送つてゐた。その頃になつて、房子も彼等の會合には出席しなくなつて來た。それはたか子が、松野と一緒に出てゐる爲でもあつたし、多勢の仲間に顔を見られるのが、いやだとも云つてゐた。はつきりしない重苦しい妙な空氣が彼等全體の上に被つてゐた。そして冷たい暗い冬の日が二た月ほど流れて行つた。石田もその頃は、餘り房子と近しく往來もしなくなつてゐた。が、三月の初めになつて、ある日房子は恐ろしく昂奮した顔をして石田の家を尋ねて來た。

その日は朝から、灰色の雲が、ぢつと空に閉つて、大氣は氷のように凍てついてゐた。石田は丁度彼の仕事を一つきり切り上げたあとなので、少し寢坊した身體を、茶の間の火鉢の前にくつろがせて、僅かばかりの酒を樂しそうにちびちびと飲んでゐた。

『ゐらつしやるんですか、一寸お話したい事があつて』とバカに昂奮した顔付で入つて來た房子の顔を見た時に、彼は何か尋常でない事が起つた事を直覺した。そして、

『どうしたんです。今日はバカに早くからお出かけですね』と強て落ちつき拂つて彼女に尋ねた。

房子は石田の妻が臺所から出て來ると、

『あゝきし子さん、あなたもゐらつしやつたのね、こゝへ來て私の話を聞て下さいよ』

と自分のそばに座布團を引きよせた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『どうしたんです。恐ろしく何だか昂奮してるぢやありませんか』石田はまた訊ね直した。
『えゝ、わたくし少し昂奮してゐますの、だつてわたし、本當にあの松野の爲に欺かれたんですもの、本當にあの人は私を裏切つたのです』房子は息をはずませながら、せか〱と云ひ切つた。
『裏切つたつてどうしたんです。松野君が何かしたんですか』何の事とも見當がつかないので、石田は間誤つきながら訊ねたとき、
「あの人は、本當はわたくしを愛してゐたんぢやないのです。あの人はやつぱり、もとからあや子さんに本當に戀をしてゐたのです。そうして、それが得られないので、一寸私に興味を持つたんですが、それがまた今は、あや子さんの方へ行かうとしてるんです、それだから私は口惜くつて』勝氣な房子は如何にも口惜しげに、涙を一杯ためて云つた。
『そうですか、そんな事がまた出來て來たんですか、ともかくまあ落ついて、ゆつくり話を聞せて下さい。そうでないとよく判らないから』石田は房子に杯を差しながらそう云つた。
『そうして何ですか、松野君が、あや子さんの方に傾いて行つたと云ふのには、何かはつきりした證據つて云ふようなもんでもあつたのですか』石田はまた房子に訊き直した。
『えゝえ、それはあります、私は松野の口から、それをはつきり聞いたのです。二人は何でもこの頃になつて二三度逢つたらしいのです。そうしてとう〱接吻までしたと云ふのを、わたしは松野の口から聞いたのです、松野はそれを得意らしく私に話しておいて、今朝自分の家に歸つてしまひました。それからあと、一人でじつと考へてゐても、口惜しくつて堪らないので、あなたに話しに來たんですが』房子は唇をかみしめてじつと下をうつ向いた。
『だつてそれだけなら何も、あなたが、そんなに怒る事はないでしよ。あなただつてたか子さんのゐる松野に、そうし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で近しくなりなすつた。同時に二人の人を愛すると云ふ事が許せるなら、三人となつたつて同じぢやありませんか』石田は自分にもはつきりと解決出來ないでゐる、彼等の生活に對する疑問を新しく持ち出した。

『えゝそれがたゞ、二人が三人となつたと云ふだけなら、私だつて何もこんなに怒つたり何かしはしませんの、けれども松野はずつと以前からあや子さんに戀してゐたのです。そうして周圍の事情が中々二人を接近させなかつた爲に、じつとそれを堪らえてゐたのです。それがいま、あや子さんが松野に接近して來たものですから、もう松野の心は全で向ふに傾いてしまつたのです。私にはちやんとそれが判りますの、つまり松野は、あや子さんに戀してゐて、それが得られなかつたからその間、私を弄んでゐただけですわ、あの人がどんなにえらそうな事を云つたつて、二人を一時に愛せるの、三人でもそれが同じだの、私はもうそんな事を信じません、つまり私は松野に欺かれてゐたのです、だからそれを考へると、本當に口惜しくなつて來て』とそこまで云ふと房子は遂に堪りかねて、顏を抑えると聲をあげて泣き出した。

松野とあや子の間に、戀に近いものが芽さしてゐたのは、もう可なり久しい前からの事だつた、二人の間に頻繁に、手紙が往復された事もあつた。たか子がそれに對して苦情を云つたと云ふ噂も石田はかねて聞てゐた。それが爲か、二人の間の交渉は、久しい間全く絶えてゐたようだつた。それからこうして今になつて、突然復活したばかりでなく、一層進んだ程度にまで來た事を聞たとき、石川も全く不思議な氣持にされてゐた。それは恐らく、房子と松野の關係が、もうすでに公然の秘密となつた程度にまで、彼等の仲間に知れ渡つてしまつたので、抑へてゐたあや子の心を、煽りたてる原因となつたのかも知れないと考へた。そしてそれと同時に、人妻であると云ふ爲に、今まで進み出なかつた松野が、思ひ切つてそうした態度に出た上は、松野の愛があや子の方に傾いて行くと云ふ事も、彼にはよく判つてゐた。房

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

子がこうして、松野が自分をほんのつなぎか合の宿と云つた程度に、弄んでゐたと憤慨する心持も彼にはよく判つてゐた。然しそれにしては、今日の日まで、自分が優勝な地位にあつた間だけ、同時に二人の人を愛せると云ふような、松野の言葉を默認してゐた房子の態度にも彼は可なりな不滿があつた。

『それで、だからあなたはどうしよつて云ふのです』表の方ではちら〳〵雪がふり初めた、陰氣な町を硝子越に眺めながら、彼は房子に訊ねて見た。

『わたくし、わたくし、』と房子は幾度か苦しげに泣きじやくりながら、『わたくし、今はもう思ひ切つてあの人と別れようと思ふのです、だけどたとへそれにしても、あの人に云ふべきだけの事は云はなければ』と切れ切れにやつと云つた。

『それはそうでせうね、何しろあなたも、咲き出した花瓣のように、愛のある中はしつくりと合つて暮して、お互の愛が薄れて行つたら、自由に自然と散るように終始したいつて云つてゐたんだから、どうもそれが一番本當でせうよ、が然し、あなたがそんなに、未練氣もなく判然とすぐ別れる事が出來ますか』

『えゝそれはきつと出來ると思ひますの、それは私だつて多少苦しいには違ひありませんけれど、何かほかに、もつと自分の仕事か何かの中に、私の生活を求めて行つたら、どうにか生きて行けると思ふのですが』

『そう出來ればそれがよござんすわ』と石田の妻がその時始めて口を出した。『それにもう、そんな風に何か變な邪魔が入つてからは、關係をつゞけて行けば行くほど結局餘計に苦むだけですもの、だから矢張り今の中に諦められるなら諦めて、早くあなた一人の生活に歸つた方がよござんすわ、今までの事がこれからのあなたの生活に、何かの力になるに違ひなくつてよ』

『えゝ、それは私もそう思つてゐるの』と云つたが、房子はそれでもまだ何か心の中の苦みが、じり〳〵と湧き上げら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れてくるのを堪えるように、『だけどねえ』と云つてじつと下を向いてしまつた。

『僕は人に、別れたら好いでせうなんて云ふのは本當はきらいです。だからあなたにも、決して無理にお別れなさいとは云ひません。松野君がどんなことをしようとも、どんなに非道い目に逢されても、あなたがそれで滿足してついて行くなら、それは結局あなたの滿足なさる事だからそれで好いんでせうがね、だからあなたが本當に諦め切れるのか、それともどこまでも附き通すか、それは本當に今の中に考へて、どつちかによく態度をきめた方がよござんすな』と石田はまた改めてそう云ひ直した。

「だつてあなた、松野さんの愛が、もうあや子さんの方に行つてしまつたのなら、何もそんなに忍び通す事はないぢやありませんか、それに何だわ、まだそんなに深味に入つてるつてほどでもなし、世間に知れ切つたと云ふわけでもないのですもの、別れるなら今の中の方がよくつてよ』きし子は飽までそう云ひ切つた。

『それはさうだらうさ、然し要するに房子さんの問題なんだからな、周りであんまり何か云ひ過て、房子さんの本當の心持を云へないようになると悪いもの、だからあなたは、本當の今の心持を明らかに話てくれられた方が好いんですよ』酒の氣が少し廻つた爲に、だん／＼センチメンタルになりさうな心持を、強て抑えながら石田は房子にそう云つた。

『えゝ、もう大丈夫ですよ、わたくし本當に諦めますわ、全くきし子さんの云はれる通り今の中に別れた方が好いのですもの、本當にそうしますわ』と房子は強て快活らしくそう云つてから、『私にもう少しお酒を飲して下さらない』と彼女は進んで盃を取り上げた。

『そんならその方が好いでせう。今日は僕も休みなんだから、家でゆつくり酒でも飲んでなるたけ心持を輕くした方が好いでせう。』石田もほつとしたように盃を取り上げた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『だけど本當にわたくし隨分つまらない眼に會ひましたわ、これからは一人になつて、もつと靜に本でも讀んだり、考へたりして見た方が好いと自分でも思ひますわ。あんな人たんかどうでも好い』

『さうですね、あなたが本當にその氣なら、さうした方が好いですよ、勉强したり仕事をしたりしてゐたら、だん〳〵にまぎれて行くでせうし、あなたの進む道も新しく開けてくるでせう。然しかう云つたつて、僕はまだ松野君に逢つて、直接あの人の心持を聞いたんではないから、あの人はどう思つてゐるか知れませんがね、ともかく僕は、この問題にはいつでも餘り携りたくはなかつたんです。いつか吉本君も云つたけど、あなた方は子供ぢやないんですからね。』と彼も强て快活らしく笑つた。

『ふゝ』と房子も苦笑したが、『あの人に逢つて話を聞いたつて何にもなりやしませんわ、それはきつと色んな理窟を云ふでせうし、尤もらしい事も云ふに違ひありませんわ、けれども戀愛は理窟ぢやありませんもの、あの人の心や氣持がそつちへ移つたのが、私にはつきり解れば、もうどうする事も出來ないぢやありませんか』

『はゝ、今日はまるで僕の云ふ事をあなたが云つてるようですね、僕はいつでもあの人が自分の戀を何かこう、理窟がさきにあつてから、それが爲にラブしたように云ふのがいやなんです。そうしてあなたもともすれば、だん〳〵そんな風になりそうなのが面白くなかつたんです。けれども然し、實際理窟でどうなるものでもないんですからね、好きなら惚れるし、いやならば別れるだけですよ、ほかに、何にもありやしない』

『えゝ、だからわたくし、本當にはつきり別れます。きつと別れます。本當にきつと別れますわ、』と云つた房子の眼は烈しくひきつつて、唇はわな〳〵慄えてゐた。そうして、わきにあつた湯吞を取ると、德利の酒をがぶとあけた。

『今日だけね、きし子さん勘辨して下さい、私しお酒でもどし〳〵呑んで、何もかも忘れ切つてしまひたくなりました

の』と云ふと共に、一息にその酒をぐつと飲んだ。

『そんなことをすると悪酔をしますぜ、それよりも少しづゝ静に飲んで帰つた方が好いぢやありませんか』と石川は懸念らしく止めて見た。

『構ひませんわ、死んだつて構やしませんわ、本當にわたし、何も彼もまつくらになつてしまつたやうな氣がするのですもの。考へると口惜しくつて堪らなくなるのです。だけどきつと別れます。きつと別れて見せます』と云つた房子の顔はだん／＼に蒼ざめて、大きな眼は物凄く据つてゐた

『さうあなた見たいに、無理に別れる別れるつて云ふから、そんなに苦しくなるんぢやありませんか、だから無理に別れようと考へないで許せる點を考へて見たらどうです。さうしてどうしても許す事が出來なくなつたら、割合に樂に別れる事が出來やしませんか、どうもあなたは、餘り無理に別れようとするもんだから、苦しくなるやうに見えて仕方がない』

石田はどうかしてこの苛立つてゐる、房子の心持をしづめたいと思ひながらそう云つた。

『そんなことはありませんわ、今の私はたゞこんな風に欺れたのが口惜しいと思ふだけですわ、そしてどうかして松野にそれを思ひ知らせてやりたいと思つてゐるだけですわ。』

と云つて、房子はまた何か苦しみを隠すやうに、茶碗の酒をぐいと飲んだ。

『だつてあなた、自分がいやで別れてしまふなら、默つて別れてしまふ方がよくつてよ、反つて何か云つたり何かするとよくないわ、お前みたいな人はいやになつたから、別れるつて云つてやれば、それで好いぢやありませんか、それが一番好い復讐の方法よ』ときし子は慰め顔にそう云つた。

『そりやそうね、それぢや私そうしますわ、そうして私、もうあんないやな紀念のある家はすぐに越してしまいたいと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

思つてゐるの。ひよつとしたら、明日からでも、あなたの家に、三四日でもおいて下さらない』

『えゝえ、そりやいつでも』ときし子が答へた時、

『あゝ、私これでもうあなたにも話したから明日から別の生活に入ればそれで好いんだけど』と房子は云ひかけたが、一時に醉が出たやうに、ばたりとそこに倒れて、『わつ』と聲をあげて泣き初めた。

『きし子さん、きし子さん、もつと近くに來て下さい、あゝ私は胸が苦しい、本當に苦しいんです。あんな人を信じ切つて。何て私は——あゝ本當に胸が苦しい』と聲をあげて泣きながら、手足をもがき初めてゐた。

『どうしたのよ房子さん、本當にしつかりしなけりや駄目ぢやありませんか、そんなに身體をもがくと尚苦くなる事よ』きし子は倒れた房子の頭に手をあてながら『本當に靜にしてゐらつしやいよ』とさゝやいた。

『好いんですの、好いんですの、苦しくつたつて構はないわ、胸の中があらしのように苦しいんですもの、わたし、あなたにはもう話したから、今日の中に、もう一人山内さんにだけ話しておきたい、あの方と二人に話しさへしておけば、もう私死んだつて構はない、ねえ石田さん、本當に私お願ひですから、山内さんを呼んで來て下さらない、今日だけどうか、私の我儘を許して下さい、ねえきし子さん、本當にそうして下さいね』房子はまるで、子供が駄々をこねるような態度で泣きつゞけた。

『どうしようね。山内さんを呼んで來てあげようか』石田はきし子に訊ねながら、硝子をすかしてそとを眺めた。三時近い冬の日の雪空は、夕暮のように薄暗く曇つて、小さな雪が物惜しそうにちら〳〵と降つてゐた。

『だつて、こんなに苦しんでゐるとこへ、山内さんに來て頂いたつて、話も何も出來やしないでしよ、ねえ房子さん、それよりあなた今日は靜に休んで、明日でもゆつくり、あの方に來て頂いたら好いぢやありませんか、ねそうなさい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

よ』ときし子はまたなだめて見た。

『いゝえ、今日が好いんですわ、私、明日になれば生きてゐるか死んでゐるか解りやしない。本當にお氣の毒ですけれど、どうか呼んで來て下さい、ねえ石田さん、ねえ』と房子はまた、身體をもがいて云ひ續けた。その時まで、二階で靜に眠つてゐた、石田の子供は、何かにおびえたように泣き出したので、石田は二階に駈け上つて、小さな子供を抱いて來た。

『ねえ、本當にお願だから、どうかよんで下さいよ、私もうこれつきり無理な事は頼みません、どうか本當に』房子は横になつたまゝ頭を下げるように動かした。

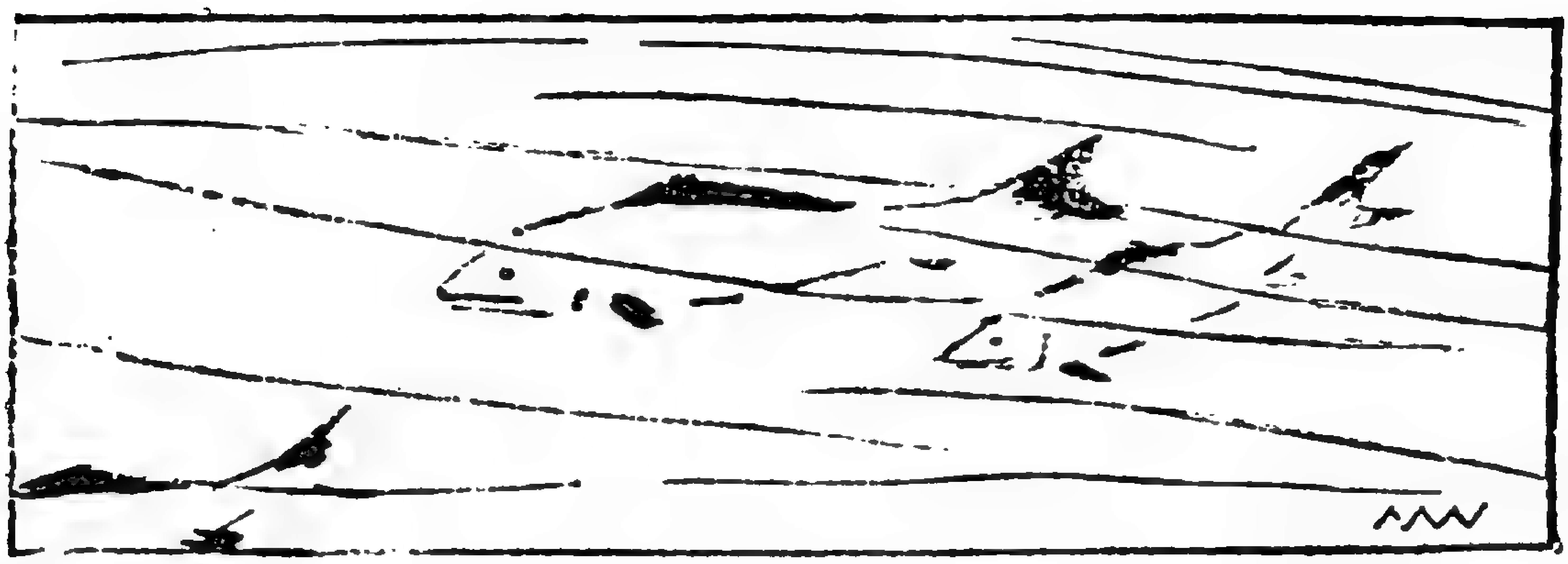
『それぢや、夜にならない中に行つてともかく來て貰はうか、そうさへしたら、房子さんの氣も濟むのだらう』と云つて石田はやつと立ち上つた。そして、『どうする子供は、この樣子ぢや家においても抱いてやる事も出來ないだらう』ときし子に訊ねた。

『えゝ、とても駄目だわ、何しろ房子さんはこんなに苦しんでゐるのですもの』ときし子も困つたような顏をした。

『ぢや懷に入れて抱いてこう』石田は生れてまだ一年にならない彼の子を懷に入れてそとに出た。霙のような小さな雪が陰氣な空からちら〳〵とふつてゐた。彼は懷の子供をぢつと壓えながら、風をよけるようにぼつ〳〵歩いてゐた。そして獨身者が乳貰に歩くような、みじめな姿をした自分が何だか情なくなつて來た。頭の中が俄にぼつと暗くなつて、彼自身が失戀したような、重苦しい氣持におそはれながら、首垂れて歩いてゐた。やがてその氣持がだん〳〵に濃く重くなつて來て、大きな聲を張り上げて、わつと叫び出したくなつて來た。その時彼はふと氣がついたように、

『俺が失戀してゐるんぢやない、俺が失戀してゐるんぢやない』と心の中でつぶやきながら、傘をかしげて、ぼつ〳〵と歩いて行つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



勉吉の打算

徳田秋聲

何となし張合ひのない氣持で、その日も勉吉は家の方向へと夕方の道を歩いてゐた。廣い賑やかな電車通りから、その町へ入つてくると、急に寂しい、物足りないやうな氣持になるのであつたが、それは強ち其の町がちよつと陰氣な狹い通りであつたからばかりでなく、途中で少し肚のなかへ入れて來た酒が、空になつた胃壁にいくらか泌みこんだかと思ふと、強い酒量に慣らされて來たその胃が、一層の渇きを覺えて來たやうに感ぜられながらも、酒が妙に內攻して、氣が沈んで來たので、そこ〳〵に切揚げて來たせいで、何か煮えきらない物足りなさを感じてゐたからなのであつた。無論のこと、もう一本も飲めば、醉つたとも醉はないともきまらないやうな、さうした煮えきらない氣持が、もつとはつとした愉快な明るさになれるのであつたけれど、今の勉吉に取つては、さうすることが何となく恐ろしかつたばかりでなく、詰らないことのやうにも思はれるのであつた。強ち彼は酒によつて犯された過去の過失を悔いてゐる譯でもなかつた。女達仲間の忠告に感心してゐるせいでもなかつた。亡くなつた妻や、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

返された子供たちに許さないと感じてゐるからでもなかつた。一つはアルコホル中毒もあるだらうが、それよりも酒を飲むきつかけとか、はづみとかいふものが、妻を失つてからの彼の生活氣分から消え失せて居るからであつた。

死んだ妻のお吉は、ぐうたらではあつたけれど、しかしおつとりした温順な、辛抱づよい女であつた。産れが好かつたので、苦勞をして來た割に、捻ねくれた處や、狡いところが少しもなかつた。今考へると、その身持の惡いことすらが、彼女をいぢめた勉吉自身へのちよつとした可憐しい復讐に過ぎなかつたのであつた。勿論勉吉が彼女をいぢめたのには理由があつた。それは結婚後――殆んど結婚と同時だつたと言つても可いくらゐの期間に、彼女が最初の姙娠をしてゐたので、それは勉吉は勿論、恐らく彼女自身にも分明した判斷のつきかねることであつたゞけに、産れた子供に世間普通の父の愛以上の愛著をもつてゐただけにその苦しみも亦一と通りではなかつた。そして日數がたつうちに、人の好い彼女の自白によつて、前の愛人との關係が、少しづゝ解つて來たところで、勉吉の妻に對する心持が、不思議な矛盾に陥つた。勿論それには彼女が二人で小さな商賣が始められるほどの金をもつてゐたといふことが打算的な勉吉の愛を一層强めたのであつたが、その「打算」がまた勉吉の心持を、二重に苦しめたのでもあつた。勉吉は、結婚當初の幸福を段々失つて來た。失つたといふよりも、その幸福が妙に皮肉な嘲笑的なものであつたので、彼は最初豫期したやうな眞面目さでは、商賣なぞしてゐられなかつた。そして何か知らその氣持を痲痺化す手段を、他に求めなければならなかつた。酒が好きであつた勉吉が、飲酒によつて次第に荒みだして來たのは、寧ろ當然の徑路であつたが、しかしまた彼の放埒な游蕩癖がまた妻には堪へられないものとなつて來た。三年五年とたつうちに二人の生活は段々絶望的な墮落のどん底に陥ちこんで來た。止め度のない飲酒と遊蕩が、常習となつて來て、それから生ずる悔恨とか痛苦とか云ふものから逃れるためにも、彼はまた段々深みへ入つて行くことになるのであつた。柔順な彼女は、長いあひだそれを堪へ忍ん

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で來たが、終ひに我慢ができなくなつた。そして復讐的に更らに新しい戀愛の相手を勉吉の友達のなかに求めたりしたことから、二人の生活氣分が一層收拾のつかない混濁に陷つてしまつた。そしてその揚句に、二人の子供を殘して、彼女が不意に心臟で死んでしまつたのであつた。勉吉は何だか足を掬はれたやうに思つた。泣くにも泣けないやうな失望を感じた。過去の自分が空恐しくなつて來て、今更ら彼女が可哀さうでならなかつたが、この先きを何うして暮らして行かうかと思ひ惑つた。意氣地のない妻ではあつたけれど、生きてゐるあひだそれが無意識にでも何んなに大切な役目を勤めてゐたかゞ覿面に判つたやうに思へたが、しかしもう駄目であつた。どんなに思つても、彼女は死んだのに違ひないのであつた。その頃彼はどん底から救ひあげられて、妻の母親の方の緣故で、或る小さな雜貨店に傭はれて、少し辛抱すれば先きの見込が十分立つことになつてゐたのであつたが、彼はいくらか好い氣になつて、相變らず時々家をあけたりしてゐた矢先きだつたので、彼の不幸が誰からもさう同情されないのであつた。

「お澄さんはほんとに可愛さうだ」と誰もがさう言つて彼女の死を悼むと同時に、彼女をそんな目に逢した勉吉のだらしなさを憎むのであつた。そして妻の死後彼はその地位を失つてしまつた。

勉吉はその地位を失つたことが、惜しくてならなかつた。そして色々考へてみても、あれだけの報酬をくれて、可也重要な地位においてくれた、あんな會社がどこにもあらうとは思へなかつた。商人としての勉吉の役に立つことを知つてゐる人達は、誰も彼も彼の不檢束な酒癖を怖れると同時に、その善良なづるさに不安を抱いた。

勉吉には厭といふほど、それが解つてゐた。自分の腕を買つてくれるものを、片端から手古づらせてゐることを十分承知してゐたので、彼はもうそれに恐れを抱くことができないほど、氣持がづうづうしくなつてゐた。結婚以前の彼の軍隊生活――軍隊では彼は模範的工兵であつた――が、若し彼をさう云ふ風にした最初の動機を尋ねるならば、恐らくそ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こに溯られるのでもあらうが、とにかく結婚當初のやうな眞面目さを取り返すことは、困難であつた。

初夏のことで、夕方の町の氣分が何となくあわたゞしいなかに、不思議な靜かさをたゝへてゐた。紅い新鮮な草苺などが、八百屋の店に出てゐて、厚司に革のバンドを締めてゐた彼は、今更ら始終周圍から追ひこされてゐるやうな氣がした。

　すると不意に彼は脅かされた。

「こん畜生何で己にぶつかりやがつたんだ。」

勉吉は三人ばかり並んで來た、職工とも土方ともつかないやうな男の一人と、ふと肩のぶつかつたことには氣がついてゐたけれど、それが誰の不注意から來たのだかは、一向氣がつかなかつた。家が近くなつて來たので、彼は遽かに足を速めてゐたのであつた。同じ不幸な同宿の男が、自分を待つてゐるだらうと思つたからであつた。

「何だつて。」脊の高い勉吉は立止つて言つた。そしてバンドへ兩手をかけたまゝ

「手前がぶつかつておきやがつて、何を言つてやがんだ。氣をつけろ」と冷笑的に遣返した。

　すると其の勉吉にぶつつかつたところの、一番端の方を歩いてゐた、四十ばかりの、顔にむじやくじや黑い髯の生えた、づんぐりした小男が、目がわるいとみえて色眼鏡をかけて、腹掛に半纏で、職人とも土方ともつかない風をしてゐるのが、躍起となつて遣返した。

「何を生意氣を言つてやがんだ。手前こそ目をあいて歩け。この拔作野郎。」

勉吉はそのまゝ行き過ぎようかとも思つたのであつたが、何だか引込がつかなくなつた。そして二言三言爭つてゐるうちに、彼の長い手がいきなりぽか〳〵と二つばかり其の髯男の横ぞつぽうを撲つたと同時に、彼はまた横合ひから出

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て來た相手の連の若い男から、下駄で頭をいやと言ふほど喰はされた。

「おい、止しなえ〳〵」と、もう一人の男もさう言つて止めながら、勉吉がその撲つた男をつかまへて小づき廻してゐるなかへ入つて來て、勉吉の胸倉を取つて、力一杯ぎゆう〳〵押しつけるやうにした。そのあひだにも、醉なじやの男と、下駄をもつた男とのために滅茶苦茶に撲られたので、彼は忽ち目が眩んだやうに感じた、勉吉はいきなり其處にしやがんでしまつた。そして兩手で頭をかゝへて默つてゐた。人が多勢たかつたやうに思はれた。頭がづき〳〵して、顳顬骨のところから血が入染み出してゐるのを感じた。四邊が何だかごや〳〵してゐた。勉吉は今更ら夢現のやうな心持で、もう死につぱぐれの目にでも遭はされたやうに、じつと目をつぶつてゐた。

「何うした兄貴！」さういふ聲が耳元でした。

「しつかりしろい。」別の聲がまたさう言つてゐるやうに思へた。

「この野郎が惡いんだ。こつちが手出しもしねえうちに、ぽか〳〵撲りやがるんだ。」さう言つてゐるのは三人組の誰かであつた。

勉吉はいきなり起きあがつた。そしてづき〳〵する顳顬骨のところを押へながら、

「おれも撲つたか知らないが、どつちが手が早かつたか、そんなことが判るもんかい。下駄でぽか〳〵頭を撲つて法があるかい。この儘ぢや濟せねえんだ。さあ來い、交番へ行つて聞いてもらはう。」と砂でじやり〳〵する目のはたを腕でこすりながら、下駄で撲つた三十二三の男の利腕を捉えた。

すると木綿縞の單衣に兵兒帶をしめて、頭髮なぞわけた色白の職人風をした其の男は、いきなり其の手を拂つて、着物を掻合せながら、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「止せ、間抜野郎、手前の手が早いんぢやないか。」と負惜しみらしく冷笑つた。

「言ふことがあるなら交番へ行つてからにしてもらはう。こゝに證人の方もあるんだ。」勉吉は目に涙をにじませながら、歪んだやうな顔をして、今間へ入つて引分けると同時に、勉吉を劬はつてくれた、半纏着に白い股引をはいて、ゴムの短靴をはいた、三十五六の體の大きい男の方に向きかへつて言つた。彼はちやうど其の前で喧嘩がはじまつた八百屋の主であつた。

「濟みませんが、貴方一つ證人になつて下さい。」

「ようがす。私が立派な證人です。たとひ何んなことがあつたにしても、いきなり下駄で頭を割るなんて、亂暴でさ。」

そして加害者であるところの色白の男に向つて、

「あんた方にも言條があるでせうから、とにかく交番へ行つたら可いでせう。」

「よろしい、ぢや行かう。」色白の男が答へた。

すると又髯むじやの男が詰らなさうに言つた。

「よせやい、交番へなんか行くのは。何うせはづみでしたこんぢやねえか。」

「さうは行かない。己は怪我をしてゐるんだ。」勉吉は冷笑するやうに言つて、加害者と一緒に八百屋を先きに立てゝ歩きだした。

交番は四丁ほど後へ戻つたところの、町の中程のだら〳〵した坂路と向合つた場所にあつた。彌次馬がぞろ〳〵ついて來た。勉吉は何だか遽にばか〳〵しくなつて來た。さうも醉つてゐないのに、こんな連中を相手に、どうしていきなり手をあげたり何かしたのだらうと思つた。勿論彼は生活のどん底へ落ちた時分、ちやうど死んだ妻が友達と妙な間に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なつた頃のことであつたが、一時は露店まで張つて、商賣の資本を作らうとしたのであつたが、酒のために其の足が抜き切れなくて、しばらくそんな事をやつてゐるうちに、惡い仲間に誘き込まれて親分兒分の盃なぞしたくらゐなので、氣分がひどく荒くなつてゐた。醉へば誰にでも突つかゝるといふ風であつた。無茶な喧嘩をしたこともあつた。巡査に喰つてかゝつて、一晩留置所へ打込まれたこともあつた。酒に喰ひ醉つて無闇に人を脅かすのが面白かつた。刄物を振りまはして、妻に飛びかゝつたことなどもあつた。しかし其後では、彼はきつとめそ〳〵と泣いた。

「おれといふ人間は何といふ可哀さうな馬鹿だ。おれは一體何うしたら可いんだ。」勉吉は芝居じみた表情で言つて、妻の前で身を悶えるのであつた。

しかし會社へ入つてからは、彼はすつかりおとなしくなつてゐた。今迄の傳法の風をやめて、堅氣の商人らしい角帶に前垂で、代物の仕入れなぞに、拔目のないその頭腦を働かせてゐた。が、それも暫らくで、間もなく死んだ女房の二千圓ばかりの保險金も、會社の前借に半分の餘も取りあげられて、殘りは瞬く間に浪費してしまつた

勉吉は巡査の前へなぞ出るのが、何だか恥かしくなつて來た。宿がつい近所なので、一層極がわるかつた。酒の醉もさめて、顳顬骨のところが、ひり〳〵痛むだけであつた。しかしもう引込みがつかなかつた。

薄暗い路傍樹の蔭にあるところの交番で、巡査は一と通り双方の言分と、證人の證言を聽取つたが、さう問題にしようともしなかつた。

「お前の傷はどんなかね。翌日から稼ぎに出られんとでも言ふのかね。」若い巡査はぺこ〳〵お辭儀をしてゐる三人から、勉吉の方へ向き直つて笑ひながら訊いた。

「さう大したことぢやないやうですが、何しろづき〳〵痛みますんで。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「痛む。そらちつとは痛むだらうが、それ程のことでもないやうだつたら示談にしては何うかね。醫者に診てもらつて、傷がひどいやうだつたら、其の時何とかしよう。」

「さいですか。」勉吉は片手で頰をおさへながらお辭義をした。

「お前方の方も、かうして證人もあるんだから、診斷の結果何かの形式で謝罪するのが至當だらう。」

「は。それは無論……。」加害者もお辭義をした。

巡査はそれから「ちよつと見せなさい」と言つて、勉吉の傷を見た。頭に二た所ばかり疵が出來てゐるのを觸つてみたり、血のにじんでゐる顳顬のところを明りに透かして見たりした。

で、結局彼等はまたぞろ／＼と醫者へ行くことになつた。

勉吉は店をもつてゐた時分、硝子戸が倒れて誰よりも顏の美しい長男が顏にひどい裂傷を負うたとき、引抱えて近所の醫者へ駈けつけたことを思ひ出した。

「あれは疑問の子だ。」勉吉はさう思ひながら、何かにつけて其の長男に何の子供よりも強い愛著を感ずるのであつた。

その晩少しばかり頭に發熱を感じさうだつたので、彼は氷嚢をあてゝ寢てゐた。傷は消毒して、片方の目から後頭部へかけて、醫者が大業に繃帶をしてくれたのであつた。

「下駄で撲たれた？」醫者はさう言つて眉を顰めながら、頭中を指頭で押して見たりした。

「痛む。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「痛みます。」勉吉は加害者を脅かすつもりで、少し誇張して言つた。

「餘程痛む？心が痛む？」

「何だか少し痛むやうです。骨でもこわれてゐるんぢやないですかね。」勉吉は訊ねた。

「いや、そんな事はないだらう。一兩日經過を見ないとわからんが、骨は何うもなつてゐないやうだ。何しろ下駄で打たれちや堪らんね。」醫者はさう言つて、そこにづらりと立つてゐる加害者たちの顏を眺めて笑つた。

　彼等はまたぞろ〳〵と其處を出て來たのであつた。

　勉吉の宿は現場から三四町の距離にある、裏通りの或る棟割長屋の一つであつた。隣りが左官屋で、いつも夜になると酒に喰べ醉つて管をまくのがお定まりであつた。ひどい夫婦喧嘩が突發したりするのが、壁一重を隔てゝ、絶えず勉吉たちの安眠を妨害するのであつた。自分の過去も、始終あんな風だつたのだと思ふと、可笑しくてならなかつた。

「女房が死んでみろ、管なんか捲くところの騒ぎぢやないぞ。」勉吉はいつもさう思つて、不運であつた妻の死を心から切なく思つた。それに口の荒い隣りの女房とは、比べものにならないほど、彼の妻は溫順であつた。勿論不斷は勉吉も平和な男であつた。そして妻の何んな缺點が目についても、素面では何にも言へないのであつた。

「何うだね勉さん、晩飯はいゝのかい。」洗湯から歸つて來た河野が、惡い足でよち〳〵部屋のなかを歩きながら、聲をかけた。

　河野はこの家の借家人であつた。彼も一ト頃ブローカアのやうなことをやつてゐた頃には、一時ちよつと景氣が好かつたのであつたが、株に手を出して失敗してから、それなりにづるん〳〵と今の境涯へ落ち込んでしまつた。勉吉はこの男に勸められて妻に保險をつけたのであつたが、掛金の工面も出來なかつたし、遠い先きのことのために金を積むとい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふことが、勉吉自身の打算と何うしても折合はない處があつたので、眞面目に契約をすることが出來かねたのを、河野さんが一時立替へて、第一回分の掛金をしてから、一月とたゝないうちに被保險者の妻が、急病で死んでしまつた。勉吉は悦んで可いか、悲しんで可いか解らなかつたけれど、その際二千圓ばかりの金が、思ひかけなく彼の淋しい懐ろへ入つて來ると云ふことは、とかく好運に惠まれない彼に取つては、まるで夢のやうな話であつた。勿論事情がさうだつたので、保險金を受取るまでには、可也ごたくした。河野さんや其の他の人が間へ入つて、長いあひだ色々面倒な手數を經なければならなかつた。それを待つ間の勉吉は、絶えずじれくさせられた。その金を當てに友達を引張つて、酒を飲みに行つたり、河野さんに喰つてかゝつたりした。そして漸とのことで受取ることができた金を、そつちこつち借金を差引いた殘り千圓ばかりを、河野さんの老婆心で、勉吉の勤めてゐる會社へ預かつてもらふことにしたのであつたが、會社は意外にも積りくしてゐた勉吉の前借と差引いてしまふことにしたので、勉吉の信用を得させるためにした事が、まるでふいになつてしまつた。そして勉吉の手についたのは、わづか二百か三百かの零碎に過ぎなかつた。その上酒癖がわるいといふので、彼は會社をお拂ひ箱になつてしまつた。

勉吉は泣面をかくどころの騷ぎではなかつた。愚痴をこぼしても追つかなかつた。そして其れ以來、勉吉は獨身者同志の河野さんと一緒に居ることになつたのであつた。

河野さんはその日も、何かブローカアのやうな仕事で、惡い脚を引きづりながら、一日外をあるいてゐた。彼はもう四十三といふ年輩で、髯や髮の毛が胡麻鹽になつてゐた。彼は二十年も前に、養子に行つてゐた家を出てから、妻や子供が思ひきれなくて、ずつと獨身で通してゐるのであつた。多分彼は折合ひのわるい姑が亡くなれば、再び妻子と同棲する幸福な時が來るに違ひないと信じてゐるのであらうと思はれた。妻が再縁をした噂も耳にしないし、別に浮氣をし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てゐるらしい形勢もない以上、彼女の考へてゐる事もてつきり自分と一致してゐるに違ひないと考へてゐるらしかつた。

しかしそれにしては、時が餘りに經ちすぎた。河野さんが何をやつても、今迄何一つ成功した例がないと云ふことも、思はなければならなかつた。勉吉の考へるところでは、河野さんは妻と同棲時代に、何かの仕事で山を張つて多くもなかつた養家の財産を減らしたことがあつた。そして其れ以來、それまでにも兎角折合の好くなかつた姑の目が彼のうへに特別に意地わるく光つたのであつた。

「いや、それあね、話せば辱になるから隠してゐたんだけれど、それには別に原因があるんですよ。」河野は言ふのであつた。

「姑が私に辛く當るといふのは、辛く當る原因があるんですよ。しかしそれを荒立てることは、私には出來なかつた。實際私は辛い立場に立たせられたのですからね。」

或る時二人が枕を並べて寢てゐながら、勉吉はさう云ふ話を聞かされて驚いた。

「私の家内がまた、あの通り親には絶對服從主義の内氣な女ですからな。」河野さんは言つてゐたが、勉吉は何だか擽つたいやうな感じがした。いつになつたら河野さんが美しいその女子と同棲する時が來るのだらうと疑はれた。しかしさう云ふ運がひよつとしたら向いて來さうにも思はれた。

「私は食つて來ました。あんたは何うです。もう濟んだんですか。」勉吉は色澤のわるい、しかし目鼻立の立派なその顏を見上げながら訊いた。

「私は今日は外でやつて來たので。」河野さんはさう言つて、瀨戸物の火鉢の傍へ寄つて、お茶の仕度をしようとした

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、お茶は可惜切れてゐた。

「下つちやこわい、この節は碌々お茶も呑めない。」

「全くですね。私は今日は膏藥代にでも有りつけるかと思つたんですけど、此の分ぢやさう大したことでもなささうですからね。無論少しおどかしておきましたから、何とか挨拶くらゐはするでせうがね。」勉吉は言つた。

それから勉吉は喧嘩のいきさつを、少しばかり話して、

「喧嘩なら私の方が强いんだがね、何しろ交番の近くですからね。それに私も無鐵法なことは出來なくなつてね。好きな酒も澤山は行けないし、人間もかうなつちやお終ひですね。」

「君なんかまだ若いんだ。今からそんなこつて何うするんだ。」河野さんはさう言つて小ひさい古い手提を引寄せて中から書附のやうなものや、小型の手帳などを取出して、何かしらべはじめた。

「しかし私も直き四十ですからね。厭になつちまうな。」

「けれど君には子供があるから好いね。男の子が二人もあるんだから。」

「その子供が問題ですからね。」勉吉は答へたが、しかしそれは實際さうだと思ふと、河野さんよりもいくらか心强いやうな氣もするのであつた。

勉吉は長男の方は、亡なつた妻の緣故で、會社の社長のところで引取つてくれたし、次男は田舍の自分の兄に預けて、末の女の子だけを餘所へ養女にやつたのであつたが、長男は事によると自分の手へ取返すのは困難だと思はれたけれど、それにしても、かうしてゐるあひだも、彼等は何等かの役に立つべく、一日一日成長しつゝあるのだと思ふと、少しは氣が安まるのであつた。勿論彼はどうかして、子供たちと一緒にゐたいと思つた。それを考へるとうつかりして

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

居られないやうな苛々した氣になるのであつた。

河野さんは默つて、算盤を彈いてゐた。大分前から脚が不自由で、醫者は脚氣だと言つてゐたが、勉吉はもつと深いところに病原があるのぢやないかと思はれてならなかつた。河野さんの顏は、實際少し仇腫れたやうになつてゐた。以前は美しかつた目の色も淀んでゐた。それでも河野さんは、幸福な時の來るのを心頼みに、毎日さうやつて働いてゐた。

「姑さんの死ぬのと、河野さんの倒れるのと孰が先きだか知れたもんぢやない。」勉吉はさう思ふと、もう五十に近い年をして、自分なんかと一緒に忙しい裏店住ひをして、慰めの少ないその日〳〵を徒らに送つてゐるのが氣の毒のやうであつた。

頭の氷が解けてしまつて、嚢にさはると少し温んでゐた。傷がまだづきん〳〵と痛んでゐた。安靜を命ぜられてゐたので、勉吉は氷を河野さんに頼まうかと思つたが、それも氣兼であつた。自分が立てば尚ほ惡いやうな氣がしたが、とにかく氷をつめに臺所へ出て行つた。

「そんな事しても可いのかい。」河野さんは言つた。

「えゝ、大丈夫です。」勉吉はさう言つて、先刻向うの細君に買つて來てもらつた氷を、バケツのなかから引出して碎きはじめた。

やがて勉吉はうと〳〵と微眠んだと思ふと、ぢい〳〵云ふ音が耳について、目がさめた。看ると河野さんが寢床の上に坐りながら、いつものやうにラヂオレヤをかけてゐた。淡紫色の光線が、むくんだその脚のあたりを流れてゐた。

勉吉はそれから目が冴えだして、何う悶踠いても安眠することができなかつた。狹い庭の圍ひ一重を隔てた、後ろの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家では、心臓と胃腸でこの一週間ばかり寝てゐたお上さんが、今夜は遽かに容態がわるいとみえて、苦しさうな呻吟聲が、時を切つては聞えて來た。がやく〳〵騒いでゐるらしかつた。氷をかく音も聞えて來た。勉吉がそれが耳について、胸が苦しくて仕方がなかつた。もう望みがないと言はれた妻のために、夜明方まで氷をかいたことが思ひ出されるのであつた。

翌日は雨降りであつた。河野さんは十時頃に外へ出かけようとしてゐると、そこへ昨夜證人になつてくれた八百屋の親父が、例の髯むじやの男をつれてやつて來た。

勉吉は起きあがつて、新聞を讀んでゐたが、その聲を聞くと、河野さんに目配せされて、あわてゝ横になつて氷嚢をあてた。そして目を瞑つてゐた。

その八百屋は河野さんも顔を知つてゐた。

「小林さんの様子が何うかと思つてね。とにかく喧嘩の相手のブリキ屋さんと一緒にお見舞ひにあがつたやうなことで。」八百屋は入口で言つてゐた。

「それあ何うもわざ〳〵。まあ上つて見て下さい。」河野さんはさう言つて、二人を内へあげた。

「昨夜は何んなでした。熱が出ましてせうか。」八百屋はきいた。

「熱もあるやうですが、今朝は頭が痛くてどうにも起きられないさうでして。」河野さんは心配さうな口調で言つて、壁の方を向いてゐる勉吉に、

「何うだね勉さん、皆さんがお見舞ひに來て下すつたんだが。」

「さうですか」と勉吉は大儀さうに體を向きかへて、「どうも頭が痛いんでね。それにはづみで此の腰をやられたとみえ

て、何うもね耳が少し變なんですよ。」

「そいつあ可けない。」河野さんは顔を顰めて、

「中耳炎にでもなると事だね。」

するとブリキ屋の將むじやが、肩の處をさすりながら、

「あの時は何が何だか氣がつかなかつたが、私もこゝんとこを撲たれたんで……。」と梟のやうな丸い目をして皆なの顔を見た。

勉吉は噴笑しさうになつたので、わざと蒲團をかぶつて、目ばかり出してゐた。

「我々はお互ひに體が資本ですから、怪我でもして二三日も寢ると、もうぴつたり參つてしまう。」

「大きにさいですよ。それに就いちや、いづれ御經過を見たうへでこの人達に何とかさせるつもりですが、今日は取りあへず、自分が原だからブリキ屋さんがお見舞ひに出ようと云ふんでね。」

「あの男は、牛乳配達だつて、さうかい。」八百屋が當の加害者のことをブリキ屋にきいた。

「さうなんだがね。奴さん少し亂暴だからね。」

「まあ何だね、全治までに幾日かゝるか知らないが、某か療治代を君達から差しあげて、それで勘辨していたゞくと云ふことに。私あ御近所でこちらは知つてゐるんだからね。君だつて聞いてみれば、同じ町内なんだから、誰を贔屓するて云ふ譯ぢやない。こちらの顔の立つやうにすれば、それで文句はねえんだ。」

「何分よろしく。あの男もお任せすると言つてゐるからね。」

八百屋は「それぢや又いづれ御挨拶に出ます」と言つて、起ちあがると、ブリキ屋は上り口においた水菓子の籠を、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もぞくさそこへ持出した。

「これあほんのお見舞ひのお印でして。」

二人は歸つて行つた。勉吉は河野さんと顔を見合はして笑つた。

「みんな人がいゝんだね。あのブリキ屋ならよく知つてゐるよ。角の大きなブリキ屋だ。」河野さんが言つた。

「私も何だか見たやうな顔だと思つた。其にしても奮發したもんですな。三圓は出てゐますね。この分ぢや、療治代もちよつと出さうだね。」

「奴さん大分しよげてゐたね。」

「氣の毒だから、これで勘辨してやりますかね。」勉吉は遽かに起きあがりながら、元氣づいて言つたが、首を傾げて、

「しかし撲られて、商賣を休んで、療治代こつち持ちぢや引合はんね。十兩も取つてくれるか。」

「十兩。それで濟めばいゝがね。取るなら少し大袈裟の方がいゝぜ。」

「二十兩もあれば、ちよつと飮めるがね。」

「それにあの八百屋にも某か掴ませなくちやなるまい。」

「三十兩ですか。少しあくどいですな。奴さん喫驚するだらう。」勉吉はさう言つて笑つたが、笑ふとやつぱり方々へ響いた。

雨がいつか上つて、日光が狹い庭へ差して來た。二人はこの頃近くの仕出し屋から取りつけてゐる辨當で、朝と晩をすますことにしてゐたが、河野さんは其の辨當飯を食べてから、出る仕度をしてゐると、八百屋が再びやつて來た。勉吉はあわてゝ、又蒲團を引被いて、壁の方を向いた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「又遣つて來ましたよ。」八百屋はさう言つて、のそ〳〵上つて來た。そしていきなり言出した。
「療治代を出すなら早い方がいゝでんでね、實はその御相談に上つたんですが。」
勉吉はをかしくてならなかつた。河野さんが何う言ふかと思つて、耳を澄ましてゐた。
「それあ何うも。」河野さんは持前の落着いた口調で、
「しかし療治代と言つたところで、經過もまだ判らんうちに、取決めることは困難ですからね。」
「さいですな。」八百屋は答へて、「だが、これが又案外輕くてすめば、それほど結構なことはないからね。」
「だから、もう一度醫者に見てもらはなければ、何とも言へんのでね。何だか耳も痛むさうだし、昨夜から食物も取らんやうな譯で、事によるとちよつと心配なことになりはしないかとも思ふ。」
「成程ね。」
「さう大事に立至らんものとしても、三日や五日では、迚も商賣に出られさうにないからね。」
「だからまあ、そこん處を大見一週間かゝるものとして、醫者の療治代や氷代、それには毎日の損害も見積つて、二十圓くらゐで御不肖していたゞけないもんですかね。」八百屋は言ふのであつた。
「二十圓でね」河野さんは少し不足さうに言つて、
「どうだね勉さん、そんなこつて濟むかね」ときいた。
「さあ、私にもわかりません。」勉吉は答へた。
「しかしこんな話は早い方がようがすからね。私も賴まれもしねえに、餘計なおせつかいをするやうですけれど、これも係り合ひでね。それでまあ二十兩くらゐの處が、相當かと思ふんですが、何んなものですかね。それで勘辨願へるや

うなら、直ぐに持たせてよこします。」八百屋は辨じた。

「どうだね勉さん、八百屋さんがあゝ仰やるんだが……。」

勉吉は可笑しくて、腹がむづ〳〵するやうであつた。でまたそんな押問答をきいてゐるのが、可なり退屈でもあつた。自身起きあがつて、直に談判しようかとさへ思つた。

「當人の私にやちと解りかねます。」勉吉は體を仰向けにしながら、

「どうせ過失ですから、多分のことをしていただく積りはありませんが、實費だけは何うにかして頂かないと……。」

勉吉はしかし考へた。明朝になつて、膏藥をもう一度貼りかへれば、それでもうけろりとするのかも知れなかつた。とにかくさうやつて寝てゐるのが退屈なくらゐ、痛みが薄らいでゐることは明かであつた。寧ろ醫者の方が、餘計分に誇張してくれたのだと思つた。

「まあ何うでもいゝです、皆さんにお任せします。」

とにかく八百屋に任かすことにしてしまつた。

夜の八時頃に、八百屋が金を包んで持つて來た。勉吉はちやうど、向うのお神さんを相手に、後ろの家の病人のことを話してゐた。そのお上さんは到頭夕方に息を引取つたらしく、急にしんとしてしまつた。勉吉は胸を壓されるやうた、妙に憂鬱な氣分に囚はれた。

「五個も香奠をつゝまう。」

八百屋が歸つてから、勉吉はさう思つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それから間もなく、河野さんが歸つて來た。

「到頭もつて來ましたよ。」勉吉はさう言つて、その包みを見せた。

「うまく行つたね、今夜一つ飲むかね。」河野さんはにこ〳〵してゐた。

暫くしてから、勉吉は河野さんを誘ひだした。その金をそつとしておくのが、氣に咎めてたらなかつた。そして途中河野さんに賴んで、五圓だけ八百屋へ包んで屆けてもらふことにした。

十一時頃に歸つて來た頃には、勉吉の懐ろは二圓とは殘つてゐなかつた。それに少し飲んだお蔭で、傷がまた熱をもつて、づきん〳〵痛みだした。

「かういふ事が時々あるといゝね。」河野さんは籠の水菓子を食べながら言つてゐた。

「笑談ぢやない。その度に撲られるのは私の頭ですからね。」勉吉は苦笑した。

勉吉は早速治療代の工面に取りかゝらねばならなかつた。

沙翁傑作集二十巻完成

文學博士　坪内逍遙先生譯（新刊）沙翁傑作集第二十篇

シムベリン

四六判美裝
口繪及挿畫多數
定價貳圓五拾錢
郵稅十二錢

沙翁が**最晩年**の三大ロマンチック劇の随一で「テムペスト」や「冬の夜話」の姉妹篇です、女主人公イモーゼンは作者の**理想的淑女**だと推想される、筋も脚色も趣味情調も不思議に**我歌舞伎劇**に似てゐる、本篇は當翻譯集の**最終巻**だから譯者が過去十六年間の工夫を語る長篇の**飜譯苦心談**が添はつてある、それは世のクラシックを讀む人及び譯する人の**絶好指針**です、例の通り豊富な挿畫、コロタイプの口繪が三葉、エレンテリーのイモーゼン、青年期の**ゴルヅンクレーグ**の王子など

沙翁傑作集

1 ハムレット
2 ロミオとジユリエツト
3 オセロー
4 リヤ王
5 ジユリヤス・シーザー
6 ヹニスの商人
7 テムペスト
8 アントニーとクレオパトラ
9 眞夏の夜の夢
10 マクベス
11 以尺報尺
12 冬の夜ばなし
13 リチヤード三世
14 ヘンリー四世（一部）
15 ヘンリー四世（二部）
16 お氣に召すまゝ
17 おや〳〵馬鹿らし
18 十二夜
19 コリオレーナス
20 シムベリン
以上二十巻完成

各巻貳圓五拾錢
郵稅十二錢

東京牛込　振替東京一一二三
早稲田大學出版部
（賣捌）東京堂・至誠堂・北隆館・東海堂・盛文館・星野

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新營養素

三共ヴィタミンA

VITAMINE—A "SANKYO"

ヴィタミンAの作用は今日尚不明の點多きも、吾人の營養上絕對的に必要なる物質なることは多數學者の實驗に徵して疑ふの餘地なし。

三共ヴィタミンAは肝油より抽出し每製品動物試驗により其效力を檢定したるものにして膠球一個は少なくとも原肝油の二十五倍に相當する效力を代表す。

三共ヴィタミンAは獨特の膠球に納めたるものにして服用し易し肝油代用として肝油適應症に推獎せらる。

[普通用量] 一回一乃至三個。每食事前後に與ふ。

[包裝] 壹瓶五十個入とす。

三共株式會社

本社 東京日本橋室町

出張所 大阪東區淡路町二丁目

同 臺北市表町一丁目

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

決して一時の抑へ薬にあらず

ワキガと汗止の良効薬



適確治療

レート薬用クレームは……世界的良効薬にして如何なる難症のワキガをも確實に治療するは多數實驗者の病状之を證明す。又夏季の汗止に偉効あり。

定價 一瓶 金壹圓（郵税共）
一瓶にても送附

毛髪を美化する
最新式煉香油

レートポマード

硬毛もスナホにし品位ある整髪を自由ならしむ



發賣元
本店 東京市日本橋區蠣殻町一丁目
支店 大阪市東區南久寳寺町四丁目
レート化粧料本舗 株式會社平尾賛平商店
本店 東京振替六六六番
支店 振替大阪四四八〇番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◇小林榮子新著◇

（前編桐壺より若菜の下まで）

全壹册箱入

新刊（發賣）源氏物語活釋

（著者多年研究の大著完成）

源氏物語は只文學に興味を持つ人ばかりでなく苟も日本國民たる者は皆讀まなければなりません。それは日本の國民性を知らなければ世の中に立つて何の仕事も出來ないからです。さて現在の日本國民性を知る爲には過去の日本國民性を知る必要がありますが平安朝に於ける日本國民性は源氏物語に盡されて居ります。枕の草紙も文學的價値に於ては源氏と匹敵するかも知れませんけれども其時代の一般社會の様子は少しも現はれては居ませぬ。ですから本當に眞面目に成て此物語を研究するは日本の國民性が如何なる經路を通つて今日に至つたかゞよく分ります。斯様に大事なしかも千古の名文を一般の人々にたやすく分るやうに十數年の考慮を費して成たのが此の活釋です。體裁は例の妥當な漢字をあてゝ講義に代へた上に煩多な古註を精選したものと著者の見解によるものとを頭註としてありますから初めて古文に面接する人も直ちに堂奥の源氏物語を了解する事が出來ます。

―（前編出來發賣す）―

四六判最上製本
全壹册約壹千頁
正價金四圓八拾錢
送料十八錢

東京帝國大學文學部助教授
植松安氏著

記紀の歌の新釋（好評）

東京日々評：古事記日本書紀にある歌の全部を原文に就て一々丁寧な語釋を加へその大意をも書き添へたものであどけない無邪氣な祖先の魂から流れ出る悦びや悲しみの情がひし／＼と心にせまつてくる。

四六判最上製
美本全一册
正價金貳圓
送料十二錢

小林一郎著

日蓮主義日訓（五版）

忙しき世に立つ人は靜なる心をもつことを必要とす忙しき人は決して修養を忘るべからず本書は法華經と日蓮聖人遺文集とより修養上に適切なる金言三百六拾五を選出し之を毎日に配し之に簡單にして明快なる解釋を加へたるもの何人も毎朝本書を繙かば愉快にして力强き心を以て其日の業に當り得べし。

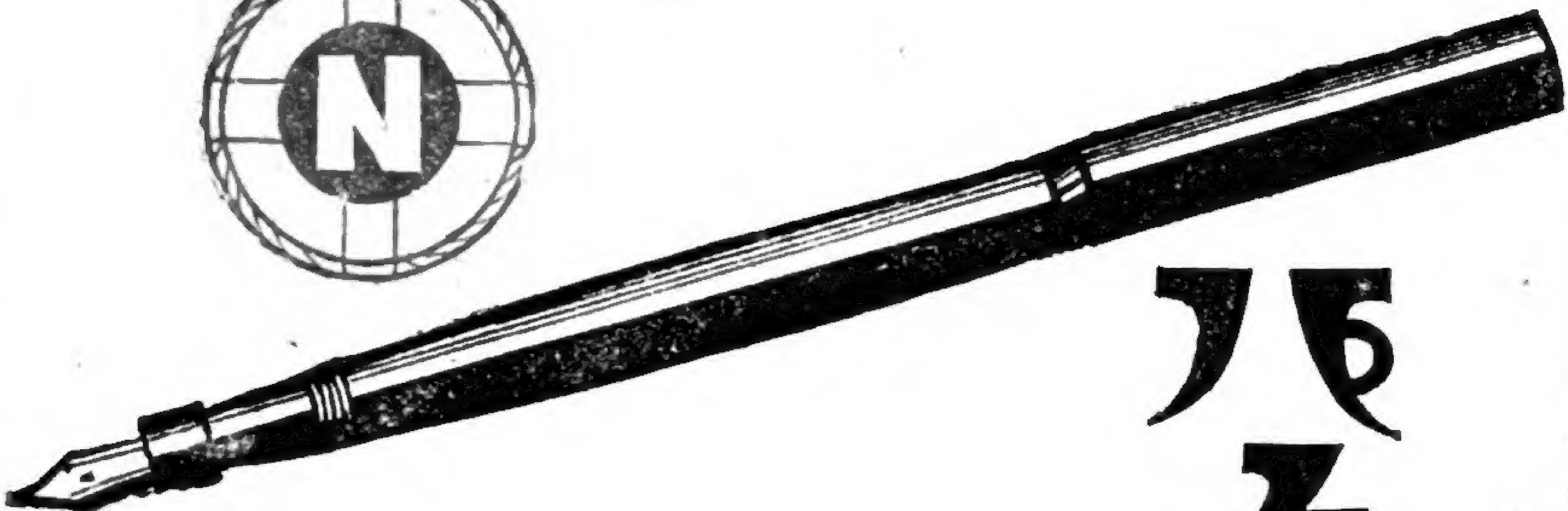
袖珍最上良書
美本四百餘頁
金壹圓八拾錢
送料十二錢

東京市神田區
表神保町七番地

大同館發行

振替貯金口座
東京八七貳番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



パイロット高級萬年筆

懸賞募集（参考資料）

◉貴下は御需めの際如何して萬年筆の良否を御撰定なさいますか？

右に對し最も有益なる参考資料と認めたるものを撰拔し感謝の意味にて左記の通り送呈

賞金

一等　貳拾圓　一名
二等　拾五圓　一名
三等　拾圓　五名

—●—

用紙……葉書に限る
締切……八月五日限り
發表……八月下旬本紙上

東京日本橋西河岸
株式會社 並木製作所

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區通神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本鄕區春木町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大誠社
名古屋市富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

◉定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）
但支那を除く

冊數／段別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六十錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號秋季兩臨時號增刊號は各前冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合に一時變更することあるべし

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社　正路喜社
帝國通信社　弘盛社　三誠社
金蘭社　大礎社　一星社

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合に直ちに送本を中止し
一振替貯金　口座番號は東京三十四番なり
一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを妨げず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に右送料を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領者にあらざれば發送致さず
　一金二圓以上五圓迄　金七錢（集金手數料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌別に分けて金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十二年七月二十一日印刷納本
大正十二年八月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木島三

發行所　東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話丸ノ內三〇二
電信略號コウロン

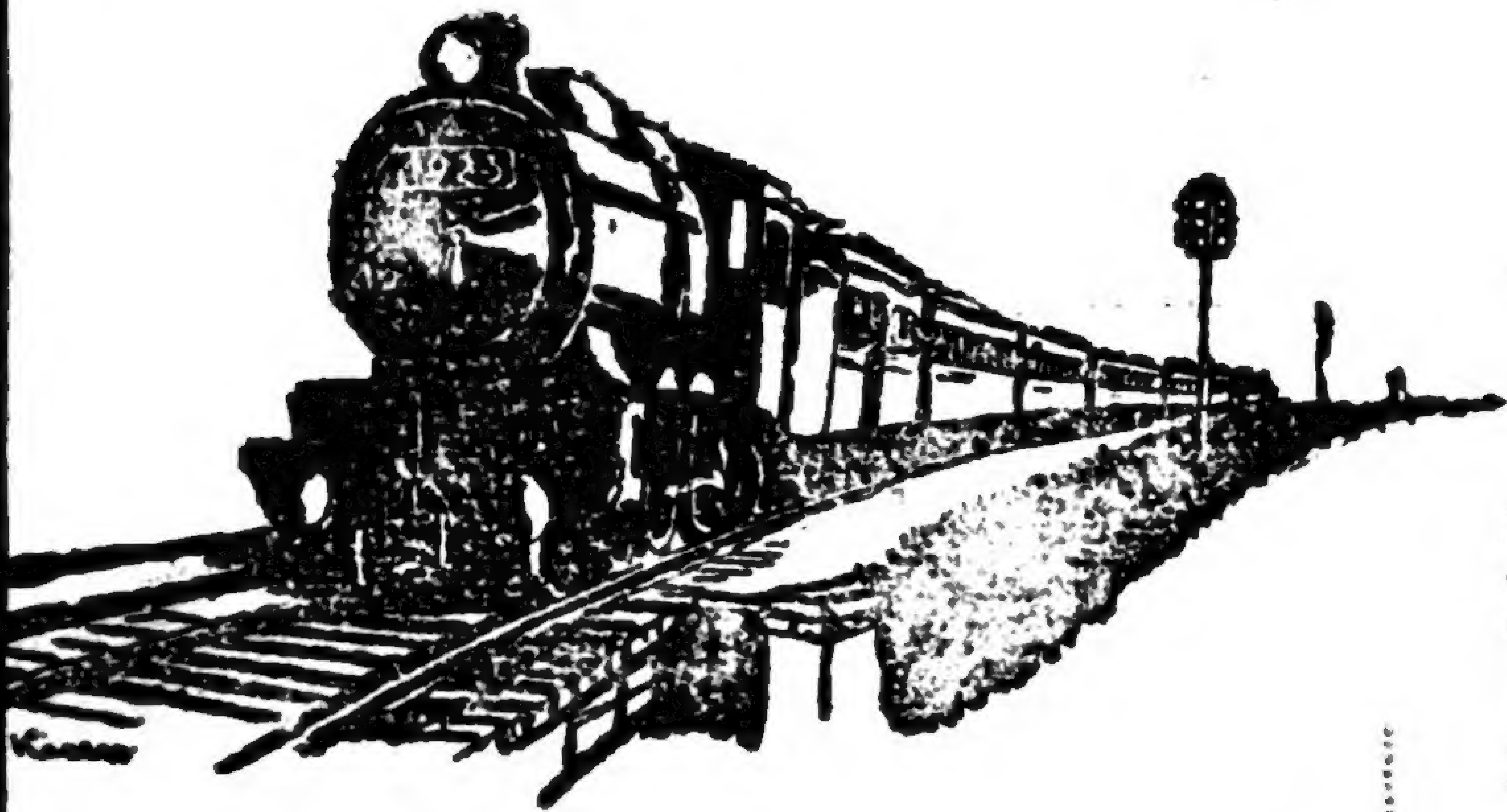
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍工場

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治三十 年 月廿九日第三種郵便物認可

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.



避暑旅行には何處へ

三越に取揃へられた旅行用品

御旅行の前には是非とも必ず一度は三越へお出でを願ひます、三越には旅行の必要品は悉く取揃へて御座います、また御旅行先から御葉書にて通信販賣部へ御用命下さいますれば、迅速に正確に何品なりとお送り申上げます、便利と親切とそうして良品廉賣は實に三越の大特色であります

三越呉服店

東京駿河町

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA